

高源地東Ⅰ遺跡

渋川都市計画道路3.3.1号中村上郷線街路事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 第3集

2006

群馬県中部県民局渋川土木事務所
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

調查研究館1F保管

高源地東Ⅰ遺跡

渋川都市計画道路3.3.1号中村上郷線街路事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 第3集

2006

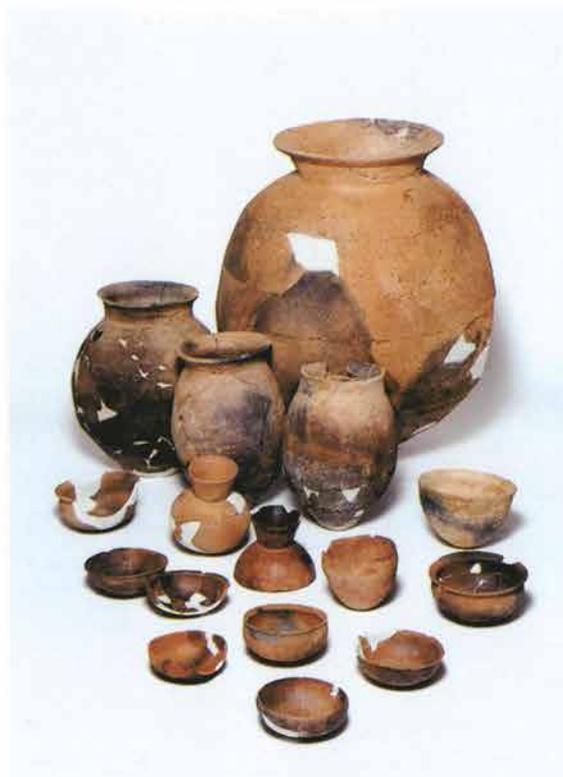
群馬県中部県民局渋川土木事務所
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



高源地東 I 遺跡遠景



6区158号土坑出土縄文土器



5区6号住居出土遺物

序

高源地東Ⅰ遺跡は、群馬県渋川市中心部の石原町に所在します。渋川都市計画道路3.3.1号 中村上郷線街路事業に伴い、群馬県土木部(現 県土整備局)の委託を受け、群馬県教育委員会の調整のもと、平成13年10月から平成16年8月に発掘調査が行われました。

本路線は総延長2,690m、基本幅員27mの都市計画道路で、関越自動車道渋川インターチェンジから市街地を迂回して伊香保方面に連絡するとともに、市街地の環状道路の役割も有する重要路線であり、平成17年度に供用開始となりました。この工事工程にあわせ、県土木部・県教育委員会・渋川市・事業団による協議の結果、埋蔵文化財の発掘調査に着手することとなりました。

調査の結果、縄文時代の住居や配石遺構、古墳時代から平安時代に至る集落、中世から近世の土坑群などが発見されました。特に6世紀初頭の榛名山の噴火によって噴出した火山灰の下から発見された古墳時代の集落や、奈良・平安時代の集落から多量に出土した鉄生産に関連する遺物は、この地域の歴史を考える上で非常に貴重な資料になることであろう。

調査に続き、平成17年度に整理作業を実施し、ここに報告書の刊行となりました。

遺跡の発掘調査から本報告書の刊行に至るまでは、群馬県渋川土木事務所、群馬県教育委員会、渋川市教育委員会をはじめとする諸機関並びに地元関係者の皆様に大変なご尽力を賜りました。ここに心から感謝申し上げますとともに、本報告書や調査資料が広く歴史の究明に活用されますことを念願し、序といたします。

平成18年12月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 高橋 勇 夫

例 言

- 1 本報告書は、渋川都市計画道路3.3.1号中村上郷線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施された「高源地東Ⅰ遺跡」の報告である。
- 2 本書に所収の遺跡名と発掘調査地の所在は、以下のとおりである。

高源地東Ⅰ(こうげんじひがしいち)遺跡

群馬県渋川市石原

- 3 事業主体 群馬県渋川土木事務所
- 4 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5 調査期間 平成13年 平成13年11月1日～平成14年 3月29日
平成15年 平成15年 4月1日～平成15年10月31日
平成16年 平成16年 4月1日～平成16年 8月31日
調査面積 11,710㎡
- 6 調査組織 事務担当 小野宇三郎 吉田 豊 住谷永市 赤山容造 神保侑史 住谷 進 萩原利通
矢崎俊夫 能登 健 右島和夫 大島信夫 植原恒夫 丸岡道雄 中東耕志
笠原秀樹 小山建夫 竹内 宏 高橋房雄 須田朋子 吉田有光 森下弘美
栗原幸代 佐藤聖行 片岡徳雄 阿久沢玄洋 田中賢一
調査担当 平成13年度 間庭 稔 平方篤行 川道 亨(囑託)
平成15年度 大江正行 坪川雅彦
平成16年度 坂口 一 小高哲茂
- 7 整理主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 8 整理期間 平成17年4月1日～平成18年3月31日
- 9 整理組織 事務担当 小野宇三郎 高橋勇夫 木村裕紀 津金沢吉茂 矢崎俊夫 西田健彦 中東耕志
宮前結城雄 竹内 宏 石井 清 須田朋子 吉田有光 今泉大作 栗原幸代
清水秀紀 佐藤聖行
整理担当 桜井美枝 笹澤泰史
整理作業 佐藤信孝(囑託) 山崎由紀枝 小野寺仁子 萩原妙子 萩原由香 水出昌子
長沼久美子(囑託) 小久保トシ子 渡辺八千代 狩野なつ子 飯野美和子
- 10 本書作成の担当者は次のとおりである。

編 集 桜井美枝

執 筆 第1、2章 笹澤泰史

第3章 坂口 一

第4章2 坂口 一 小高哲茂

第4章3 桜井美枝 笹澤泰史(鉄生産関連遺物部分)

第4章1、4 桜井美枝

その他については文頭に文責を記してある。

遺物観察 石器・石製品、中近世金属製品 桜井美枝

古墳時代土器 坂口 一 小高哲茂

古代土器 笹澤泰史

陶磁器 大西雅弘

縄文土器観察表は、土器実測を委託した毛野考古学研究所の高橋清文氏の観察を元に作製した。鉄生産関連遺物は穴澤義功氏(たたら研究会)の協力を得た。

遺物写真 佐藤元彦 榑崎修一郎(人骨・獣骨)

遺構写真 各発掘担当者

航空写真は技研測量設計株式会社が行った。

測量 株式会社測設 技研測量設計株式会社(委託)

保存処理 関 邦一 土橋まり子 小材浩一 津久井桂一 森田智子 多田ひさ子

機械実測 伊東博子 岸 弘子 田所順子

木器実測 小池 縁 田中のぶ子 佐々木茂美

縄文土器・小型石器実測 有限会社毛野考古学研究所(委託)

- 11 当遺跡の内容をより詳細に浮き彫りにする意図で、次の各位に資料の分析や測定を依頼した。

石材同定 飯島静男(群馬地質研究会)

人骨・歯の鑑定 榑崎修一郎

火山灰・植物珪酸体 株式会社 古環境研究所

樹種同定 株式会社 パレオ・ラボ

土壌微細形態 宮路淳子(奈良女子大学)

- 12 発掘調査及び出土遺物整理にあたっては、次の諸氏、諸機関にご教示、ご協力を賜った。(敬称略)

渋川市教育委員会 穴澤義功 石井克己 石田定雄 井上慎也 梅澤克典 岡本茂史 桜井和哉

清水 豊 須永光一 大工原 豊 高橋清文 土井道明 津野 仁 服部敬史 土生田純之

前原 豊 正岡大実 松井 章 松下剛士 南川雅男 宮路淳子 柳沼賢治 梁木 誠

- 13 出土遺物・図面・写真・記録などの資料は、一括して群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管してある。

凡 例

- 1 調査区域には、国家座標に基づいてグリッドを設定した。国家座標は平成14年4月改正以前の国家座標Ⅸ系を用いた。グリッドは国家座標の5mごとに設定し、南東隅の基準点の数値下3桁をグリッド名とした。
- 2 本書中の遺構番号は、原則として発掘調査時に付したものを使用している。4～6区では近年の攪乱に遺構番号を付したものが多数あったため、整理作業時に所属時期を検討し、中近世の遺構のみ取り上げた。従って、土坑、溝に関しては欠番が多数生じる結果となった。また、遺構種類の変更を行ったものについては遺構番号を変更し、本文中に記載してある。ただし、遺物注記や写真、図面等の記録類については遺構番号の変更は行っていない。
- 3 本文中で使用したテフラの記号と噴出年代は以下の通りである。

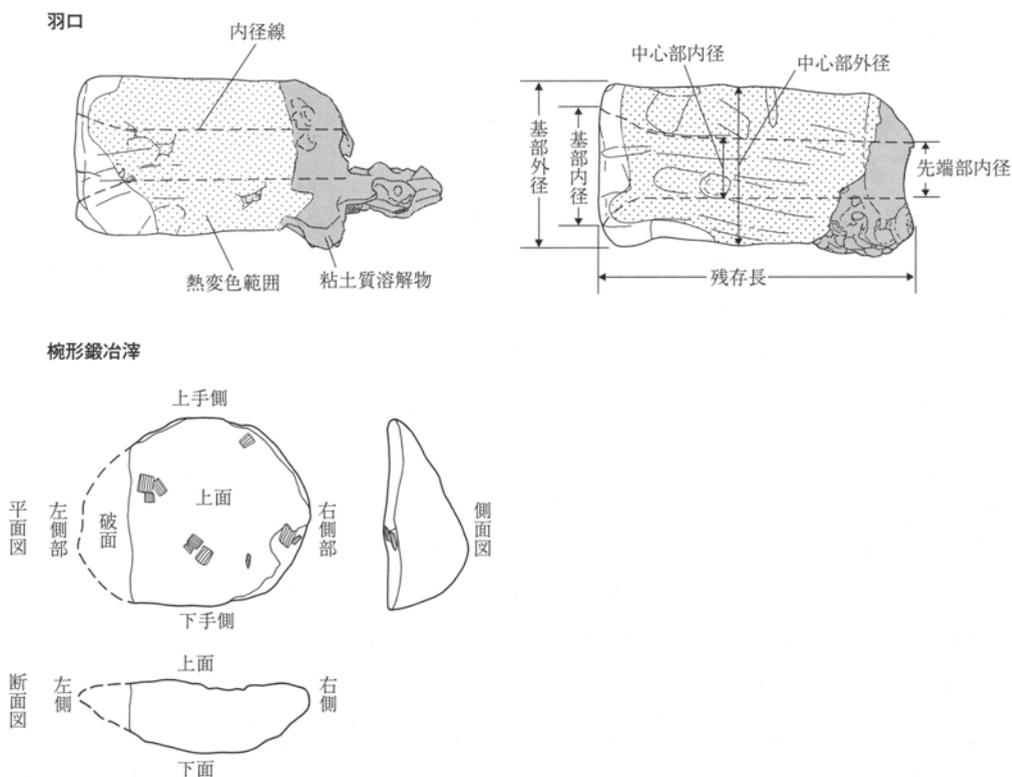
浅間B軽石(As-B)……………1108(天仁元)年 榛名ニッ岳伊香保テフラ(Hr-FP)……6世紀中葉
榛名ニッ岳渋川テフラ(Hr-FA)……………6世紀初頭 浅間C軽石(As-C)……………4世紀初頭
As-C軽石の噴出年代については、3世紀に遡る可能性が指摘されている(若狭 徹「群馬の弥生時代が終わるとき」『人が動く・土器が動く 古墳が成立する頃の土器の交流』かみつけの里博物館 1998)。
- 4 本書の遺構図縮尺は原則として次の通りであるが、一部統一できなかった部分もあり、各図の縮尺を参照されたい。原則として遺構の土層断面は遺構平面図の縮尺に準ずる。

竪穴住居跡 1/30、1/60 掘立柱建物 1/60 土坑・井戸 1/40 溝 1/100
- 5 土層注記の粒径区分はウェントワース法の基準によるが、テフラの分類はその分類基準によらない。
- 6 竪穴住居の方位は、竈が付設された壁、あるいは竈が付設されたと推定される壁に直行する軸線の、国家座標の北からの角度とした。掘立柱建物の方位は、梁行方向で、同様に北からの角度を計測した。
- 7 竪穴住居跡の面積は、1/40図上でプランメーターにより住居確認面の掘り込みから内側を3回測定し、その平均値を採った。
- 8 遺物観察表の記載は以下の通りである。
 - (1) 遺物の出土位置は、遺構の床面から遺物までの垂直距離を示した。
 - (2) 土器・陶磁器のうち欠損のある遺物の法量は、推定値を()で示し、計測できないものは記載していない。
 - (3) 石器・石製品の法量のうち、長さ、幅、厚さは最大値を表す。
 - (4) 色調は、農林水産技術会議事務局監修・財団法人色彩研究所監修『新版標準土色帖』に従った。
 - (5) 古代土器の胎土については、粗砂粒、砂粒、細砂粒等の特に目立つものを記載した。
- 9 鉄関連遺物については、穴澤義功氏の指導の下で、磁石(強力磁石TAJIMA PUP-M、特定の標準磁石)と特殊金属探知器による分類と、肉眼観察による考古学的な分類を行った。遺物の観察は穴澤氏の御教授を得た。鉄関連遺物の観察表の主な項目の見方は以下の通りである。詳しくは、穴澤義功による2001『製鉄遺跡発掘調査の視点と方法』(奈良国立文化財研究所・発掘技術者専門研修「生産遺跡調査過程」資料)及び2005「鉄関連遺物の発掘調査から遺物整理・分析資料抽出への指針案」『鉄関連遺物の分析評価に関する研究報告』(日本鉄鋼協会社会鉄鋼工学部会)を参照していただきたい。
 - (1) 磁着度 鉄関連遺物分類用の特定の「標準磁石」を用いて、資料との反応の程度を数値化したもの。数値が大きいほど、磁石との反応が強い。

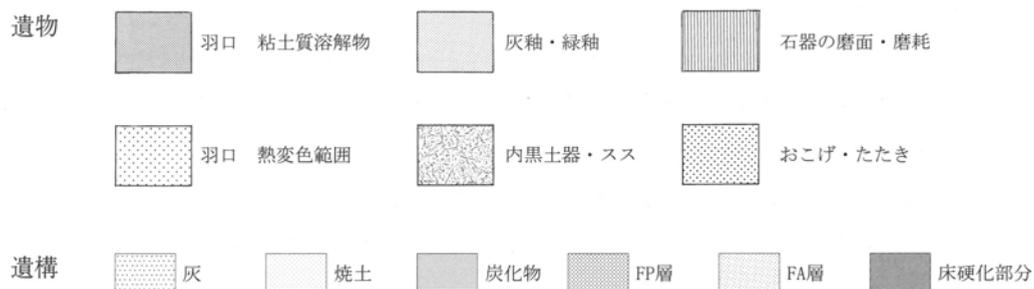
(2) メタル度 特殊金属探知器により金属の量を分類したもの。 銹化(△)、H(○)、M(◎)、L(●)、特L(☆)の順で金属部分が多いことを示す。

(3) 破面数 資料の破面(欠損した面)の数。

10 鉄関連遺物の計測位置及び各部位名称用例は以下の通りである。



11 本書の挿図指示は次のとおりである。



12 遺物実測図の縮尺は原則として1/3である。縮尺が異なる遺物については遺物番号の後に縮尺を記載した。

13 遺物写真の縮尺は、原則として実測図とほぼ同じである。遺構写真の縮尺は不統一である。

14 遺物番号は原則として遺構ごとに登録したが、古代の鉄生産関連遺物に関しては全て通し番号とし、頭に「I」を付した。実測図、遺構図、遺物写真、観察表の遺物番号は、全て一致する。遺構図中の出土遺物の記号は、●が土器・陶磁器、▲が石器・石製品、×が金属製品を表す。

目 次

序

例言・凡例

目次

第1章 発掘調査の概要

- 1 調査に至る経緯……………1
- 2 調査の経過……………2
- 3 調査の方法……………2

第2章 遺跡の立地と環境

- 1 位置と地理的環境……………5
- 2 歴史的環境……………7

第3章 基本層序……………12

第4章 検出された遺構と遺物

- 1 縄文時代……………14
 - 1)住居跡……………17
 - 2)配石……………21
 - 3)列石……………32
 - 4)集石……………41
 - 5)土坑……………47
 - 6)焼土……………69
 - 7)遺構外出土遺物……………69
- 2 古墳時代……………86
 - 1)住居跡……………90
 - 2)掘立柱建物跡……………116
 - 3)祭祀跡……………116
 - 4)集石……………121
 - 5)土器集中……………123
 - 6)水田・畝状遺構……………126
 - 7)遺構外出土遺物……………131
- 3 奈良・平安時代……………133
 - 1)住居跡……………133
 - 2)掘立柱建物跡……………227
 - 3)谷……………234
 - 4)溝……………244
 - 5)土坑……………246
 - 6)ピット……………248

7) 遺構外出土遺物	248
4 中近世	251
1) 掘立柱建物跡	251
2) 竪穴状遺構	255
3) 溝	256
4) 土坑	278
5) ピット	325
6) その他の遺構	329
方形周溝遺構	329
柵列	330
道跡	330
井戸	334
石囲遺構	334
耕作溝	340
7) 遺構外出土遺物	340
第5章 考察	
1 高源地東 I 遺跡の列石遺構と配石墓について 石坂 茂	343
2 唐沢泥流堆積物の堆積年代について 小高哲茂・坂口 一	349
3 遺構に用いられた礫の採取地 - 水沢山、東麓の河川、唐沢泥流堆積物と遺構の礫の比較・検討 - 井上昌美・小高哲茂・坂口 一	351
4 張出し部をもつ古墳時代の竪穴住居について - 6区19号住居 - 小高哲茂・坂口 一	357
5 竪穴住居の掘削土量と周堤の盛土量について 小高哲茂・坂口 一	365
6 周堤が重なる竪穴住居の時間差について - 6区19・20・21号住居 - 小高哲茂・坂口 一	369
7 居住域から水田域へ、水田域から居住域へ - 土地利用の変遷過程からみた火山噴火の影響 - 小高哲茂・坂口 一	373
8 高源地東 I 遺跡とその周辺の鉄生産 笹澤泰史	377
9 中世の「方形周溝遺構」について 川道 亨	389
第6章 自然科学分析	
1 群馬県渋川市高源地東 I 遺跡における火山灰分析 古環境研究所	393
2 高源地東 I 遺跡における植物珪酸体分析 古環境研究所	403
3 高源地東 I 遺跡から検出された古耕作土の土壤微細形態について 宮路淳子	408
4 高源地東 I 遺跡出土柱材および唐沢泥流堆積物中の自然木の樹種同定 植田弥生(パレオ・ラボ)	410
5 高源地東 I 遺跡出土人骨 榑崎修一郎	413
6 高源地東 I 遺跡出土獣骨 榑崎修一郎	416

遺物観察表

写真図版

抄録

図版目次

第1図	遺跡の位置	1	第62図	遺構外出土遺物(5)	74
第2図	中村上郷線関連遺跡位置図	3	第63図	遺構外出土遺物(6)	75
第3図	調査区割図	4	第64図	遺構外出土遺物(7)	76
第4図	遺跡周辺の地形図	6	第65図	遺構外出土遺物(8)	77
第5図	周辺の遺跡	11	第66図	遺構外出土遺物(9)	78
第6図	基本層序図	12	第67図	遺構外出土遺物(10)	79
第7図	各区の土層柱状図	13	第68図	遺構外出土遺物(11)	80
第8図	縄文時代遺構全体図(6・7区)	14	第69図	遺構外出土遺物(12)	81
第9図	6区縄文時代遺構全体図	15	第70図	遺構外出土遺物(13)	82
第10図	7区縄文時代遺構全体図	16	第71図	遺構外出土遺物(14)	83
第11図	7区3号住居	18	第72図	遺構外出土遺物(15)	84
第12図	7区3号住居出土遺物	19	第73図	遺構外出土遺物(16)	85
第13図	7区4号住居	20	第74図	古墳時代遺構全体図	87
第14図	7区4号住居出土遺物	21	第75図	5区古墳時代(Hr-FA下)遺構全体図	88
第15図	6区1号配石	22	第76図	6区古墳時代遺構全体図	89
第16図	6区1号配石出土遺物(1)	23	第77図	7区古墳時代(Hr-FA下)遺構全体図	90
第17図	6区1号配石出土遺物(2)	24	第78図	5区6号住居(1)	91
第18図	7区1号配石(1)	折込	第79図	5区6号住居(2)	92
第19図	7区1号配石(2)	27	第80図	5区6号住居出土遺物(1)	93
第20図	7区1号配石(3)	28	第81図	5区6号住居出土遺物(2)	94
第21図	7区1号配石出土遺物	29	第82図	6区18号住居	95
第22図	7区2号配石	30	第83図	6区18号住居出土遺物	96
第23図	7区3号配石(1)	31	第84図	6区19号住居(1)	折込
第24図	7区3号配石(2)	32	第85図	6区19号住居(2)	折込
第25図	6区1a・1b号列石(1)	33	第86図	6区19号住居(3)	102
第26図	6区1a・1b号列石(2)	34	第87図	6区19号住居出土遺物(1)	103
第27図	6区1a号列石	35	第88図	6区19号住居出土遺物(2)	104
第28図	6区1号列石出土遺物(1)	36	第89図	6区20号住居(1)	折込
第29図	6区1号列石出土遺物(2)	37	第90図	6区20号住居(2)	107
第30図	6区1号列石出土遺物(3)	38	第91図	6区20号住居出土遺物	108
第31図	6区1号列石出土遺物(4)	39	第92図	6区21号住居(1)	109
第32図	6区1号列石出土遺物(5)	40	第93図	6区21号住居(2)	110
第33図	6区1号列石出土遺物(6)	41	第94図	6区21号住居(3)	111
第34図	6区2号集石(1)	42	第95図	6区22号住居	112
第35図	6区2号集石(2)	43	第96図	7区1号住居	112
第36図	6区2号集石出土遺物(1)	44	第97図	7区1号住居出土遺物	113
第37図	6区2号集石出土遺物(2)	45	第98図	7区2号住居(1)	113
第38図	6区3号集石	46	第99図	7区2号住居(2)	114
第39図	6区土坑時期別分布図	47	第100図	7区2号住居出土遺物	115
第40図	6区119~121号土坑	49	第101図	7区5号住居	116
第41図	6区122~128号土坑	50	第102図	6区4・5号堀立柱建物	117
第42図	6区129~132号土坑	51	第103図	6区1・2号祭祀	118
第43図	6区133~137号土坑	53	第104図	6区3号祭祀	119
第44図	6区138・139・141~143号土坑	54	第105図	6区3号祭祀出土遺物	120
第45図	6区144~147号土坑	55	第106図	6区4号祭祀	121
第46図	6区148~150号土坑	57	第107図	5区1号集石	122
第47図	6区151~155号土坑	58	第108図	6区1号集石	123
第48図	6区156号土坑	59	第109図	4区1号土器集中	124
第49図	6区157号土坑	60	第110図	4区1号土器集中出土遺物	125
第50図	6区158号土坑	61	第111図	6区1号土器集中	125
第51図	6区159~161号土坑	62	第112図	5区Hr-FA下畝状遺構	126
第52図	6区162・163(1)号土坑	63	第113図	3・③区Hr-FP下畝状遺構	127
第53図	6区163(2)・164~166号土坑	64	第114図	6区Hr-FP下水田	129
第54図	6区166号土坑出土遺物	65	第115図	推定水田域	130
第55図	6区167・168号土坑	66	第116図	遺構外出土遺物(1)	131
第56図	6区169~171号土坑	67	第117図	遺構外出土遺物(2)	132
第57図	7区1~3号土坑、6区1号焼土	68	第118図	奈良・平安時代遺構全体図	134
第58図	遺構外出土遺物(1)	70	第119図	1区1号住居(1)	135
第59図	遺構外出土遺物(2)	71	第120図	1区1号住居(2)	136
第60図	遺構外出土遺物(3)	72	第121図	2区1号住居(1)	137
第61図	遺構外出土遺物(4)	73	第122図	2区1号住居(2)	138

第123図	2区1号住居(3)……………	139	第185図	4区13号住居(1)……………	195
第124図	2区1号住居出土遺物(1)……………	140	第186図	4区13号住居(2)……………	196
第125図	2区1号住居出土遺物(2)……………	141	第187図	4区14号住居(1)……………	197
第126図	2区2号住居(1)……………	142	第188図	4区14号住居(2)……………	198
第127図	2区2号住居(2)……………	143	第189図	4区15号住居……………	199
第128図	2区2号住居(3)……………	144	第190図	4区16号住居(1)……………	200
第129図	2区2号住居出土遺物(1)……………	145	第191図	4区16号住居(2)……………	201
第130図	2区2号住居出土遺物(2)……………	146	第192図	4区16号住居出土遺物(1)……………	202
第131図	2区3号住居(1)……………	147	第193図	4区16号住居出土遺物(2)……………	203
第132図	2区3号住居(2)……………	148	第194図	4区17号住居(1)……………	203
第133図	2区3号住居(3)……………	149	第195図	4区17号住居(2)……………	204
第134図	2区3号住居出土遺物……………	150	第196図	4区19号住居……………	205
第135図	2区4号住居(1)……………	150	第197図	4区20号住居(1)……………	206
第136図	2区4号住居(2)……………	151	第198図	4区20号住居(2)……………	207
第137図	2区5号住居(1)……………	152	第199図	4区20号住居出土遺物……………	208
第138図	2区5号住居(2)……………	153	第200図	4区22号住居(1)……………	208
第139図	2区5号住居(3)……………	154	第201図	4区22号住居(2)……………	209
第140図	2区5号住居出土遺物……………	155	第202図	5区1号住居……………	209
第141図	2区6号住居(1)……………	156	第203図	5区1号住居出土遺物……………	210
第142図	2区6号住居(2)……………	157	第204図	5区2号住居……………	210
第143図	2区6号住居出土遺物(1)……………	158	第205図	5区3号住居(1)……………	211
第144図	2区6号住居出土遺物(2)……………	159	第206図	5区3号住居(2)……………	212
第145図	2区7号住居(1)……………	159	第207図	5区4号住居……………	213
第146図	2区7号住居(2)……………	160	第208図	5区4号住居出土遺物……………	214
第147図	2区7号住居出土遺物……………	161	第209図	5区5号住居……………	214
第148図	3-②区1号住居……………	161	第210図	6区1号住居……………	215
第149図	3-③区1号住居……………	162	第211図	6区3号住居……………	216
第150図	3-③区1号住居出土遺物……………	163	第212図	6区3号住居出土遺物……………	217
第151図	3-③区2号住居……………	163	第213図	6区4号住居……………	217
第152図	3-③区3号住居……………	164	第214図	6区5号住居……………	218
第153図	3-③区3号住居出土遺物……………	165	第215図	6区6号住居(1)……………	218
第154図	3-③区4号住居……………	165	第216図	6区6号住居(2)……………	219
第155図	3-③区5号住居(1)……………	166	第217図	6区6号住居出土遺物……………	220
第156図	3-③区5号住居(2)……………	167	第218図	6区8号住居(1)……………	220
第157図	3-③区6号住居(1)……………	168	第219図	6区8号住居(2)……………	221
第158図	3-③区6号住居(2)……………	169	第220図	6区10号住居(1)……………	222
第159図	3-③区7号住居……………	170	第221図	6区10号住居(2)……………	223
第160図	4区1号住居(1)……………	171	第222図	6区15号住居(1)……………	224
第161図	4区1号住居(2)……………	172	第223図	6区15号住居(2)……………	225
第162図	4区1号住居出土遺物……………	173	第224図	6区16号住居(1)……………	225
第163図	4区2号住居(1)……………	174	第225図	6区16号住居(2)……………	226
第164図	4区2号住居(2)……………	175	第226図	6区17号住居……………	227
第165図	4区2号住居出土遺物……………	176	第227図	2区1号掘立柱建物……………	228
第166図	4区3号住居(1)……………	177	第228図	2区2・3号掘立柱建物……………	229
第167図	4区3号住居(2)……………	178	第229図	2区4号掘立柱建物……………	230
第168図	4区3号住居出土遺物……………	179	第230図	2区5号掘立柱建物……………	231
第169図	4区4号住居(1)……………	179	第231図	6区1号掘立柱建物……………	232
第170図	4区4号住居(2)……………	180	第232図	6区2号掘立柱建物……………	233
第171図	4区4号住居出土遺物……………	181	第233図	6区3号掘立柱建物……………	234
第172図	4区5号住居……………	182	第234図	4区谷……………	235
第173図	4区5号住居出土遺物……………	183	第235図	4区谷セクション……………	236
第174図	4区6号住居……………	184	第236図	4区谷土坑群……………	237
第175図	4区6号住居出土遺物……………	185	第237図	4区谷土坑群セクション(1)……………	238
第176図	4区7号住居(1)……………	186	第238図	4区谷土坑群セクション(2)、谷出土遺物(1)……………	239
第177図	4区7号住居(2)……………	187	第239図	4区谷出土遺物(2)……………	240
第178図	4区7号住居出土遺物……………	188	第240図	4区谷出土遺物(3)……………	241
第179図	4区8号住居……………	189	第241図	4区谷出土遺物(4)……………	242
第180図	4区9号住居(1)……………	190	第242図	4区谷出土遺物(5)……………	243
第181図	4区9号住居(2)……………	191	第243図	4区谷出土遺物(6)……………	244
第182図	4区10号住居……………	192	第244図	3-③区1~3号溝……………	245
第183図	4区11号住居……………	193	第245図	4区128号溝、1区9号土坑、2区27号土坑、 4区44・79・438・439号土坑……………	247
第184図	4区12号住居……………	194			

第246図	6区172号土坑、6区26・59・66号ピット	248
第247図	遺構外出土遺物(1)	249
第248図	遺構外出土遺物(2)	250
第249図	中近世遺構全体図	252
第250図	1区1号掘立柱建物	253
第251図	1区2・3号掘立柱建物	254
第252図	6区1・2号竪穴状遺構	255
第253図	6区3・4号竪穴状遺構	256
第254図	1区1・2号溝	257
第255図	1区3号溝、2区1号溝	259
第256図	2区2・3号溝	260
第257図	2区4～6号溝	261
第258図	4区4～7・18・23・25・27・28・32・34号溝	263
第259図	4区40～47号溝	264
第260図	4区48～51・64～66号溝	265
第261図	4区68～70・86・93・213号溝	267
第262図	4区113・121・122・124号溝	268
第263図	4区129～133・135・142・143・151・167・199号溝	269
第264図	4区200～203・211号溝	271
第265図	5区1・3・6号溝	272
第266図	5区7～17号溝	273
第267図	5区19・25・26・28・29号溝、6区1～3号溝	275
第268図	6区2・3号溝出土遺物	276
第269図	6区5・8～11号溝	277
第270図	6区15・17・24号溝	278
第271図	1区1～7号土坑	281
第272図	2区1～5・7号土坑	282
第273図	2区8～14号土坑	283
第274図	2区15～22号土坑	284
第275図	2区23・24・26・28～30号土坑	285
第276図	3区1～4・6号土坑、4区1号土坑	286
第277図	4区3・4・7・8・24・26・27・29号土坑	287
第278図	4区50～55・58・59・61～64号土坑	288
第279図	4区66・70～75・77・78・81・84～86号土坑	289
第280図	4区92・97・100・110～112・117～120・125号土坑	290
第281図	4区130・131・133・134・149・153 154・173～175・178～181号土坑	291
第282図	4区184・190・193～195 198・199・201・204・205・207～209号土坑	292
第283図	4区210～213・216～220・226～228号土坑	293
第284図	4区229・231・232・234～236 244・249・267・277・284・291号土坑	294
第285図	4区297・299・304・316・324 326・328・330・332～336号土坑	295
第286図	4区338・347・348・362・364 367・377～380・383・385号土坑	296
第287図	4区390・391・398・417・420 422・424～426・436号土坑	297
第288図	4区434・447～450号土坑	298
第289図	5区4～9号土坑	299
第290図	5区10～22号土坑	300
第291図	5区23・24・26～36・38号土坑	301
第292図	5区39・40・42～46・49・50号土坑	302
第293図	5区51・53～56・59・68号土坑	303
第294図	5区60～62・65～67・72～74号土坑	304
第295図	5区70・71・75～77・126・127・136号土坑	305
第296図	5区79～82・84・85・88・128号土坑	306
第297図	5区93～95・97・98・100～102号土坑	307
第298図	5区104～107・109・111～114号土坑	308
第299図	5区115・116・137～142号土坑	309
第300図	5区143～149号土坑、6区1号土坑	310
第301図	6区2・3・5・6・8～12号土坑	311

第302図	6区13～16・18～20・23・24・26・27号土坑	312
第303図	6区34・37・39・41・42・44・118号土坑	313
第304図	6区45・46・50・52・54・56 58～60・62・66・67・72号土坑	314
第305図	6区64・70・71・77・79・86・87・92号土坑	315
第306図	6区97・105・108～113号土坑	316
第307図	6区114～117・136号土坑	317
第308図	6区南西隅土坑群(1)	323
第309図	6区南西隅土坑群(2)	324
第310図	1区1号ピット、Cタイプピット(4区145・146・178・284号) Dタイプピット(4区20・26号)	325
第311図	Aタイプピット	326
第312図	Bタイプピット	327
第313図	1区1号方形周溝遺構	329
第314図	1区1号柵列	330
第315図	4区1号道跡	折込
第316図	4区2～4号道跡、6区3号井戸	333
第317図	6区石囲遺構(1)	335
第318図	6区石囲遺構(2)	336
第319図	6区石囲遺構出土遺物(1)	337
第320図	6区石囲遺構出土遺物(2)	338
第321図	6区石囲遺構出土遺物(3)	339
第322図	3区耕作溝	340
第323図	中近世以降遺構外出土遺物(1)	341
第324図	中近世以降遺構外出土遺物(2)	342

表目次

表1	周辺遺跡一覧	10
表2	中近世土坑一覧	317～322
表3	中近世ピット一覧	328

写真図版目次

PL1	遺跡遠景、調査区全景
PL2	6区縄文時代遺構全景、7区3・4号住居
PL3	7区4号住居、6区1号配石、7区1号配石
PL4	7区1～3号配石
PL5	6区1a・1b号列石全景、2号集石
PL6	6区3号集石、119～124号土坑
PL7	6区125～132号土坑
PL8	6区133～139・141号土坑
PL9	6区142～149号土坑
PL10	6区150～156号土坑
PL11	6区157～163号土坑
PL12	6区164～171号土坑
PL13	7区1～3号土坑、6区1号焼土、5区Hr-FA下面全景
PL14	6区Hr-FA下面全景、5区6号住居、6区18・19号住居
PL15	6区19～21号住居
PL16	6区20～22号住居、7区1号住居
PL17	7区2・5号住居、6区4・5号掘立柱建物、6区1号祭祀
PL18	6区2～4号祭祀、5区1号集石、6区1号集石、6区1号 土器集中、4区1号土器集中
PL19	3-③区Hr-FP下畝状遺構・水田、2区全景
PL20	4区全景、1区1号住居、2区1号住居
PL21	2区1～3号住居
PL22	2区3～6号住居
PL23	2区6・7号住居、3-②区1号住居、3-③区1・2号住居
PL24	3-③区3～6号住居
PL25	3-③区7号住居、4区1～4号住居
PL26	4区4～10号住居
PL27	4区11～16号住居
PL28	4区16・17・19・20・22号住居、5区1号住居
PL29	5区2～5号住居、6区1・3～5号住居

- PL30 6区6·8·10·15~17号住居、2区1号掘立柱建物
 PL31 2区2~5号掘立柱建物、6区1~3号掘立柱建物
 PL32 4区谷(108·176·441号土坑)、3-③区1~3号溝、1区9号土坑
 PL33 2区27号土坑、4区44·79·438·439号土坑、6区53号土坑、1区中近世面全景
 PL34 5区中近世面全景
 PL35 1区1·2号掘立柱建物、1区1号方形周溝遺構、1区1号柵列、6区1~3号竪穴、4区1号道跡
 PL36 1区1~3号溝、2区1~6号溝、6区11号溝
 PL37 6区15号溝、6区3号井戸、6区石囲、1区1~5号土坑
 PL38 1区7号土坑、2区1·2·4·5·7·8·10号土坑
 PL39 2区11·13~17·19·20号土坑
 PL40 2区22~24·26·28·29号土坑、3区1·2号土坑
 PL41 3区3号土坑、4区1·3·4·59·63·120·198号土坑
 PL42 4区199·201·205·208·231·291·297·377号土坑
 PL43 4区378·379·390·447·449·450号土坑、5区5·8号土坑
 PL44 5区10·14·15·17·21·30~32号土坑
 PL45 5区33·44~46·51·53~55·59号土坑
 PL46 5区65·67·68·73·74·77·80·82号土坑
 PL47 5区84·85·93·94·97·98·100·101·107号土坑
 PL48 5区112·114·117·128·137·138·140·141·143~147号土坑、6区3号土坑
 PL49 6区6·10·12·14·16·18·20·24号土坑
 PL50 6区26·34·45·52·64·71·97·117号土坑
 PL51 7区3·4号住居出土遺物
 PL52 6区1号配石出土遺物
 PL53 7区1·2·3号配石出土遺物
 PL54 6区1号列石出土遺物(1)
 PL55 6区1号列石出土遺物(2)
 PL56 6区1号列石出土遺物(3)
 PL57 6区1号列石出土遺物(4)
 PL58 6区2号集石出土遺物
 PL59 6区2·3号集石、6区120~124号土坑出土遺物
 PL60 6区128~133·137~139·141·143~145号土坑出土遺物
 PL61 6区146~152·154~156号土坑出土遺物
 PL62 6区156~161号土坑出土遺物
 PL63 6区162·163·165·166号土坑出土遺物
 PL64 6区166·167·169·171号土坑出土遺物
 PL65 遺構外出土遺物(1)
 PL66 遺構外出土遺物(2)
 PL67 遺構外出土遺物(3)
 PL68 遺構外出土遺物(4)
 PL69 遺構外出土遺物(5)
 PL70 遺構外出土遺物(6)
 PL71 遺構外出土遺物(7)
 PL72 遺構外出土遺物(8)
 PL73 遺構外出土遺物(9)
 PL74 遺構外出土遺物(10)
 PL75 遺構外出土遺物(11)
 PL76 5区6号住居出土遺物(1)
 PL77 5区6号住居出土遺物(2)
 PL78 5区18·19号住居出土遺物
 PL79 6区19·20号住居出土遺物
 PL80 6区20·21号住居、7区1·2号住居出土遺物
 PL81 7区2号住居、6区1·2·3号祭祀出土遺物
 PL82 6区3·4号祭祀出土遺物
 PL83 5区1号集石、6区1号集石出土遺物
 PL84 4区1号土器集中、6区1号土器集中、遺構外出土遺物(1)
 PL85 遺構外出土遺物(2)
 PL86 遺構外出土遺物(3)
 PL87 1区1号住居、2区1号住居出土遺物
 PL88 2区1·2号住居出土遺物
 PL89 2区2号住居出土遺物
 PL90 2区3·4号住居出土遺物
 PL91 2区4·5号住居出土遺物
 PL92 2区5·6号住居出土遺物
 PL93 2区6·7号住居出土遺物
 PL94 3-②区1号住居、3-③区1·3号住居出土遺物
 PL95 3-③区4~6号住居出土遺物
 PL96 3-③区6·7号住居、4区1号住居出土遺物
 PL97 4区1·2号住居出土遺物
 PL98 4区2号住居出土遺物
 PL99 4区3·4号住居出土遺物
 PL100 4区4·5号住居出土遺物
 PL101 4区6·7号住居出土遺物
 PL102 4区7~10号住居出土遺物
 PL103 4区10~14号住居出土遺物
 PL104 4区14~16号住居出土遺物
 PL105 4区16号住居出土遺物
 PL106 4区16·17·20号住居出土遺物
 PL107 4区20号住居出土遺物
 PL108 4区22号住居、5区1~3号住居出土遺物
 PL109 5区3~5号住居出土遺物
 PL110 6区1·3·5·6号住居出土遺物
 PL111 6区8·10·15号住居出土遺物
 PL112 6区16·17号住居、2区1号掘立柱建物、6区1号掘立柱建物、4区谷出土遺物(1)
 PL113 4区谷出土遺物(2)
 PL114 4区谷出土遺物(3)
 PL115 4区谷出土遺物(4)
 PL116 3-③区3号溝、2区27号土坑、4区79·439号土坑、遺構外出土遺物
 PL117 遺構外出土遺物、1区2号掘立柱建物、6区1·2·4号竪穴狀遺構、2区2号溝、4区113号溝出土遺物
 PL118 4区113号溝、5区6号溝、6区1·2·3号溝出土遺物
 PL119 1区4号土坑、2区1·2·13号土坑、4区1·3·208·434号土坑、5区5·98·115·143~147号土坑、6区39·118号土坑出土遺物
 PL120 6区77·79号土坑、6区南西隅土坑群、4区1·2号道跡、6区石囲出土遺物(1)
 PL121 6区石囲出土遺物(2)
 PL122 6区石囲出土遺物(3)
 PL123 遺構外出土遺物(1)
 PL124 遺構外出土遺物(2)

付図目次

- 付図1 1·2区奈良・平安時代遺構全体図
 付図2 4·5·6区奈良・平安時代遺構全体図
 付図3 1·2区中近世遺構全体図
 付図4 4·5·6区中近世遺構全体図

第1章 発掘調査の概要

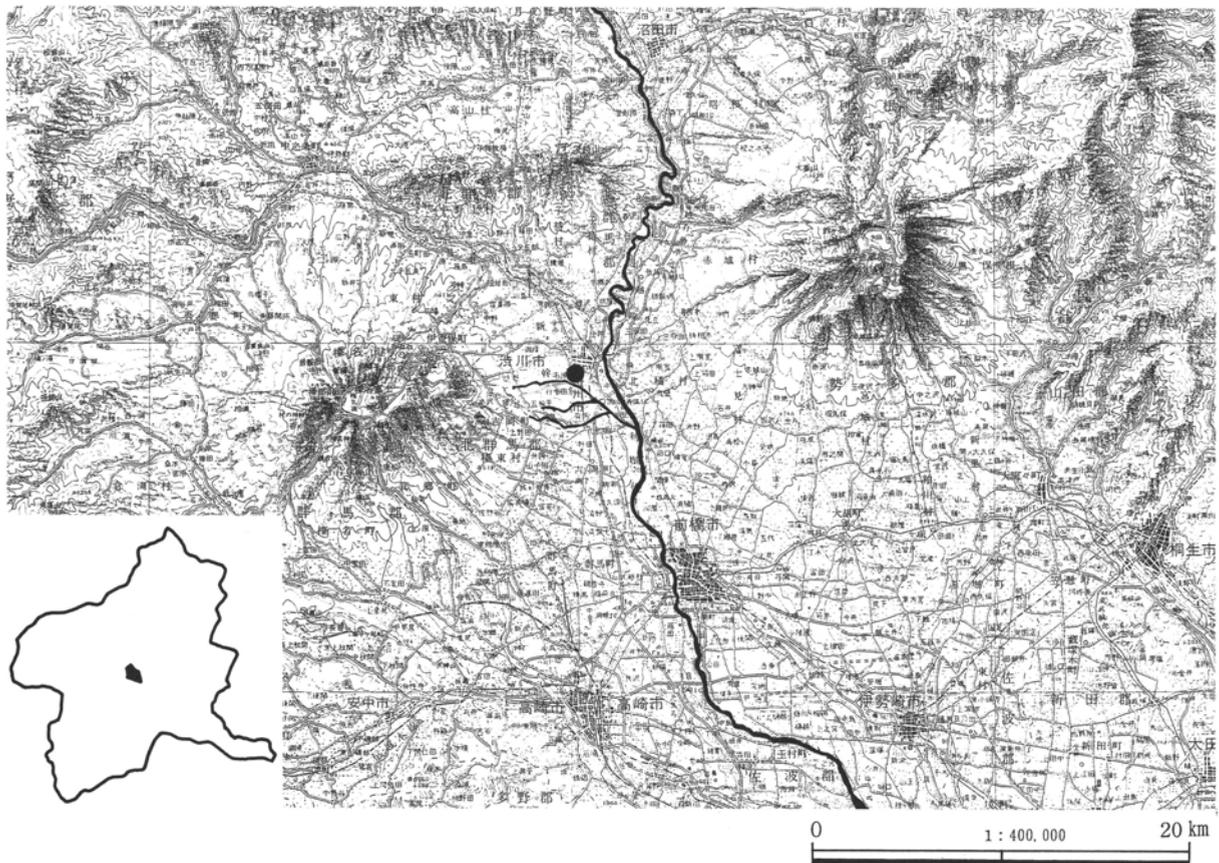
1 調査に至る経緯

本路線は昭和39年12月28日に都市計画決定(最終の都市計画変更は平成7年1月13日)された。延長2,690m、基本幅員27mの都市計画道路であり、関越自動車道の渋川伊香保インターチェンジ(国道17号)付近を起点とし主要地方道渋川吾妻線のバイパスも担っている。渋川伊香保インターチェンジから市街地を迂回して伊香保方面に連絡するとともに、市街地の環状道路の役割も有する重要路線である。

国道17号から主要地方道高崎渋川線までの区間(L=990m)については道路局事業により整備が進められ、平成5年度には暫定2車線で供用開始された。また、都市計画道路渋川駅前通り線から主要地方道渋川吾妻線の現況道路までの区間は街路事業で整備済みである。そこで、未整備区間である主要地方道高崎渋川線から都市計画道路渋川駅前通り線の間(L=1,240m)について平成4年度に新規事業採択を受けた。

平成11年5月、路線が渋川市の市道と交差する区域の試掘調査依頼が県教育委員会文化財保護課(現文化課)にあり、付近に土器片が散布すること及び周知の遺跡(諏訪ノ木遺跡)の範囲にあること等から、本調査が必要であると判断された。

平成11年6月16日に、県教育委員会と渋川市当局と協議し、渋川市都市計画課では市道との交差点区域のみ市教育委員会が対応することで合意した。平成11年6月28日に渋川土木事務所企画管理課と協議を行ない、平成12年度から石原東遺跡D区、諏訪ノ木V遺跡の本調査を実施することに決定された。高源地東I遺跡の本調査は、石原東遺跡D区・諏訪ノ木V遺跡・諏訪ノ木VI遺跡に続き、平成13年11月から実施された。



第1図 遺跡の位置(国土地理院 1/400,000「宇都宮・長野」使用)

2 調査の経過

渋川都市計画道路3.3.1号中村上郷線街路事業に伴う発掘調査は、平成12年4月より路線南に位置する石原東遺跡D区から着手した。高源地東I遺跡の発掘調査は、平成13年11月1日から平成16年8月31日まで行われた。

平成13年度 高源地東I遺跡の範囲は、市役所南側の市道を西に向かい旧三国街道と交差する地点から、渋川駅前から伊香保方面に向かう通称市役所通りまでである。発掘調査区は横切る現道や河川により、南から1区、2区と設定した。平成13年度は用地買収の状況などから1区と2区を調査した。調査地は北東方向に傾斜し、宅地や畑地として造成されていた。調査では、奈良時代から中・近世の遺構が検出された。

平成14年度 高源地東I遺跡の発掘調査は、平成14年度には行われなかった。中村上郷線建設に伴う発掘調査では、諏訪ノ木V・諏訪ノ木VI遺跡が行われた。

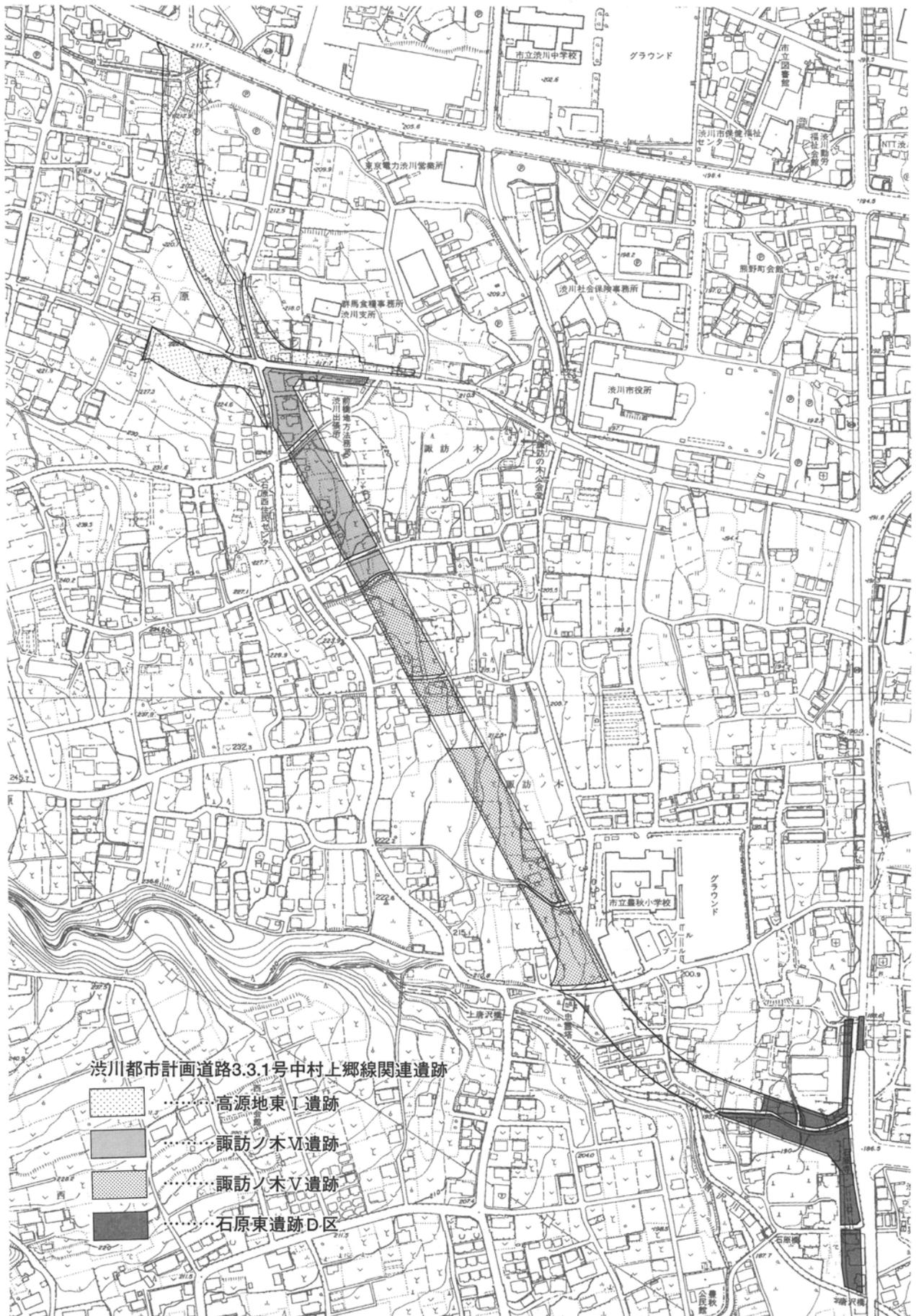
平成15年度 4～7区の発掘調査が行われた。このうち、7区には一部未買収地が含まれていたことから、トレンチ調査のみで本調査は次年度行うことになった。調査進行は、南側の4区から北側の7区に向かって進めた。古墳時代から中・近世の遺構が検出された。

平成16年度 3、6、7区の発掘調査が行われた。なお、6区については、前年度にHr-FP下面までの調査が終了しており、Hr-FA上面からの調査である。3区はHr-FP上面、Hr-FP下面、Hr-FA下面、唐沢泥流上面の4面、6区はHr-FA上面、Hr-FA下面、淡色黒ボク土上面、唐沢泥流上面の4面、7区はHr-FA下面、淡色黒ボク土上面、唐沢泥流上面の3面の調査を行った。縄文時代から中・近世の遺構が検出された。

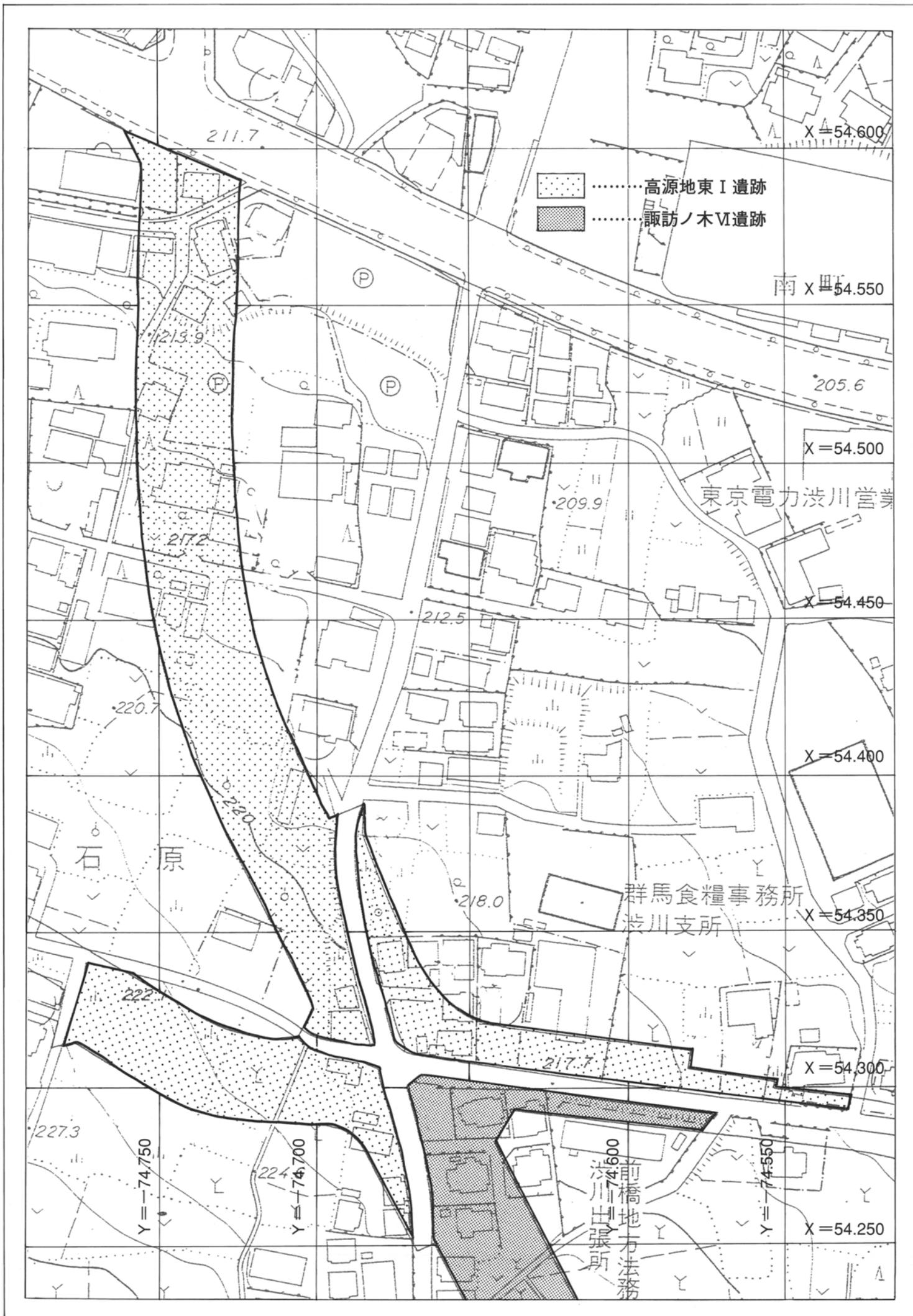
3 調査の方法

本報告分の調査対象地区は、11,710㎡である。

- (1) 表土掘削には、調査の効率化を図るために、掘削機械を使用した。
- (2) 調査対象区は、調査区域を横切る現道や河川により、設定した。
- (3) 国家座標第IX系を基準に5mグリッドを設定した。東南角の交点下3桁をグリッド名称として呼称した。ここで使用している国家座標は、2,000年以前の旧座標である。
- (4) 遺構名称は種別ごと・区ごとに、通し番号を付した。遺物の取り上げに際しては、遺構単位を基本とし、原位置をとどめる物については、その都度番号を付し、図面上に記録した。
- (5) 遺構等の測量には平板測量を用い、1/20縮尺図を原則とした。
- (6) 写真撮影には35mm版の白黒フィルムとカラースライドフィルム及び6×7版白黒フィルムを使用した。また撮影対象によって高所作業車を使用した。
- (7) 出土遺物の取り上げに際しては完形・大破片については図化等を行ったが、小破片については埋没土層ごとに一括して取り上げた。また、出土した遺物は、発掘調査期間内に水洗い・注記までおこなった。
- (8) 本遺跡の調査では自然科学分析をおこない、第6章に掲載した。



第2図 中村上郷線関連遺跡位置図



第2章 遺跡の立地と環境

1 位置と地理的環境

1) 位置

本遺跡は、渋川市の中心部であるJR上越線渋川駅の南西約1kmに所在する。遺跡地は榛名山東麓に位置し、東約1.5kmに利根川を臨む。本遺跡からは、東に赤城山、北に子持山・小野子山、西に榛名山などの山々を見渡せる。標高は約226～212mで、比高差14mを測る。

2) 地理的環境

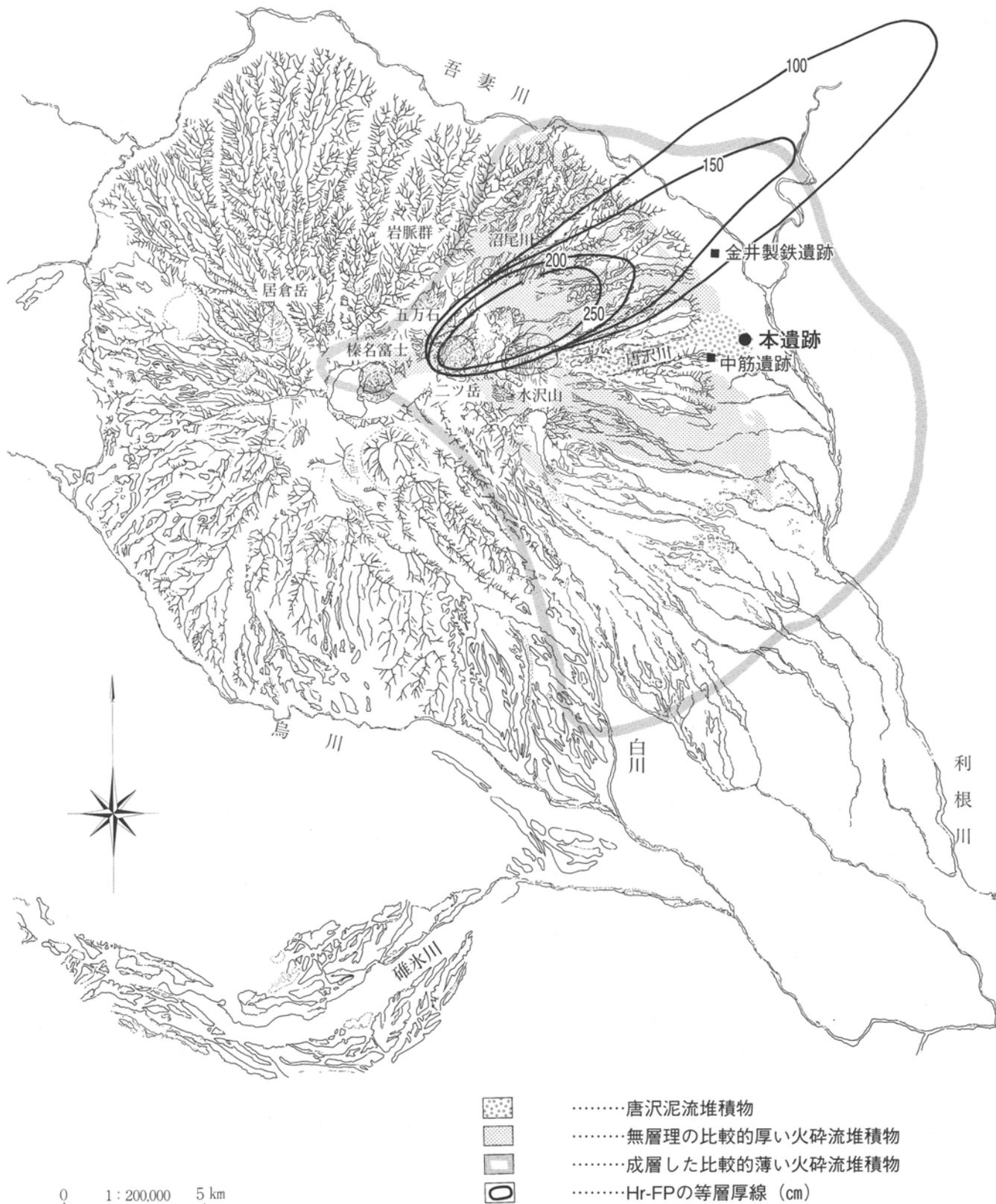
本遺跡は、榛名山東麓に聳える水沢山から連なる山麓地帯の先端部に位置する。この山麓地形は利根川に向かって流れる中小の河川により解析され、放射状に伸びる尾根列を形成している。この尾根列は標高280～300mで終焉し、50～100mの比高差をもって下り、なだらかな緩斜面へと移行する。

本遺跡は、この緩斜面の一つである唐沢川周辺に形成された扇状地状の地形の上に位置している。扇状地状の地形は豊秋団地付近を要に半円形に広がり、中筋・西の町・番場・手川・西浦・諏訪ノ木等が、この扇状地状地形の緩斜面地域にあたる。『渋川市誌 第一巻 自然編』によると、扇状地状の地形は現在の水沢山周辺の山体が崩壊し、土砂が堆積したことによって形成されたものとされている。この土層は唐沢泥流堆積物と呼称され、上層にはAs-C軽石は確認できるものの、浅間板鼻褐色軽石群(As-YP)が確認されていなかったことから、唐沢泥流堆積物は、As-YP(約1.3～1.4万年前)以降、As-C(古墳時代前期)以前に形成されたのではないかと考えられてきた。渋川都市計画道路3.3.1号中村上郷線街路事業に伴い発掘調査された諏訪ノ木V遺跡では、この唐沢泥流堆積物の直上から縄文時代草創期の石器群が検出された。この発見により、唐沢泥流堆積物は、As-YP(約1.3～1.4万年前)以降、草創期(約1.2万年前)以前に形成された可能性があることが判明したことは、「地理的環境」『石原東遺跡D区・諏訪ノ木VI遺跡』(2005 群埋文)で示した通りである。本遺跡の調査では、唐沢泥流堆積物の下位を調査することができた。この調査では、唐沢泥流堆積物下位からAs-YPが検出され(第6章 1「群馬県渋川市高源地東1遺跡における火山灰分析」参照)、唐沢泥流堆積物がAs-YPの上位にある確証を得ることができた。

また、本遺跡周辺では、榛名山二ツ岳の二度にわたる大噴火により形成された火山性堆積物(Hr-FA、Hr-FP)が見られる。Hr-FAは、6世紀初頭の噴火により形成されたものと考えられている。この噴火は現在の二ツ岳周辺で発生したとされ、S-1からS-12までの12に区分されるテフラ層が噴出している。Hr-FPは6世紀中頃に二ツ岳火口で発生した噴火により形成されたものと考えられている。現在の二ツ岳は、この時の噴火活動により形成されたものであり、この噴火で噴出したテフラ層はI-1からI-14までの14に区分されている。本遺跡で確認されたテフラ層区分の詳細については、基本層序(第3章)にまとめられているので、参照していただきたい。これら二度にわたる古墳時代の大噴火は、降下堆積物や火砕流、土石流などの厚い堆積によって、それ以前の地形を一変させてしまっている。

引用・参考文献

- 1990『群馬県史 通史編1』
- 1993『渋川市誌 第一巻 自然編』
- 1993『渋川市誌 第二巻 通史編上』
- 2005「地理的環境」『石原東遺跡D区・諏訪ノ木V遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団



第4図 遺跡周辺の地形図

※「群馬県史」通史編1 図19・21、「渋川市史」自然編第3章図3、竹本弘幸1999「北関東北西部地域における第四紀古環境変遷と火山活動」図5-7より作成。

2 歴史的環境

旧石器時代 現在までのところ、渋川市(平成18年2月20日の合併以前の渋川市域。以下同)内の旧石器時代の遺跡は、行幸田山遺跡だけである。行幸田山遺跡は、本遺跡から南約1.5kmの丘陵状の地形に位置する。

①浅間・板鼻褐色軽石層群(1.6~2万年前位)中、②浅間-白糸軽石層(15万年以前)下、③ローム最上層中の3層それぞれから石器が数点出土した。

縄文時代 現在までのところ、渋川市内の縄文時代草創期の遺跡は、諏訪ノ木V遺跡だけである。諏ノ木V遺跡では約150点の石器・剥片が出土した。完形に近い尖頭器が多く、珪質頁岩の接合資料があることが特徴的である。石器群に伴う土器は出土しなかった。

本遺跡周辺の早期遺跡に、諏訪ノ木V遺跡、空沢遺跡、行幸田山遺跡があるが、明確な遺構はない。諏訪ノ木V遺跡では、早期押型文、三戸式、田戸下層式、早期前半と考えられる縄文施文、撚糸文施文、無文土器、空沢遺跡、行幸田山遺跡では数点の押型文土器、尖底土器が出土している。

本遺跡周辺の前期遺跡に、諏訪ノ木V遺跡、神宮寺西遺跡、後田東遺跡、中筋遺跡、空沢遺跡、堀込遺跡、半田南原遺跡などがある。前期になると遺跡数は増加し遺構も見られる。半田南原遺跡は最も広く調査されており、自然堤防の台地上に小規模の集落が営まれていたことが判明している。空沢遺跡からは、黒浜式期の住居が1軒、諏訪ノ木V遺跡からは、花積下層式、関山式、黒浜式、諸磯式の土器が出土した。

本遺跡周辺の中期遺跡に行幸田山遺跡、空沢遺跡、諏訪ノ木V遺跡などがあげられる。行幸田山遺跡では、中期勝坂式から加曾利E式期の住居40棟からなる集落が調査されている。空沢遺跡では、中期勝坂式が1軒、加曾利E2式から後期称名寺式にかけての住居が54軒検出された。さらに、加曾利E4式から称名寺式期といった後期にかかる過渡期の敷石住居とそれに伴う弧状列石が検出された。諏訪ノ木V遺跡では中期焼町類型、加曾利E式、後期称名寺式、堀之内式、加曾利B式の土器等が検出された。本遺跡周辺で、確実に晩期とされる遺跡はない。

弥生時代 縄文時代から弥生時代の過渡期のものとして南大塚遺跡があげられる。南大塚遺跡は、本遺跡から北西約5.5kmに位置する。前期の遺跡は東日本を見ても非常に少なく、南大塚遺跡の発見は貴重である。3基の土坑から、壺や甕などが約10点出土し、集団墓地遺跡であると考えられている。

中期前半の土器は、群馬県の土器編年で岩櫃式と呼ばれている。縄文の影響が土器に残るものの縄文土器が共伴することはなくなり、弥生土器として確立するのがこの時期である。本遺跡周辺では行幸田山遺跡においてこの型式の土器が確認できる。諏訪ノ木V遺跡3区包含層からは、弥生時代前期に比定される可能性がある土器が出土した。

後期になると、有馬廃寺遺跡、中筋遺跡、有馬遺跡、有馬条里遺跡、後田東遺跡、神宮寺西遺跡など、現在の行幸田・有馬田圃を中心に遺跡が展開する。この地域の一部は条里以前、沼地であったことが発掘調査によって明らかになっている。後期の集落はこの沼地を取り巻く小高い丘陵状の地形から見つかっている。

諏訪ノ木V遺跡では、弥生時代前期、中期、後期樽式の土器が出土した。

古墳時代 本遺跡地周辺の前期の遺跡に中筋遺跡、有馬条里遺跡がある。中筋遺跡では、S字状口縁台付甕を主体とした古式土師器が大量に投棄された遺構や、古墳1基、土坑墓1基が確認された。中筋遺跡は墓域としての性格が強い。また、有馬条里遺跡では大規模な集落や畠が検出されている。

中期の遺跡に中筋遺跡がある。中筋遺跡は、5世紀末から6世紀初頭の二ツ岳の噴火(Hr-FA)に伴う火砕流で被災した集落遺跡で、火山灰で覆われていたために良好な状態で遺構が残存していた。遺構は、堅穴住居4、平地式建物6、畠2、祭祀遺構3、垣根、溝区画、古墳1等が検出された。一般の集落内に堅穴住居と平地

式住居が同時に存在することや、複数の堅穴住居が一つの周堤帯を共有することなど当時の集落形態や暮らしを究明する豊富な資料が提供された⁽¹⁾。本遺跡に隣接する諏訪ノ木VI遺跡や諏訪ノ木V遺跡の発掘調査では、Hr-FA直下から遺構は検出されなかった。当時の土地利用については今後の検討を要する。

後期の遺跡に黒井峯遺跡がある。黒井峯遺跡は6世紀中頃の二ツ岳の噴火で噴出した大量の軽石（Hr-FP）によって埋没した集落遺跡である。軽石層の中に建物の壁、崩れかけた屋根、柴垣などが立ったまま確認され、軽石下の旧地表面からは、道、屋外作業場、畠、小区画水田など様々な遺構が見つかり、古墳時代後期の集落の様子が明らかになった⁽²⁾。

奈良・平安時代 本遺跡地が所在する地域は、奈良・平安時代には上野国群馬郡に属しており、「和名類聚抄」によると、群馬郡には長野、井出、小野、八木、上郊、畦切、鳥名、群馬、桃井、有馬、利刈、駅家、白衣の13郷が設置されており、遺跡地は有馬郷に属すると推定される。

本遺跡南1.5kmに有馬廃寺跡と呼ばれる遺跡がある。遺跡地周辺は、以前から古瓦である布目瓦の出土地として知られていた。昭和61年の調査では寺院跡として認められる遺構は確認できなかったが、出土する瓦が上野国分寺の瓦と同形態であるとのことである。遺跡は官衙かその影響が強い寺院跡であった可能性が指摘されている。有馬廃寺の北には有馬条里遺跡がある。昭和57年～59年にかけて行われた発掘調査では条里制に関わる遺構は検出されなかったが、この地域に残っていた水田区画が条里制の区画を踏襲するものであると推定されている。有馬郷の中心地は有馬廃寺周辺部の可能性が高いと考えられており、本遺跡は中心地から北に少し離れた場所にある。

本遺跡に近い石原東遺跡D区・空沢遺跡では墨書土器が出土した。石原東遺跡D区では「茂」（類推含む）76点、「益」4点、「上」2点、「天」「真」「山」「中尾」「中」「尾」「合」「百」「周」1点などの208点、空沢遺跡では「本」「若」などの墨書土器が出土した。「茂」は、「茂」と判読できるが、石原東遺跡D区の南には茂沢という地名や、そこに流れる茂沢川の「茂」という文字があり、墨書土器に記された文字と地名との関連が注目される。石原東遺跡D1区の墨書土器208点の出土は伊勢崎市上植木光仙房遺跡出土の213点に次ぎ県内第2位の出土である。石原東遺跡D区の墨書土器は、約22,000点の土師器、須恵器、灰釉・緑釉などの施釉陶器、木器に伴って検出された。遺物の大部分が供膳具で、甕などの煮炊具は僅かである。施釉陶器は、547点と豊富で、京都洛北産の緑釉陶器3点や黒笹14号窯式期の灰釉陶器16点も含まれる。木器は曲物・挽物などの容器がほとんどで、農具や建築部材が見られない。遺物群は9世紀前半から10世紀前半の150年間に比定される。

古代有馬郷周辺の鉄生産関連遺跡に、金井製鉄遺跡、中筋遺跡、有馬条里遺跡、空沢遺跡、石原東遺跡、諏訪ノ木V遺跡、諏訪ノ木VI遺跡などなどがある。

金井製鉄遺跡は、本遺跡の北約1.5kmに所在し、榛名山の裾野、吾妻川右岸の河岸段丘上に位置する。金井製鉄遺跡では、昭和48年の渋川市教育委員会の発掘調査により製錬炉1基・炭窯8基が検出された。製錬炉は長軸90cm、短軸55cmで、壁55cmが残存する半地下式堅形炉である。当初9世紀末とされていたが、現在では8世紀中頃まで遡ると考えられている。遺物は羽口、須恵器椀・甕、土師器甕、鉄滓、砂鉄がある。製錬炉が検出された他に、鍛冶工程の羽口や椀形滓が出土していることから、製錬から鍛冶行程まで行われていたと考えることができる。金井製鉄遺跡は、1975年に県指定遺跡になった。

中筋遺跡は、本遺跡南約1kmに所在する。中筋遺跡では、平成5年の渋川市教育委員会による第5、7次発掘調査で連房式鍛冶工房が1棟検出された。連房式鍛冶工房の規模は6×10mの堅穴状の掘り込みに、東西2列に10基ほどの炉が配置される構造である。同様の連房式鍛冶工房は、同じ上野国群馬郡内の国府周辺に比定される鳥羽遺跡でも検出されている。鳥羽遺跡では5棟の連房式鍛冶工房跡が検出され、規模は6×18m以上

の竪穴状の掘り込みに、東西2列に鍛冶炉が配置されているものもある。鳥羽遺跡の連房式鍛冶工房は、中筋遺跡の連房式鍛冶工房と短軸がほぼ同規模で、鍛冶炉の配列などに類似点が見られることから、その関連性が注目される。

有馬条里遺跡では、製錬炉3基、鍛冶関連の土坑が1基検出された。検出された遺構は10世紀後半以降に比定される。鉄生産関連遺構は、製錬工程から鍛冶工程まで一連の工程が追え、羽口、椀形鍛冶滓、鉄塊系遺物、製錬滓などの遺物が出土している。

空沢遺跡では、9世紀後半に比定される竪穴状の鍛冶工房2基が検出された。羽口などの遺物が出土した。

石原東遺跡では10世紀後半に比定される竪穴状の鍛冶工房が検出された。羽口や鉄製品などの遺物が出土した。

諏訪ノ木V遺跡では、9世紀中頃に比定される竪穴状の鍛冶工房1軒、10世紀後半に比定される鍛冶工房2軒などが検出された。遺構からは、鉄製紡錘車、刀子、砥石、椀形鍛冶滓などが出土した。

諏訪ノ木VI遺跡では、埋没谷から鉄生産関連3,723点の精錬工程を主体とする鉄関連遺物滓が出土した。伴って出土した土器などから8世紀中頃を中心とした遺物群であると考えられる。8世紀中頃という時期は、金井製鉄遺跡の時期とも重なり、その関連が注目される。

本遺跡でも製錬工程の鉄滓が多数発見されており、中筋遺跡、空沢遺跡、諏訪ノ木V遺跡、諏訪ノ木VI遺跡、高原地東I遺跡と、唐沢泥流堆積物によって形成された扇状地状地形上で、数多くの鉄生産に関連した遺構・遺物が見つまっている。

その他、渋川市内の半田中原・南原遺跡、半田薬師遺跡で、羽口や椀形鍛冶滓などの鉄生産関連遺物が竪穴住居の覆土などから出土しており、周辺で鍛冶が行われていた可能性を示している。

鎌倉時代以降 本遺跡周辺の諏訪ノ木II遺跡や諏訪ノ木V遺跡では、中世とされる掘立柱建物群が検出された。2遺跡の掘立柱建物群は一連のものである可能性が高く、諏訪ノ木V遺跡の庇付の大型掘立柱建物が、中心的な建物である可能性が高い。諏訪ノ木II遺跡の掘立柱建物は、出土した土師質土器皿の年代などから、14世紀後半～15世紀の遺構と考えられている。

石原東遺跡D区では五輪塔などの石塔類、土坑墓などが検出された。隣接する空沢遺跡では中世とされる瓦の出土や永楽通宝が伴う土坑墓が検出されている。

註

- (1) 大塚昌彦 1999「中筋遺跡」『群馬県遺跡大辞典』群馬県埋蔵文化財調査事業団より引用。
 (2) 石井克己 1999「黒井峯遺跡」『群馬県遺跡大辞典』群馬県埋蔵文化財調査事業団より引用。

引用・参考文献

- 1981『諏訪ノ木遺跡』渋川市教育委員会
 1990『群馬県史 通史編1』
 1993『渋川市誌 第二巻 通史編上』
 1994『石原東遺跡(Ⅱ)』渋川市教育委員会
 1995『石原東遺跡(Ⅲ)』渋川市教育委員会
 1997『石原東古墳群』渋川市教育委員会
 2000『諏訪ノ木遺跡Ⅱ』渋川市教育委員会
 2001『石原東遺跡F区』渋川市教育委員会
 2001『石原東遺跡E区』渋川市教育委員会
 2005『石原東遺跡D区・諏訪ノ木V遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
 2006『諏訪ノ木VI遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団

第2章 遺跡の立地と環境

表1 周辺遺跡一覧

No	遺跡名	主な文献	No	遺跡名	主な文献
1	高原地東Ⅰ遺跡	本報告	50	金井前原遺跡	1989『市内遺跡Ⅱ』 渋川市教委
2	石原東遺跡D区	2005『石原東遺跡D区・諏訪ノ木V遺跡』群埋文	51	金井製鉄遺跡	1975『金井製鉄遺跡』 渋川市教委
3	諏訪ノ木V遺跡	2005『石原東遺跡D区・諏訪ノ木V遺跡』群埋文	52	金井原遺跡	1993『市内遺跡Ⅵ』 渋川市教委
4	諏訪ノ木Ⅵ遺跡	2006『諏訪ノ木Ⅵ遺跡』群埋文	53	虚空蔵塚古墳	1993『渋川市誌第2巻(通史編)』
5	石原東遺跡A～F区	2001『石原東遺跡F区』他 渋川市教委	54	坂之下遺跡	1988『坂之下遺跡』 渋川市教委
6	諏訪ノ木遺跡	1981『諏訪ノ木遺跡』 渋川市教委	55	坂下古墳群	1971『北群馬・渋川の歴史』他
7	諏訪ノ木Ⅱ遺跡	2000『諏訪ノ木Ⅱ遺跡』 渋川市教委	56	東町関下遺跡	1998『東町関下遺跡』群埋文
8	諏訪ノ木Ⅲ遺跡	2001『諏訪ノ木Ⅲ遺跡』 渋川市教委	57	東町古墳群	1971『北群馬・渋川の歴史』他
9	諏訪ノ木Ⅳ遺跡	2001『諏訪ノ木Ⅳ遺跡』 渋川市教委	58	延暦塚古墳	1972『群馬県遺跡台帳阿毛編』群馬県教委
10	諏訪ノ木Ⅶ遺跡	2003『諏訪ノ木Ⅶ遺跡』 渋川市教委	59	大崎古墳群	1993『渋川市誌第2巻(通史編)』
11	諏訪ノ木Ⅷ遺跡	2004『諏訪ノ木Ⅷ遺跡』 渋川市教委	60	北町遺跡	1996『北町遺跡・田ノ保遺跡』北橋村教委
12	諏訪ノ木Ⅹ遺跡	2004『諏訪ノ木Ⅹ遺跡』 渋川市教委	61	分郷八崎遺跡	1996『分郷八崎遺跡』北橋村教委
13	見立溜井・見立大久保遺跡	1985『見立溜井・見立大久保遺跡』赤城村教委	62	田ノ保遺跡	1996『北町遺跡・田ノ保遺跡』北橋村教委
14	弁天塚古墳	1995『赤城村内遺跡Ⅰ』赤城村教委	63	石原清水田遺跡	1997『石原清水田遺跡』 渋川市教委
15	戸波坂遺跡		64	石原久保貝道A	1993『市内遺跡Ⅵ』 渋川市教委
16	諏訪西遺跡	1986『諏訪西遺跡』群埋文	65	石原久保貝道B	1993『市内遺跡Ⅵ』 渋川市教委
17	中畦遺跡	1986『中畦遺跡』群埋文	66	田中遺跡	1997『田中遺跡』 渋川市教委
18	三原田城遺跡	1987『三原田城遺跡』群埋文	67	石原東古墳群	1997『石原東古墳群』 渋川市教委
19	房谷戸遺跡Ⅰ、Ⅱ	1987『房谷戸遺跡Ⅰ』他 群埋文	68	中村日焼田遺跡	1993『中村日焼田・中村久保田遺跡』 渋川市教委
20	房谷戸遺跡Ⅲ	1995『房谷戸遺跡Ⅲ』北橋村教委	69	中村久保田遺跡	1993『中村日焼田・中村久保田遺跡』 渋川市教委
21	樽遺跡	杉原莊介1939『樽遺跡調査概報』『考古学』	70	中村遺跡	1986『中村遺跡』 渋川市教委
22	三原田遺跡	1980『三原田遺跡Ⅰ』他 群馬県企業局	71	石原手川遺跡	1988『市内遺跡Ⅰ』 渋川市教委他
23	白井北中道遺跡(道の駅)	2000『白井北中道遺跡(道の駅地点)』群埋文	72	西浦遺跡	1986『西浦遺跡』 渋川市教委
24	白井遺跡群	1994『白井遺跡群』他 群埋文	73	伊勢森南遺跡	1989『市内遺跡Ⅱ』 渋川市教委
25	白井大宮遺跡	1993『白井大宮遺跡』群埋文	74	空沢遺跡	1978『空沢遺跡』 渋川市教委
26	白井大宮Ⅱ遺跡	2002『白井大宮Ⅱ遺跡』群埋文	75	行幸田寺後遺跡	1993『市内遺跡Ⅵ』 渋川市教委
27	白井丸岩遺跡	1994『白井遺跡群』他 群埋文	76	中筋遺跡	1987『中筋遺跡』 渋川市教委他
28	吹屋瓜田遺跡	1997『吹屋瓜田遺跡』群埋文	77	行幸田宮ノ前遺跡	1993『渋川市誌第2巻(通史編)』
29	鯉沢瓜田遺跡	2000『鯉沢瓜田遺跡』子持村教委	78	行幸田畑中遺跡	1992『市内遺跡Ⅴ』他 渋川市教委
30	白井城跡	1987『子持村誌(上巻)』	79	有馬後田東遺跡	1993『市内遺跡Ⅵ』 渋川市教委
31	金比羅山	白井城内。円墳?	80	有馬条里遺跡	1983『有馬条里遺跡』 渋川市教委 1989『有馬条里遺跡Ⅰ、Ⅱ』他 群埋文
32	不動塚古墳	1971『群馬県遺跡台帳』県教委	81	八木原沖田遺跡Ⅲ	1993『八木原沖田遺跡Ⅲ』 渋川市教委
33	白井宿	1987『子持村誌(上巻)』	82	神宮寺西遺跡	1988『神宮寺西遺跡』 渋川市教委
34	金比羅塚	長尾村16号。円墳。	83	行幸田南原遺跡	1994『行幸田南原遺跡』 渋川市教委
35	加藤塚古墳	1987『子持村誌(上巻)』	84	行幸田山遺跡	1987『行幸田山遺跡』 渋川市教委
36	白井城南郭遺跡	1987『子持村誌(上巻)』	85	若宮遺跡	1998『若宮遺跡』 渋川市教委
37	白井南中道遺跡	1993『白井遺跡群』他 群埋文	86	有馬遺跡Ⅱ	1990『有馬遺跡Ⅱ』群埋文
38	白井古墳群	1993『白井大宮遺跡』群埋文	87	有馬久宮間戸遺跡	1997『有馬久宮間戸遺跡』 渋川市教委
39	二位屋城跡	山崎一1972『群馬の古城壘址の研究』	88	有馬小貝戸遺跡	1997『有馬小貝戸遺跡』 渋川市教委
40	白井二位屋遺跡(ターミナル地点)	1994『白井遺跡群』他 群埋文	89	有馬廃寺跡	1988『有馬廃寺跡』 渋川市教委
41	白井二位屋遺跡	1994『白井遺跡群』他 群埋文	90	有馬城ノ上遺跡	1993『渋川市誌第2巻(通史編)』
42	白井尖野遺跡	1994『白井遺跡群』他 群埋文	91	有馬堂山古墳群	1993『渋川市誌第2巻(通史編)』
43	落合Ⅰ号墳		92	小倉庚甲塚遺跡	1992『小倉庚甲塚遺跡』吉岡町教委
44	西ノ平遺跡	1996『西ノ平遺跡』北橋村教委	93	平石遺跡	1988『平石遺跡』吉岡町教委
45	田尻遺跡	1990『八崎の寄居・田尻遺跡』北橋村教委	94	半田剣城遺跡	1989『市内遺跡Ⅱ』 渋川市教委
46	東浦遺跡		95	半田薬師遺跡	1995『半田薬師遺跡』 渋川市教委
47	金井古墳	1956『渋川金井古墳調査概報』『コイノス』	96	半田中原・南原遺跡	1994『半田中原・南原遺跡』 渋川市教委
48	金井下新田遺跡			有馬条里	1983『有馬条里遺跡』 渋川市教委 1993『渋川市誌 第2巻(通史編)』
49	金井前原古墳	1993『渋川市誌第2巻(通史編)』			



第5図 周辺の遺跡 (国土地理院, 1/25,000「金井」、「鯉沢」、「伊香保」、「渋川」使用)

第3章 基本層序

この遺跡は、唐沢泥流堆積物層(IX~XI層)を基盤とする台地上に立地する。唐沢泥流堆積物は、古唐沢川に沿って形成された水沢山の形成期における山体崩壊に伴う泥流堆積物とされ、この泥流層の下位には浅間-板鼻黄色軽石(As-YP)を含む上部ローム層(XII~XV層)が堆積している。しかし、泥流層の層厚が3m以上にも及ぶため、調査面は泥流堆積物層の上面までに留まざるを得なかった。泥流堆積物層の下位にAs-YPが位置することから、その堆積年代は¹⁴C年代で約1.2~1.3万年前と考えられる(第5章2「唐沢泥流堆積物の堆積年代について」参照)。

泥流堆積物層の上位には黒褐色土・黒色土(VII~VIII層)が堆積する。このうち、VIII層についてはいわゆる淡色黒ボク土(VIII a層)が明瞭な箇所とそうでない箇所とが存在し、この層位を中心として縄文時代中・後期の加曽利E式~堀之内式を中心とする遺構・遺物を検出した。また、VII層の黒色土には浅間C軽石(As-C)粒を含み、この層位では古墳時代前期~後期の遺構・遺物を検出した。

As-C粒を含む黒色土の上位には、6世紀初頭の榛名ニツ岳洪川テフラ(Hr-FA、VI層)が層厚約60cmで堆積し、層厚約10cmの黒褐色土を挟んだ上位に、6世紀中頃の榛名ニツ岳伊香保テフラ(Hr-FP、IV層)が層厚約60cmで堆積している。Hr-FA

- I 表土
- II 茶褐色土、多量の小礫を含む
- III 黄褐色土、φ1~10mmのHr-FP粒を含む
- IV Hr-FP 黄白色軽石
 - IV-1 Hr-FP(I-19ユニット) 黄色火山灰
 - IV-2 Hr-FP(I-18ユニット) 黄色軽石
 - IV-3 Hr-FP(I-10~16ユニット) 白色軽石
 - IV-4 Hr-FP(I-7~9ユニット) 白色軽石
 - IV-5 Hr-FP(I-5ユニット) 白色軽石
 - IV-6 Hr-FP(I-1~4ユニットのいずれか) 灰色軽石
- V 砂質黒褐色土 Hr-FP下水田耕作土
- VI Hr-FA
 - VI-1 Hr-FA(S-12ユニット) 黄褐色火山灰
 - VI-2 Hr-FA(S-7ユニット) 灰白色火砕流堆積物
 - VI-3 Hr-FA(S-4~5ユニット) 白色軽石
 - VI-4 Hr-FA(S-2ユニット) 灰白色粘質火山灰
 - VI-5 Hr-FA(S-1ユニット) 淡小豆色粘質火山灰
- VII 黒色土、φ1~3mmのAs-C粒、φ1~5mmの褐色軽石を含む
- VIII a 淡色黒ボク土
- VIII b 黒褐色土
- IX 褐色土、礫含む、泥流堆積物層(唐沢泥流)
- X 粘質黄褐色土、泥流堆積物層(唐沢泥流)
- XI 粘質灰黄褐色土、大量の礫含む、泥流堆積物層(唐沢泥流)
- XII 黄褐色砂質ローム
- XIII 桃色・青色粗粒火山灰、U.G.
- XIV As-YP、黄白色軽石
- XV 黄褐色砂質ローム

とHr-FPは、この遺跡が給源の東方8kmに位置することから厚く堆積し、特にHr-FAについては噴火の初期と後期の降下火山灰、中期の火砕流堆積物など、各ユニットを明瞭に確認した。また、Hr-FPもそのユニットが比較的明瞭で、噴火の最終段階の降下火山灰を確認した。

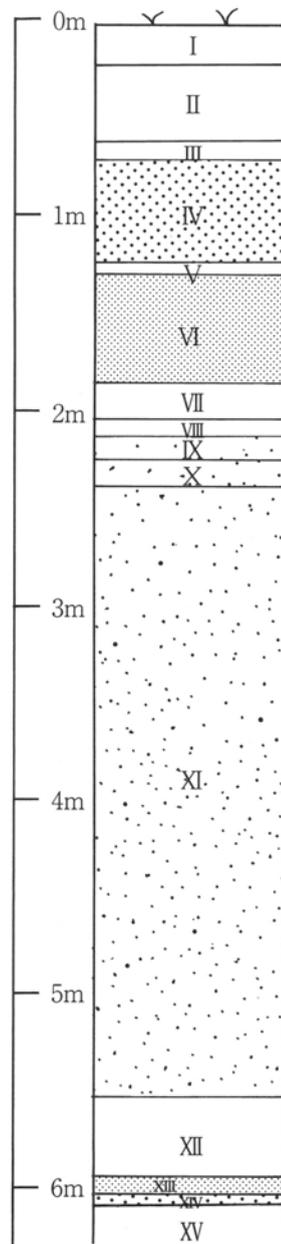
Hr-FAの直下で機能していた遺構は確認していない。Hr-FPの直下では、Hr-FAを耕作土の母材とする極小区画水田を一部で検出し、その上位では奈良時代以降の遺構・遺物を検出した。

この遺跡における基本層序では、1.2~1.3万年前と考えられる唐沢泥流堆積物及び、6世紀代の榛名山の噴火に伴うHr-FA

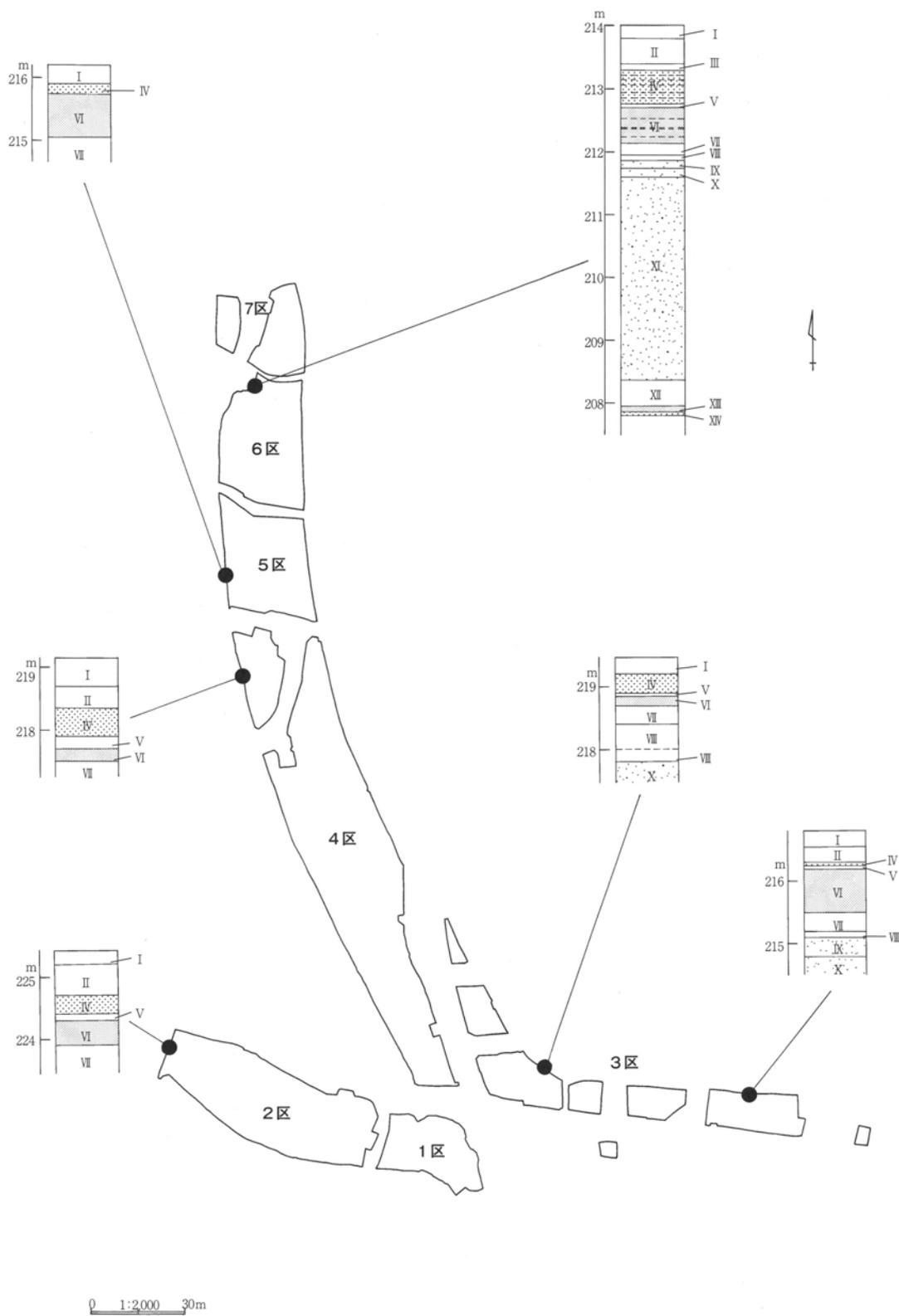
とHr-FPが、遺跡の形成にも関わる特徴的な堆積物であると言えよう(第5章7「居住域から水田域へ、水田域から居住域へ」参照)。

参考文献

萩原 哲 1987 「地形・地質区分」『渋川市誌』第1巻 自然編 pp100-151 渋川市
 Tsumomu SODA 1996 Explosive Activities of Haruna Volcano and Their Impacts on Human Life in the Sixth Century A. D. *GEOGRAPHICAL REPORTS* of Tokyo Metropolitan University Number 31
 早田 勉 1998 「榛名山」『関東・甲信越の火山I』フィールドガイド 日本の火山-1 築地書館
 坂口 一 1993 「火山噴火の年代と季節の推定法」『火山灰考古学』pp151-172 古今書院



第6図 基本層序図



第7図 各区の土層柱状図

第4章 検出された遺構と遺物

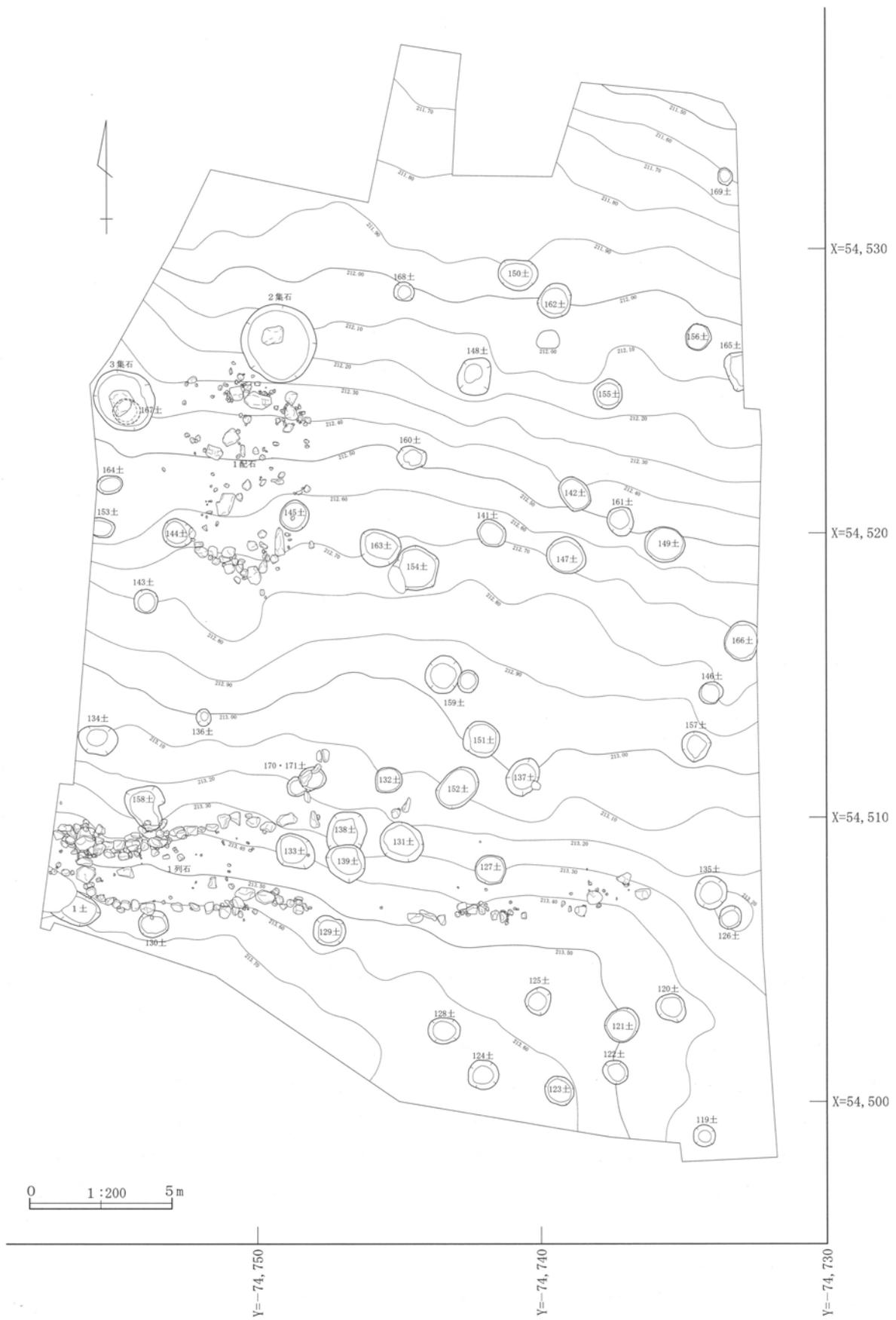
1 縄文時代

6区と7区において住居跡2棟、配石4基、列石1基、集石2基、土坑55基、焼土1基が発見され、それらの遺構内部や周辺から大量の縄文土器や石器が出土した。本来の遺構構築面や遺物包含層は基本土層のⅧ層中であるが、Ⅷ層を掘り抜いて造られている古墳時代住居の埋没土や周堤の盛土内からも非常に多くの土器や石器が出土している。1～5区においても少量の縄文時代の遺物が出土しているが、量的には圧倒的に6・7区が多く、当時の生活の中心はこの区域にあったものと考えられる。

遺構の分布する範囲は南から北に向かって緩やかに落ちる斜面で、南端と北端では約3mの比高差がある。



第8図 縄文時代遺構全体図(6・7区)



第9図 6区 縄文時代遺構全体図



第10図 7区 縄文時代遺構全体図

遺構はさらに北側に延びていたものと思われるが、調査区の北側を流れる金沢川の氾濫によって、7区の中央部以北が削られてしまっている。

縄文時代の遺構はHr-FAを除去した段階で一部が確認されていた。列石や配石などの遺構はFAが降下した時点では未だ埋没過程にあり、FA下面ですでに上位の礫が地表面に露出している状況であった。当時の生活面は基本土層のⅧ層中にあったものと推測されるが、明確な生活面をとらえることは困難であった。そのため、Ⅷ層の上位でFA下で露出していた遺構群を調査し、その後6区ではⅨ層の泥石流堆積物の上面で、7区ではⅧ層の下位で再度遺構の確認と調査を行うこととなった。調査区内には基盤の唐沢泥石流堆積物に含まれる自然礫が多数分布しており、一部は遺構を構成する礫として利用されていた。そのため、遺構の構成礫と自然礫との判別には困難を伴った。

遺構の種類別の分布には偏りが見られた。住居はいずれも7区に位置しており、居住域がさらに北へ延びる可能性がある。配石、列石、集石は7区南部から6区にかけて分布していた。未調査区や古墳時代の住居に

よって削られている区域があるため明確ではないが、点々と散在するのではなく、ある程度まとまって分布する傾向が伺える。土坑は7区の南端部から6区にかけて分布していた。6区の南端部でも土坑の分布密度に変化はなく、5区へ延びる可能性が考えられる。事実5区においても古墳時代住居の埋没土中などから縄文土器が出土しているが、Ⅷ層中や、Ⅸ層の泥流堆積物上面での調査を行っていないので、確認はできなかった。

遺構の時期は、出土した土器の型式から勝坂3式期から堀之内1式に比定される。土坑では、時期が特定できた38基のうち、29基が勝坂3式期から加曾利E4式期に位置付けられ、中期段階の土坑が大多数を占める物と思われる。一方、配石や列石、集石に関しては、加曾利E3式期から堀之内1式期に比定され、やや新しい段階に位置づけられる。事実、6区3号集石の下位から167号土坑が検出されており、この傾向を裏付けている。この他に前期の土坑が1基確認されている(6区129号土坑)。遺構外からも少量の前期の土器が出土しており、当概期における人間の生活の痕跡を捉えることができた。

以下各遺構ごとにその内容を記す。

1) 住居跡

7区から約8m離れて2棟発見された。いずれもより新しい時期の住居によって壊されており、遺存状況は悪い。

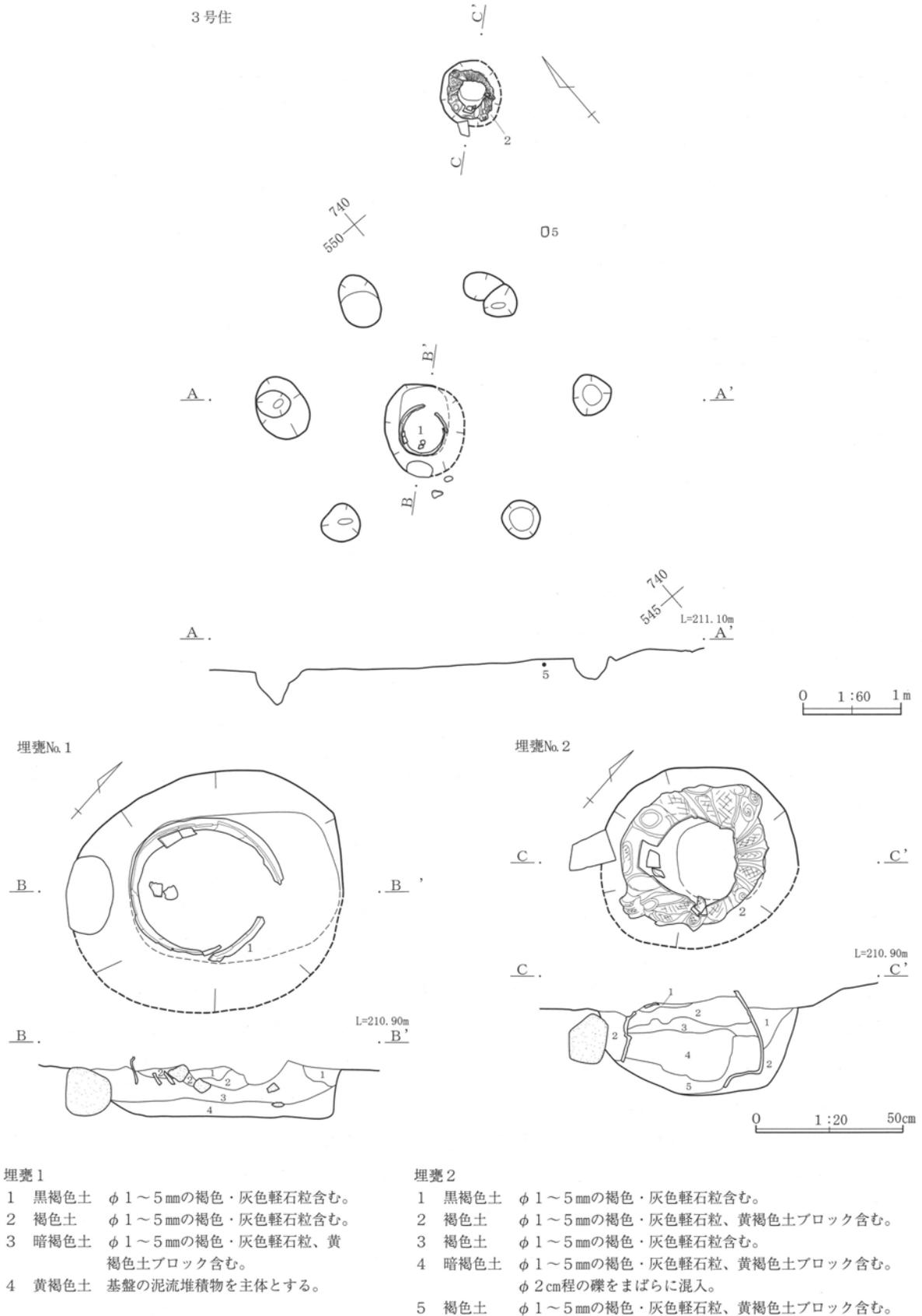
7区3号住居

545-735~740グリッドに位置する。上位に古墳時代の住居が造られており、本住居の埋没土の大半が削平されている。南側に隣接して7区1号配石が造られており、重複する可能性が高いが、前述の古墳時代住居によって配石が壊されているために確認できなかった。ただし、出土土器の時期から推測して、本住居の方がより古いものと考えられる。

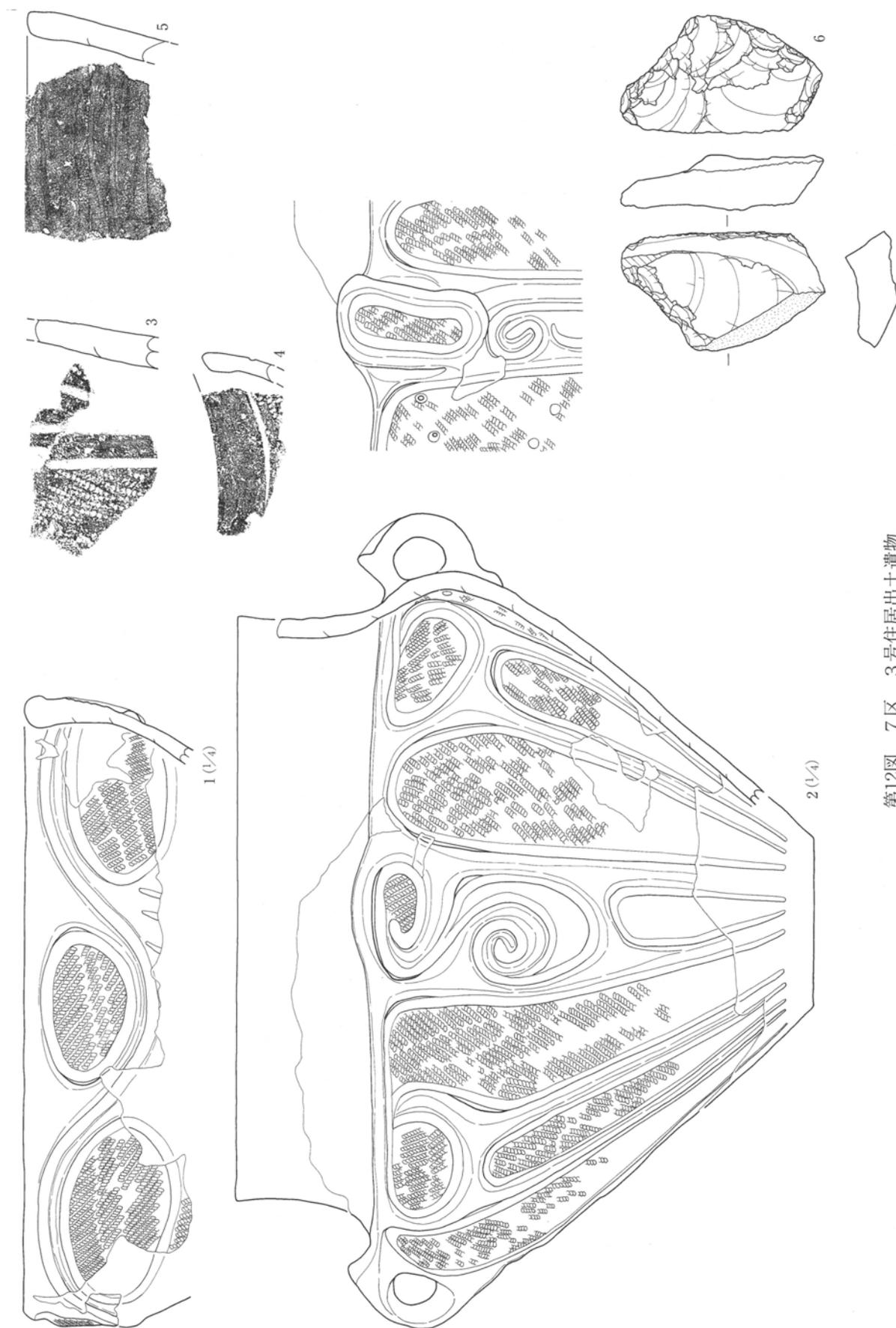
本住居では、約3.5m離れて2基の埋甕が設置されていた。このうち1基(埋甕1)を囲むように、直径30~50cm、深さ20~30cm程度の6基のピットを検出した。ピットは左右対称の位置にほぼ等間隔に並んでおり、長軸3.6m、短軸2.8mの楕円形状を呈する。長軸は2基の埋甕を結ぶ線にほぼ直交し、方位はN-51°-Wである。これらの埋甕やピット以外には、壁の立ち上がりや掘り込み、床の硬化面などは確認できず、住居の範囲についても不明確であった。従って、2基の埋甕が同一の住居に伴うものかどうかは厳密には確認できなかった。

埋甕1は、深鉢の口縁部のみが逆位に置かれていた(1)。下位に掘り込みを持ち、その内部に基盤泥流堆積物を起源とする黄褐色土を人為的に埋填した後、深鉢を設置している。土器の復元時の口径は42.6cm、高さは11.8cmである。掘り込みは上面では楕円形状であるのに対し、底面では隅丸の方形状を呈する。掘り込みの規模は上面で長軸94cm、短軸82cm、深さ15cmを測る。埋甕2は、焼成後に底部に穿孔したいわゆる「両耳壺」を逆位に置いたもので、口縁の直径が41.3cm、最大径57.5cm、高さ40.8cmである(2)。円形の掘り込みを持ち、規模は長軸67cm、短軸61cm、深さ30cmを測る。口縁は掘り込みの底面に接するように設置されていた。どちらの埋甕も二次的な被熱の痕跡は認められず、埋土の中にも焼土や炭化物は混在していなかった。なお、2基の埋甕の南西端部に図示されている礫はいずれも基盤層に含まれる自然礫で、人為的に配置されたものではない。この他に埋没土中から3~5の深鉢破片を含む土器片44点や6のスクレイパーが出土している。

住居の時期は、埋甕の型式から中期後葉の加曾利E3式期に位置付けられる。



第11図 7区 3号住居

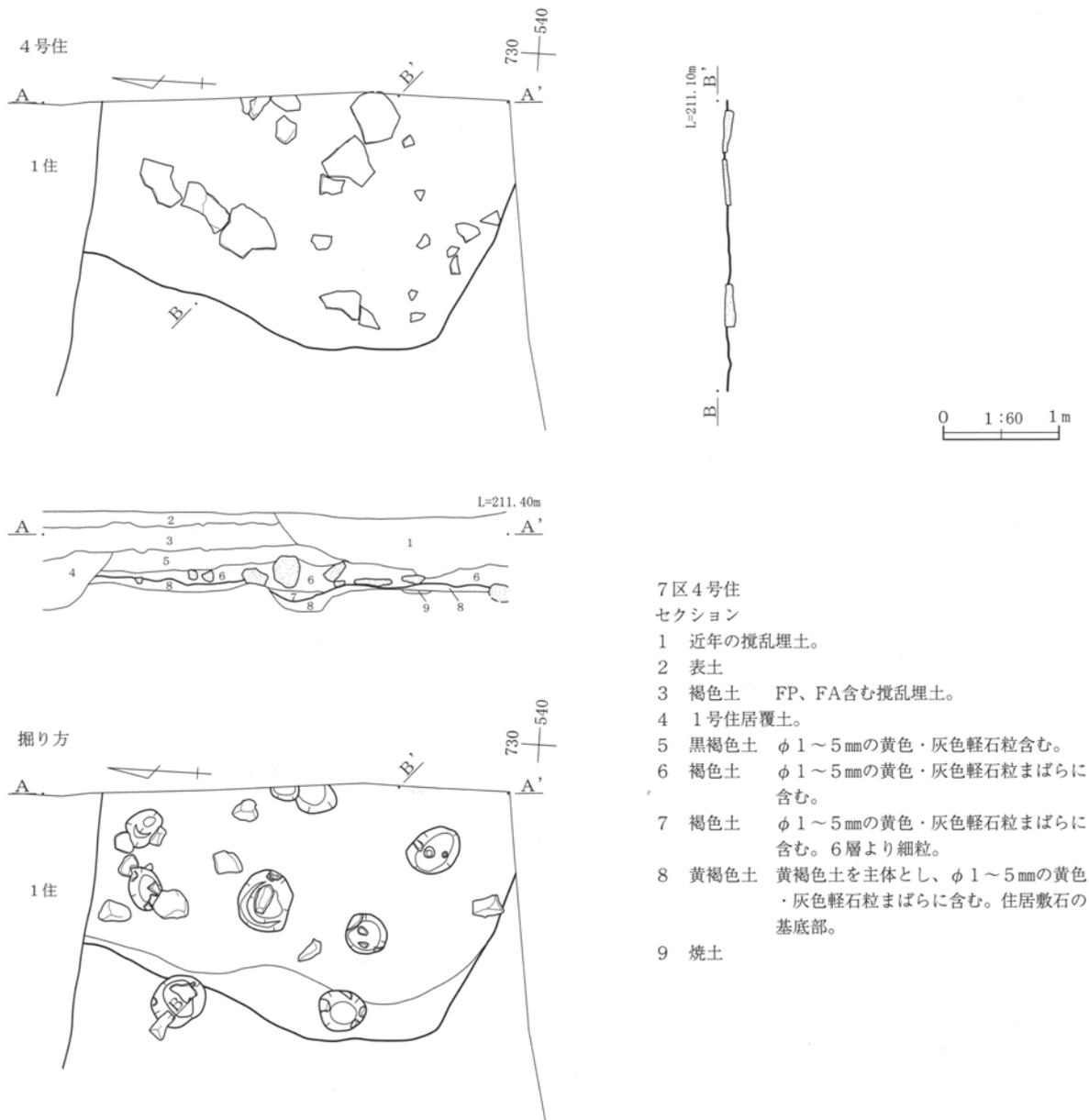


第12図 7区 3号住居出土遺物

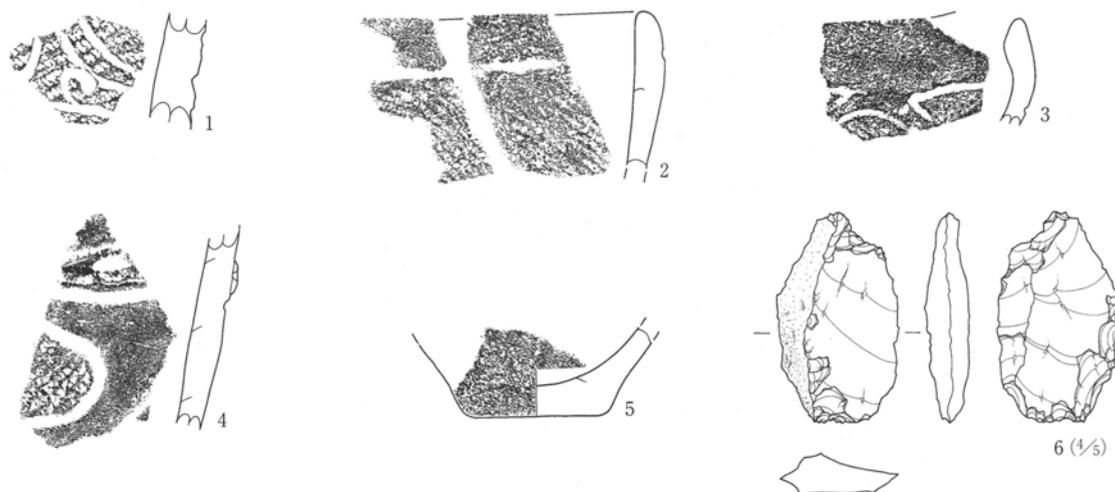
7区4号住居

540-730グリッドに位置する。7区2号配石の構成礫が本住居の敷石の上位に位置していることから、同配石より古い時期のものであることがわかる。

敷石住居であるが石の残存状況は悪く、一部が残っていたのみである。敷石として利用されていたのは長径20~50cm、厚さ5~10cm程度の板状の角礫で、石材は粗粒輝石安山岩である。全て基盤の泥流堆積物に含まれる礫で、板状に割れた平坦な礫を選んで利用していた。壁の立ち上がりや掘り込みなどは確認できず、図の住居範囲は掘り方の状況から推定したものである。住居域のかなりの部分が古墳時代の住居に破壊されていたり調査区域外にあることから、住居の正確な規模や形状は不明であるが、確認できた南西隅の状況から、方形である可能性が考えられる。本住居は全体にごく浅い掘り方が掘られ、基盤の泥流堆積物を主体と



第13図 7区 4号住居



第14図 7区 4号住居出土遺物

する粘質黄褐色土を埋めて敷石の基底部としていた。掘り方の段階で、直径30～50cm、深さ15～30cm程のピットを8基検出したが、柱穴と確定できたものはなかった。また、東側の調査区境に焼土がわずかに分布しており、隣接地に炉がある可能性が高い。

掘り方内からは1～5の深鉢破片の他、土器片55点や楔形石器(6)と剥片各1点などの遺物が出土しており、図化した遺物は全て掘り方内のものである。出土土器の型式から、加曾利E4式～称名寺I式期に位置付けられよう。

2) 配石

ここでは、散在的な配石(6区1号)や配石墓群とその上部配石(7区1号)についても一括して扱っており、6区で1基、7区で3基見つかっている。集石や列石と同様、Hr-FAを除去した段階で大形の礫は一部確認できたが、出土遺物や遺構の形状などから縄文時代の遺構と判断した。使用されている礫は、一部に遺跡外から搬入された河床円礫を含むが、大半が基盤の唐沢泥流堆積物層中に多量に混在する角礫や亜角礫であるため、遺構を構成する礫と自然礫との判別には困難を伴った。

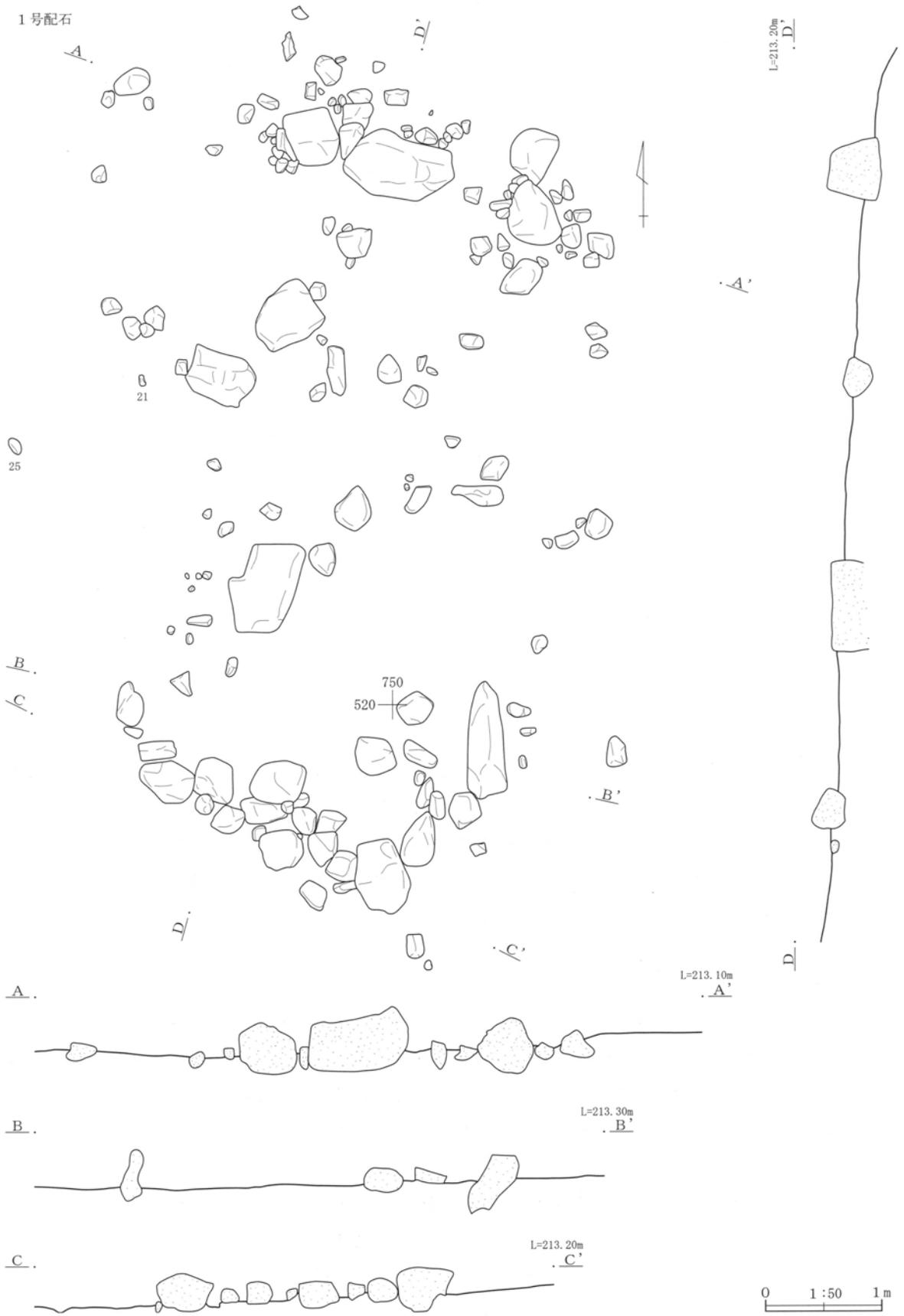
以下、各遺構ごとに記す。

6区1号配石

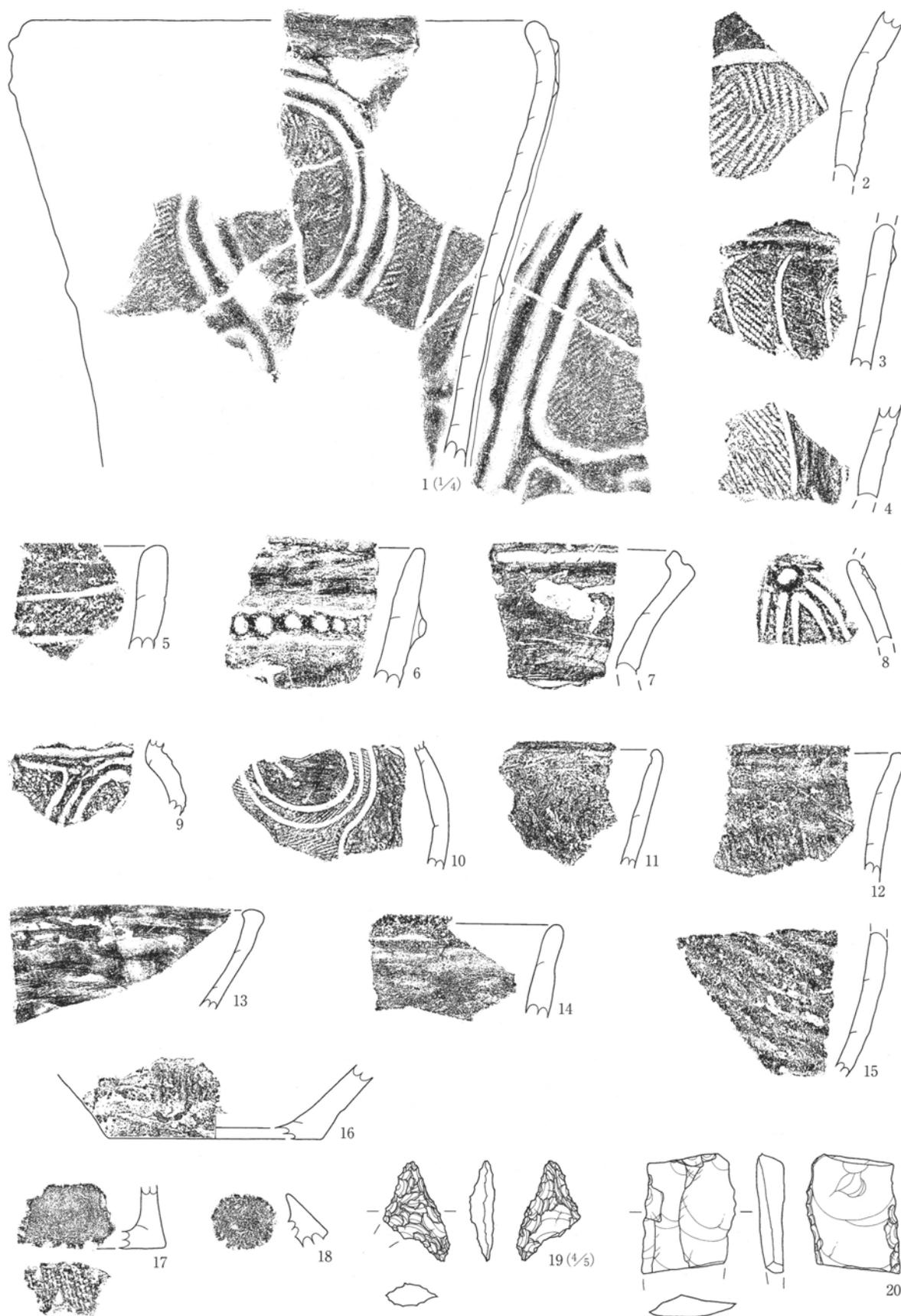
515～525-745～750グリッドにかけて、長径10～100cmの大小の礫が数十個散在する不定形状の配石である。その南北の両端には対弧状にやや密集した配置が認められ、それによって圍繞された範囲を1単位と見なせば、長軸7m、短軸4mの楕円形状の配石となる。ただし、両端共に乱積状の配石であり、一体的なものではない可能性もある。また、その内側部分では極めてまばらな配置状況となっており、規則的な配置は認められない。

用材は、すべて基盤層内の角礫で構成されている。各配石の下部には土坑などの掘り込みは存在せず、用材の内部や周辺から土器片268点や石器55点などの多量の遺物が出土している。土器は中期後葉のものも混在するが、後期初頭から前葉にかけてのものが主体となる(1～18)。石器は石鏃1点(19)、スクレイパー1点(20)、打製石斧7点(21～24)、石棒破片1点(25)の他、剥片類45点などが出土している。構築時期については、列石と同様に出土土器から加曾利E3式～堀之内I式期の範疇と想定される。

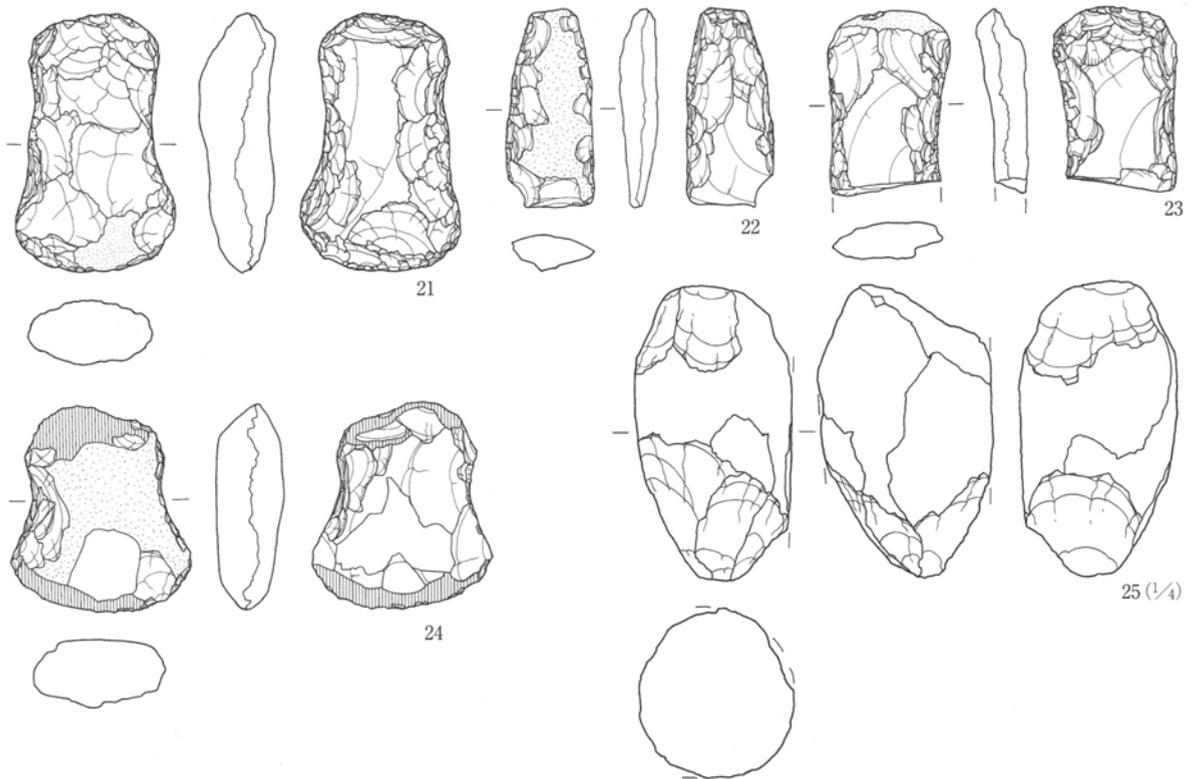
第4章 検出された遺構と遺物



第15図 6区 1号配石



第16図 6区 1号配石出土遺物(1)

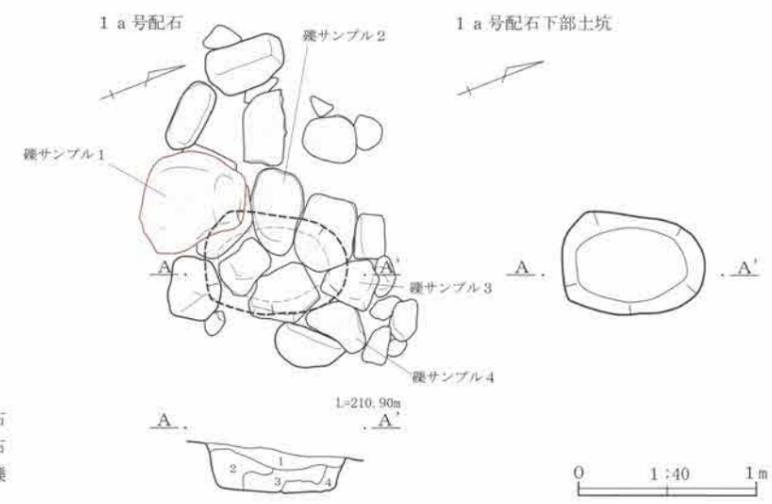
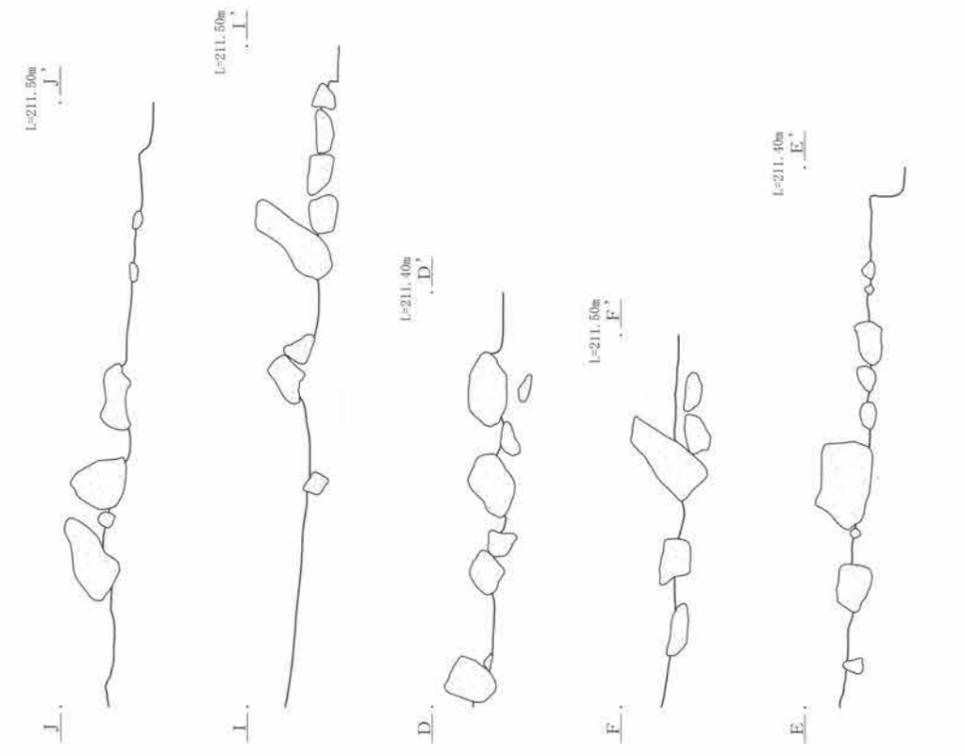
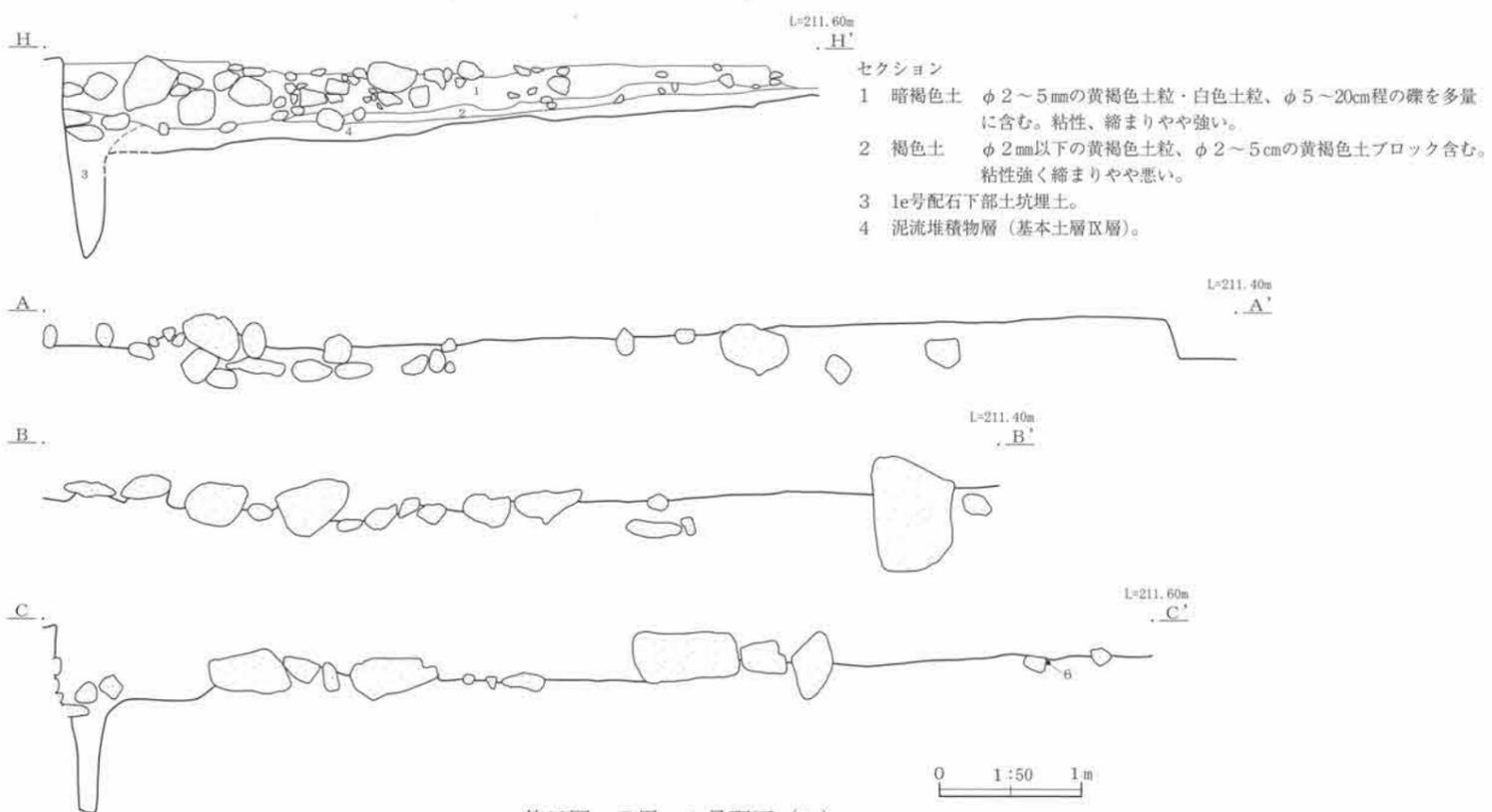
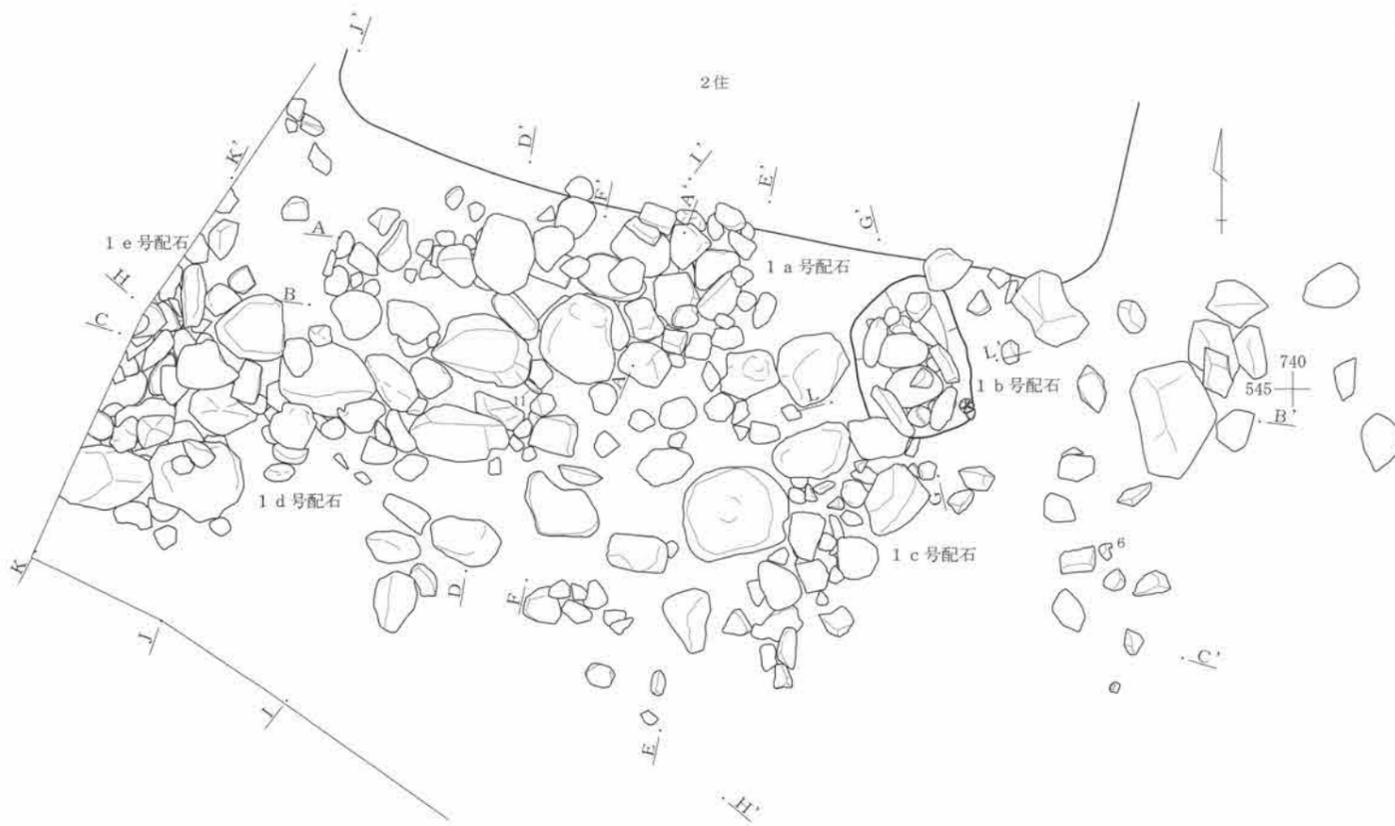


第17図 6区 1号配石出土遺物(2)

7区1号配石

540～545-740～745グリッドに位置する。北側に隣接する古墳時代の住居によって一部破壊されている。確認した段階では、すべて一連の遺構として把握していたが(第18図)、上位に散在する礫をはずしていくと5つの配石により構成されることが判明したため(第18～20図)、それぞれ枝番号にアルファベットをつけて、1a～1e号配石と呼称した。各配石は、用材を方形あるいは楕円形状に定形配置してその下部に土坑状の掘り込みをもつ配石墓と想定されるもの(1a・1b・1e号)、定形的な配置ながらも下部に土坑をもたないもの(1c号)、不定形かつ土坑を伴わないもの(1d号)などがあり、その様態から3つのグループに分けることができる。これらの各配石が同時に併存したか否かは断定し難いが、相互に隣接・密集する状況から見て、1a・1b・1e号などの配石墓を主体にしてそれに付属する配石遺構群である可能性が高い。当配石の全域から土器片96点や打製石斧2点(8・9)、凹石2点(10・11)、剥片類11点などが出土しているが、確実な伴出関係が把握できるのは下部土坑内より堀之内1式の土器破片を出土した1e号のみである。これを重視すれば、当配石群の構築時期は堀之内1式期に比定される可能性が高い。

1a号配石 7区北端の中央に位置し、北側の一部を古墳時代の住居によって壊されている。長径30～45cm、短径20～35cm、厚さ15～25cmの扁平な礫10点を平らに敷き詰め、横口面を天地方向に立て置きした同様の礫4点をその周囲に配置してある。北側が削平されているので正確な規模・形状ともに不明であるが、本来は南北に長軸をもつ方形状と思われる。残存部分で東西長167cm、南北長160cmを測る。南側には長径が60cmを超えるとりわけ大型の礫が配置されている。確認された時点では斜めに倒れていたが、本来は立石として立てられていたものだろう。配石を構成する礫は、基盤の唐沢泥流に多量に含まれる角礫に加え、遺跡外から搬入された河床円礫が高い頻度で利用されている。大型の立石をはじめ、主要な礫の半数以上が円礫であり、



1a配石下部土坑

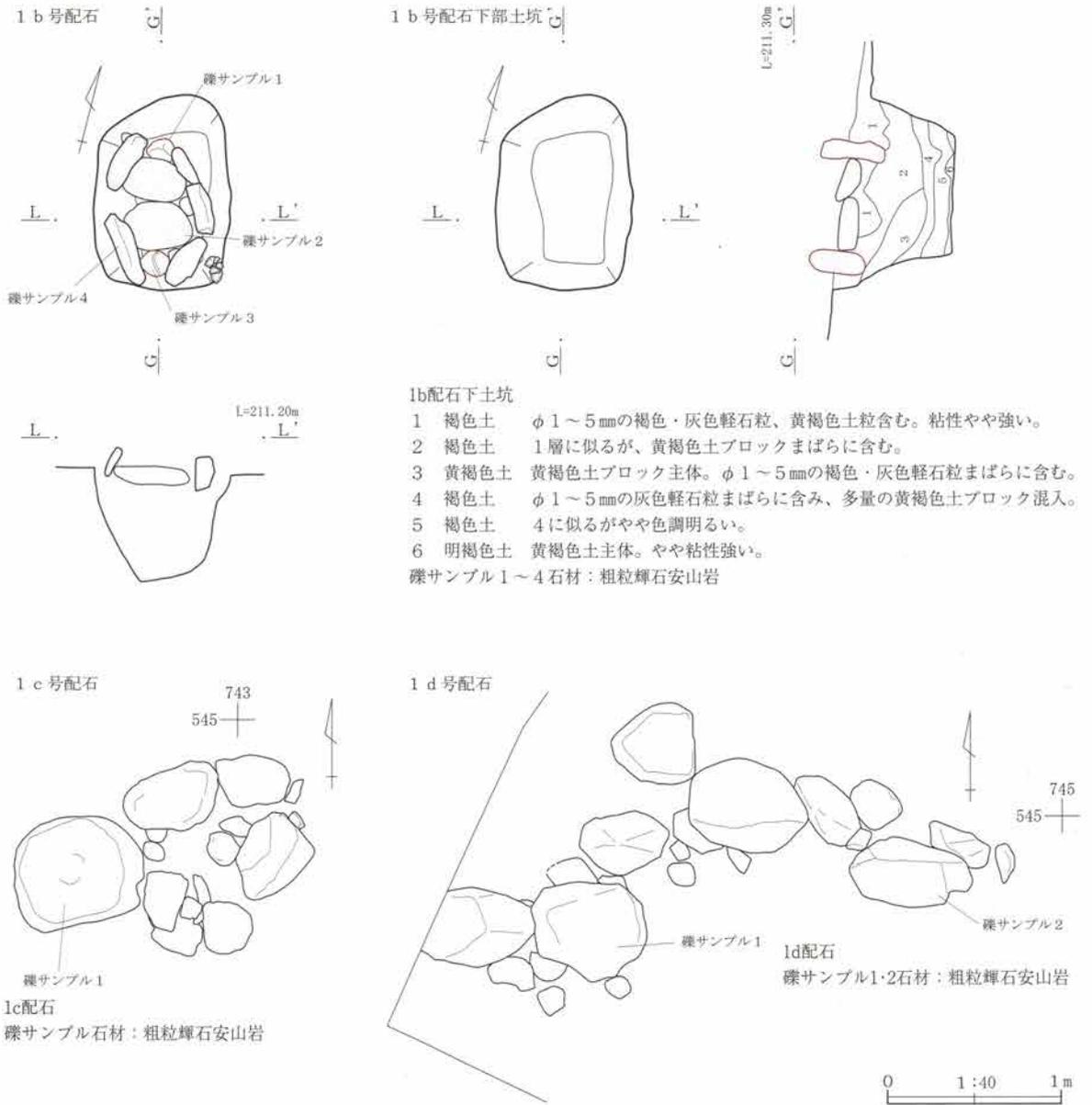
- 1 褐色土 φ1~5mmの褐色・灰色軽石粒、黄褐色土粒含む。
- 2 褐色土 1層に似るが、色調やや明るい。
- 3 褐色土 1層に似るが、より締まり悪い。
- 4 褐色土 φ1~5mmの褐色・灰色軽石粒、黄褐色土粒含む。

礫サンプル1~4石材：粗粒輝石安山岩

第18図 7区 1号配石(1)

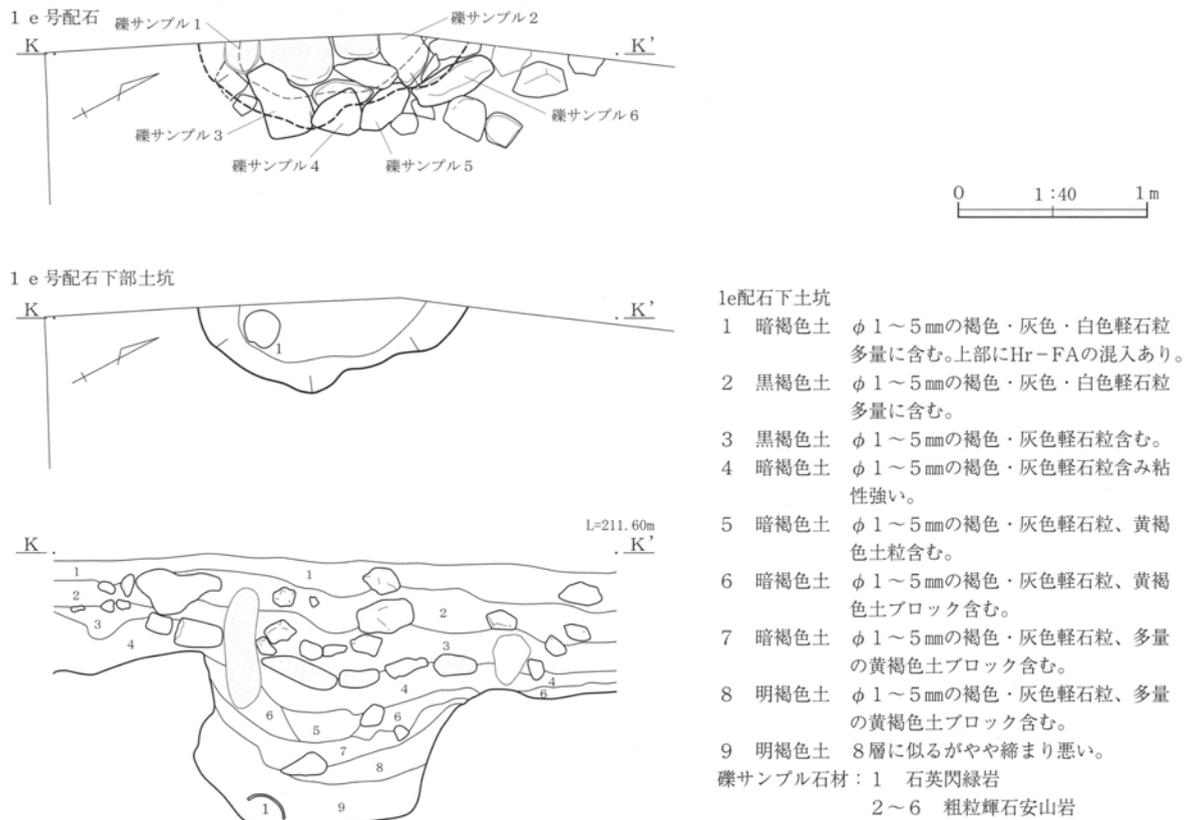
意図的に石材の選択がなされている。配石の下部には、東辺に沿うような形で土坑が存在していた。形状は楕円形で、長軸80cm、短軸57cm、深さ26cmである。土坑内の埋土は基盤の泥流を主体としており、人為的に埋填された可能性が高い。配石本体の主軸方位は、立石の位置や東辺の方向、下部の土坑の主軸から推測して、N-36°-Eと判断した。土坑内からは剥片が1点出土している。

1b号配石 1a号配石の東側1mに位置し、1c号配石に隣接している。配石の形状は楕円形で、長軸90cm、短軸60cmを測る。内部に長径35~40cm、短径25~30cm、厚さ10cm程の扁平な円礫2個を平らに置き、横口面を天地方向に立て置きした5個の礫でその周囲を圍繞する。この縁石状の礫は扁平な形状であるが、北側の2点が円礫であるのに対し、その他は基盤に含まれる板状の角礫や垂角礫である。また、長軸方向の南端には長径33cm、短径16cmの棒状の河床礫が、北端には長径36cm、短径15cmの棒状の垂角礫が立石状に組み込まれている。ここでも、主要な礫9点のうち5点が円礫であり、1a号配石と同様の石材選択がなされている。この下部には隅丸方形の土坑が存在し、長軸112cm、短軸80cm、深さ65cmを測る。埋土は基盤泥流のブロックを



第19図 7区 1号配石 (2)

第4章 検出された遺構と遺物



第20図 7区 1号配石 (3)

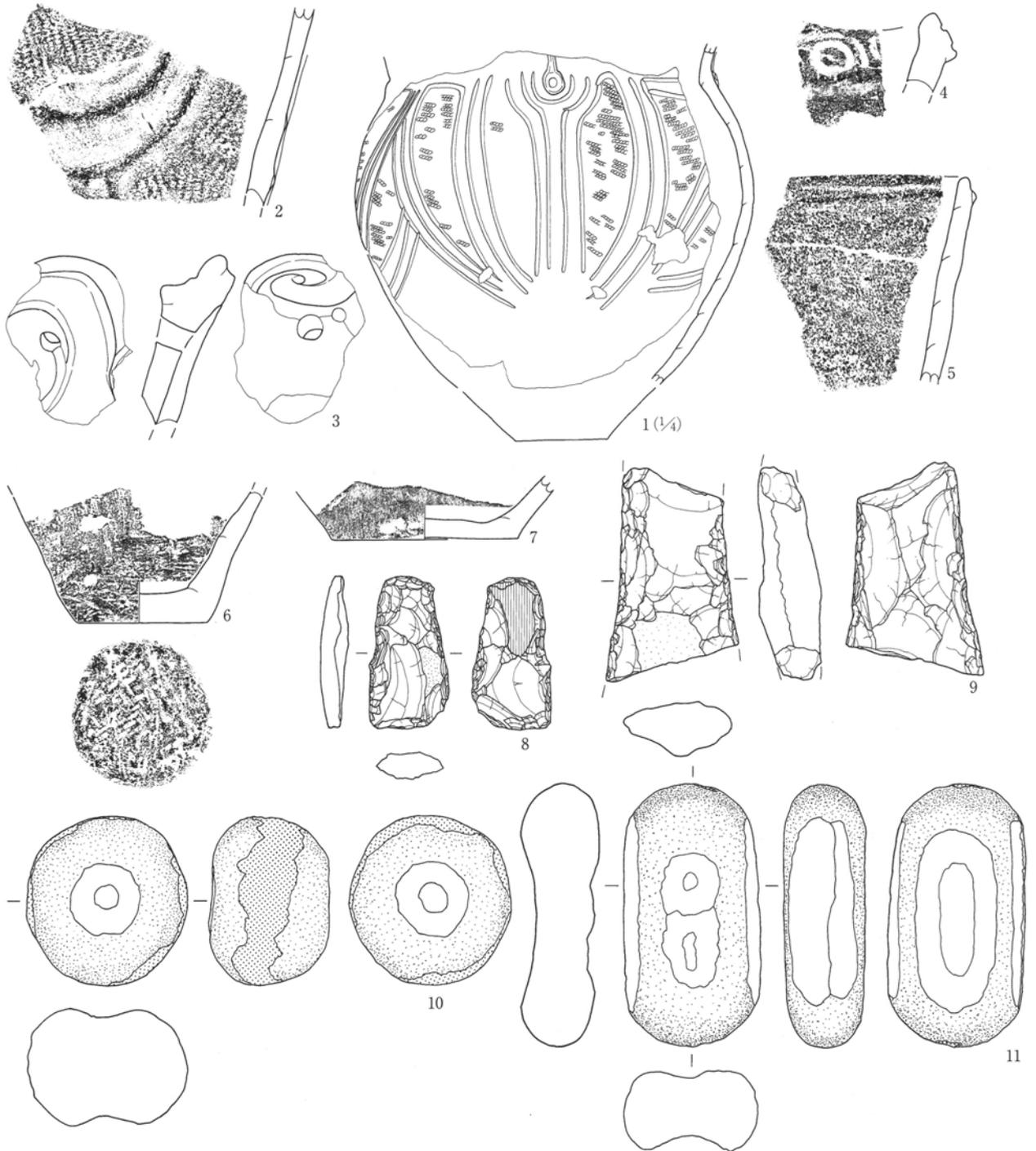
多量に含み、人為的に埋められた可能性が高い。南北の立石を結んだ線を主軸とすると、方位はN-11°-Wである。土坑内からは遺物の出土はなかった。

1c号配石 1b号配石の南に隣接している。長径76cm、短径62cm、厚さ45cmの大型礫の東側に、長径30~55cm、短径25~40cm、厚さ20~40cmの礫5点が環状に並ぶ。全体の形状は楕円形で、長軸170cm、短軸115cmを測る。北東隅の礫は隣接する1b号配石の南西隅の縁石と接しており、この縁石は礫に押されて内側に傾いたような形で検出されている。用材はすべて基盤層の不定形かつ厚みのある塊状角礫であり、1a・1b号配石のように扁平な河床礫の使用をはじめ、敷石・縁石状の配置は認められなかった。また、下部に土坑は存在せず、礫を設置するための掘り方なども確認できなかった。こうした点は、当配石が1a・1b号とはその機能・性格を異にする可能性を示す。主軸方位はN-78°-Eであり、隣接する1b号配石の主軸とはほぼ直交する関係にある。配石の内部や周辺から土器片150点が出土している。

1d号配石 1a号配石の南西側にあり、1e号配石に隣接する。配石と認定したが、実際はやや乱雑な列石遺構とするのがより妥当と思われる。西端側が調査区外に延びていると考えられ、全体の形状・規模は不明であるが、検出部分での全長は3.5mを測る。下部に土坑などの遺構はなく、掘り方も確認できなかった。長径45~70cm、短径25~60cm、厚さ15~30cm程度の角礫を東西方向を基軸としてクランク状に配列している。クランク状となる部分の走向は、1e号配石の主軸にほぼ合致させるかのように、南北方向に屈折する。用材はすべて基盤層の不定形な角礫で構成され、大きさや形状に統一性はなく、河床の円礫を含まない点で1c号とも共通している。遺物は、特に本配石に伴うものは特定できなかった。

1e号配石 調査区西端で発見された。過半部が調査区外に延び、東側の1/3強を確認しえたのみであるが、南北方向に長軸をもつ楕円形状の配石と想定される。1a・1b号配石と同様、内側に長径25~40cm、短径15

～30cm、厚さ10cm前後の扁平な河床円礫を平らに敷き、その東側周縁に長径30～45cm、短径20～40cm、厚さ15～25cmの角礫4点を縁石として配置する。また、対向する南北両端には、長径65cmの棒状円礫や長径28cmの角礫が立石状に配置される。配石下部には長径135cm、深さ95cmの土坑が存在し、底面から深鉢形土器の胴部大形破片が出土した(第21図1)。埋没土は基盤の泥流ブロックを多量に含んでおり、人為的に埋填されたものと考えられる。主軸の方位は、南北両端の立石を連結した軸線ではN-30°-Eとなるが、東辺の縁石や下部土坑の軸線を考慮した場合はN-17°-Eとなる。遺物は、下部土坑内の土器片の他に69点の土器片が出土した。構築時期については、下部土坑内の出土土器から堀之内1式期と考えられる。



第21図 7区 1号配石出土遺物

7区2号配石

南東隅の540-730グリッドに位置する。東側の調査区外に延びているため、正確な規模・形状は不明であるが、細長い長方形の配石と想定される。検出部分では、長径5~35cmの不定形な角礫約50点を用いて、長軸200cm、短軸90cmの範囲に不規則に配置している。当配石の下位には4号住居が重複していることもあり、下部土坑や掘り方等は確認できなかったが、両者の間には若干の間層が認められた。主軸方位は、N-44°-Wを測る。周囲や礫の間から土器片361点、打製石斧1点(10)、剥片類23点が出土しているが、下位に重複する4号住居の伴出遺物との分離は困難である。構築時期については、出土土器が称名寺I式~堀之内I式を主体とすることや、加曾利E4式~称名寺I式期の4号住居より新しいことを勘案すれば、称名寺I式期を遡らないと推定される。

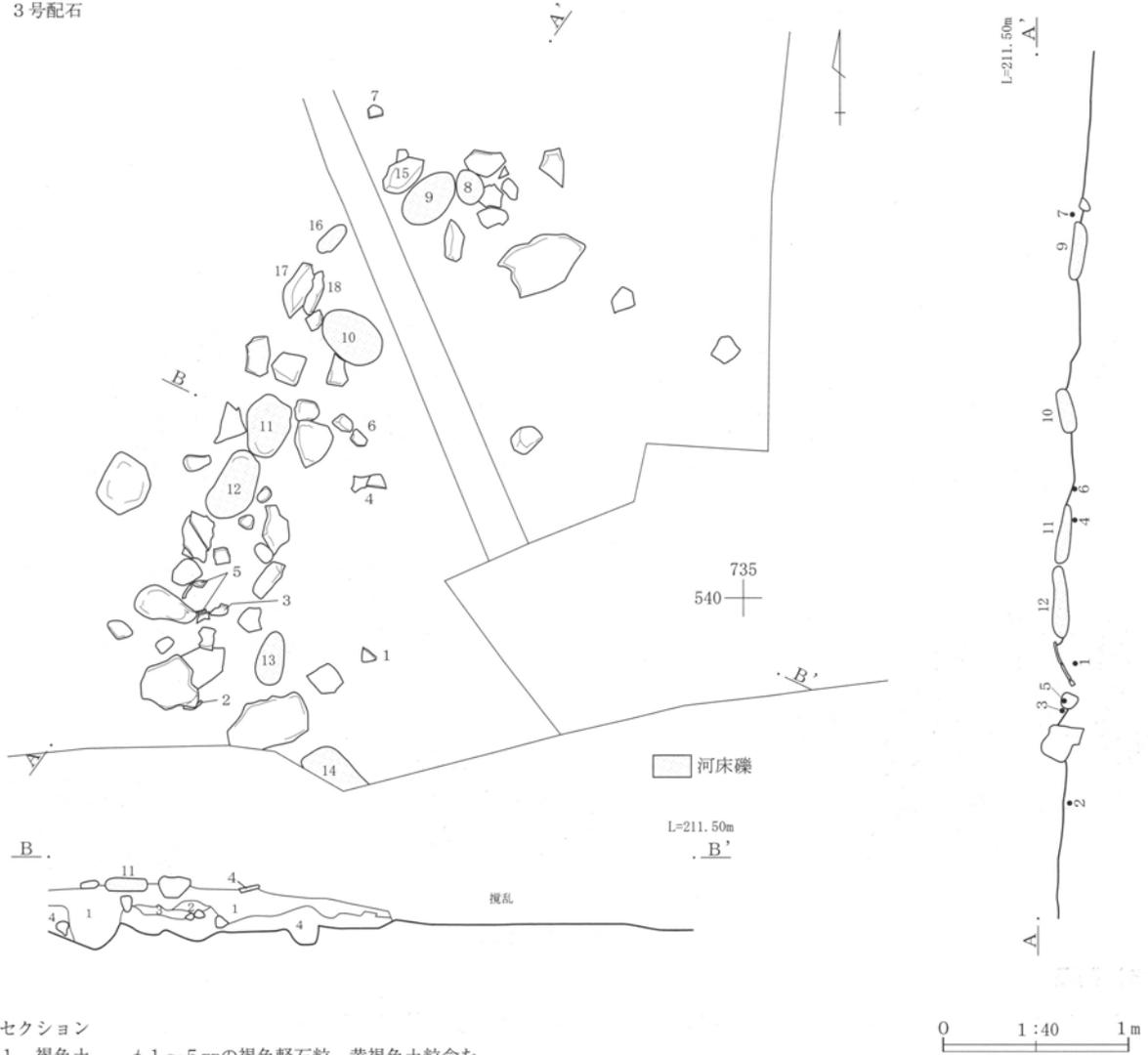


第22図 7区 2号配石

7区3号配石

1号配石と2号配石に挟まれた、540-735グリッドに位置する。南側が調査区外に延びることや、東側も攪乱によって削平されているため、全体の形状や規模は不明である。残存部分では、幅約1m、長さ約4mの範囲に大小約50点の礫が緩く弧状に分布している。用材の中で11点が河床円礫であるが、特に第23図8~14は長径18~40cm、厚さ10cm前後の扁平礫を平坦に配置している。また、北西側の15~18は板状の礫で、立位あるいは斜位に倒れかけたような状態で発見され、弧状に並ぶ礫の周縁に縁石のように立てられていた可能性もある。礫の下部には長径40~80cm、深さ10~40cmの小ピットが存在しており、配石との重複状況からその構築に伴う掘り方および柱穴と想定される。こうした扁平礫の配置状況や小ピットの重複状況から見て、当配石は敷石住居であった可能性が高いが、後世の攪乱もあり断定できる状況にはない。礫の間や周辺から土器片33点と石器剥片3点が出土している。土器は加曽利E3式~堀之内1式が存在するが、加曽利E4式を主体としていることから、当該期に比定される可能性が高い。

3号配石

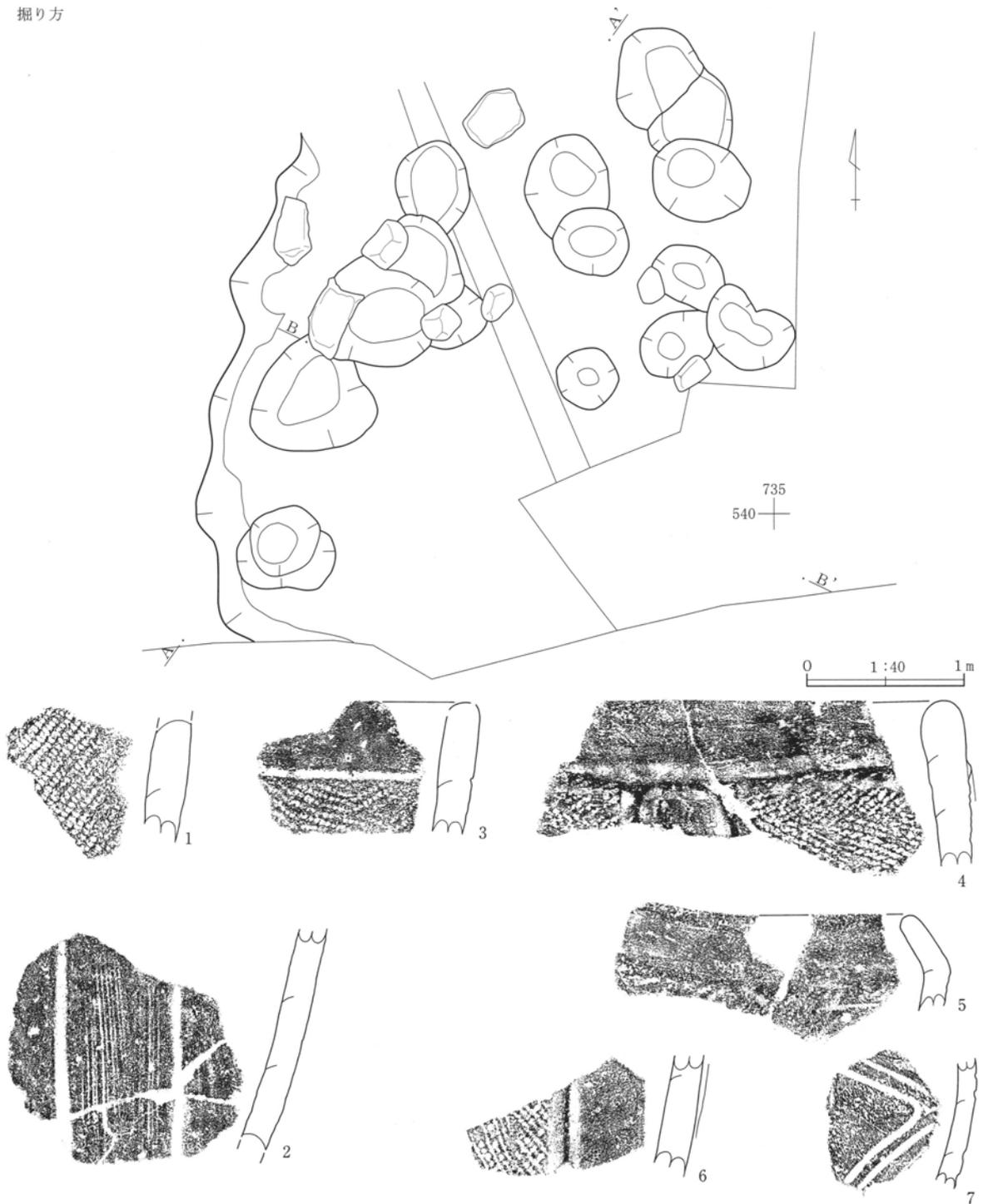


セクション

- 1 褐色土 φ 1~5mmの褐色軽石粒、黄褐色土粒含む。
- 2 明褐色土 φ 1~5mmの褐色軽石粒、黄褐色土粒含む。
- 3 褐色土 φ 1~5mmの褐色軽石粒、黄褐色土粒含む。
- 4 黄褐色土 φ 1~5mmの褐色軽石粒、黄褐色土粒含む。

第23図 7区 3号配石 (1)

掘り方



第24図 7区 3号配石 (2)

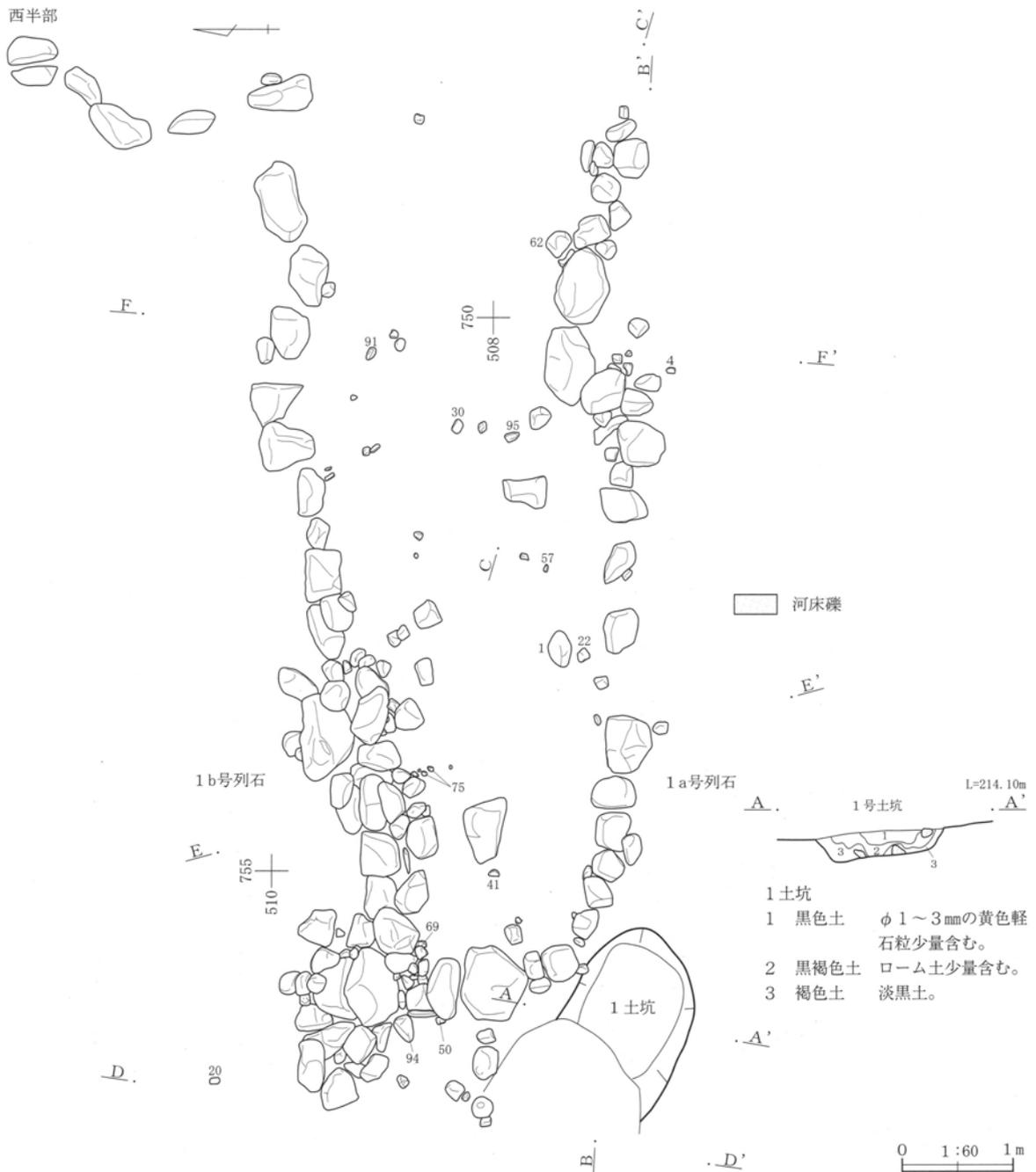
3) 列石

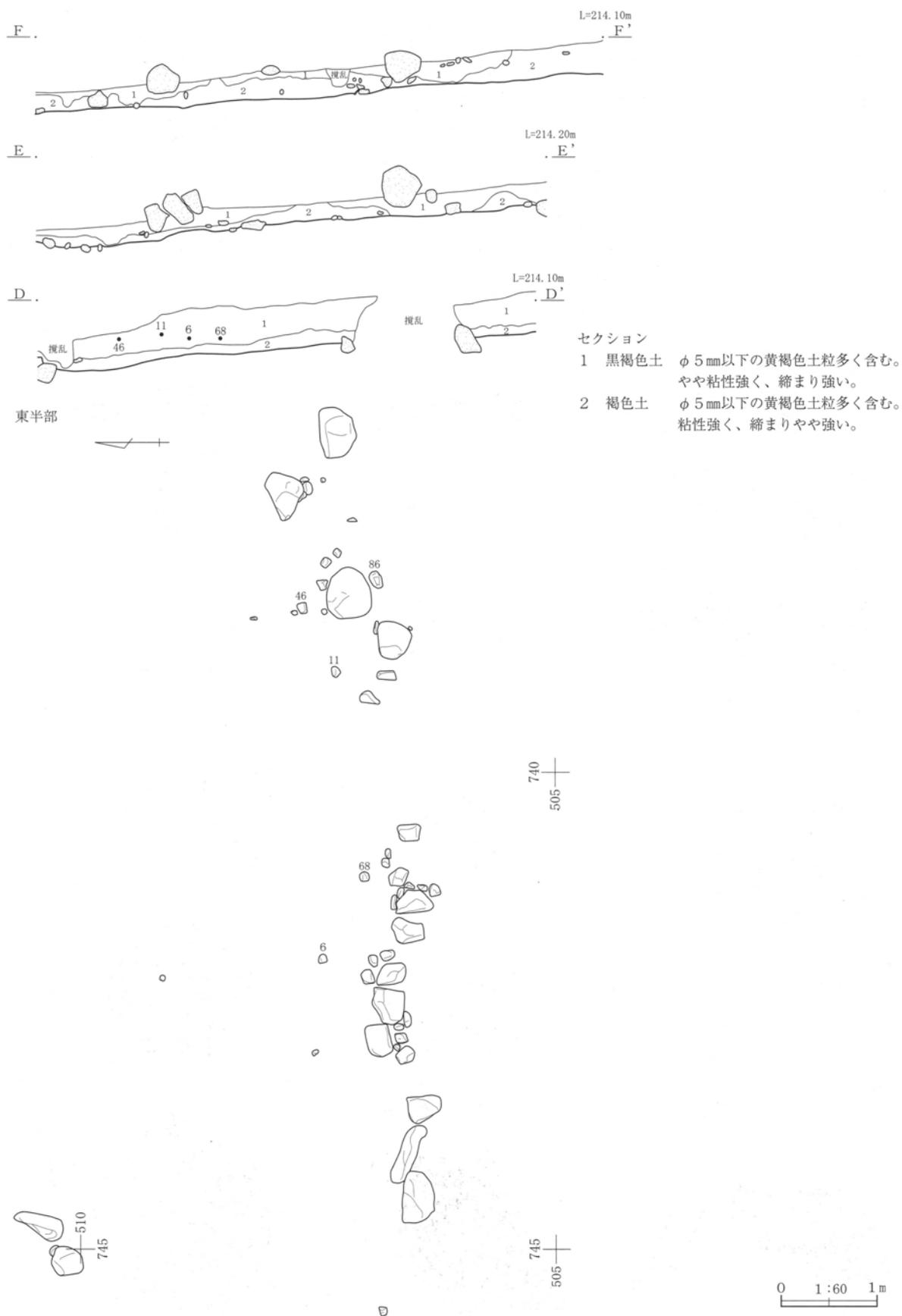
6区で2基見つかっている(6区1a・1b号列石)。Hr-FAを除去した段階で列石の上部が確認されているが、形状や出土遺物から縄文時代の遺構と判断した。505-735~755グリッドに位置する。1a・1b号ともに緩斜面地の等高線に沿って直線的に東西方向に延び、両者の間隔も2~2.5mとほぼ並行している。その規模や形態に関しては、西側の未調査区域へも延びることや、古墳時代の住居等の攪乱・破壊により東半部の残りが悪いために確定できないが、両者は緩い弧状あるいは直線状の列石で重層的な配置関係を持つ可能性が

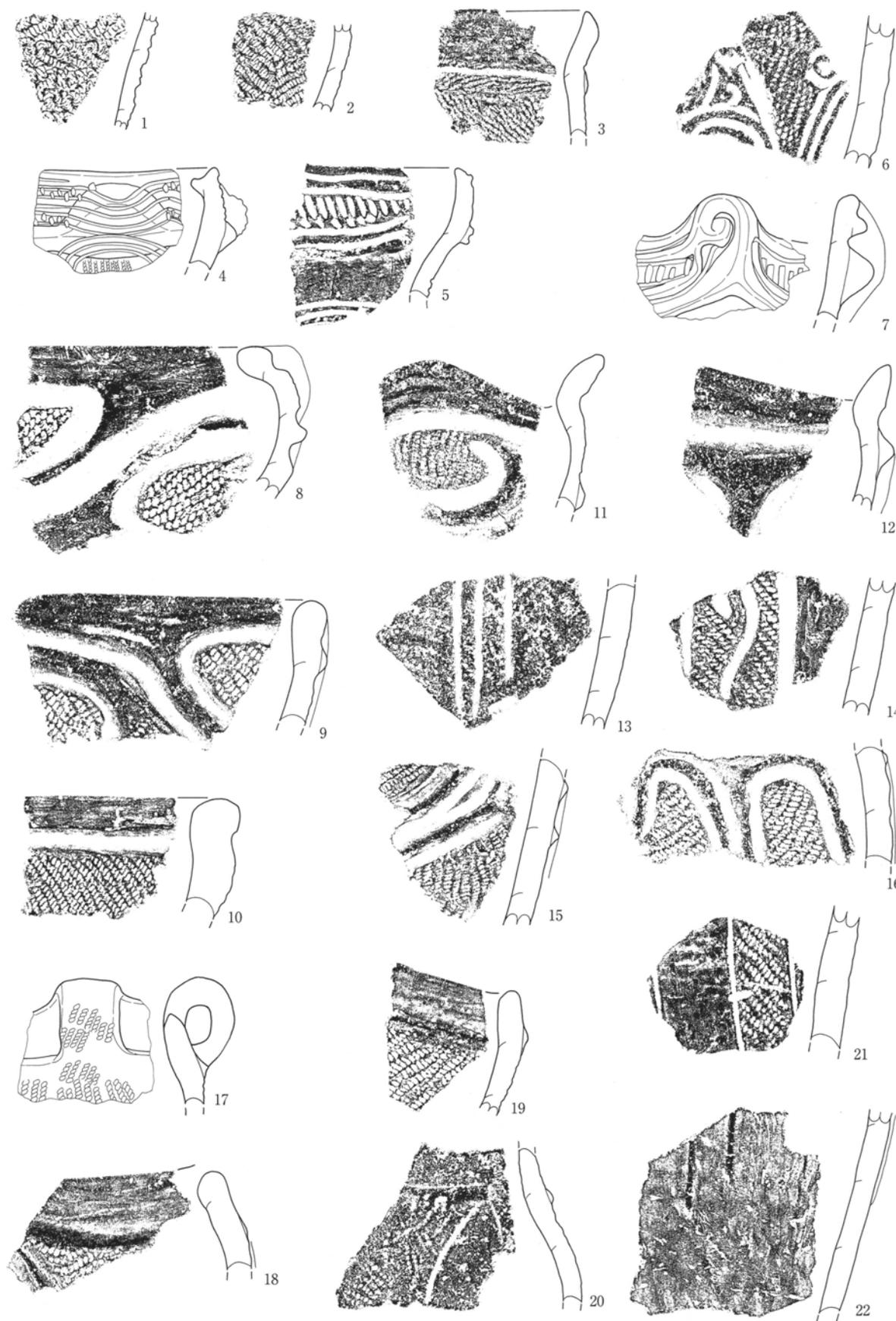


第25図 6区 1a・1b号列石 (1)

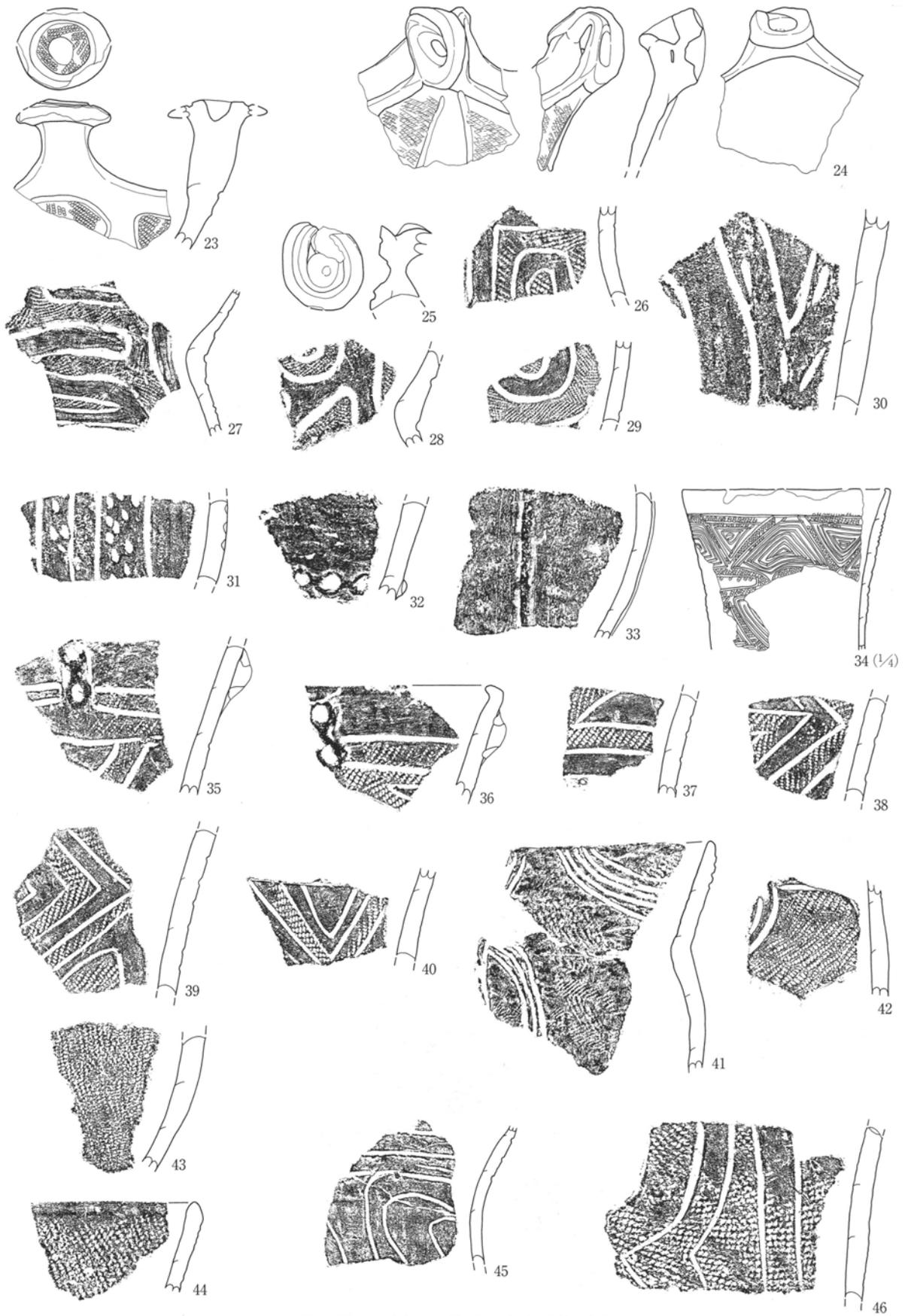
高い。換言すれば、1a・1b号の両者が相関性をもって構築されたと考えられる。残存している部分では、上段に位置する1a号が総延長21m、下段の1b号が9mを測る。西端部では、両列石を連結するように長径30～60cmの比較的大振りな礫が配置されている。両列石ともに中央部付近で配石の途切れる空間域が存在するが、当初から配置されなかったのか判然としない。また、1b号ではこの空間域付近から北方に2mほど枝状に延びる小配石が認められる。石材の礫は、ほとんどが長径20～80cm大の基盤の角礫を用いており、1a号で1点の河床礫が存在したのみである。石材の配列方法は、残存良好な箇所では礫の長軸方向を相互に接続配置した状況が看取される。列石の下部に土坑などの遺構は確認できなかったが、西端部に隣接する130・158号土坑をはじめ、列石の周辺部には20基余りの土坑が存在する。これらの土坑は、直径1～1.5m、深さ30～80cm



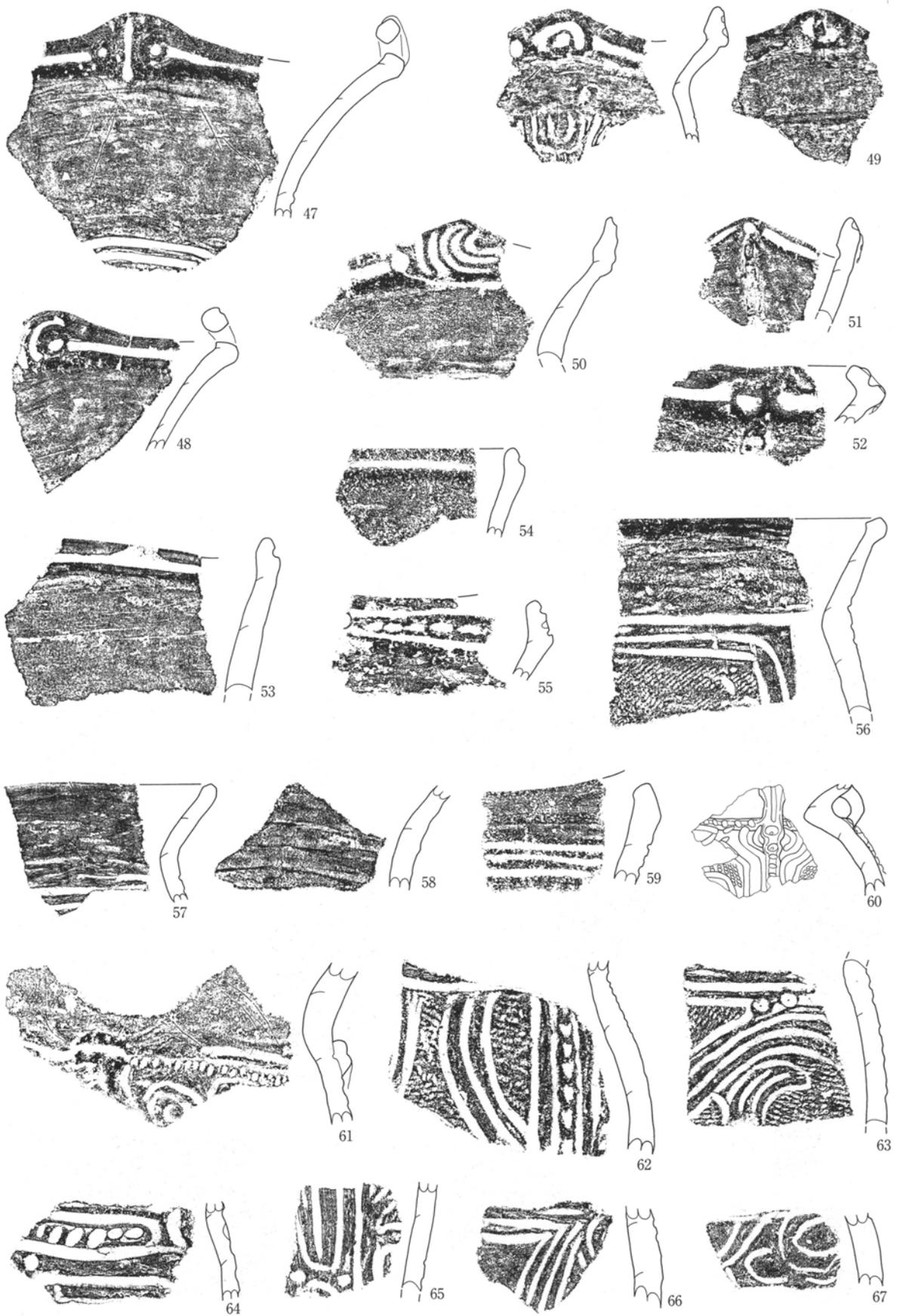




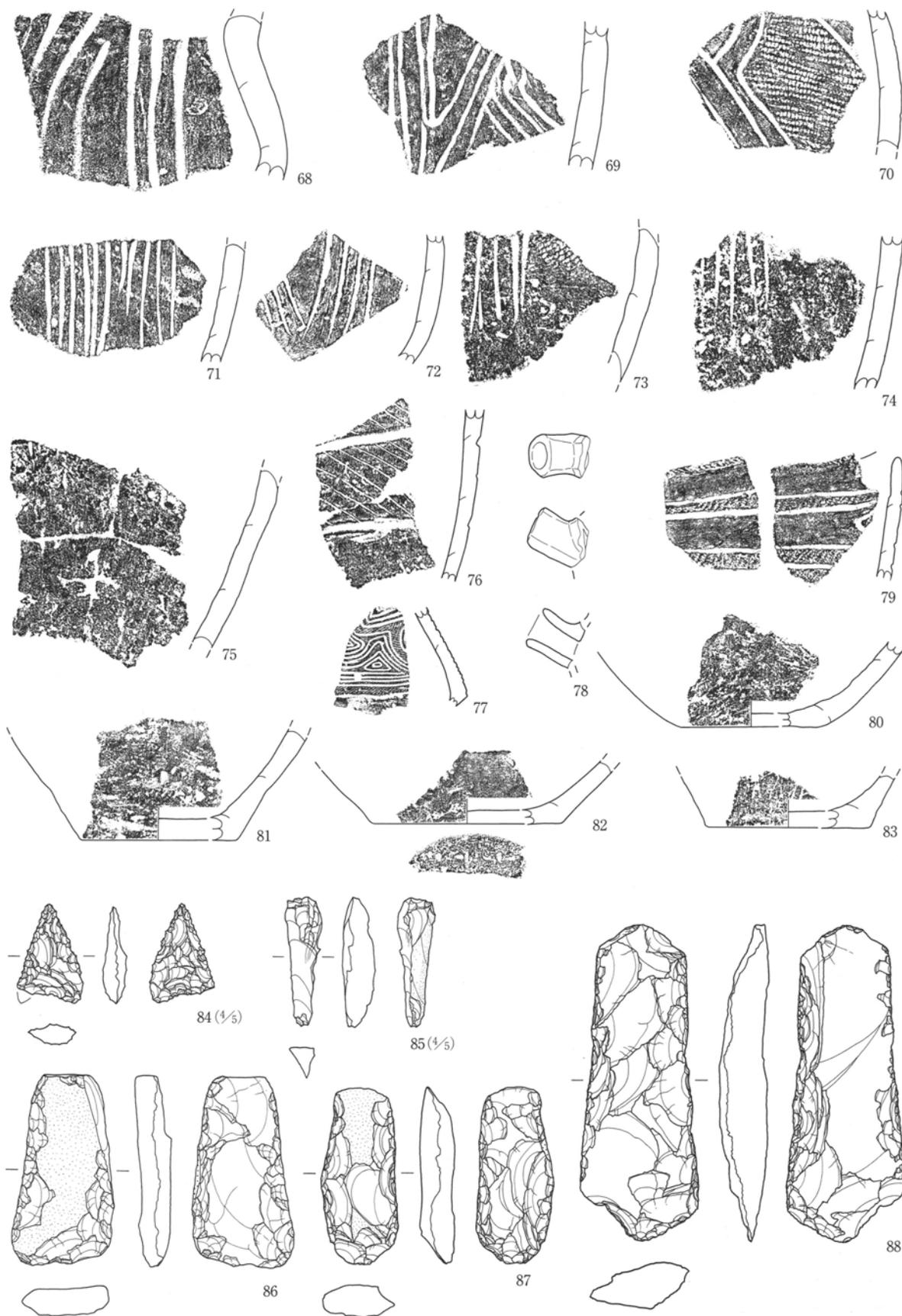
第28図 6区 1号列石出土遺物 (1)



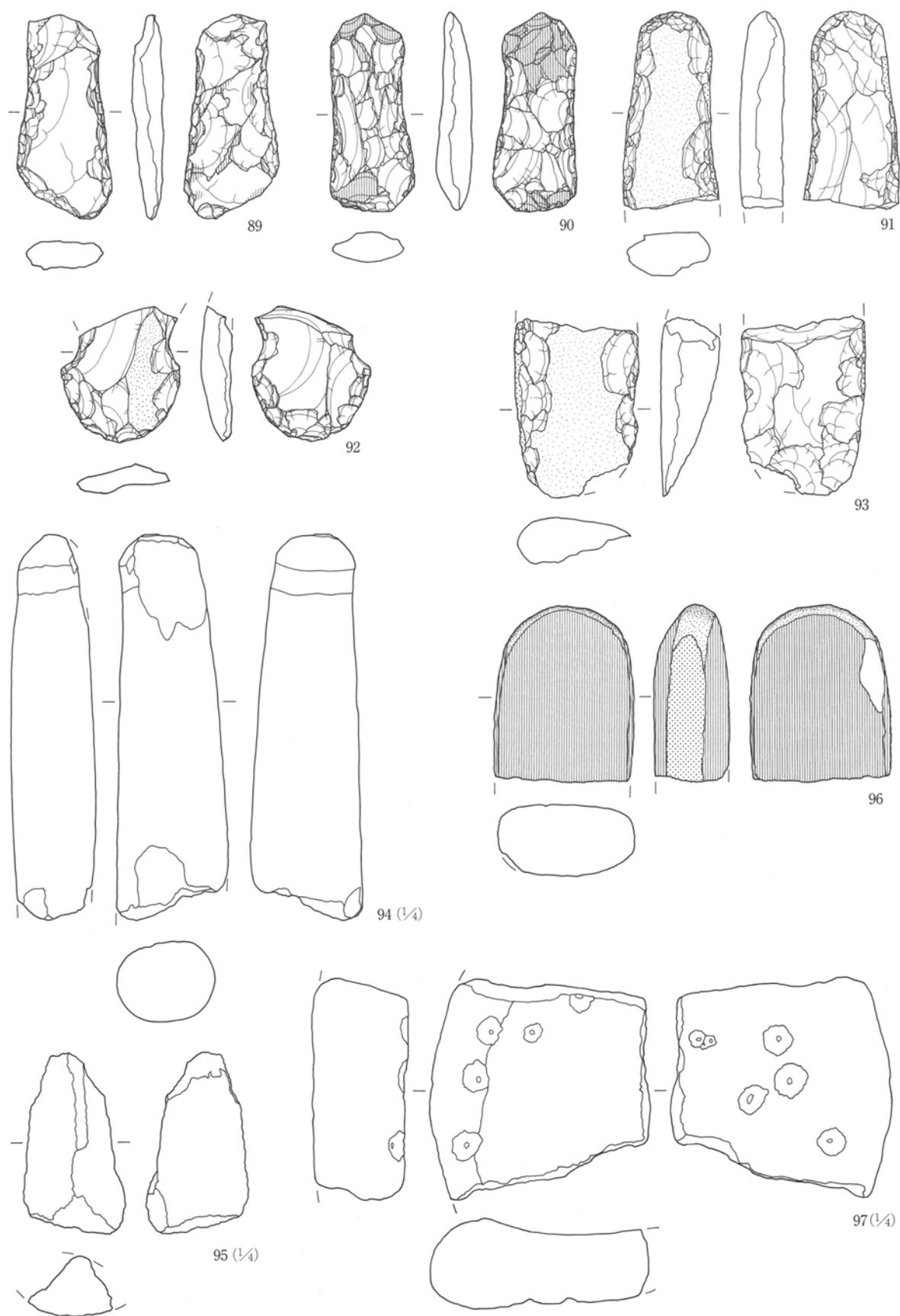
第29図 6区 1号列石出土遺物 (2)



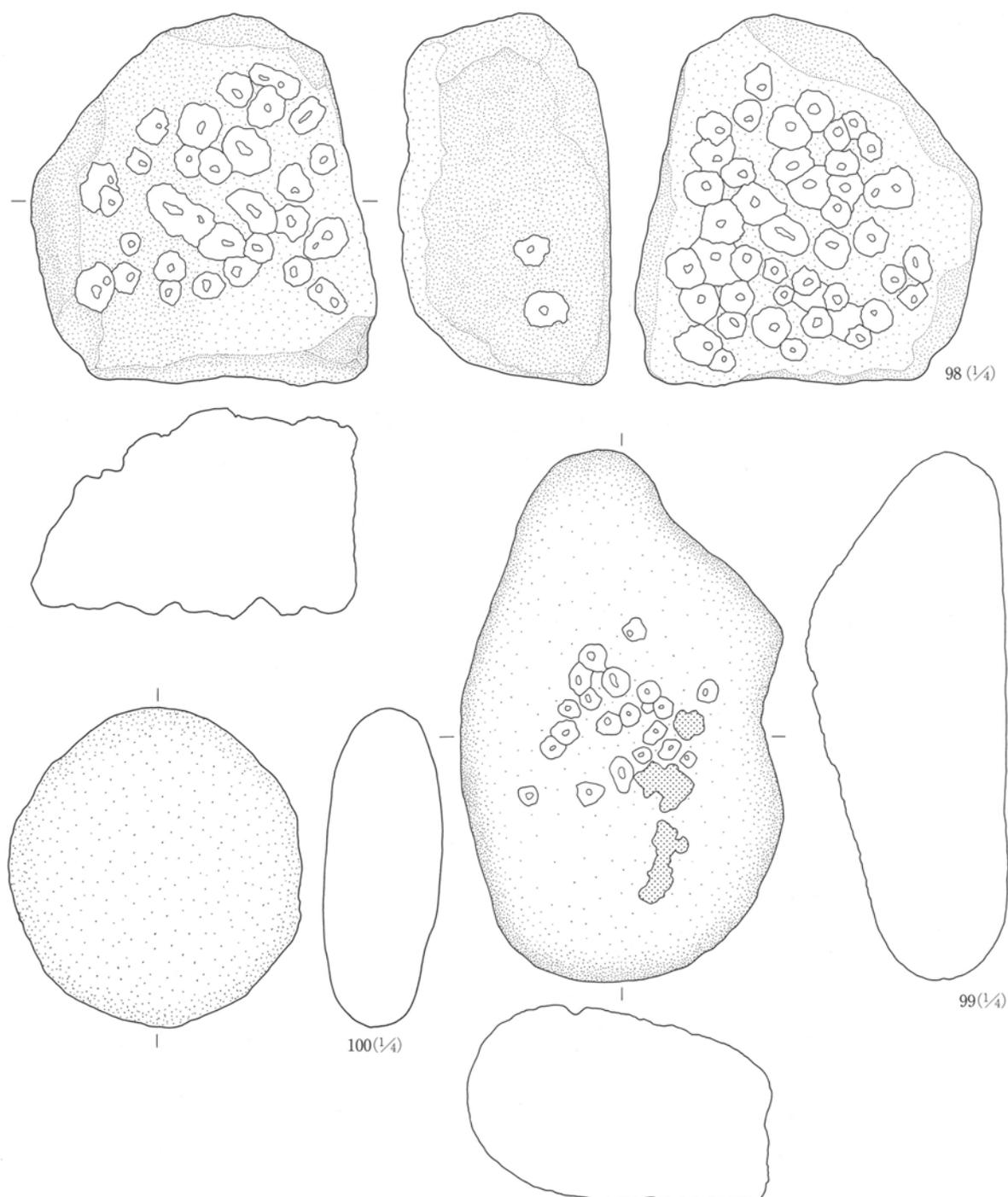
第30図 6区 1号列石出土遺物 (3)



第31図 6区 1号列石出土遺物 (4)



第32図 6区 1号列石出土遺物 (5)



第33図 6区 1号列石出土遺物(6)

前後の円形状を基本としており、その機能・性格や列石との併行関係の把握は困難であるが、列石の配置と重複しない点で注意を要する。列石の用材間やその近縁から、土器片602点や石器類205点などの遺物が出土している。土器は、前期のものをわずかに含む以外は加曽利E3式～堀之内2式にかけてのもので、数量的には堀之内1式が半数以上を占めている。石器は石鏃1点(84)、楔形石器2点(85)、打製石斧25点(86～93)、石棒2点(94・95)、磨石2点(96)、石皿1点(97)、多孔石2点(98・99)、台石1点(100)などが出土している。各列石の構築時期については確定できないが、周辺での出土土器から加曽利E3式～堀之内1式期の範疇に収まると考えられる。

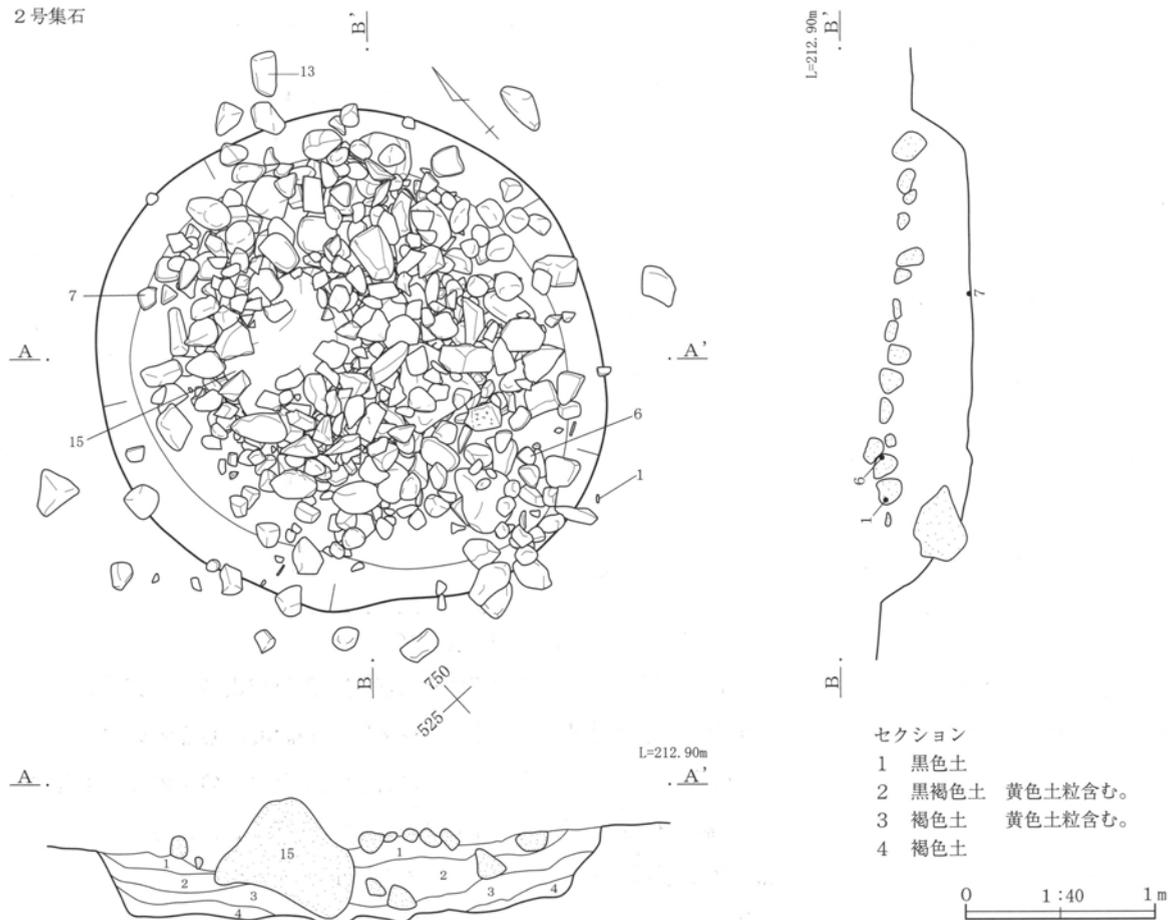
4) 集石

6区より2基が発見されている。Hr-FAを除去した段階で確認されたが、遺構の形状や出土遺物から縄文時代の遺構と判断した。また、中央部の大形礫を多数の小形礫で囲繞する配置状況が、前述の配石遺構と異なっているため、それらとは区別して集石遺構として扱った。2基の集石はほぼ同じ形状で、相互に約4m離れて位置する。以下各遺構ごとに、その特徴を記す。

6区2号集石

525-745グリッドに位置し、6区1号配石の北側に近接する。Hr-FAを除去した段階で中央部の大形礫が顔を出していた。基本的な形態は、中央部に大形礫1点を置き、その周囲に長径5~20cm程度の小形礫をランダムに集積してある。中央の礫は最大径が75cmを測る大きなもので、表面に石皿に似た凹み状の加工面がある(15)。通常の石皿とは異なっており、祭儀器的な機能・性格を持った遺物と考えられる。周囲の小形礫は、大半が基盤の唐沢泥流層に多く含まれる角礫や亜角礫であるが、遺跡外から搬入されたと思われる円礫や、多孔石の破損品なども少量含まれている。集石の下部には直径275cm、深さ60cmの円形状土坑が存在するが、その埋没状況からは中央部の大形礫を土坑底面に設置して一旦埋填した後、その上位面の周囲に小形礫を配置したことが看取される。この埋没土には焼土や炭化物等が含有されず、また各礫材にも被熱の痕跡は認められない。土坑の埋没土中には、礫に混在して土器片80点、打製石斧1点(8)、磨石1点(9)、敲石1点(10)、多孔石4点(11~14)などが出土した。10の敲石は破損した石棒を再利用したものである。構築時期については、出土土器が堀之内1式を主体とすることを重視すれば同期となるが、確定できない。

2号集石

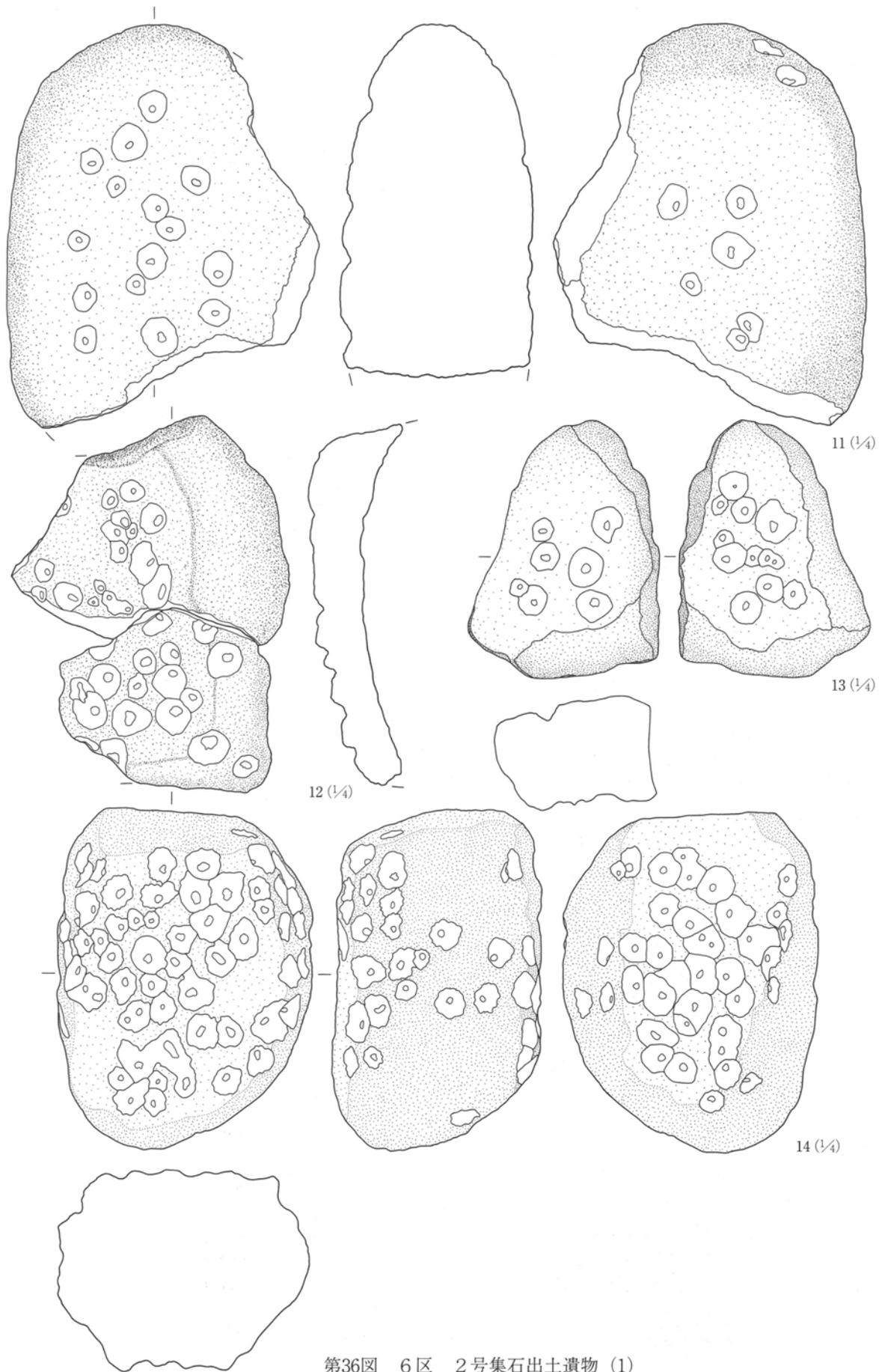


第34図 6区 2号集石 (1)

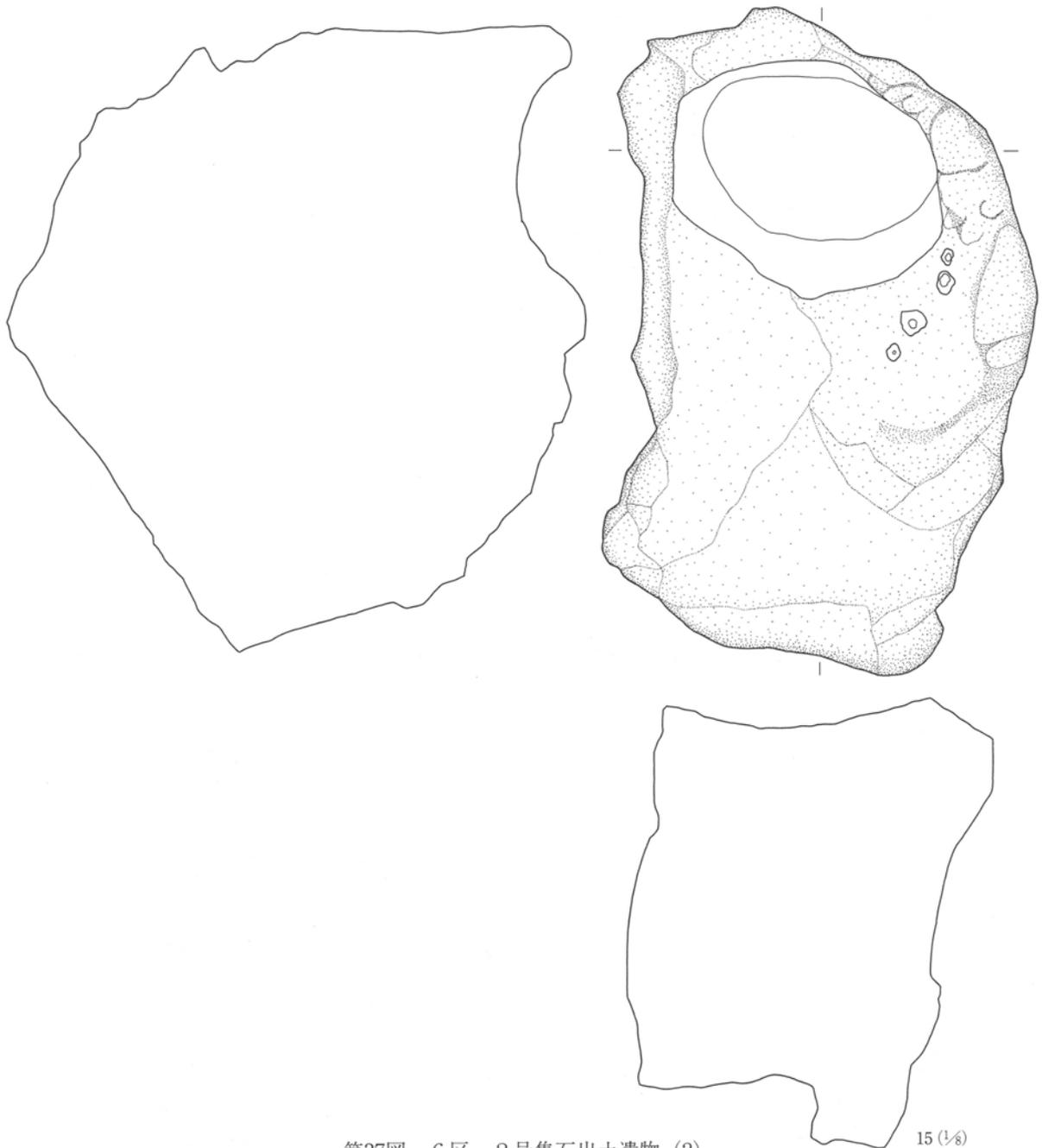
2号集石下部土坑



第35図 6区 2号集石 (2)



第36図 6区 2号集石出土遺物 (1)



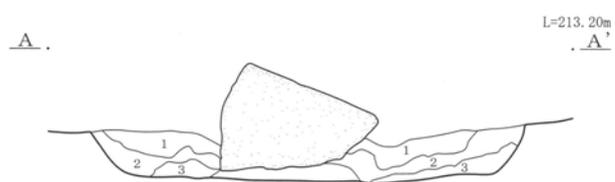
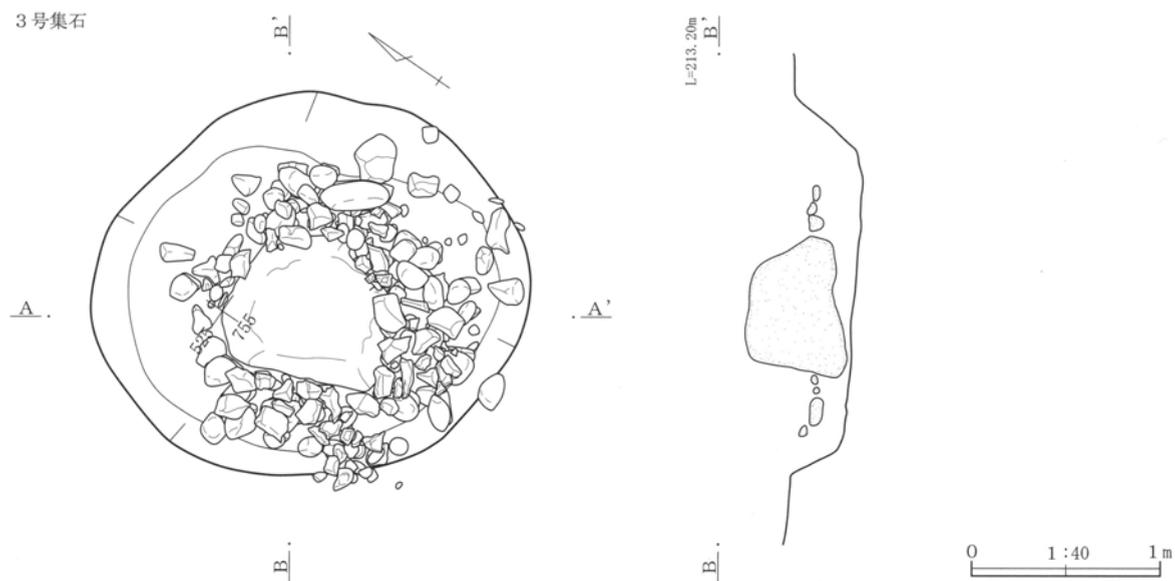
第37図 6区 2号集石出土遺物 (2)

6区3号集石

520-750グリッドに位置する。2号集石と同様に、Hr-FAを除去した段階で中央部の大形礫などが確認し得た。土坑状の掘り方を持ち、中央部の大形礫の周囲に小形礫を配置する状況は2号集石と同じであるが、小形礫の密度はやや低い。中央部の礫は最大径85cmを測り、基盤層の角礫を用いている。周囲の小形礫もほとんどが基盤層の礫であるが、1点のみ河床の円礫が混入していた。集石下部の土坑は直径220cm、深さ30cmの円形状であり、中央部の大形礫と周囲の小形礫の配置方法は2号集石と同様である。また、埋没土や礫を含め、焚火行為による被熱の痕跡は認められない。土坑埋没土や集石内から土器片55点、打製石斧1点(7)、剥片2点などが出土している。構築時期については、出土遺物が僅少なために不明であるが、構築状況の類似性から2号集石と同時期と考えられる。

第4章 検出された遺構と遺物

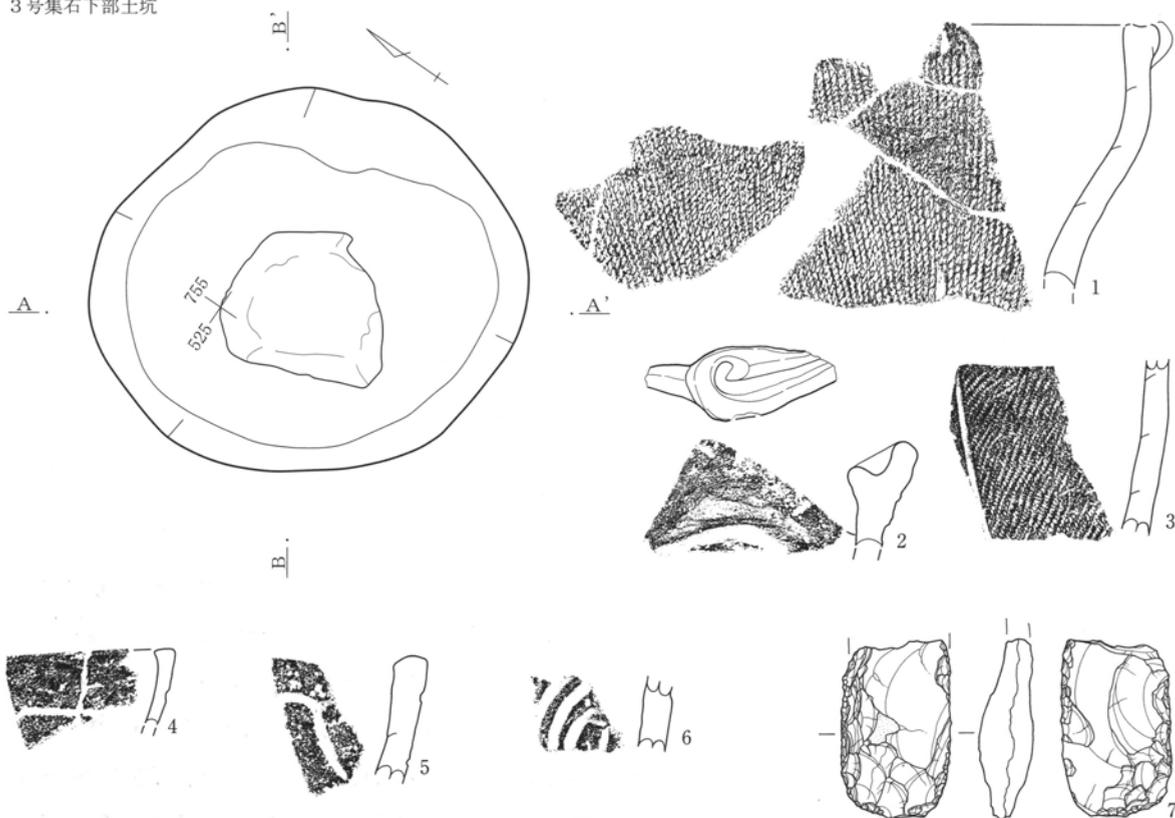
3号集石



セクション

- 1 黒色土 φ1~5mmの黄色土粒含む。
- 2 黒褐色土
- 3 褐色土

3号集石下部土坑

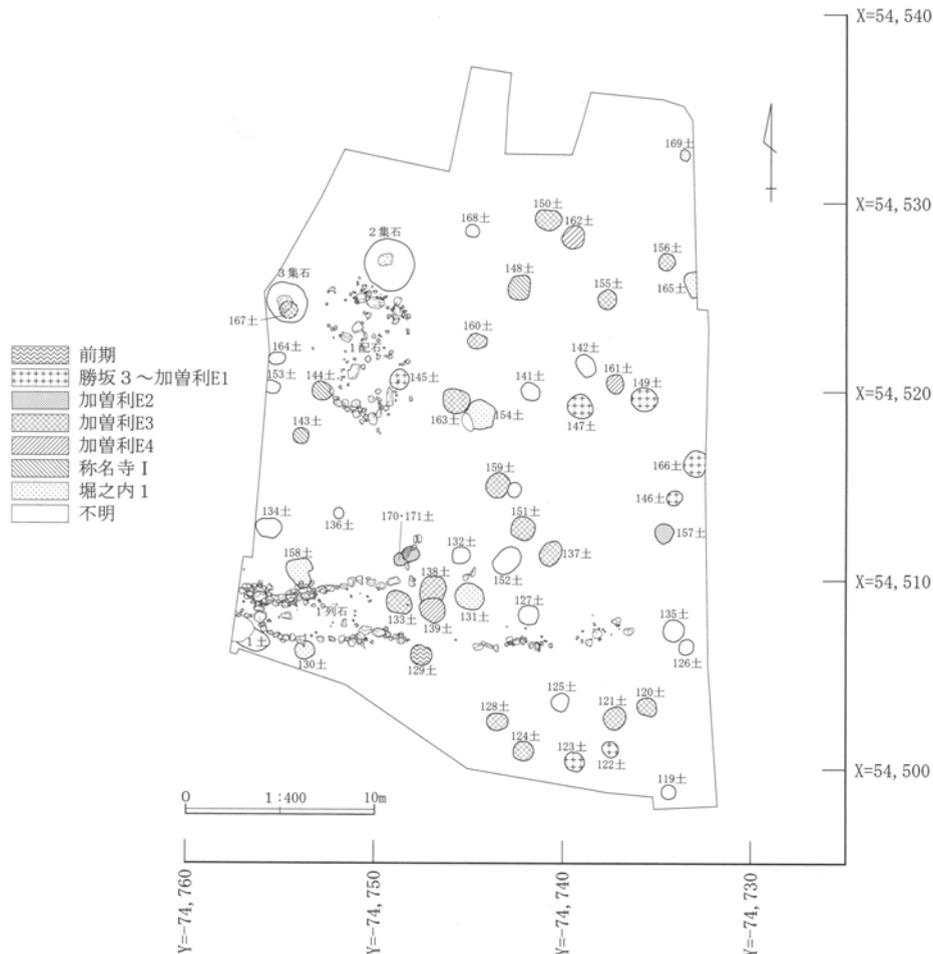


第38図 6区 3号集石

5) 土坑

6区より52基、7区で3基の土坑が見つかった。これらの土坑は、調査の最終面である唐沢泥流上面で確認されたものであり、その段階で既に掘り方の上半部分は失われていたと思われる。そのため、土坑の形状、深さなどは遺構本来のものではなく、確認面での状況となっている。土坑の中には遺物を伴わないものもあったが、形状、埋没土の状況から、縄文時代の遺構と判断した。形態的には円形状の平面形をもつものが多数を占め、楕円形や方形状のものは13基(128・134・137・138・142・148・150・152・153・158・163～165号)にとどまる。各土坑の機能・用途については判然としないが、埋没土の上・中位に長径10～30cm大の礫を単数あるいは複数個配置するもの(125・130～132・135・139・145・146・148・151・152・155・160・162号)と、大形の土器破片または完形土器などを出土するもの(133・143・150・156・158・163・165・166・169号)の中には、墓坑に比定されるものが含まれていると想定される。また、大半の土坑の埋没土には、人為的な埋填を思わせる基盤の泥流堆積物を起源とする黄褐色土ブロックが含まれているが、上半部が削平されているために自然埋没土との識別は困難である。

全55基のうち、6区の38基については出土遺物からおおよその時期が特定できた。その内訳は、前期:1基、中期の勝坂3式～加曾利E1式期:7基、加曾利E2式期:3基、加曾利E3式期:15基、加曾利E4式期:3基、後期の称名寺I式期:3基、堀之内1式期:6基である。各時期ごとの分布状況は、中期の加曾利E1～E4式期にかけては全体的に散在し、特定の区域に集中するような傾向は認められないが、後期の称名寺I式期では6区の北半部に、また堀之内1式期では南半部にそれぞれ集中する傾向が伺える(第39図)。配石遺構や集石遺



第39図 6区 土坑時期別分布図

第4章 検出された遺構と遺物

構との位置的関係を加味すれば、称名寺I式期では1号配石や2・3号集石と、堀之内1式期では1号列石との関連性も想定される。特に後者の場合、130・131・158号が墓坑の可能性もあり、両者の関係を考える上で注意を要する。以下、各土坑ごとにその特徴を記す。

6区119号土坑

495-730グリッドに位置する。直径78cm、深さ15cmの円形状を呈する。出土遺物は皆無で、時期不明。

6区120号土坑

500-735グリッドに位置する。やや歪んだ円形状を呈し、長軸109cm、短軸98cm、深さ19cmを測る。埋没土中より、土器片(1)と基盤角礫が各1点出土している。出土土器から、加曽利E3式期に比定される。

6区121号土坑

500-735グリッドに位置する。わずかに南北方向が長い円形状を呈し、壁面はやや外傾気味に立ち上がる。長軸125cm、短軸114cm、深さ48cmを測る。埋没土の上位に集中して、深鉢(1~4)や台付鉢(5)の他に土器片27点、スクレイパー1点(6)、打製石斧1点(7)、剥片類4点などが出土している。出土土器から、加曽利E3式期に比定される。

6区122号土坑

500-735グリッドに位置する。わずかに東西方向に長い円形状を呈し、長軸91cm、短軸81cm、深さ34cmを測る。埋没土中より土器片10点(1・2)と剥片1点が出土。出土土器から、加曽利E1式期に比定される。

6区123号土坑

500-735グリッド。わずかに東西方向に長い円形状を呈し、長軸104cm、短軸91cm、深さ16cmを測る。埋没土中より土器片6点(1)と二次加工のある剥片2点が出土。出土土器から勝坂3式期に比定される。

6区124号土坑

500-740グリッドに位置する。ほぼ円形状で直径約105cm、深さ36cmを測る。埋没土中より土器片7点(1・2)と剥片5点が出土。出土土器から、勝坂3~加曽利E1式期あるいは加曽利E3式期に比定される。

6区125号土坑

500-740グリッド。南北方向がわずかに長い円形状を呈し、長軸97cm、短軸90cm、深さ27cmを測る。埋没土上位より円礫1点と角礫2点、土器片が5点出土した。時期不明。

6区126号土坑

505-730グリッドに位置する。南北方向がわずかに長い円形状を呈し、長軸87cm、短軸80cm、深さ34cmを測る。埋没土中より剥片が1点出土したのみで、時期は不明である。

6区127号土坑

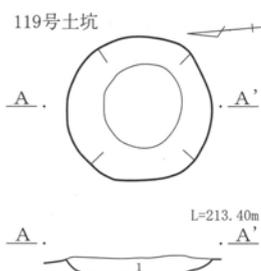
505-740グリッド。ほぼ円形を呈し、直径約105cm、深さ12cmを測る。出土遺物は土器片が1点のみで、時期不明。

6区128号土坑

500-740グリッドに位置する。楕円形状を呈し、長軸112cm、短軸92cm、深さ46cmを測る。埋没土中より、土器片28点(1~5)が出土したのみである。出土土器から、加曽利E3式期に比定される。

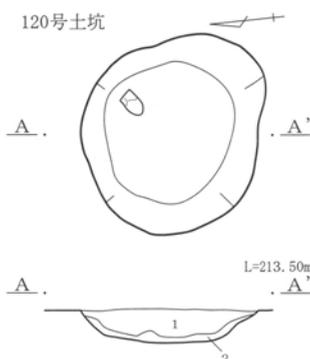
6区129号土坑

505-745グリッド。やや歪んだ円形状を呈し、長軸112cm、短軸102cm、深さ27cmを測る。埋没土中より土器片2点(1)と黒曜石製の石鏃1点(2)、それに基盤角礫が数点出土。出土土器から、前期前葉に比定される。



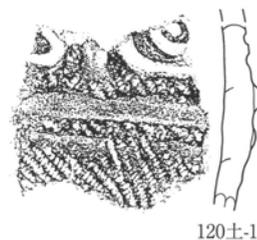
6区119号土坑

1 褐色土 φ1~5mmの黄色軽石含む。

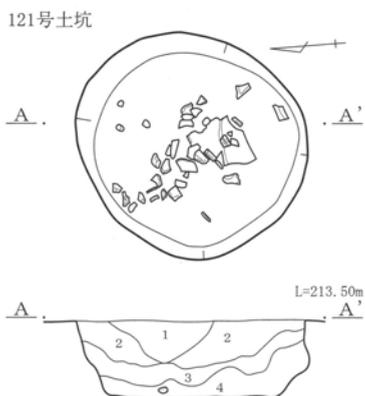


6区120号土坑

1 褐色土 φ1~5mmの黄色軽石含む。
2 褐色土 粘質黄褐色土ブロック含む。

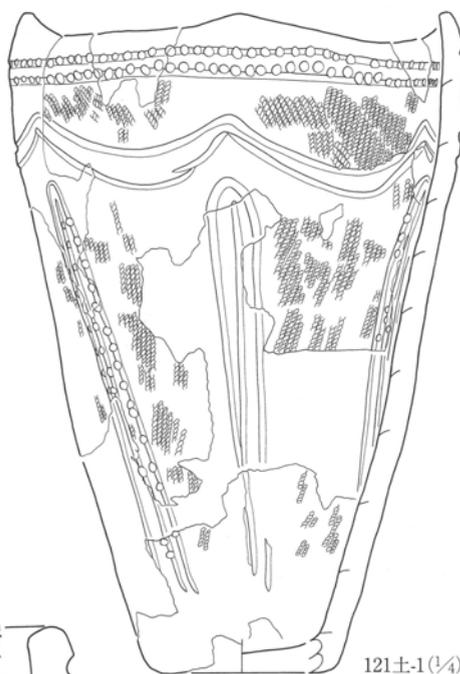


120土-1



6区121号土坑

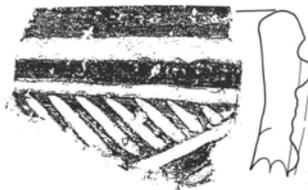
1 黒褐色土 φ1~5mmの黄色軽石含む。
2 黒褐色土 1層より黒味弱い。
3 褐色土 粘質黄褐色土ブロック含む。
4 褐色土 3層より粘質黄褐色土の量多い。



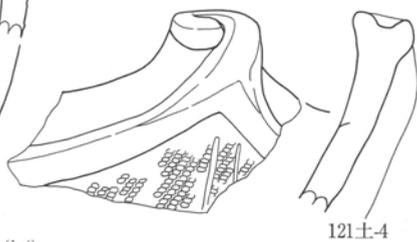
121土-1(1/4)



121土-2(1/4)



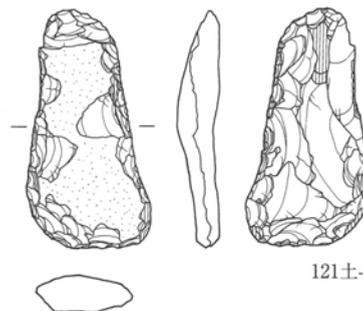
121土-3



121土-4



121土-6



121土-7



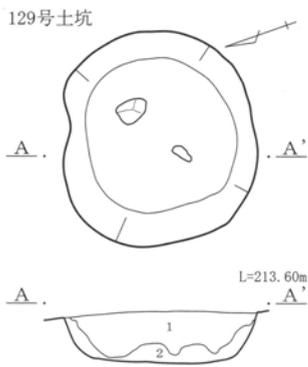
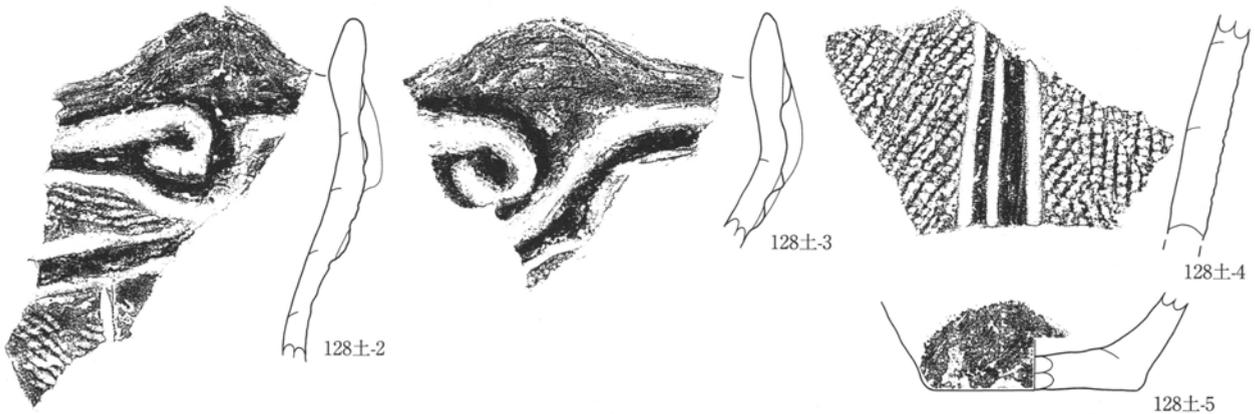
121土-5

第40図 6区 119~121号土坑

第4章 検出された遺構と遺物

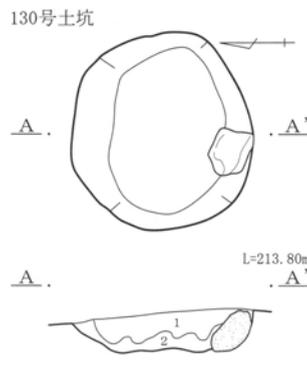


第41図 6区 122~128号土坑



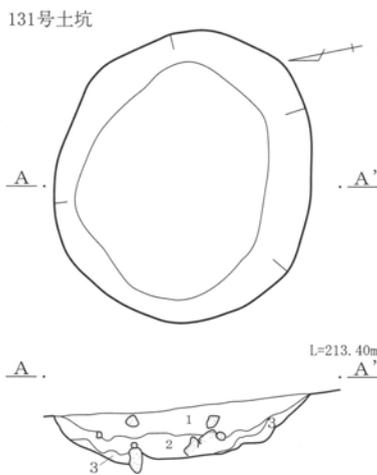
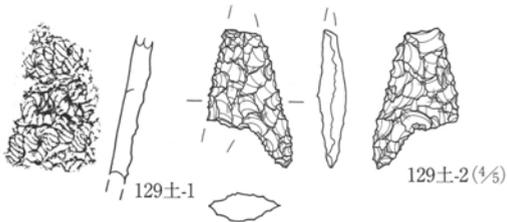
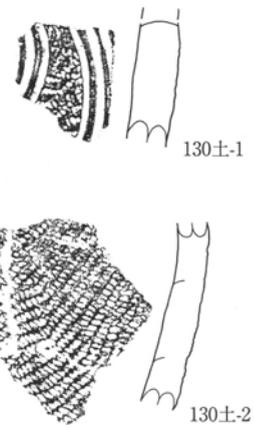
6区129土坑

- 1 褐色土 φ1~5mmの黄褐色軽石含む。
- 2 褐色土 粘質黄褐色土ブロック含む。



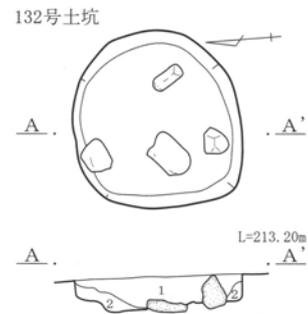
6区130土坑

- 1 褐色土 φ1~5mmの黄褐色軽石含む。
- 2 褐色土 粘質黄褐色土ブロック含む。



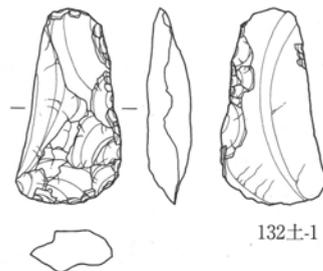
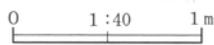
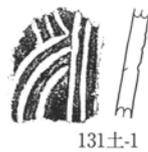
6区131土坑

- 1 褐色土 φ1~5mmの黄褐色軽石含む。
- 2 褐色土 1層より色調明るい。
- 3 褐色土 粘質黄褐色土ブロック含む。



6区132土坑

- 1 褐色土 φ1~3mmの黄褐色軽石含む。
- 2 黄褐色土 二次堆積の粘質黄褐色土。



第42図 6区 129~132号土坑

6区130号土坑

505-750グリッドに位置する。わずかに東西方向が長い円形状を呈し、長軸107cm、短軸96cm、深さ21cmを測る。南の壁際より大形の基盤角礫が出土した他に、埋没土中より土器片6点(1・2)が出土した。出土土器から、堀之内1式期に比定される。

6区131号土坑

505-745グリッドに位置する。やや歪んだ円形状を呈し、長軸154cm、短軸136cm、深さ38cmを測る。埋没土中より土器片5点(1)と剥片2点が出土した。出土土器から、堀之内1式期に比定される。

6区132号土坑

510-745グリッドに位置する。ほぼ円形を呈し、直径約92cm、深さ19cmを測る。埋没土中や底面から基盤角礫が4点出土した他に、埋没土中より打製石斧1点が出土した(1)。土器は1点のみで、時期不明。

6区133号土坑

505-745グリッドに位置する。やや歪んだ円形状を呈し、長軸145cm、短軸119cm、深さ62cmを測る。埋没土の上位にやや大型の土器片(1~4)と角礫4点が集中していた他に、土器破片33点と剥片類4点が出土した。出土土器から、加曾利E3式期に比定される。

6区134号土坑

510-755グリッドに位置する。楕円形状を呈し、長軸139cm、短軸104cm、深さ40cmを測る。土器の小破片が2点出土したのみで、時期不明。

6区135号土坑

505-730グリッドに位置する。ほぼ円形状を呈し、長軸116cm、短軸110cm、深さ31cmを測る。埋没土の上位から基盤の角礫3点が出土した。ほかは土器が1点のみで時期は不明。

6区136号土坑

510-750グリッドに位置する。やや歪んだ小円形状を呈し、長軸58cm、短軸50cm、深さ35cmを測る。出土遺物は皆無で、時期不明。

6区137号土坑

510-740グリッドに位置する。楕円形状を呈し、長軸139cm、短軸102cm、深さ43cmを測る。埋没土中より土器片11点(1・2)と剥片1点が出土した。出土土器から、加曾利E3式期に比定される。

6区138号土坑

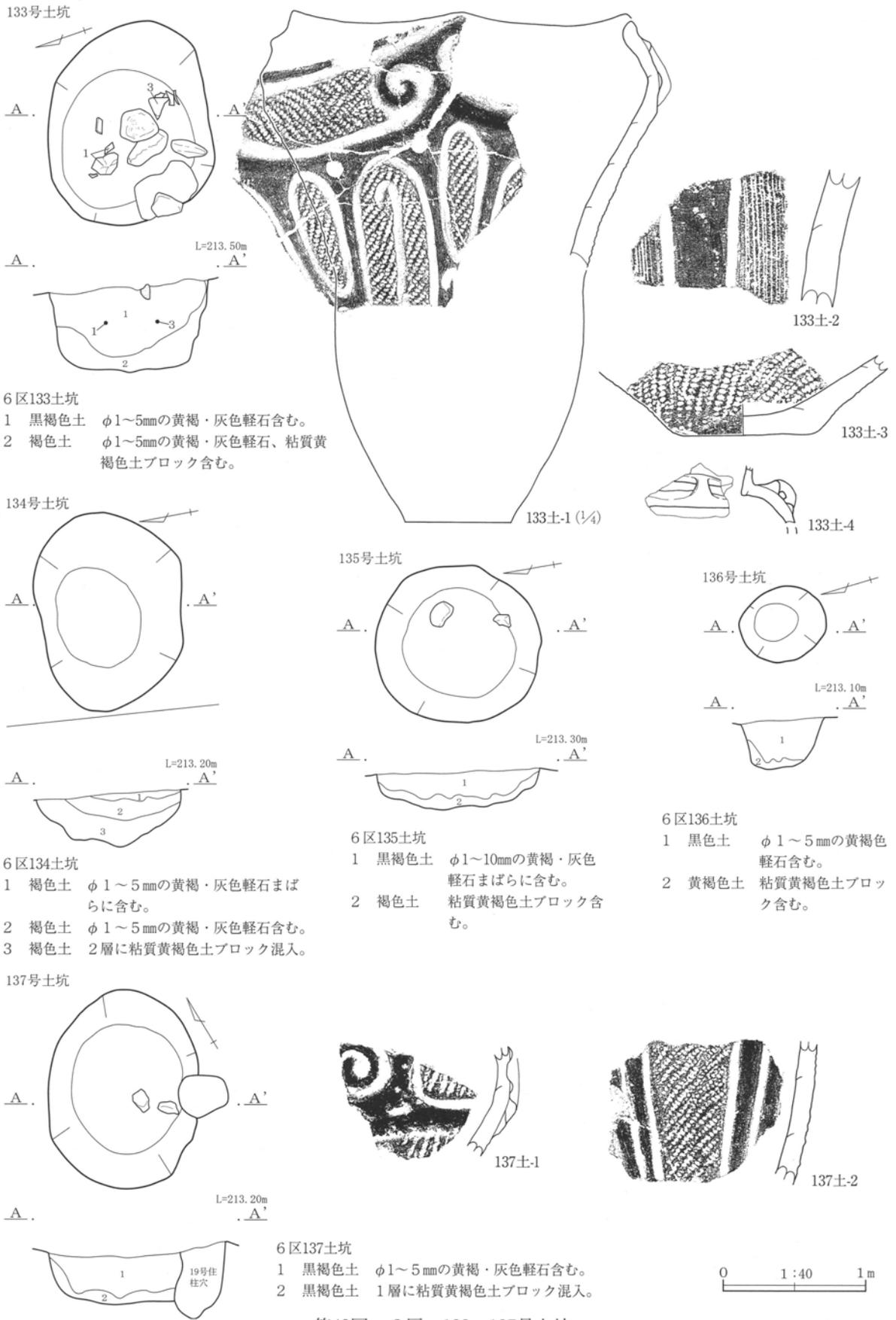
505-745グリッドに位置する。南側で139号土坑と重複するが、前後関係は不明。楕円形状を呈し、長軸約156cm、短軸130cm、深さ48cmを測る。埋没土の上位から角礫1点が出土した他に、土器片5点(1)と剥片1点が出土した。出土土器から、加曾利E3式期に比定される。

6区139号土坑

505-745グリッドに位置する。北側で138号土坑と重複するが、前後関係は不明。不整形円形状を呈し、直径約135cm、深さ50cmを測る。埋没土上位から基盤の角礫3点が集中して出土した他に、土器片4点(1)や剥片1点が出土している。出土土器から、加曾利E4式期に比定される。

6区141号土坑

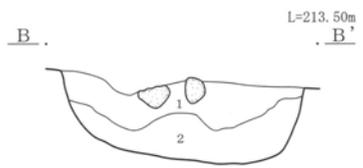
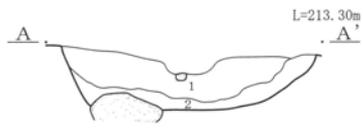
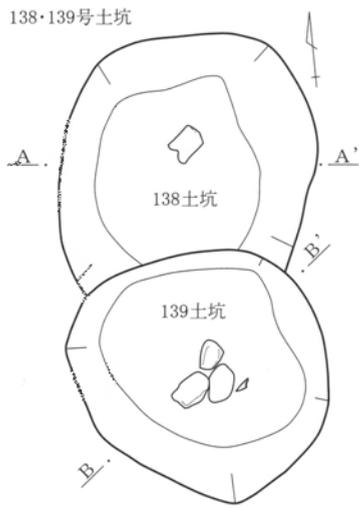
515-740グリッドに位置する。やや歪んだ円形状を呈し、長軸105cm、短軸90cm、深さ26cmを測る。埋没土中より土器の小破片が4点と打製石斧1点(1)、剥片2点が出土したのみで、時期は不明。



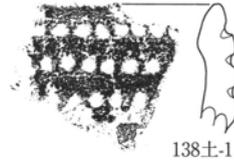
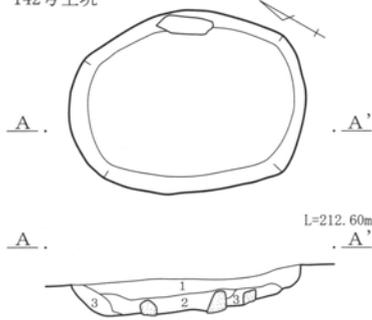
第43図 6区 133~137号土坑

第4章 検出された遺構と遺物

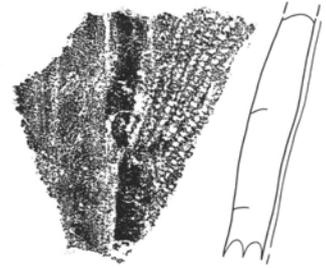
138・139号土坑



142号土坑

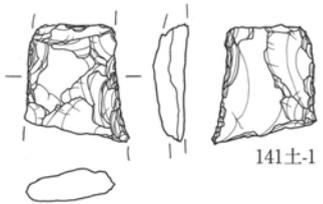
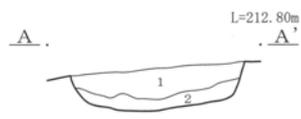


138土-1



139土-1

141号土坑



141土-1

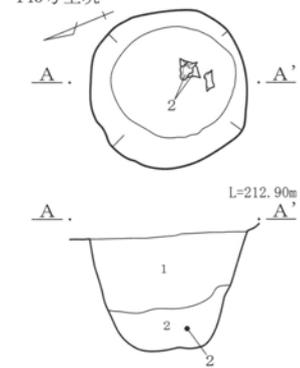
6区141土坑

- 1 黒褐色土 φ1~3mmの褐色軽石含む。
- 2 黄褐色土 φ1~3mmの褐色軽石、粘質黄褐色土ブロック含む。

6区138・139土坑

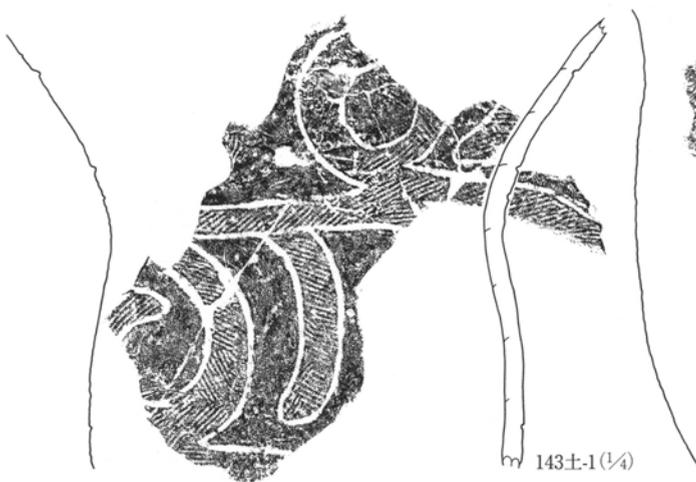
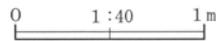
- 1 褐色土 φ1~3mmの黄褐色軽石含む。
- 2 黄褐色土 粘質黄褐色土ブロック含む。

143号土坑



6区143土坑

- 1 褐色土 φ1~5mmの黄褐色軽石含む。
- 2 黒褐色土 粘質黄褐色土ブロック含む。

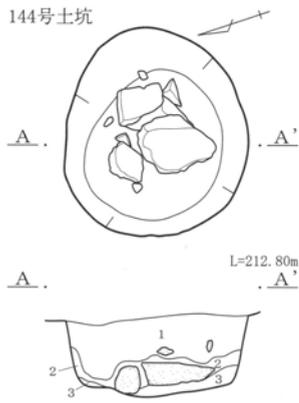


143土-1 (1/4)



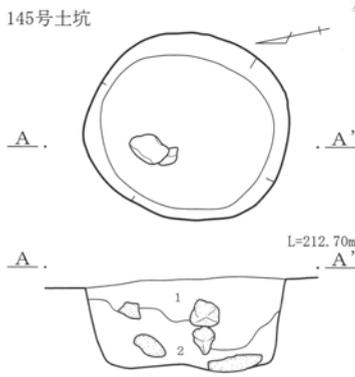
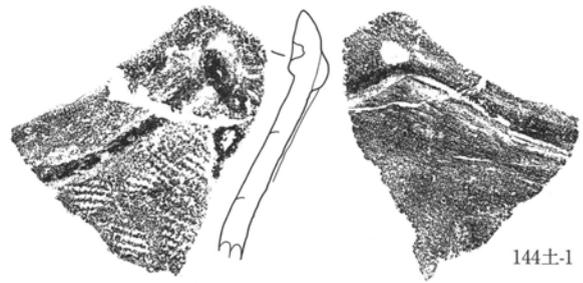
143土-2 (1/4)

第44図 6区 138・139・141~143号土坑



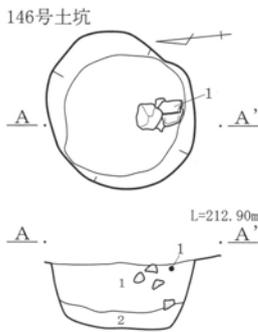
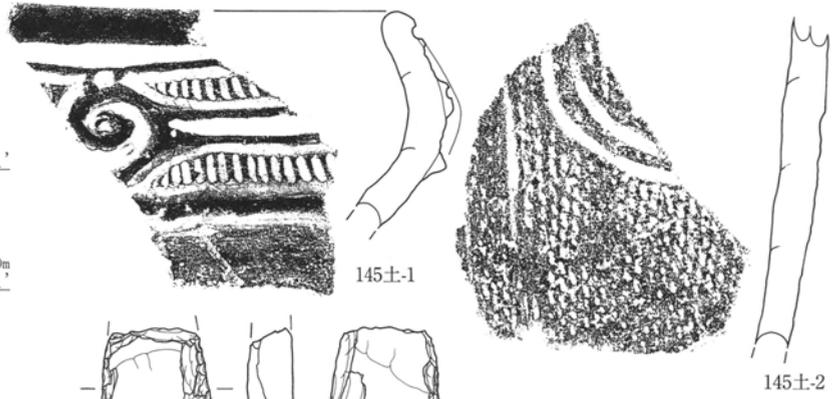
6区144土坑

- 1 黒褐色土 φ1~5mmの褐色軽石含む。
- 2 褐色土 粘質黄褐色土ブロック含む。
- 3 黄色土 二次堆積粘質黄褐色土。



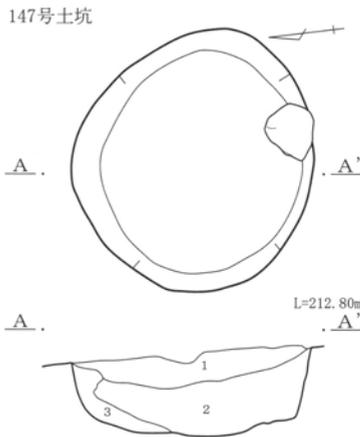
6区145土坑

- 1 褐色土 φ1~5mmの褐色軽石含む。
- 2 褐色土 粘性持ち、粘質黄褐色土ブロック含む。



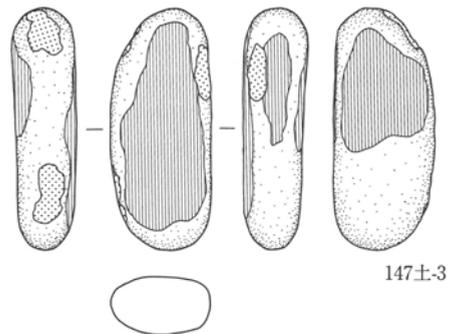
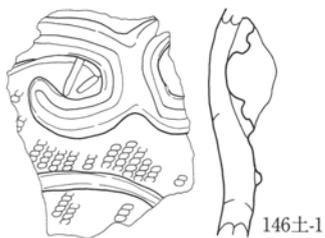
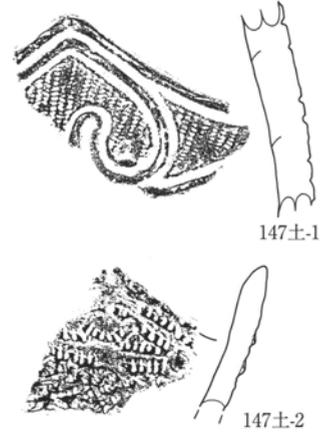
6区146土坑

- 1 黒褐色土 φ1~10mmの黄褐・灰色軽石多量に含む。
- 2 褐色土 粘質黄褐色土ブロック多量に含む。



6区147土坑

- 1 黒褐色土 φ1~3mmの褐色軽石含む。
- 2 褐色土 φ1~3mmの褐色軽石含む。
- 3 黄褐色土 φ1~3mmの褐色軽石、粘質黄褐色土ブロック含む。



0 1:40 1m

第45図 6区 144~147号土坑

6区142号土坑

520-735グリッドに位置する。楕円形状を呈し、長軸126cm、短軸97cm、深さ30cmを測る。出土遺物は皆無で、時期不明。

6区143号土坑

515-750グリッドに位置する。円形状を呈し、直径82cm、深さ66cmを測る。埋没土の下位より深鉢土器の大形破片が2個体分出土した(1・2)。その他に土器片9点が出土。出土土器から、称名寺I式期に比定される。

6区144号土坑

520-750グリッドに位置する。やや歪んだ円形状を呈し、長軸110cm、短軸98cm、深さ44cmを測る。底面より大形の基盤角礫3点が集中して出土した他に、土器片6点(1)が出土した。出土土器から、称名寺I式期に比定される。

6区145号土坑

520-745グリッドに位置する。やや南北方向に長い円形状を呈し、長軸108cm、短軸99cm、深さ48cmを測る。埋没土の中位から底面にかけて5点の基盤角礫が出土した他に、土器片4点(1・2)や打製石斧1点(3)と剥片3点も出土している。出土土器から、加曾利E1式期に比定される。

6区146号土坑

510-730グリッドに位置する。やや歪んだ円形状を呈し長軸86cm、短軸76cm、深さは41cmを測る。埋没土上位より基盤角礫4点や土器片2点(1)、剥片1点が出土。出土土器から加曾利E1式期に比定される。

6区147号土坑

515-735グリッドに位置する。やや歪んだ円形状を呈し、長軸137cm、短軸124cm、深さ48cmを測る。南壁際より大形の基盤角礫1点が出土した他に、土器片8点(1・2)や磨石(3)と剥片が各1点出土している。出土土器から、加曾利E1式期に比定される。

6区148号土坑

525-740グリッドに位置する。やや歪んだ楕円形状を呈し、長軸131cm、短軸113cm、深さ42cmを測る。埋没土の上位から下位にかけて、大形の基盤角礫7点や土器片4点(1・2)、二次加工ある剥片1点などが出土している。出土土器から、加曾利E3式期あるいは称名寺I式期に比定される。

6区149号土坑

515-735グリッドに位置する。やや歪んだ円形状を呈し、長軸140cm、短軸125cm、深さ28cmを測る。埋没土中より土器片5点(1・2)や剥片類2点、基盤角礫3点などが出土した。出土土器から、前期中葉あるいは加曾利E1式併行期に比定される。

6区150号土坑

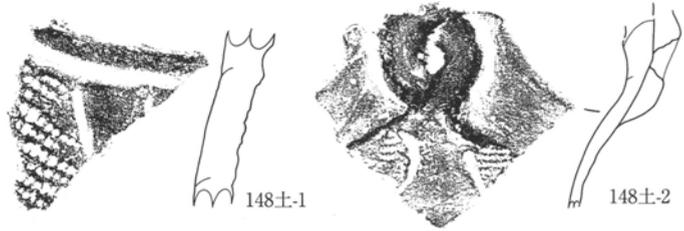
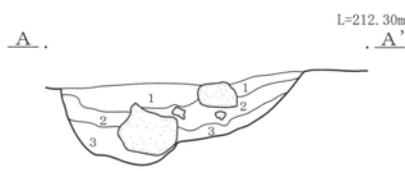
525-740グリッドに位置する。楕円形状を呈し、長軸142cm、短軸106cm、深さ30cmを測る。埋没土上位より土器片12点がやや集中して出土(1・2)。出土土器から、加曾利E3式期に比定される可能性が高い。

6区151号土坑

510-740グリッドに位置する。円形状を呈し、直径130cm、深さ38cmを測る。南西側の壁際に最大長が100cmを超える大形の基盤角礫がめり込んでおり、元来は当土坑上面に立石状に据え付けられていたものが転倒した可能性が高い。埋没土中より土器片6点(1・2)打製石斧1点(3)が出土している。出土土器から、加曾利E3式期に比定される。

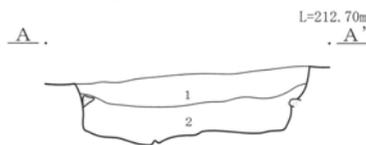
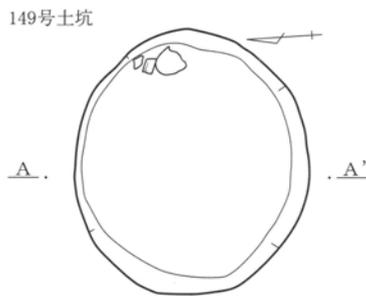
6区152号土坑

510-740グリッド。楕円形状を呈し長軸165cm、短軸117cm、深さ45cmを測る。埋没土中位から土器片17点や角礫8点、敲石(1)と剥片各1点が集中して出土。出土土器が小破片のため型式判別できず、時期不明。



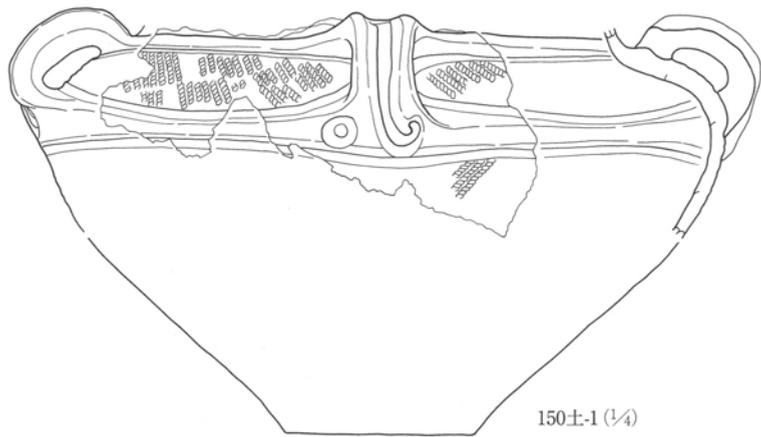
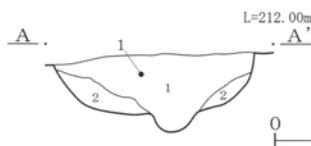
6区148土坑

- 1 黒褐色土 φ1~5mmの褐色軽石含む。
- 2 黄褐色土 φ1~5mmの褐色軽石含む。
- 3 黄色土 二次堆積粘質黄褐色土。



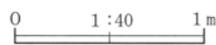
6区149土坑

- 1 黒褐色土 φ1~5mmの褐色軽石含む。
- 2 黄褐色土 φ1~5mmの褐色軽石、粘質黄褐色土ブロック含む。



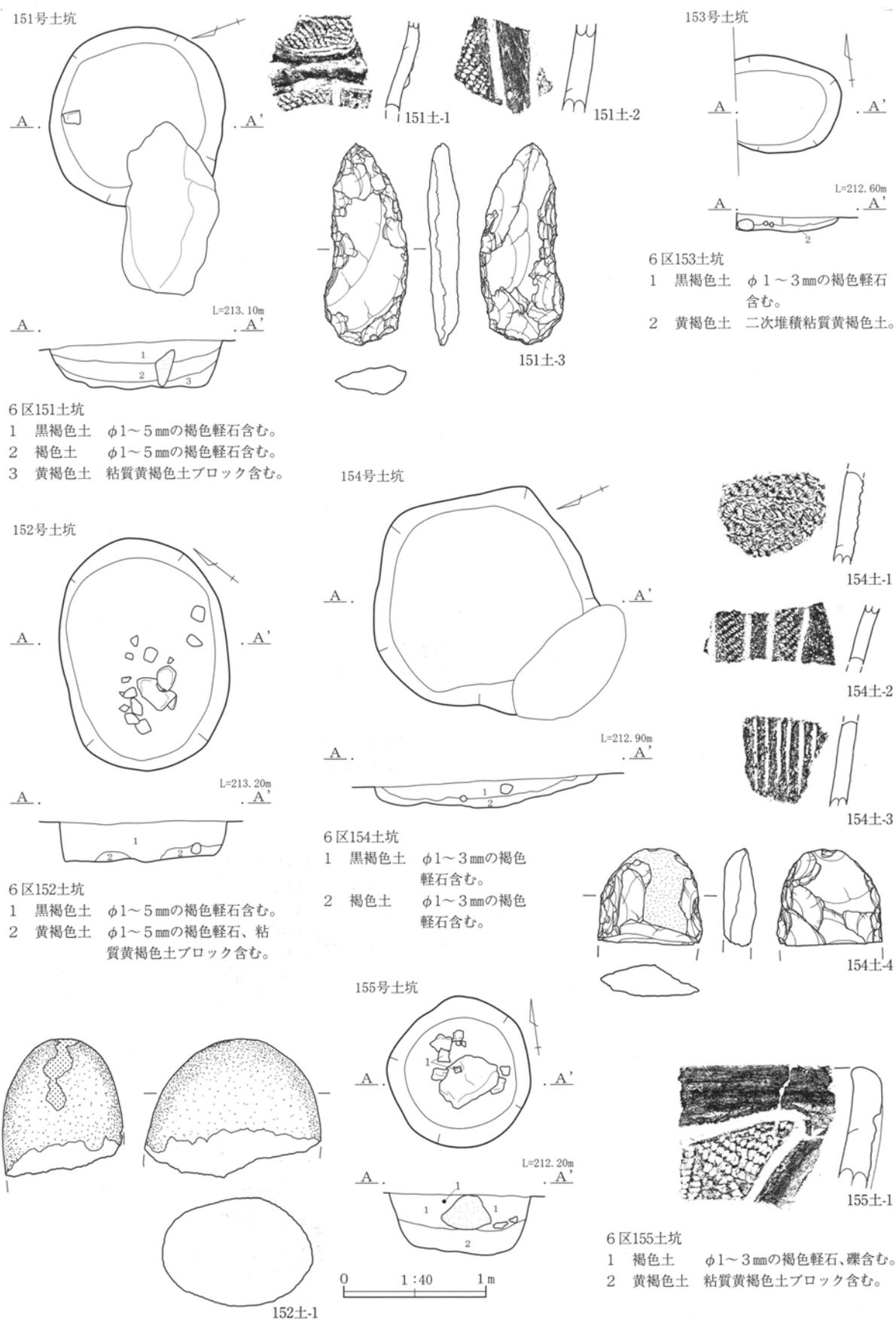
6区150土坑

- 1 黒褐色土 φ1~5mmの褐色軽石含む。
- 2 褐色土 粘質黄褐色土ブロック含む。



第46図 6区 148~150号土坑

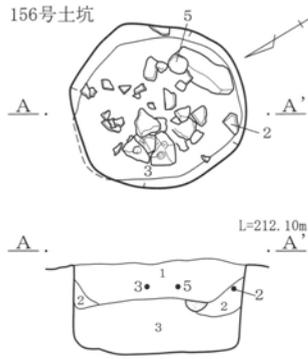
第4章 検出された遺構と遺物



第47図 6区 151~155号土坑

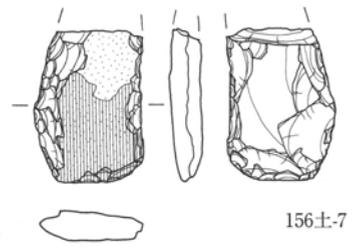
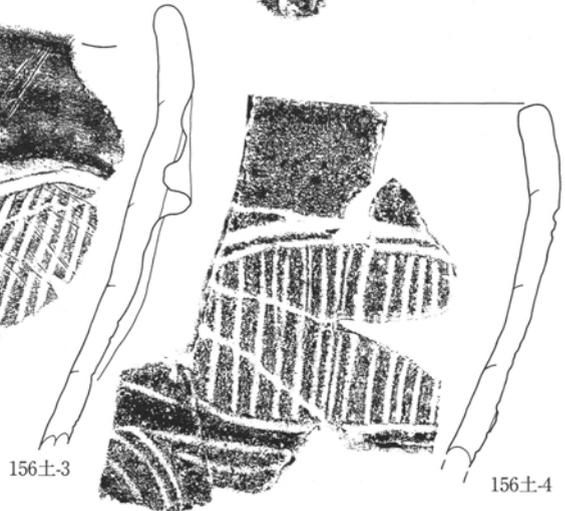
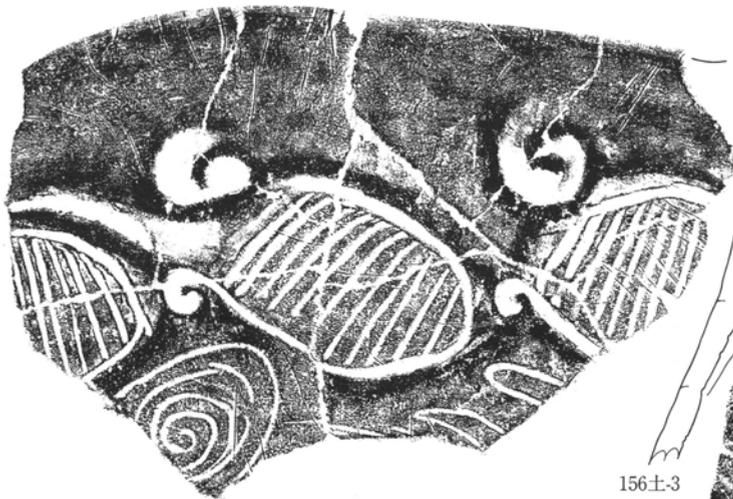
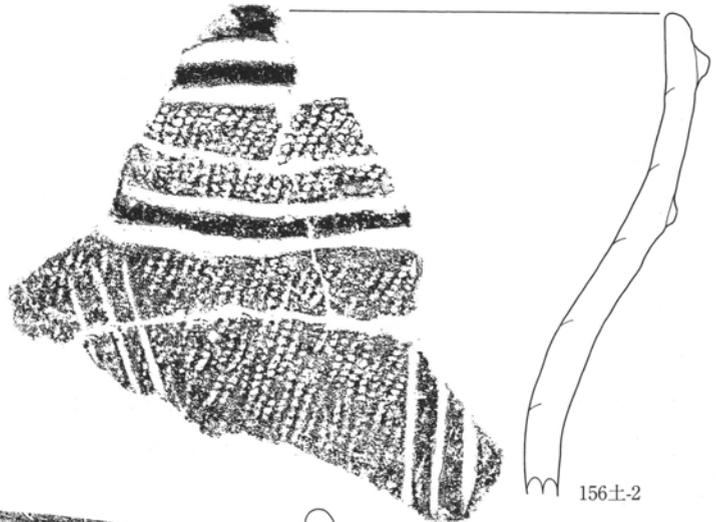
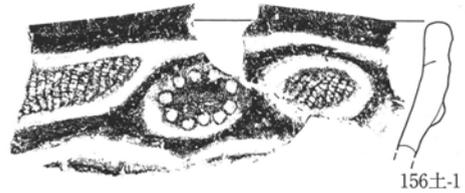
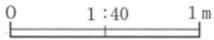
6区153号土坑

520-755グリッドに位置する。東側が調査区外にあるため正確な規模、形状は不明だが、楕円形状を呈するものと思われる。現状で長軸73cm、短軸68cm、深さ14cmを測る。出土遺物は皆無で、時期は特定できなかった。



6区156土坑

- 1 黒褐色土 φ1~5mmの褐色軽石、礫含む。
- 2 黄褐色土 礫含む。
- 3 (不明)



第48図 6区 156号土坑

6区154号土坑

515-740グリッドに位置する。一部を後世の遺構によって壊されているが、やや歪んだ円形状を呈し、直径約150cm、深さ21cmを測る。埋没土中より、土器片9点(1~3)や打製石斧1点(4)と剥片2点が出土した。時期は、堀之内1式期に比定される可能性が高い。

6区155号土坑

525-735グリッドに位置する。円形状を呈し、直径100cm、深さ46cmを測る。壁面はやや外傾気味に立ち上がる。埋没土の中位より、大形の基盤角礫1点と土器片13点(1)が出土した。出土土器から、加曾利E3式期に比定される。

6区156号土坑

525-730グリッドに位置する。円形状を呈し、直径90cm、深さ51cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋没土の上位より基盤角礫10点が出土した他に、土器片30点(1~6)と打製石斧1点(7)、剥片類6点などがかなり密集して出土した。出土土器から、加曾利E3式期に比定される。

6区157号土坑

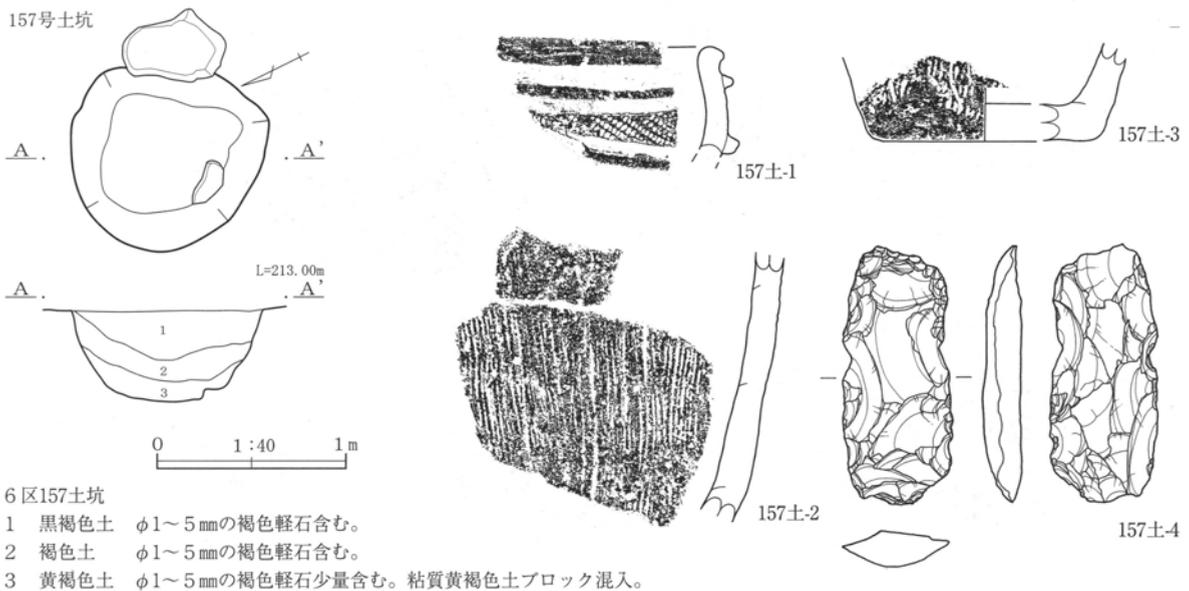
510-730グリッドに位置する。不整円形状を呈し、直径100cm、深さ55cmを測る。埋没土中より土器片12点(1~3)や、打製石斧(4)と剥片が各2点出土した。出土土器から、加曾利E2式期に比定される。

6区158号土坑

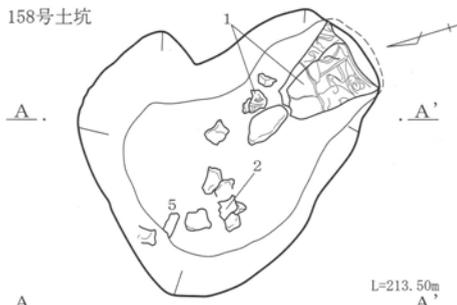
510-750グリッドに位置する。やや歪んだ楕円形状を呈し、長軸166cm、短軸134cm、深さ86cmを測る。壁面は若干外傾気味に立ち上がる。南側の底面より、底部を欠失する大形の深鉢(1)が横転した状態で出土した。他に埋没土中から土器片12点(2~6)と剥片1点が出土。出土土器から、堀之内1式期に比定される。

6区159号土坑

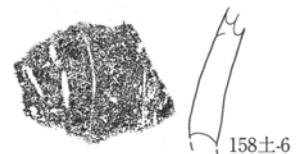
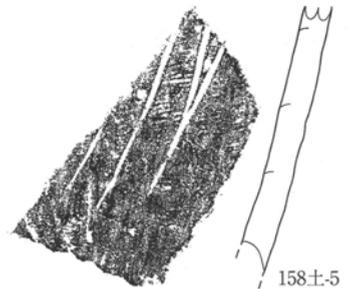
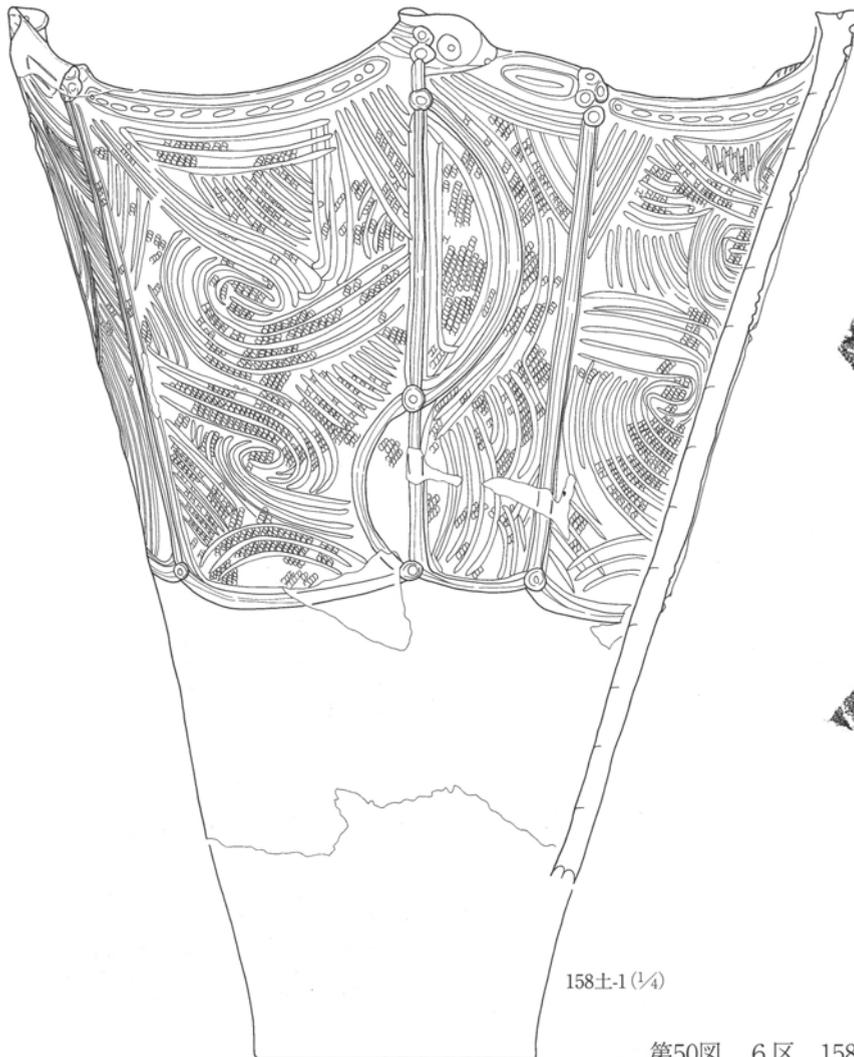
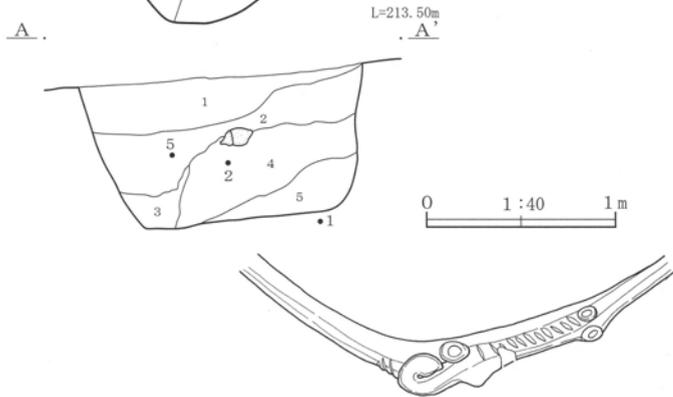
510-740グリッドに位置する。相互に隣接した大小2基の円形土坑を一括して扱った。両者の明確な前後関係は不明。西側の大型土坑は直径約130cm、深さ56cmを、また小形土坑は直径75cm、深さ22cmを測る。土器片6点(1・2)が出土しているが、どちらの土坑のものかは確定できない。出土土器から、加曾利E3式期に比定される可能性が高い。



第49図 6区 157号土坑



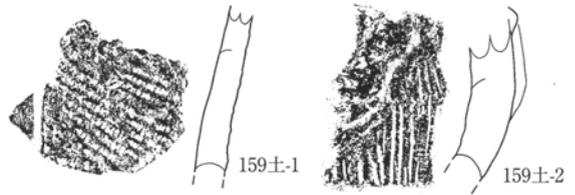
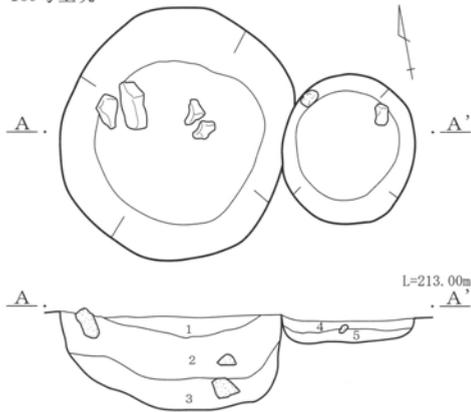
- 6区158土坑
- 1 褐色土 φ1~5mmの褐色軽石、礫含む。
 - 2 暗黄褐色土 φ1~5mmの褐色軽石、礫含む。
 - 3 黄褐色土 φ1~5mmの褐色軽石、礫含む。
 - 4 黄褐色土 φ1~5mmの褐色軽石、礫、粘質黄褐色土ブロック含む。
 - 5 明黄褐色土 二次堆積粘質黄褐色土。



第50図 6区 158号土坑

第4章 検出された遺構と遺物

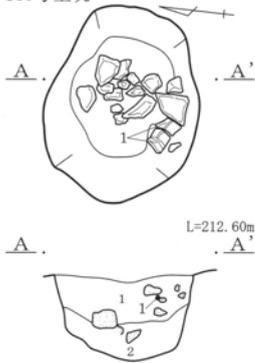
159号土坑



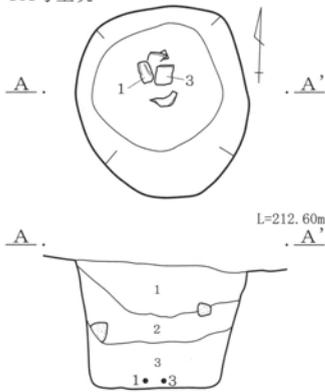
6区159土坑

- 1 褐色土 φ1~3mmの褐色軽石含む。
- 2 黄褐色土 φ1~3mmの褐色軽石、礫含む。
- 3 明黄褐色土 φ1~3mmの褐色軽石、礫含む。
- 4 褐色土 φ1~3mmの褐色軽石含む。
- 5 黄褐色土 φ1~3mmの褐色軽石含む。

160号土坑



161号土坑

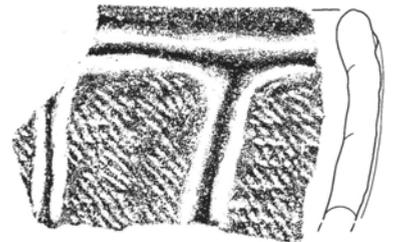
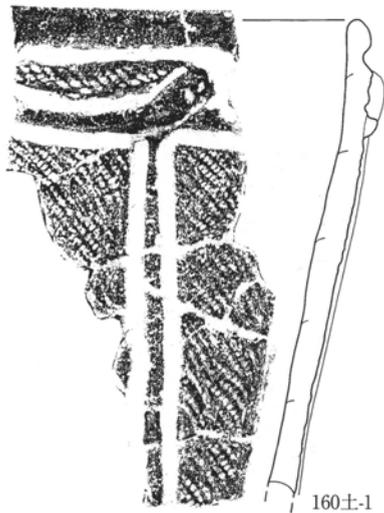


6区161土坑

- 1 褐色土 φ1~3mmの黄褐色軽石、礫含む。
- 2 黄褐色土 φ1~3mmの黄褐色軽石、礫含む。
- 3 明黄褐色土 φ1~3mmの黄褐色軽石、礫含む。

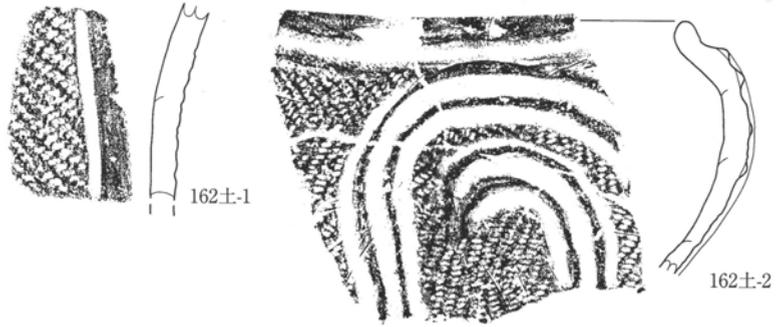
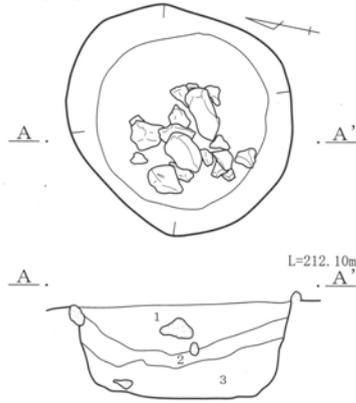
6区160土坑

- 1 褐色土 φ1~5mmの褐色軽石、礫含む。
- 2 黄褐色土 φ1~5mmの褐色軽石、礫含む。



第51図 6区 159~161号土坑

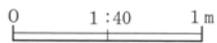
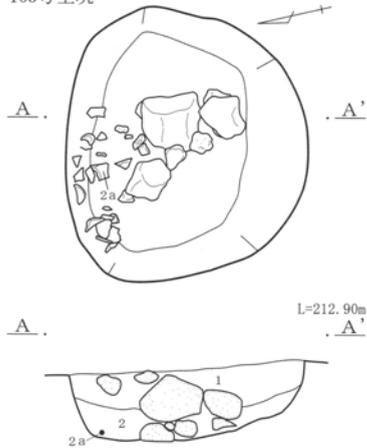
162号土坑



6区162土坑

- 1 褐色土 φ1~5mmの褐色軽石含む。
- 2 黄褐色土 φ1~5mmの褐色軽石含む。
- 3 明黄褐色土 φ1~5mmの褐色軽石、礫含む。

163号土坑

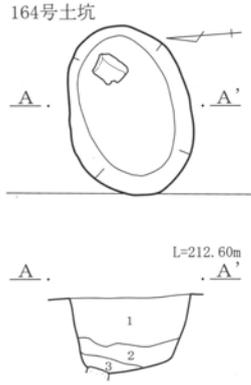
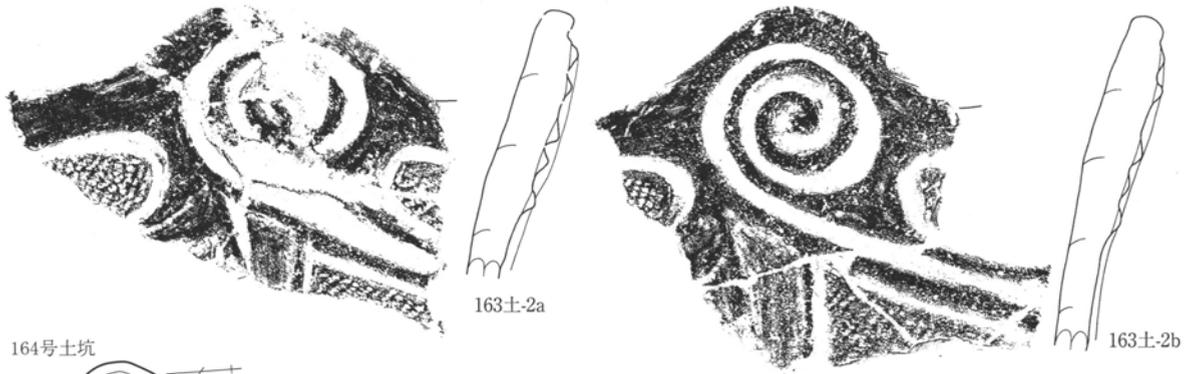


6区163土坑

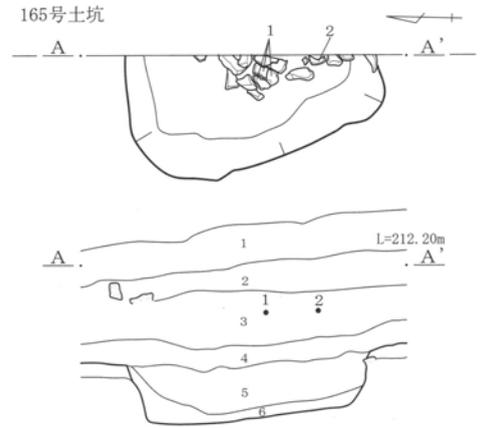
- 1 黒褐色土 φ1~5mmの褐色軽石、礫含む。
- 2 褐色土 φ1~5mmの褐色軽石、礫含む。



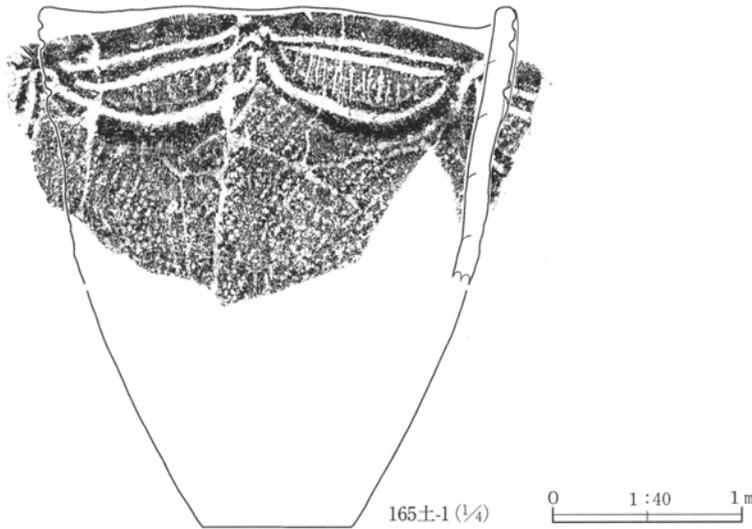
第52図 6区 162・163(1)号土坑



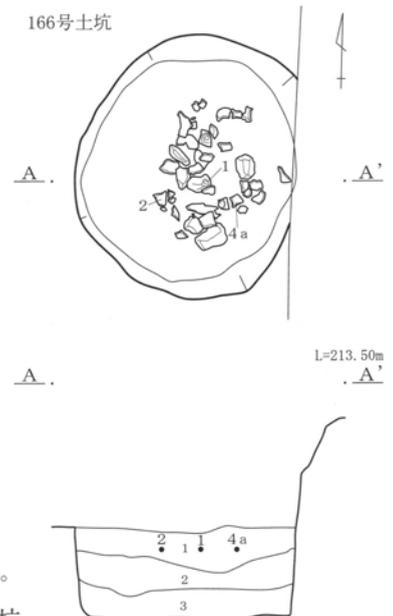
- 6区164土坑
- 1 黄褐色土 φ1~5mmの褐色軽石、礫含む。
 - 2 暗黄褐色土 φ1~5mmの褐色軽石、礫含む。
 - 3 黄褐色土 φ1~5mmの褐色軽石、礫含む。



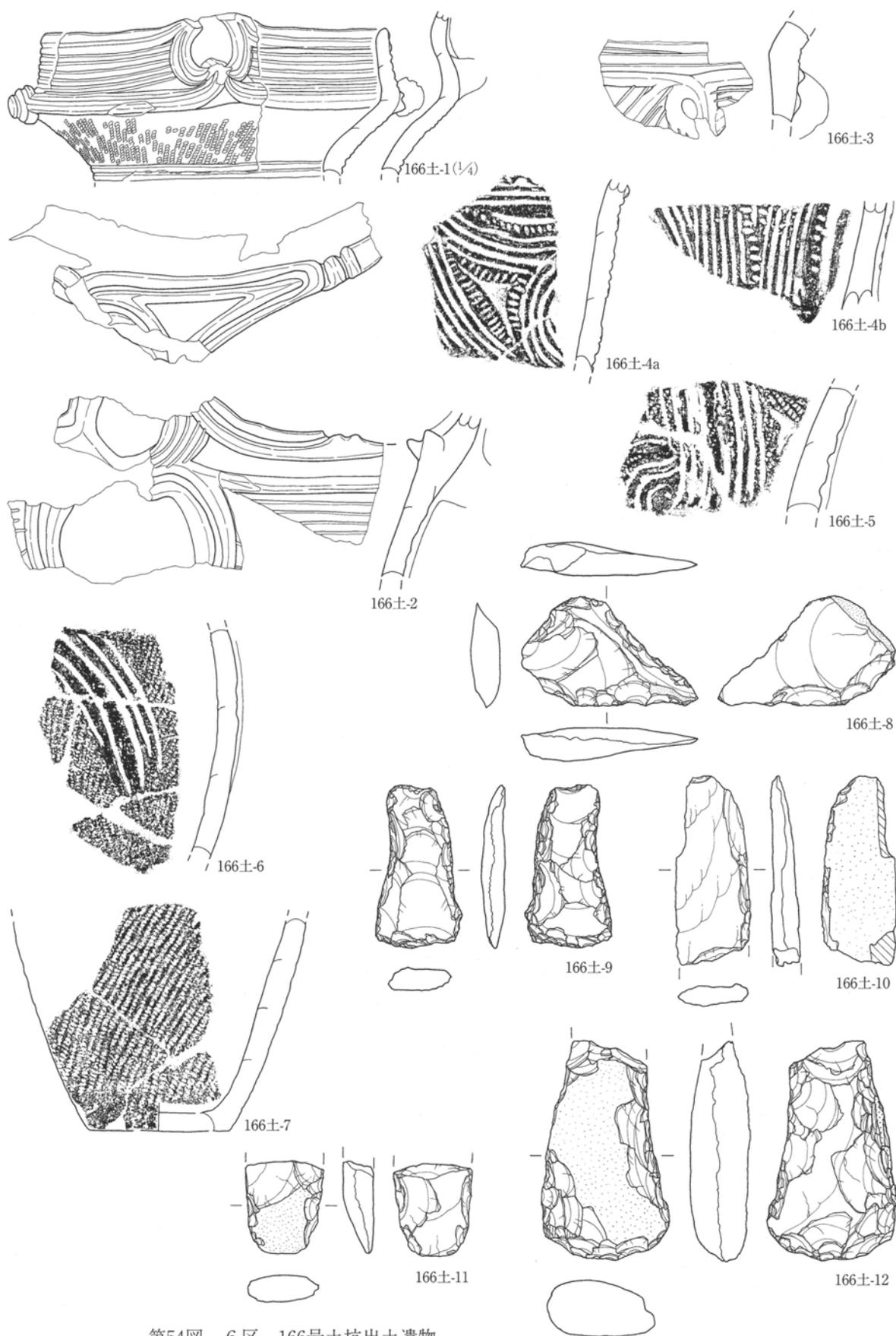
- 6区165土坑
- 1 Hr-FA (S1・S2ユニット)
 - 2 黒色土 φ1~5mmの褐色軽石、少量のAs-C粒含む。20住周堤盛土。
 - 3 淡黒色土 φ1~5mmの褐色軽石含む。
 - 4 淡色黒ボク土 φ1~5mmの褐色軽石含む。
 - 5 褐色土 φ1~5mmの褐色軽石含む。
 - 6 黄色土 二次堆積粘質黄褐色土。



- 6区166土坑
- 1 褐色土 φ1~3mmの褐色軽石含む。
 - 2 黒褐色土 φ1~3mmの褐色軽石含む。
 - 3 褐色土 φ1~3mmの褐色軽石、粘質黄褐色土ブロック含む。



第53図 6区 163(2)・164~166号土坑



第54図 6区 166号土坑出土遺物

6区160号土坑

520-740グリッドに位置する。やや歪んだ円形状を呈し、長軸104cm、短軸80cm、深さ44cmを測る。埋没土の中位から基盤角礫15点や土器の大形破片4点(1)が集中して出土した。出土土器から、加曽利E3式期に比定される。

6区161号土坑

520-735グリッドに位置する。やや歪んだ円形状を呈し、長軸102cm、短軸90cm、深さ72cmを測る。埋没土上位より、土器片18点(1-3)や二次加工ある剥片1点が出土した。出土土器から、加曽利E4式期に比定される。

6区162号土坑

525-735グリッドに位置する。やや歪んだ円形状を呈し、長軸125cm、短軸112cm、深さ48cmを測る。底面付近より基盤角礫17点がまとまって出土し、他に埋没土中からも土器片5点(1・2)が出土している。出土土器から、加曽利E4式期に比定される。

6区163号土坑

515-745グリッドに位置する。やや歪んだ楕円形状を呈し、長軸約140cm、短軸130cm、深さ41cmを測る。中央部付近に基盤角礫11点が密集して出土し、また北壁際に土器の小破片16点が散在していた(2a)。他に埋没土中から土器片20点(1・2b)、剥片類3点が出土した。出土土器から、加曽利E3式期に比定される。

6区164号土坑

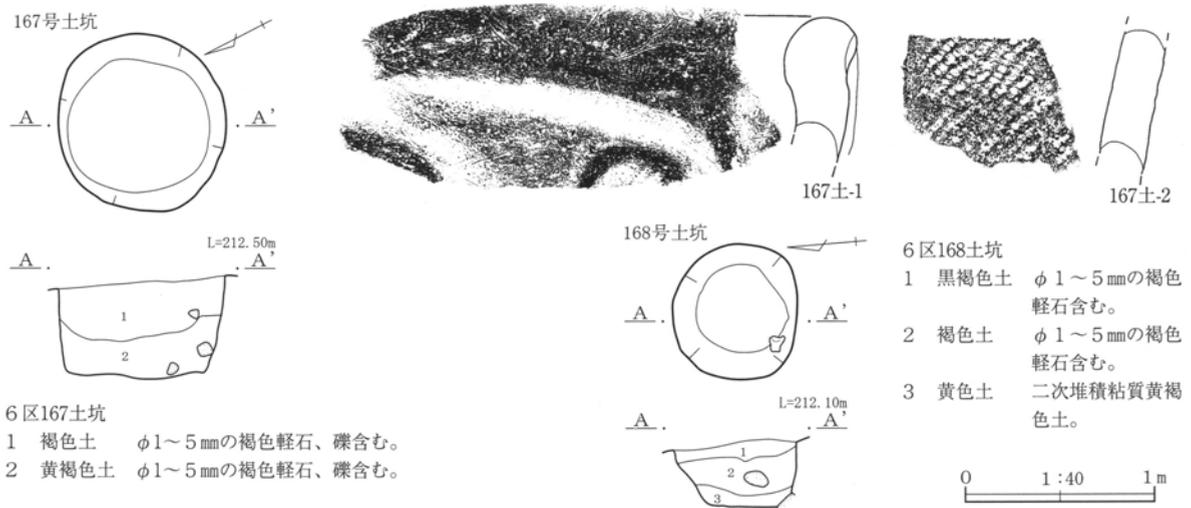
520-755グリッドに位置する。楕円形状を呈し、長軸90cm、短軸65cm、深さ42cmを測る。壁面は、やや外傾気味に立ち上がる。埋没土中より角礫1点と土器の小破片6点が出土した他は遺物なし。時期不明。

6区165号土坑

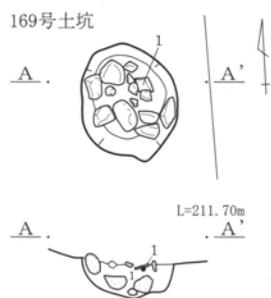
525-730グリッドに位置する。東半部が調査区外にあるため正確な規模・形状は不明であるが、方形を呈するものと思われる。最大長135cm、深さ30cmを測る。埋没土の中位から、基盤角礫9点と土器片8点(1・2)、剥片1点がまとまって出土した。出土土器から、加曽利E3式期に比定される。

6区166号土坑

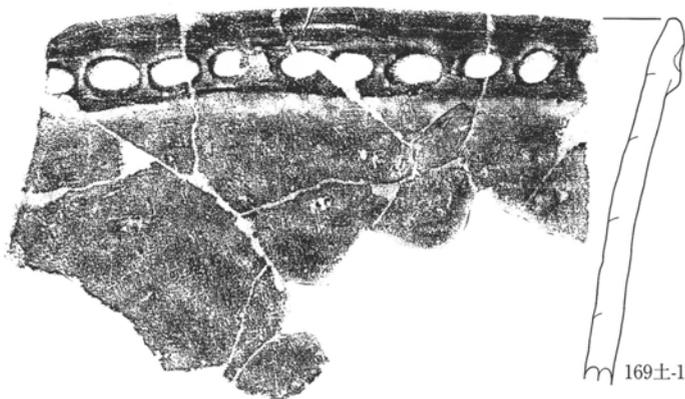
515-730グリッドに位置する。東側が一部調査区外に延びるが、現状から円形状と推測される。直径140



第55図 6区 167・168号土坑

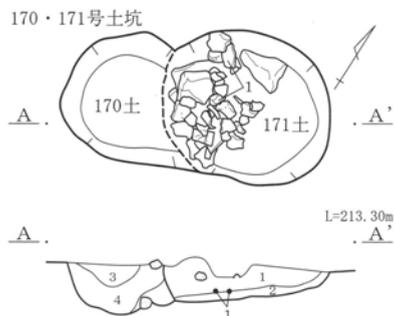


6区169土坑
1 褐色土 φ1~5mmの褐色軽石、礫含む。

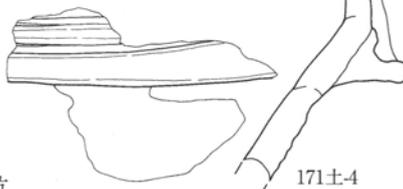
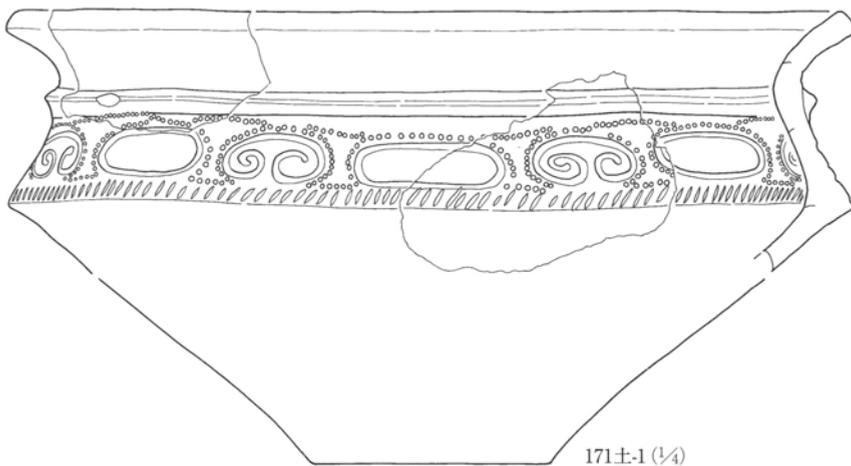
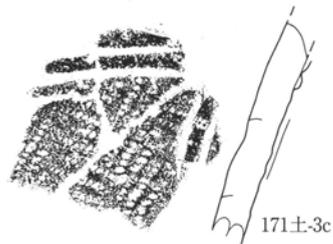
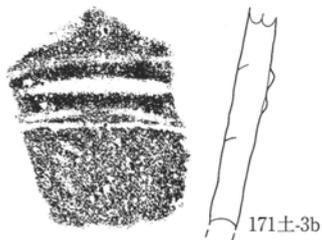
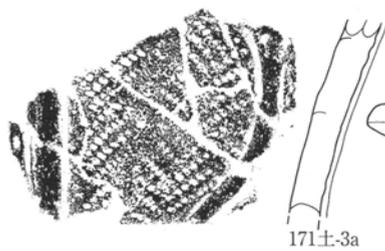


6区170・171土坑

- 1 黒褐色土 φ1~3mmの褐色軽石含む。171土覆土。
- 2 黄褐色土 φ1~3mmの褐色軽石、粘質黄褐色土ブロック含む。171土覆土。
- 3 褐色土 φ1~3mmの褐色軽石含む。170土覆土。
- 4 黄褐色土 φ1~3mmの褐色軽石、粘質黄褐色土ブロック含む。170土覆土。



0 1:40 1m



第56図 6区 169~171号土坑

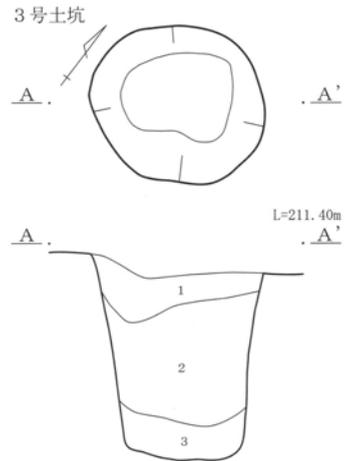
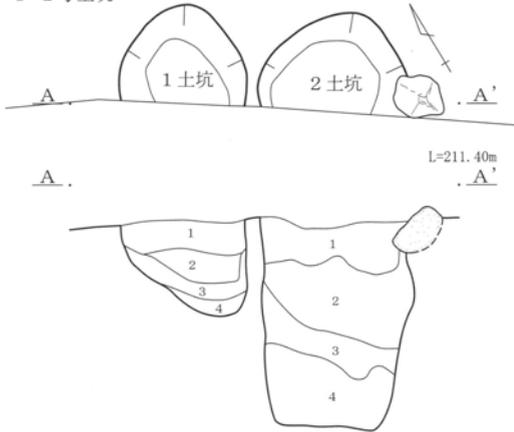
第4章 検出された遺構と遺物

深さ51cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋没土の上位より、長径10~20cmの基盤角礫6点と共に土器片34点(1~7)、スクレイパー1点(8)、打製石斧4点(9~12)、剥片類5点などがまとまって出土している。出土土器から、勝坂3式~加曾利E1式期に比定される。

6区167号土坑

510-730グリッドに位置する。3号集石の下位から検出された。円形状を呈し、直径約90cm、深さ55cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋没土中より土器片15点(1・2)、二次加工ある剥片1点が出土した。出土土器から、加曾利E3式期に比定される。

1・2号土坑



7区1号土坑

- 1 褐色土 φ1~5mmの褐色・灰色軽石粒含む。
- 2 褐色土 φ1~5mmの褐色・灰色軽石粒、粘質黄褐色土粒含む。φ10cm程度の礫混入。
- 3 褐色土 1層に似るがより粘性強い。
- 4 黄褐色土 粘質黄褐色土を主体とする。

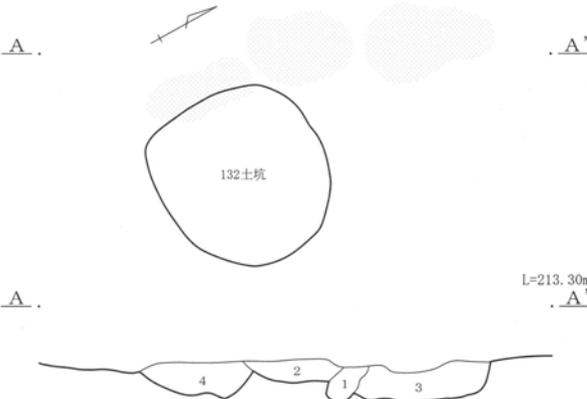
7区2号土坑

- 1 褐色土 φ1~5mmの褐色・灰色軽石粒、粘質黄褐色土粒含む。
- 2 褐色土 φ1~5mmの褐色・灰色軽石粒、粘質黄褐色土ブロック含む。やや黒味帯びる。
- 3 褐色土 φ1~5mmの褐色・灰色軽石粒、粘質黄褐色土ブロック含む。粘性強い。
- 4 褐色土 2層に似るが、より粘性強い。

7区3号土坑

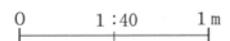
- 1 褐色土 φ1~5mmの褐色・灰色軽石粒含む。粘性あり。
- 2 褐色土 φ1~5mmの褐色・灰色軽石粒、粘質黄褐色土ブロック含む。粘性あり。
- 3 暗褐色土 φ1~5mmの褐色・灰色軽石粒、粘質黄褐色土ブロック含む。粘性あり。

1号焼土



6区1号焼土

- 1 暗褐色土 φ2~5mmの粘質黄褐色土粒含む。締まりやや強く粘性弱い。
- 2 褐色土 φ2~7mmの粘質黄褐色土・焼土粒含み、部分的にφ20~70mmの粘質黄褐色土・焼土塊混入。締まり強く粘性弱い。
- 3 褐色土 φ5~10mmの粘質黄褐色土粒含み、部分的にφ20~30mmの焼土塊混入。締まり強く粘性弱い。
- 4 褐色土 φ5~10mmの粘質黄褐色土粒多量に含み、φ70mm程の焼土塊部分的に混入。締まり強く粘性弱い。



第57図 7区 1~3号土坑、6区 1号焼土

6区168号土坑

525-740グリッドに位置する。やや歪んだ円形状を呈し、直径67cm、深さ38cmを測る。遺物は土器が1点のみで、時期不明。

6区169号土坑

530-730グリッドに位置する。やや歪んだ円形状を呈し、直径約55cm、深さ25cmを測る。埋没土の下位から、大型の深鉢破片(1)と基盤角礫10点、土器片5点が出土した。出土土器から、堀之内1式期に比定される。

6区170号土坑

510-745グリッドに位置する。東側の一部を171号土坑に切られている。現状で長さ70cm、深さ28cmを測る。出土遺物は皆無であるが、171号との重複関係から加曾利E2式期以前に比定される可能性が高い。

6区171号土坑

510-745グリッドに位置する。170号土坑を切っている。やや歪んだ円形状を呈し、長軸90cm、短軸80cm、深さ18cmを測る。埋没土の下位から、基盤角礫15点と共に土器片20点(1~4)がまとまって出土した。出土土器から、加曾利E2式期に比定される。

7区1号土坑

540-745グリッドに位置する。南側が調査区外にあるため、正確な規模・形状は不明である。現状で長径54cm、深さ50cmを測る。出土遺物は皆無で、時期不明。

7区2号土坑

540-745グリッドに位置し、1号土坑に隣接する。こちらも南側が調査区外のため規模、形状ともに不明。現状で長径74cm、深さ110cmを測る。壁面はほぼ直立する。出土遺物は皆無で、時期不明。

7区3号土坑

540-740グリッドに位置する。やや歪んだ円形状を呈し、長軸94cm、短軸82cm、深さ110cmを測る。壁面は外傾気味に立ち上がる。土器の小破片が9点出土しているが、時期不明である。

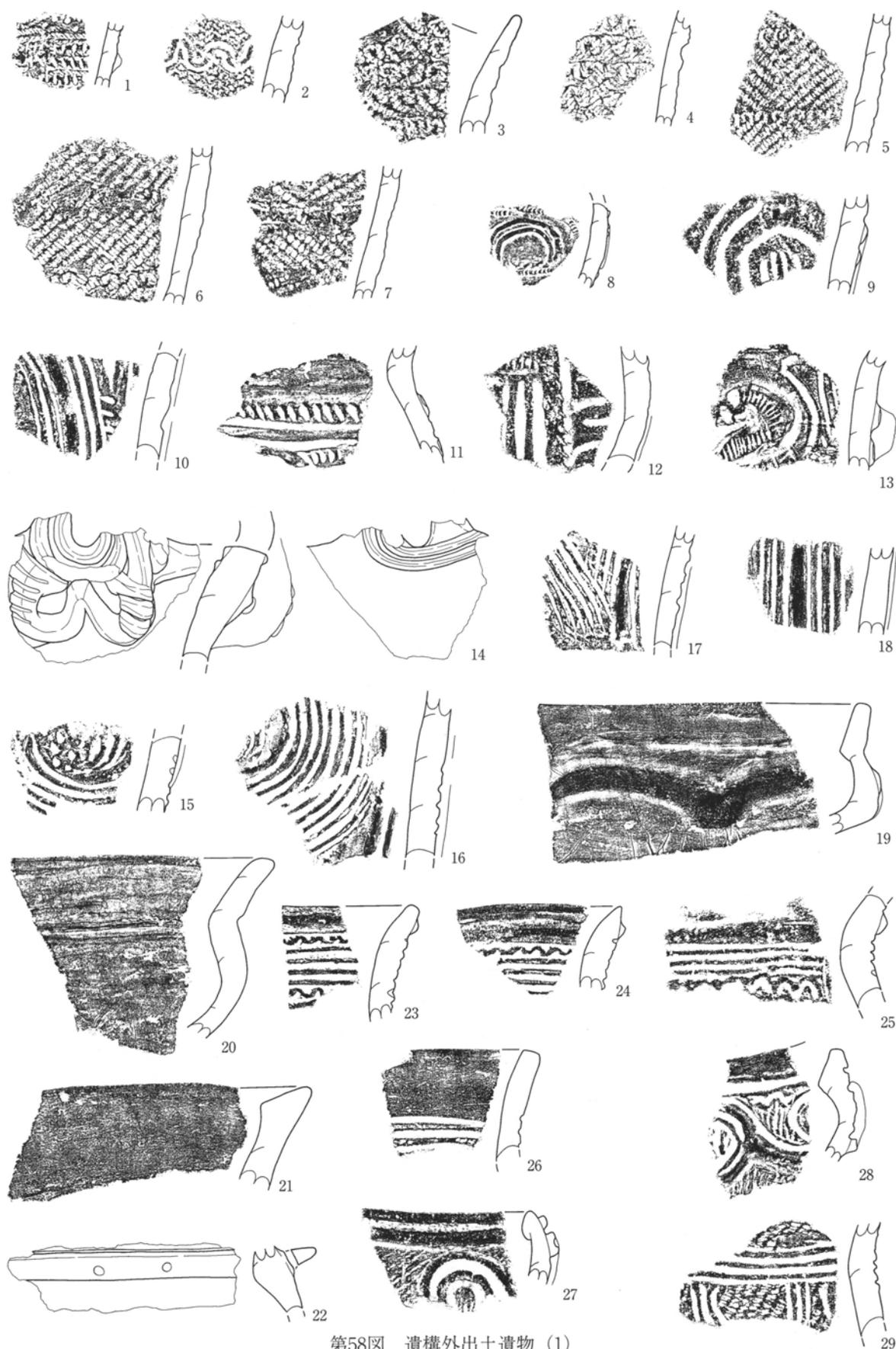
6) 焼土

510-745グリッドに位置する。平面図では遺構確認段階の焼土の範囲のみを示してあるが、断面の観察から、浅い掘り込みの中に基盤の粘質黄褐色土や焼土を埋填した状況が伺える。伴出遺物が皆無のために時期不明であるが、1号列石の北側に近接して存在しており、同列石での何らかの祭儀礼に伴う焚火行為により形成された可能性もある。

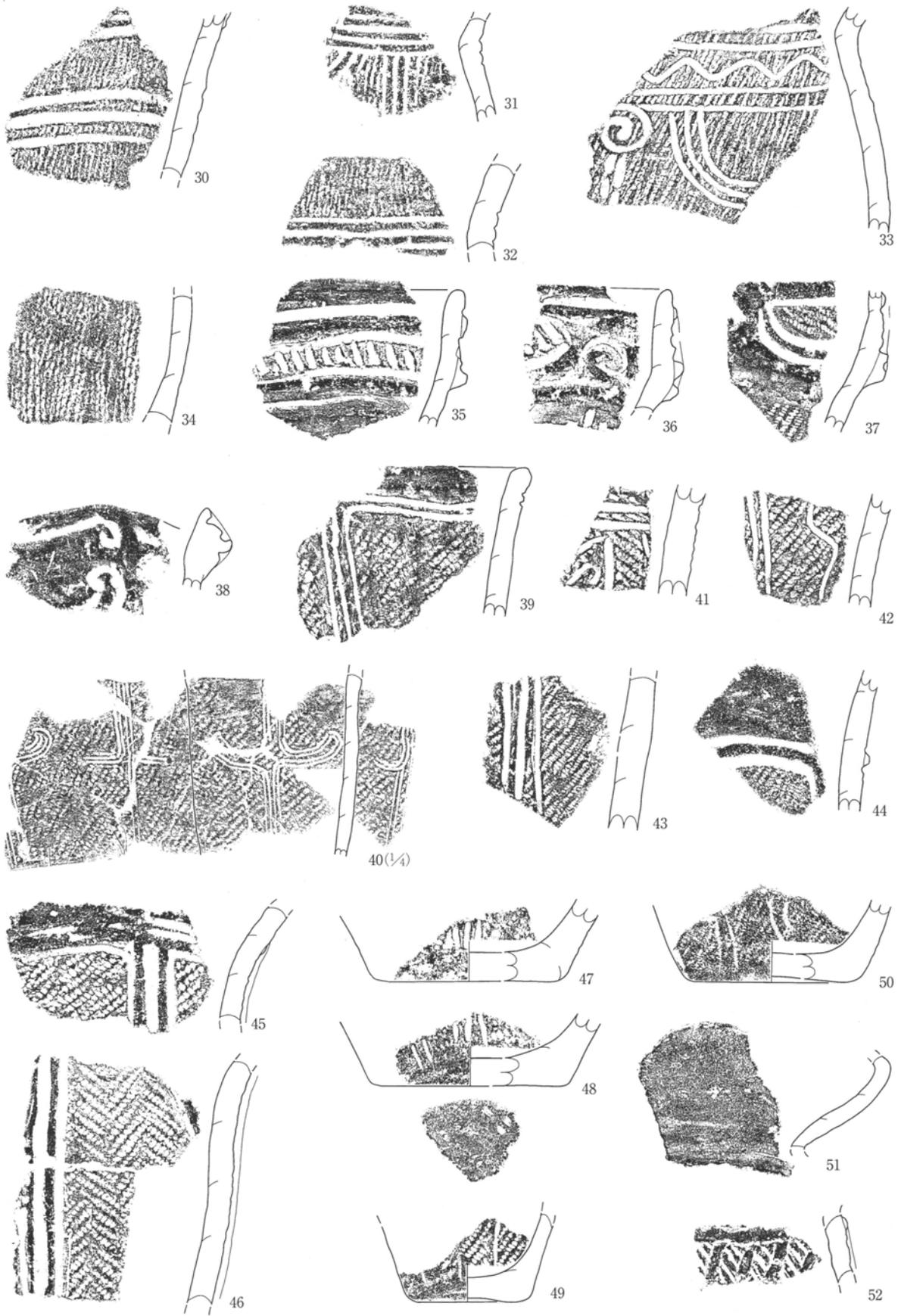
7) 遺構外出土遺物

縄文時代の遺構が発見された6、7区では、古墳時代の住居埋没土からも多量の縄文土器や石器が出土している。特にFA下では、古墳時代住居の掘削が縄文時代の包含層にまで達しており、その排土に含まれる多量の土器が周堤の盛土内に含まれていたり、住居埋没時に流れ込んだりしていた。1~5区においても縄文時代の遺物が出土しているが、量的にはごくわずかである。

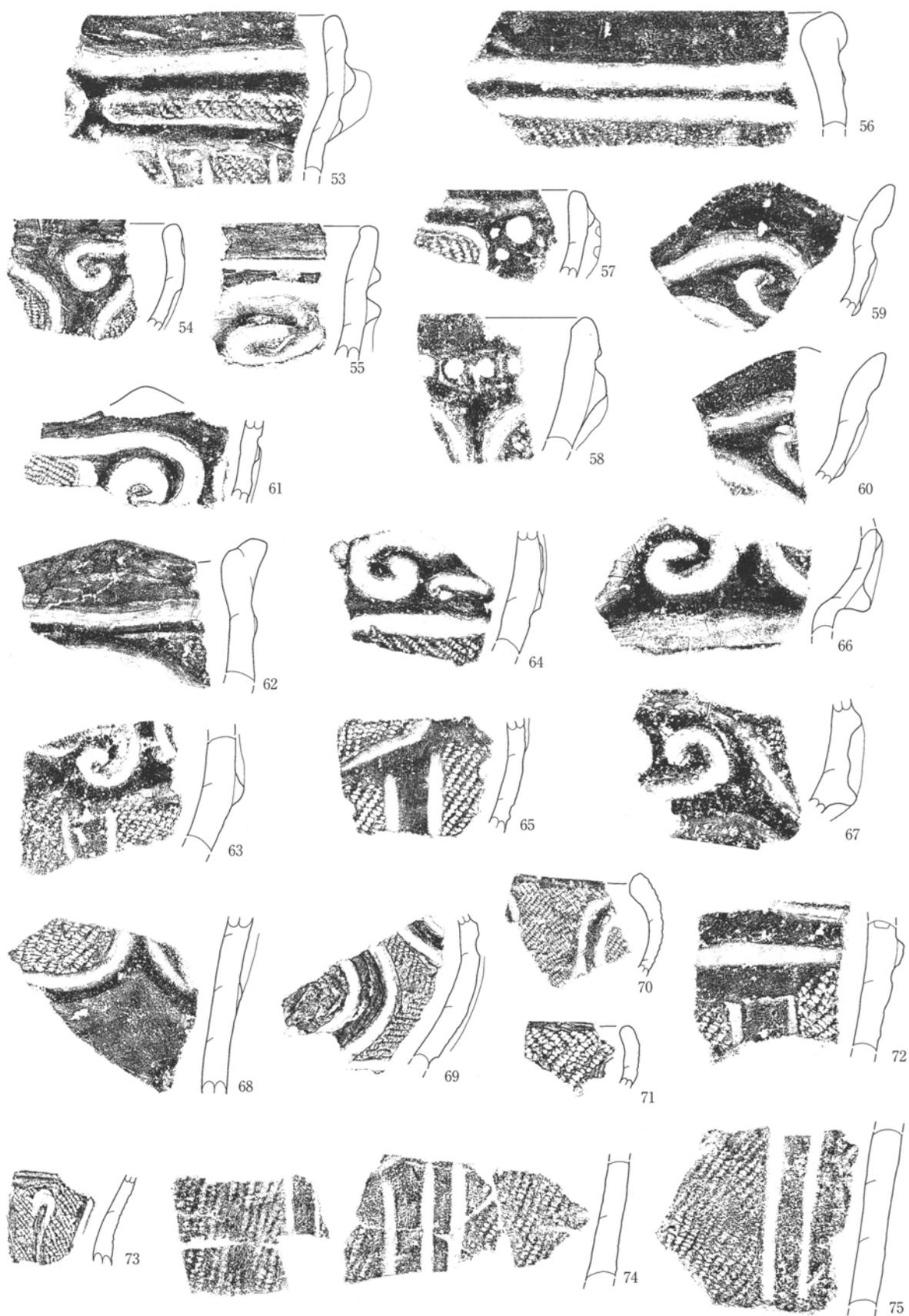
土器は総点数で2000点あまりに達する。中期から後期中葉にかけての土器が大半を占めるが、前期の土器も少数含まれる。型式分類できたものでは前期36点、中期勝坂3式~加曾利E1式150点、加曾利E1式243点(24~34)、E2式176点(35~50)、E3式311点(53~101)、E4式148点(113~140)、称名寺I・II式149点(141~169)、堀之内1・2式604点(177~238、243~279)で、他に曾利式(51・52・103~112)、三十稲葉式(175)、加



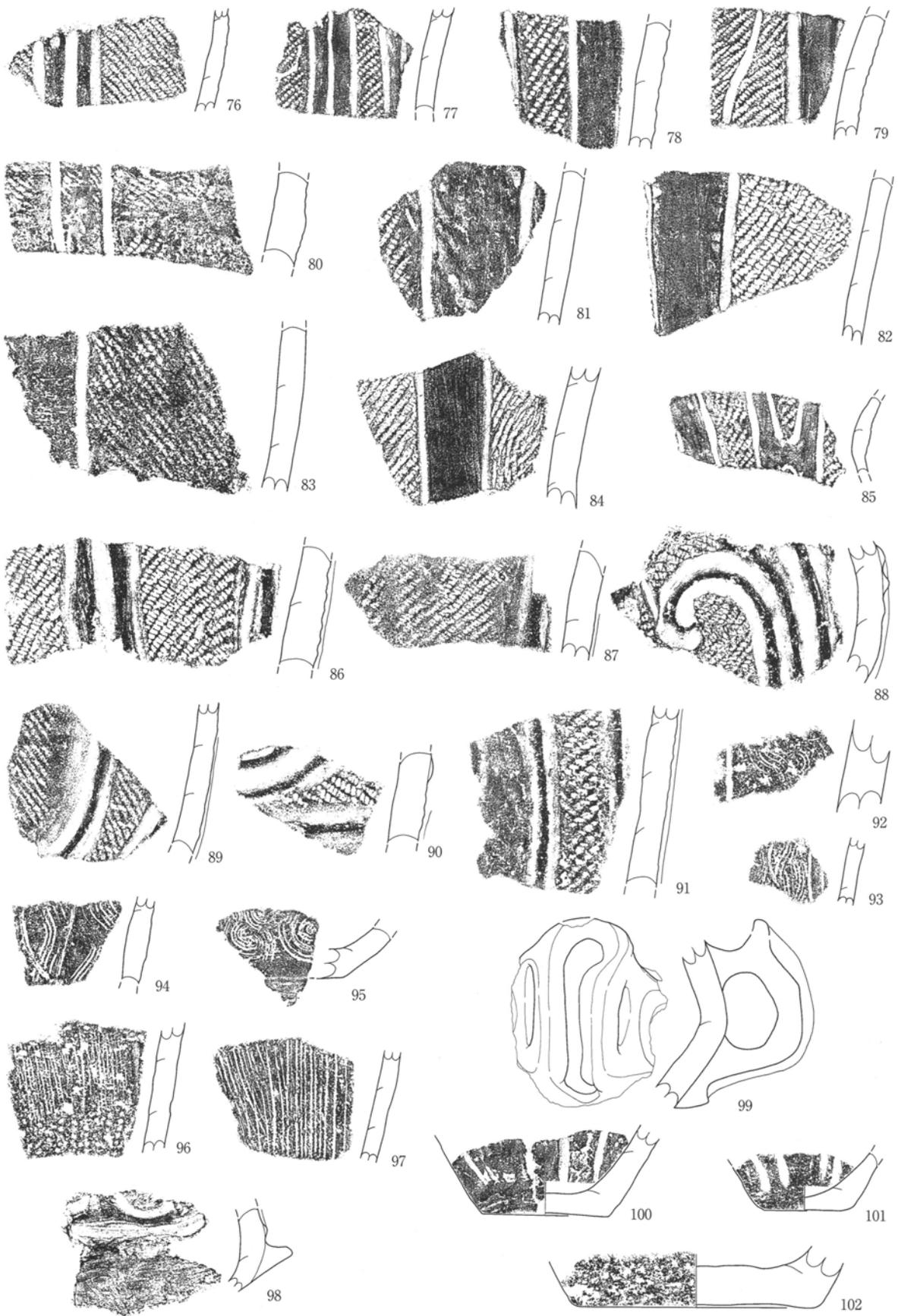
第58図 遺構外出土遺物 (1)



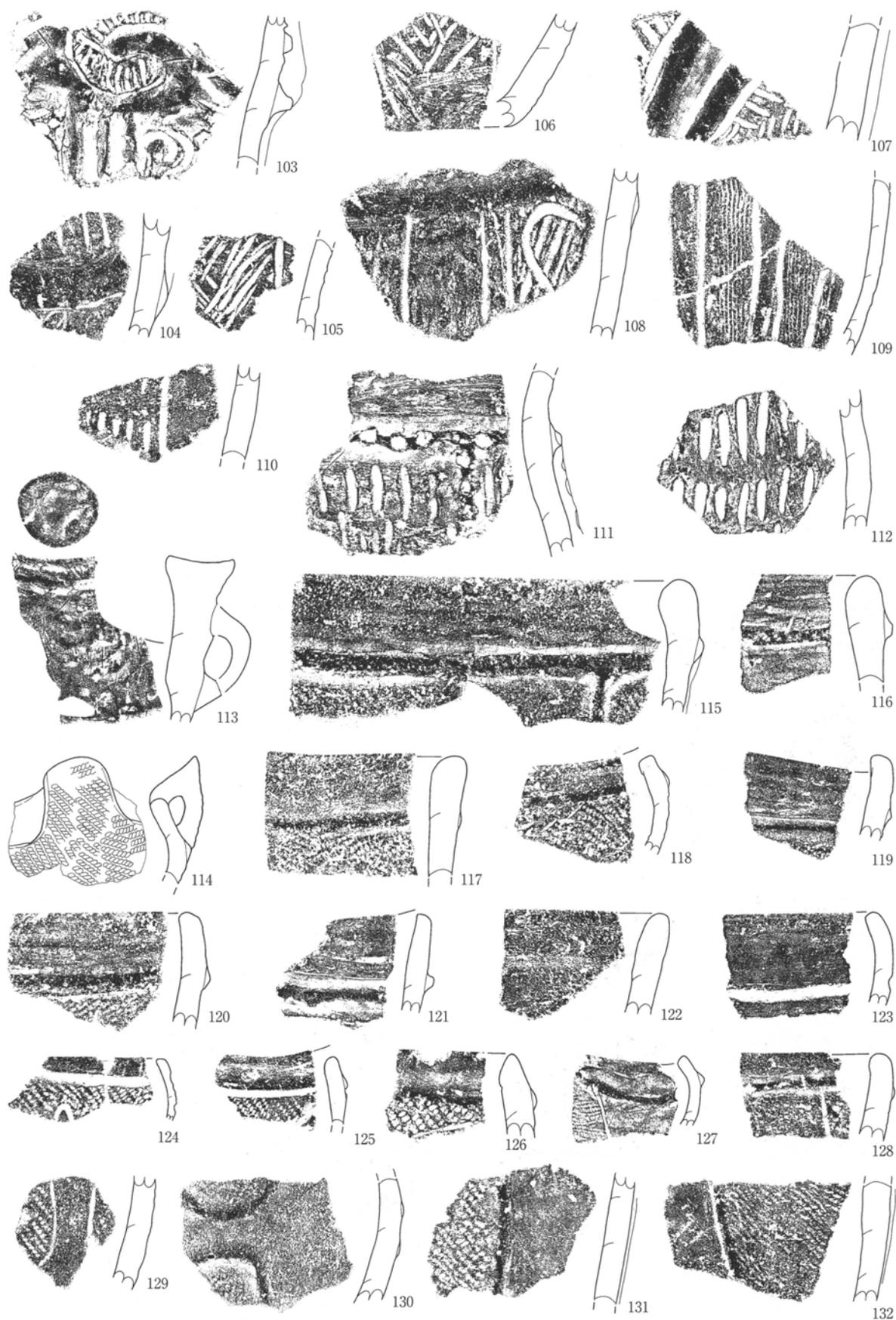
第59図 遺構外出土遺物 (2)



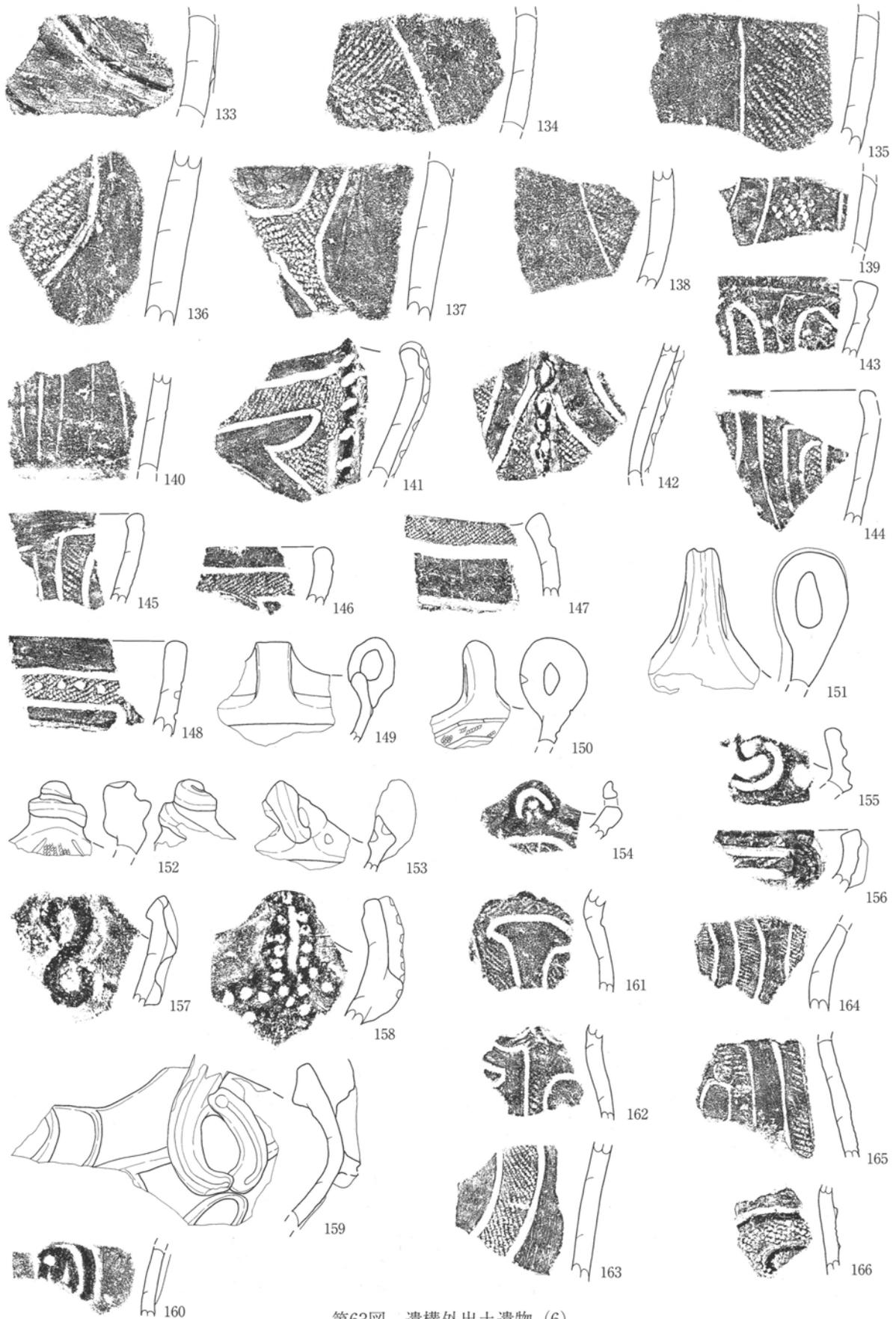
第60図 遺構外出土遺物 (3)



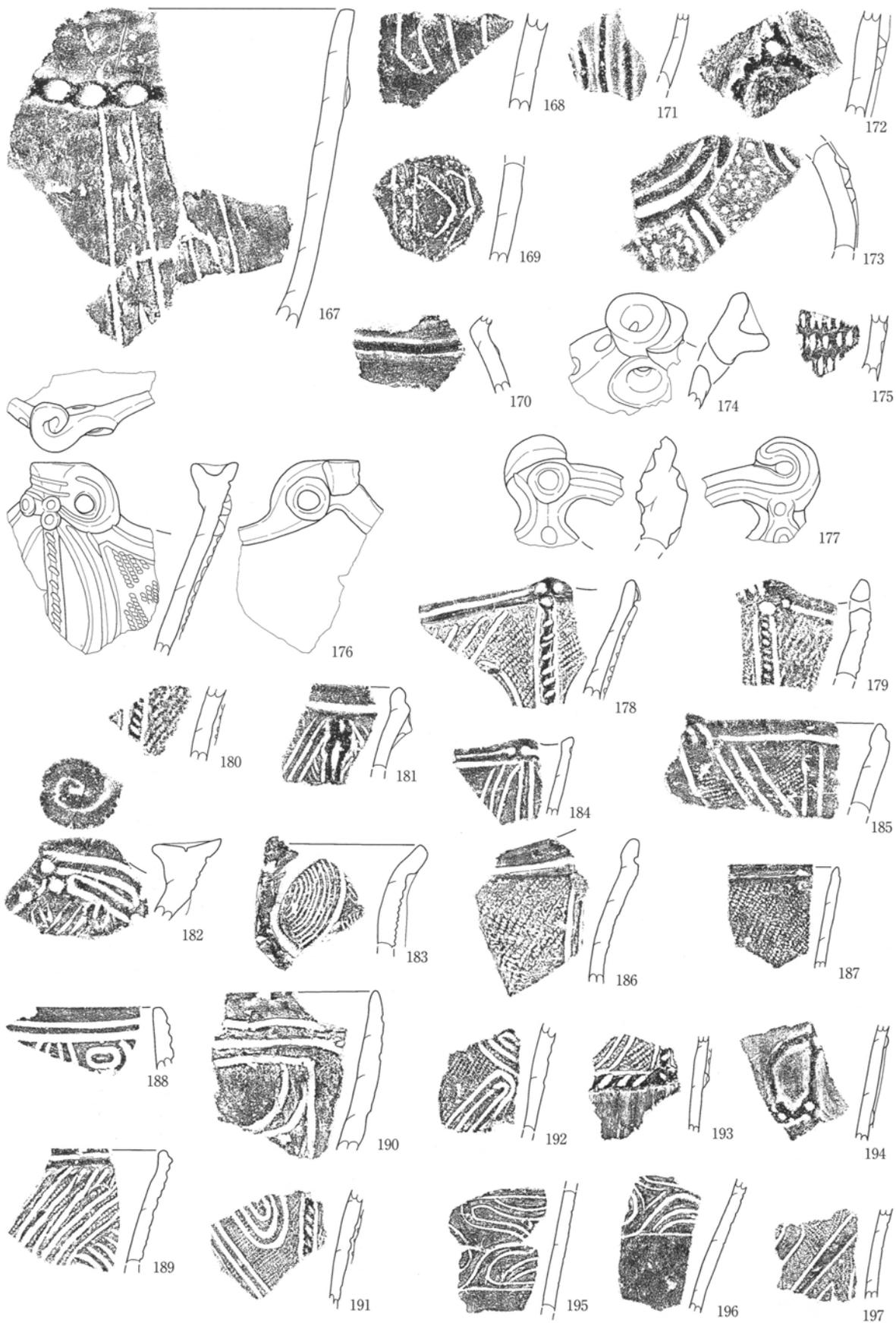
第61図 遺構外出土遺物 (4)



第62図 遺構外出土遺物 (5)



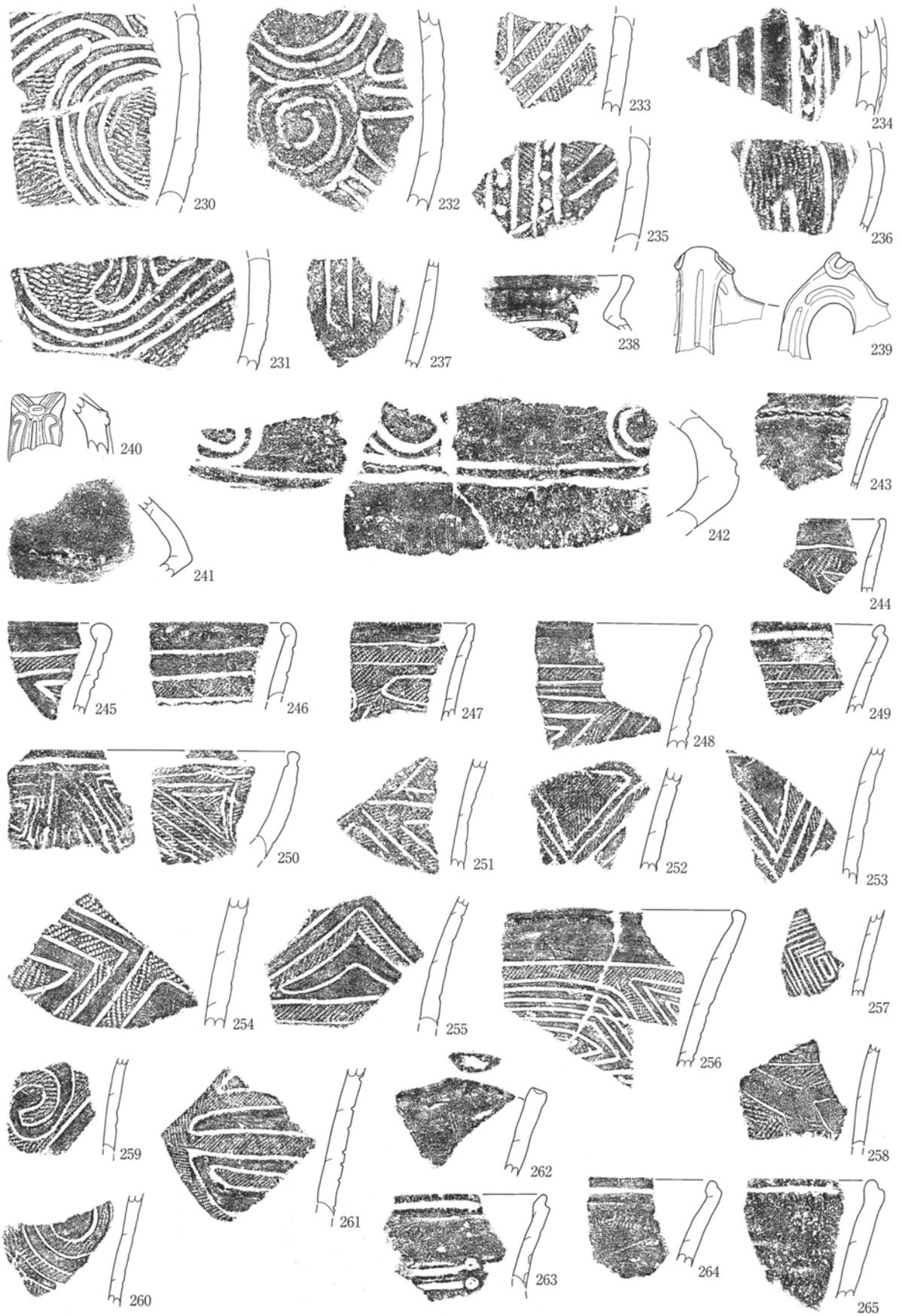
第63図 遺構外出土遺物 (6)



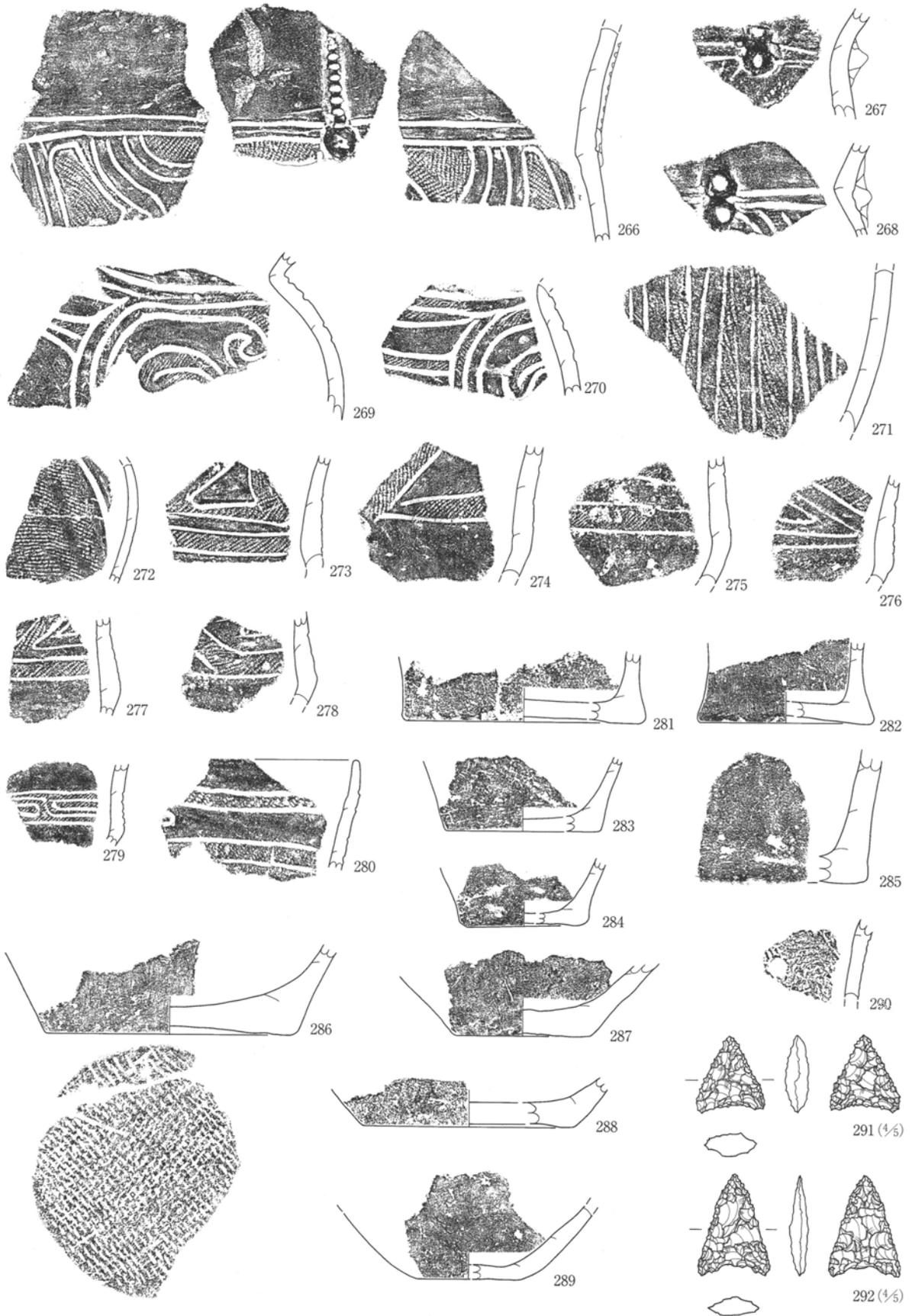
第64図 遺構外出土遺物 (7)



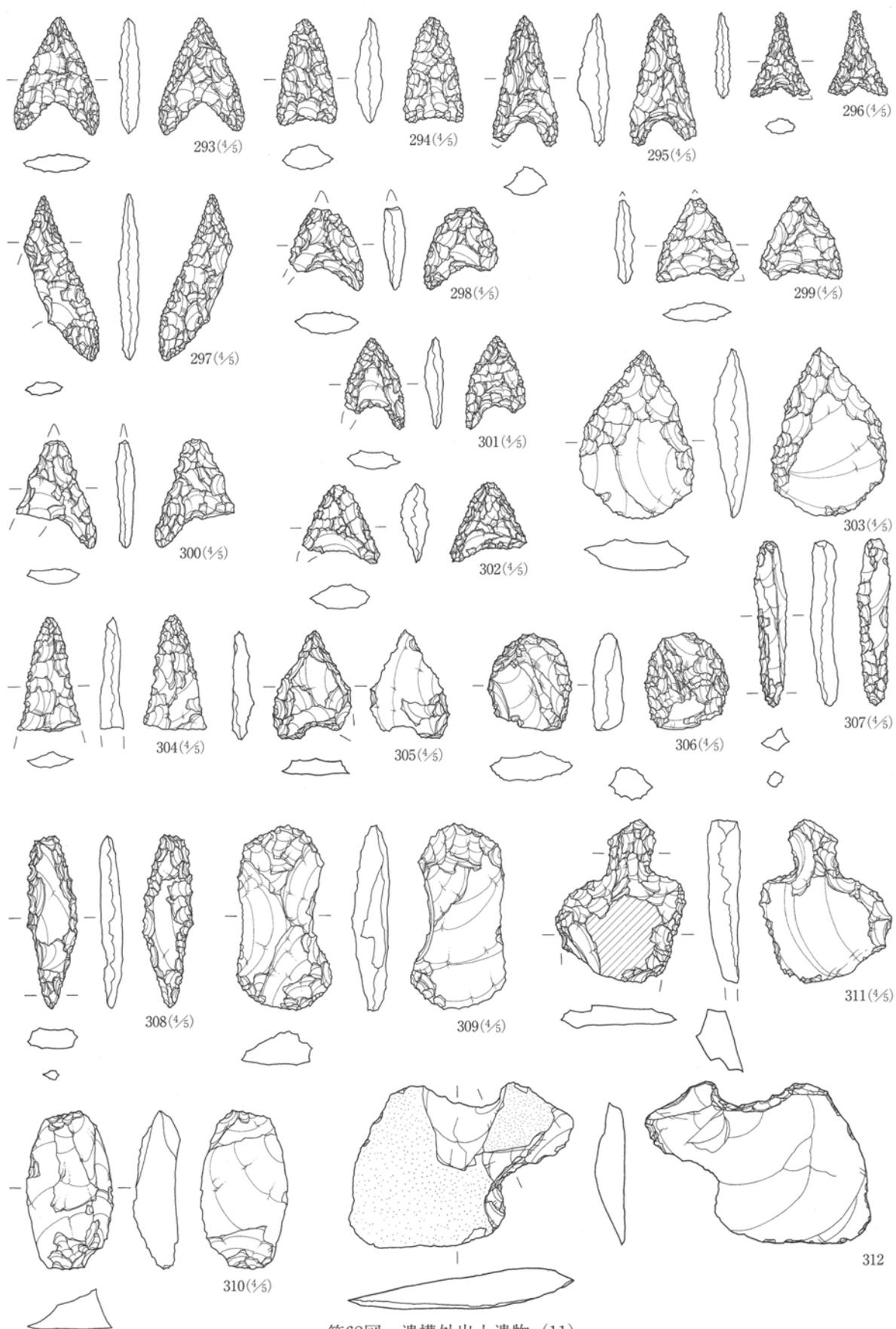
第65図 遺構外出土遺物 (8)



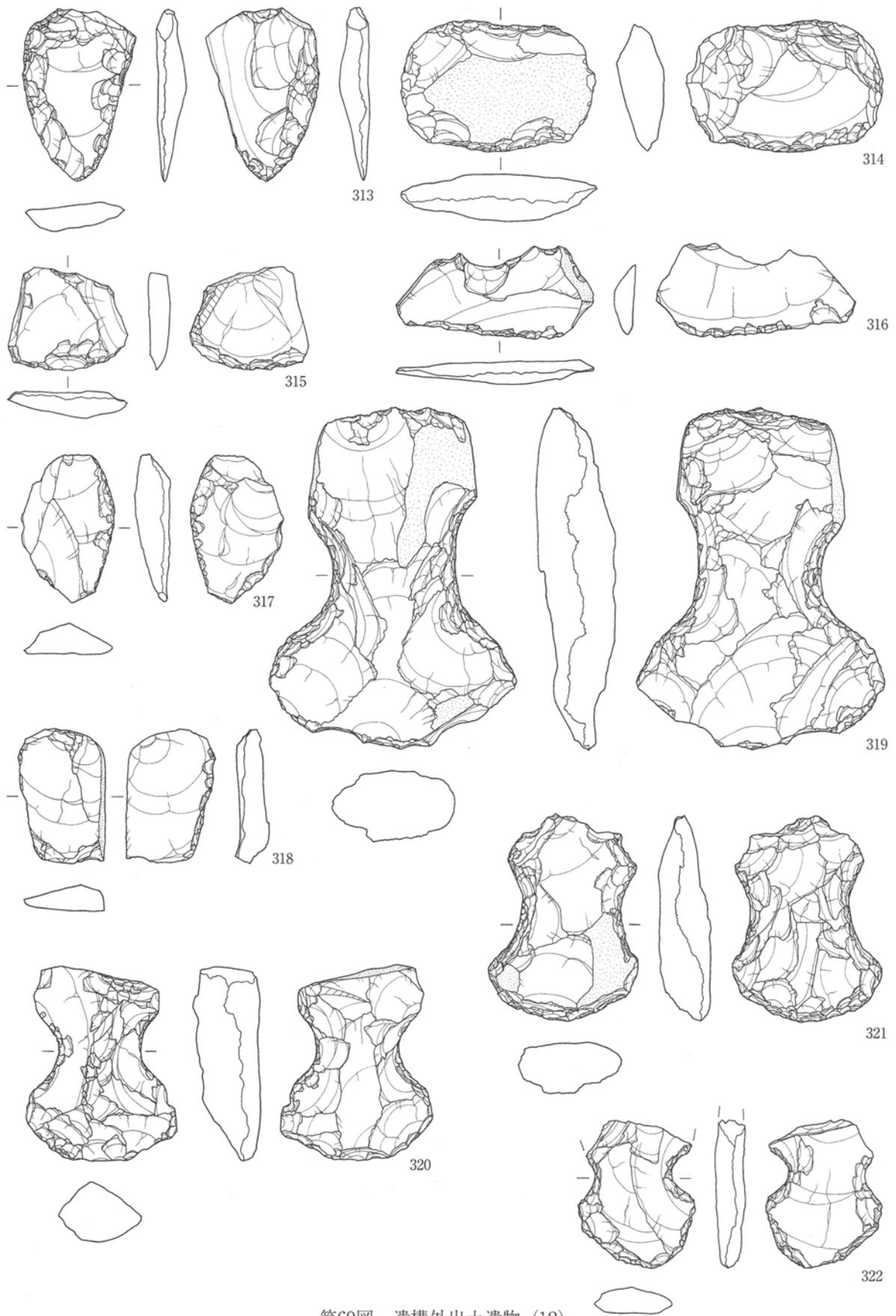
第66図 遺構外出土遺物 (9)



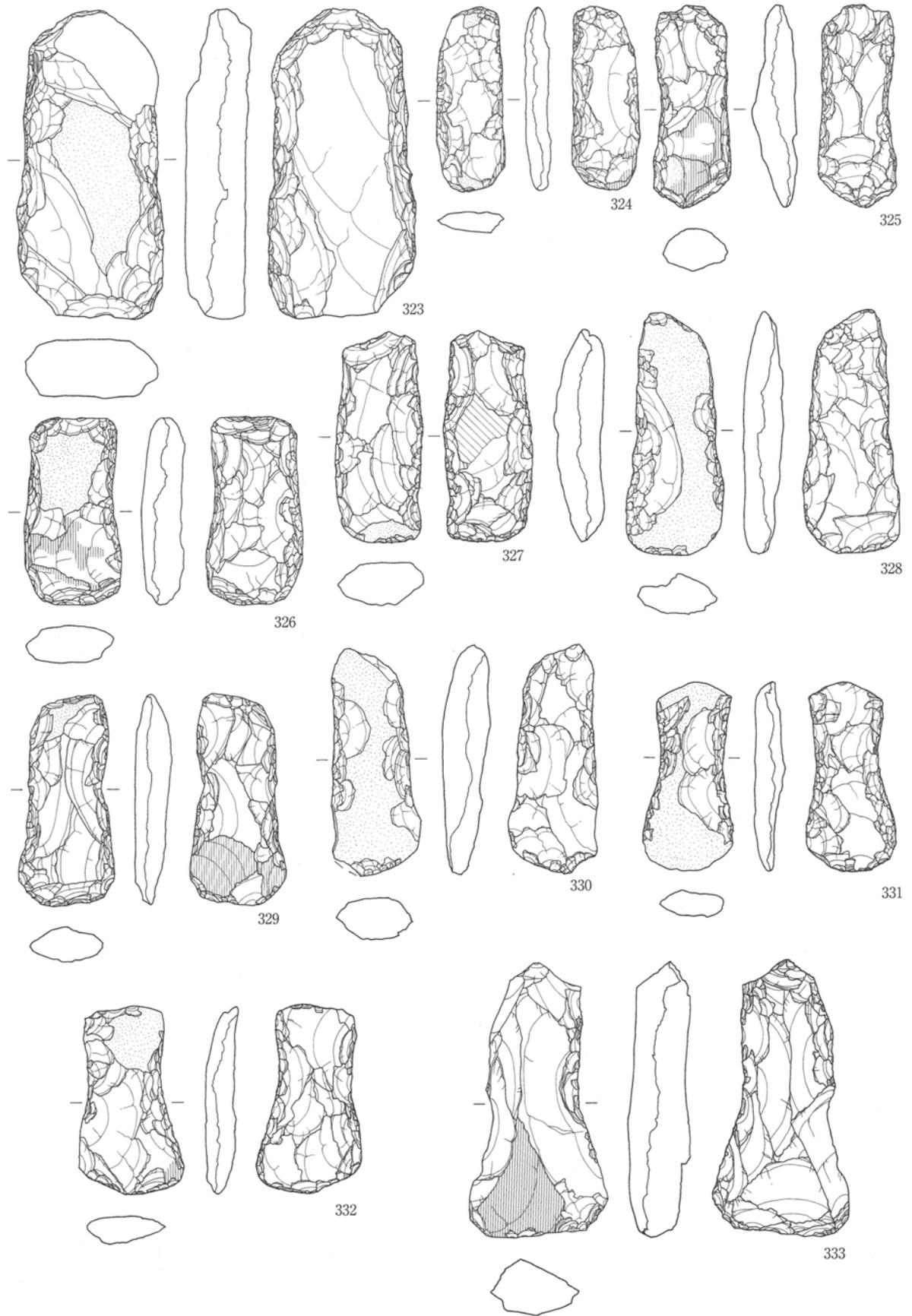
第67図 遺構外出土遺物 (10)



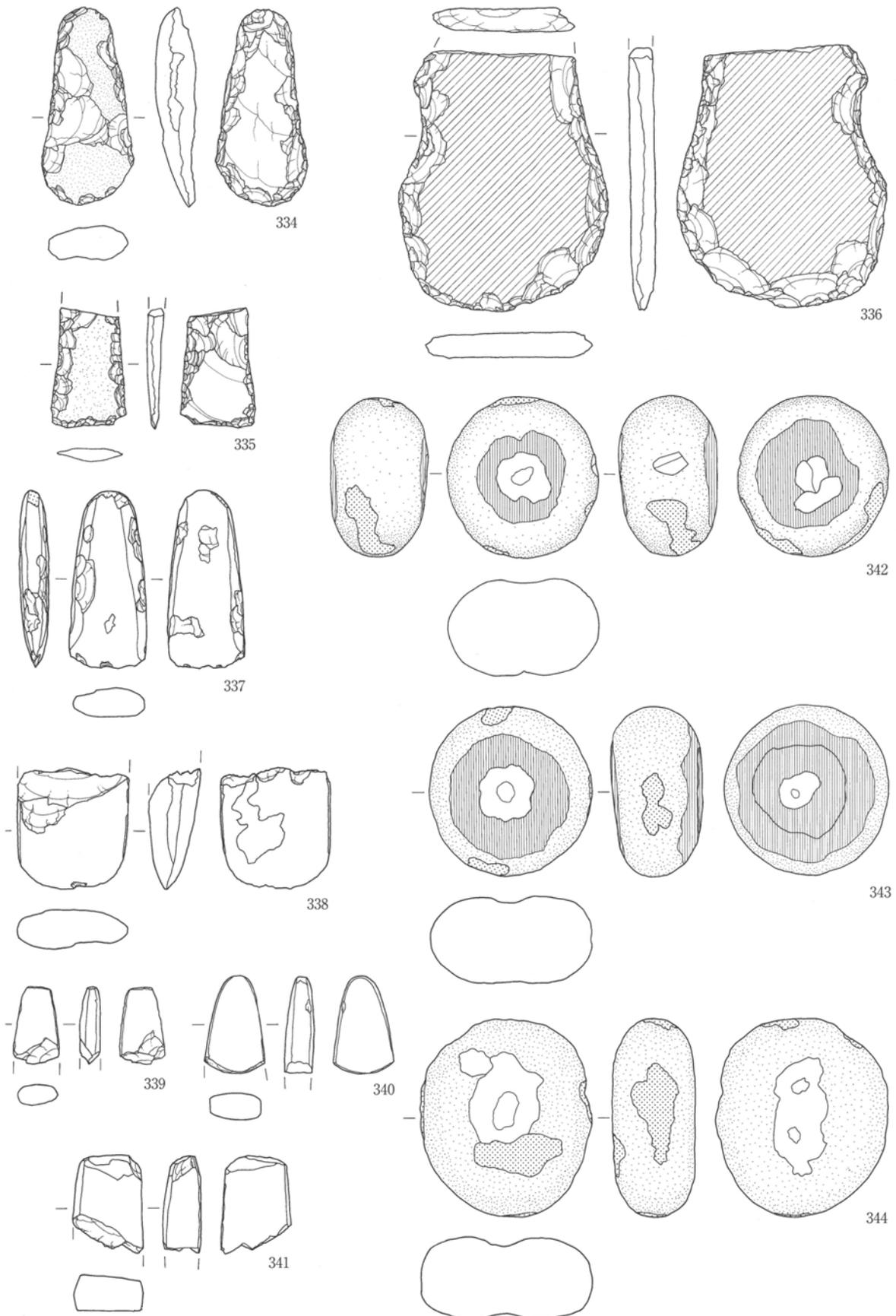
第68図 遺構外出土遺物 (11)



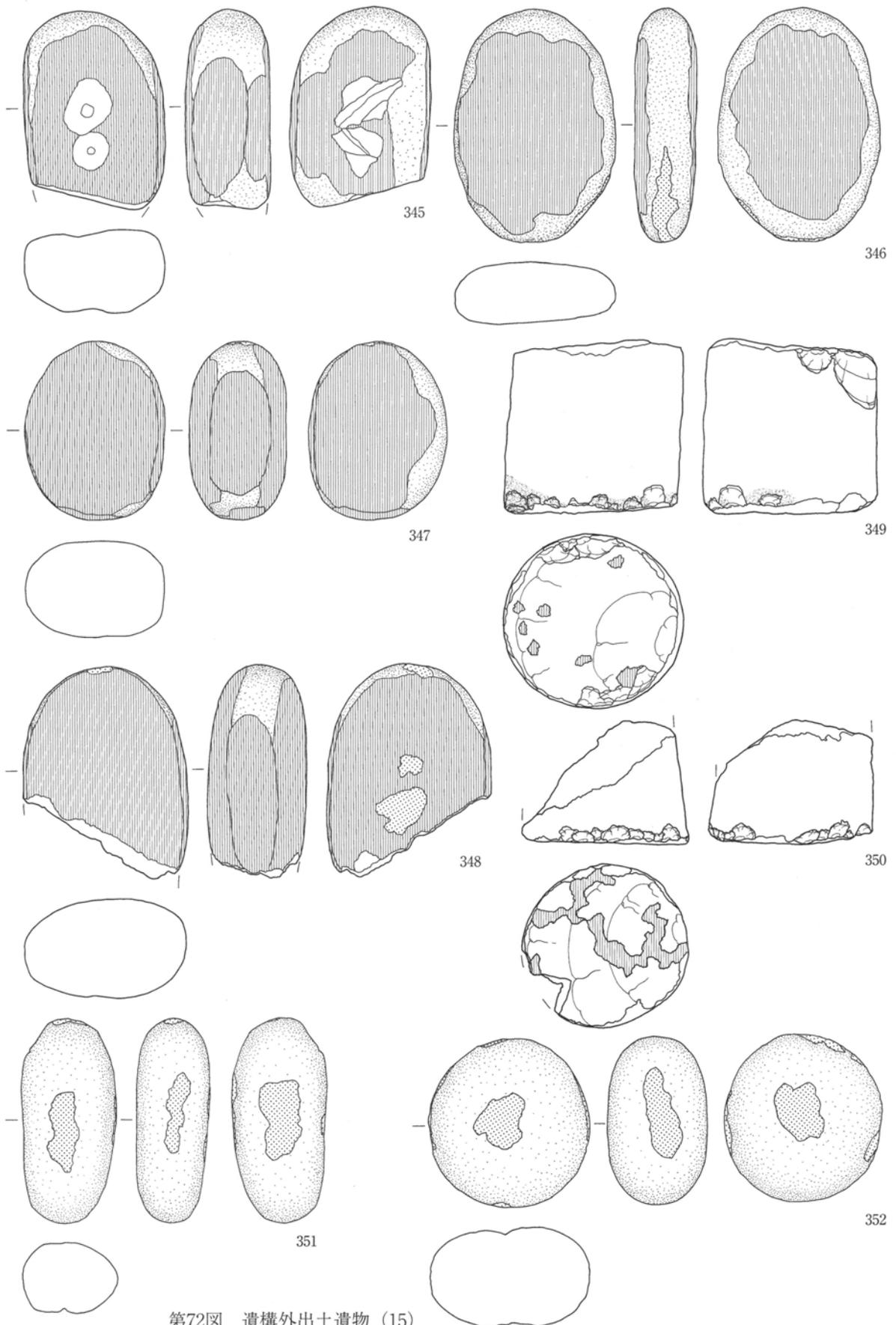
第69図 遺構外出土遺物 (12)



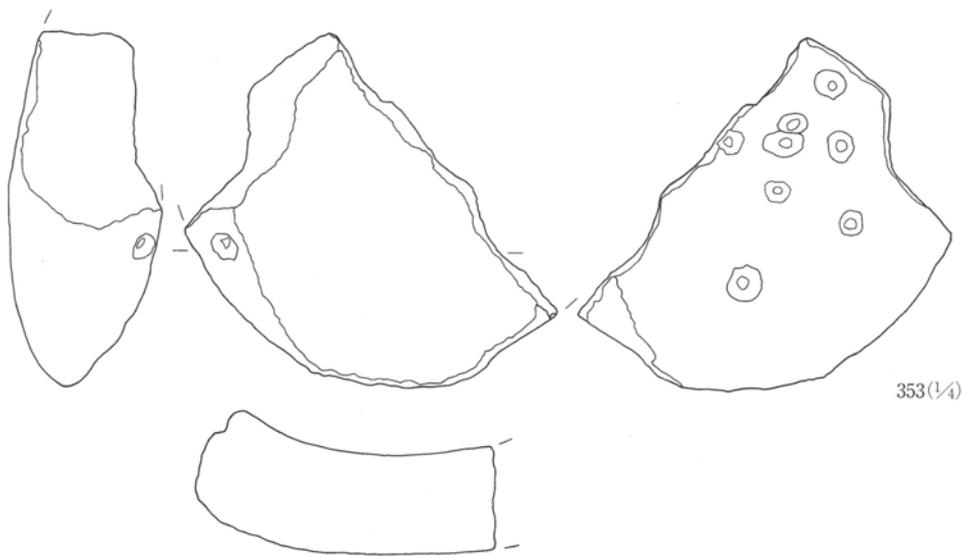
第70図 遺構外出土遺物 (13)



第71図 遺構外出土遺物 (14)



第72図 遺構外出土遺物 (15)



第73図 遺構外出土遺物 (16)

曾利B1式(280)などがある。器種はほとんどが深鉢であるが、他に浅鉢(19~21・98・174)、有孔鍔付土器(22)、注口土器(239~242)、土製円盤(169)、瓢形土器(171)などが出土している。

石器も大量に出土しており、総点数で719点に上る。このうち1~5区から出土した石器が12点、7区から出土した物も64点にすぎず、大多数は6区からの出土である。器種の内訳は、石鏃18点、石錐2点、楔形石器3点、石匙2点、スクレイパー 16点、打製石斧105点、磨製石斧5点、凹石4点、磨石5点、敲石4点、石皿1点、石核4点、台石1点、剥片類549点である。これらのうち、主な物について第67~73図に実測図を示した。石鏃は、形状が特定できた物は全て凹基無茎鏃であった。打製石斧は、分銅形、短冊形、撥形の3つに分けられるが、撥形が最も多い。石器の石材は、石鏃や石錐、楔形石器、石匙などの小型石器は、黒曜石と黒色安山岩がそれぞれ7点あり、その他はチャート3点、珪質頁岩2点、黒色頁岩3点、硬質頁岩1点、不明2点となっている。いずれも細粒・均質な石材である。スクレイパーは黒色頁岩が12点で、全体の8割近くを占める。打製石斧は細粒輝石安山岩が51点と最も多く、次いで黒色頁岩30点、灰色安山岩5点、変質玄武岩と珪質頁岩が4点、砂質頁岩3点、変質安山岩・砂岩・ホルンフェルス・ひん岩が各2点となっている。凹石、磨石、敲石は349・350を除いて全て粗粒輝石安山岩である。349・350はいずれもデイサイトで、石棒を転用した物である。直径9cm程の石棒を長さ8~9cm程に分割して利用しているが、意図的に分割したものか破損品を転用したものは判別できなかった。側面の下端部に打ち下ろした際に生じた小剥離が並ぶことから、敲石に分類した。下面には部分的に摩耗も認められることから、台などの上に軟質の被加工物を置いて敲くような使用法が想定される。同様の敲石は6区2号集石からも出土しており、特殊な遺物として注目される。

2 古墳時代

この遺跡における古墳時代の遺構は、層位的に6世紀代に堆積した2回の榛名山二ツ岳テフラによって分層が可能である。すなわち、下位から6世紀初頭の榛名二ツ岳洪川テフラ(Hr-FA)と、6世紀中葉の榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)で、この遺跡の周辺ではいずれのテフラも層厚が60cm前後に及ぶため、これによる分層が極めて容易である。なお、3世紀後半の浅間C軽石(As-C)は黒色土中に点在するのみで、一次堆積層は存在しない。

古墳時代の遺構は、これらのテフラ及び伴出遺物から、大きく3期に分けられる。すなわち、As-Cを含むⅦ層の上面に相当する古墳時代前期、As-Cを含むⅦ層からⅥ層のHr-FAの間に位置する同中・後期、Ⅳ層Hr-FP直下の同後期の3期である。

古墳時代前期 6区で3基の祭祀遺構と、土器が集中的に出土した地点を確認した。3基の祭祀遺構は10数mの間隔を置いて点在する形で分布している。いずれも当時の地表面に掘り込みを伴うことなく角礫を配置し、この周囲から土器が出土している。土器はいずれも破片の状態出土しているが、完形に近い状態に復元できることから、故意に破砕された可能性も考えられる。遺構の年代は、伴出遺物から3世紀末～4世紀前半に比定できる。この時期の遺構はこれらの祭祀遺構のみで、堅穴住居、掘立柱建物などは確認できないが、この時期が古墳時代における初出の年代で、おそらく調査区域の周囲には堅穴住居などが立地するものと考えられる。なお、4・5号掘立柱建物の詳細な年代は不明だが、奈良・平安時代の可能性が高い。

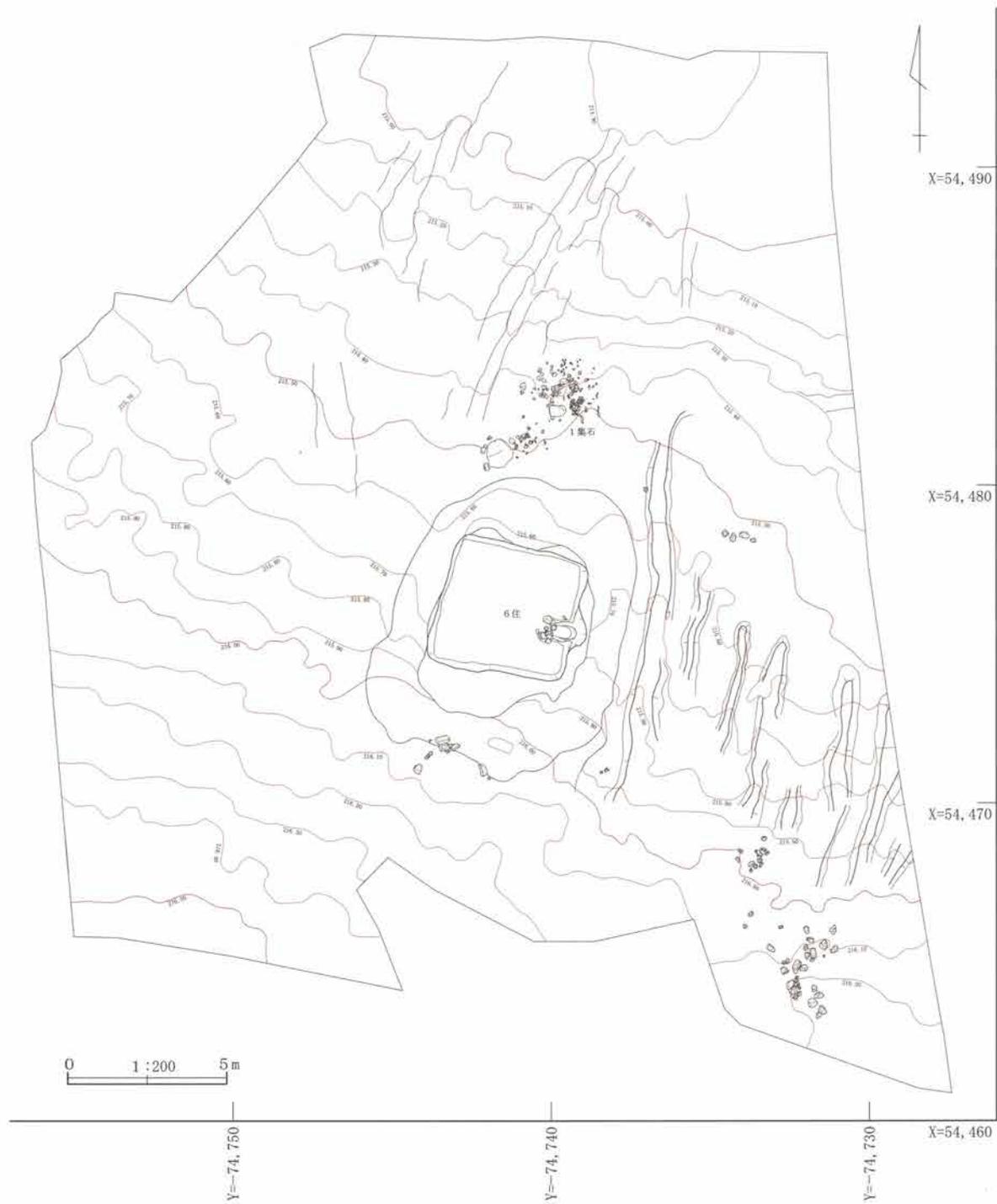
古墳時代中・後期 As-Cを含むⅦ層からHr-FAの間においては、堅穴住居の展開がみられる。確認した堅穴住居の分布範囲は5区から7区である。しかし、4区においてもこの調査の要因である道路工事の際に、側溝の壁面に堅穴住居を確認したことから(第74図参照)、その分布は北斜面の150mの範囲に及んでいる。遺構の中心的な位置は調査区域の北側で、その北端部を東流する金沢川の縁辺部に当たる6・7区である。これは、この時期における金沢川の低地での水田耕作を示唆するものと考えられるが、水田が想定される7区の北半部はその後の河川による浸食で水田を確認することはできない。

堅穴住居の年代は、5世紀後半から6世紀初頭に位置付けられ、いずれも廃棄から比較的短期間のうちにHr-FAの降下がある。このため堅穴部の周囲に周堤が残存し、なかでも6区19号住居はHr-FAの降下に最も近い時期であったことからその残存状態が良好で(第5章5 365頁「堅穴住居の掘削土量と周堤の盛土量について」参照)、この住居については南壁に張出し部をもつ特異な住居でもある(第5章4 357頁「張出し部をもつ古墳時代の堅穴住居について」参照)。また、6区で確認した19～21号住居は、周堤部が重なる位置に近接して立地している。仮にこれらの同時性或いは時間差の証明ができれば、一般的な集落遺跡の分析にひとつの資料を提供するものと考えられる(第5章6 369頁「周堤が重なる堅穴住居の時間差について」参照)。

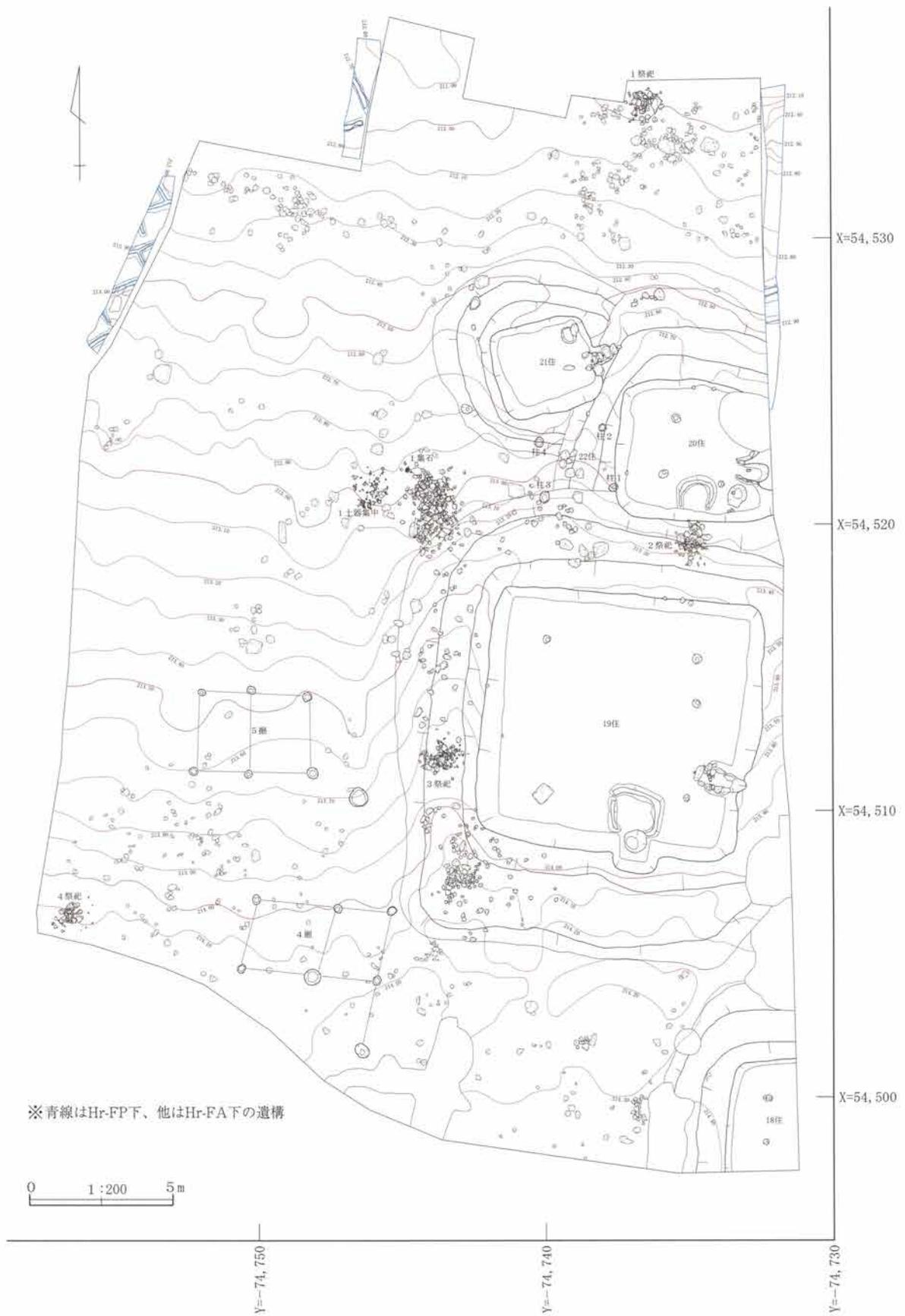
古墳時代後期 6世紀中葉のHr-FP直下から6区で水田を、3区で畝状遺構をそれぞれ検出した。但し、3区の畝状遺構については、畑耕作を証明する積極的な証拠は得られていない。6区の水田は検出した範囲が極一部ではあるが、県下のHr-FP下面で一般的に検出される極小区画水田と考えられる。しかし、その立地は層厚60cmのHr-FAの直上で、しかもHr-FAの降下以前は前述の古墳時代中・後期の堅穴住居が立地する集落域である。さらに、この水田はHr-FPで埋没するが、その後は再び堅穴住居を主体とした集落域へと変化するという、特異な土地利用の変遷を辿っている(第5章7 373頁「居住域から水田域へ、水田域から居住域へ」参照)。なお、6区、3区ともにHr-FPの直下で検出した遺構はこの水田と畝状遺構のみで、この時期の堅穴住居などの集落は確認していない。



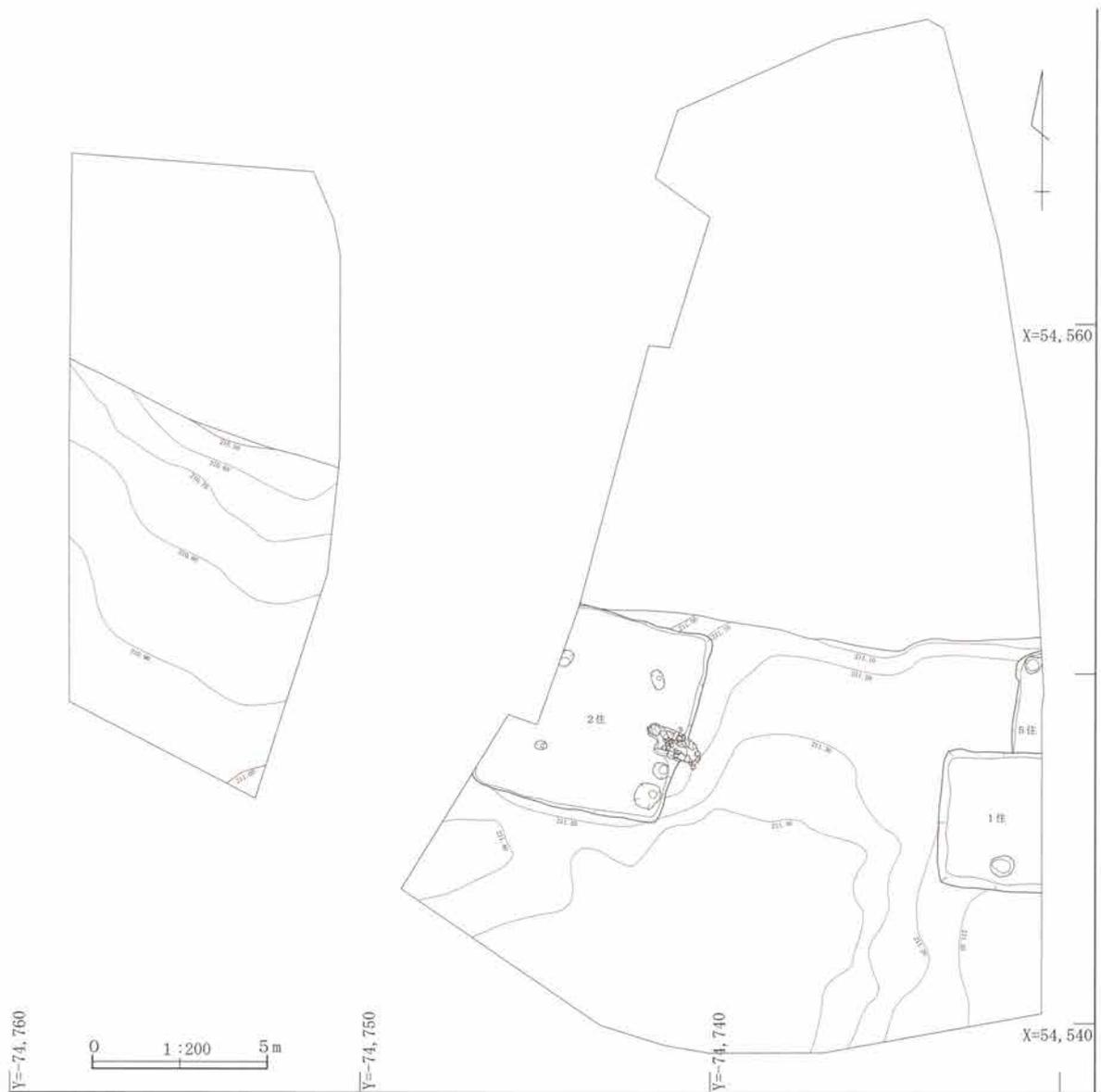
第74図 古墳時代遺構全体図



第75図 5区 古墳時代(Hr-FA下)遺構全体図



第76図 6区 古墳時代遺構全体図



第77図 7区 古墳時代(Hr-FA下)遺構全体図

1) 住居跡

5区6号住居

位置 475-740 **検出** Hr-FAを除去した段階で下層の黒色土上面に浅い窪みを確認。黒色土を細掘して全形を確認した。 **方位** N-104°-E **規模と形状** 竪穴部は長辺4.40m・短辺4.20mで、わずかに縦に長い長方形。長軸は東西方向。 **周堤** 黒色土上面で住居の窪みを確認した段階で、周囲にわずかな高まりが環状に認められた。幅3.3~1.0m、高さは10cm程度。外縁の規模は長辺9.6m、短辺7.6mの長方形で南北方向が長い。 **面積** 竪穴部：9.1㎡・周堤外縁：43.8㎡ **壁高** 70cm **覆土** 住居の埋没はHr-FAの堆積以前にほぼ完了しており、テフラの降下段階では最大深度が20cm程の浅い窪みが残っていた。第78図に示した住居断面図はHr-FAを除去してから作成したもので、断面の最上位のラインがHr-FAの下底のラインに一致する。埋没土は黒色土、黒褐色土で、基盤の泥流堆積物層を起源とする黄褐色粘質土をわずかに混入する。 **重複** なし。 **床面** 掘り方に基盤の泥流堆積物を起源とする黄褐色土のブロックを含む土を埋め、上面に黄褐色土を厚さ4~8cmほど敷いて床面とする。なお、掘り方の底面に見られる多くの礫は基盤の泥

6号住

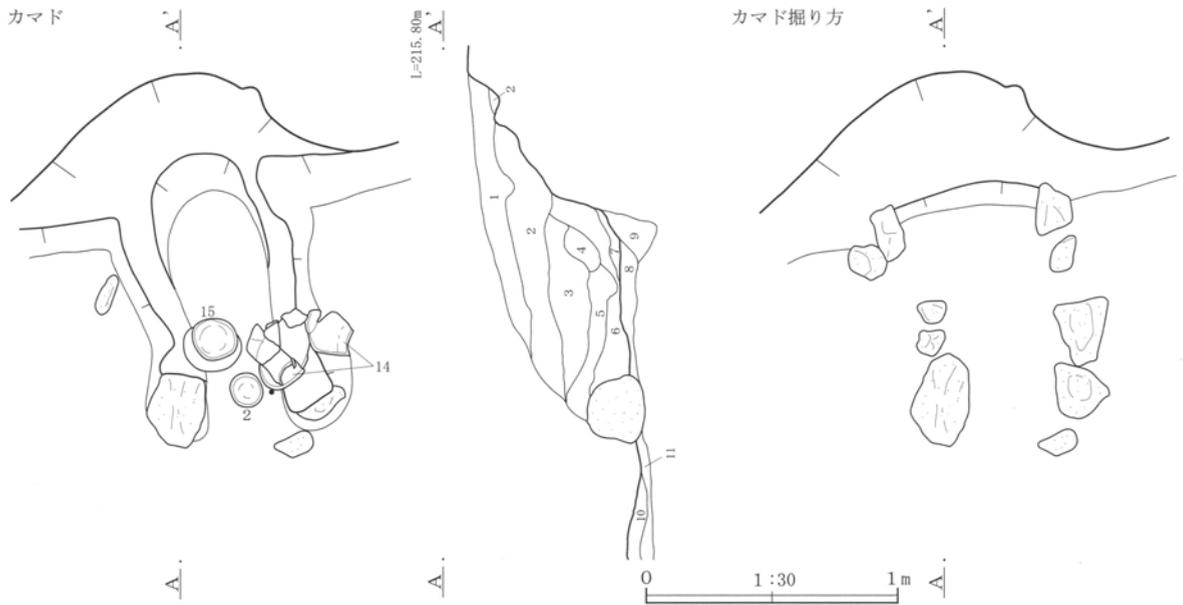


セクション

- | | | | |
|----------|---------------------------|----------|-----------------------|
| 1 黒色土 | 白色軽石わずかに含む。軟質で焼土粒混入。 | 5 黒色土 | 白色軽石わずかに含み軟質。 |
| 2 鈍い黄褐色土 | 黄褐色土ブロック主体とし焼土粒含む。 | 6 カマド覆土。 | |
| 3 黒色土 | 白色軽石わずかに含む。軟質で焼土・黄褐色土粒混入。 | 7 明黄褐色土 | 基盤の泥流堆積物起源の黄褐色土主体。床層。 |
| 4 黒色土 | 黄褐色土粒含む。 | 8 黒色土 | 黄褐色土粒、焼土ブロック含む。掘り方埋土。 |

第78図 5区 6号住居 (1)

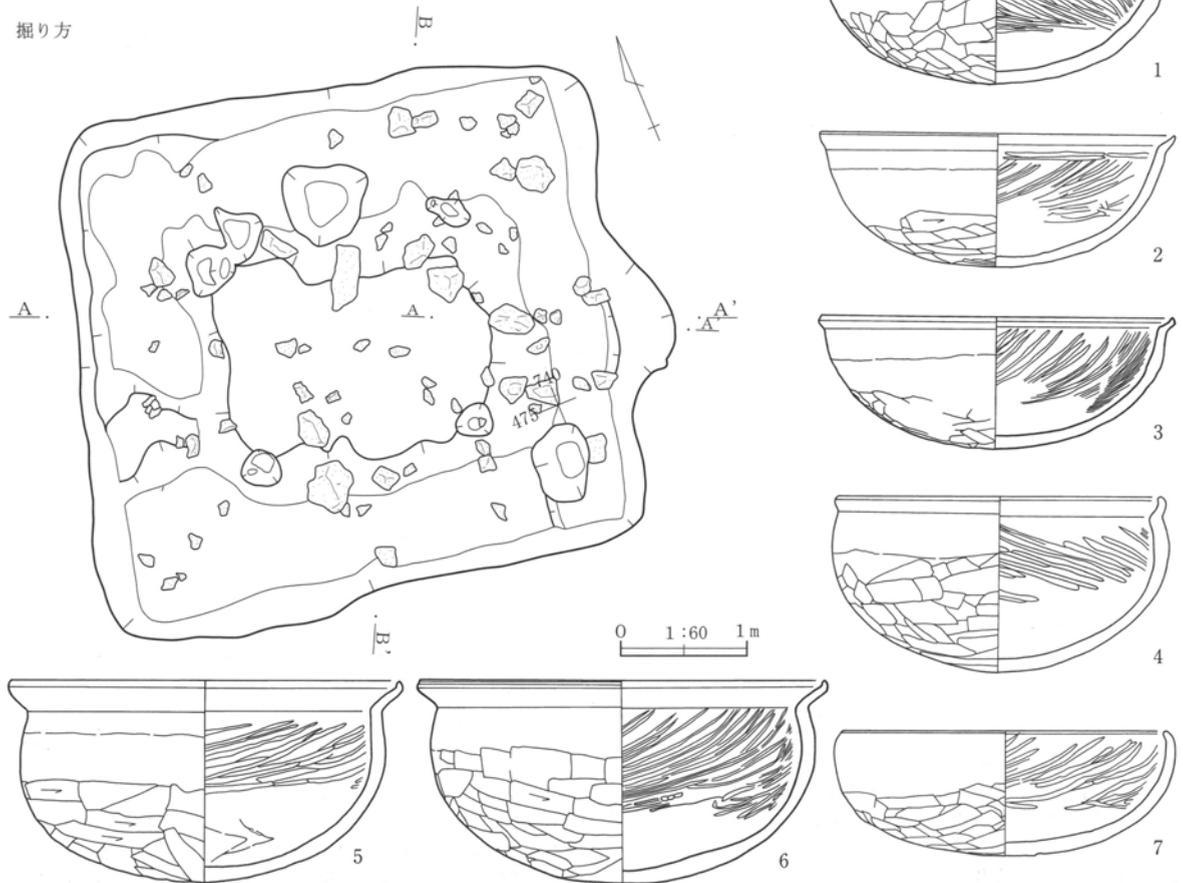
第4章 検出された遺構と遺物



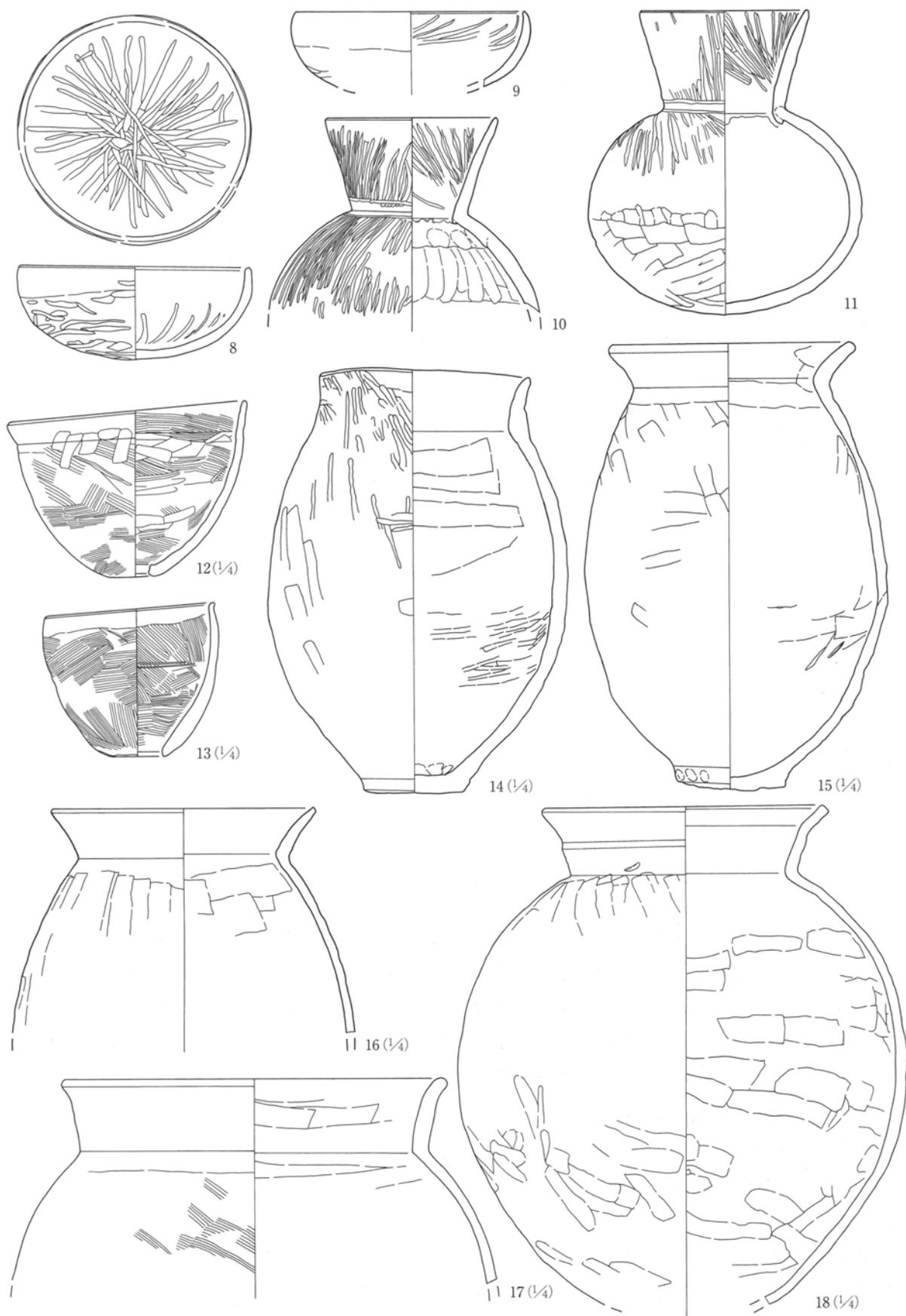
竈セクション

- | | | | |
|----------|-------------------------|----------|-----------------------|
| 1 黒色土 | 白色軽石わずかに混入。軟質で焼土粒含む。 | 7 鈍い橙色土 | 黄褐色土ブロック主体とし、焼土化。 |
| 2 鈍い黄褐色土 | 黄褐色土ブロック主体とし、焼土粒含む。 | 8 黒褐色土 | 灰層含み、焼土・黄褐色土粒混入。 |
| 3 黒色土 | わずかの黄褐色土粒、炭化物粒含む。 | 9 黒色土 | 小礫、焼土粒含む。 |
| 4 黒褐色土 | 黄褐色土・焼土粒含む。 | 10 明黄褐色土 | 基盤の泥流堆積物起源の黄褐色土主体。床層。 |
| 5 明黄褐色土 | 黄褐色土ブロック主体とし、焼土粒含み締まり良。 | 11 黒色土 | 黄褐色土粒、焼土ブロック含む。掘り方埋土。 |
| 6 灰黄褐色土 | 白色化した粘質土で粘性有り。焼土粒含む。 | | |

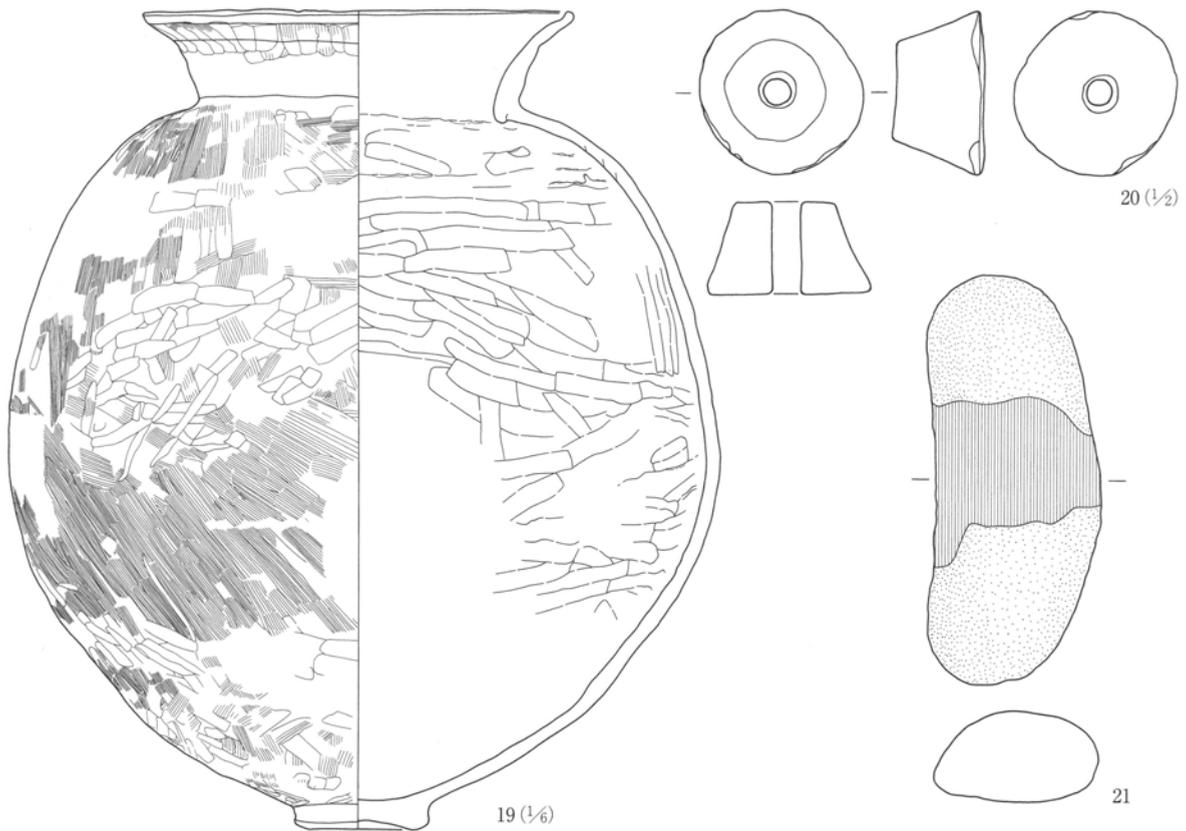
掘り方



第79図 5区 6号住居 (2)



第80图 5区 6号住居出土遺物 (1)



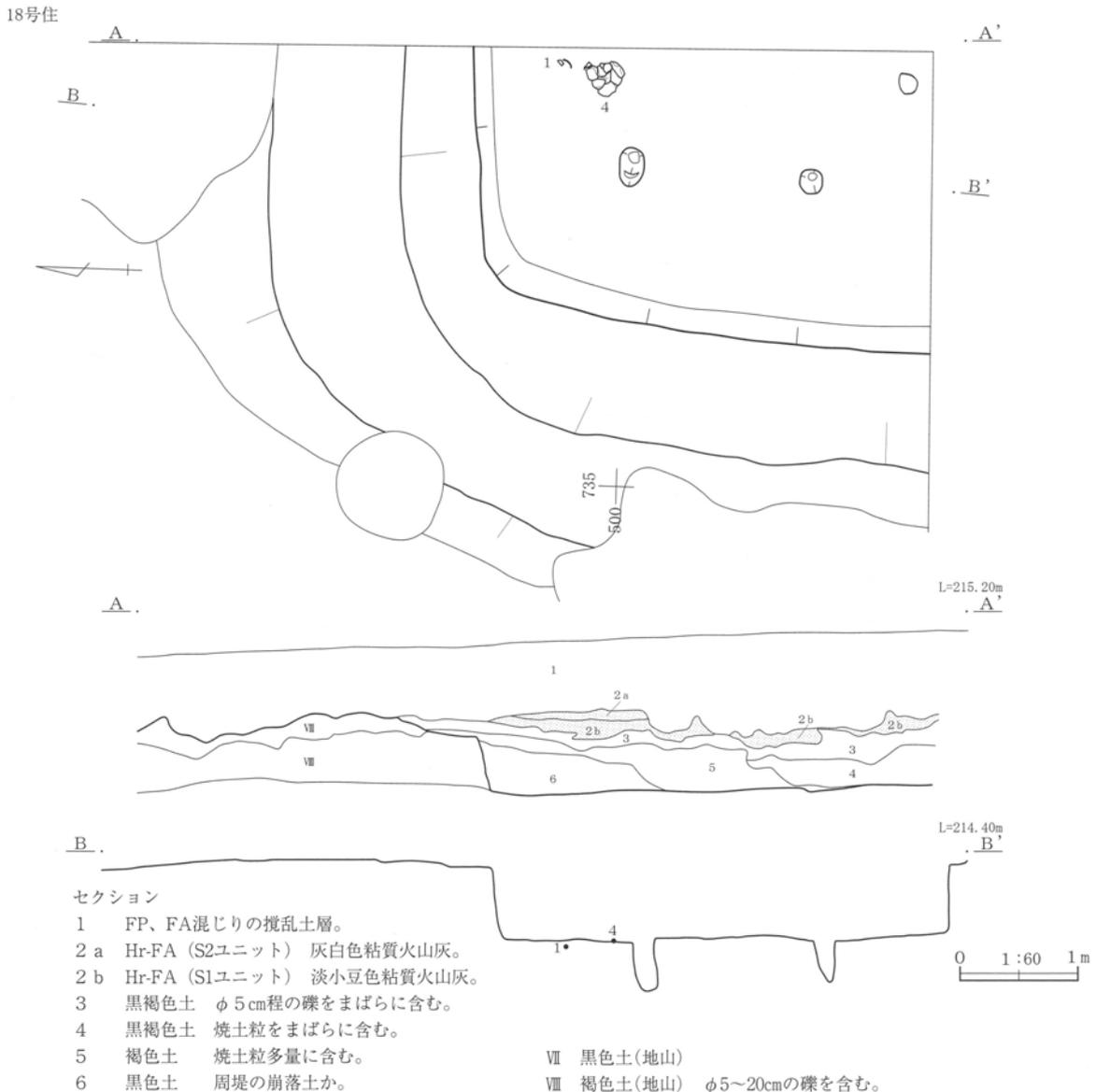
第81図 5区 6号住居出土遺物(2)

流堆積物に含まれる自然礫である。壁溝なし。柱穴確認できず。貯蔵穴 住居の南東隅に設置。楕円形状で長軸70cm、短軸56cm、深さ50cm。内部より土師器埴(10)・甑2点(12・13)が、上面から土師器坏(1)が出土している。竈 東壁の中央よりわずかに南寄りに位置する。燃烧部と袖は壁内に作られる。基盤の泥流堆積物を起源とする黄褐色粘質土を構築材とし、内部に礫を埋め込んで袖を形作る。燃烧部は最大幅38cm、奥行きは100cm、焚口幅は33cmである。煙道は火床面から壁の傾斜に沿って急傾斜で立ち上がり、上端は壁を30cmほど緩やかに掘り込む。火床面は灰層を含む黒褐色土を埋めて構築されている。火床面の直上には黄褐色の粘質土が堆積しており、下面は焼土化していた。崩落した天井部と考えられる。燃烧部には2点の土師器甕が据え付けられていた(14・15)。このうち15は上位が破損していたが、14はほぼ完形で、使用状態を示す状況で発見された。この2つの甕の内部には多量の灰が堆積していた。また、この甕のすぐ前方の焚き口部では、やや床面から浮いた状態で完形に近い土師器坏(2)が出土している。遺物 床面付近に多くの遺物が分布しており、復元率も高かった。住居東側の竈周辺からは土師器坏や埴などの比較的小型の遺物が出土したのに対し、住居の南西部には土師器の大甕(19)をはじめとする大型の甕類がまとまって分布していた。この他に床面上からこも編み石(21)が、覆土中から石製の紡錘車(20)が出土している。なお、住居東半部に大型の礫がまとまって分布しているが、いずれも床面から10~30cm程高い位置にあり、住居廃絶後の埋没過程の比較的早い段階で流れ込んだものと思われる。所見 年代は5世紀後半に位置付けられる。

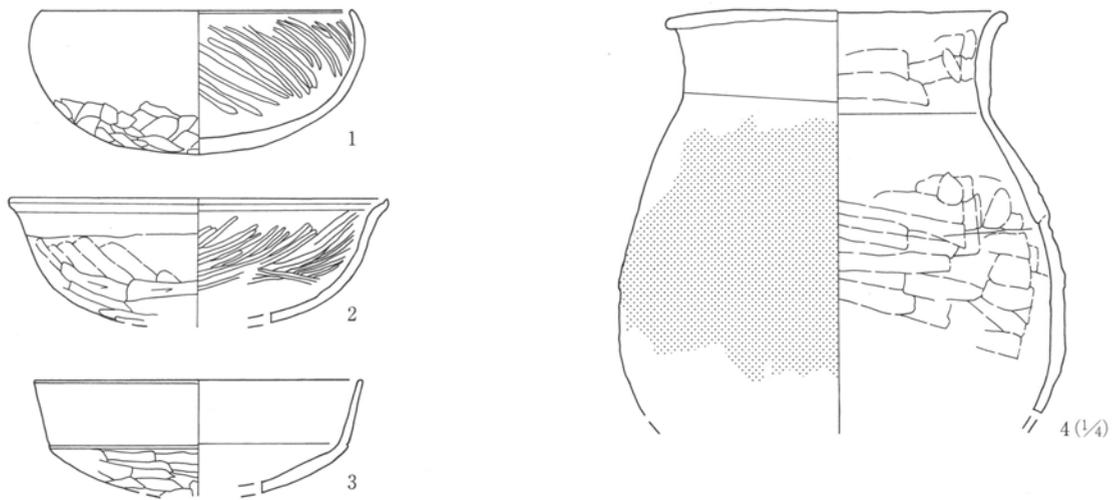
6区18号住居

位置 495-730 検出 Hr-FAのS1ユニット上面で住居埋没過程の窪みを確認し、Hr-FAより下層の黒色土を細掘して全形を確認。方位 N-93°-E 規模と形状 東壁部と南壁部が調査区域外のため、規模と形状は不明。確認した柱穴と北壁との位置関係から、竪穴部の南北軸は4.2mと推定。周堤 北壁と西壁の

周囲に幅0.6~1.0m、最大高さ20cmで残存。住居構築当時の旧地表面であるⅦ層の上面に、おそらく竪穴部掘削時の黒色土による盛土を施す。入り口部を想定させる踏み固められて硬く締まった部分はなく、住居の廃棄からHr-FAの降下までの間で、周堤の多くの部分は崩落した可能性が高い。 **面積** 竪穴部：計測不可・周堤外縁：計測不可 **壁高** 50cm。壁面の大半はⅦ層の黒色土で、確認した範囲の壁面はやや傾斜をもつ。 **覆土** 住居埋没過程の覆土中に、Hr-FAが最大層厚25cmで一次堆積。床面とHr-FAとの垂直距離は住居中央部で35cm、壁際が60cmで、僅かなレンズ状の堆積を示す。 **重複** なし。 **床面** 基盤層のⅦ層黒色土を直接床面として、貼床はない。確認した範囲の床面はほぼ平坦だが、硬く踏み締められた部分はない。 **壁溝** なし。 **柱穴** 西壁に平行する位置に2個を確認。直径20cm、深さ35~45cmの円形掘り方。 **貯蔵穴** 未確認。 **竈** 出土遺物から竈を伴う住居と考えられるが、確認した壁に竈の痕跡はない。調査区域外の東壁に設置していた可能性が高い。 **遺物** 北壁近くの床面直上から土師器坏(1)・甕(4)が出土。 **所見** 出土遺物から5世紀後半と考えられ、これは6世紀初頭とされるHr-FAの降下年代との矛盾がない。



第82図 6区 18号住居



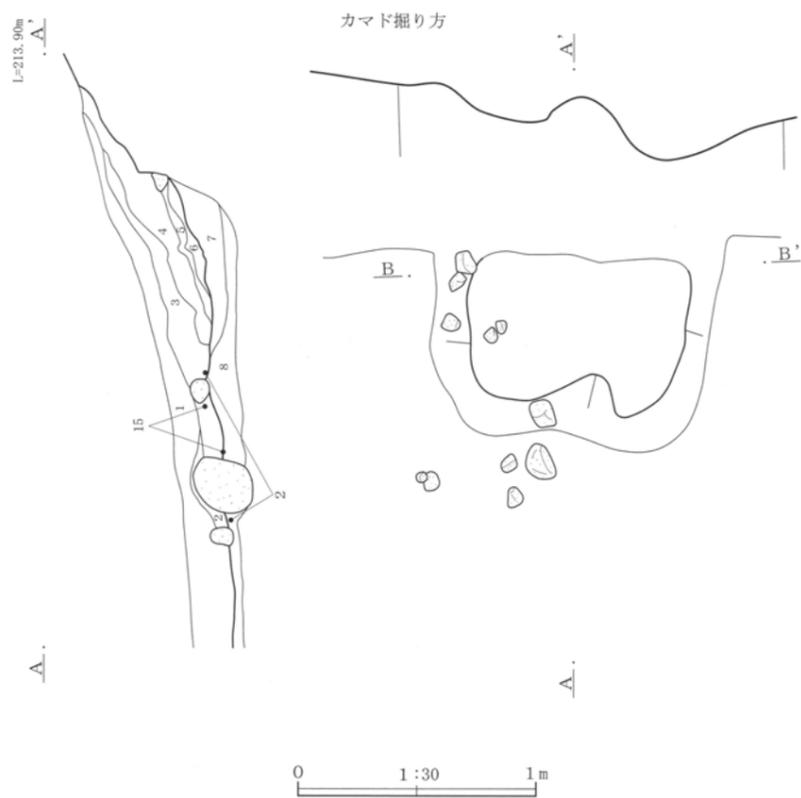
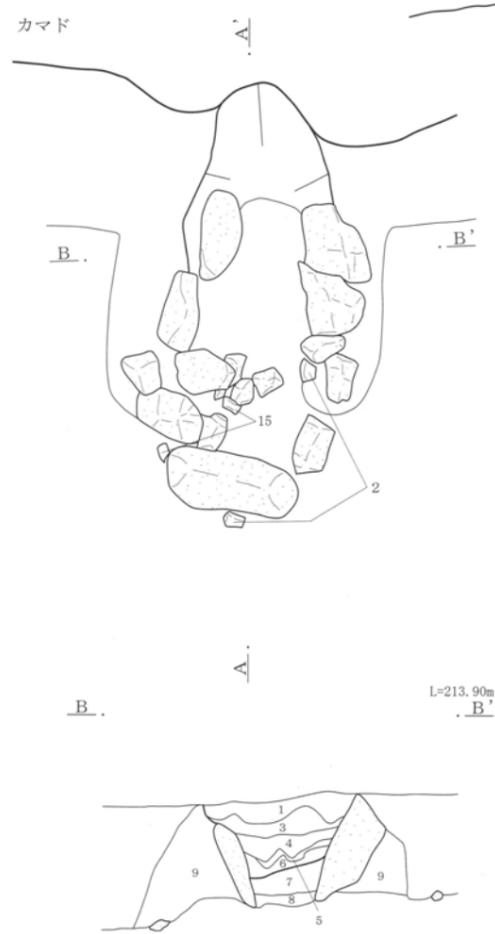
第83図 6区 18号住居出土遺物

6区19号住居

位置 505-735 **検出** Hr-FAのS1ユニット上面で住居埋没過程の窪みを確認し、Hr-FAより下層の黒色土を細掘して全形を確認。 **方位** N-97°-E **規模と形状** 竪穴部は長軸9.7m・短軸9.1mの、やや歪んだ長方形。長軸方向は東西。南壁の中央よりやや東側に幅1.1m、奥行き0.8mの張出し部をもち、張出し部内に貯蔵穴を設置。 **周堤** 竪穴部の周囲に幅2.5~3.5m、高さ15~25cmで残存。東壁側の外縁部は調査区域外だが、周堤外縁での規模は南北軸16.3m、東西軸15.7m(推)の長方形と推定。住居構築当時の旧地表面であるⅦ層黒色土の上面に、おそらく竪穴部掘削時の排土による黒褐色土の盛土を施す。盛土内に含まれる多量の礫は、竪穴部掘削時の地山に含まれていた自然礫。残存する盛土は、傾斜地形の高い側にあたる南側が厚さ15cm、低い側にあたる北側が25cmで、これは当初の盛土の厚さを反映しているものと判断。確認した周堤の全域に、入り口部を想定させる踏み固められて硬く締まった部分はなく、これは張出し部の南側でも同様。住居の廃棄からHr-FAの降下までの間で、周堤の多くの部分は風化して崩落した可能性が高い。竪穴部の掘削はⅨ~Ⅺ層の泥流堆積物層まで達しているが、周堤の盛土に泥流堆積物層の二次的な堆積物は一切認められない。なお、推定する周堤の盛土量は竪穴部の掘削土量とほぼ一致(第5章536頁「竪穴住居の掘削土量と周堤の盛土量について」参照)。 **面積** 竪穴部84.1㎡・周堤外縁222.5㎡(推) **壁高** 住居構築時の地表面が南から北への傾斜地形であることから各壁高は一様ではなく、南壁部は70cm、北壁部は50cm、東・西壁部は60cmで、壁面は全体にやや傾斜をもつ。但し、壁の上半部の傾斜は、住居の埋没過程で肩部が崩れた可能性もある。壁面の大半はⅦ層の黒色土だが、傾斜地形の調整で深く掘り込んだ住居の南半部は、その下半部の10cmがⅨ~Ⅺ層の泥流堆積物層。 **覆土** Hr-FAが住居埋没過程の覆土中に、最大層厚90cmで一次堆積。床面とHr-FAとの垂直距離は住居中央部で10cm、壁際が40cmで、テフラの降下当初はレンズ状の堆積を示すが、Hr-FAのS7ユニット堆積終了段階では、ほぼ平坦化して住居の埋没を完了。Hr-FAは各ユニットが良好な堆積状況を示し、7層のユニットに分層が可能。すなわち、下位から層厚15cmの淡小豆色粘質火山灰(S1)、2層目が層厚10cmの灰白色粘質火山灰(S2)、3・4層目が層厚45cmの灰白色火砕流堆積物(S7)、5層目が層厚5cmの黄褐色火山灰(S9)、6層目が白色軽石(S10)、7層目が層厚15cmの灰黄褐色火山灰(S12)。注目されるのは6層目の白色軽石で、長径20cmの噴石が既に堆積した火山灰層に降下の衝撃を与えた、インパクトストラクチャーが明瞭(写真PL15参照)。なお、Hr-FA以下の埋没土はいずれも黒色土、黒褐色土で、基盤の泥流



第84图 6区 19号住居 (1)



6区19号住

- セクション (A-A', B-B')
- 1 a Hr-FA (S12ユニット) 灰黄褐色火山灰。
 - 1 b Hr-FA (S10ユニット) 白色軽石。
 - 1 c Hr-FA (S9ユニット) 黄褐色火山灰。
 - 1 d Hr-FA (S7ユニット) 灰白色火砕流堆積物。
 - 1 e Hr-FA (S1・2を巻き込んだS7ユニット) 灰黄褐色火砕流堆積物。
 - 1 f Hr-FA (S2ユニット) 灰白色粘質火山灰。
 - 1 g Hr-FA (S1ユニット) 淡小豆色粘質火山灰。
 - 2 黒褐色土 φ1~5mmの褐色軽石を多量に含む。周堤の盛土。
 - 3 黒色土 φ1~5mmの褐色軽石を多量に含む。
 - 4 黒褐色土 φ1~5mmの褐色軽石を多量に含む。2層の崩落土。
 - 5 焼土・灰・炭化物層 (上位から)。
 - 6 黒色土 φ1~5mmの褐色軽石を多量に含む。
 - 7 黄褐色土 粘質黄褐色土ブロック含む。貼床。
 - 8 黒褐色土と粘質黄褐色土の混土。貼床。
 - VII 黒色土 φ1~5mmの褐色軽石、礫含む。
 - VIII 黒褐色土 φ1~5mmの褐色軽石、小礫含む。
 - IX 粘質黄褐色土

貯蔵穴セクション

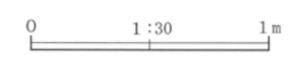
- 1 淡色黒色土。
- 2 黒色土、粘質黄褐色土ブロック含む。
- 3 黒色土、炭化物含む。
- 4 黒色土、粘質黄褐色土ブロック含む。
- 5 黒色土、少量の粘質黄褐色土ブロック含む。

竈セクション

- 1 褐色土 焼土混入。
- 2 炭化物層。
- 3 黄色土 粘性有り。天井部構築材。
- 4 焼土
- 5 灰色土 焼成灰土。
- 6 焼土
- 7 焼土 燃烧部床。
- 8 黒色土 燃烧部床。
- 9 黄褐色土 粘性有り。多量の焼土混入。袖材。旧竈構築材。

セクション (G-G')

- 1 褐色土 φ1~5mmの黄色・灰色軽石を少量含む。19住構築に伴う周堤盛土。
- 2 黒褐色土 黒色炭化物含む。19住構築に伴う焼き払いによるものと思われる。
- 3 黒褐色土 φ1~5mmの黄色・灰色軽石をまばらに含む。20住の周堤盛土、または周堤完成後の堆積土。
- 4 粘質黄褐色土 20住構築に伴う周堤盛土と思われる。20住床面粘質黄褐色土と同じ。
- 5 褐色土 φ1~5mmの黄色・灰色軽石まばらに含む。20住構築に伴う周堤盛土。
- 6 黒色土 (地山)



第85図 6区 19号住居 (2)

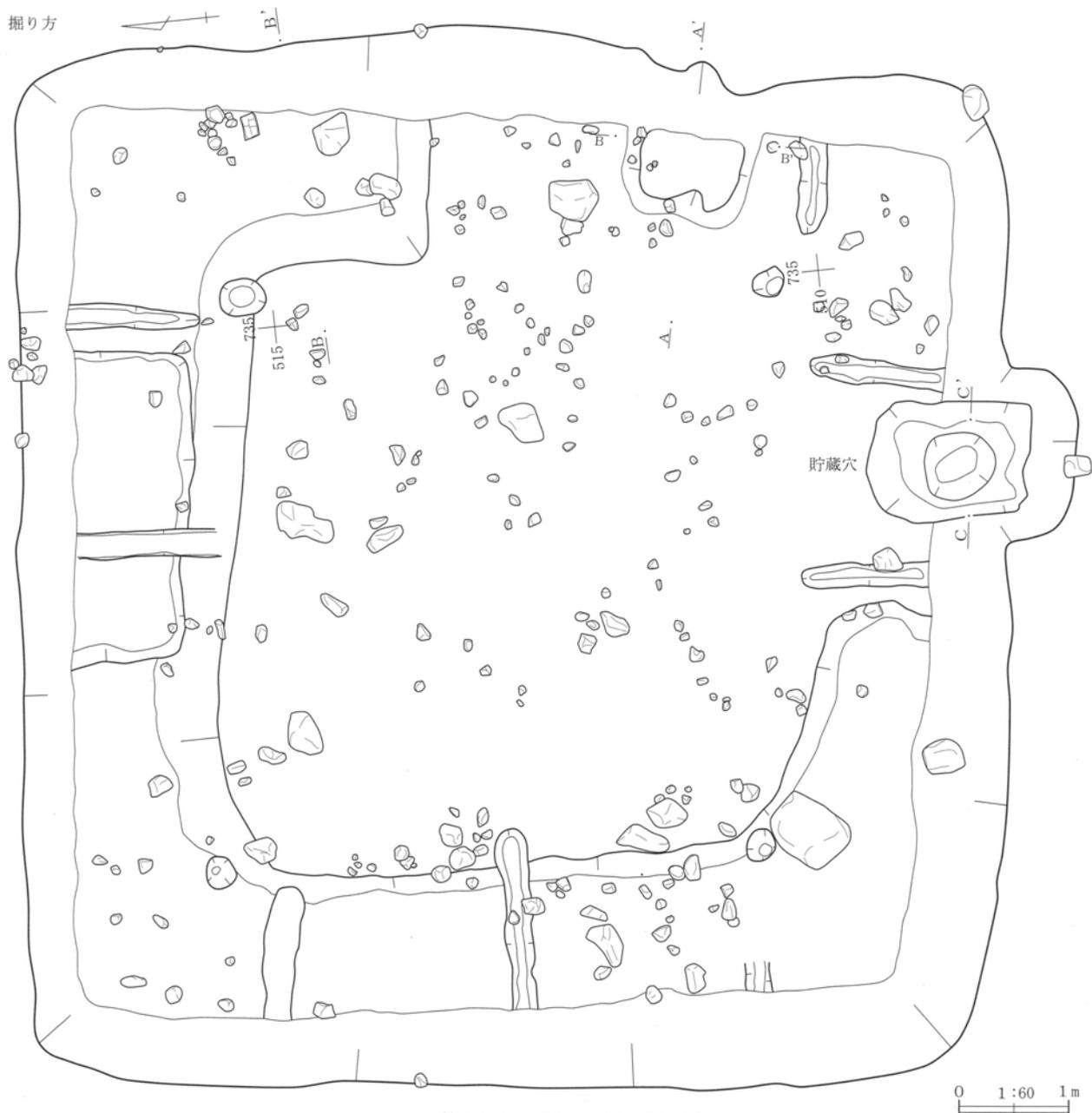
堆積物層の二次的な堆積物は一切認められない。**重複** 堅穴部で他の遺構との重複はないが、周堤部では6区20号住居の堅穴部が北側で重複し、さらに20号住居の西側では、20号住居の周堤と6区21号住居の堅穴部が重複。いずれも堅穴部同士の重複がなく、新旧関係を判断する明確な資料を欠く。但し、Hr-FA降下時点での住居の埋没度合、周堤盛土の重複、伴出土器の三者を総合的に判断すると、21号住居→20号住居→19号住居の順で新しいものと判断(第5章6 369頁「周堤が重なる堅穴住居の時間差について」参照)。**床面** 基盤層のⅦ層黒色土を平均で60cmほど掘り込んで掘り方面とする。掘り方面は4個の柱穴を結ぶ四角形の外側のうち、南壁の張出し部から東壁の竈の北側にかけての部分を除く範囲を、住居の中央部より5~10cm深い溝状に掘り込む。特に北壁の中央部付近の幅2.8m、壁からの長さ1.0mの範囲は、周囲よりやや深い長方形に掘り込む。また、壁に直交し、壁から4個の柱穴を結ぶ線の付近まで掘られたいわゆる間仕切り溝を北壁に2条、西壁に2条、南壁に2条、東壁に1条の合計7条を確認。いずれも幅25cm、深さ5~10cmで、使用面では検出できず、特に南壁の張出し部を挟む2条については、使用面での帯状の高まりがこの上位に載ることから、少なくとも最終使用面では埋められていた可能性が高い。掘り方面に住居の中央部では厚さ5cm、溝状の部分には10~15cmの貼床を施して使用面を構築。したがって、使用面は掘り方面とは逆に、ほぼ4個の柱穴を結ぶ四角形の外側がその内側より僅かに高い。全体にほぼ平坦だが、4個の柱穴を結ぶ四角形の内側は踏み固められて硬く締まるのに対して、その外側は踏み締められた痕跡がない。張出し部の北側は東西1.9m、南北1.6mの不整長方形の範囲が周囲の床面より僅かに高く、さらにこの長方形の各辺にあたる部分が、南辺を除いたコの字形で幅30~40cm、高さ5cmほどの帯状に高まる。この帯状の高まりで囲まれた範囲は、高まりも含めて硬く締まるが、張出し部の貯蔵穴の周囲は踏み固められた痕跡がない。住居北半部の床面直上に層厚10cmの炭化物層を検出。炭化物層の範囲が住居の全面に及んでいないことと、上屋構造を示す炭化材が全く認められないことから、住居の焼失というより住居の廃棄時か或いは廃棄から比較的短い期間の中で、イネ及びムギ類の穎、ヨシ属が燃やされた可能性が高い(第6章 2「高源地東Ⅰ遺跡における植物珪酸体分析」参照)。なお、掘り方面の調査段階で床面の全面に露出した石は、Ⅸ~Ⅺ層の泥流堆積物層中に含まれる自然石。

壁溝 なし。**柱穴** 堅穴部のほぼ対角線上に4個を確認。柱穴の芯々を結ぶ四角形は南北軸4.9m、東西軸5.2mで、堅穴部と相似形のやや歪んだ長方形を示す。直径20~30cm、深さ50~65cmの円形掘り方。**貯蔵穴** 南壁の張出し部内に直径80cm、深さ105cmの円形で設置し、これを除いて貯蔵穴様のピットはない。Ⅸ~Ⅺ層の泥流堆積物層を掘り込み、覆土は全体に締まりがなく柔らかな黒色土を主体とし、人為的に埋められた痕跡が全く認められない。底面上20cmの位置に検出した炭化物を含む3層は、床面直上で検出した5層に近似し、両者は同じ要因で形成された可能性が高い。つまり、この穴は床面上の5層が形成される段階、すなわち住居の廃棄時か或いは廃棄から比較的短い期間の時期には、ほぼ空洞に近い状態であったものと判断。

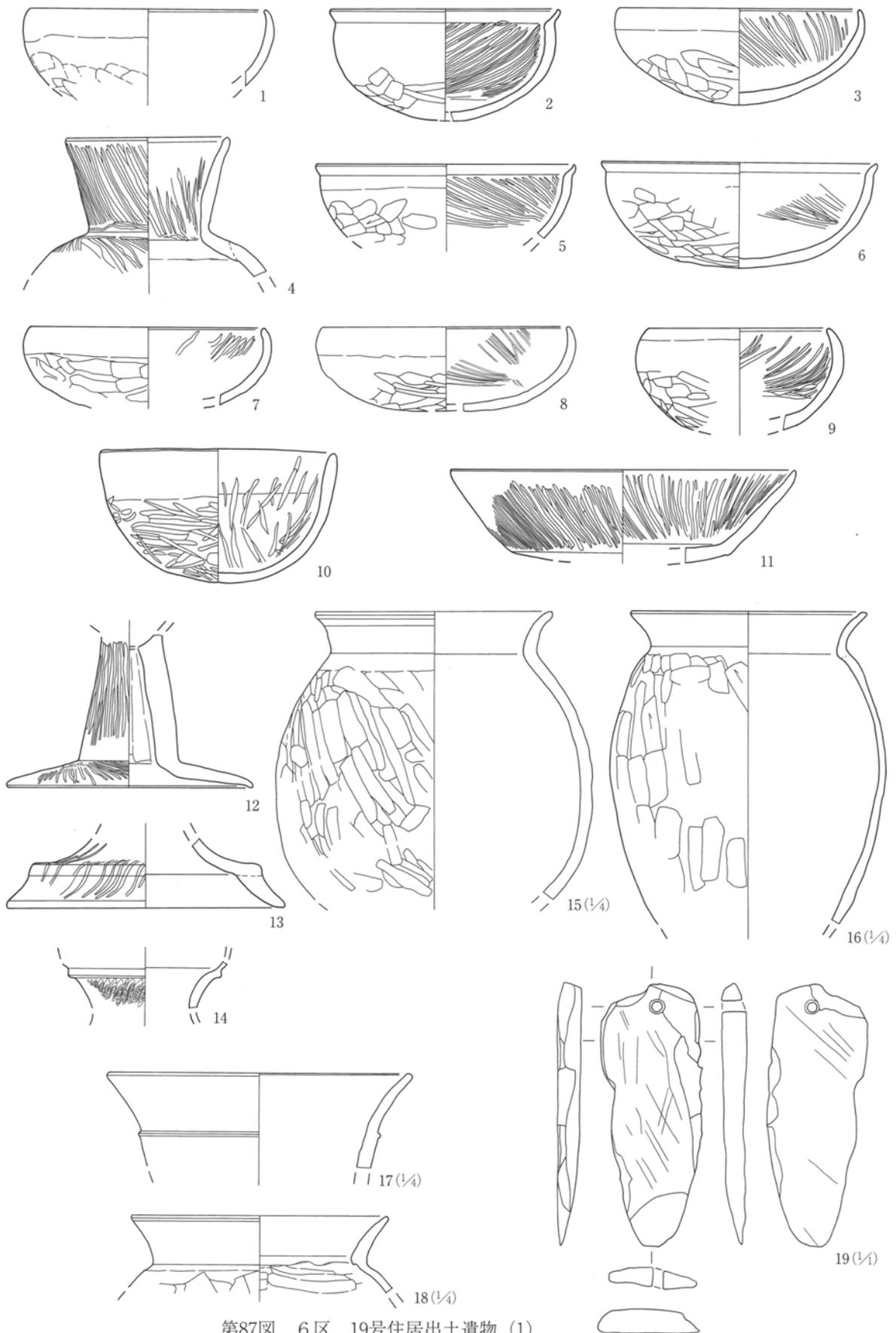
竈 東壁の南側に設置。掘り方面は、住居の掘削時に竈の主体部に相当する幅1.2m、奥行き0.8mの範囲を、周囲の掘り方面より5~10cm高い台状に掘り残す。この台状の範囲の中央部に、幅50cmの間を空けて、黄褐色粘質土で基底部の幅30cm、長さ80cmの土手状の盛土を両側に施す。この土手状の盛土のそれぞれ内側に4個の角礫を縦列で並べて立て、この間を厚さ15cmの黒色土と焼土の互層で埋めて火床面を構築。天井部は崩落していて確認できないが、おそらく袖部と同様に黄褐色粘質土で構築したものと推定。焚口部は幅25cm、長さ60cmの川原石を鳥居状に横架していたものと考えられるが、横架されていた石材は手前の床面に落下して出土。燃焼部は内法で幅50cm、奥行き110cmで壁内に位置し、煙道は火床から壁の傾斜に沿って急傾斜で立ち上がり、上端部が壁を僅かに掘り込む。煙道の壁外への突出した掘り込みはなく、周堤部に煙出し部の造作も確認できない。火床面及び壁の傾斜に沿った煙道部は、強く焼けた痕跡を残す。袖部の基部に盛った

第4章 検出された遺構と遺物

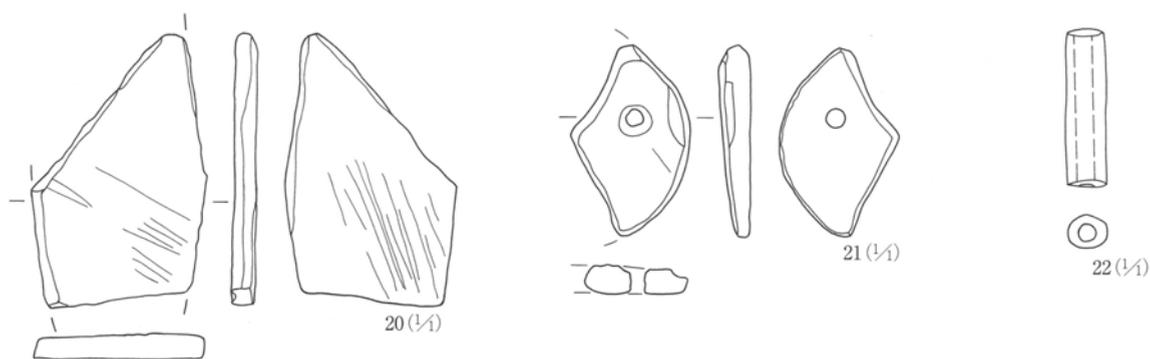
黄褐色粘質土及び火床の埋め土材に多量の焼土を含むことと、この竈の位置を除いて竈の痕跡が全く見当たらないことから、竈は同じ位置で造り替えられた可能性が高い。 **遺物** 北壁際中央部の床面直上から土師器埴の口縁部(4)、北壁近くの床面直上から碧玉製管玉(22)が出土。覆土内から多量に出土した縄文時代前期の土器片は、住居掘削時に周堤の盛土として排土された包含層の土器が、周堤の崩落と共に二次堆積したものと判断。 **所見** 南壁の中央よりやや東側に張出し部、その内部に貯蔵穴様のピットをもつ特異な住居。張出し部北側の床面が硬化していることから、張出し部は入り口施設の可能性が高いが、張出し部内に貯蔵穴を設置し、北側の床面の硬化範囲に梯子などを設置したピットの痕跡がなく、その詳細な構造は不明(第5章4 357頁「張出し部をもつ堅穴住居について」参照)。北壁際中央部の床面直上から出土した土師器埴を除いて、住居の年代を示す遺物はない。この土師器埴は5世紀終末~6世紀初頭に比定することができ、これは6世紀初頭とされるHr-FAの降下年代との矛盾がない。



第86図 6区 19号住居 (3)



第87図 6区 19号住居出土遺物(1)

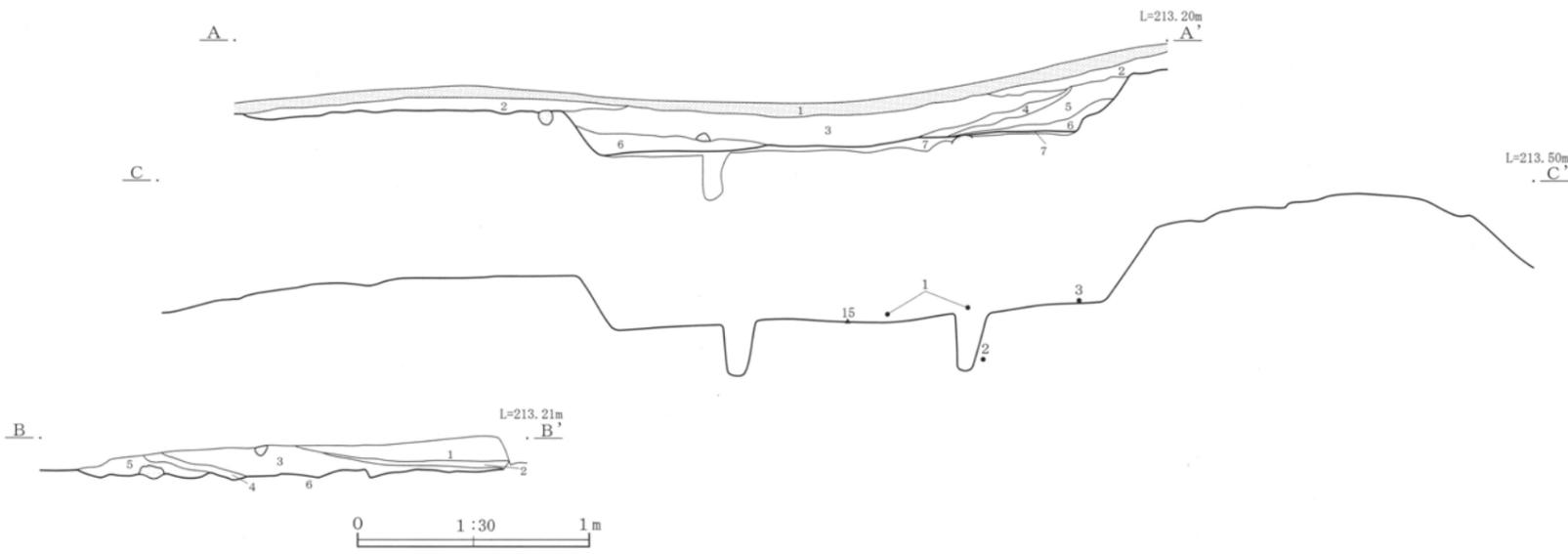
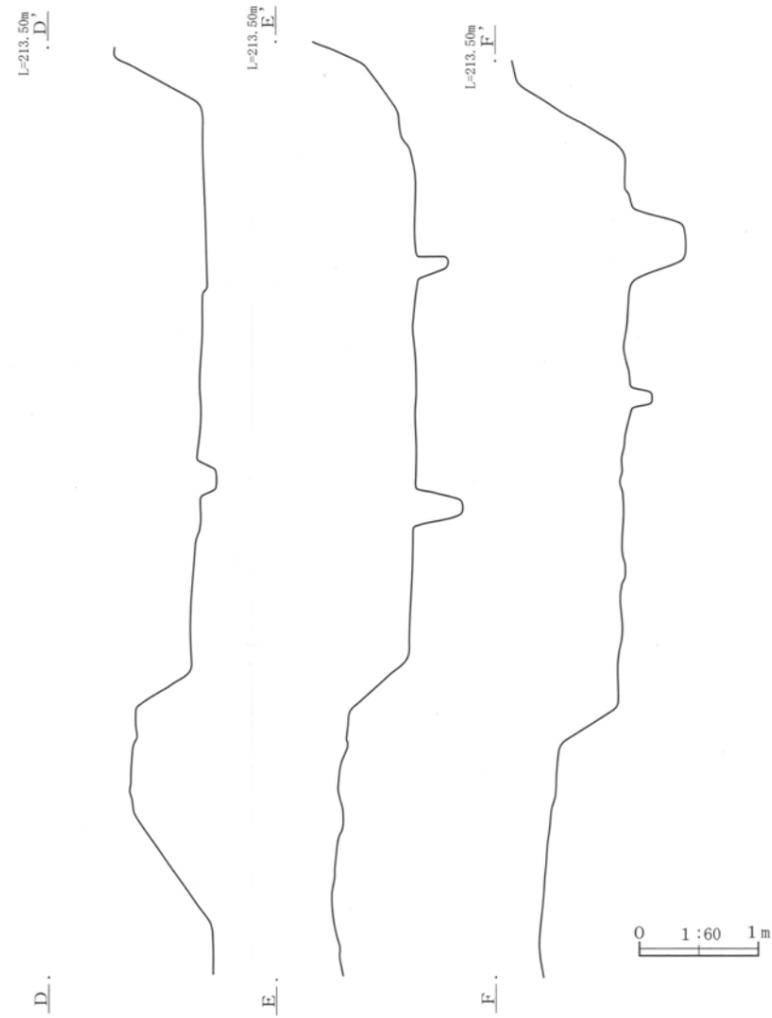
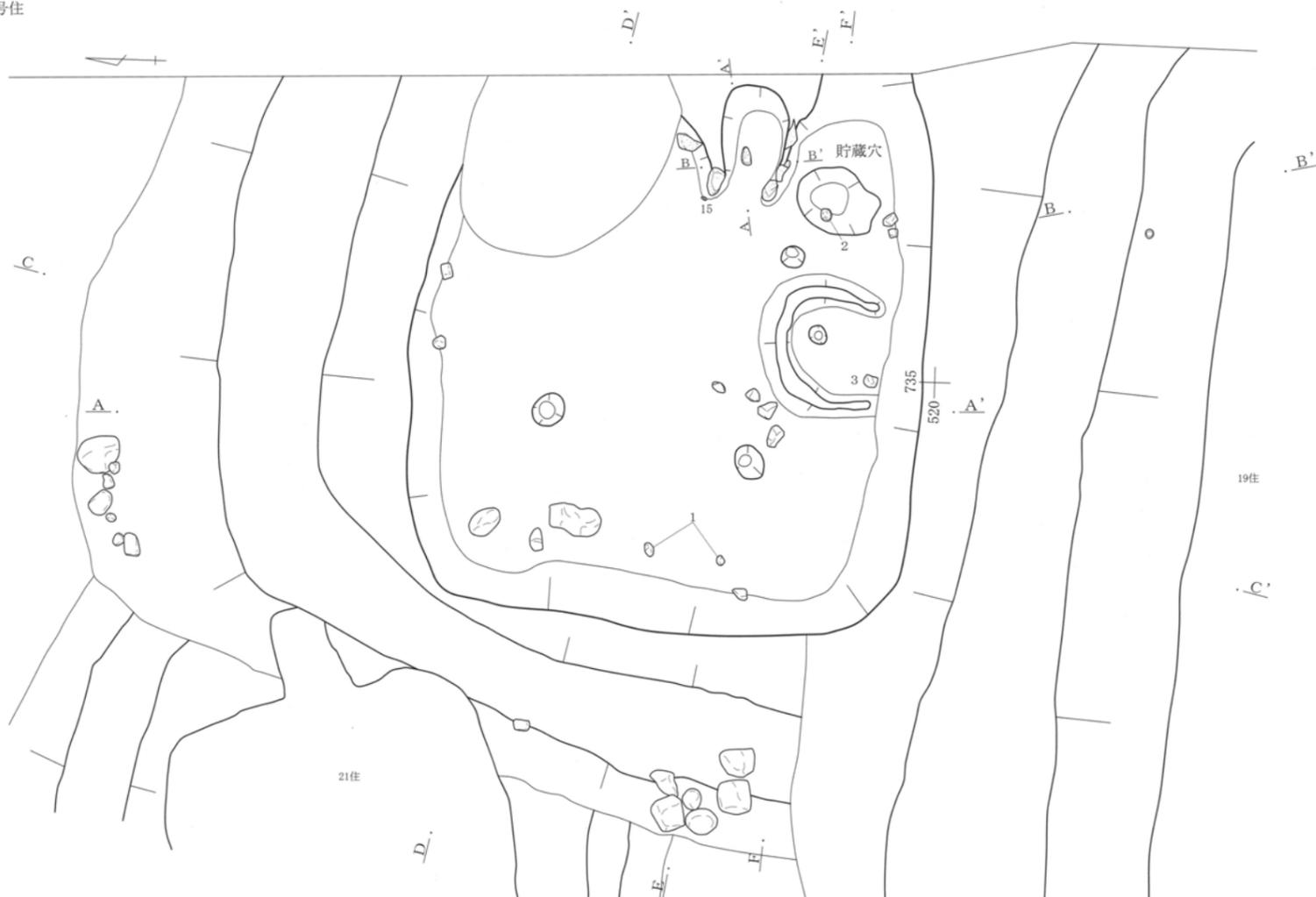


第88図 6区 19号住居出土遺物(2)

6区20号住居

位置 530-735 **検出** Hr-FAのS1ユニット上面では窪みが認識できず、Hr-FA直下のⅦ層黒色土の上面で僅かな窪みを確認し、下層の黒色土を細掘して全形を確認。 **方位** N-93°-E **規模と形状** 東壁の上端が調査区域外だが、竪穴部は長軸5.5m(推)・短軸4.8mの長方形。長軸方向は東西。 **周堤** 竪穴部の周囲に幅1.8~3.0m、最大高さ10cmで残存。この周堤の盛土を除去する過程の掘り方面において、南辺東側と南西部の二箇所、Ⅶ層の黒色土の上面にブロック状の粘質黄褐色土の範囲を確認。このブロック状粘質黄褐色土はⅨ~Ⅺ層の泥流堆積物層の二次堆積と考えられ、基本層序には存在しない人為による層であることと、この住居の竪穴部を囲むように存在することから、住居構築時の旧地表面であるⅦ層の上面に、周堤として盛土された竪穴部掘削時の排土であると判断(第89図B-B'土層図4・5層)。 **面積** 竪穴部23.1㎡・周堤外縁不明 **壁高** 住居構築時の地表面が南から北への傾斜地形であることから各壁高は一様ではなく、南壁部は50cm、北壁部は40cm、西壁部は40cmで、壁面は全体にやや傾斜をもつ。壁面の大半はⅦ層の黒色土だが、掘り方面の5~10cmはⅨ~Ⅺ層の泥流堆積物層に達する。 **覆土** 住居埋没過程の覆土中に、Hr-FAが一次堆積。床面とHr-FAとの垂直距離は住居中央部で25cm、壁際が40cmで、僅かなレンズ状の堆積を示す。 **重複** 南壁部で6区19号住居の周堤と、住居西側の周堤部で6区21号住居の竪穴部がそれぞれ重複。いずれも竪穴部同士の重複がなく、新旧関係を判断する明確な資料を欠く。但し、Hr-FA降下時点での住居の埋没度合、周堤盛土の重複、伴出土器の三者を総合的に判断すると、21号住居→20号住居→19号住居の順で新しいものと判断(第5章6 369頁「周堤が重なる竪穴住居の時間差について」参照)。なお、周堤部の南辺側で2号祭祀遺構と重複。2号祭祀遺構の上位をこの住居の周堤盛土が覆い、2号祭祀遺構よりこの住居が新しい。 **床面** 基盤層を平均で40cmほど掘り込んで掘り方面とする。掘り方面は全体にほぼ平坦で、この面に厚さ5cmの貼床を均一に施して使用面を構築。使用面もほぼ平坦で、柱穴を結ぶ線の内側は踏み締められて硬い。南壁の中央部は幅130cm、壁からの長さ130cmの範囲が周囲の床面より僅かに高く、その範囲の南辺を除く周囲が、幅25~30cm、高さ5cmほどの帯状で馬蹄形に高まる。この帯状の高まりで囲まれた範囲は、高まりも含めて硬く締まり、入り口部の可能性が高い。住居の中央部に直径80cm、深さ30cmの不整円形をした床下土坑を確認。なお、掘り方面の調査段階で床面の全面に露出した石は、Ⅸ~Ⅺ層の泥流堆積物層中に含まれる自然石。 **壁溝** なし。 **柱穴** 竪穴部の対角線上付近に3個を確認。北東に位置する1個は攪乱内。直径20~25cm、深さ40~50cmの円形掘り方。 **貯蔵穴** 住居の南東隅に直径60cm、深さ50cmの不整円形で設置。 **竈** 東壁の南側に設置。燃烧部は幅40cm、奥行き80cmで壁内に位置し、煙道は壁に沿って急傾斜で立ち上がる。東壁の上端が調査区域外のため詳細は不明だが、確認した壁高の範囲では壁外への突出した掘り込みはない。焚口部の両側を石材で補強し、右側の袖部の芯材にも石材を縦列に並べる。掘り方面に厚さ5~10cmの焼土を埋

20号住



6区20号住

セクション (A-A')

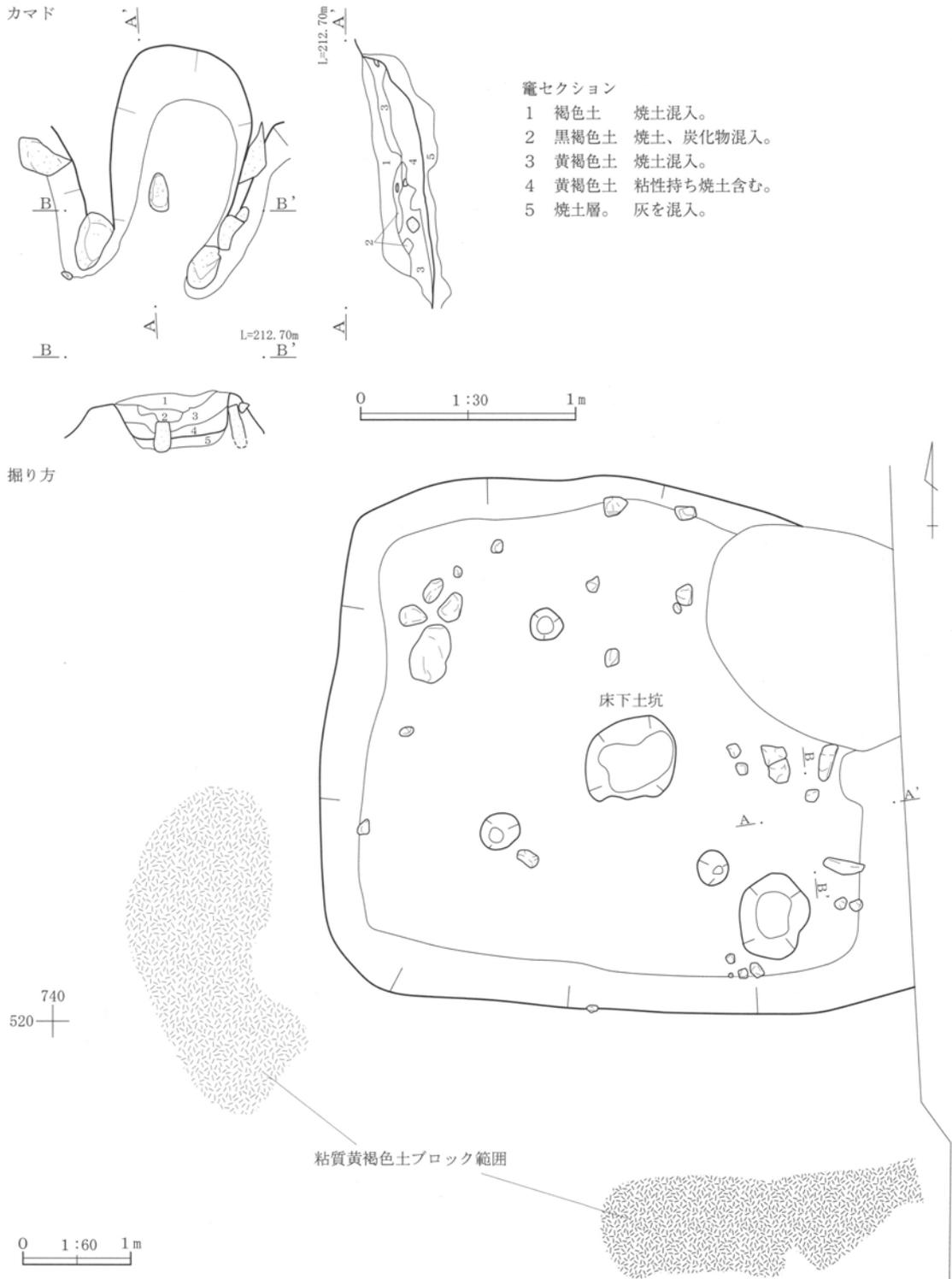
- 1 Hr-FA (S1ユニット)
- 2 黒色土 φ1~5mmの褐色軽石含む。
- 3 黒褐色土 φ1~5mmの褐色軽石含む。
- 4 黒色土 φ1~5mmの褐色軽石含む。
- 5 黒褐色土 φ1~5mmの褐色軽石含む。
- 6 黒色土 φ1~5mmの褐色軽石含む。
- 7 黒色土と粘質黄褐色土の混土。貼床。

セクション (B-B')

- 1 褐色土 φ1~5mmの黄色・灰色軽石を少量含む。19住構築に伴う周堤盛土。
- 2 黒褐色土 黒色炭化物含む。19住構築に伴う焼き払いによるものと思われる。
- 3 黒褐色土 φ1~5mmの黄色・灰色軽石をまばらに含む。20住の周堤盛土、または周堤完成後の堆積土。
- 4 粘質黄褐色土 20住構築に伴う周堤盛土と思われる。20住床面粘質黄褐色土と同じ。
- 5 褐色土 φ1~5mmの黄色・灰色軽石まばらに含む。20住構築に伴う周堤盛土。
- 6 黒色土 (地山)

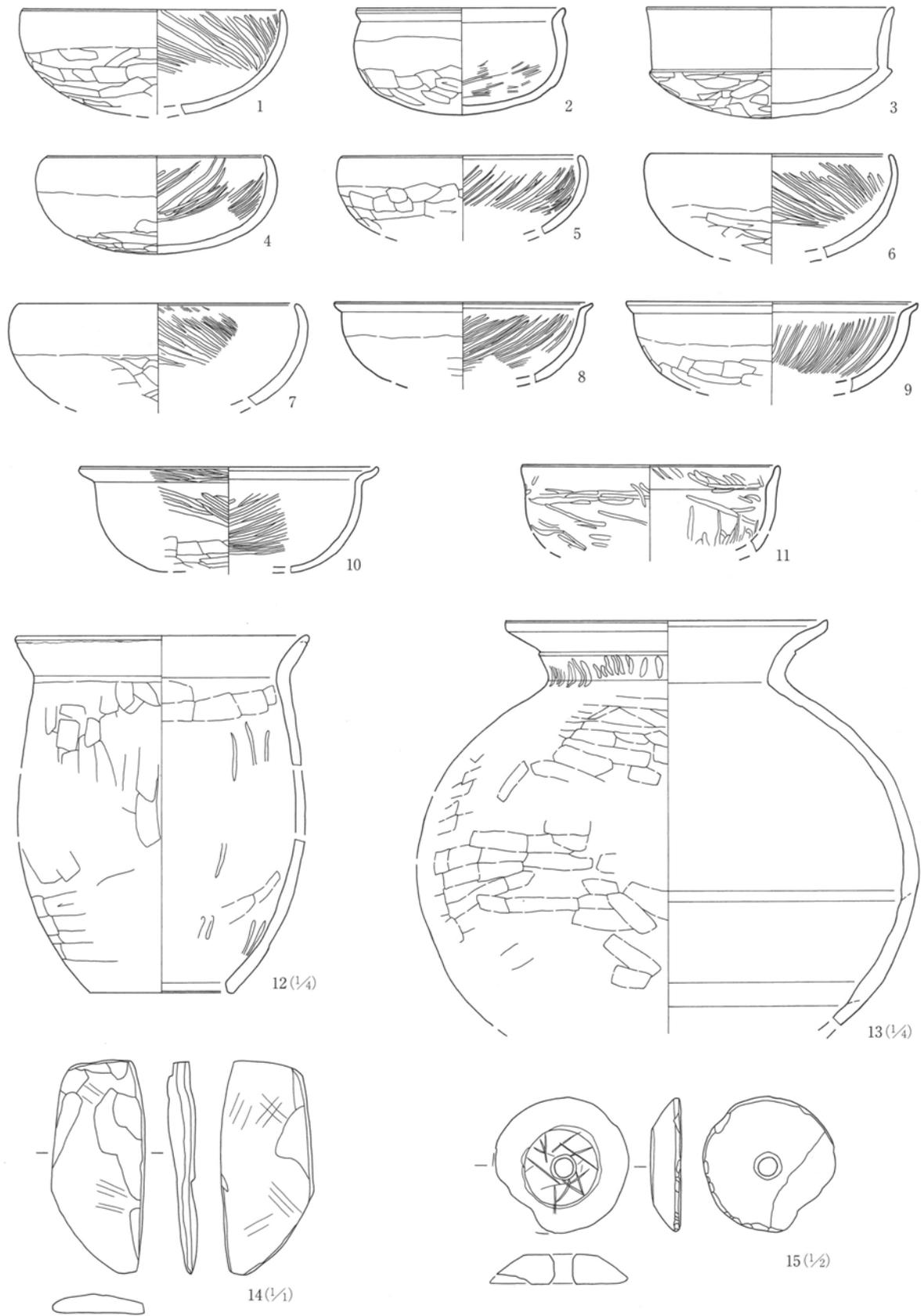
第89図 6区 20号住居 (1)

めて火床面を構築し、火床の中央よりやや左側に石製支脚を埋め込む。全体に多量の焼土を検出し、火床、壁面、石製支脚の基部は強く焼けた痕跡を残す。 **遺物** 南壁際中央部の床面直上と、貯蔵穴の底面直上から土師器片が出土し(2・3)、これらが住居の年代を示す。 **所見** 南壁際の中央部に、6区19号住居と同様の馬蹄形をした帯状の高まりをもつが、この住居に張出し部はない。出土遺物から5世紀後半と考えられ、これは6世紀初頭とされるHr-FAの降下年代との矛盾がない。



第90図 6区 20号住居(2)

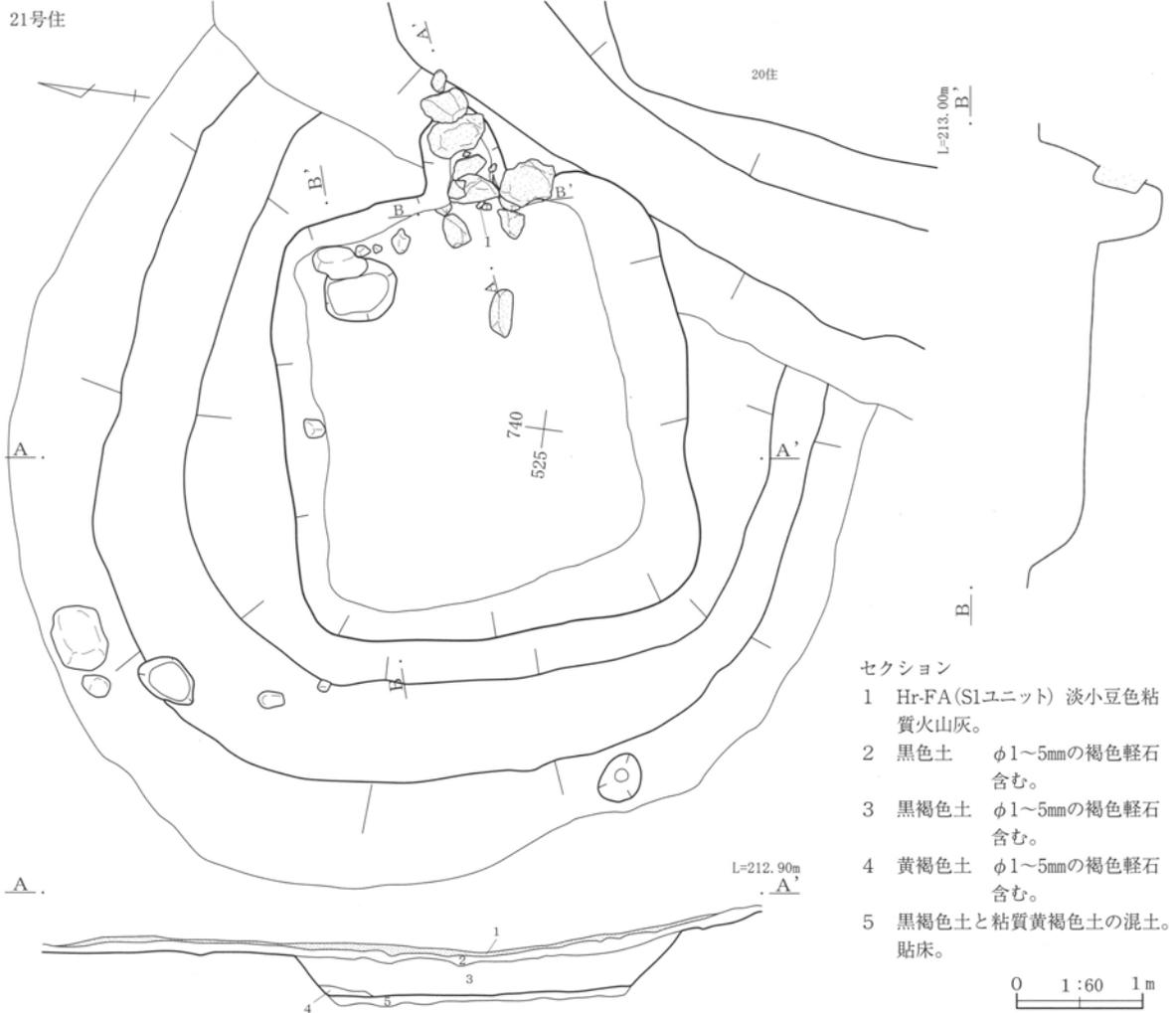
第4章 検出された遺構と遺物



第91図 6区 20号住居出土遺物

6区21号住居

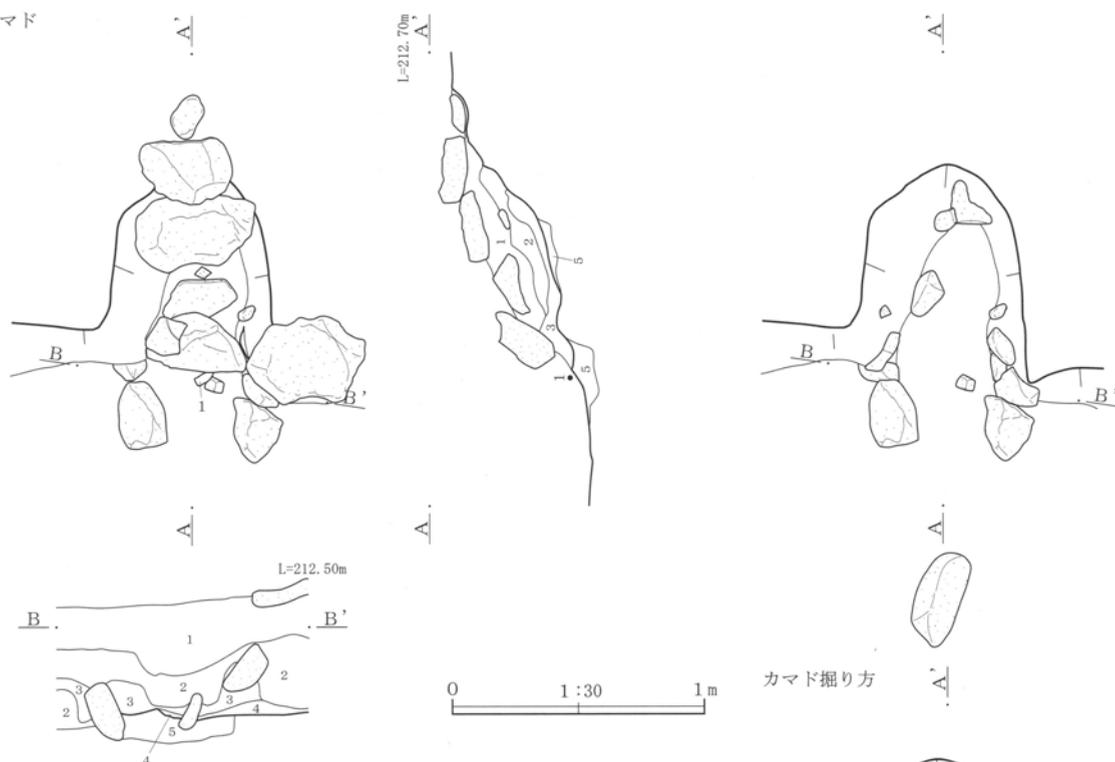
位置 525-740 **検出** Hr-FAのS1ユニット上面で住居埋没過程の窪みを検出し、Hr-FAより下層の黒色土を細掘して全形を確認。**方位** N-75°-E **規模と形状** 竪穴部は長軸3.6m・短軸3.3mの、やや歪んだ長方形。長軸方向は東西。**周堤** 竪穴部の周囲に幅1.1~2.2m、最大高さ7~8cmで北辺を中心として残存。周堤外縁での規模は南北軸7.0m、東西軸7.2m(推)のほぼ円形と推定。入り口を想定させる踏み固められて硬く締まった部分はない。住居の廃棄からHr-FAの降下までの間で、周堤の多くの部分は風化して崩落した可能性が高い。なお、竪穴部北壁際の覆土は、床面直上にⅨ層の褐色土、その上位にⅦ層の黒色土が堆積する状況を確認。これは竪穴部の掘削時に、Ⅶ層の黒色土、Ⅸ層の褐色土の順で基本土層とは逆転した状態に盛られた周堤の盛土が、Ⅸ層の褐色土、Ⅶ層の黒色土の順で竪穴部に崩落することによって生じた現象であると判断。**面積** 竪穴部10.8㎡・周堤外縁不明 **壁高** 南壁部は55cm、北壁部は25cm、東・西壁部は35cmで、特に南壁部は埋没過程で崩落したためか傾斜を持つ。壁面の大半はⅦ層の黒色土だが、傾斜地形の調整で深く掘り込んだ住居の南半部は、その下半部がⅨ~Ⅺ層の泥流堆積物層となる。**覆土** 住居埋没過程の覆土中に、Hr-FAが一次堆積。床面とHr-FAとの垂直距離は住居中央部で30cm、壁際が40cmで、僅かなレンズ状に堆積。**重複** 6区20号住居の周堤部と東側で重複し、さらに20号住居の南側では、20号住居の竪穴部と6区21号住居の周堤部が重複。いずれも竪穴部同士の重複がなく、新旧関係を判断する明確な資料を欠く。但



第92図 6区 21号住居 (1)

し、Hr-FA降下時点での住居の埋没度合、周堤盛土の重複、伴出土器の三者を総合的に判断すると、21号住居→20号住居→19号住居の順で新しいものと判断(第5章6 369頁「周堤が重なる竪穴住居の時間差について」参照)。**床面** 基盤層のIX～XI層を掘り方として、VIII層の黒褐色土とIX～XI層の泥流堆積物層の混土で厚さ5～10cmの貼床を施す。床面は全体にはほぼ平坦で、固く締まる。**壁溝** なし。**柱穴** なし。**貯蔵穴** 住居の北東隅に直径55cm、深さ50cmの円形で設置。**竈** 東壁の中央やや南寄りに設置。両袖部の基部に2個の角礫を並べ、焚口部に同じ石材を横架。焚口部に横架されていた石材は、手前の床面に落下して出土。燃烧部は内法の幅40cm、奥行き50cmで壁内に位置し、煙道は火床から壁を水平に40cm掘り込み、なだらかに立ち上がる。煙道の天井部にも石材を横架するが、燃烧部に落下して出土。煙出しの造作は確認できない。**遺物** 竈の支脚付近から土師器坏(1)が出土。**所見** 出土遺物から5世紀後半の中葉と考えられ、これは6世紀初頭の降下とされるHr-FAの降下年代との矛盾がない。

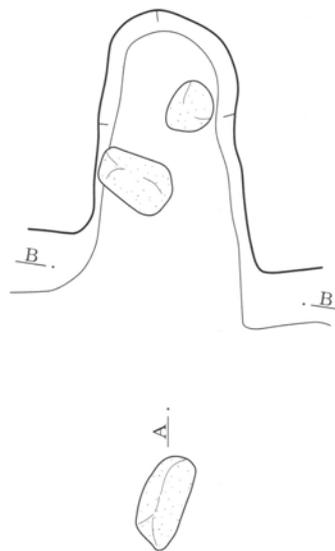
カマド



竈セクション

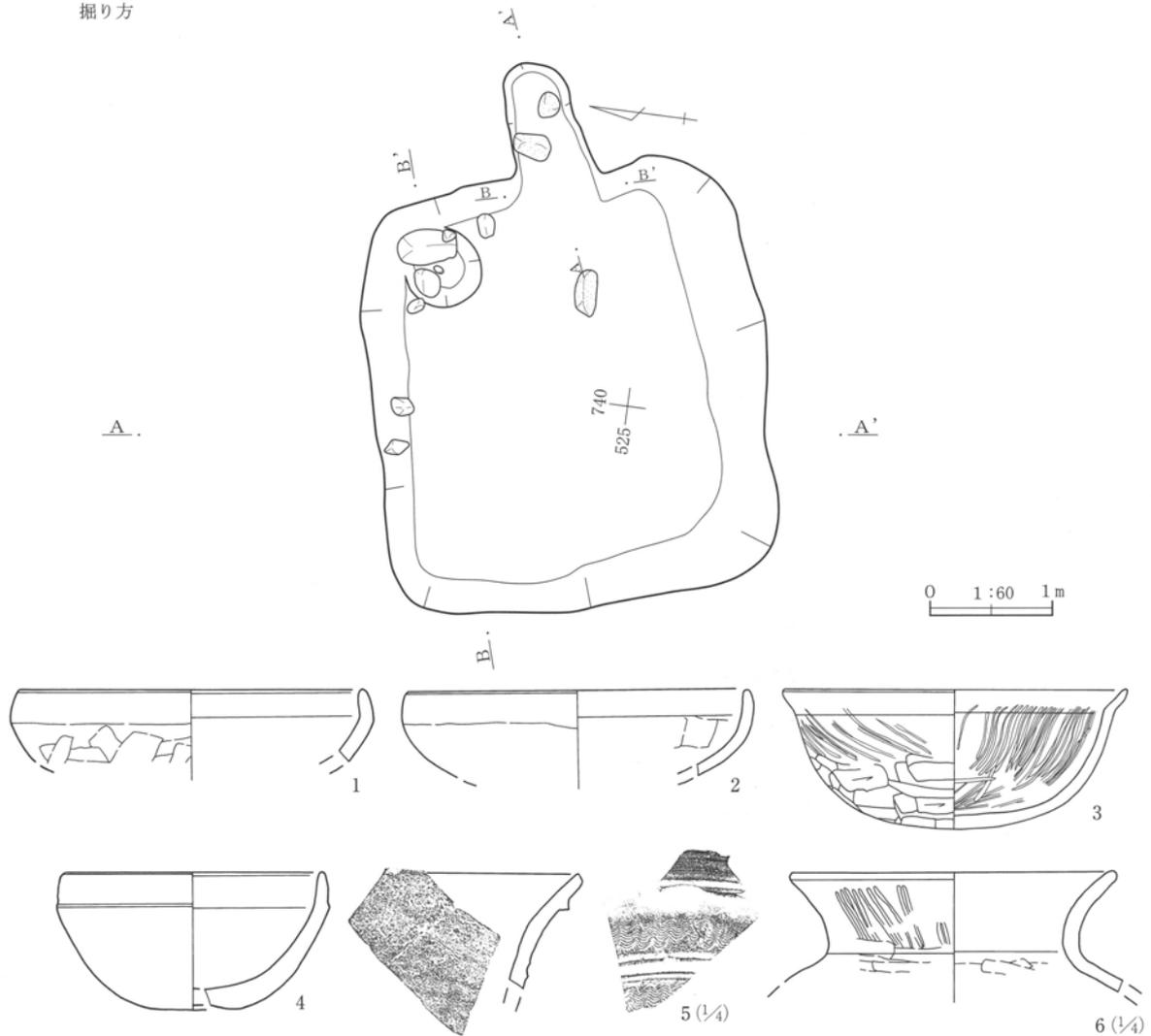
- 1 黒色土 焼土含む。
- 2 黒褐色土 焼土含む。
- 3 褐色土 焼土含む。
- 4 炭化物層。
- 5 黒色土 焼土含む。竈掘り方埋土。

カマド掘り方



第93図 6区 21号住居 (2)

掘り方



第94図 6区 21号住居 (3)

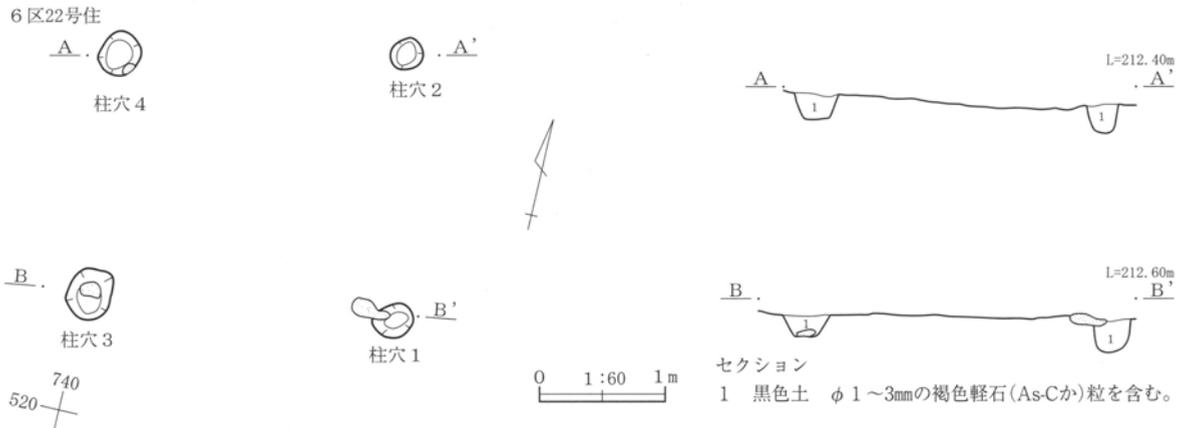
6区22号住居

位置 520-735 **検出** VII層の黒色土上面では確認できず、IX層の泥流堆積物層上面で柱穴のみを検出。
方位 N-81°-E **規模と形状** 不明。 **面積** 不明。 **壁高** 不明。 **覆土** 不明。 **重複** なし。
床面 不明。 **壁溝** 不明。 **柱穴** 4個を確認。直径25~40cm、深さ15~25cmの円形掘り方。柱穴の芯々を結ぶ四角形は、南北2.0~2.1m、東西2.3~2.4mでやや歪んだ長方形を呈す。 **貯蔵穴** なし。 **炉・竈** 未確認。 **遺物** なし。 **所見** 掘立柱建物の可能性もあるが、柱穴の配置から竪穴住居と推定。柱穴の覆土にAs-C粒と推定できる軽石が含まれることから、年代は3世紀後半以降と推定。

7区1号住居

位置 545-730 **検出** Hr-FAのS1ユニット上面で住居埋没過程の窪みを検出し、Hr-FAより下層の黒色土を細掘して確認。 **方位** N-95°-E **規模と形状** 東壁が調査区域外のため、規模と形状は不明。確認した竪穴部の南北軸は4.0m。 **面積** 計測不可。 **壁高** 南壁部は45cm、北壁部は35cm、西壁部は40cmで、壁面はそれぞれやや傾斜を持つ。壁面の大半はVIII層の黒褐色土及びVII層の黒色土だが、傾斜地形の調整で深く掘り込んだ住居の南半部は、その下半部がIX層の泥流堆積物層となる。 **覆土** 住居埋没過程の覆土中に、Hr-FAが一次堆積。Hr-FA上部は攪乱・削平により存在しないが、S1・S2ユニットが最大層厚25cmで残存。

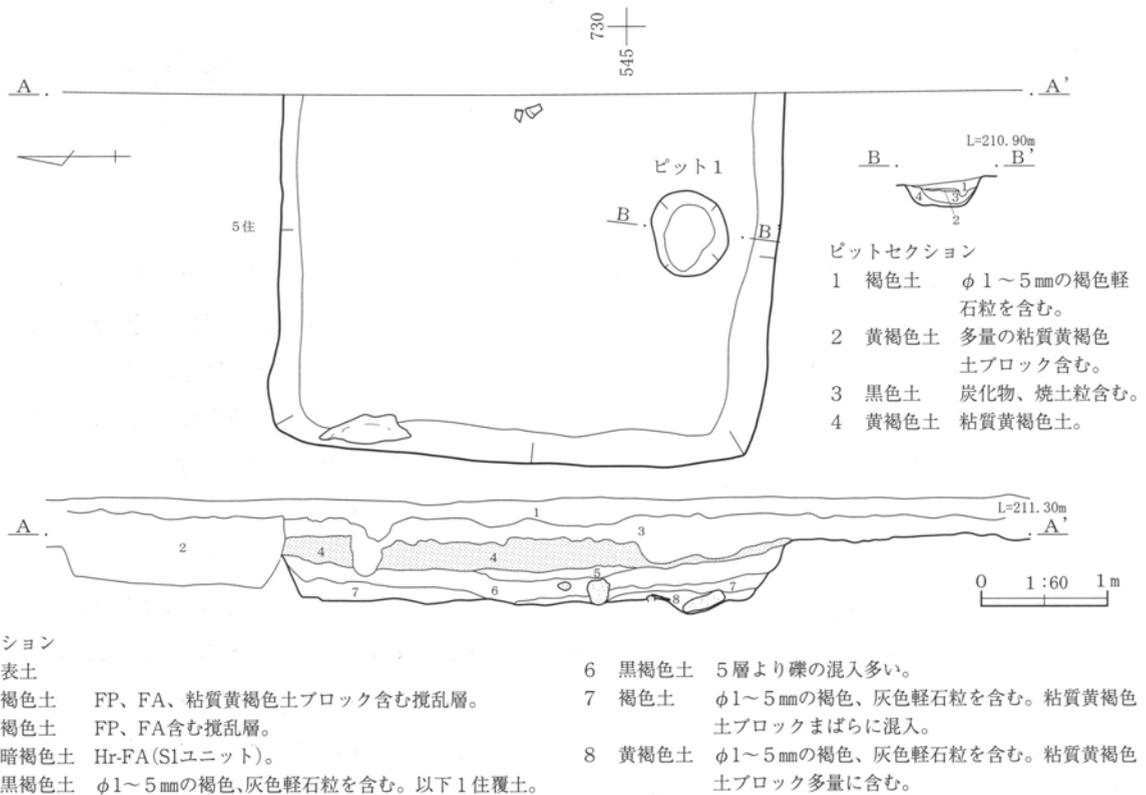
第4章 検出された遺構と遺物



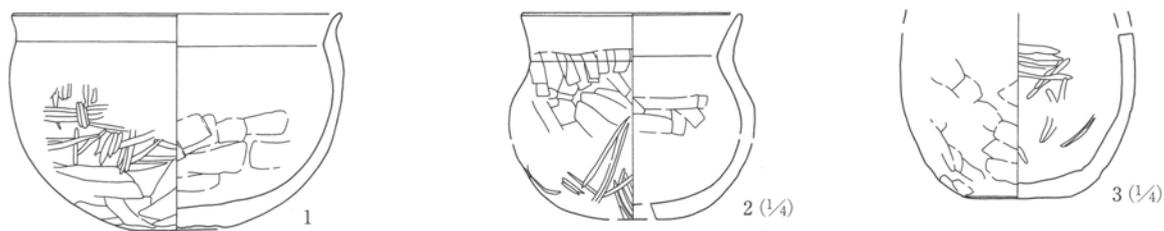
第95図 6区 22号住居

床面とHr-FAとの垂直距離は住居中央部で25cm、壁際が35cmで、僅かなレンズ状の堆積を示す。重複 7区5号住居と極めて近接しているが攪乱のため詳しい新旧関係は不明。但し、5号住居の覆土中にHr-FAが見られないことから、Hr-FA降下時点では埋没がほぼ完了していたものと推定でき、1号住居にはHr-FAが覆土中に堆積していることから、5号住居→1号住居の順で新しいと判断。床面 基盤層のⅡ層を直接床面として、貼床はない。全体にはほぼ平坦で、中央部は特に固く締まる。壁溝 なし。柱穴 なし。貯蔵穴 住居中央南壁寄り直径60cm、深さ20cmの楕円形ピットを確認。覆土に炭化物及び焼土粒を含む土層が存在するが、位置的に貯蔵穴か否かは不明。竈 未確認。遺物 住居の覆土内から土師器坏(1)・壺(2)・小形甕(3)が出土。所見 出土遺物及び6世紀初頭の降下とされるHr-FAの堆積状況より5世紀終末と推定。

7区1号住

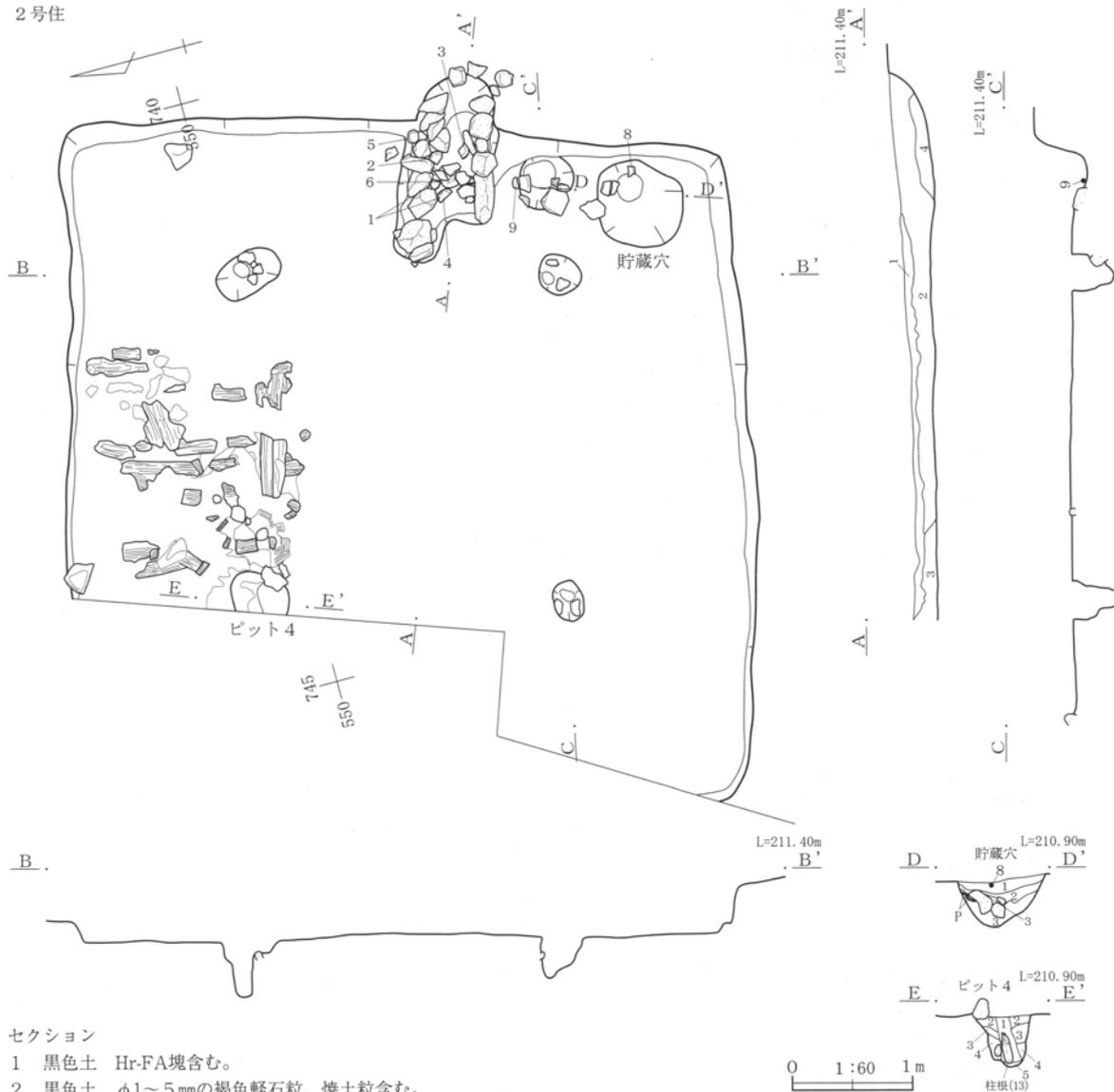


第96図 7区 1号住居



第97図 7区 1号住居出土遺物

2号住



セクション

- 1 黒色土 Hr-FA塊含む。
- 2 黒色土 φ1~5mmの褐色軽石粒、焼土粒含む。
3層より黒味強い。
- 3 黒色土 φ1~5mmの褐色軽石粒、焼土粒含む。
- 4 竈覆土。

貯蔵穴セクション

- 1 黒色土 φ1~5mmの褐色・灰色軽石粒含む。
- 2 黒色土 1層より黒味強い。
- 3 黒褐色土 褐色軽石粒、粘質黄褐色土ブロック含む。

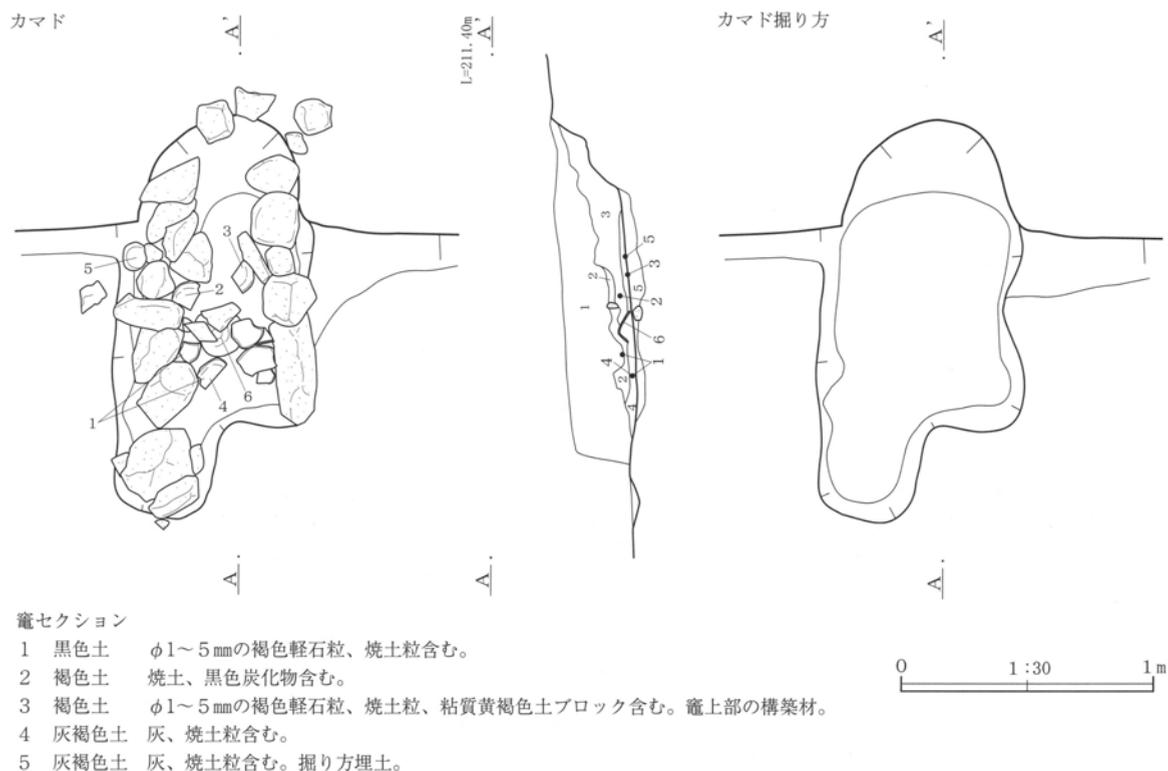
ピットセクション

- 1 空洞部分。柱根の腐食、または萎縮によって生じた空間。
- 2 黒色土 φ1~5mmの褐色・灰色軽石粒含む。
- 3 黒褐色土 φ1~5mmの褐色・灰色軽石粒、粘質黄褐色土ブロック含む。
- 4 黄褐色土 粘質黄褐色土ブロック主体。
- 5 暗褐色土 柱根の腐食によって生じた土。軟質。

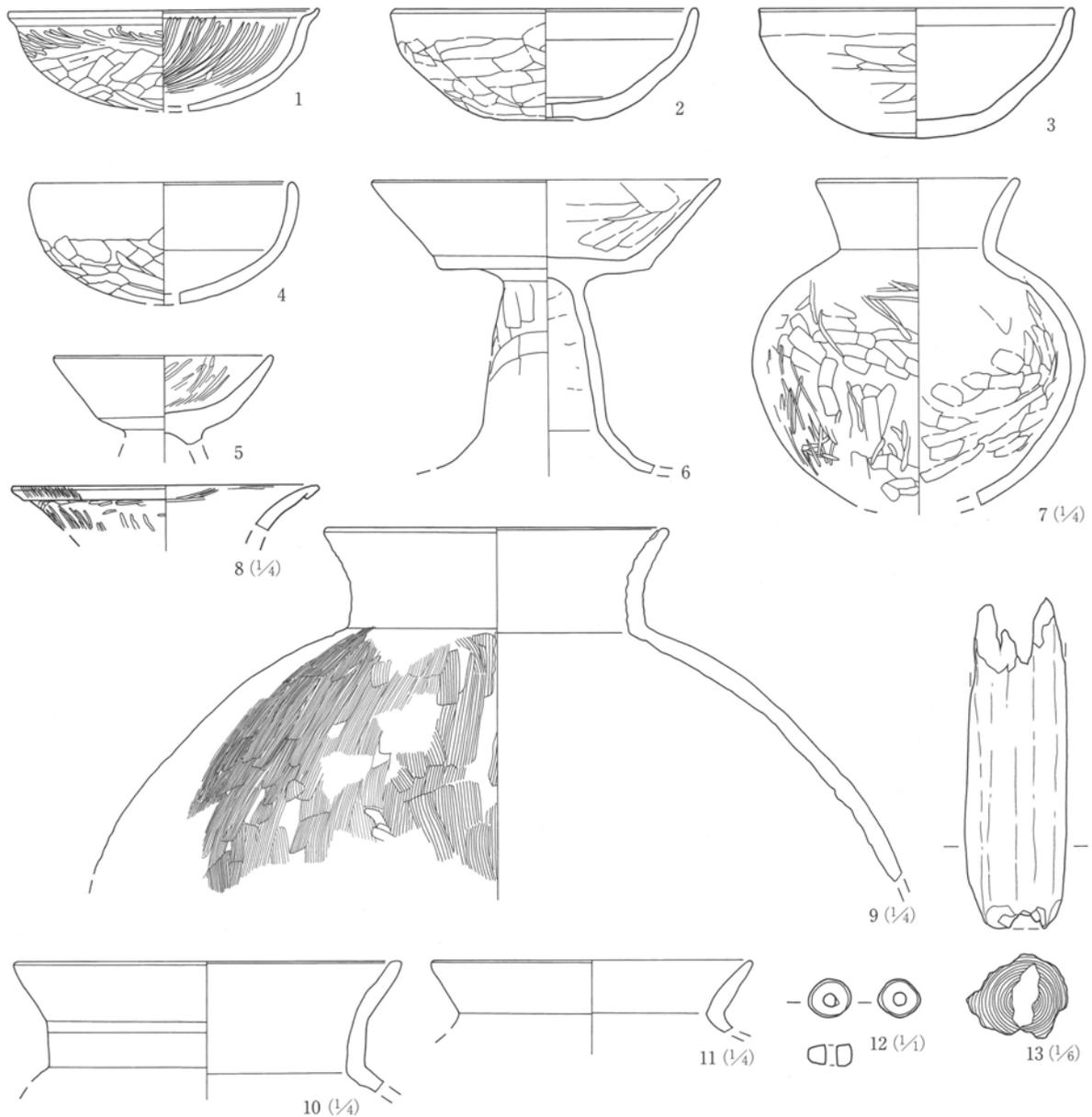
第98図 7区 2号住居 (1)

7区2号住居

位置 545-740 **検出** Hr-FAのS1ユニット上面で住居埋没過程の窪みを検出し、Hr-FAより下層の黒色土を細掘して確認。 **方位** N-107°-E **規模と形状** 西壁が調査区域外のため、規模と形状は不明。確認した南北軸は5.6m。 **面積** 不明。 **壁高** 住居構築時の地表面が、南から北への傾斜地形であることから各壁高は一様ではなく、南壁部は40cm、北壁部は20cm、東壁部は30cm。壁面はⅦ層の黒色土。 **覆土** 住居埋没過程の覆土中に、Hr-FAが一次堆積。Hr-FAの上部は攪乱・削平により存在しないが、S1・S2ユニットが残存。床面とHr-FAとの垂直距離は住居中央部で20cm、壁際が30cmで、僅かなレンズ状の堆積を示す。 **重複** 縄文時代の7区3号住居の上位に構築。 **床面** 基盤層のⅦ層を直接床面とし、貼床はない。全体にほぼ平坦で固く締まる。北西部の床直上より、多量の炭化材を検出。北壁に直交する方向の樽木と考えられるものがほとんどだが、一部にはこれに直交する方向のものも確認(第98図参照)。 **壁溝** なし。 **柱穴** 4個を確認。直径30~45cm、深さ35~50cmの円形掘り方。北西に位置するピット4の底面上5cmから柱根を検出(13、第98図参照)。樹種はコナラ節。 **貯蔵穴** 住居の南東隅に直径65cm、深さ40cmの円形で設置。 **竈** 東壁の中央やや南寄りに設置。袖部から煙道部にかけて両側に角礫を芯材として配置。燃烧部の堆積土層より、天井部はⅨ~Ⅺ層の泥流堆積物層を主体とする褐色土で構築されていたと推定。火床の中央に、土師器高坏を伏せて支脚とする。燃烧部は内法の幅40cm、奥行き60cmで壁内に位置し、煙道は火床から水平に壁を40cm掘り込み、なだらかに立ち上がる。煙出しの造作は確認できない。 **遺物** 竈の支脚付近から土師器坏(1~4)、高坏(5・6)。竈右の窪み及び貯蔵穴から土師器甕が出土(8・9)。 **所見** この住居は7区東半の最北部の低地際に位置する。これより北側は旧河道部となり、河川の浸食により遺構は確認できない。また、この住居は埋没後も河川の影響を受け、低湿地であったことが柱根の残存状況等からも推定できる。本住居の年代は出土遺物から5世紀終末と考えられ、これは6世紀初頭の降下とされるHr-FAの降下年代との矛盾がない。



第99図 7区 2号住居 (2)

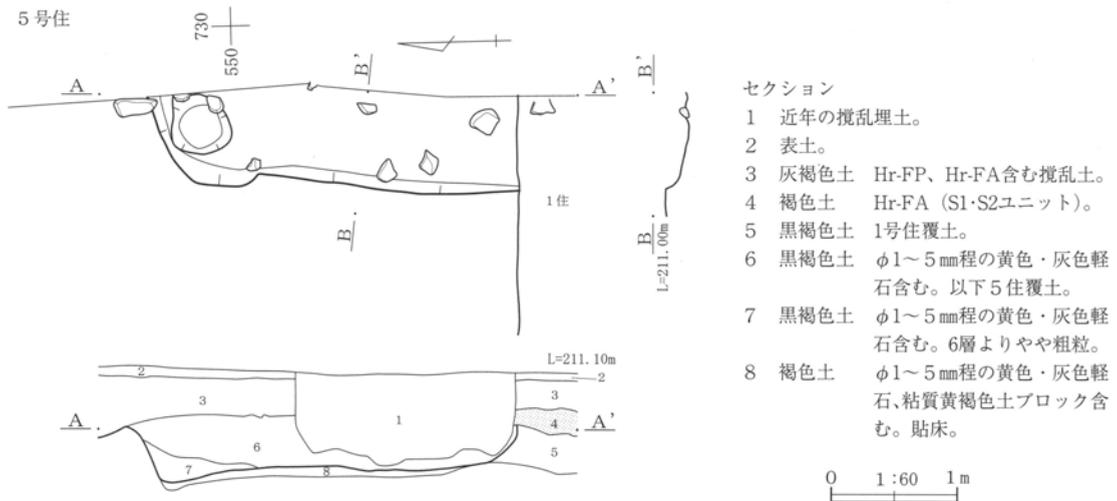


第100図 7区 2号住居出土遺物

7区5号住居

位置 545-730 **検出** Hr-FAの下面では確認できず、その下位のⅦ層の黒色土の上面で検出。 **方位** N-90°-E **規模と形状** 住居の大半が調査区域外のため、規模と形状は不明。 **周堤** 不明。 **面積** 計測不可。 **壁高** 南壁部・西壁部とも10cm。但し、土層断面からは、南壁部が35cm、北壁部は50cmであることを確認。壁面はⅦ層の黒色土となるが、土層断面からは、傾斜地形の調整で深く掘り込んだ住居の北端部は上半部がⅦ層の黒色土、下半部がⅨ～Ⅺ層の泥流堆積物層となる。 **覆土** 住居の覆土はAs-C粒を含む黒褐色土で、これは近接する7区1号住居の一次埋没土に酷似。 **重複** 7区1号住居と極めて近接しているが、攪乱のため詳しい新旧関係は不明。但し、5号住居の覆土中にHr-FAが見られないことから、Hr-FA降下時点では埋没がほぼ完了していたと推定でき、1号住居にはHr-FAが覆土中に堆積していることから、5号住居→1号住居の順で新しいと判断。 **床面** 平面的には捉えられなかったが、土層断面より基盤層のⅨ～Ⅺ層の泥流堆積物層の上に平均層厚7cm程の褐色土による貼床を検出。全体にほぼ平坦。 **壁溝** なし。 **柱穴**

第4章 検出された遺構と遺物



第101図 7区 5号住居

なし。貯蔵穴 住居の北西隅に直径55cm、深さ10cmの円形の掘り込みを検出。但し、貯蔵穴か否かは不明。竈 未確認。遺物 なし。所見 住居大半が調査区域外であること、南壁際が攪乱を受けていることにより詳細は不明であるが、覆土の状況から7区1号住居より古く、5世紀後半と推定。

2) 掘立柱建物跡

6区4号掘立柱建物

位置 505-745 検出 VII層の黒色土の上面では確認できず、IX~XI層の泥流堆積物層の上面で検出。柱間 2間×2間の総柱式と推定。南辺西側の2個は調査区域外。方位 N-12°-E 規模と形状 長軸5.1m・短軸4.8mの、南北にやや長い長方形と推定。柱穴の芯々を結ぶ四角形は、やや歪んだ平行四辺形状を呈す。面積 24.48㎡(推)。重複 なし。柱穴 直径25~60cm、深さ10~35cmの円形を基調とした掘り方。覆土にAs-C粒と考えられる軽石を含む。遺物 なし。所見 覆土にAs-C粒と考えられる軽石を含むことから年代は3世紀後半以降であるが、詳細は不明。

6区5号掘立柱建物

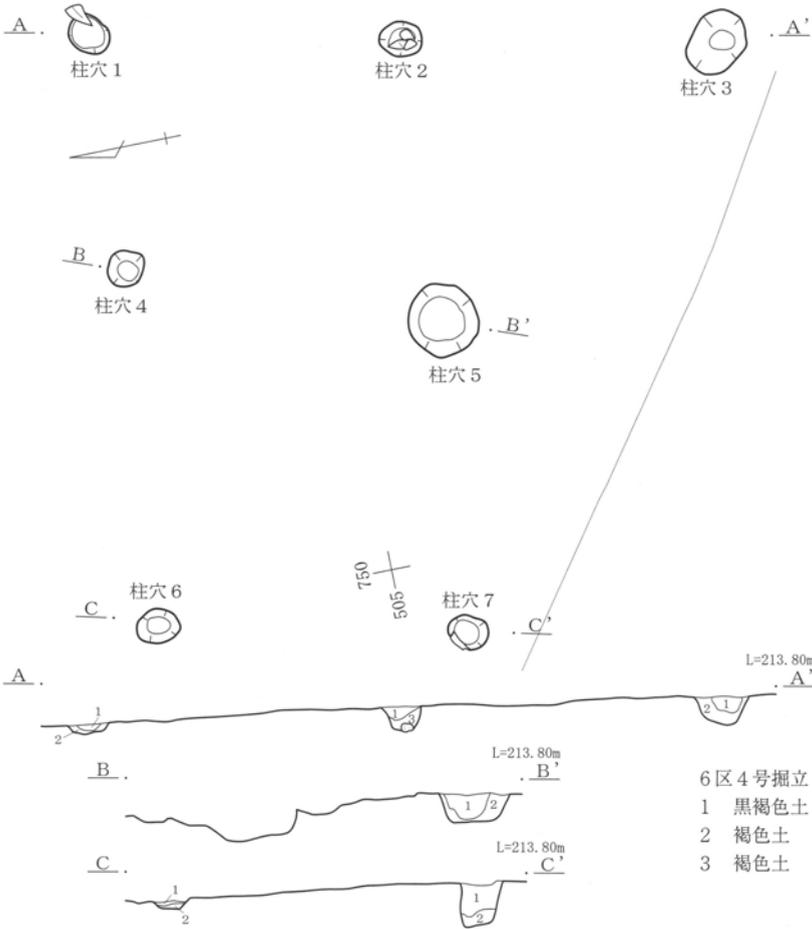
位置 510-750 検出 VII層の黒色土の上面では確認できず、IX~XI層の泥流堆積物層の上面で検出。柱間 1間×2間の側柱式。方位 N-93°-E 規模と形状 長軸3.9m・短軸2.7mの長方形。長軸方向は東西。柱穴の芯々を結ぶ四角形は、やや歪んだ台形状を呈す。面積 10.53㎡。重複 南東隅の柱穴が縄文時代の170・171号土坑と重複。平面精査の所見から、170・171号土坑→5号掘立の順で新しい。柱穴 直径25~35cm、深さ5~15cmの円形掘り方。覆土にAs-C粒と考えられる軽石を含む。遺物 なし。所見 覆土にAs-C粒と考えられる軽石を含むことから年代は3世紀後半以降であるが、詳細は不明。

3) 祭祀跡

6区1号祭祀

位置 530-735 検出 Hr-FAの直下で集積された石の頂上部付近を検出し、その後Hr-FA直下のVII層の黒色土を細掘して全形を確認。規模と形状 VII層黒色土中に掘り込みを伴うことなく石を集積。直径1.3mほどの円形の範囲に、長さ5~30cmの礫を集中的に置き、このうちの1個の川原石を除く全てが角礫。但し、VII層中には泥流堆積物層の二次堆積と考えられる転石を多量に含むことから、これらが全て人為的に置かれ

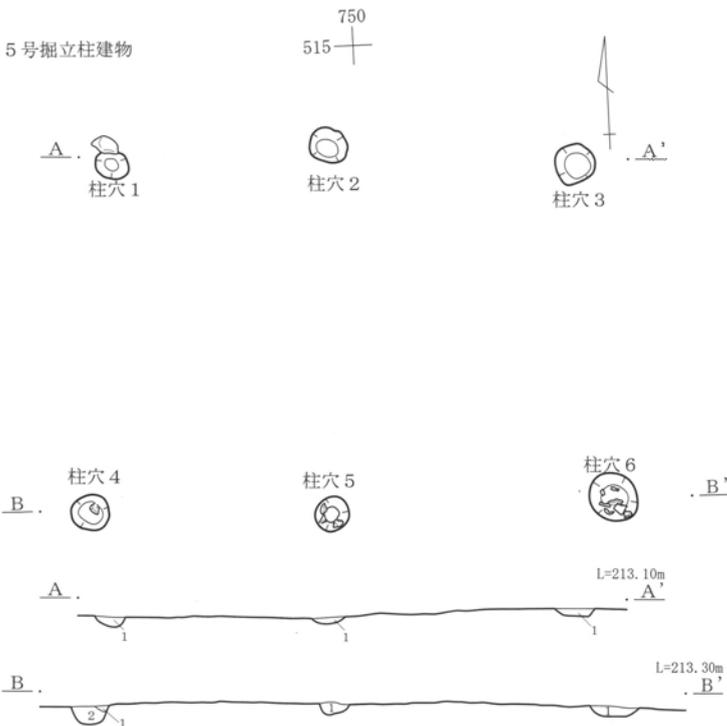
4号掘立柱建物



6区4号掘立

- 1 黒褐色土 φ1~5mmの黄褐色・灰色軽石を含む。
- 2 褐色土 粘質黄褐色土ブロック含む。
- 3 褐色土 φ1~5mmの黄褐色・灰色軽石を含む。

5号掘立柱建物



6区5号掘立

- 1 黒色土 φ1~3mmの褐色軽石含む。
- 2 黄色土 二次堆積の粘質黄褐色土。

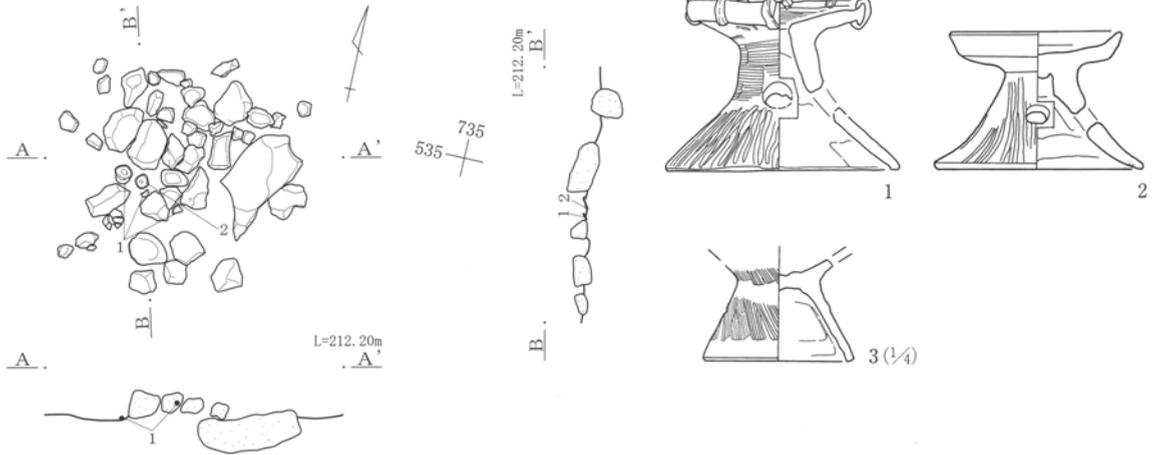


第102図 6区 4・5号掘立柱建物

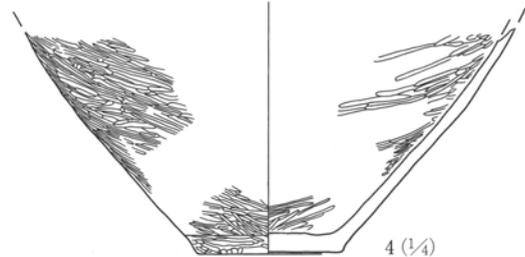
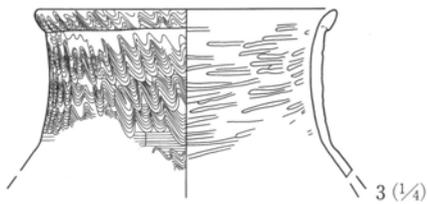
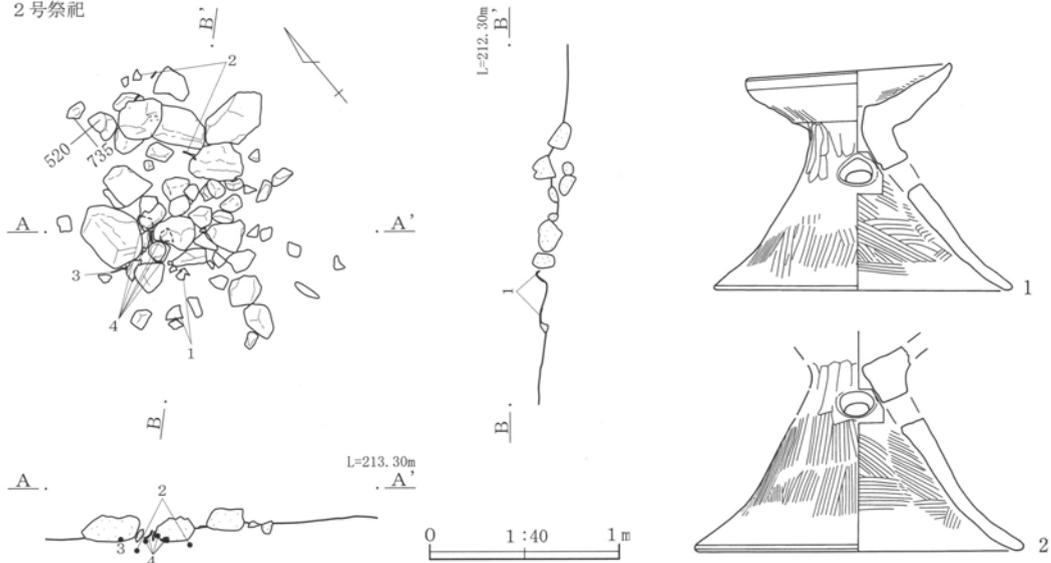
第4章 検出された遺構と遺物

たものか否かの判断ができない。面積 1.3㎡(推)。重複 なし。遺物 集石の内部及び周辺部から土師器器台(1・2)・台付甕(3)が出土。所見 Hr-FAの直下で検出したが、この時点では既にⅦ層で埋没しており、おそらく構築時の旧地表面であるⅦ層中に集積したものと判断。構築年代はⅦ層中にAs-Cを含むことから3世紀後半以降で、出土遺物から4世紀前半と推定。

1号祭祀



2号祭祀



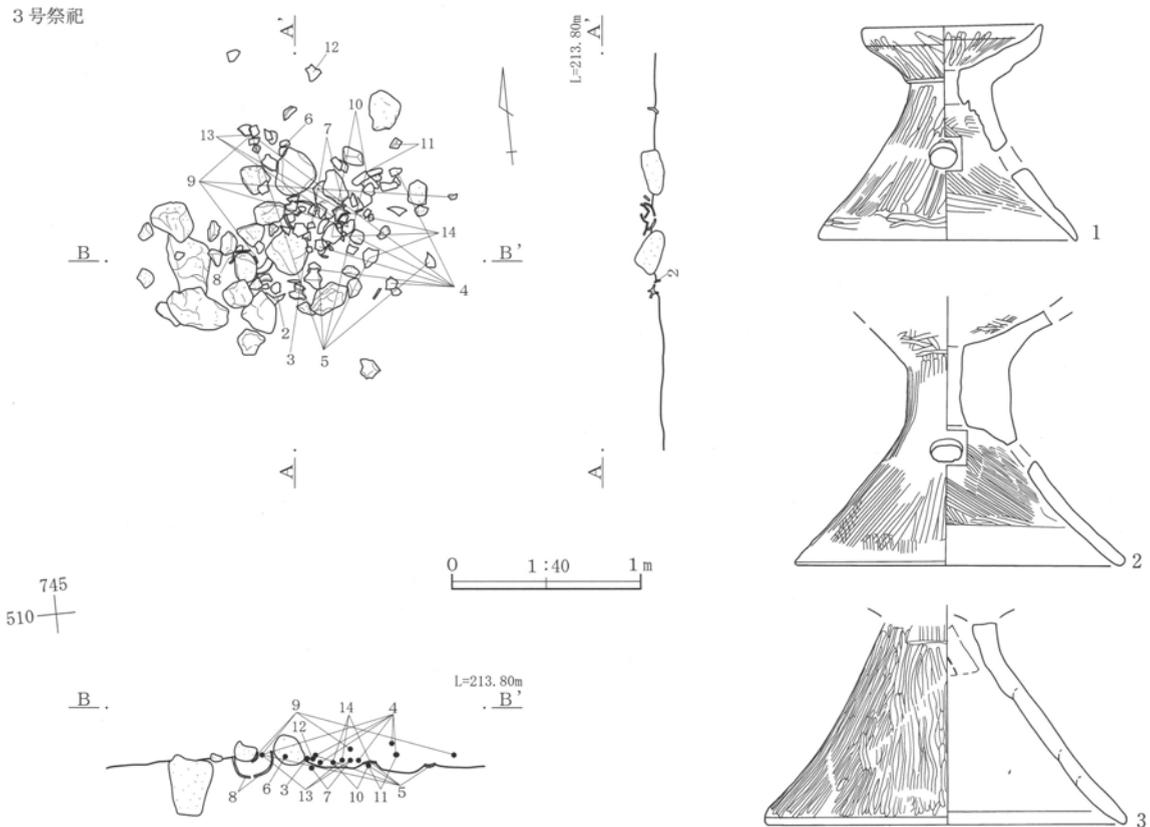
第103図 6区 1・2号祭祀

6区2号祭祀

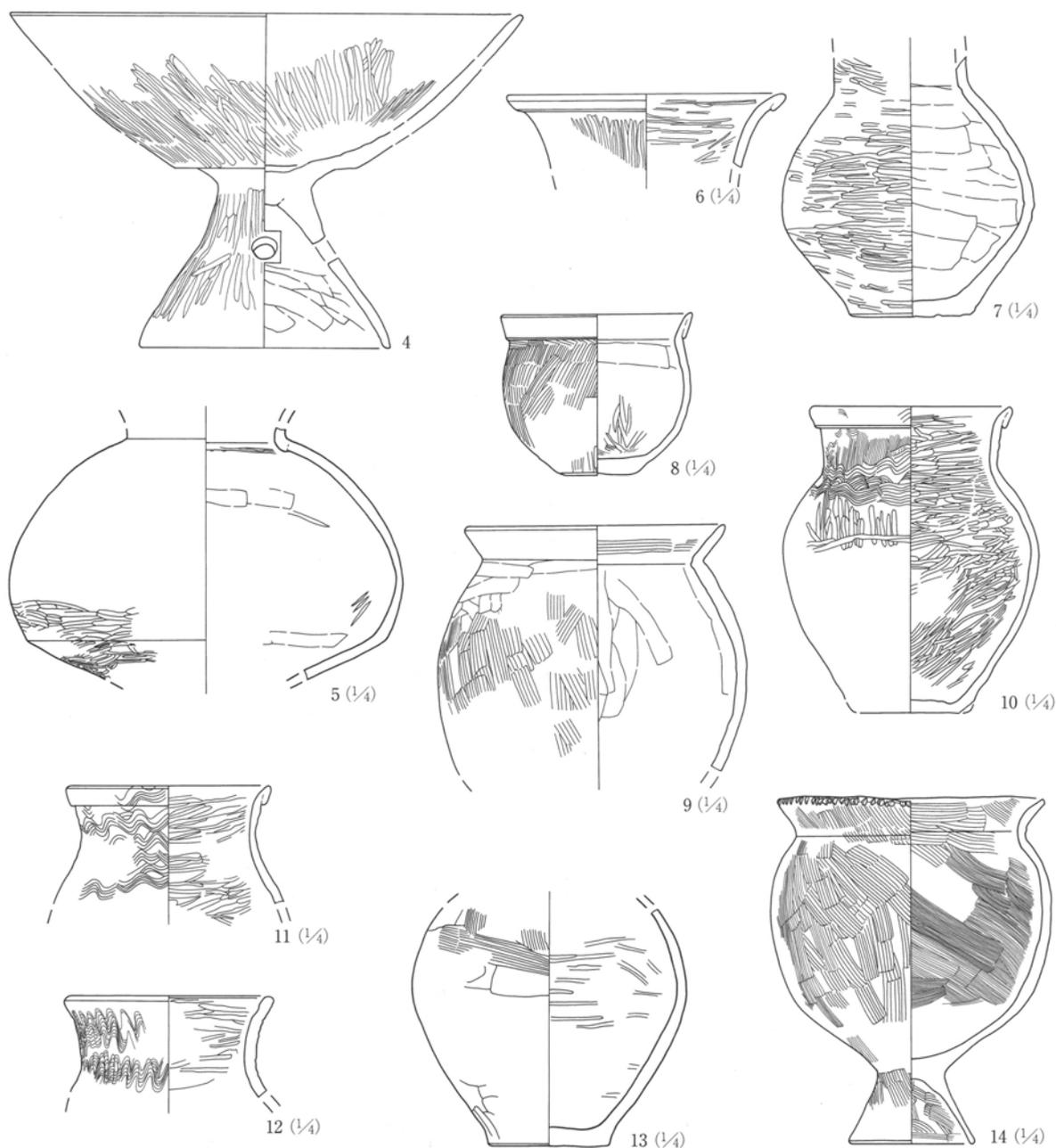
位置 515-735 **検出** 6区19・20号住居の周堤盛土を除去する過程で、集積された石の頂上部付近を検出し、その後Ⅶ層の黒色土を細掘して全形を確認。**長軸方位** N-56°-E **規模と形状** Ⅶ層の黒色土中に掘り込みを伴うことなく石を配置。長軸1.0m、短軸0.8mの長方形の北辺と東辺に、長さ20~35cmの大きな角礫を直線的に配置し、ほぼこれで囲まれる範囲内に5~10cmの小さな角礫を不規則的に集積。**面積** 0.8㎡(推)。**重複** 6区19・20号住居の周堤盛土と重複。この遺構の上位を両住居の周堤盛土が覆うことから、2号祭祀→19・20号住居の順で新しいと判定。**遺物** 主として集石の内部から土師器器台(1・2)、弥生系土器甕(3)・壺(4)が出土。**所見** おそらく構築時の旧地表面であるⅦ層の黒色土中に集積したものと判断。構築年代はⅦ層中にAs-Cを含むことから3世紀後半以降で、出土遺物から4世紀前半と推定。

6区3号祭祀

位置 510-740 **検出** 6区19号住居の周堤盛土の下位の、Ⅶ層黒色土中で検出。**方位** 礫の配置から主軸方向をN-65°-Eと推定。**規模と形状** 約1.5m四方の範囲に直径25cm~35cmの角礫を間隔をあけて配置。その間に直径10~15cmの角礫を置く。おそらく構築時の旧地表面であるⅦ層中に集積したものと判断。但し、Ⅶ層中には泥流堆積物層の二次堆積と考えられる転石を多量に含むことから、これらが全て人為的に配置されたものか否かの判断ができない。中心部から半径50cmの範囲で、土師器破片が集中して出土。**重複** 6区19号住居の周堤と重複。この遺構の上位を19号住居の周堤盛土が覆うことから、3号祭祀→19号住居の順で新しいと判断。**遺物** 集石の中央部付近を中心に土師器器台(1・2)・高坏(4)・甕(8・9)・台付甕(14)、弥生系土器高坏(3)・甕(10~13)・壺(6・7)が出土。**所見** 土器は全て破片であるが、完形に近い状態の数個体分が出土したことから、故意に破碎された可能性もある。出土遺物から3世紀末~4世紀前半と推定。



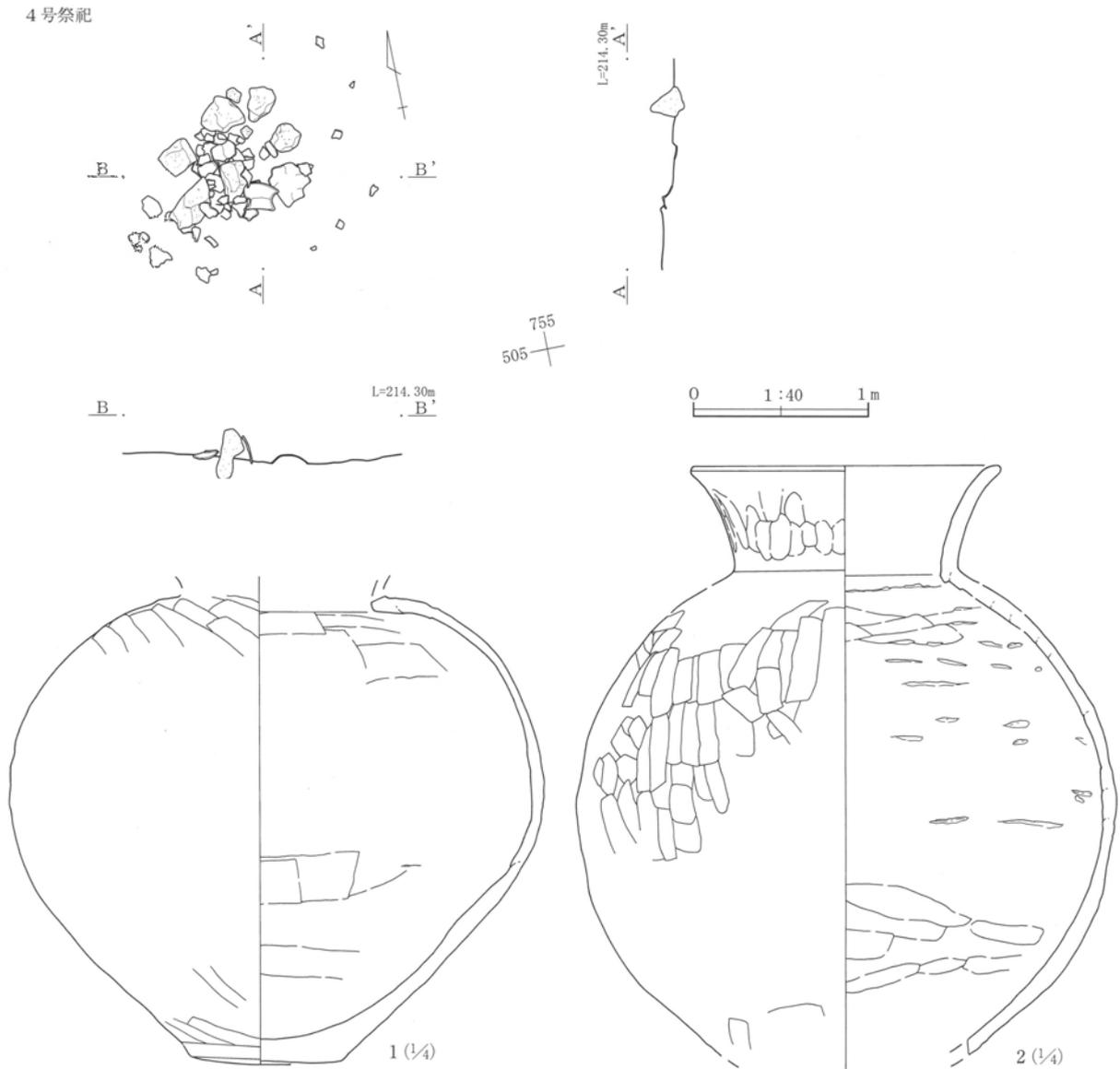
第104図 6区 3号祭祀



第105図 6区 3号祭祀出土遺物

6区4号祭祀

位置 505-755 **検出** Hr-FA直下の黒色土を除去する過程で、Ⅶ層黒色土中に検出。**長軸方位** N-64°-E **規模と形状** 長軸90cm、短軸50cmの長方形の北辺と南辺に、長さ20~30cmの角礫6個を直線的に配置。南辺中央部の1個は、高さ30cmのうちの半分当たる15cmを地中に埋め込むが、これ以外はおそらく構築時の旧地表面であるⅦ層中に置いたものと判断。**重複** なし。**遺物** 角礫で囲まれた内部と南辺の外側から、2個体分の土師器壺の破片が出土(1・2)。接合の結果、1は口縁部、2は底部の接合破片を欠き、これ以外の個体破片はない。**所見** 出土土器はいずれも破片であるが、完形に近い状態の2個体に復元できることから、故意に破碎された可能性もある。検出した黒色土中にAs-Cを含み、上位にHr-FAが存在することから、構築年代は3世紀後半以降、6世紀初頭以前で、土器の様相から5世紀後半と推定。



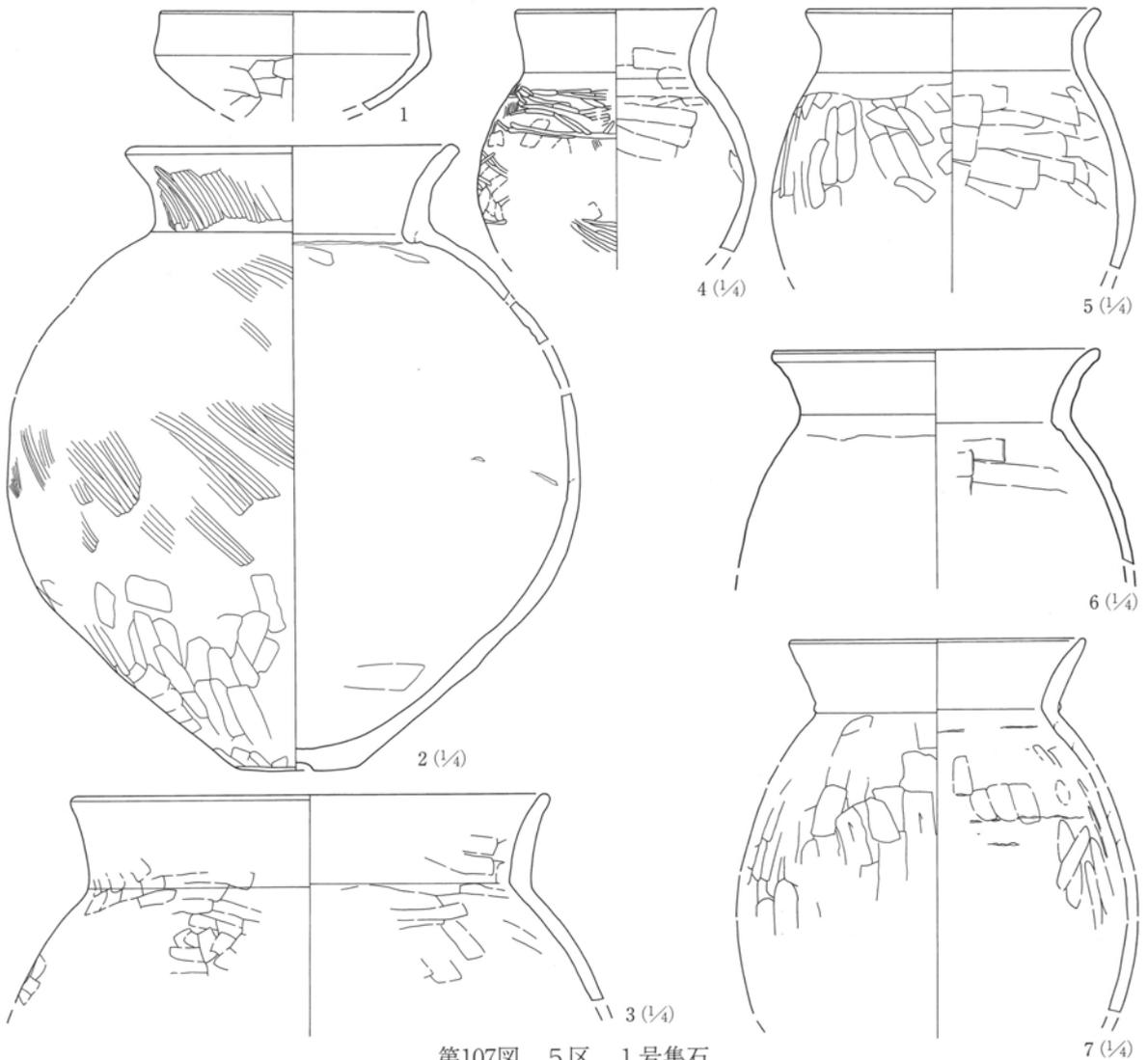
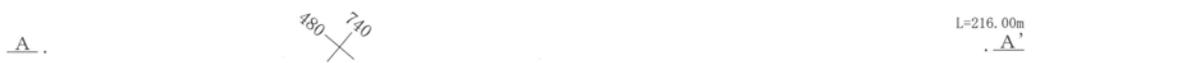
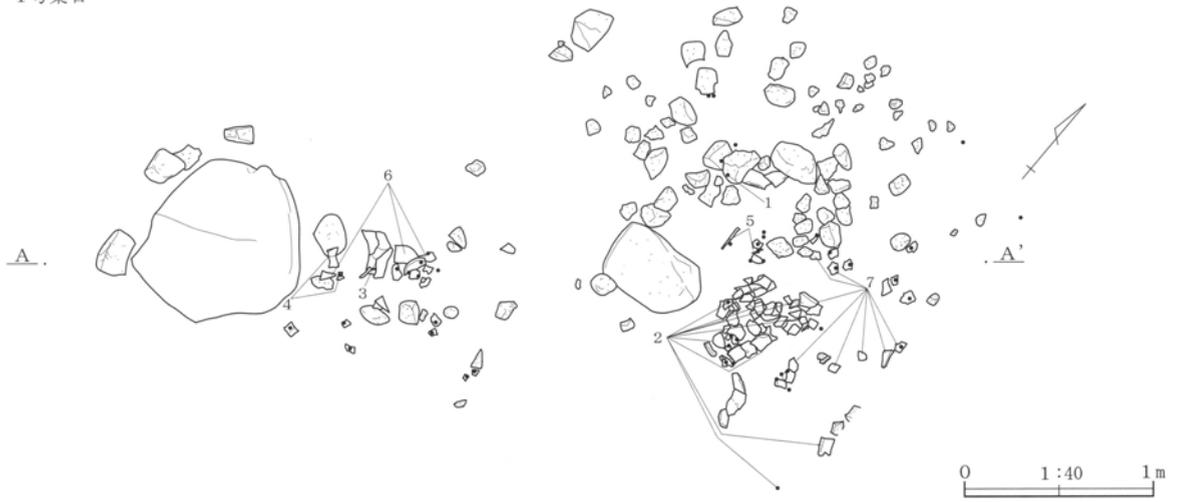
第106図 6区 4号祭祀

4) 集石

5区1号集石

位置 480-740 **検出** Hr-FAの直下で集積された礫の上位を検出、その後Hr-FA直下のⅧ層の黒色土を採掘して全形を確認。 **長軸方位** N-50°-E **規模と形状** 礫の分布は大きく2つに分かれる。南西側の一群は、最大長が90cm程の大型の礫を中心として、長軸2m、短軸1.3mの範囲に礫や土器が散在する。北東側の一群は、長軸2.5m、短軸2mの範囲に最大長が5~30cm程度の礫や土器片が多数分布している。いずれも掘り込みなどは持たない。 **重複** なし。 **遺物** 2カ所の礫分布に伴う2個の大型礫の北東側に、それぞれ土器の集中する範囲を確認した。土器は、それぞれの分布域を越えて接合することはなく、両者が別個の遺構である可能性も考えられる。南西側の一群からは土師器甕(3・4・6)が、北東側からは土師器坏(1)・甕(2・5・7)が出土している。土器はほぼ同じレベルから出土しており、その高さが当時の使用面であったものと推測される。 **所見** Hr-FA直下で確認したが、遺物はⅧ層の黒色土に下部が埋没した状況で検出されており、Ⅷ層の上位に構築面があったものと思われる。土器の様相から5世紀後半に位置付けられる。

1号集石



第107図 5区 1号集石

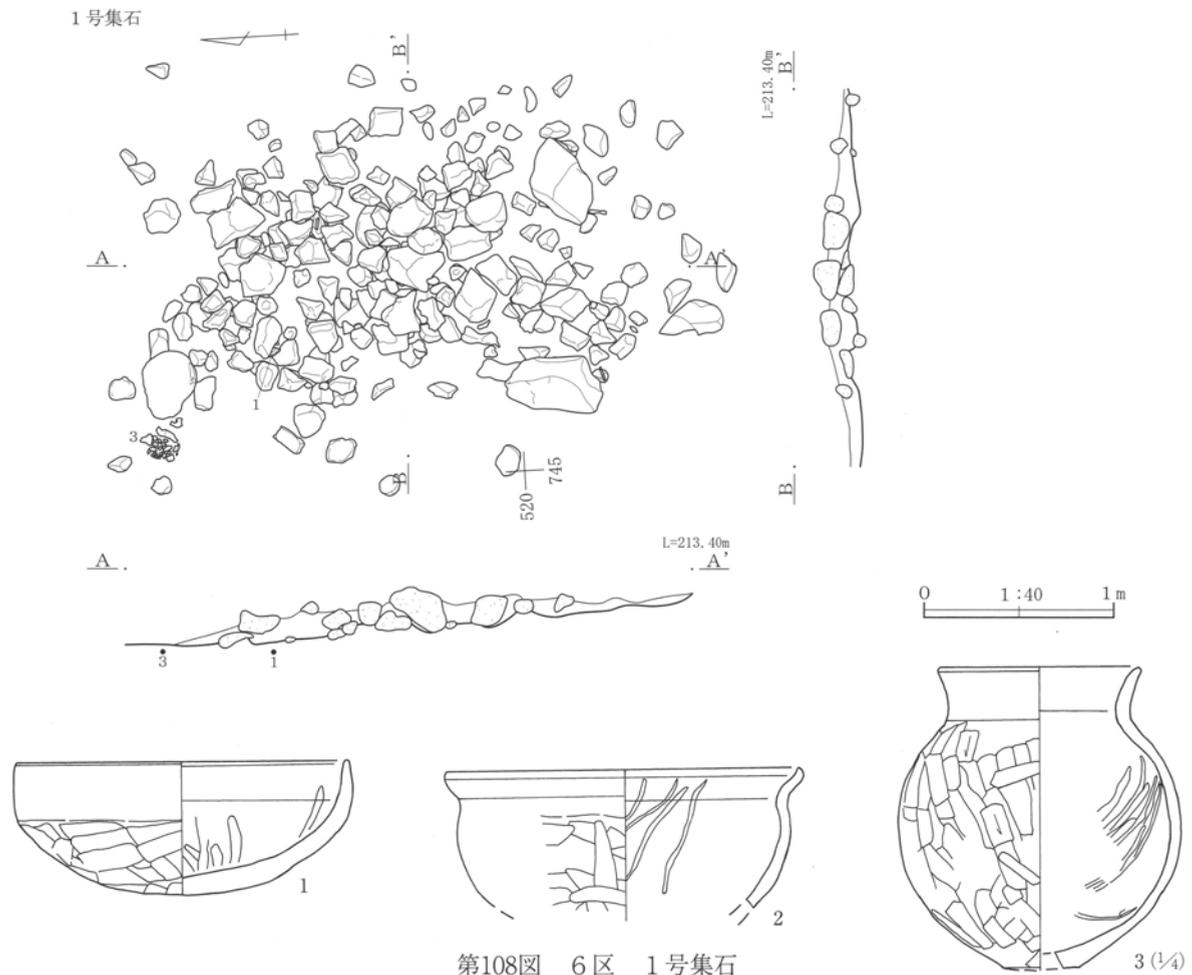
6区1号集石

位置 520-740 **検出** Hr-FAの直下で集積された石の頂上部付近を検出し、その後Hr-FA直下のⅦ層の黒色土を細掘して全形を確認。**長軸方位** N-3°-E **規模と形状** Ⅶ層黒色土の上面に掘り込みを伴うことなく石を集積。長軸2.4m、短軸1.4mの長方形の範囲に、長さ5~20cmの角礫を集中的に置き、北東隅を除く三隅には長さ50cmほどの大きな角礫を配置。北東隅にも同様に配置したものと推定。長軸方向は南北。**面積** 3.4㎡。**重複** なし。**遺物** 集石に混ざった状態で土師器坏(1・2)・甕(3)が出土。**所見** Hr-FAの直下で検出したが、この時点では既にⅦ層で埋没しており、おそらく構築時の旧地表面であるⅦ層の上面に集積したものと判断。Ⅶ層はAs-CとHr-FAの間に位置することから、構築年代は3世紀後半以降、6世紀初頭以前で、Ⅶ層上面の出土遺物から5世紀後半と推定。Ⅶ層の上面は、6区18~21号住居の構築時の旧地表面と同一であることから、これらのいずれかに付随する可能性が高い。

5) 土器集中遺構

4区1号土器集中

位置 425-720 **検出** 古代の土坑調査中にHr-FA下より土師器甕(1)を検出、その周囲を広げて土器が集中する範囲を確認した。**長軸方位** 不明 **規模と形状** 前述の甕の南西へ2.5mの地点で、直径1.5m程の範囲に土器が集中して分布。その北側へ2m程離れた地点にも数点の礫と土器の集中が見られた。**面積** 不明。**重複** なし。**遺物** 1は下部がⅧ層黒色土にわずかにめり込むように埋没していた。周囲のFA層にも乱れ



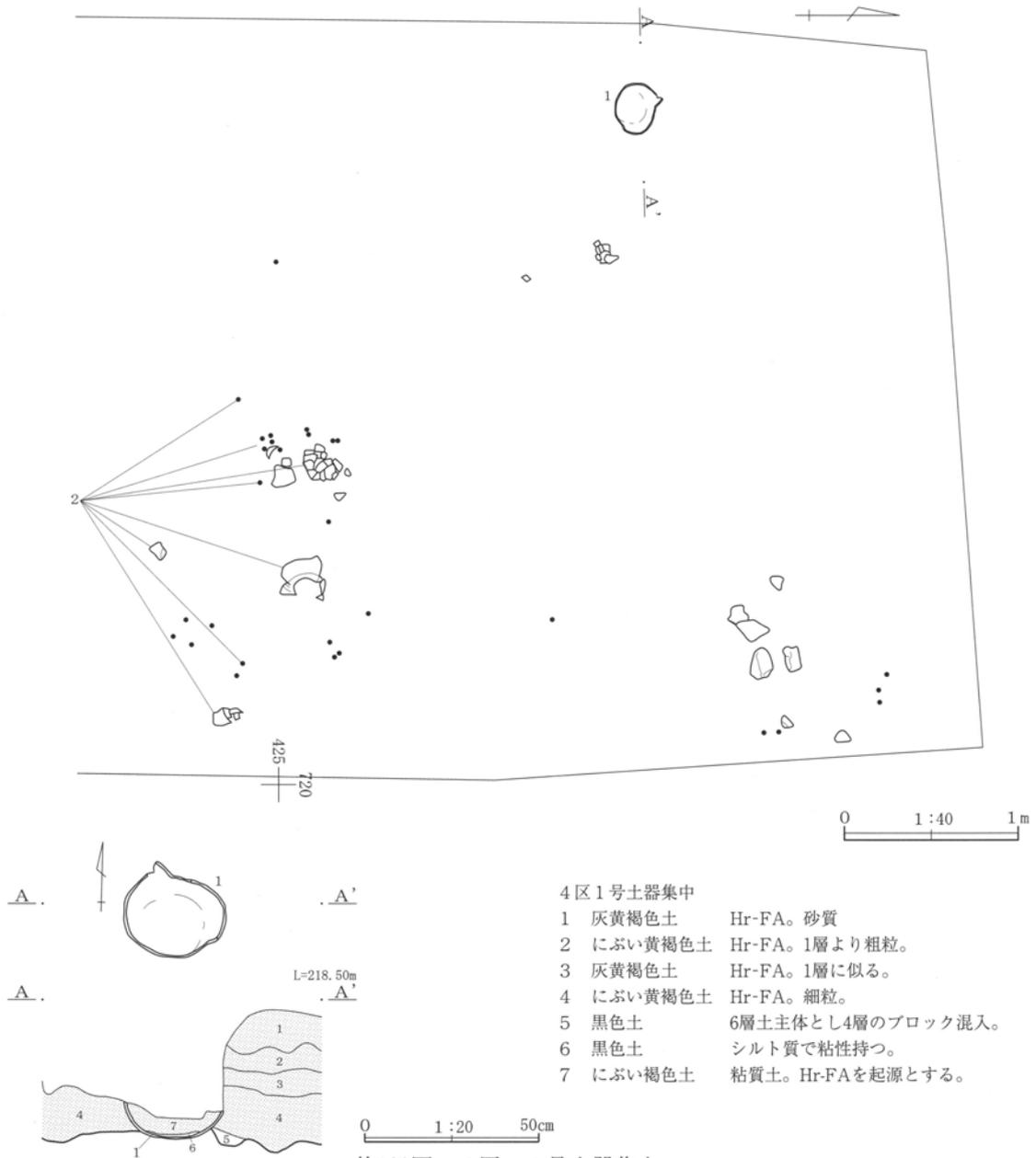
第108図 6区 1号集石

はない。甕の内面下底にはⅧ層の黒色土が1cm程堆積しており、その上位にFAを起源とするにぶい褐色の粘質土が入っていた。南西側の土器集中部からは土師器甕(2)が出土。**所見** 3カ所に分かれて遺物が分布し、相互に接合関係も見られないことから、それぞれ別個の遺構である可能性が高い。構築年代は、遺物の直上をHr-FAが覆っていることから6世紀初頭以前で、土器の様相から5世紀後半と推定される。

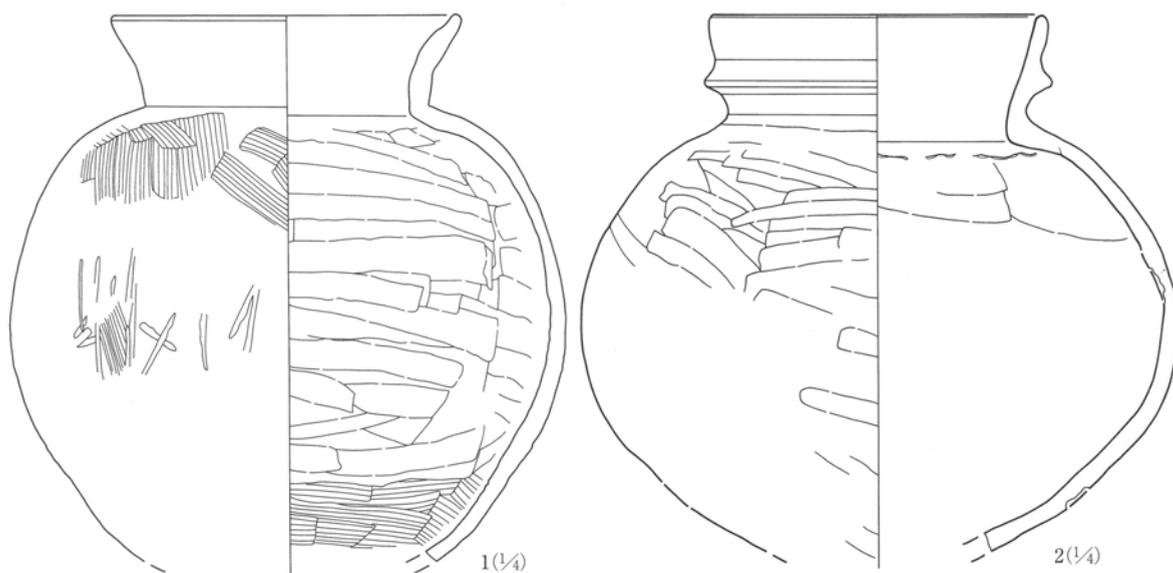
6区1号土器集中

位置 520-745 **検出** Hr-FA直下の黒色土を除去する過程で、Ⅶ層の黒色土中に土器が比較的集中して出土。**規模と形状** 土器の主たる分布範囲は長軸90cm、短軸50cmの長方形で、この周囲にも破片が散在。掘り込みを伴うことなく、周囲の石との共伴関係も不明。**重複** なし。**遺物** 弥生系土器甕(3)、土師器小形甕(1)・小形壺(2)・台付甕(4)が出土。**所見** 検出した黒色土中にAs-Cを含み、上位にHr-FAが存在することから、構築年代は3世紀後半以降、6世紀初頭以前で、土器の様相から4世紀前半と推定。

1号土器集中

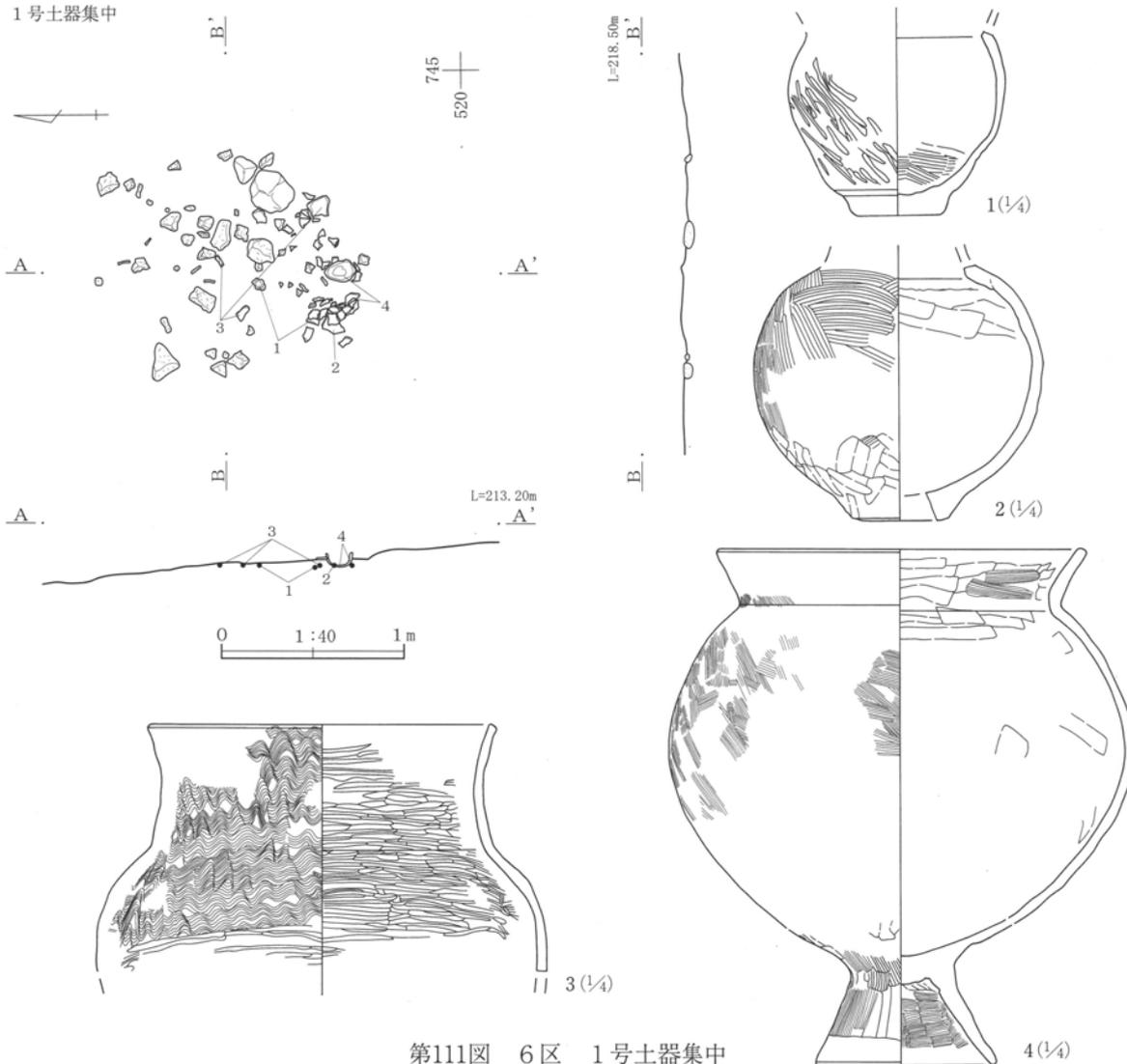


第109図 4区 1号土器集中



第110図 4区 1号土器集中出土遺物

1号土器集中



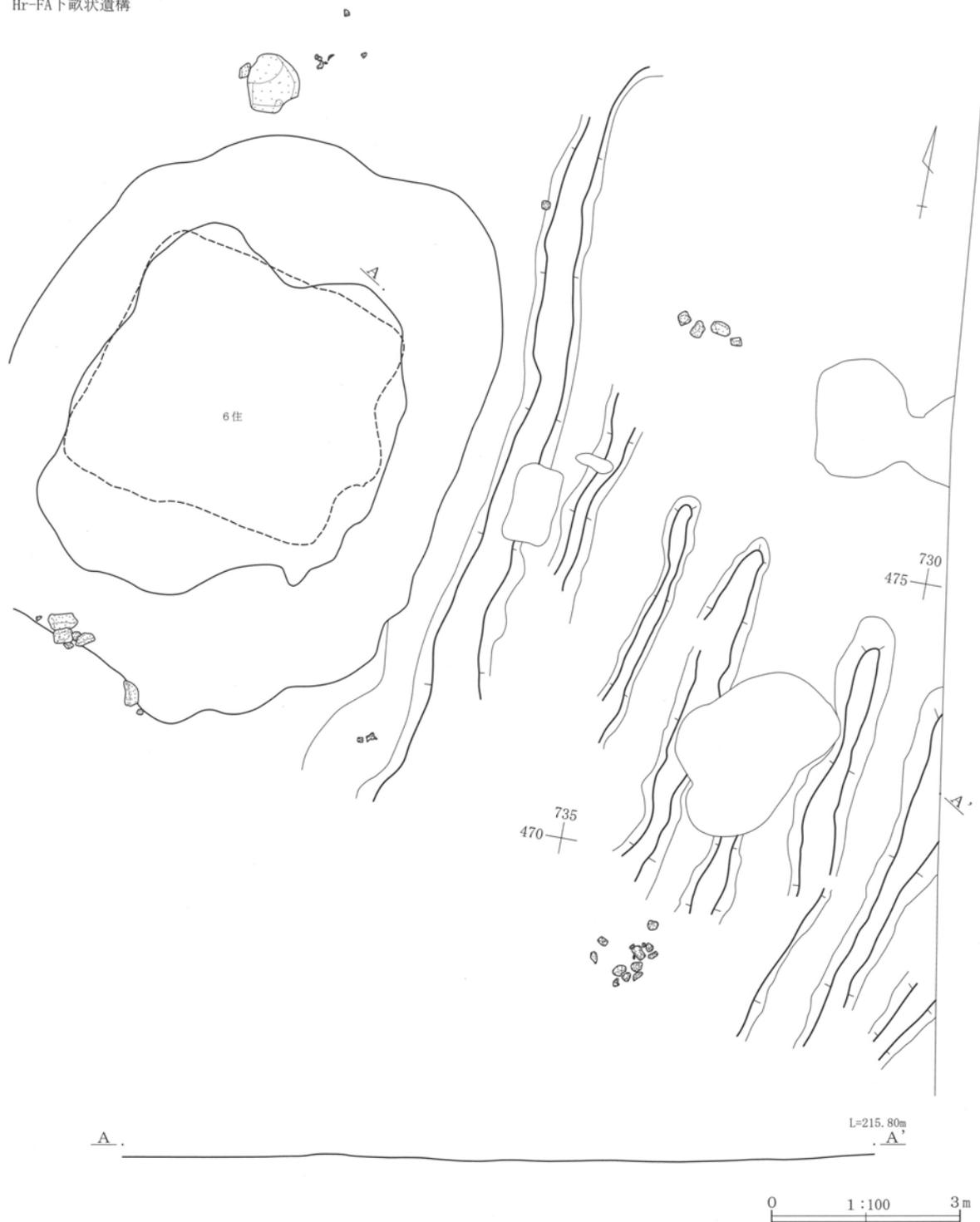
第111図 6区 1号土器集中

6) 水田・畝状遺構

5区Hr-FA下畝状遺構

位置 470~475-725~735 **検出** Hr-FAのS1ユニット下面、すなわちⅦ層黒色土の上面で、南北方向を基調とした筋状の僅かな凹凸を確認。**地形と火山堆積物** 5区の基本的な地形は、Ⅸ~Ⅺ層の泥流堆積物層が形成した地形を反映して、南側から北側にかけて約4%前後の勾配で下る傾斜地形を呈す。泥流堆積物層の

Hr-FA下畝状遺構



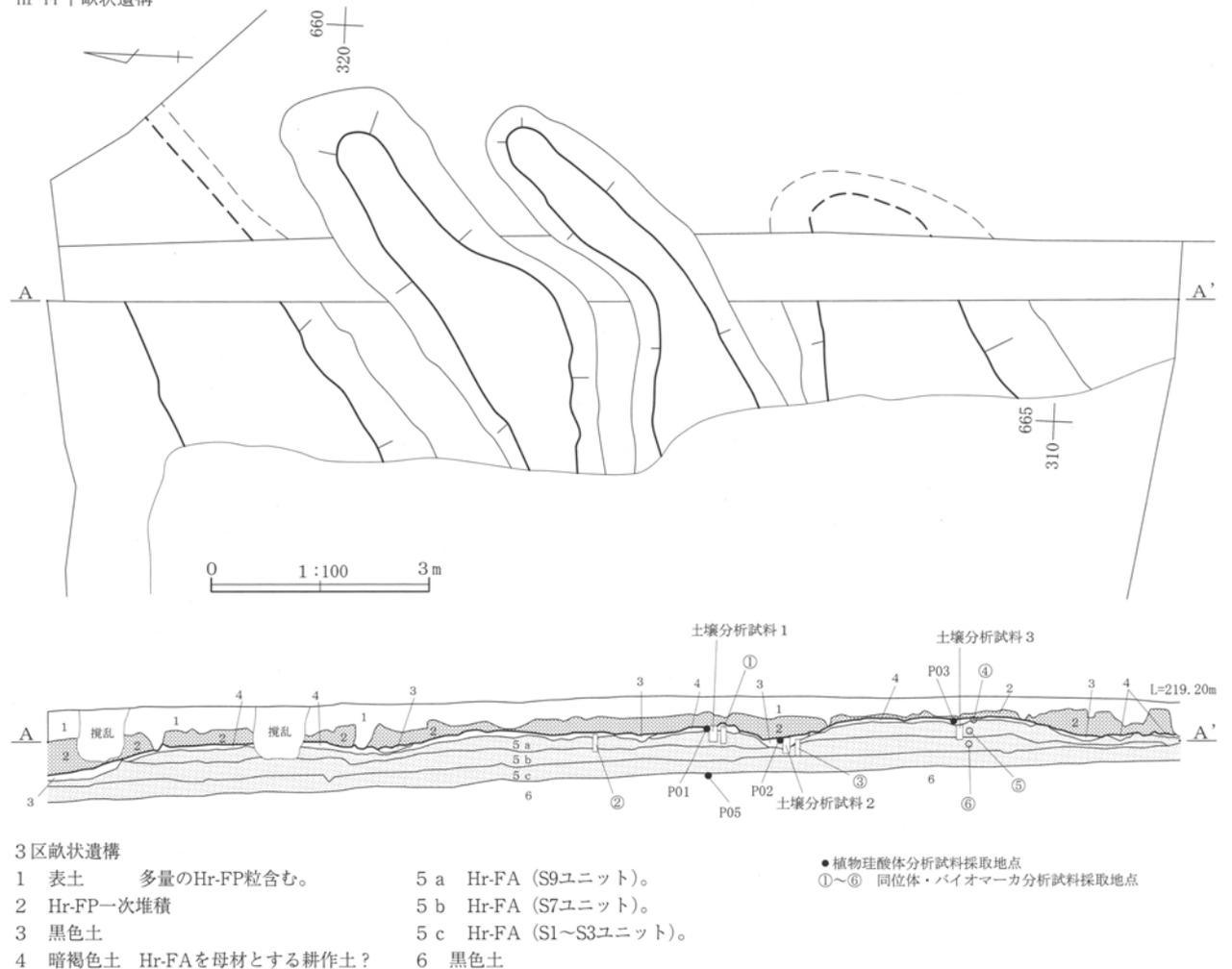
第112図 5区 Hr-FA下畝状遺構

上位はⅧ層黒褐色土とⅦ層黒色土で、このうちⅦ層中にAs-C粒を含むが、一次堆積層はない。 **範囲** Hr-FAの直下で畝状遺構を検出したのはこの5区のみで、この地区の南東部と北部に確認。南東部のものは、東側が調査区域外まで延びる。 **覆土** Hr-FAが畝状遺構の直上に一次堆積。 **重複** 北部の一群の下位から1号集石が出土し、5区6号住居の東側の周堤がこれに接する南東部の一群の「畝間」の上位を覆う。したがって、1号集石→北部の畝状遺構、南東部の畝状遺構→6号住居の順で新しい。 **畝の走行** 確認した畝状の高まりは南東部が8条、北西部が5条で、等高線にはほぼ直交する方向で南北に走行。畝状の高まりは幅40～160 cm、芯々距離約1.5m、畝と畝間の比高差5cm。 **耕作土** 耕作土と考えられる土壌はⅦ層黒色土を母材とする。 **遺物** なし。 **所見** Hr-FAの降下時にはすでに放置されていた畑の畝と畝間である可能性があるが、耕作活動を積極的に証明する資料はなく、自然地形の可能性も考えられる。仮に畑であるとすれば、いずれも5世紀後半に位置付けられる1号集石及び6号住居の年代から、5世紀後半を前後する時期と考えられる。なお、耕作土と考えられる土壌の植物珪酸体分析、土壌微細形態学の分析などは実施していない。

3-③区Hr-FP下畝状遺構

位置 305～320-660 **地形と火山堆積物** 3区の基本的な地形は、大きくはⅨ～Ⅺ層の泥流堆積物層が形成した地形を反映して、南西側から北東側へ緩やかな勾配で下る傾斜地形を呈す。畝状遺構を検出したHr-FPの下

Hr-FP下畝状遺構

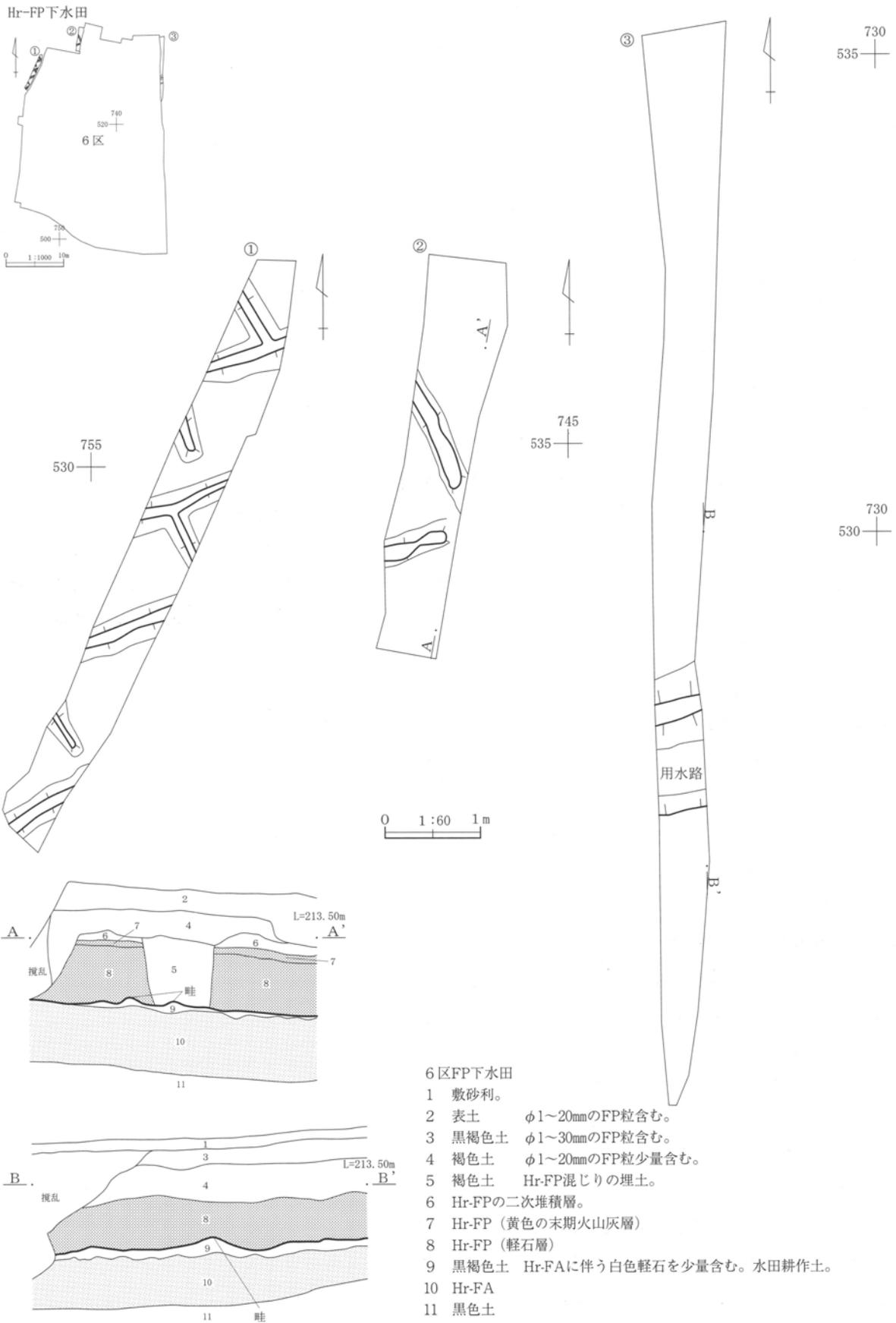


第113図 3-③区 Hr-FP下畝状遺構

位に位置する層厚60cmのHr-FAは、この地形をトレースして堆積するため、その上面は同様に南西から北東への傾斜地形を示す。畝状遺構はこのHr-FAの上面に立地。**範囲** 畝状遺構を検出したのは3-③区の中央部付近のみで、このうち地形の低い東側は南北方向の浅い谷状の窪み付近を東限とするが、地形の高い西側はHr-FPが削平されてその限界は不明で、北側と南側は調査区域外。**覆土** Hr-FPの初期段階のユニット(I1~4のいずれか)が畝状遺構の直上に一次堆積。**畝の走行と区画** 確認した畝状の高まりは3条で、地形の傾斜に沿って南西から北東へ走行。畝状の高まりは幅0.8~2.0m、芯々距離2.0~2.5m、畝間の深さ30cmほどで、畝の頂上部は地形と同様に南西から北東へ傾斜。**耕作土** 畝間はHr-FAのS7ユニット付近まで達し、耕作土と考えられる土壌はS9以降のユニットを母材とする。**面積** 不明。**遺物** なし。**所見** 畑の畝と畝間である可能性もあるが、一方で自然地形に全く沿っていることと、この地区と同様な地形を呈する3-③-8区に、同様な浅い谷状の窪みが存在することから、東側の谷状の窪みにつながる浅い枝谷状の自然地形である可能性もある。なお、耕作土と考えられる土壌の植物珪酸体分析、土壌微細形態学による分析を実施したが、いずれも畑を証明するには至っていない(第6章 2、3参照)。また、同位体とバイオマーカーによる分析でも、耕作活動を証明するほど積極的な証拠は得られていない。

6区Hr-FP下水田

位置 525~535-730~755 **調査経緯** 6区のHr-FP下面の調査は、平成15年度に調査区域の全域について実施された。この時点では水田遺構は未検出で、この年度はHr-FPの上下面を調査して一旦終了した。翌平成16年度はこれに継続した調査で、Hr-FPの下位に位置するHr-FAの上面から開始したが、この調査におけるHr-FA下面の調査段階で、調査区域西端部の壁面に偶然にも畦の断面を発見した。しかし、この段階では既に調査面の全体がHr-FAの下面まで下がっていたため、調査区域の西側と東側の一部を事業区域の限界付近まで棚状に拡げて、調査区域に沿った帯状の範囲にHr-FP下面の平面的な調査を実施した。この結果、Hr-FPの下面に水田遺構を検出するに至った。**地形と火山堆積物** 6・7区の基本的な地形は、IX~XI層の泥流堆積物層が形成した地形を反映して、南側から北側にかけて約6%前後の勾配で下る傾斜地形を呈す。水田面を検出したHr-FPの下位に位置するHr-FAの下面、すなわちHr-FAが直接被覆した6世紀初頭の地表面は、埋没過程にある5世紀後半の堅穴住居の窪みによる複数の大きな凹凸が存在し、しかもIX~XI層に含まれる岩屑などによる自然石が無数に露出した状況を呈していた(PL14 6区Hr-FA下面全景写真参照)。しかし、最大層厚80cmにも及ぶHr-FAの降下、とりわけ窪みに吹き溜まる形で厚く堆積した火砕流のS7ユニットがこれらの凹凸をほぼ平坦化し(PL15 6区19号住居土層断面写真参照)、しかも露出していた石を完全に被覆した。このためHr-FAのS12ユニットの上面は、傾斜地形ではあるものの石の露出がなく、凹凸の少ない様で緩やかな北斜面が形成されるに至った。Hr-FP下の水田が立地するのは、この平坦化されたHr-FAのS12ユニットの上面となる。**水田域の範囲** 水田域が想定されるのは、6区の北側部分から7区にかけての範囲であるが、7区ではHr-FPが攪拌されていて水田の有無を確認することができない。また、水田面を検出した西壁面及び東壁面の調査範囲は、あくまでもHr-FPの一次堆積層が残存していた部分か、或いは調査区域を事業区域の限界付近まで拡げ得た範囲であり、これらの調査範囲がそれぞれの北限と南限を示すものではない。しかし、西壁側の南限については、520-755グリッド地点の試掘調査で畦畔が確認できず、またはHr-FP直下の土壌の状況が、畦畔を確認した部分とは明らかに異なることから、この地点にまで水田域を想定することは困難である。また、東壁面側では、後述する用水路が水田への水廻しの関係から、水田域の最も高い位置を走行するものと考えられることから、この位置が南限になる可能性が高い。一方、北限を想定し得る資料はないが、一般的に河川による低地部とこれに続く斜面が水田化された場合、その範囲は斜面のある位置



第114図 6区 Hr-FP下水田

から河川までの間に及ぶ例が多いことから、おそらく7区北側の金沢川が、同河川の右岸側での北限と考えられる。したがって、水田域は概ね第115図の範囲に想定される。

覆土 Hr-FPの初期段階のユニット(II~4のいずれか)が、水田面の直上に一次堆積。

畦の走行と区画 縦畦は等高線にほぼ沿った方向に走行し、縦畦ごとで区画される田面が斜面の傾斜に即して段差をもつ棚田状を呈す。調査範囲が狭いため一区画の全体を確認し得た部分はないが、縦畦間の芯々の間隔が約1.2mの極小区画水田と想定される。畦は幅20~30cm、高さ10cmで、縦畦に比較して横畦がやや細い。水口は横畦を切る形で設けられ、3箇所を確認した。いずれも横畦の南端部に水口を設けるが、これは傾斜の高い南側から用水を下の区画に廻すことで、一区画内の全体を滞水させるための工夫である。

耕作土 Hr-FAのS12ユニットを攪拌して耕作土とするため、その母材は火山灰(火砕流堆積物)である。耕作土及び畦畔の盛土材はやや土壌化が進んではいるものの、全体に火山灰質で粘性が少なく、攪拌に際して水が介在したと想定される土壤の様相を呈す(PL19 Hr-FP下水田畦セクション写真)。なお、水田域より南側のHr-FP下の黒色土には、水が直接的に介在した土壤の形成が見られない。

水田面の状況 畦畔はその高さを保って風化は比較的少なく、水田面には多数の小さく浅い凹凸が認められる。これらのことから、Hr-FPの噴火の直前には畦畔、水田面ともにその年の田作りが完成した段階にはなく、田面の耕起などが開始されている状況も認められない。おそらく、噴火の前年以前に放置されたままの状態にあったものと想定されるが、畦畔の風化が少ないことから、放置の期間は比較的短いものと考えられる。

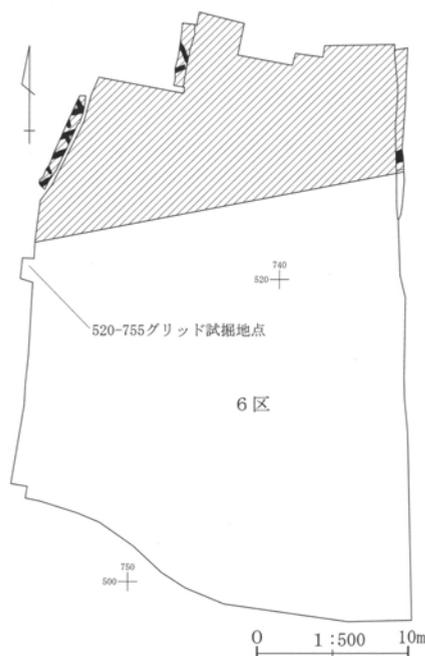
用水路 縦畦と同様に等高線にほぼ沿った方向の走行を示す。水路としての掘り込みは浅く、導水部の両側に畦畔を造ることで水路としての機能を持たせている。上幅80cm、下幅40cm、中心部の深さ10cmで、水田域と考えられる範囲のなかで、地形の最も高い南側を東流する。水路の底面では、Hr-FPの初期段階のユニットが乱れることから、この段階では既に水流があった可能性が高い。この水流の要因が人為的な導水によるものか、或いは降雨などによる自然現象によるものかは厳密には不明であるが、水田面の状況で噴火の年の耕起がまだ行われていないことから、田作りの作業として導水する段階にはまだないものと考えられ、自然現象によるものの可能性が高い。

取・配水構造 河川及び用水路からの取水口は未確認だが、おそらく西側の調査区域外で北東方向に流下する金沢川から取水し、用水路は水田域の斜面のうちで最も高い地点である南側を東流させるものと考えられる。さらに、この用水路から斜面の低い側にあたる北側に導水し、縦畦の走行する方向に用水を掛け流す構造と推察される。

区画面積 一区画の全体を確認した部分がなく不明。

遺物 なし。

所見 県下のHr-FP下面で一般的に検出される6世紀中葉の極小区画水田で、おそらく取・配水も同様な構造にあると考えられる。但し、その開田時期はHr-FA降下後の6世紀初頭以降で、少なくともこの地点ではこの年代を遡る水田遺構はない。なお、今回の調査区域を含めたこの遺跡の近隣で、Hr-FP直下の竪穴住居、平地式建物などの集落遺跡は一切検出されていない。また、水田面を覆うHr-FPの層厚は約60cmだが、Hr-FPの降下以降にこの地点での水田の復旧は行われず、竪穴住居を主体とした集落域へと変遷し(第5章7「居住域から水田域へ、水田域から居住域へ」参照)、その初出の年代はHr-FPの降下から約2世紀後の8世紀中葉である。

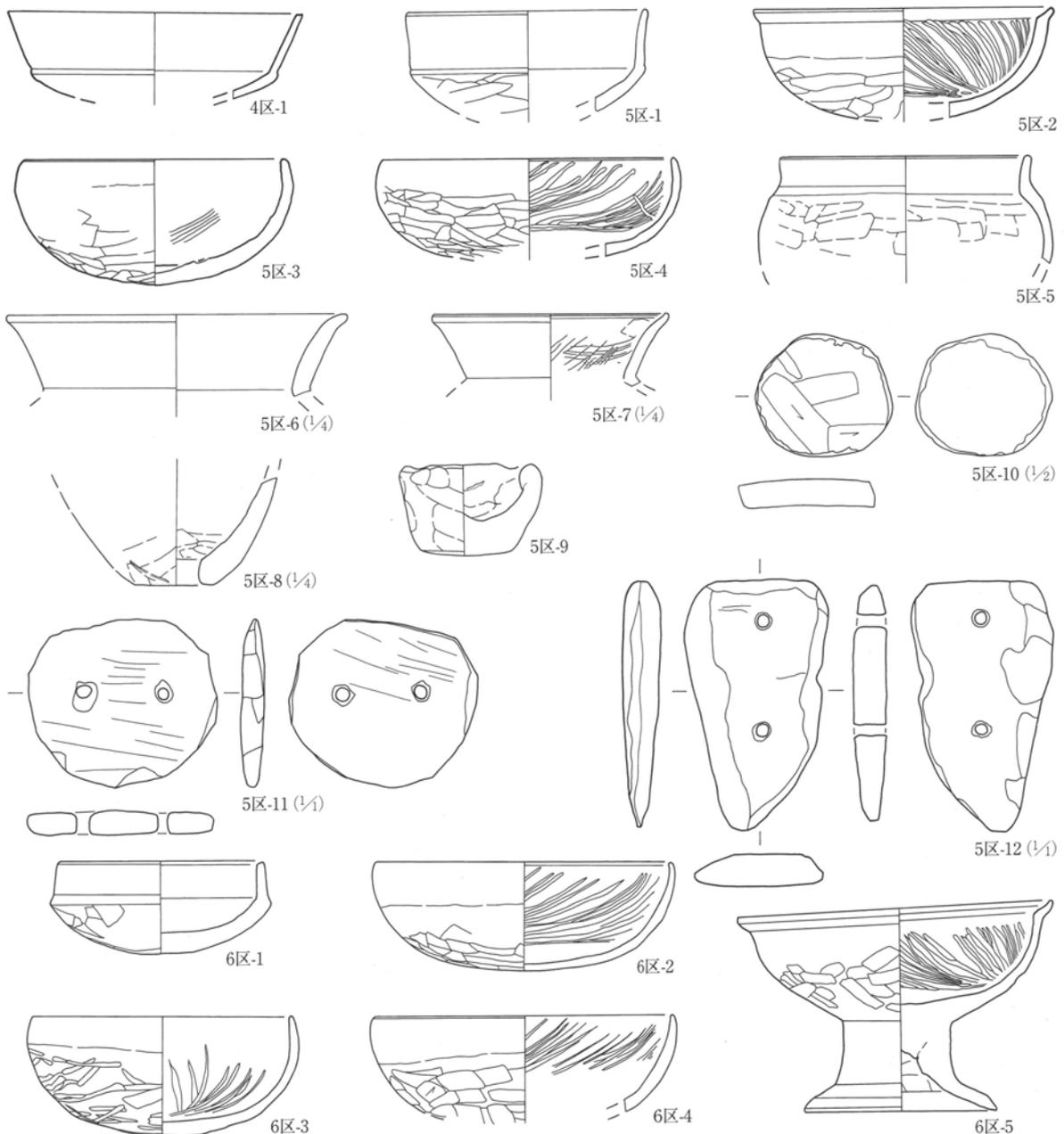


第115図 推定水田域

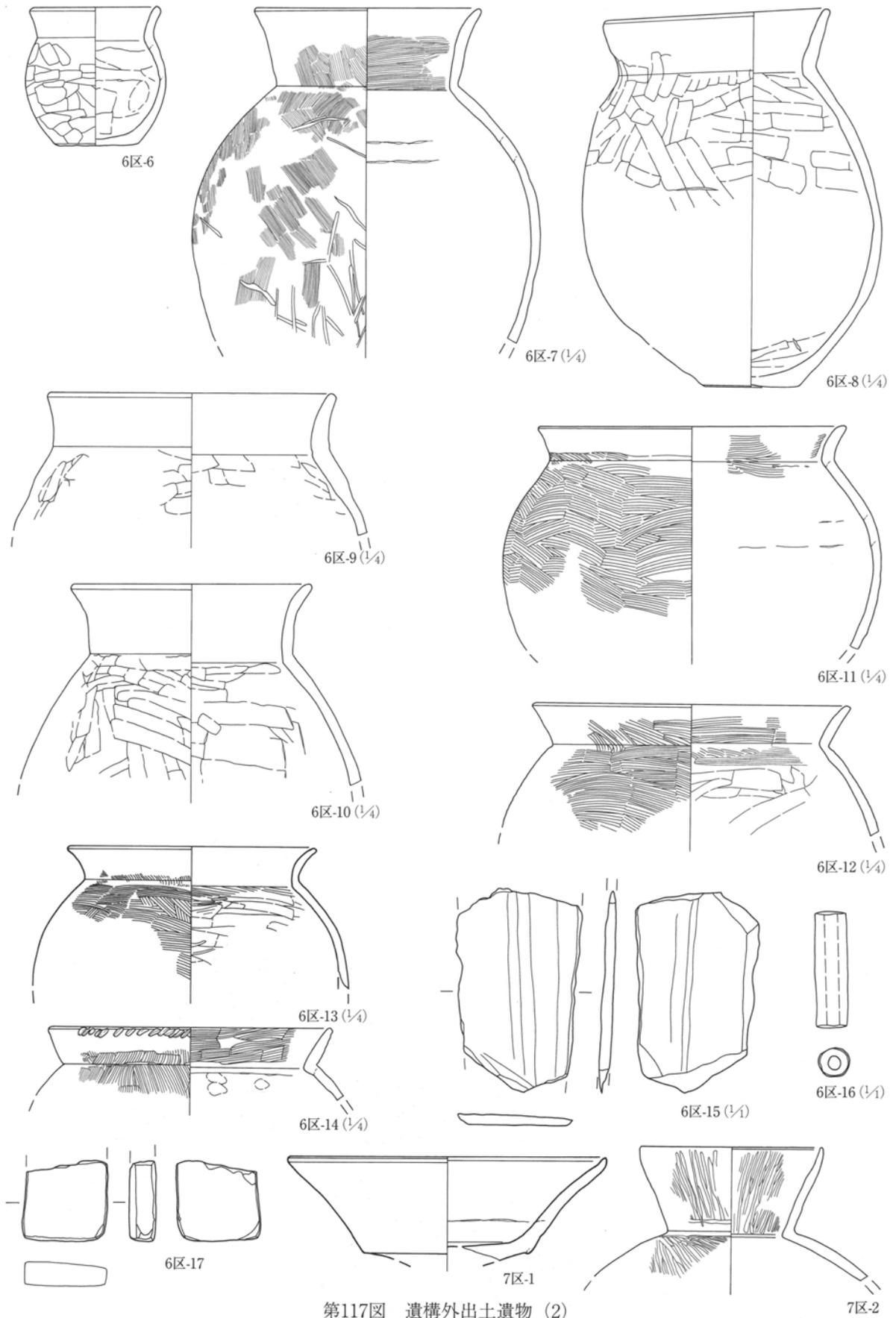
6) 遺構外出土遺物

4区から7区にかけて、Hr-FA直下から遺物が出土。4区ではFA下の調査がごく一部に限られるため遺物量は少ないが、5～7区ではまとまった量の遺物が出土している。遺物は調査区のほぼ全域に散在しているが、一部に集中する部分も見られた。ただし、それらは小破片に限られ復元率も低いことから、祭祀や土器集中の様な遺構としてはとらえられない。出土層位はFAの直下からⅦ、Ⅶa層にかけてである。

遺物の種類は土師器坏(4区-1、5区-1～5、6区-1～4)・高坏(6区-5、7区-1)・埴(7区-2)・壺(6区-7)・小型壺(6区-6)・甌(5区-8)・甕(5区-6・7、6区-8～14)・小型粗製土器(5区-9)・用途不明の円盤状の土器(5区-10)があり、他に有孔円盤(5区-11)、剣形の石製模造品(5区-12、6区-15)・管玉(6区-16)・砥石(6区-17)などが出土している。遺物は、4世紀前半のものが一部含まれるが(6区-11～14)、大半は5世紀後半のものであり、6世紀初頭とされるHr-FAの降下年代との矛盾がない。



第116図 遺構外出土遺物 (1)



第117図 遺構外出土遺物 (2)

3 奈良・平安時代

1区から6区にかけて、多数の奈良、平安時代の遺構が検出された。

本遺跡では、7区を除き、ほぼ全域でHr-FPの一次堆積層が確認された。当概期の遺構はその上面で確認、調査された遺構である。7区ではHr-FAの上面付近まで削平されており、古代の遺構は確認できなかった。この調査面では中近世の遺構も多数見つかっており、当概期の遺構と区分する必要が生じた。住居等は問題なかったが、土坑、溝などは古代、中近世とも遺物の出土が少なく、遺物から所属時期を決定することは困難であった。そのため、それらの遺構に関しては、主にその覆土の状況から所属時期を判断した。

奈良・平安時代に属する遺構の種類と数量は、住居跡51軒、掘立柱建物跡8棟、土坑7基、溝4条、ピット3基である。この他に、土師器や須恵器とともに、覆土中に多量の鉄滓や羽口などの鉄製産に関連する遺物を含む浅い谷を調査した。この谷の内部からは、約20基の土坑が複雑に重複した状態で検出されている。本遺跡では、7区以外の全ての調査区から鉄生産に関連する遺物が出土しているが、この谷とその周辺の分布密度が最も高い。

1) 住居跡

1区で1軒、2区7軒、3区8軒、4区20軒、5区5軒、6区10軒、合計51軒の住居を検出した。このうち4区と6区では一部住居番号が欠番となっているが、これは遺構確認の段階で住居と判断して番号を付したものの、その後の調査によって住居と認定されなかったものがあるためである。住居は、調査着手以前に畑地であった1・2区や4区南半で遺存状態が良好で、60～100cmもの壁高が残っているものもあった。その一方、宅地が多かった4区北半から6区にかけての区域では、大半の住居が中近世の遺構や、近現代の各種攪乱によって部分的に破壊されたり、削平されたりしていた。

住居は、その分布密度に疎密が見られ、2区と3区の東半、4区北半、5区の北端から6区にかけての範囲にまとまる傾向が認められる。2区と6区で調査されている掘立柱建物も、この住居跡が集中する区域に位置している。その一方、3区の西半から4区南半にかけての範囲と5区の中央部には、空白域が存在する。この範囲は、近世以降宅地や耕作地として利用され、当時の地表面が大きく壊されている部分ではあるが、ほぼ一面にHr-FPの堆積が認められた。居住地として特別に不的確な地形的要因も認められず、土地利用における何らかの規制が存在した可能性が考えられる。

全51軒のうち、出土遺物から時期を特定できた住居は43軒あった。8世紀代の住居が最も多く、前半に位置付けられるものが15軒、後半が12軒、末頃が1軒である。この他、9世紀代の住居は前半が4軒、後半が6軒、10世紀代が5軒となっている。これらの住居は、時期ごとにまとまって分布する傾向が認められた。8世紀前半の住居は4区の北半と4区南端から2区の東側にかけての区域に集中し、8世紀後半から末にかけての住居は2区西半と4区中央に位置する谷の北側、5区の北端から6区にかけての範囲に集中する。9、10世紀の住居は分布域がほぼ一致しており、3区の東端と4区北部、6区に集中している。

これらの住居の覆土からは、鉄滓などの鉄生産に関連する遺物が大量に出土している。遺物の分類を進めると、鉄関連遺物の大部分が小割りされた製錬系の鉄滓であることが明らかになった。多くの鉄生産関連遺物が覆土中からの出土であり、住居廃絶後に混入したものが多数を占めるものと思われる。また、2区で床面中央に大型の土坑を持つ住居を3軒検出したが、その機能・用途などについては明確にできなかった。

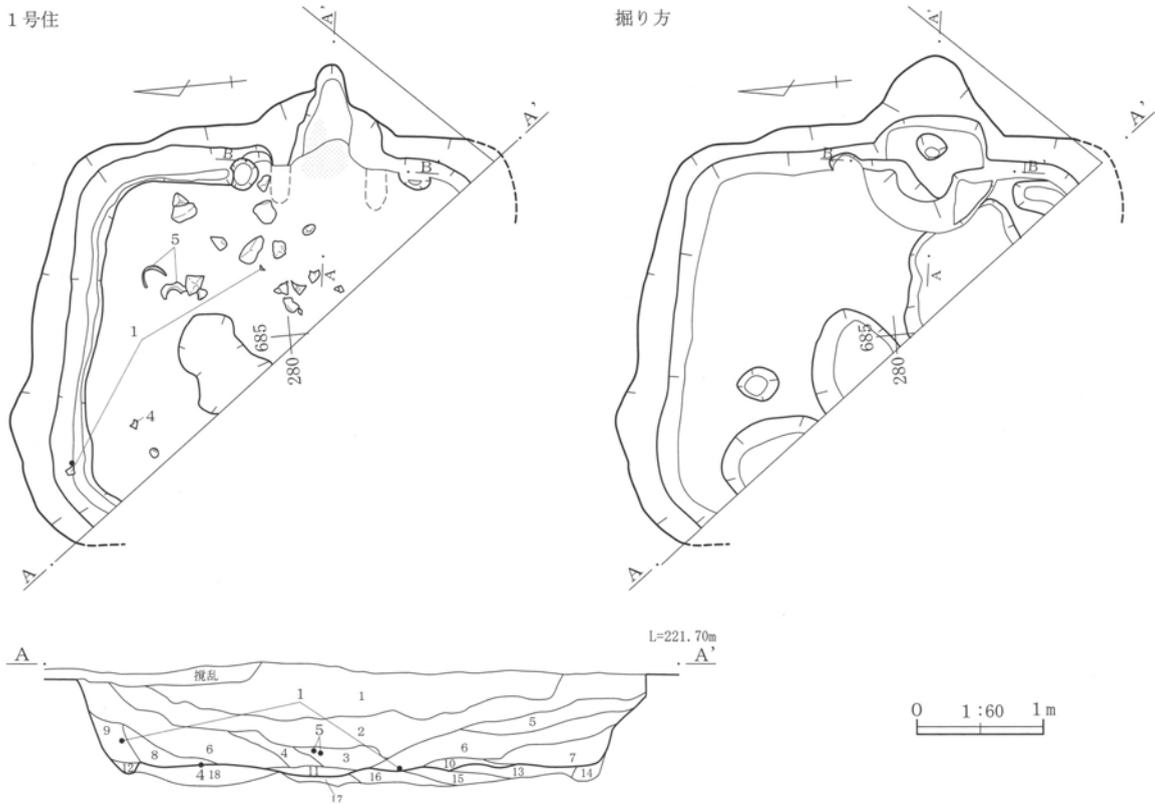
第4章 検出された遺構と遺物



第118図 奈良・平安時代遺構全体図

1区1号住居

位置 280-680 **方位** N-99°-E **規模と形状** 南西側約半分が調査区外にあるため、正確な規模、形状ともに不明。現状で東西3.20m、南北3.68m。やや横長の長方形形状か。 **面積** 計測不可 **壁高** 68cm **重複** なし。 **床面** 掘り方に地山FAを主体とする土を埋めて床面構築。表面は締まる。 **壁溝** 検出できた区域では、竈の右脇を除いて全周に深さ5~10cmの溝が巡る。 **柱穴** 確認できなかった。 **貯蔵穴** なし。 **竈** 東壁のほぼ中央にあり。残存状態は悪く、構築材と思われる礫が多数、若干浮いた状態で出土している。住居内に袖が作られていたが、調査の段階で掘削してしまい、形状は推定である。燃烧部奥壁は壁外に張り出す。 **遺物** 少量の土器が床面直上から20cm程度の上に散在していた。器種は土師器坏・甕、須恵器坏・碗などがある。このうち1の土師器坏と、4の須恵器坏は床面直上から出土している。 **所見** 遺物の年代から、8世紀後半に位置付けられる。

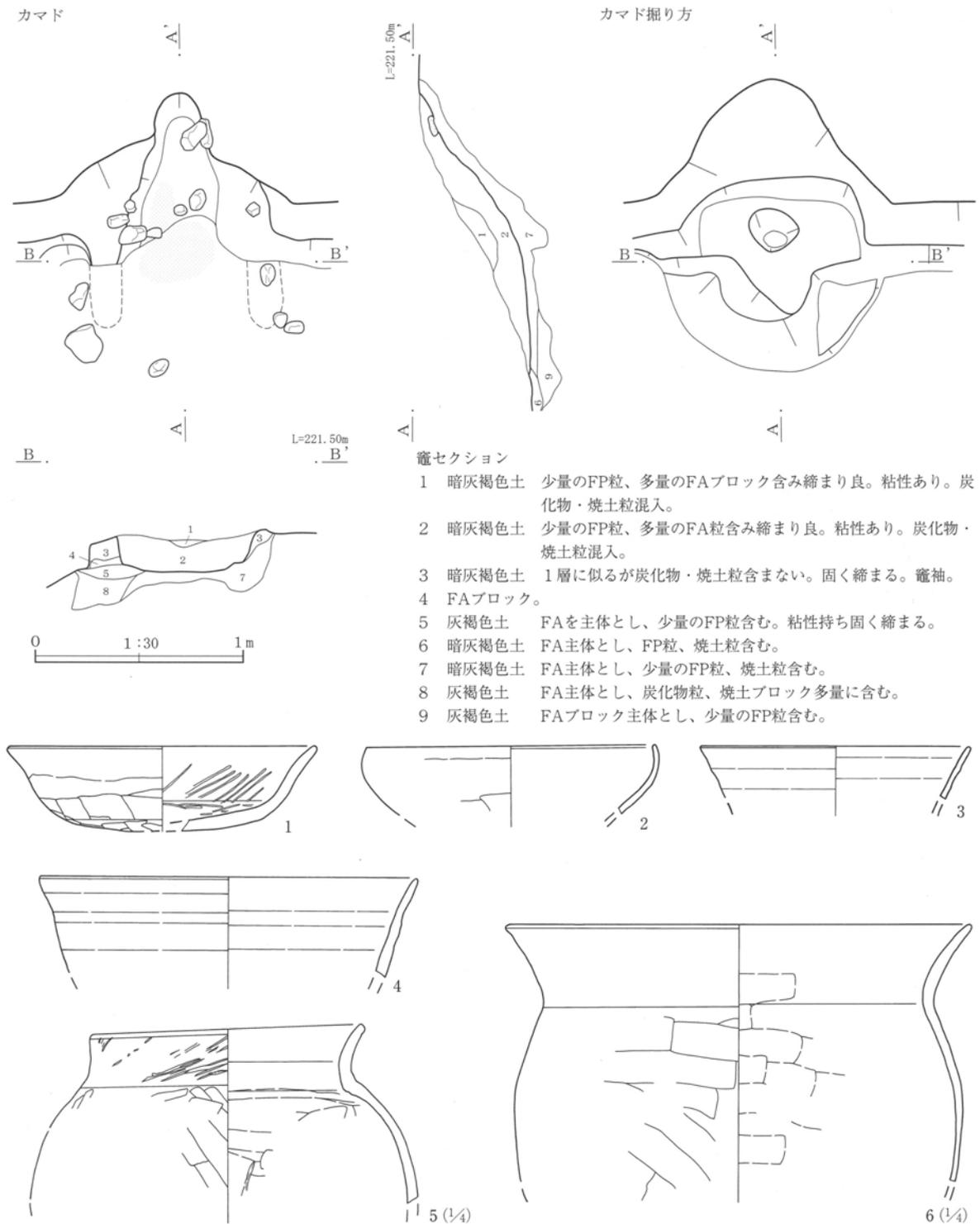


セクション

- | | | | |
|-------------------------|--|---------------------------|--|
| 1 黒褐色土 | 多量のFP粒含み砂質。固く締まる。 | 10 暗灰褐色土 | 少量のFP粒、多量のFAブロック含み締まり良。粘性あり。炭化物・焼土粒混入。 |
| 2 灰褐色土 | 多量のFP粒含み砂質。全体にFA粒、炭化物混入。土屋根もしくは周堤の流れ込みか。 | 11 褐灰色土 | FA主体とし、FP軽石多量に含む。粘性持ち締まり良。炭化物少量混入。 |
| 3 暗灰褐色土 | 多量のFP軽石、FA粒含む。粘性持ち締まり良。炭化物少量混入。 | 12 再堆積のFP軽石と黒褐色土の混土。周溝覆土。 | |
| 4 暗灰褐色土 | 多量のFP粒、FA粒含む。粘性持ち締まり良。炭化物混入。 | 13 明褐灰色土 | FA主体とし、FP粒、焼土粒少量含む。粘性持ち締まり良。以下掘り方埋土。 |
| 5 灰褐色土 | 多量のFP粒含。粘性強く締まり良。FAを斑状に混入。 | 14 灰褐色土 | FAブロック主体とし、FP軽石多量に含む。粘性持つが締まりやや悪い。 |
| 6 暗灰褐色土 | 多量のFP、FA粒含む。粘性持ち締まり良。 | 15 暗灰褐色土 | FA主体とし、わずかのFP粒、少量の焼土粒含む。粘性持ち締まり良。 |
| 7 暗灰褐色土 | FAブロック主体とし、FP粒多量に含む。砂質で粘性持つ。炭化物少量混入。 | 16 灰褐色土 | FAブロック主体としFP粒含む。粘性持ち締まり良。 |
| 8 再堆積のFP軽石。壁のFP層が崩れたもの。 | | 17 明灰褐色土 | FAブロック主体としFP粒含む。粘性持ち締まり良。 |
| 9 黒褐色土 | 基盤の黒色土斑状に含む。FAも少量混入。 | 18 灰褐色土 | 多量のFA、FP含む。粘性持ち締まり良。 |

第119図 1区 1号住居 (1)

第4章 検出された遺構と遺物



第120図 1区 1号住居 (2)

2区1号住居

位置 290-735 **方位** N-108°-E **規模と形状** 調査の段階では、壁の崩落が激しく大きく外側に開いていたため、住居の規模・形状ともに本来のものとは異なる。そのため、ここでは壁中段部分(地山のFP層とその下位の黒色土との境目)で計測する。東西5.25m・南北5.05mで、ほぼ正方形を呈する。南西隅から張り出すように掘り込みが作られ、内部から長さ10~40cm程の礫が多数出土、そのうちの3点は被熱して

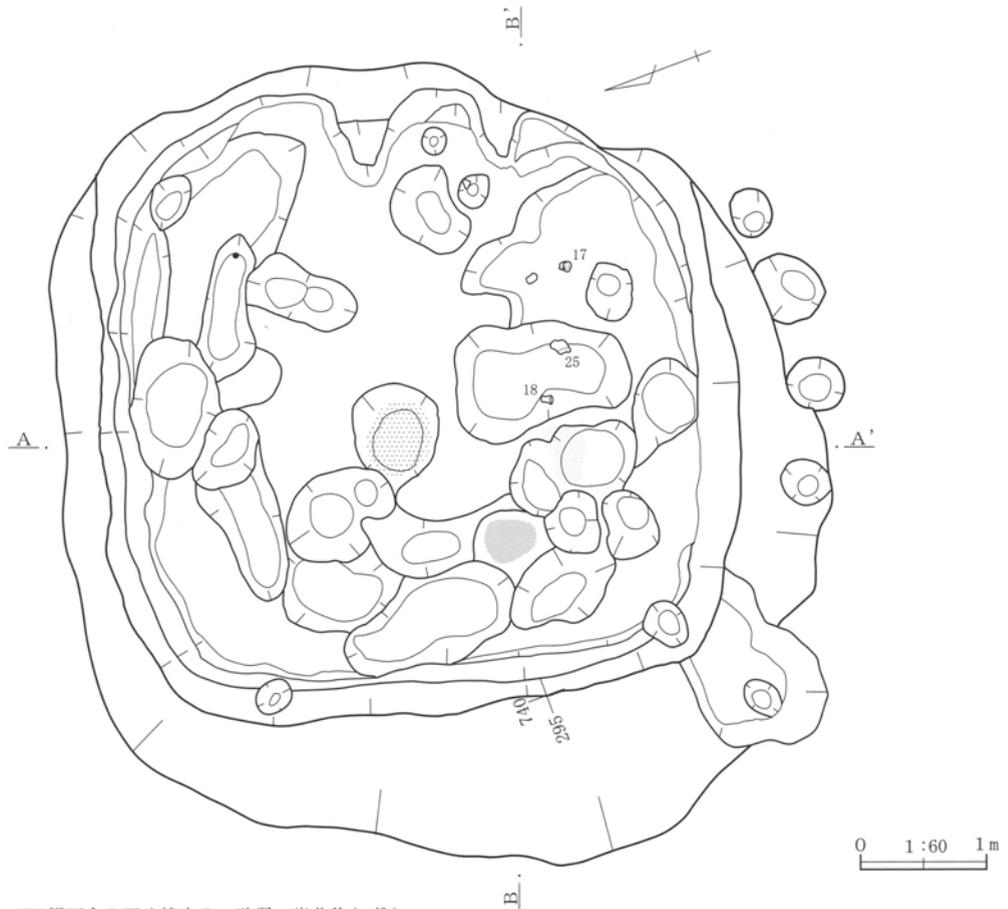


第121图 2区 1号住居 (1)

第4章 検出された遺構と遺物

いた。入り口施設とも考えられるが、後述する壁際の柱穴(柱穴6)との位置関係からその可能性は薄い。本住居に伴わない別遺構とするのが妥当であろう。面積 31.1㎡ 壁高 85cm 重複 なし。床面 掘り方にFAを主体とした土を埋めて床面を構築。西壁際を除いては固く締まる。掘り方調査の段階で、南東部の床下より焼土化した床面を検出。他にも床下から焼土が見つかっており、部分的に床面の貼り替えや補修

掘り方



セクション

- | | | | |
|---------------------------|--|----------|--|
| 1 褐色土 | 多量のFP軽石含み固く締まる。砂質。炭化物わずかに混入。 | 10 灰層。 | |
| 2 褐色土 | 1層よりFP粒の混入多い。固く締まる。炭化物わずかに混入。 | 11 暗灰褐色土 | FA粒主体としFP軽石わずかに含む。粘性強く固く締まる。焼土粒わずかに混入。 |
| 3 褐色土 | 多量のFP軽石含み固く締まる。炭化物多量に混入。屋根材が炭化したものか。 | 12 灰褐色土 | FA砂、FP軽石含む。粘性弱く締まり良。焼土粒わずかに混入。 |
| 4 褐色土 | 少量のFP軽石、FA粒・ブロック含む。粘性持ち締まり良。炭化物わずかに混入。 | 13 灰褐色土 | 12層より色調明るく、FAの混入多い。やや砂質で締まり、粘性弱い。 |
| 5 褐色土 | FP軽石を主体とする。 | 14 暗褐色土 | FA砂、FP軽石含み粘性弱く締まり良。多量の焼土粒混入。 |
| 6 灰褐色土 | 少量のFP軽石、多量のFA粒含む。 | 15 灰褐色土 | 多量のFAを斑状に混入。少量のFP軽石含む。粘性持ち固く締まる。 |
| 7 FP軽石の再堆積。壁が崩落して流れ込んだもの。 | | 16 暗灰褐色土 | FA砂ブロック、FP軽石含む。粘性弱く締まり良。 |
| 8 暗灰褐色土 | FP軽石ほとんど含まない。やや砂質で締まり良。以下掘り方埋土。 | 17 赤褐色土 | FAが焼けた焼土塊層。FP軽石わずかに含む。 |
| 9 黒灰色土 | 黒色土と灰の混土。粘性持ち締まり良。 | | |

柱穴セクション

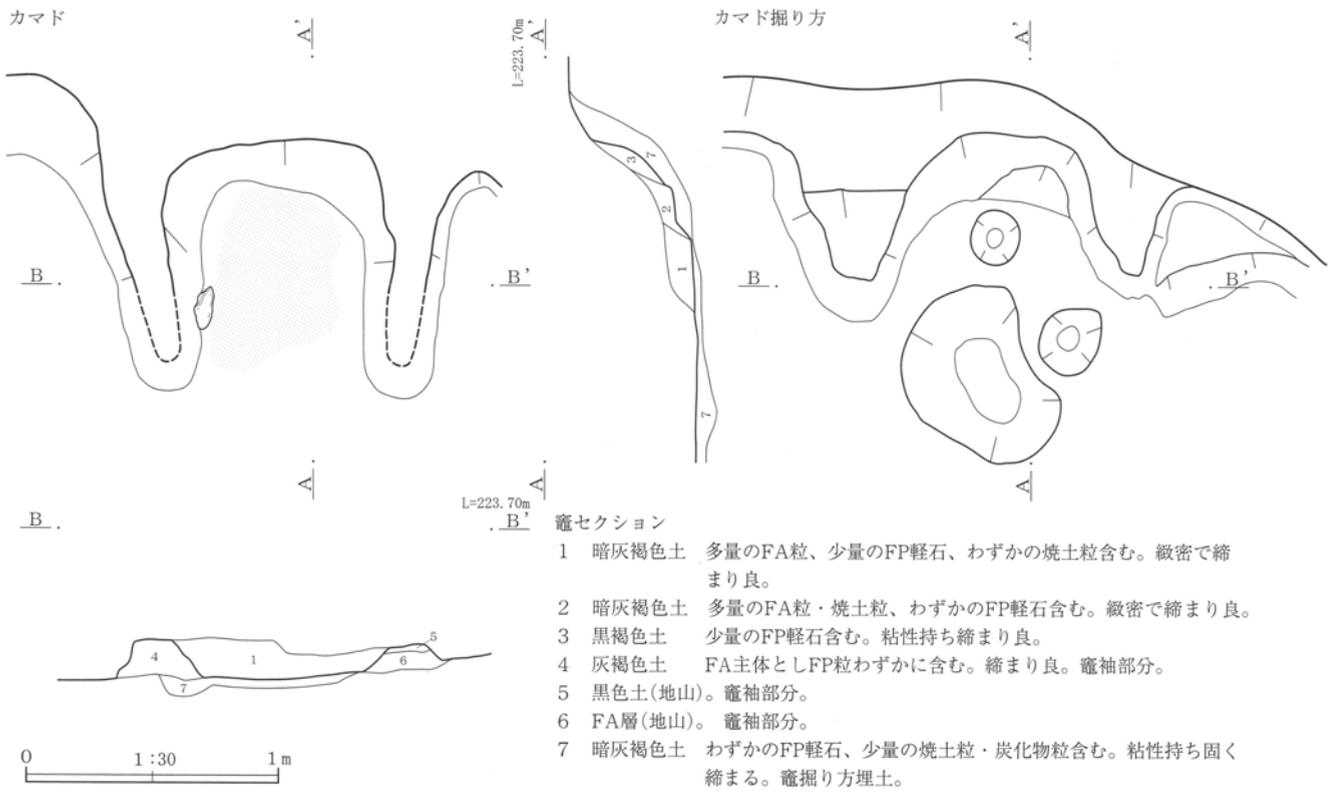
- | | |
|---------|---|
| 1 暗褐色土 | 多量のFP軽石、少量のFA粒含む。粘性持ち締まり良。 |
| 2 灰褐色土 | FAブロック多量に含み、FP粒わずかに混入。粘性持ち締まり良。 |
| 3 灰褐色土 | 2層より黒味帯び、FAブロックの混入多い。FP軽石少量含む。粘性持ち締まり良。 |
| 4 暗灰褐色土 | 多量のFAブロック、少量のFP軽石含む。粘性持ち締まり良。 |

貯蔵穴セクション

- | | |
|---------|----------------------------|
| 1 暗灰褐色土 | 多量のFA粒、わずかのFP軽石含む。砂質で締まり良。 |
|---------|----------------------------|

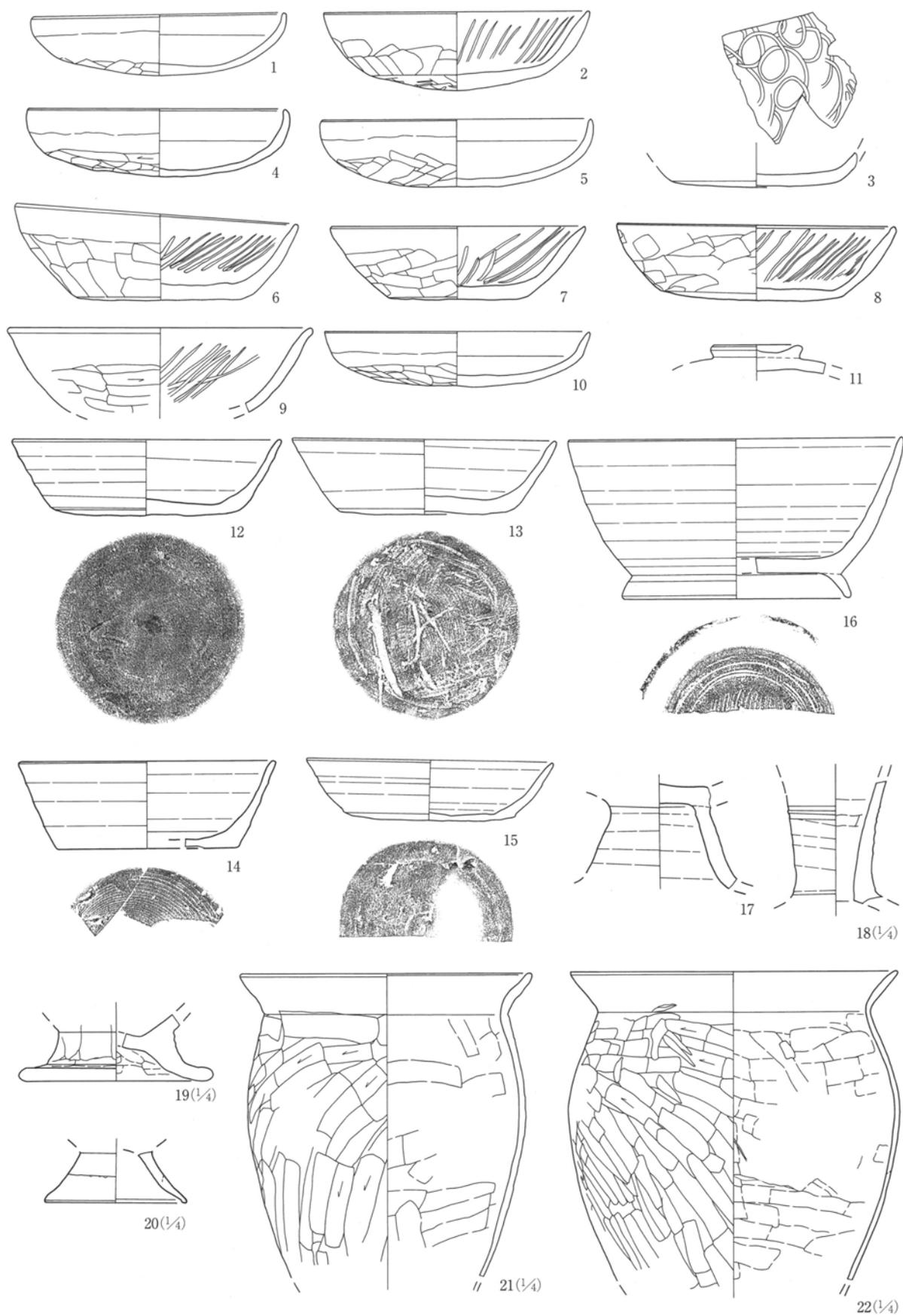
第122図 2区 1号住居(2)

がされていたようである。実際、柱穴間での切り合いが認められた柱穴3と4の部分では、より古い柱穴4の上に床が貼られていた。**壁溝** 西壁際の中央に、ごく短いものが作られていた。上幅22cm、深さ6cm。**柱穴** 6本柱である。床面より4カ所、西壁際より2カ所で検出された。このうち床面の1カ所では柱穴の切り合いが認められ(柱穴3・4)、建てかえが行われた可能性が考えられる。柱穴3が4より新しく、柱穴4の上には床面が作られていた。床面の4本の柱穴は、やや南側に偏る。床面の柱穴は円～楕円形状で、長軸が50～70cm、深さ55～80cm程度である。壁際の柱穴はやや小振りで、長軸が35～50cmの楕円形状で、深さ30～50cm。**貯蔵穴** 南東隅に位置していた。形状は楕円形で、長軸97cm、短軸54cm、深さは18cm。貯蔵穴のすぐ脇から、須恵器坏が2点出土している(12・13)。**竈** 東壁のほぼ中央に位置する。残存状態が悪く、構築材の礫等もほとんど残っていないことから、住居廃絶時に破壊されたようである。左袖はFAを盛って作っているが、右側は地山を掘り残して袖としている。使用面はよく焼けて焼土化していた。**遺物** 住居の全域にわたって、床面から覆土中位にかけて遺物が分布していた。土師器坏・甕・台付甕、須恵器坏・埴・高盤・壺などが出土している。このうち、12と13の須恵器坏2点は、貯蔵穴脇の床面上に並べて置いたような状態で見つかっている。須恵器高盤(17)と長頸壺(18)は掘り方内から出土した。また、含鉄鉄滓・再結合滓・棒状鉄製品などの鉄関連遺物が25点・1,269.5g出土した。鉄生産関連遺物は覆土からの出土であるため、周辺から混入したものと判断した。出土した含鉄鉄滓は炉内滓の可能性が高く、再結合滓は製錬系の遺物である。**所見** 住居覆土の断面観察から、FAを主体とする層(4層)を挟んで上下で炭化物層が確認されている。後述する2号住居と同様、土屋根の痕跡として捉えられる可能性がある。周辺から混入したと推定される含鉄鉄滓や再結合滓などの鉄生産関連遺物から、本遺構周辺で製錬工程から小割り作業が行われていた可能性が高いと考えられる。住居の時期は、貯蔵穴脇から出土した2点の須恵器の年代から、8世紀後半と考えられる。

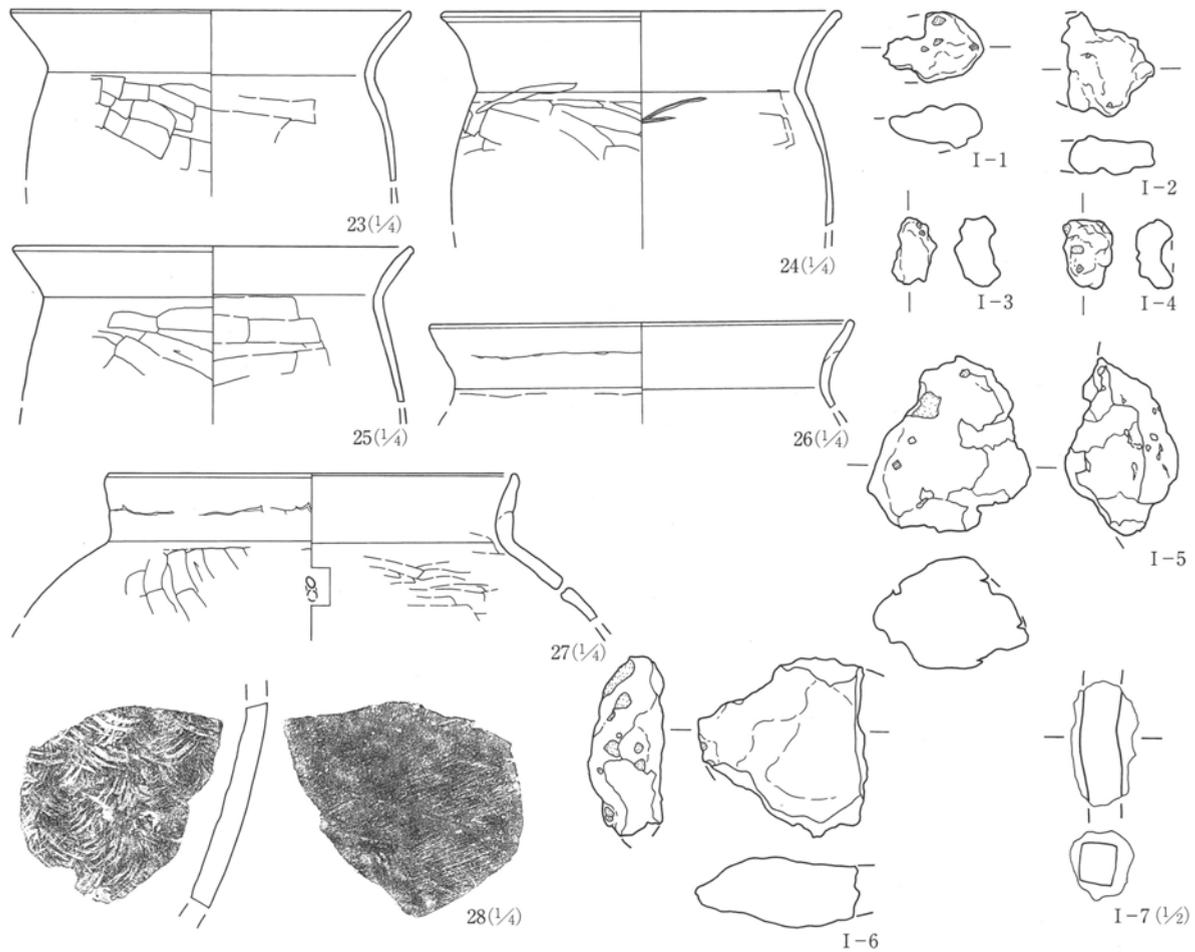


第123図 2区 1号住居 (3)

第4章 検出された遺構と遺物



第124図 2区 1号住居出土遺物 (1)



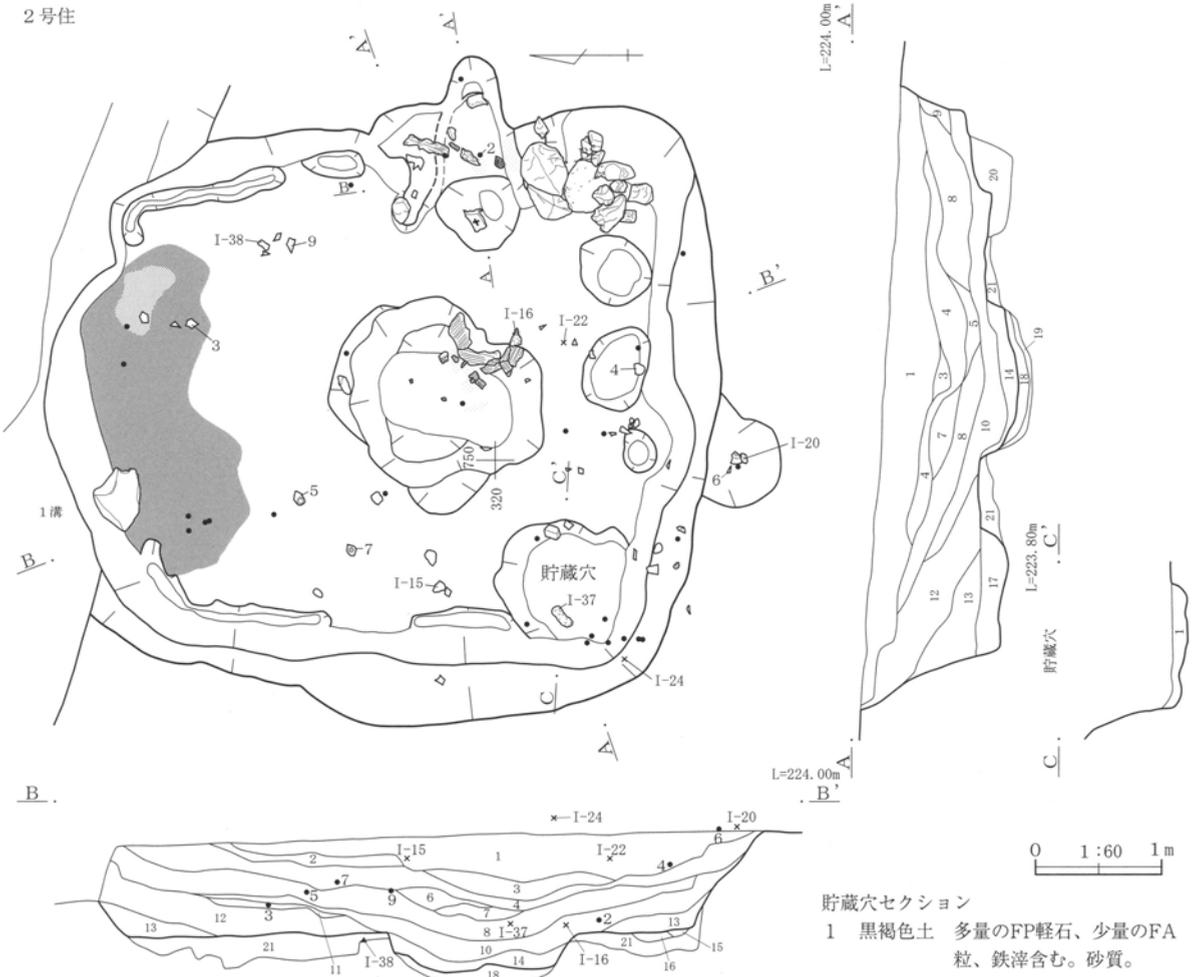
第125図 2区 1号住居出土遺物 (2)

2区2号住居

位置 320-745 **方位** N-90°-E **規模と形状** 1号住居同様、壁の崩落によって本来の形状と異なっているため、壁の中段で計測する。長辺5.35m・短辺4.45mの横長の長方形で、長軸は南北方向。南壁の中央付近では、壁際に浅いピットが造られその脇の壁が外側に張り出し、上位に浅い皿状の凹みが見られる。何らかの入り口施設の可能性がある。住居のほぼ中央には大型の土坑が掘り込まれていた。長軸167cm、短軸150cm、深さ40cmで、底面の形状は南北に長い長方形を呈する。土層断面の観察からこの土坑は住居と同時に埋没しており、後から掘り込まれたり床下に作られていたものではないことがわかる。土坑の南壁は焼土化しており、土坑底部のFAを主体とした貼り床の上面は、焼土による還元作用によって青灰色を呈していた。 **面積** 22.4㎡ **壁高** 92cm **重複** 北辺を1号溝に切られる。 **床面** 掘り方にFP軽石やFAブロックを含む土を埋めて床面とする。表面はよく締まるが、特に北辺付近が固く締まっていた。ここでは、床面上に炭化物が集中する部分も見られた。 **壁溝** 東壁と西壁に浅い溝が断続的に掘られていた。深さは5~10cm程度。 **柱穴** 確認できず。南壁際に小型のピットが検出されたが、いずれも浅く、柱穴とは断定できない。 **貯蔵穴** 南西隅に浅い土坑を検出。貯蔵穴か。内部より鉄滓が数点出土している。 **竈** 東壁の中央よりやや南よりに位置する。残存状態が悪く、左袖は痕跡がわずかに残る程度であった。断面の観察から、FAブロックを主体とする土を構築材とし、袖を成形していたことがわかる。掘り方調査の段階で、竈床下から隅丸の長方形の土坑が確認された。底部には炭化物や灰、焼土が認められ、壁面は熱によって焼

第4章 検出された遺構と遺物

けて硬化し、赤色、もしくは還元作用によって青灰色に変化していた。炭焼き土坑と考えられるが、竈床下からの検出であり、本住居より古い遺構と考えられる。遺物 遺物量は比較的多く、土師器坏・甕・台付甕、須恵器坏・蓋などがある。ただしこれらの遺物の大半は覆土中～上位からの出土で、床面付近から発見された土師器坏(2)、袋状鉄斧(I-37)、砥石(I-38)以外は住居廃絶後の流れ込みと考えられる。南東隅で

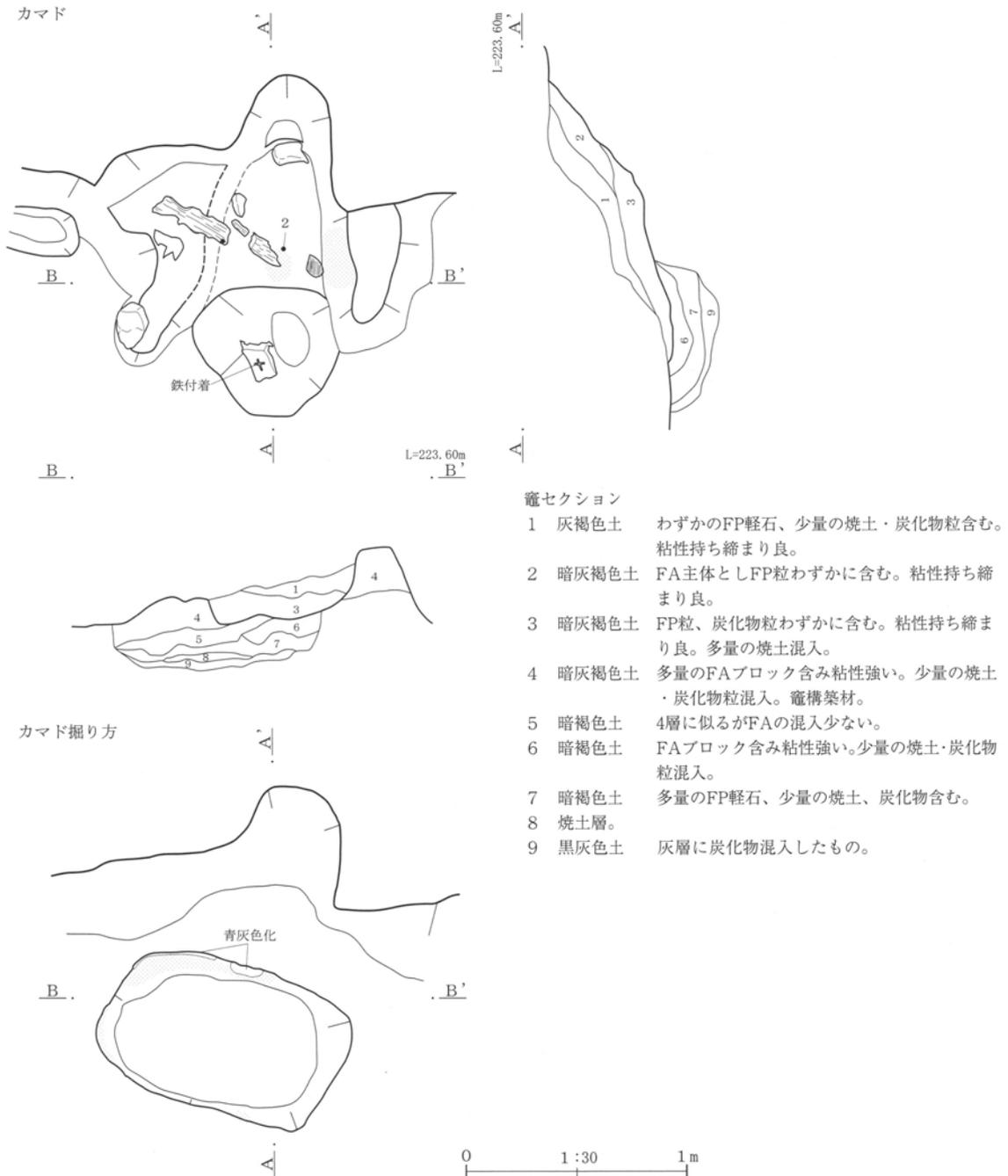


セクション

- | | |
|---|--|
| <p>1 暗褐色土 多量のFP軽石、わずかのFA粒、少量の炭化物粒含む。粘性弱く締まり良。住居廃絶後の堆積土。周堤の流れ込みか。</p> <p>2 暗褐色土 1層に似るがFP軽石の混入少。住居廃絶後の堆積土。周堤の流れ込みか。</p> <p>3 黒褐色土 少量のFA粒、FP軽石、多量の炭化物含む。粘性持ち締まりやや弱い。</p> <p>4 黒褐色土 3層に似るが炭化物より多。土屋根の草葺き部分。</p> <p>5 黒褐色土 3・4層と同様でさらに炭化物集中。土屋根の草葺き部分。</p> <p>6 暗灰褐色土 多量のFA粒、少量のFP軽石含む粘性強く締まりやや悪い。少量の炭化物混入。</p> <p>7 灰褐色土 FAブロック主体とし少量のFP軽石含む。粘性持ち締まり良。焼土塊混入。</p> <p>8 暗灰褐色土 多量のFP軽石、FA粒含む。粘性あり。土屋根。</p> <p>9 FP軽石の再堆積。壁の崩落土。</p> <p>10 黒褐色土 FA粒主体とし、少量のFP軽石含む。多量の炭化物混入。土屋根の草葺き部分。</p> | <p>11 黒褐色土 10層に似るが、炭化物ほとんど含まない。</p> <p>12 明褐色土 FP軽石主体とし少量のFAブロック含む。粘性弱く締まり良。壁の崩落土。</p> <p>13 明褐色土 FP軽石主体とし締まり悪い。壁の崩落土。</p> <p>14 暗黒色土 FA粒斑状に含む。粘性強く締まりやや悪い。多量の炭化物混入。</p> <p>15 暗褐色土 多量のFP軽石、少量のFAブロック含む。粘性持ち締まり悪い。</p> <p>16 灰褐色土 FA砂、FP軽石含む砂質土。締まり悪い。</p> <p>17 貯蔵穴覆土。</p> <p>18 暗褐色土 FA粒主体としFP軽石わずかに含む。上位に還元され青灰色化したFAが層状に認められる。多量の炭化物、少量の焼土粒混入。貼床。以下掘り方埋土。</p> <p>19 暗灰褐色土 灰層に炭化物が混入。</p> <p>20 暗灰褐色土 多量の軽石、焼土ブロック含む。竈床下土坑埋土。</p> <p>21 暗褐色土 FP軽石、FAブロックの混土。少量の焼土・炭化物粒含む。</p> |
|---|--|

第126図 2区 2号住居 (1)

は大型の礫がまとまって出土したが、かなり高い位置にあり、住居廃絶後の埋没過程で流れ込んだものと判断した。また、覆土中に、上下2層に分かれて炭化物が集中する層位が認められた。炭化物は住居中央部に多く、大型のものは図示してある。また、住居覆土から炉壁・炉内滓・鉄塊系遺物・含鉄鉄滓・再結合滓・棒状鉄製品などの鉄関連遺物が515点・21,138g出土した。鉄生産関連遺物は覆土からの出土であるため、周辺から混入したものと判断した。出土した炉壁は半地下式竪形炉の可能性が高く、再結合滓は製錬系の遺物である。 **所見** 住居覆土の断面観察から、土屋根の存在が想定されている。土屋根は、草葺屋根(土層断面の10層)の上にFAブロックを含む土屋根を乗せ(6~8層)、その上をさらに草で葺いている(4・5層)。上下の草葺部分は焼けて炭化しており、土屋根部分には焼土塊が認められた。このことから、本住居は火災に

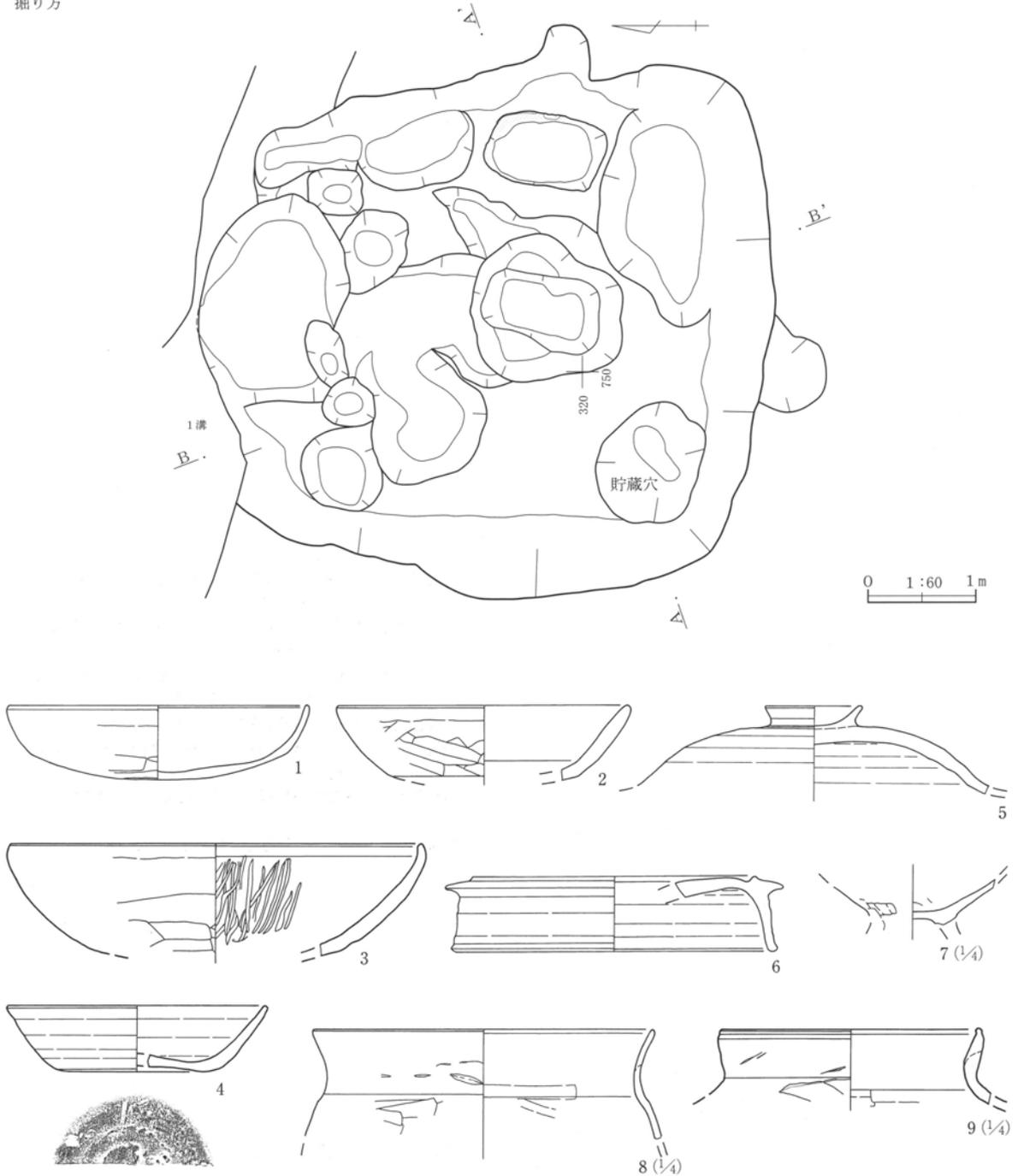


第127図 2区 2号住居 (2)

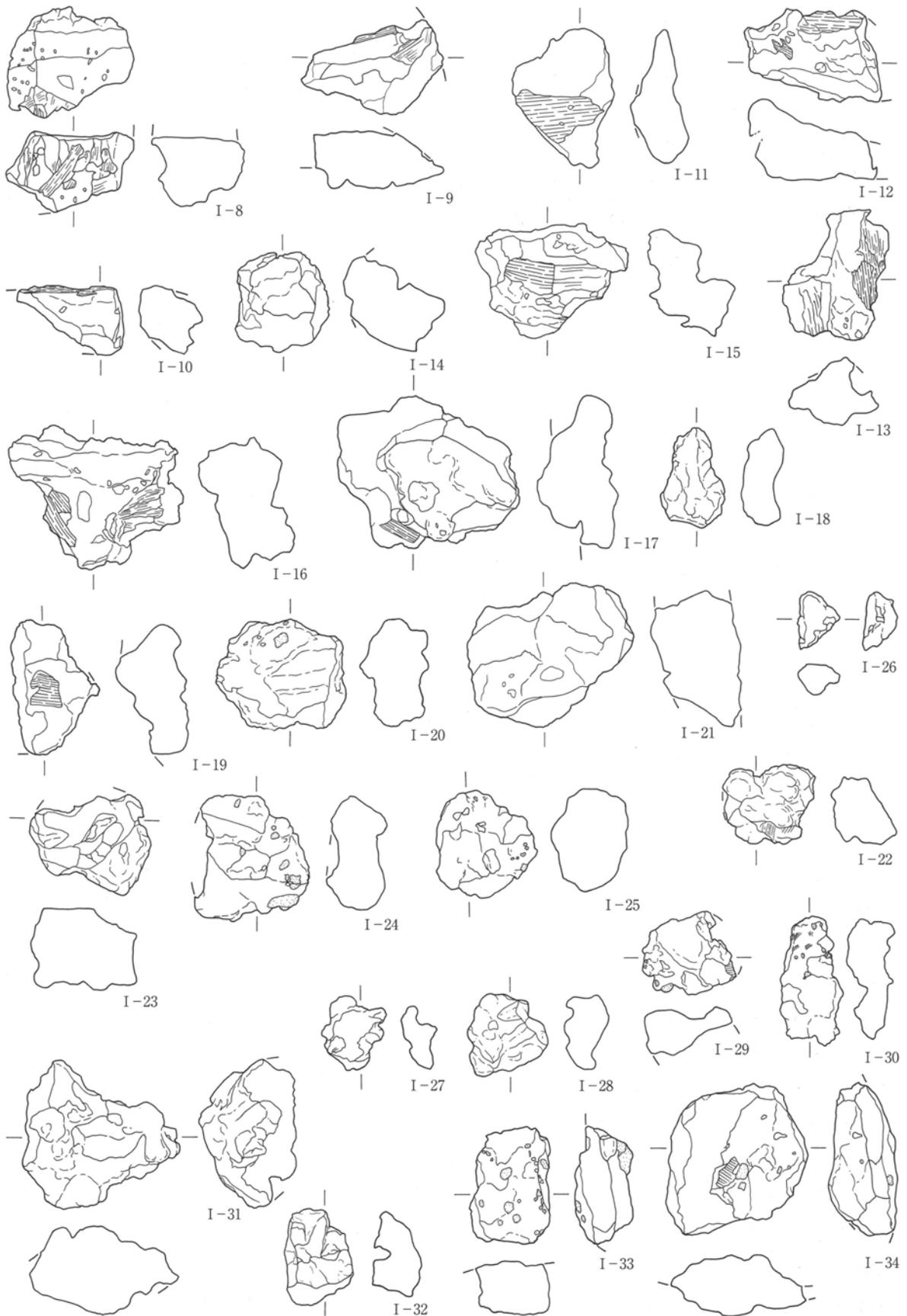
第4章 検出された遺構と遺物

よって焼失したものと推測した。土屋根の下には住居壁の崩落土が多量に認められ(12・13層)、住居廃絶後ある程度の時間が経過した後に火災にあったものと考えられる。土屋根下から出土した遺物が少ないことも傍証となろう。住居中央部の土坑は強い被熱の痕跡が認められ、調査段階では鍛冶にかかわる施設と推測した。しかし、覆土の水洗選別によっても鍛造剥片等は検出されず、この土坑の性格については明確にできなかった。周辺から混入したと推定される炉壁や炉内滓などの鉄生産関連遺物から、本遺構周辺で製錬工程から小割り作業が行われていた可能性が高いと考えられる。住居の時期は、遺物の年代から8世紀後半と考えられる。

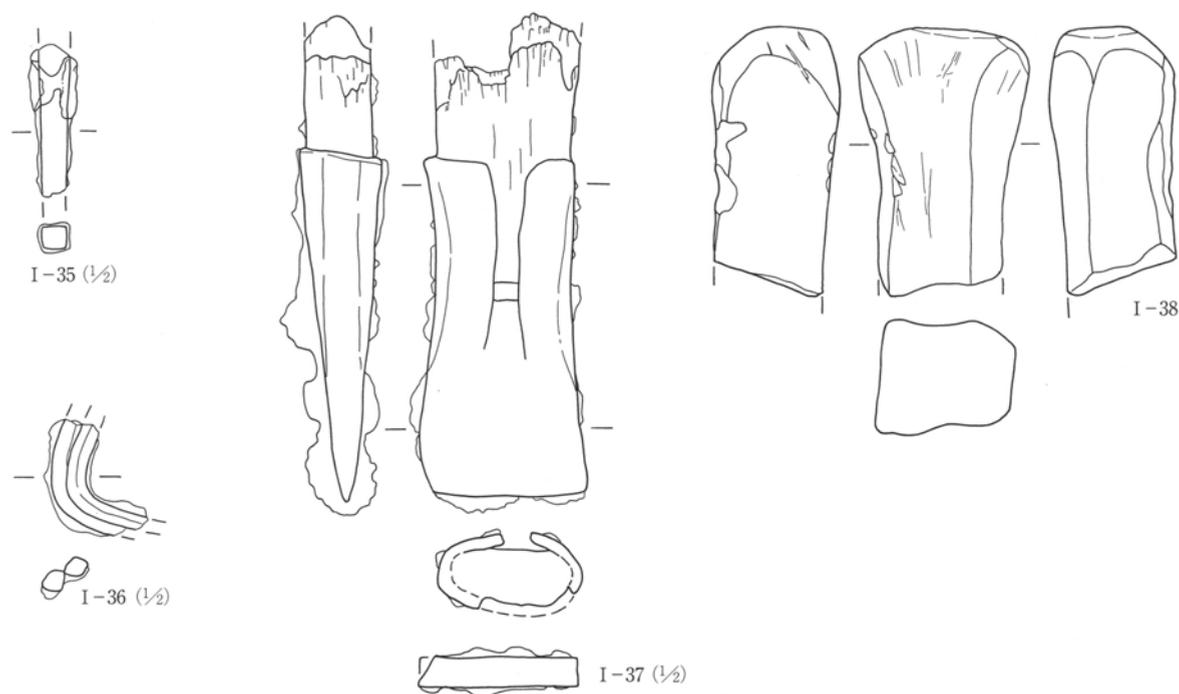
掘り方



第128図 2区 2号住居 (3)



第129図 2区 2号住居出土遺物 (1)

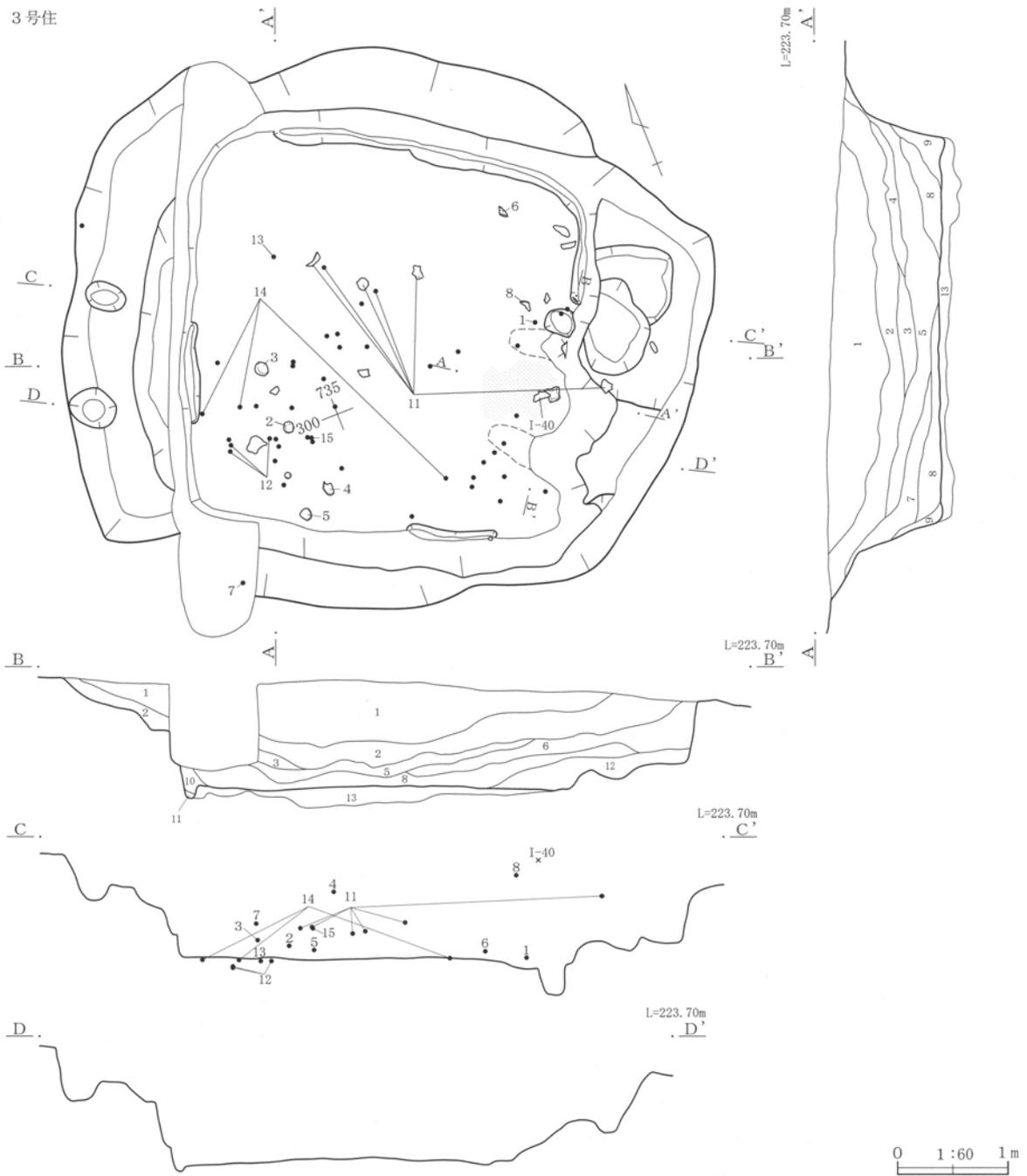


第130図 2区 2号住居出土遺物(2)

2区3号住居

位置 300-730 **方位** N-117°-E **規模と形状** 東辺には棚状施設、西辺には入り口施設と思われる特殊な遺構が張り出し、複雑な形状となっている。この2つの特殊な遺構を含めて長辺5.80m、短辺は上場で5.15mになるが、壁の崩落が激しく上位が大きく外側に開くため、本来はもう少し短い。長軸方向は東西方向である。棚状施設は住居東辺で確認された。地山のFA層を床面より40cmほど高く削り残してあり、表面には凹凸が認められた。上面に敷物などの痕跡はなく、表面が固く締まっていることもなかった。床面の東辺と棚状施設の東辺の方向はややずれており、北側が広がっている。調査の段階で別遺構の可能性も考慮したが、棚状施設から住居内部まで東壁から延びる自然堆積層が認められたことから、本住居に付随する施設と判断した。西辺の入り口施設は緩やかな弧状で、20cm程の段差が2段確認されており、中央よりやや南側に1対のピットが1m程の間隔を開けて掘り込まれていた。ピットは楕円形状で、南側が長軸43cm・短軸36cm・深さ27cm、北側が長軸36cm・短軸25cm・深さ18cmである。この入り口施設の下段と床面とは、約50cmの段差がある。入り口施設と住居壁との境界部分は、近年の攪乱によって失われている。 **面積** 21.7㎡ **壁高** 100cm **重複** なし。 **床面** 掘り方にFAブロック主体とする土を埋めて床面構築。表面は固く締まるが、西壁際から南壁際にかけて軟弱な部分が認められた。床土は焼土粒や炭化物を含み、竈に近づくほど量が多くなった。 **壁溝** 北壁から東壁の竈脇までと、西壁・南壁の一部で幅10~15cm、深さ10~15cmの溝が掘り込まれていた。 **柱穴** 確認できなかった。 **貯蔵穴** なし。 **竈** 東辺の棚状施設の南半部に作られていた。竈は壊されていて残存状態が悪く、支脚以外には構築材の礫はなく、袖も左側にわずかな痕跡が残っていただけであった。ただし、袖のあった部分だけ床面が被熱していなかったため、その範囲を捉えることができた(図の点線部分)。竈は奥壁以外には掘り方はなく、地山のFA層を削り込んで使用面としていた。使用面はかなり焼土化し、炭化物の小片が散らばっていた。左袖脇から直径25cm程度、深さ30cmの小型のピットが検出されているが、竈に付随するものと捉えられている。 **遺物** 少量の土師器、須恵器破片が住居内に散在。出土レベルは床面付近から覆土中位にあるものが多い。住居の南西隅付近では、覆土中~上位より

3号住



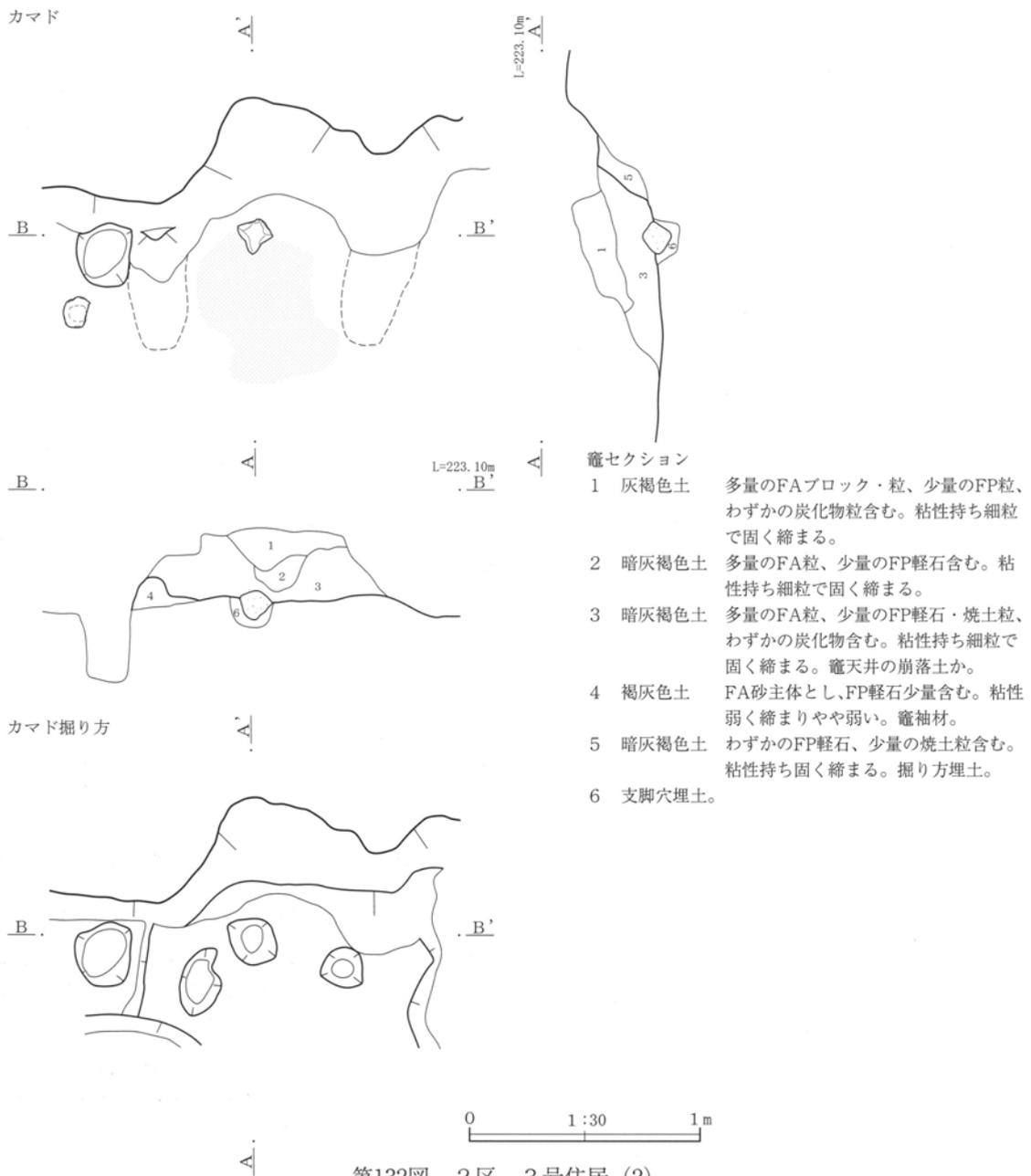
セクション

- | | |
|---|---|
| <p>1 黒褐色土 多量のFP軽石、少量のFA粒含む。やや砂質で固く締まる。炭化物わずかに混入。</p> <p>2 暗褐色土 1層に似るがFP軽石より多く含む。</p> <p>3 灰褐色土 FAブロック主体とし、FP軽石わずかに含む。締まり良。</p> <p>4 褐色土 FP軽石大量に含む。壁面のFP層が崩落し流れ込んだもの。</p> <p>5 灰褐色土 FA粒主体とし、FP軽石少量含む。やや砂質で締まり弱い。</p> <p>6 黒褐色土 FP軽石主体とし、FAブロック・砂を斑状に含む。締まり良。</p> | <p>7 灰褐色土 多量のFAブロック、わずかのFP粒含む。砂層で締まり良。壁の崩落土。</p> <p>8 灰褐色土 多量のFA砂、少量のFP粒含む。砂層で締まり良。壁の崩落土。</p> <p>9 灰褐色土 FAブロック主体。砂層で締まり良。壁の崩落土。</p> <p>10 灰白色土 FA砂主体とし、FP軽石わずかに含む。壁崩落土。</p> <p>11 FP軽石の再堆積層。</p> <p>12 竈覆土。</p> <p>13 灰褐色土 FAブロック主体とし、少量のFP軽石、多量の焼土粒、わずかの炭化物粒混入。粘性持ち締まり良。掘り方埋土。</p> |
|---|---|

第131図 2区 3号住居 (1)

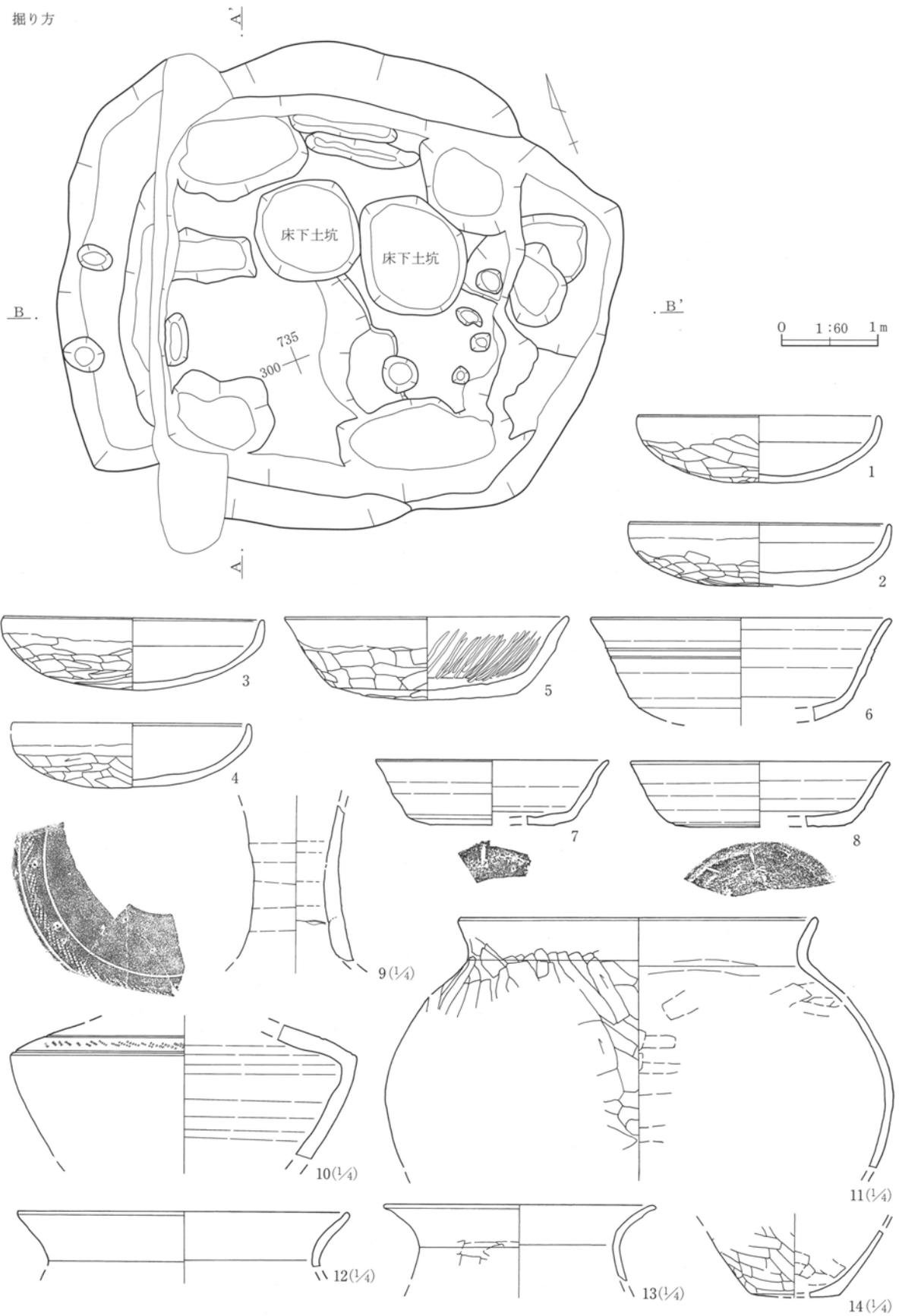
第4章 検出された遺構と遺物

比較的大きな土師器坏の破片がややまとまって出土(2~5)、竈左脇の床面上からも土師器坏が見つまっている(1)。この他に、土師器甕、須恵器坏・長頸壺などがある。また、住居覆土から鉄塊系遺物や鎌などの鉄関連遺物が9点・343g出土した。鉄滓などの鉄生産に関わる遺物は覆土からの出土であるため、周辺から混入したものと判断した。 **所見** 本住居を特徴づけるのは、特異な形状であろう。東側の棚状施設と西側の入り口施設は、住居覆土の断面観察から、ともに住居に付随する施設との調査所見が得られている。入り口施設は床面との段差が50cm程あり、そのままでは出入りが困難であると思われるが、床面では柱穴や梯子の痕跡などは認められなかった。特にその周辺の床面が硬化しているということもなかった。残念ながら、入り口施設と壁面との接合部が攪乱によって失われていることもあり、確実に住居の出入りに利用していたとの確証は得られなかった。ただ、形状や小ピットの位置などから、その可能性は高いものと思われる。出土遺物から、住居の時期は8世紀後半に位置付けられる。

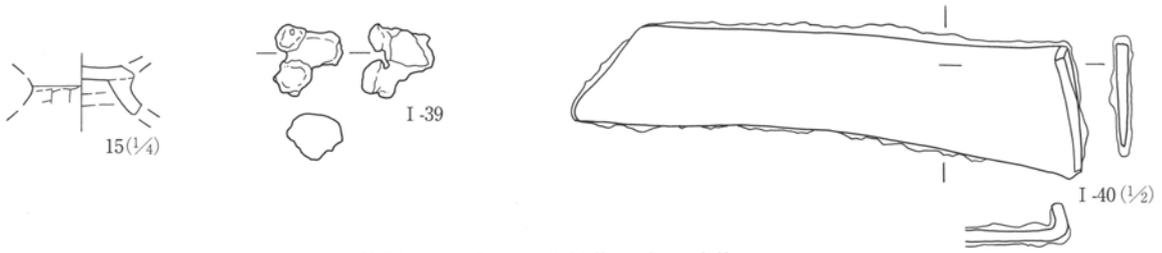


第132図 2区 3号住居 (2)

掘り方



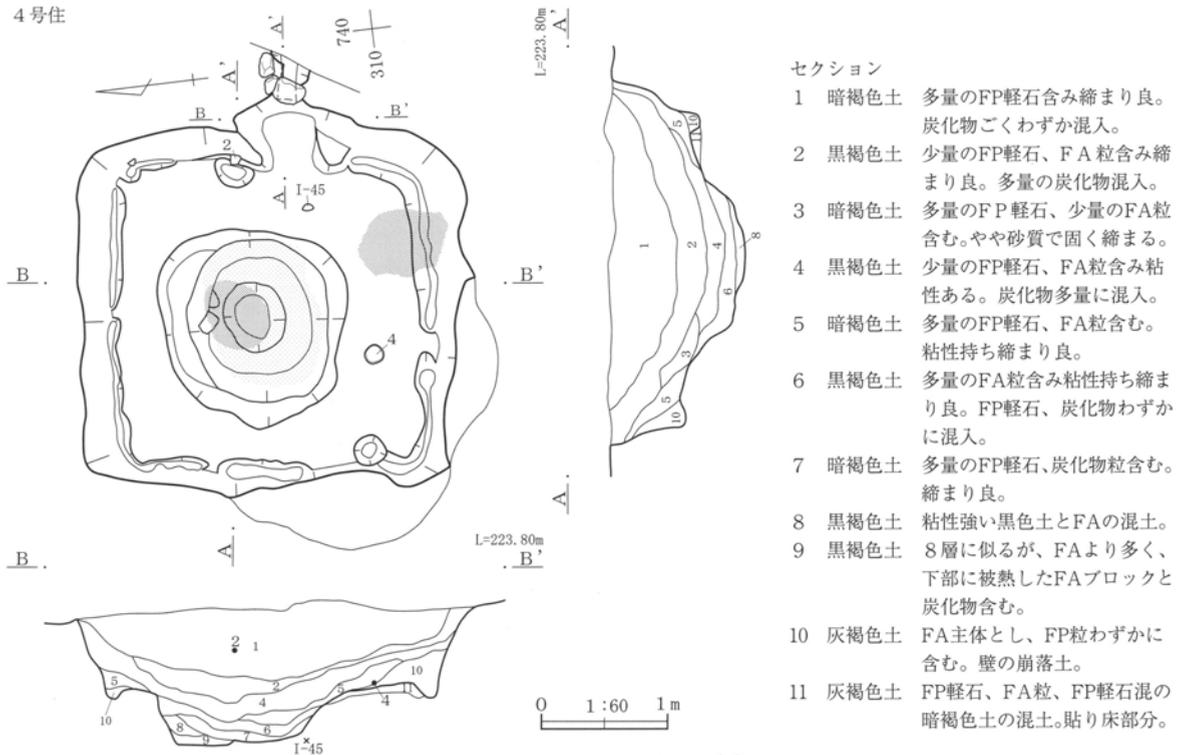
第133図 2区 3号住居 (3)



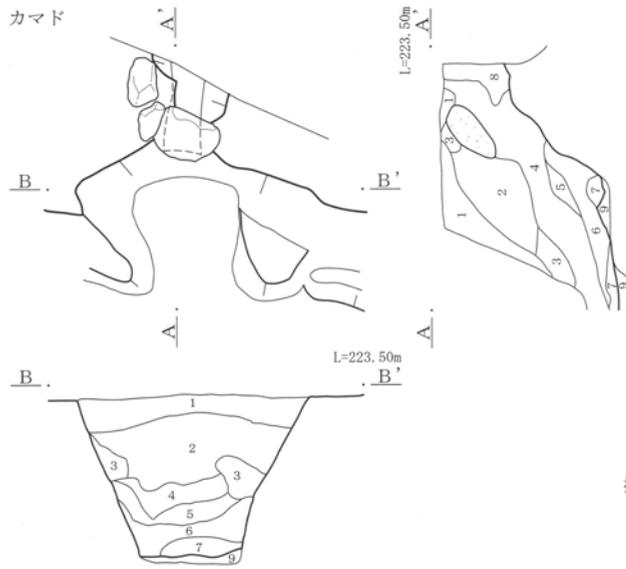
第134図 2区 3号住居出土遺物

2区4号住居

位置 310-740 **方位** N-94°-E **規模と形状** ほぼ正方形状であるが、長辺3.12m・短辺2.90mで、南北方向がわずかに長い。中央には大型の土坑が掘り込まれていた。南北1.5m、東西1.6mで、隅丸の方形状を呈する。深さ50cm。土坑内面の南壁は帯状に焼土化しており、底部付近には炭化物や焼土粒が多く認められた。**面積** 8.5㎡ **壁高** 65cm **重複** 2区2号溝に切られる。**床面** 東壁から南壁付近に貼り床。浅い掘り方にFP軽石、FA、FP混の暗褐色土の混土を貼る。**壁溝** ほぼ全周に深さ5~10cm程度の溝がめぐる。**柱穴** 確認できず。**貯蔵穴** なし。**竈** 東壁のほぼ中央にあり。地山を削って作り出しており、壁外に燃焼部が張り出す。天井は一部残存しており、天井石が残っていた。先端の煙道部は近年の攪乱によって破壊されていた。**遺物** ごく少数の遺物が床面付近に分布。住居南側の床面上から、完形の須恵器蓋(4)が出土。この他に須恵器坏、土師器坏・甕がある。また、住居覆土や掘り方埋土から炉内滓や刀子片などの鉄関連遺物が22点・3,189g出土した。鉄生産関連遺物のほとんどは覆土からの出土であるため、周辺から混入したものと判断した。**所見** 2区2号住居同様住居中央に土坑が掘り込まれている。調査段階では鍛冶に係わる遺構との予測を持っていたが、出土遺物などの検討からはそのような事実は伺えない。1点ではあるが掘り方埋土からも炉内滓が出土していることから、本遺構廃絶以前から、周辺で製錬工程から小割り作業が行われていた可能性が考えられる。出土遺物より、8世紀後半に位置付けられる。

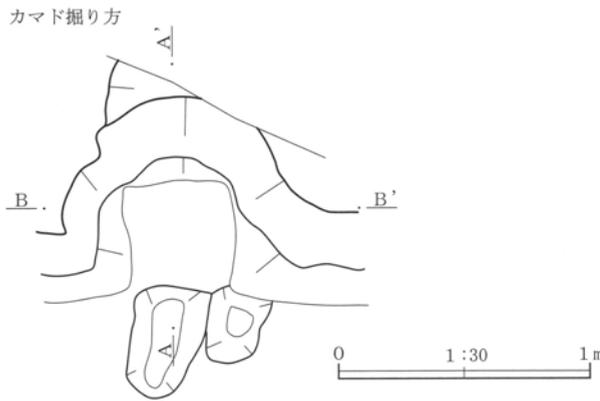


第135図 2区 4号住居 (1)

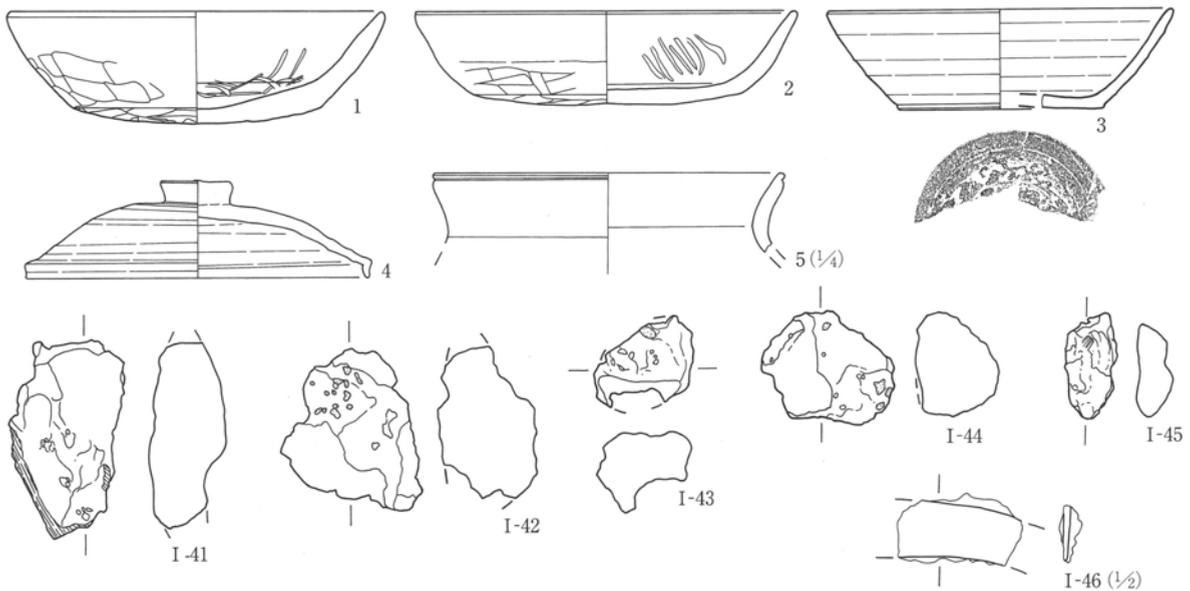
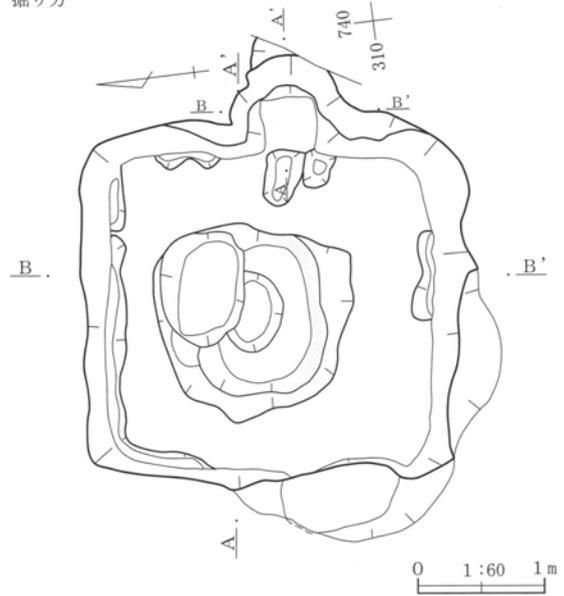


竈セクション

- 1 暗褐色土 多量のFP軽石、少量の炭化物粒含む。締めり悪い。
- 2 暗褐色土 多量のFP軽石、少量のFA粒、炭化物粒含む。
- 3 灰褐色土 多量のFA、少量のFP軽石、炭化物含む。粘性強い。
- 4 暗黄褐色土 FP軽石と砂質土の混土。下面焼土化。
- 5 灰褐色土 下面焼成受ける。煙道の崩落部か。
- 6 暗黄褐色土 多量のFP軽石が流れ込む。少量の焼土粒含む。
- 7 明褐色土 FAブロック。壁の崩落土か。
- 8 暗褐色土 やや黒味強く少量のFP軽石含む。煙道覆土か。
- 9 明黄褐色土 多量のFP軽石、少量の焼土粒含む。上面灰層。掘り方埋土。



掘り方

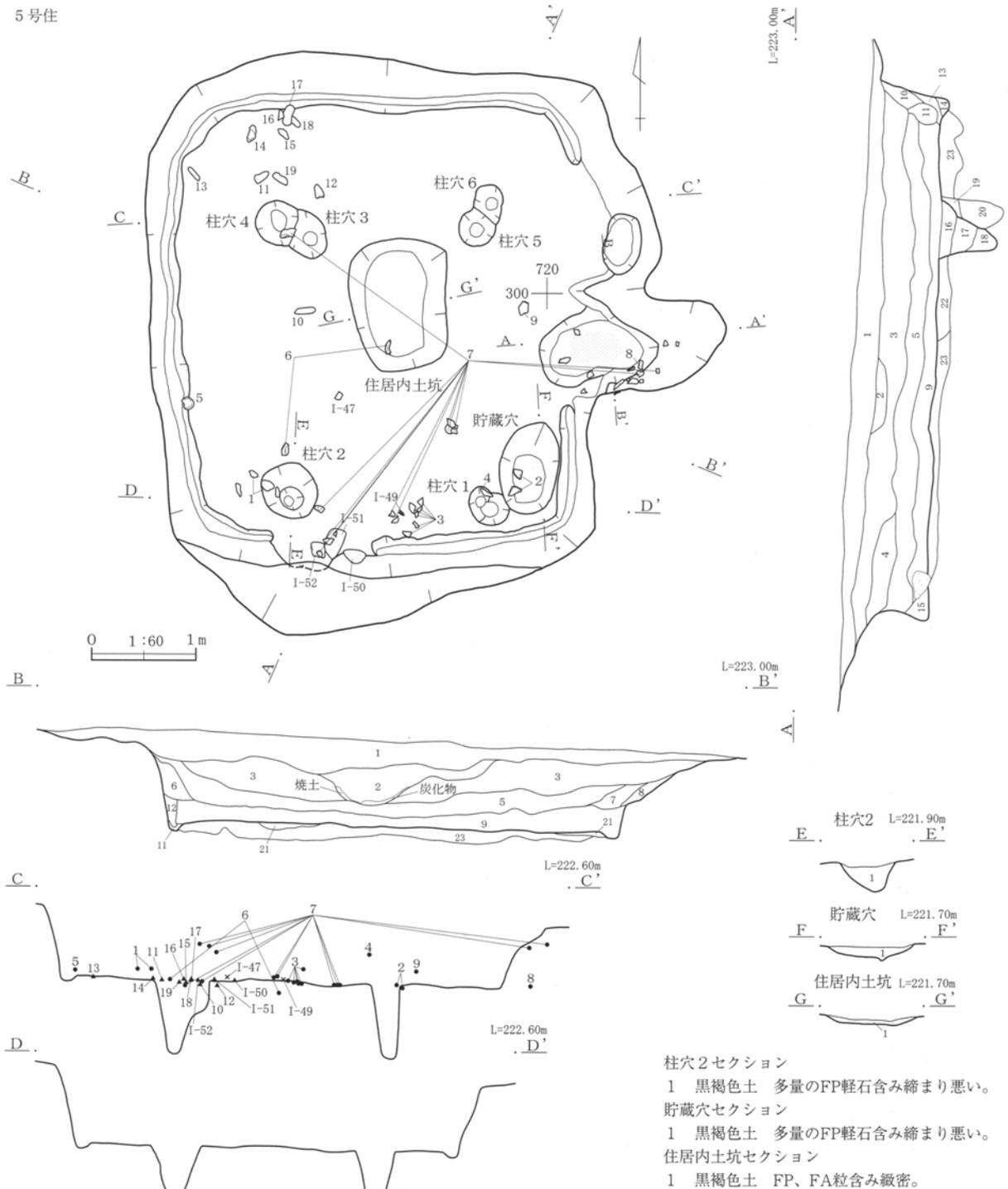


第136図 2区 4号住居 (2)

2区5号住居

位置 295-720 **方位** N-88°-E **規模と形状** 南側で壁の上位が崩落し、大きく外側に開いているため、その部分では中段の位置で規模を計測する。それによると、南北5.07m・東西4.93mで、ほぼ正方形形状。住居のほぼ中央で、長軸126cm、短軸96cmのごく浅い土坑が見つかった。形状は隅丸の長方形。内部からは焼土や炭化物は出土せず、2区2・4号住居のような施設ではない。土層断面の観察から、後から掘り込まれたものでないのは確実にあり、住居に伴うものと考えられる。南壁の西より部分には、壁が外側に抉られ

5号住

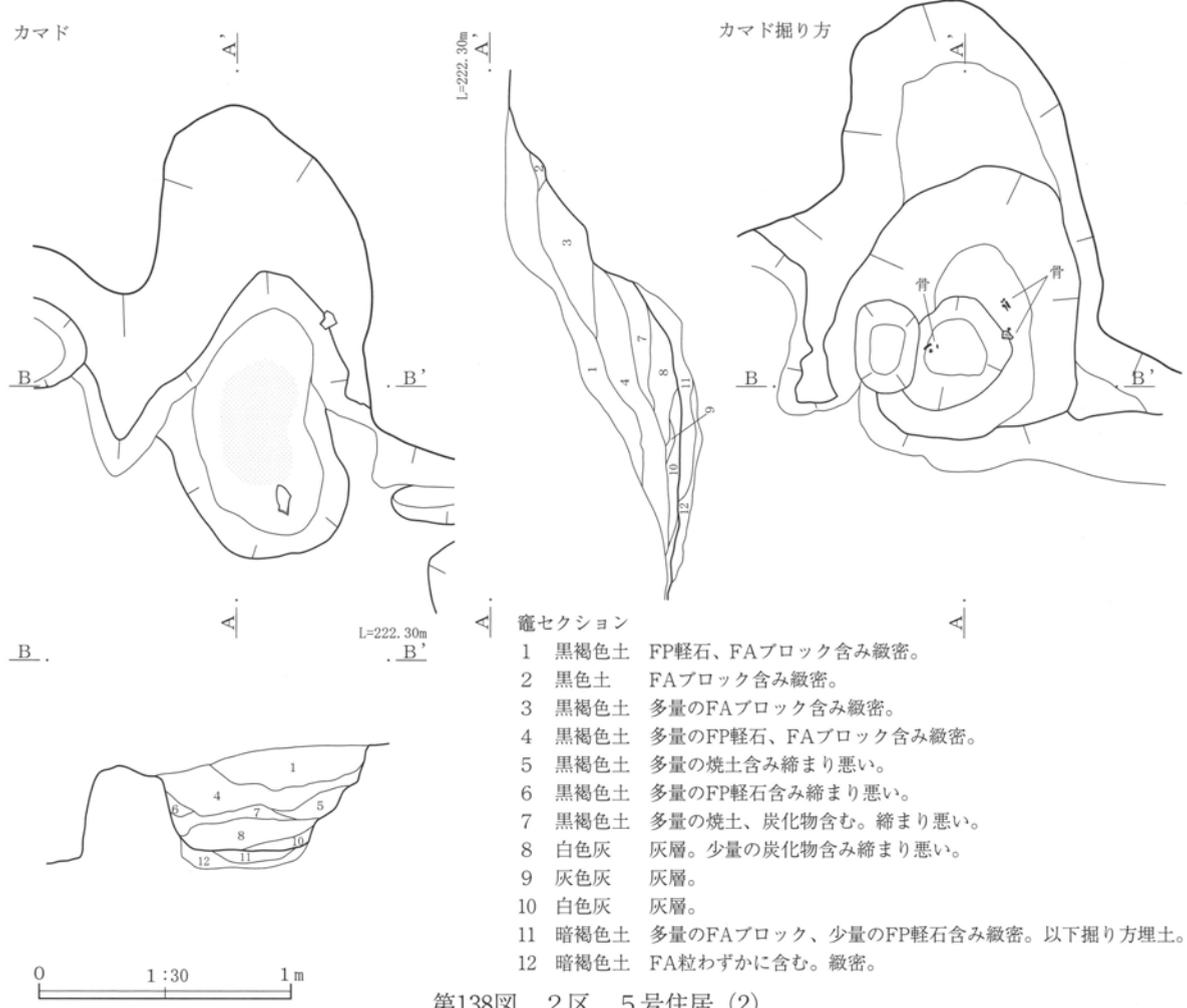


第137図 2区 5号住居 (1)

たようになっている部分がある。そこだけ壁溝がとぎれていることから、やはり住居に伴うものと判断した。
面積 22.2㎡ **壁高** 70cm **重複** なし。 **床面** 掘り方に多量のFAブロック含む土を埋め、床面を構築。非常に固く締まる。 **壁溝** 竈の左脇と南壁の抉れ部分を除き、深さ5~10cm程度の溝がめぐる。 **柱穴** 床面調査の段階では南西隅の柱穴しか検出できなかったが、掘り方の段階で4カ所で確認した。北側の2カ所では同じような規模の柱穴が2基並んでいた。このうち柱穴5と6は、土層断面から6を切って5が掘り込まれていることがわかる。柱穴の1・2も掘り方では2基並んでいる様子が確認でき、建て替えが行われたものと

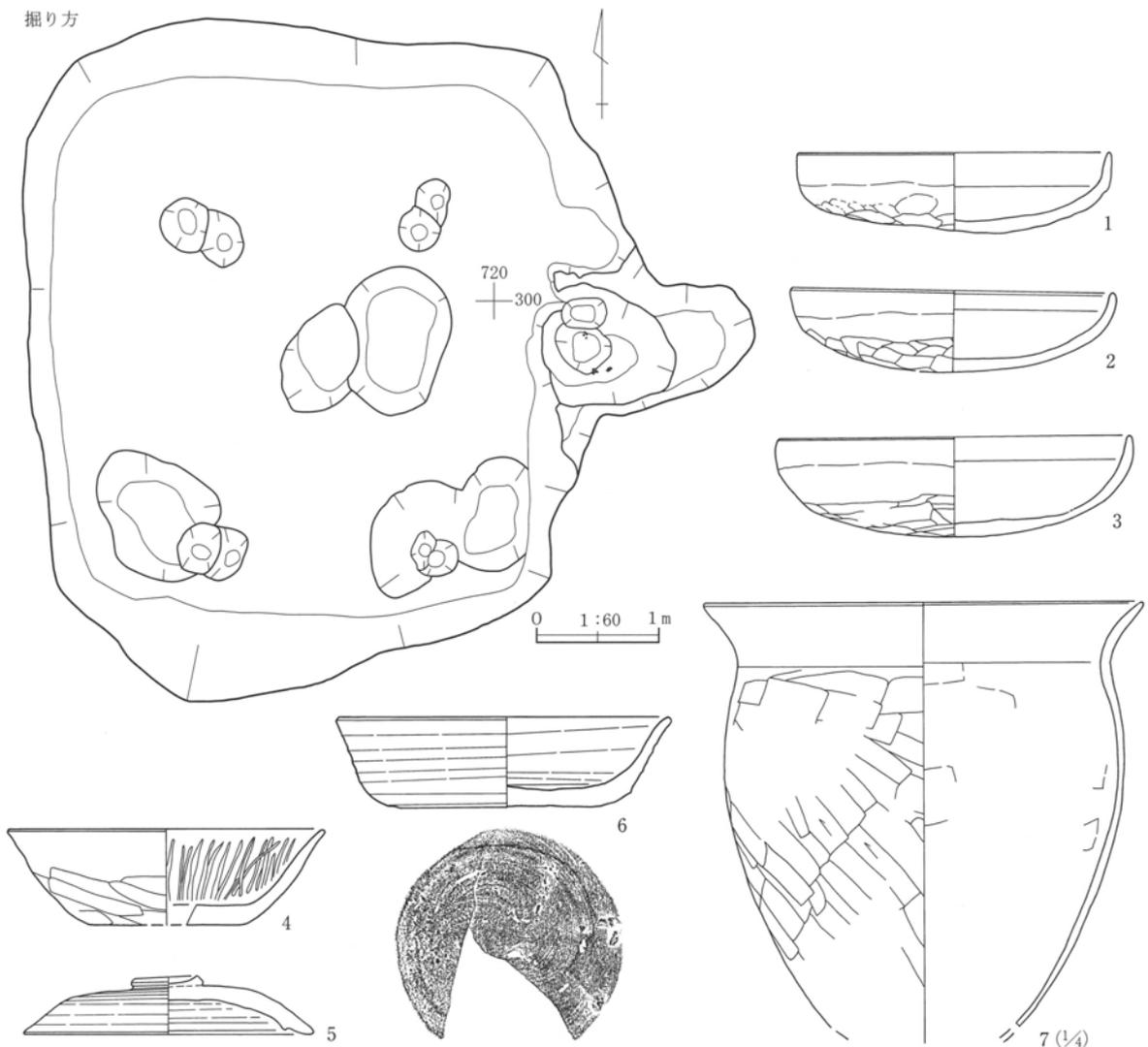
セクション

- | | |
|---|--|
| 1 黒褐色土 多量の炭化物、軽石含む。緻密。 | 15 黒褐色土 多量のFP軽石含みや緻密。 |
| 2 黒褐色土 多量のFP軽石、FA粒、炭化物含む。30号土坑覆土。 | 16 黒褐色土 多量のFAブロック、FP軽石含む。もろく締まり悪い。柱穴5覆土。 |
| 3 黒褐色土 多量の軽石、わずかの炭化物含む。緻密。 | 17 黒色土 多量のFAブロック含む。もろく締まり悪い。柱穴5覆土。 |
| 4 黒褐色土 多量のFP軽石、少量の黄色スコリア含む。 | 18 黒色土 FA粒少量含む。やや締まり悪い。柱穴5覆土。 |
| 5 黒褐色土 多量の軽石、FAブロック含む。緻密。 | 19 黒褐色土 多量のFAブロック、FP軽石含む。もろく締まり悪い。柱穴6覆土。 |
| 6 暗褐色土 多量のFP軽石、FA粒含み緻密。 | 20 黒色土 多量のFAブロック含む。もろく締まり悪い。柱穴6覆土。 |
| 7 黒褐色土 多量のFP軽石含む。締まり悪い。壁崩落土。 | 21 暗褐色土 少量のFP軽石、FA粒含む。以下掘り方埋土。 |
| 8 黒褐色土 FP軽石非常に多く含む。締まり悪い。壁崩落土。 | 22 FAブロックからなる。固く締まる。床層。 |
| 9 黒褐色土 少量のFAブロック、FP軽石含む。地山黒色土ブロック混入。緻密。 | 23 暗褐色土 非常に多くのFAブロック含む。非常に固く締まる。床層。 |
| 10 暗褐色土 多量のFA粒、FP軽石含み緻密。 | |
| 11 FAブロック。壁崩落土。 | |
| 12 暗褐色土 多量のFA含み緻密。 | |
| 13 暗褐色土 12層よりさらに多くのFA含む。 | |
| 14 暗褐色土 多量のFP軽石含む。壁崩落土。 | |

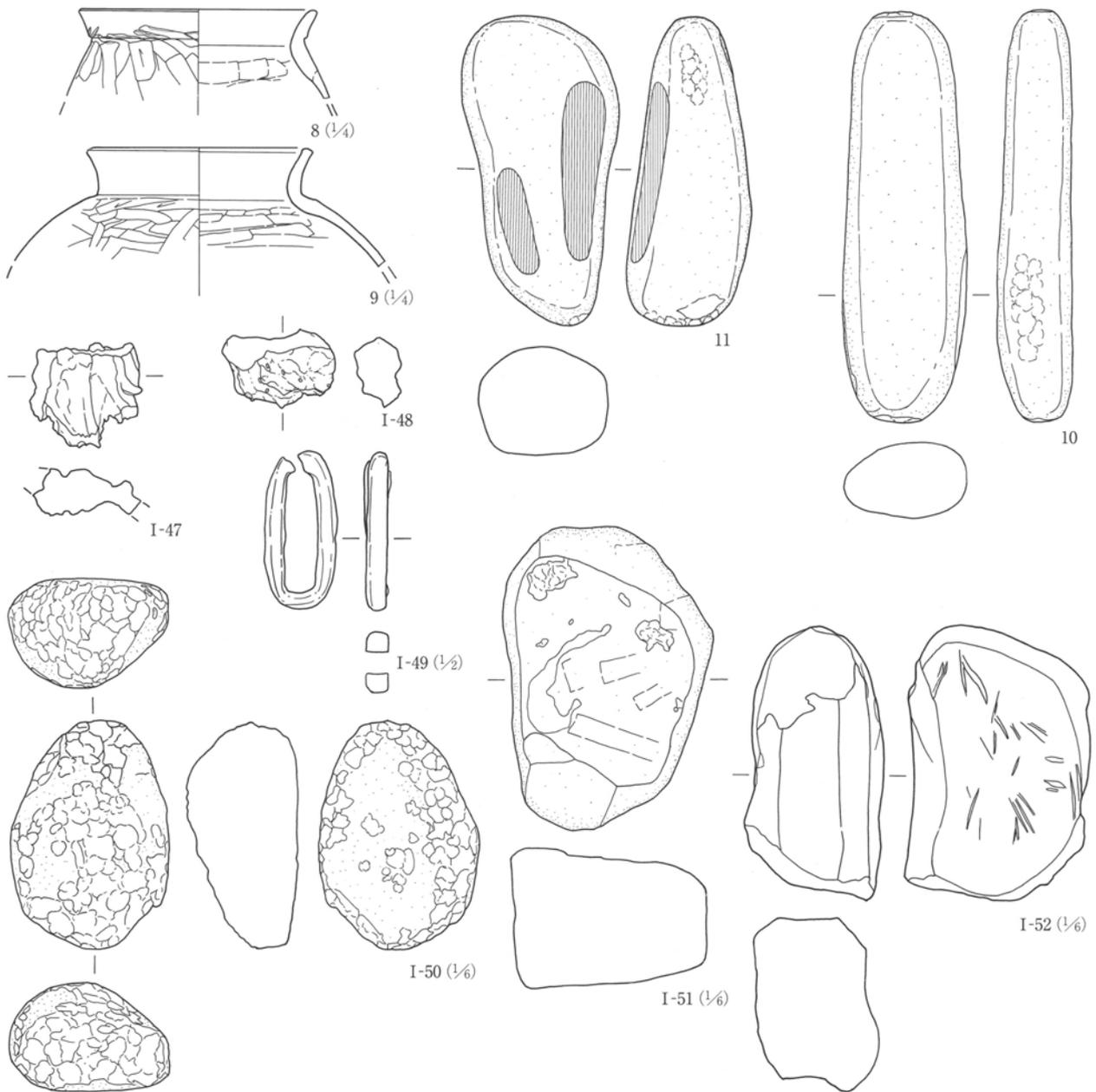


第138図 2区 5号住居(2)

推測される。 **貯蔵穴** 住居の南東隅、竈右側にあり。長軸90cm、短軸55cmの楕円形状で、深さは10cmと浅い。 **竈** 東壁の中央に位置している。袖はほとんど作られず、ごく短い左袖は地山を削り残して整形している。燃烧部は壁外に張り出す。燃烧部の底面には厚さ5~10cmの灰層が堆積していた。左袖の脇には深さ5cmほどの浅い小さなピットが掘り込まれていた。2区3号住居でも同じような場所に小ピットがあり、竈に付随するものと判断したが、本住居のものはごく浅く、機能的には異なるであろう。壁を抉るように掘り込まれていることから、南壁の抉れている部分と同じ性格のものと考えられよう。掘り方内から食用と見られる獣骨片が少量出土した。 **遺物** 住居全体に遺物が散在。床面付近から須恵器坏・蓋、土師器坏・甕などが出土している。南壁際には長径10~25cm程の礫が、また北西隅にはこも編み石と見られる長径10~20cmほどの棒状の礫が、床面上からまとまって見つかった。また、住居床面付近から炉壁・鉄床石・砥石などの鉄関連遺物23点・2,707.5gと銅製の刀装具1点が出土した。出土した炉壁は半地下式豎形炉の大口径羽口部分のものなども含む。 **所見** 大型の置き砥や鉄床石などが住居床面付近から出土したが、本遺構内で鍛冶炉は検出されなかった。床面付近から鉄生産関連遺物が出土していることから、本遺構内で小割り作業から鍛冶工程を行っていた可能性もあるが、詳細は不明である。遺物の年代から、8世紀前半と判断した。



第139図 2区 5号住居 (3)



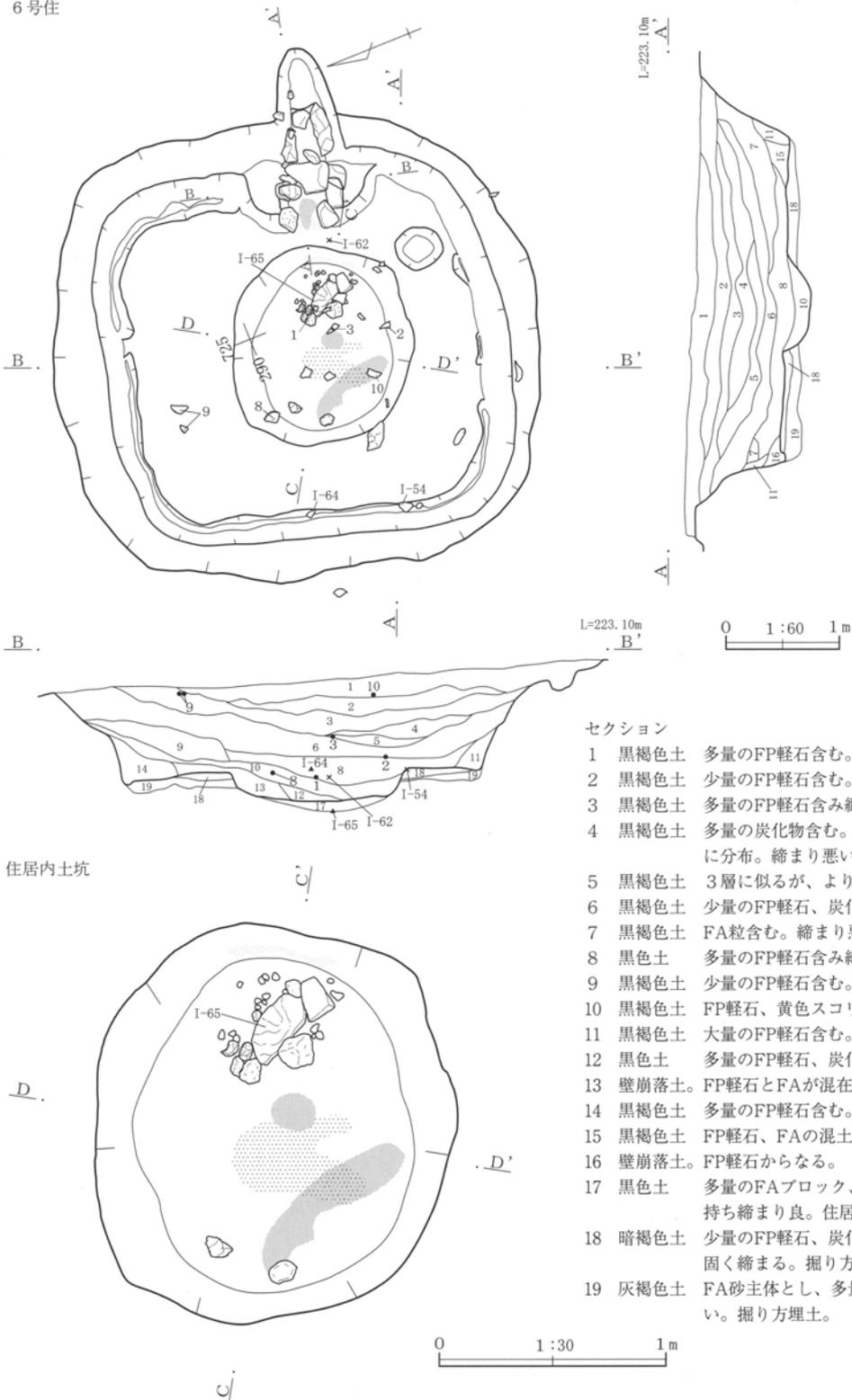
第140図 2区 5号住居出土遺物

2区6号住居

位置 290-725 **方位** N-104°-E **規模と形状** 南北4.35m・東西4.05mでわずかに南北が長いが、形状はほぼ正方形。住居の中央よりわずかに南よりに長軸175cm、短軸165cmの楕円形の土坑が掘り込まれている。深さは30cmほどで、底部にはFAを主体とする土で床面を構築していた。土坑の西半には多量の炭化物の分布が確認され、東半では鉄床石が廃棄されていた。鉄床石のすぐ脇の壁面は、焼土化しており、被熱していた可能性もある。内部からは多量の鉄滓が出土している。 **面積** 14.9㎡ **壁高** 76cm **重複** なし。 **床面** 掘り方にFP軽石とFAを含む土を埋め、床面を構築。表面はやや軟弱。 **壁溝** 竈右袖脇から南壁にかけての範囲は断続的であるが、その他は深さ5cm程の溝がめぐる。 **柱穴** 確認できず。 **貯蔵穴** なし。 **竈** 東壁の中央よりやや南よりに位置する。残存状態は比較的良好で、天井や袖、燃烧部の壁などに構築材の礫が残っていた。住居内に主にFAを用いて袖を構築、燃烧部側にはほぼ全面に礫を設置する。煙

第4章 検出された遺構と遺物

道は削平され残っていない。掘り方では、両袖先端部の下位において、石を据えた際に掘られた小ピットが1対見つかっている。遺物 ごく少数の遺物が住居内に散在する。器種は須恵器杯・蓋、土師器杯・甕・小型甕などがあり、8の須恵器杯と1の土師器杯は床面近くからの出土である。9の須恵器杯は覆土上位からの出土であり、後世の混入と見られる。また、覆土や中央の土坑から炉壁・炉内滓・椀形鍛冶滓・鍛冶

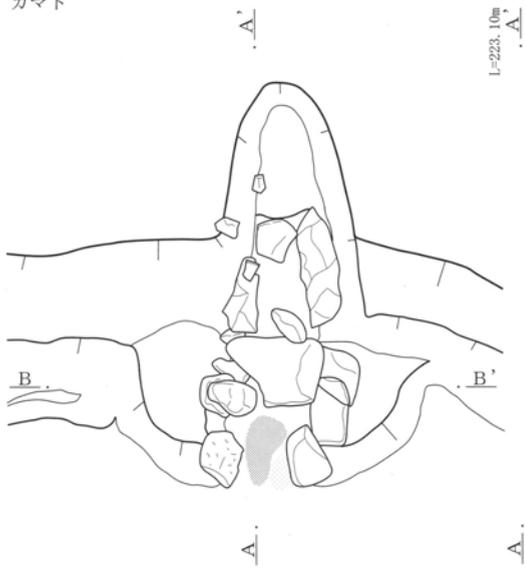


セクション

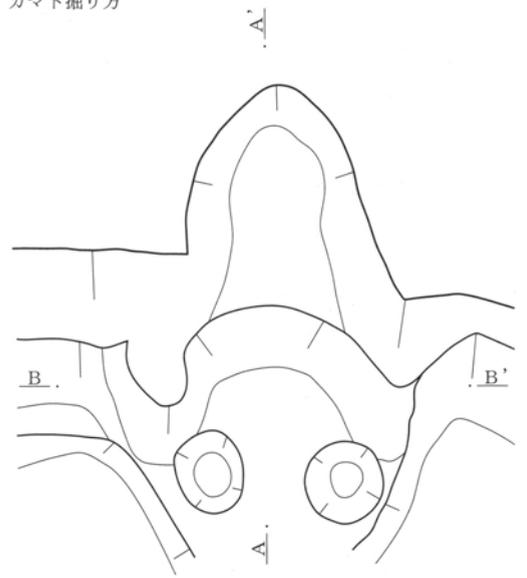
- 1 黒褐色土 多量のFP軽石含む。緻密。
- 2 黒褐色土 少量のFP軽石含む。緻密。
- 3 黒褐色土 多量のFP軽石含む緻密。FAブロック混入。
- 4 黒褐色土 多量の炭化物含む。基底部に黒色の灰が一面に分布。締まり悪い。
- 5 黒褐色土 3層に似るが、より緻密。
- 6 黒褐色土 少量のFP軽石、炭化物含む。
- 7 黒褐色土 FA粒含む。締まり悪い。
- 8 黒色土 多量のFP軽石含む締まりやや悪い。
- 9 黒褐色土 少量のFP軽石含む。
- 10 黒褐色土 FP軽石、黄色スコリア含む。
- 11 黒褐色土 大量のFP軽石含む。壁崩落土。
- 12 黒色土 多量のFP軽石、炭化物含む。締まり悪い。
- 13 壁崩落土。FP軽石とFAが混在。
- 14 黒褐色土 多量のFP軽石含む。壁崩落土。
- 15 黒褐色土 FP軽石、FAの混土。締まり悪い。
- 16 壁崩落土。FP軽石からなる。
- 17 黒色土 多量のFAブロック、少量の炭化物含む。粘性持ち締まり良。住居内土坑掘り方埋土。
- 18 暗褐色土 少量のFP軽石、炭化物、FA粒含む。粘性持ち固く締まる。掘り方埋土。
- 19 灰褐色土 FA砂主体とし、多量のFP軽石含む。締まり悪い。掘り方埋土。

第141図 2区 6号住居 (1)

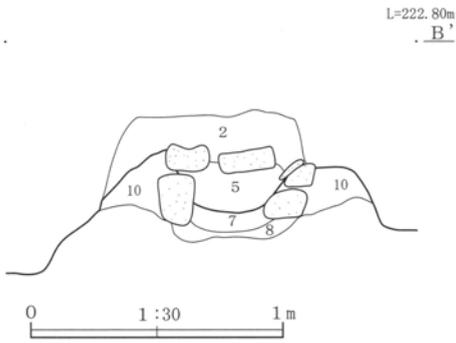
カマド



カマド掘り方



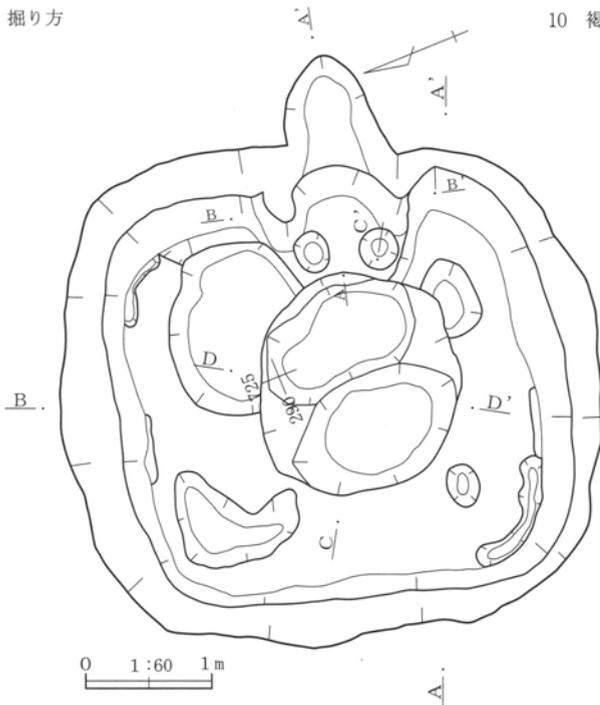
B.



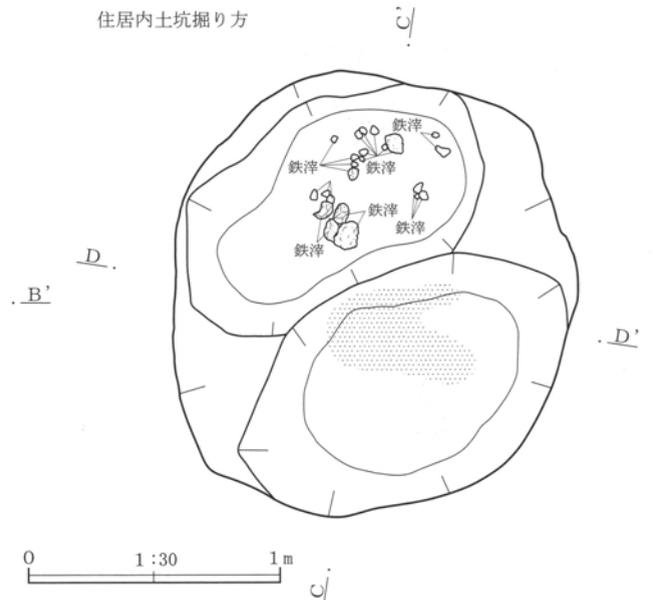
竈セクション

- 1 暗褐色土 FA粒主体とし多量のFP軽石含む。粘性持ち締まり良。
- 2 暗褐灰色土 FA粒主体とし、少量のFP軽石、わずかの焼土粒含む。粘性持ち締まり良。
- 3 暗褐色土 FA粒主体とし、少量のFP軽石含む。粘性持ち固く締まる。
- 4 灰褐色土 FA粒主体とし多量の炭化物含む。粘性持ち締まり良。
- 5 暗褐灰色土 FA粒主体とし、少量の炭化物含む。細粒で粘性あり。竈構築材。
- 6 暗褐色土 3層土に炭化物混入。
- 7 暗褐灰色土 FA粒主体とし、多量の焼土ブロック、炭化物含む。粘性持ち締まり良。
- 8 暗灰褐色土 FA主体。少量の炭化物、焼土粒含む。以下掘り方埋土。
- 9 暗灰褐色土 FA粒主体とし、FP軽石少量含む。粘性持ち締まり良。
- 10 褐灰色土 FA主体。FP粒わずかに含み、粘性持ち締まり良。竈袖材。

掘り方



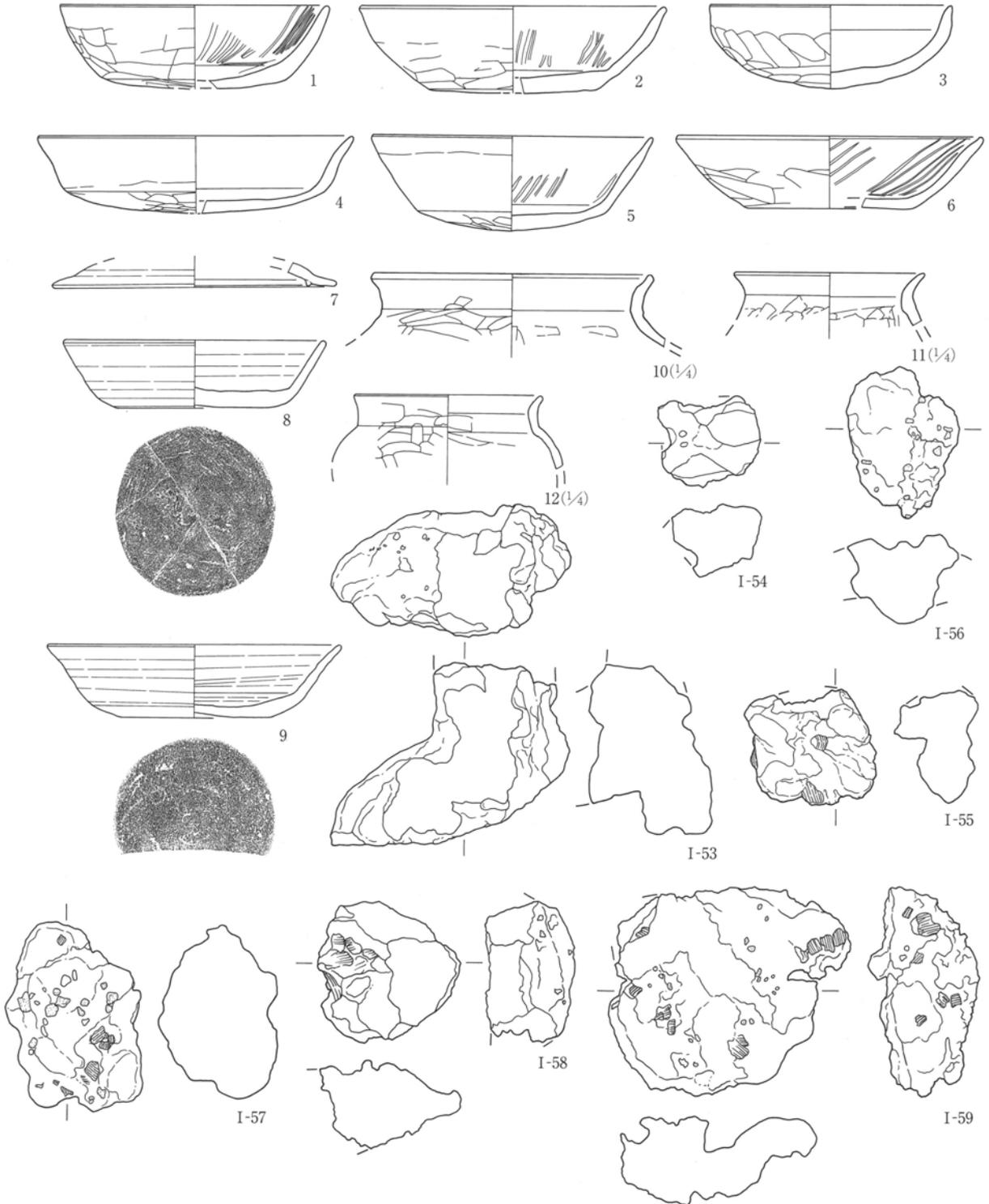
住居内土坑掘り方



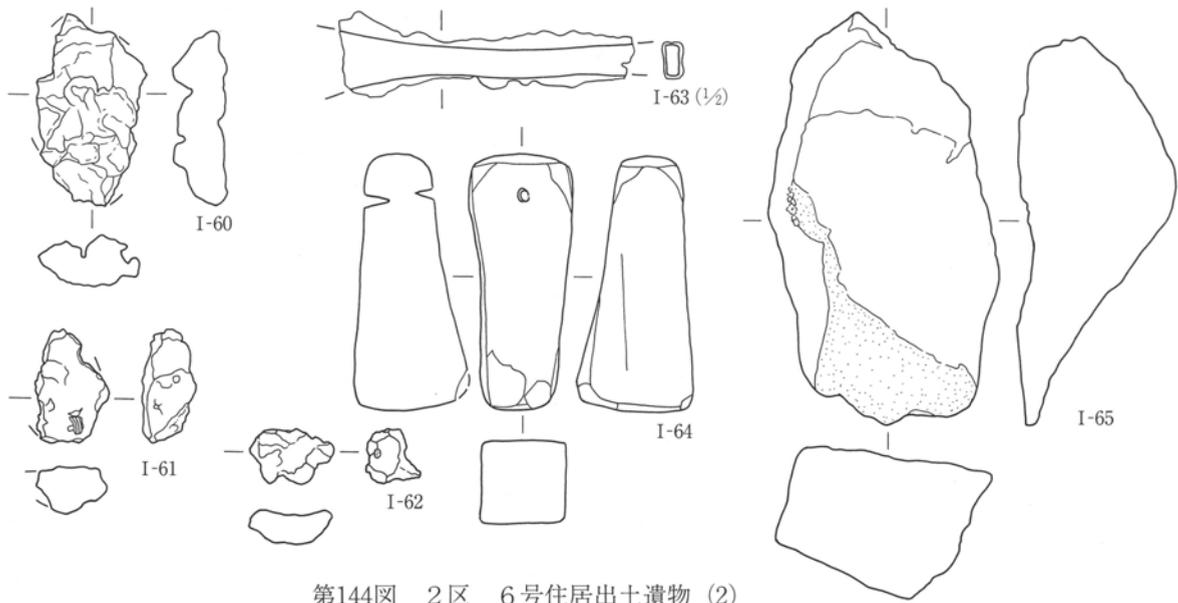
第142図 2区 6号住居 (2)

第4章 検出された遺構と遺物

滓・砥石・鉄床石などの鉄関連遺物44点・4,396.9g、床面上から鍛造剥片が出土した。鉄生産関連遺物のほとんどは住居中央土坑と覆土からの出土である。出土した炉壁は半地下式豎形炉の大口径羽口部分に由来する可能性のあるものを含む。 **所見** 床面上から鍛造剥片が出土したことから、本遺構内で鍛冶を行っていた可能性が高い。覆土から出土した鉄滓は炉内滓主体であることから、周辺では製錬工程から小割り作業を行っていた可能性が高いと推測される。遺物の年代から、8世紀前半に位置付けたい。



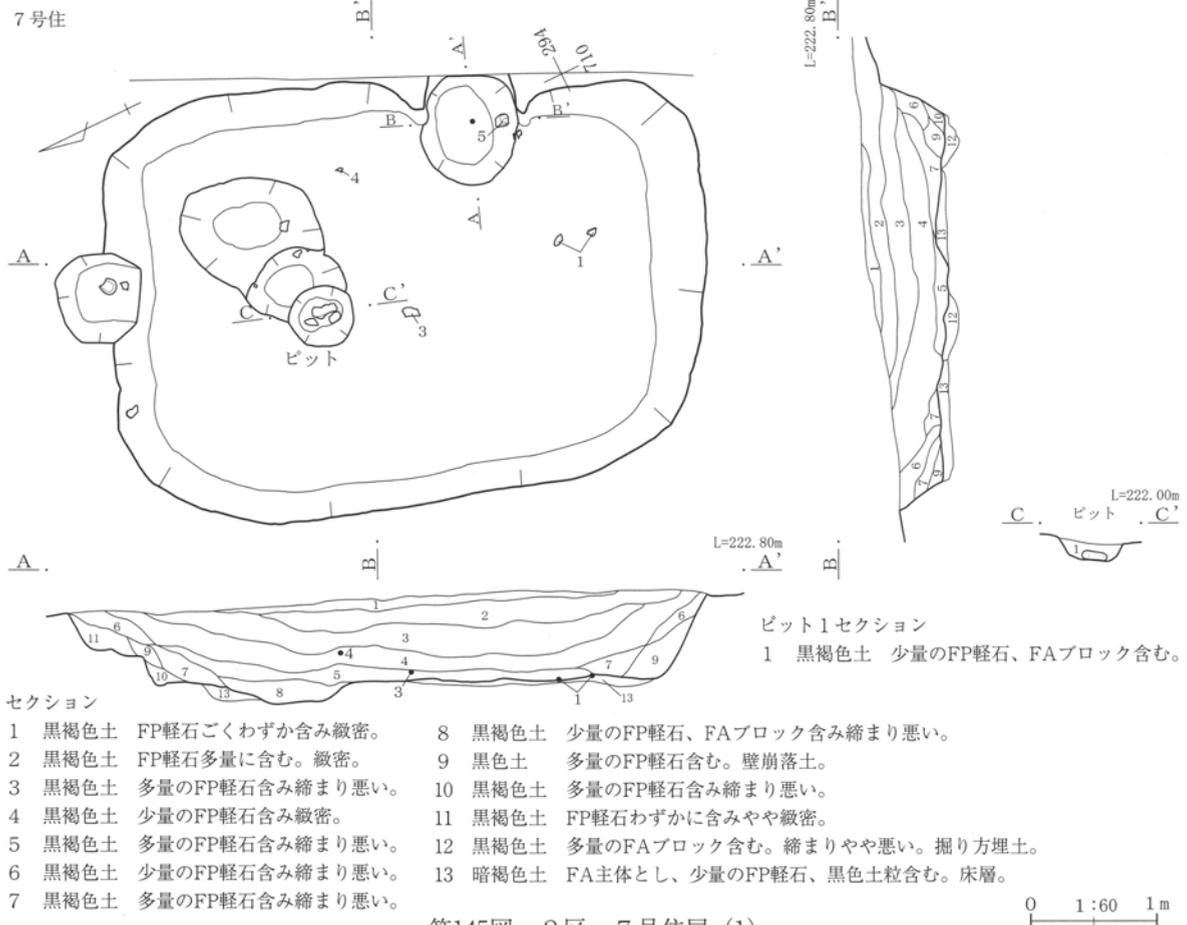
第143図 2区 6号住居出土遺物 (1)



第144図 2区 6号住居出土遺物 (2)

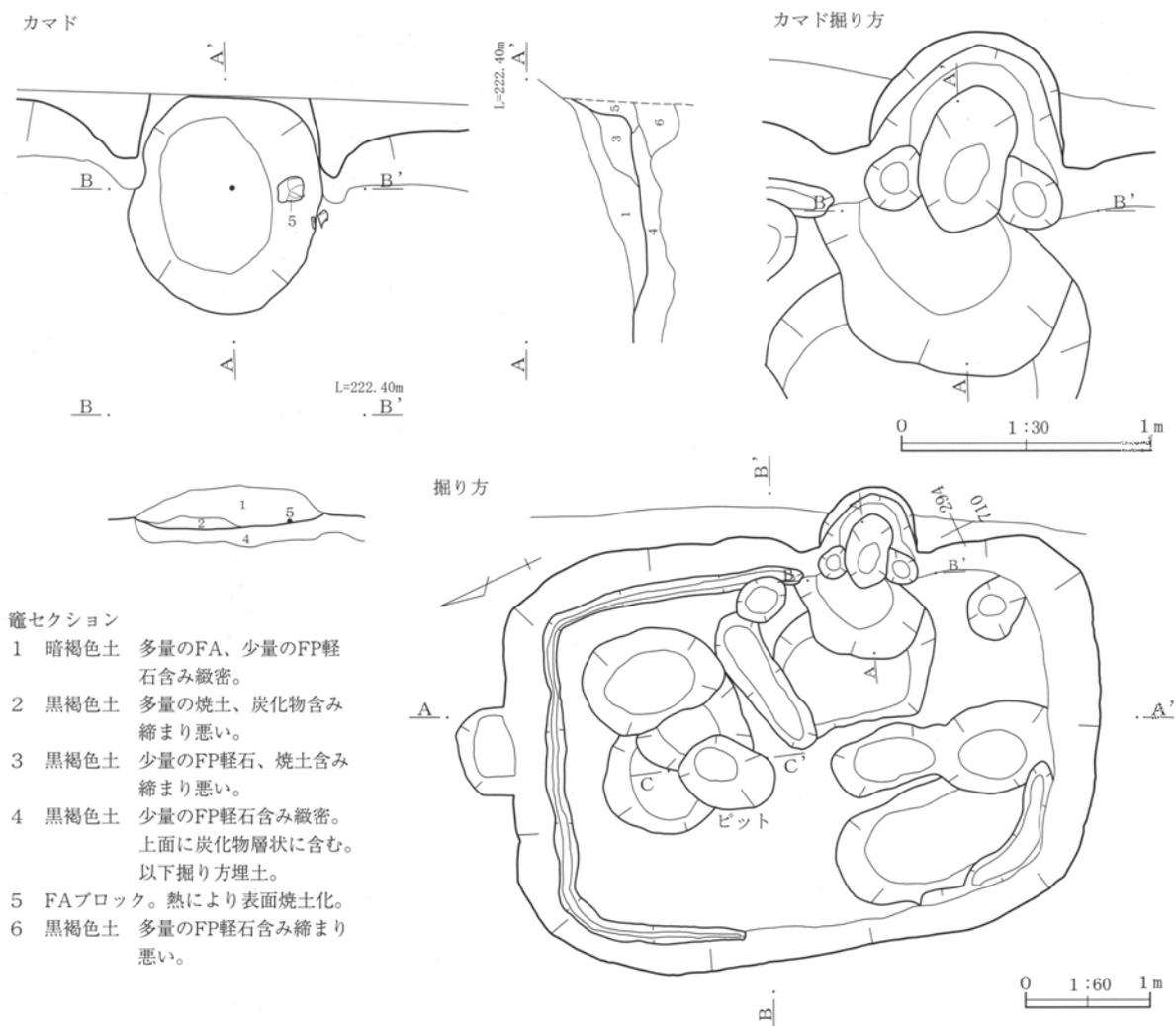
2区7号住居

位置 295-710 **方位** N-112°-E **規模と形状** 長辺4.80m・短辺3.95mの横長の長方形。長軸方向は南北。北壁の中央に一段高く張り出した部分がある。土層断面から、住居に付随するものと判断した。壁の中位に上幅70cm、奥行70cm程度の小段が設けてあり、床面からの比高は20cmである。入り口施設か。

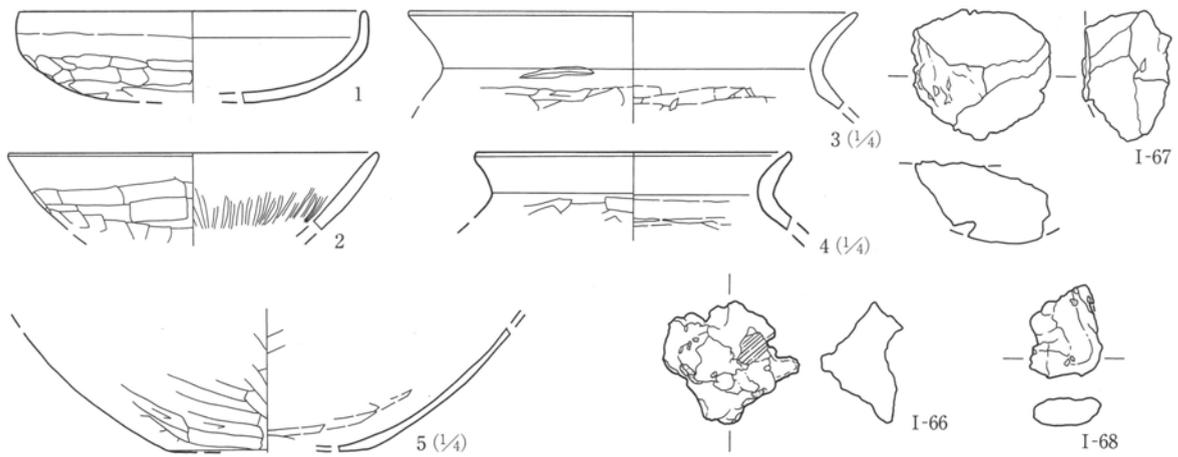


第4章 検出された遺構と遺物

また、住居の北半に大小の土坑が3基、連続したような形で検出されている。断面の観察から、住居が埋没してから掘り込まれたものではないことがわかる。機能、性格ともに不明の土坑であり、住居の使用段階で確実に同時存在していた確証は得られないが、本住居に伴うものと判断した。面積 14.4㎡ 壁高 66cm 重複 なし。床面 掘り方にFAを主体とする土を埋めて床面構築。表面の締まりは弱い。壁溝 なし。柱穴 確認できず。貯蔵穴 なし。竈 東壁の中央よりやや南よりにあり。袖はほとんど作られず、燃烧部は壁外に張り出す。掘り方の調査では、焚口の両脇から袖部の石を設置したと思われる小ピットを1対検出した。燃烧部内より食用と見られる獣骨片が1点出土した。遺物 遺物量は少なく、少数の土器破片と礫が出土したのみ。器種は土師器坏・甕があり、このうち1の坏と5の甕は床面上から出土している。浅いピットの中から長径10~20cm程の礫が3点まとめて見つかったが、いずれも加工や使用の痕跡は認められなかった。また、炉内滓・椀形鍛冶滓・含鉄鉄滓などの鉄関連遺物が7点・231.7g出土した。鉄生産関連遺物は覆土からの出土であるため、周辺から混入したものと判断した。所見 周辺から混入したと推定される炉内滓や椀形鍛冶滓などの鉄生産関連遺物から、本遺構周辺で製錬から鍛冶工程が行われていた可能性が高いと考えられる。出土遺物から、住居の年代は8世紀前半と考えられる。



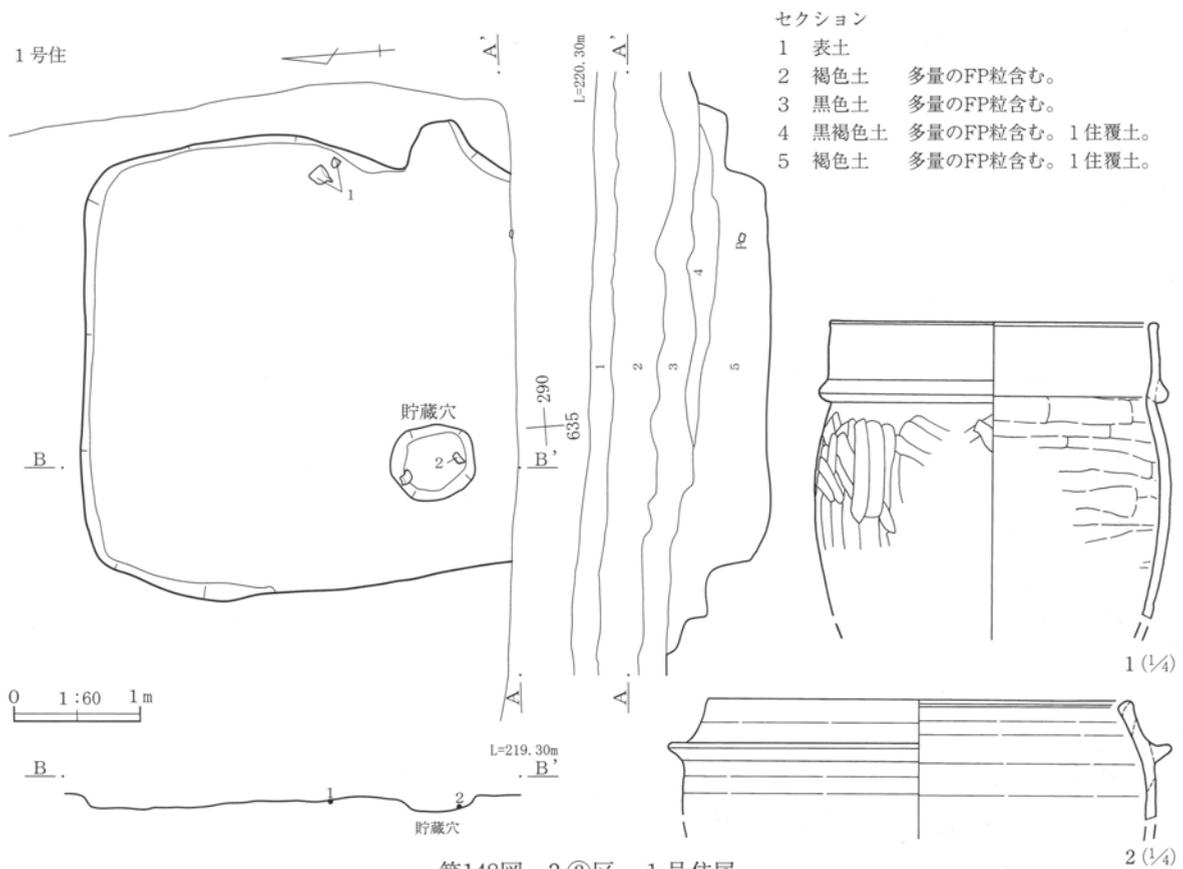
第146図 2区 7号住居 (2)



第147図 2区 7号住居出土遺物

3-②区 1号住居

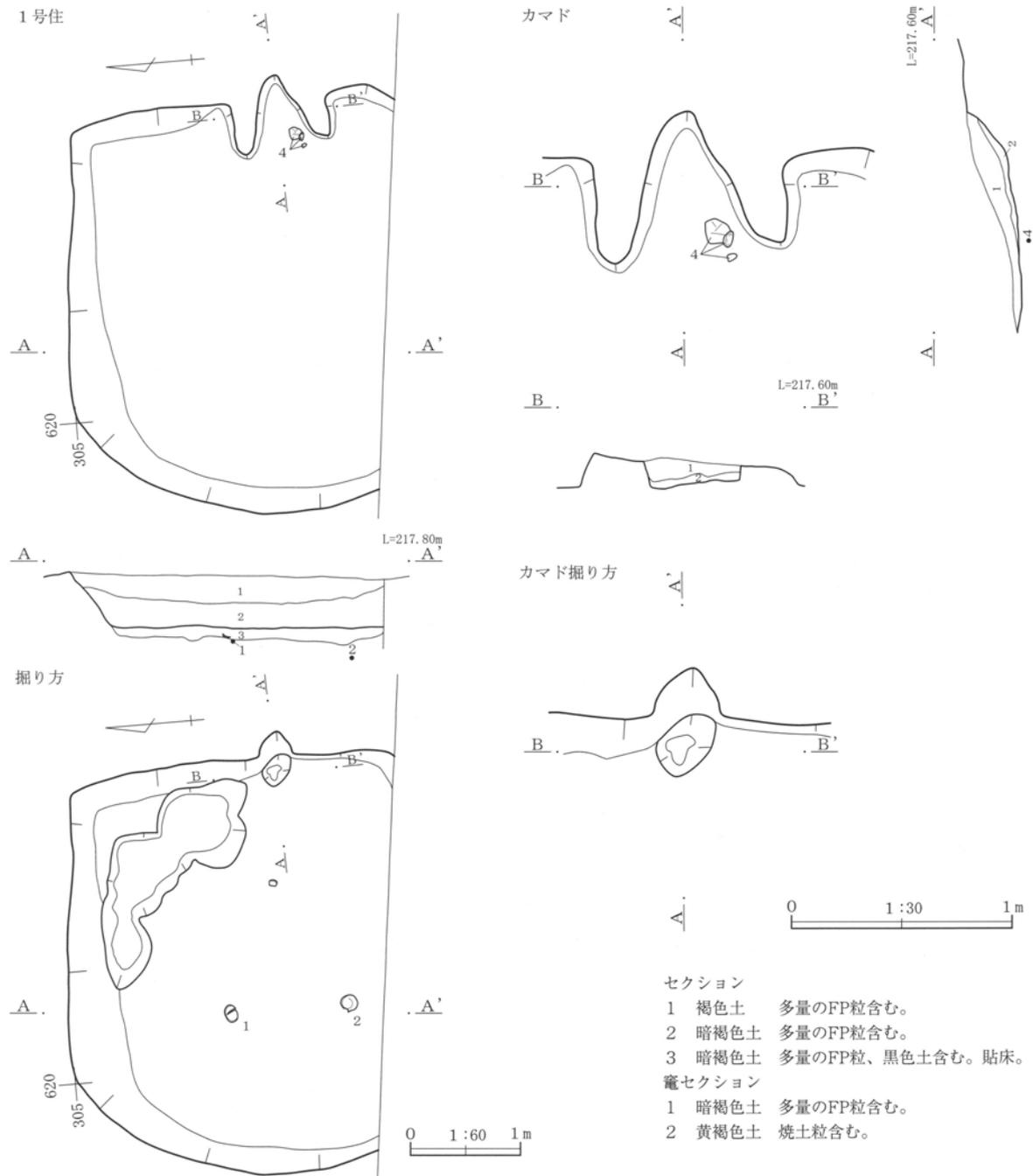
位置 290-630 **方位** N-96°-E **規模と形状** 南側が調査区外にあるため、正確な規模、形状は不明。東西方向は3.70mで、南北方向が長い長方形状と思われる。 **面積** 計測不可 **壁高** 12cm **重複** なし。
床面 地山Hr-FAの一次堆積層まで掘削し、床面としている。 **壁溝** なし。 **柱穴** 確認できず。 **貯蔵穴** 住居西側の南寄りに、ごく浅い貯蔵穴が作られる。長軸68cm、短軸59cmの楕円形状。 **竈** 東壁にあり。遺構を確認した段階で上位を削平されており、底面がわずかに残る。燃烧部は壁外に張り出す。 **遺物** ごくわずかの土器や礫が床面近くに分布していた。竈左脇の床面上から1が、貯蔵穴内から2の羽釜の破片が出土している。 **所見** 遺物の年代より10世紀に位置付けられる。



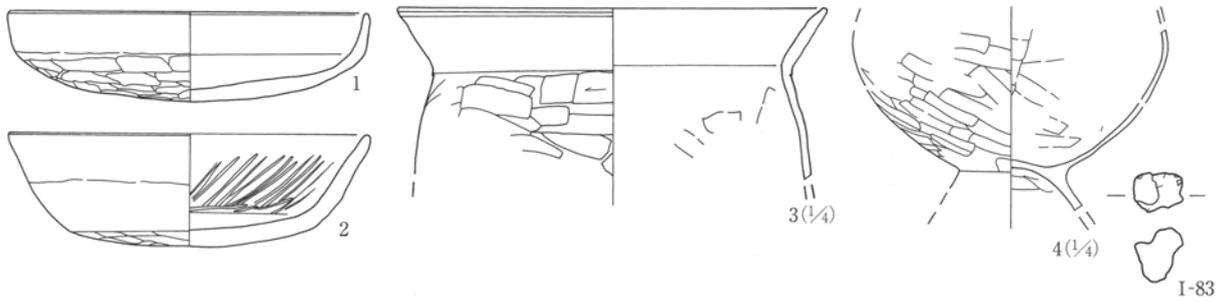
第148図 3-②区 1号住居

3-③区 1号住居

位置 300-615 **方位** N-90°-E **規模と形状** 南壁が調査区外に位置するため、正確な規模、形状は不明。東西方向は3.78mで、ほぼ正方形状と思われる。 **面積** 計測不可 **壁高** 50cm **重複** なし。
床面 掘り方に10cm程の厚さのFP粒含む黒色土を埋めて床面を構築。 **壁溝** なし。 **柱穴** 確認できず。
貯蔵穴 なし。 **竈** 東壁に位置する。住居内に袖と燃焼部が作られる。 **遺物** 遺物量は少なく、少数の土器破片が住居覆土や掘り方内から見つかっている。竈の使用面直上からは土師器台付甕が、掘り方内から坏が2点出土している。この他に覆土中より出土した土師器甕の破片、含鉄鉄滓1点などがある。 **所見** 遺物の年代より、住居の時期は8世紀前半と考える。



第149図 3-③区 1号住居



第150図 3-③区 1号住居出土遺物

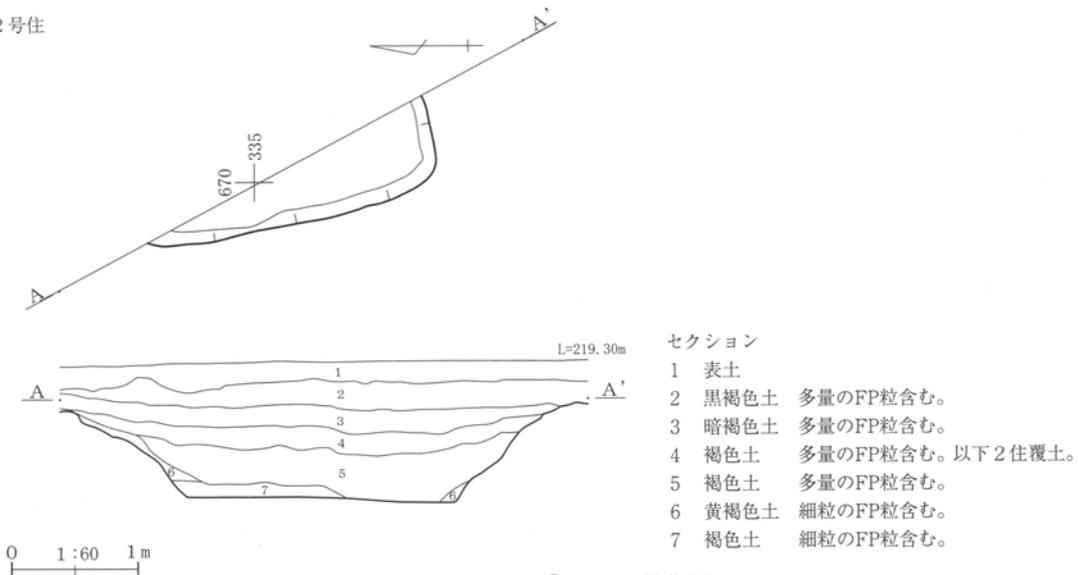
3-③区2号住居

位置 330-665 **方位** 不明 **規模と形状** 住居の大半が調査区外にあり、わずかに南西隅を確認したのみ。規模、形状共に不明。 **面積** 計測不可 **壁高** 5cm **重複** なし。 **床面** 地山のFA下黒色土まで掘り込み、床面としている。 **壁溝** なし。 **柱穴** 確認できず。 **貯蔵穴** 確認できず。 **竈** 確認できず。 **遺物** 覆土中よりごくわずかの土器片が出土したのみ。 **所見** 非常に断片的に確認したのみで、特徴的な遺物も得られておらず、時期の特定には至らなかった。

3-③区3号住居

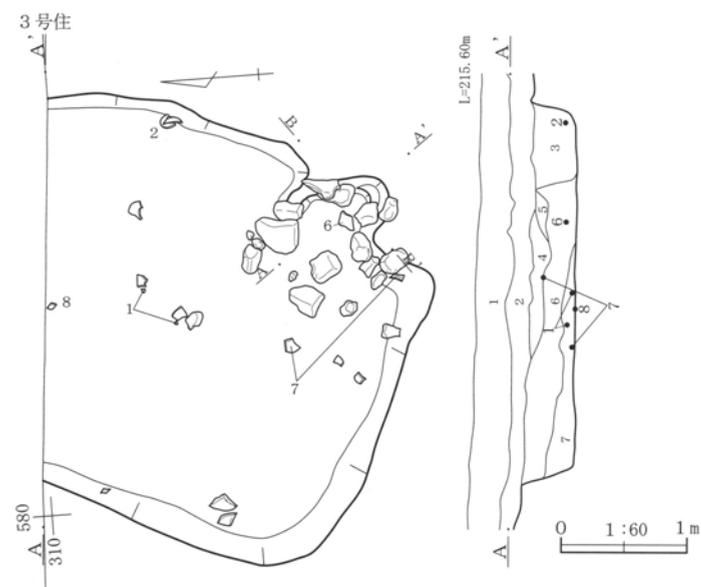
位置 305-575 **方位** N-119°-E **規模と形状** 住居の北側が調査区外に延びるため、正確な規模、形状は不明。東西方向は3.64mで、横長の長方形形状と思われる。長軸は南北方向。 **面積** 計測不可 **壁高** 50cm **重複** なし。 **床面** 地山のFAまで掘り込み、床面を構築。 **壁溝** なし。 **柱穴** 確認できず。 **貯蔵穴** なし。 **竈** 東壁の南端に所在。住居内に袖、燃烧部が作られ、煙道部が壁の外に延びる。袖と燃烧部の壁面に竈材として礫が据え付けられる。燃烧部前からは大型の礫が数点出土しており、竈材が崩落したと思われる。また、この竈の掘り方を調査した段階で、隣接する住居南東隅の位置から古い時期の竈が見つかった。竈の作り替えを行っていたものと思われる。 **遺物** 住居東半の床面付近に少数の土器が散在。遺物量自体は少ないが、灰釉陶器の比率の高さがきわだっている(2~5)。大半は住居覆土からの出土であるが、2の碗は東壁際で2つに割れた状態で見つっている。この他には、須恵器坏・羽釜、土師器甕などがある。 **所見** 出土遺物から、10世紀前半と考えられる。

2号住



第151図 3-③区 2号住居

第4章 検出された遺構と遺物

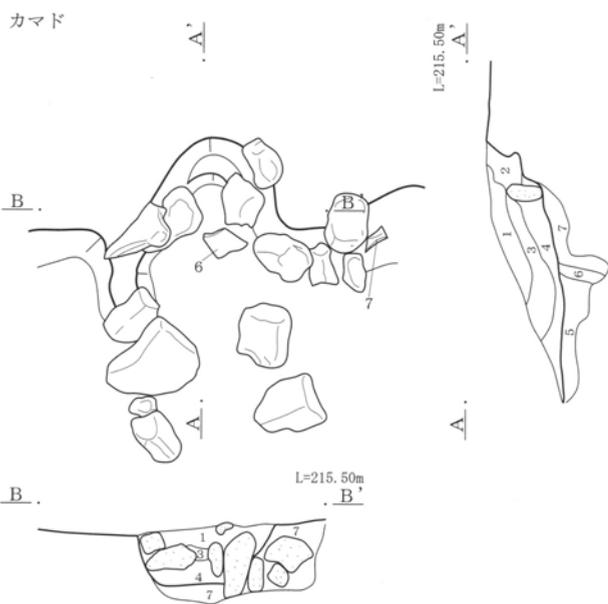


セクション

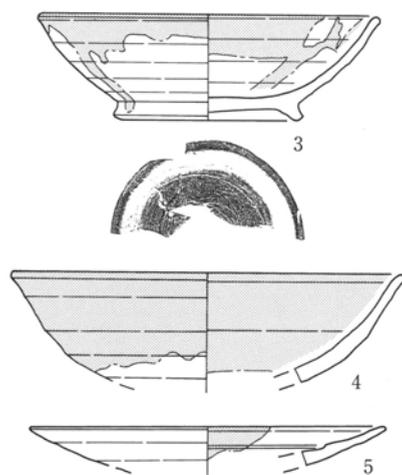
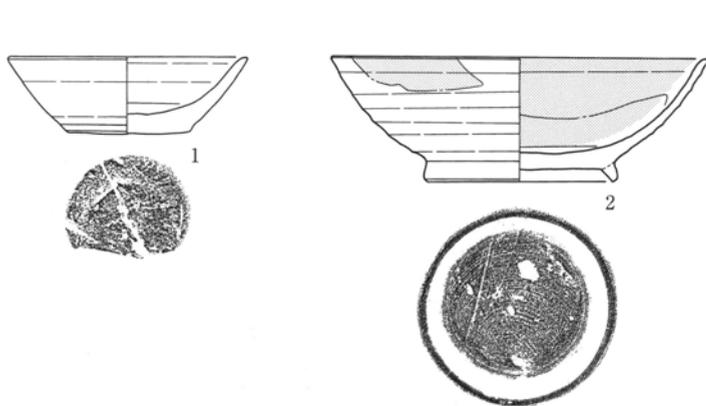
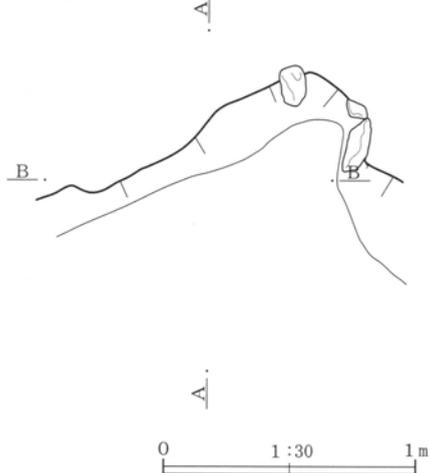
- 1 表土
- 2 黒褐色土 多量のFP粒含む。
- 3 暗褐色土 多量のFP粒含む。
- 4 暗褐色土 多量のFP粒含む。以下3住覆土。
- 5 黒褐色土 多量のFP粒含む。
- 6 褐色土 多量のFP粒含む。
- 7 暗褐色土 多量のFP粒含む。

竈セクション

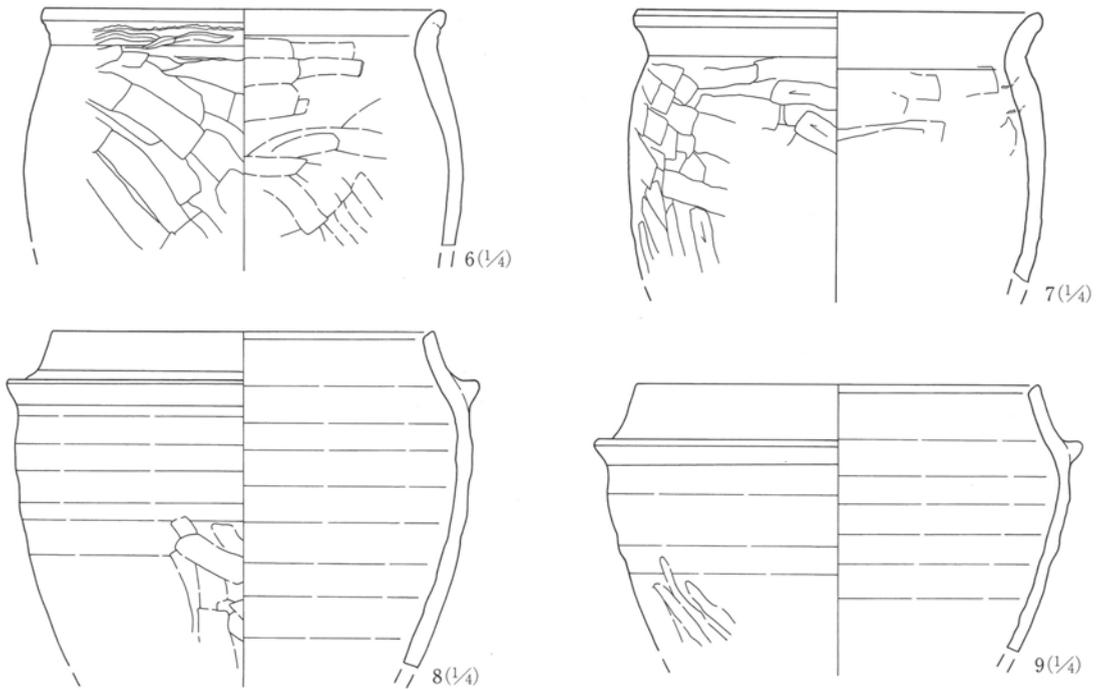
- 1 褐色土 多量のFP粒含む。
- 2 黄褐色土 焼土含む。
- 3 暗褐色土 多量のFP粒含む。
- 4 黒褐色土 焼土粒含む。
- 5 暗褐色土 焼土・炭化物粒含む。以下竈掘り方埋土。
- 6 褐色土 炭化物粒含む。多量のFA混入。
- 7 黒褐色土 炭化物粒含む。



旧カマド



第152図 3-③区 3号住居

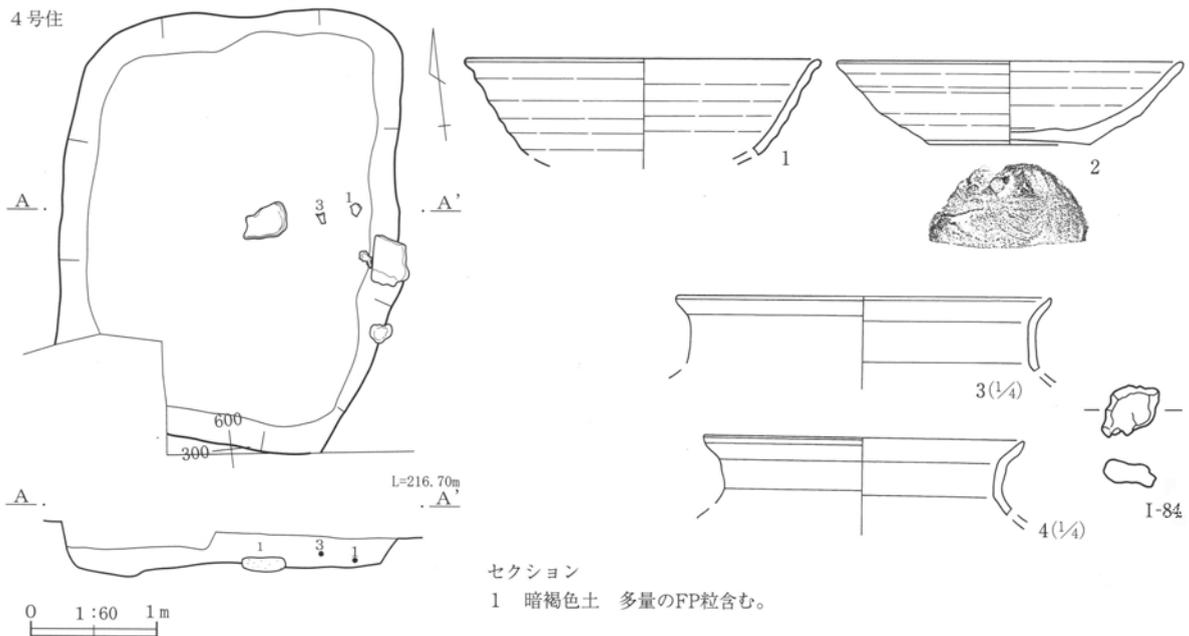


第153図 3-③区 3号住居出土遺物

3-③区 4号住居

位置 300-595 **方位** N-9°-E **規模と形状** 現状で長辺3.50m・短辺2.70mの長方形。南西隅は調査区外のため未確認。**面積** 8.5㎡(推) **壁高** 35cm **重複** なし。**床面** 地山FA層まで掘り込み、床面としている。**壁溝** なし。**柱穴** 確認できず。**貯蔵穴** なし。**竈** なし。**遺物** 遺物量は少なく、床面付近からわずかに出土したのみ。須恵器坏・埴、土師器甕などの破片、含鉄鉄滓4点・15.6gが得られている。また、住居中央の床面上には、扁平で大型の川原石が据え付けてあった。**所見** 遺物の年代より、9世紀後半の住居と考えられる。

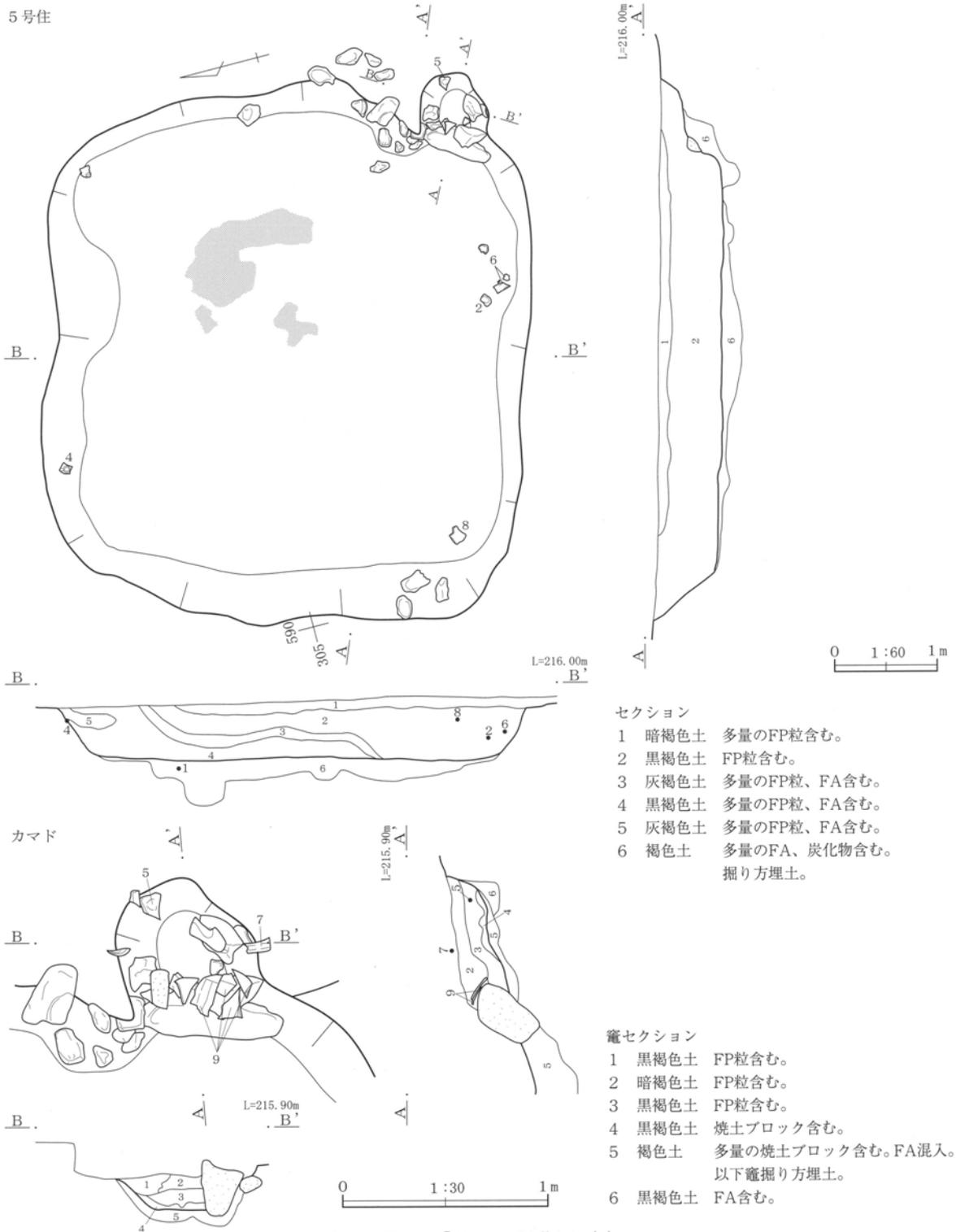
4号住



第154図 3-③区 4号住居

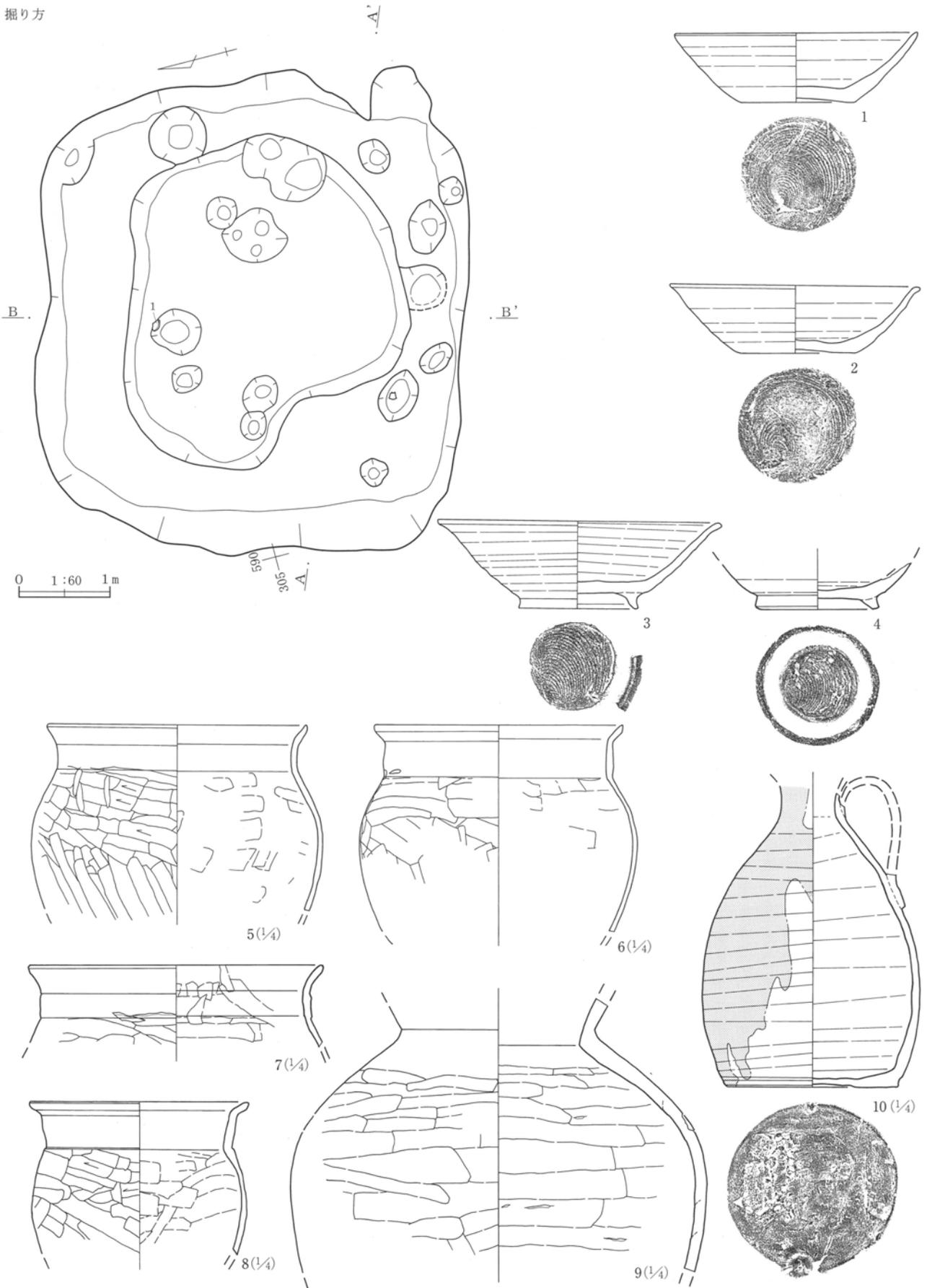
3-③区5号住居

位置 300-585 **方位** N-108°-E **規模と形状** 長辺5.32m・短辺4.72mで、わずかに縦長の長方形状。主軸は東西方向。**面積** 21.9㎡ **壁高** 60cm **重複** 6号住居より新しい。**床面** 掘り方に地山FAを含む土を埋めて床面構築。**壁溝** なし。**柱穴** 確認できず。**貯蔵穴** なし。**竈** 東壁の一番南寄りに位置する。袖はほとんどなく、燃烧部が壁外に張り出す。燃烧部の壁に竈材として礫を埋め込み、焚口



第155図 3-③区 5号住居 (1)

掘り方

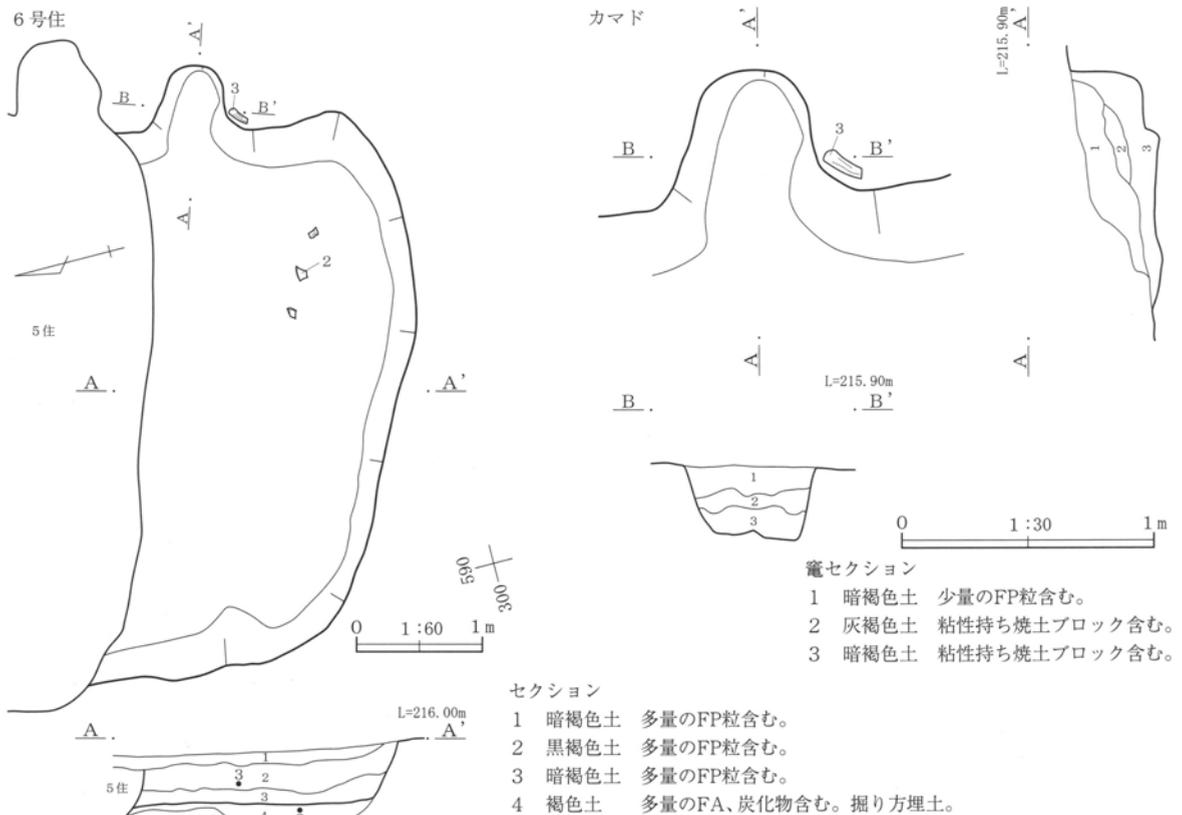


第156図 3-③区 5号住居 (2)

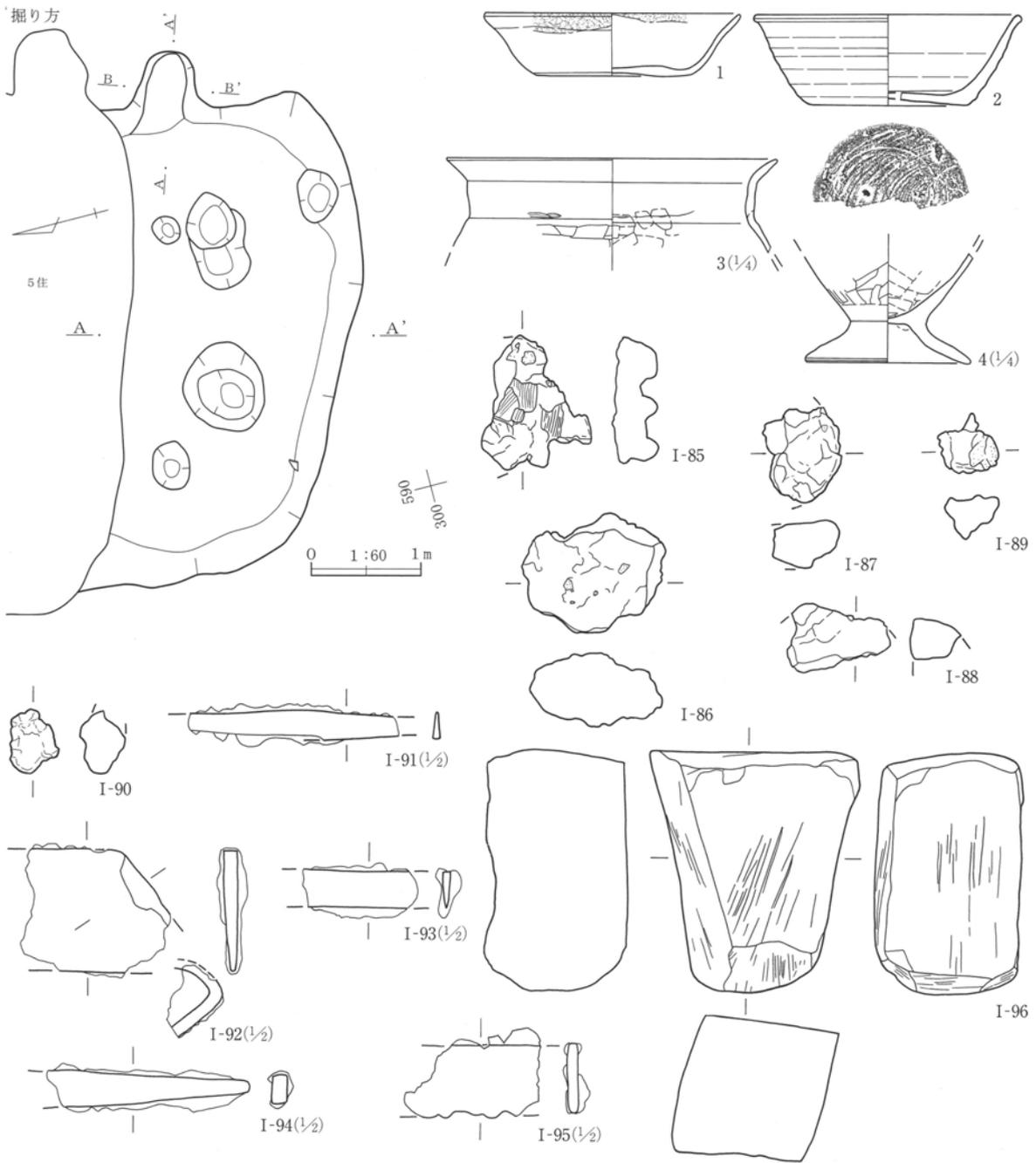
には、大型の円礫が天井石として据えられていた。**遺物** 重複する6号住居との覆土の差が明瞭でなかったため、覆土上半から出土した遺物については所属を明確にできなかった。遺構図に出土位置を記してある遺物は竈や床面近くに位置しており、本住居の遺物と考えて差し支えない。ただし、6号住居の遺物が混入している可能性は排除できない。9の須恵器壺は、竈の天井石の上からまとまって出土した。1の須恵器坏は掘り方内から見つかっている。他に須恵器壺、土師器甕などがある。また、覆土上位からの出土であるが、口縁と取っ手を欠いた灰釉陶器の手付瓶が得られている(10)。**所見** 出土遺物から、9世紀第4四半期に比定される。

3-③区6号住居

位置 300-585 **方位** N-115°-E **規模と形状** 北半を5号住居に切られているため、正確な規模、形状は不明。東西は現状で4.60m。 **面積** 計測不可 **壁高** 43cm **重複** 5号住居より古い。 **床面** 掘り方に地山FAを含む土を埋めて床面構築。 **壁溝** なし。 **柱穴** 確認できず。 **貯蔵穴** なし。 **竈** 東壁にあり。袖はなく、燃烧部は壁外に張り出す。 **遺物** 前述のように、住居覆土上位の遺物については、重複する5号住居との分離ができなかった。遺構図に位置を記載してある遺物は本住居に所属するものと判断できる。床面付近から須恵器坏(2)が、竈内から土師器甕(3)が出土している。この他に覆土中から土師器坏、小型台付甕などが得られている。また、炉内滓・椀形鍛冶滓・含鉄鉄滓・鎌・刀子・砥石などの鉄関連遺物が35点・1,636.4g出土した。ほとんどの鉄生産関連遺物は覆土からの出土であるため、周辺から混入したものと判断した。 **所見** 周辺から混入したと推定される炉内滓や椀形鍛冶滓などの鉄生産関連遺物から、本遺構周辺で製錬から鍛冶工程が行われていた可能性が高いと考えられる。遺物から、9世紀第3四半期に比定される。



第157図 3-③区 6号住居 (1)



第158図 3-③区 6号住居 (2)

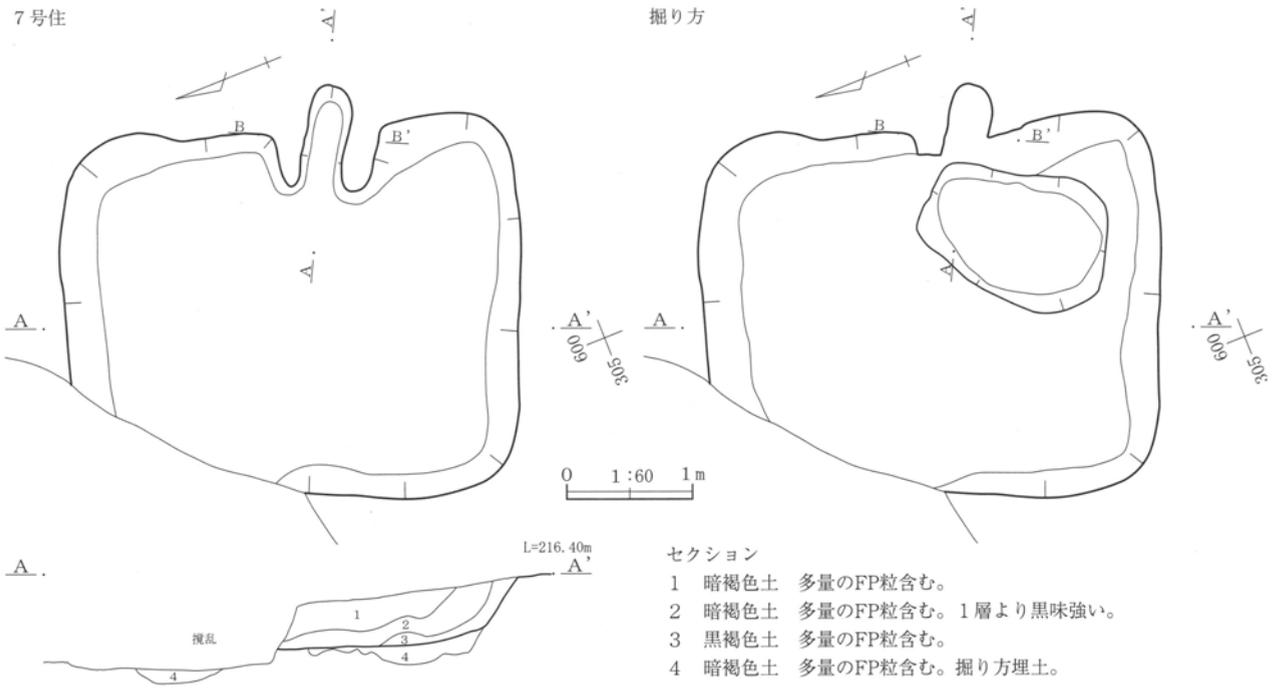
3-③区 7号住居

位置 305-595 **方位** N-110°-E **規模と形状** 北西隅を削平されているが、現状で長辺3.68m・短辺3.07m。横長の長方形で、長軸は南北方向。 **面積** 10.4㎡(推) **壁高** 53cm **重複** なし。 **床面** 掘り方に多量のFP粒含む土を埋めて床面構築。 **壁溝** なし。 **柱穴** 確認できず。 **貯蔵穴** なし。 **竈** 東壁の中央よりわずかに南側にあり。住居内に袖が作られ、燃焼部は一部壁の外に張り出す。 **遺物** 遺物量は少なく、住居の覆土中より少数の土器片などが出土。須恵器坏・蓋、土師器坏・甕などがある。また、含鉄鉄滓・鎌などの鉄関連遺物が8点・252.2g出土した。ほとんどの鉄生産関連遺物は覆土からの出土であるため、周辺から混入したものと判断した。 **所見** 遺物の年代より、9世紀前半と考えられる。

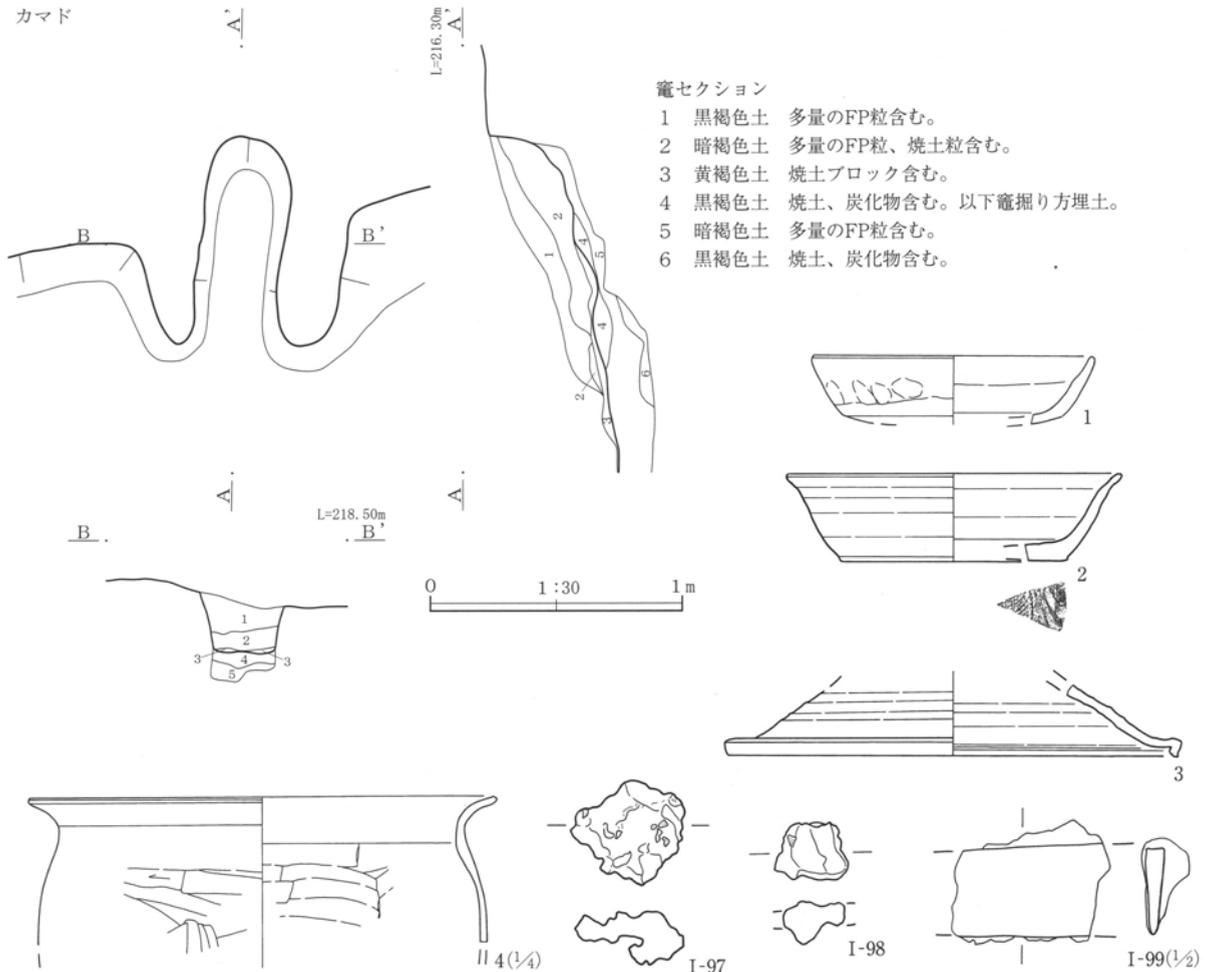
第4章 検出された遺構と遺物

7号住

掘り方



カマド

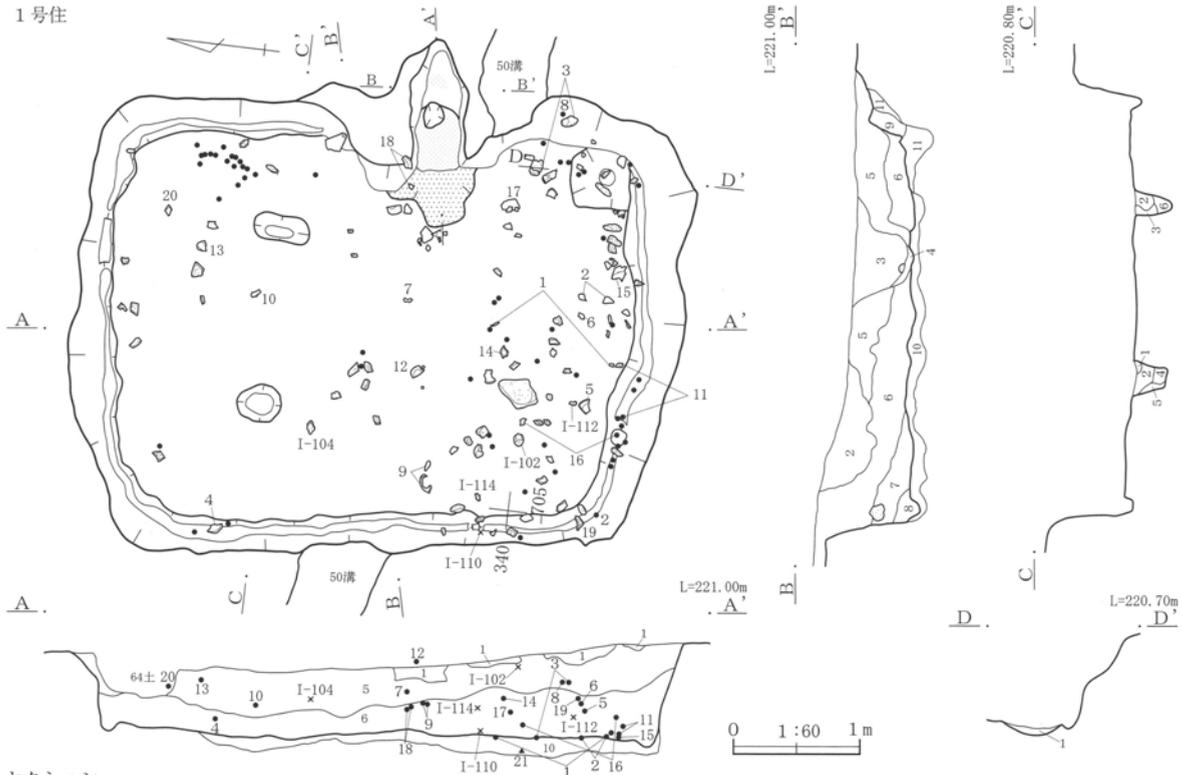


第159図 3-③区 7号住居

4区1号住居

位置 335-700 **方位** N-84°-E **規模と形状** 長辺4.95m・短辺4.10mの横長の長方形。長軸は南北方向。**面積** 16.0㎡ **壁高** 80cm **重複** なし。**床面** 地山のシルト質FA泥流を掘り込み、掘り方に泥流のシルト質土を埋め込んで床面を構築。床面の締まりは弱く、凹凸あり。**壁溝** ほぼ全周に深さ5~10cm程の溝が巡る。**柱穴** 住居北半で2基検出。柱穴1は45×20cmで深さ30cm。柱穴2は35×30cmで深さ25cm。掘り方で住居南西部分から1基見つかっているが、やや東により過ぎている。大きさは直径45cmの円形で深さ20cm。**貯蔵穴** 南東隅にごく浅い掘り込みを持つ土坑を検出。貯蔵穴の可能性あり。**竈** 住居東壁の中央より僅かに南側にあり。住居内に短い袖がつく。燃烧部の底面は焼けて赤化。**遺物** 比較的多くの遺物が住居内に散在する。竈右脇の床面上から3、南壁際の床面上から1・2の土師器坏と11の須恵器坏が出土している。この他に須恵器蓋・瓶、土師器甕・小型甕などがある。また、炉内滓・碗形鍛冶滓・含鉄鉄滓・鉄塊系遺物・再結合滓・鉄製品などの鉄関連遺物が47点・2,017.1g出土した。住居南西部の床面上に扁平な大型の礫が据え付けられている。**所見** 鉄生産関連遺物のほとんどは覆土からの出土であるが、鉄床石と思われる扁平な大型の礫が据えられており、本遺構自体が鍛冶工房であった可能性も考えられる。本調査か

1号住



セクション

- 1 黒褐色土 軽石やや多く含む。
- 2 褐灰色 軽石多くやや有機質。
- 3 にぶい黄褐色土 軽石やや多く含む。木質多く含む。
- 4 黒色土 木炭の小片と粒を主体とする。
- 5 にぶい黄褐色土 軽石やや多く含む。
- 6 にぶい黄褐色土 軽石やや多く含む。部分的にFP軽石塊混入。
- 7 灰黄褐色土 軽石多く含む。
- 8 にぶい黄褐色土 軽石主体。
- 9 にぶい褐色土 FAシルトブロック。竈袖部分か。
- 10 明褐灰色土 FAシルト主体で軽石多く含む。
- 11 にぶい黄褐色土 軽石やや多い。

柱穴セクション (C-C'・E-E')

- 1 にぶい黄褐色土 木炭多く含む。
- 2 にぶい黄褐色土 木炭僅かに含む。粗粒。
- 3 にぶい黄褐色土 軽石多い。
- 4 黒褐色土 FAシルト塊含む。粗粒。
- 5 にぶい黄褐色土 FAシルトブロック含みやや締まる。
- 6 にぶい黄褐色土 FP・FAシルト含み締まり良。
- 7 にぶい黄褐色土 FP・FAシルト含み締まり悪い。

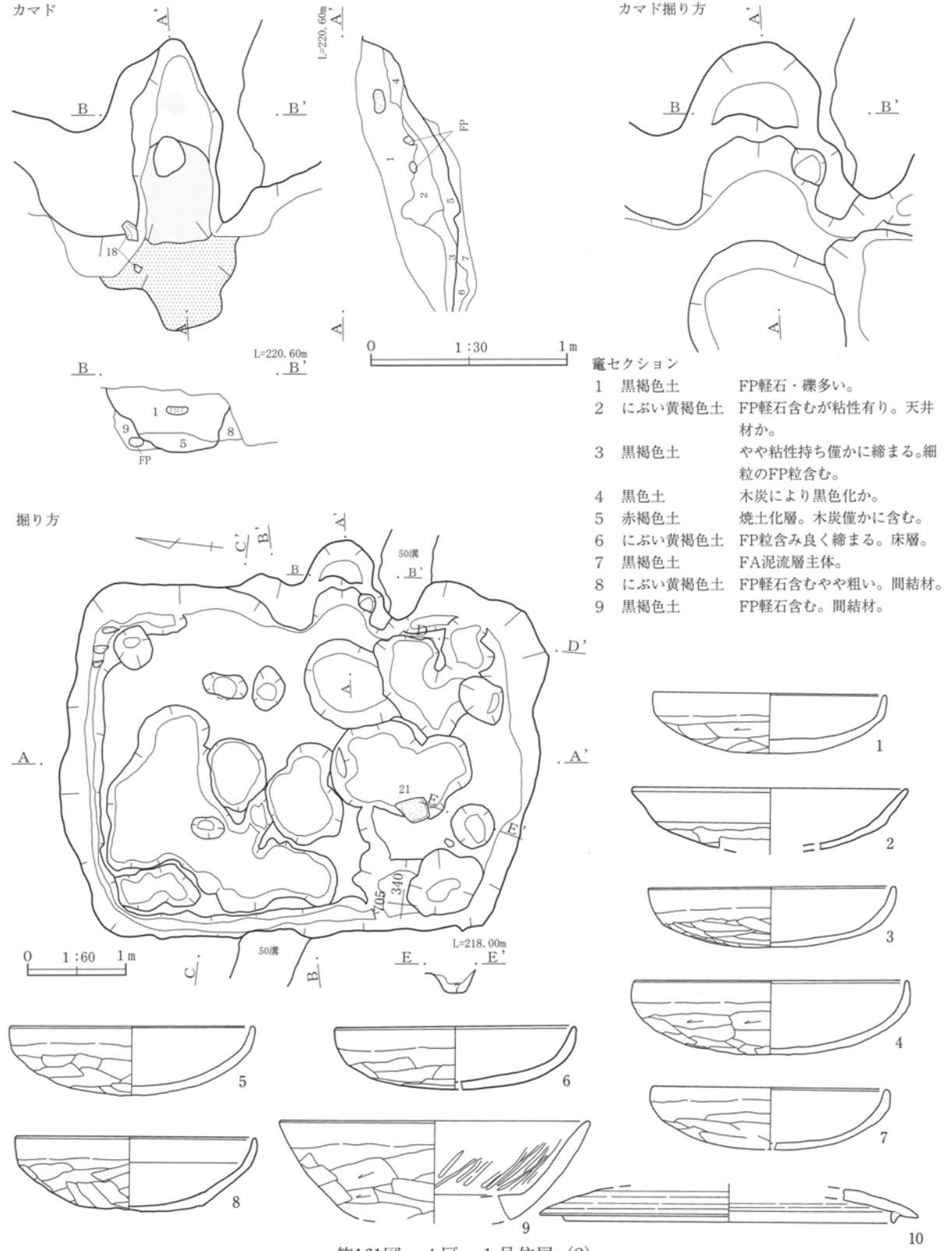
貯蔵穴セクション (D-D')

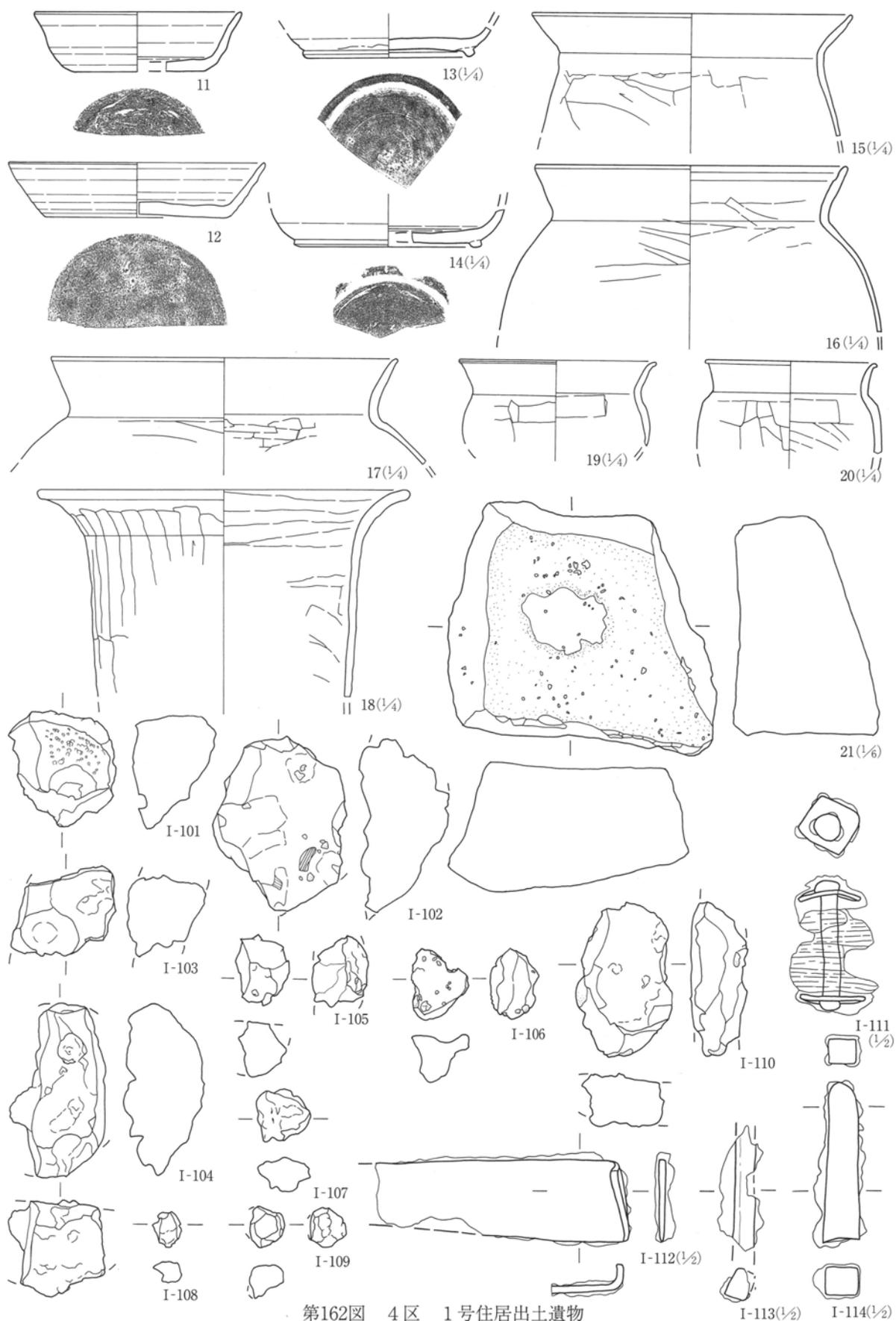
- 1 褐色土 少し粘性持つ。

第160図 4区 1号住居 (1)

第4章 検出された遺構と遺物

ら粒状滓・鍛造剥片といった微細遺物や鍛冶炉が確認できないため、詳細は不明である。炉内滓や椀形鍛冶滓などの鉄生産関連遺物から、本遺構周辺で製錬から鍛冶工程が行われていた可能性が高いと考えられる。遺物の年代から、8世紀前半の住居と考えられる。

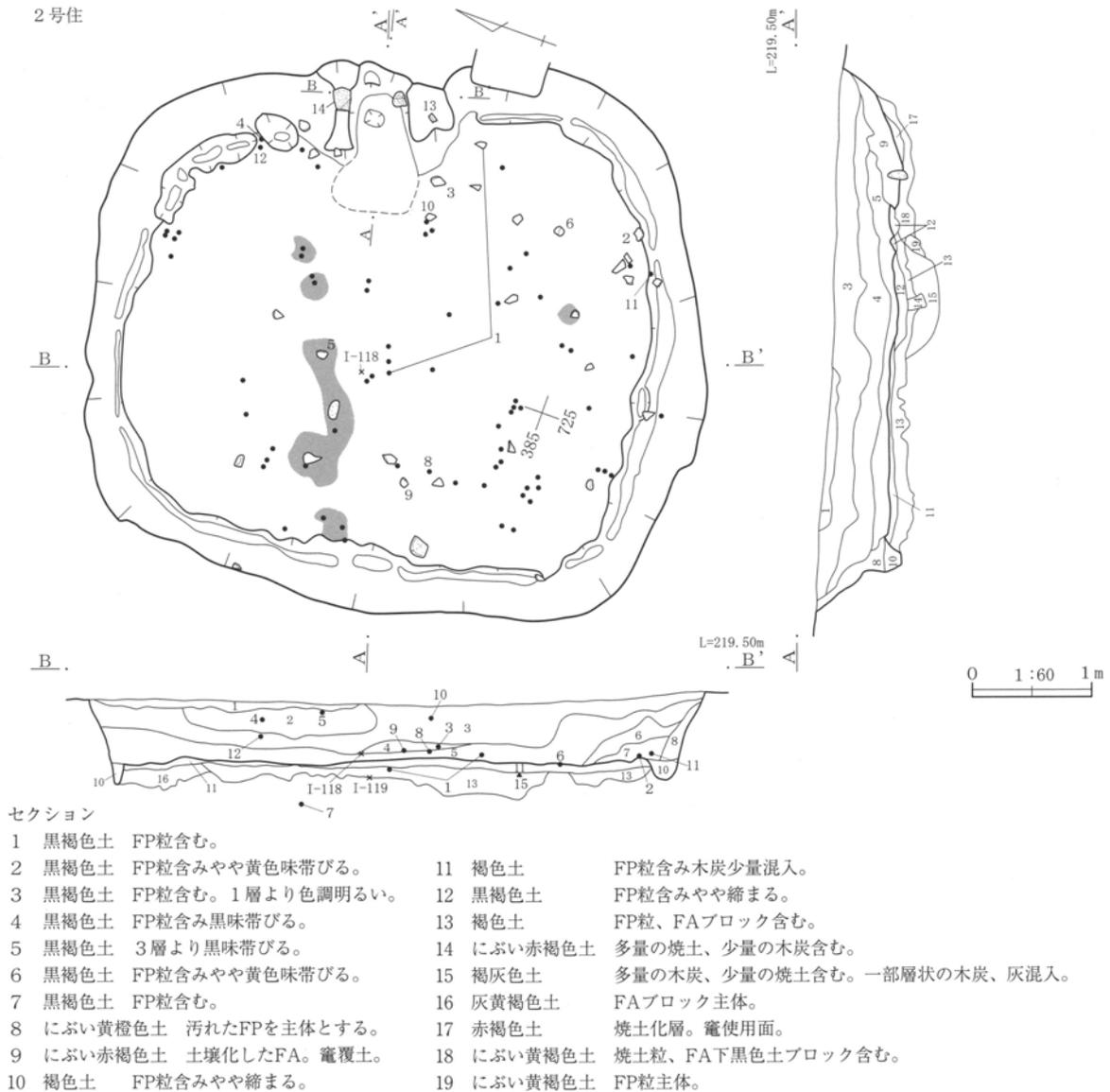




第162図 4区 1号住居出土遺物

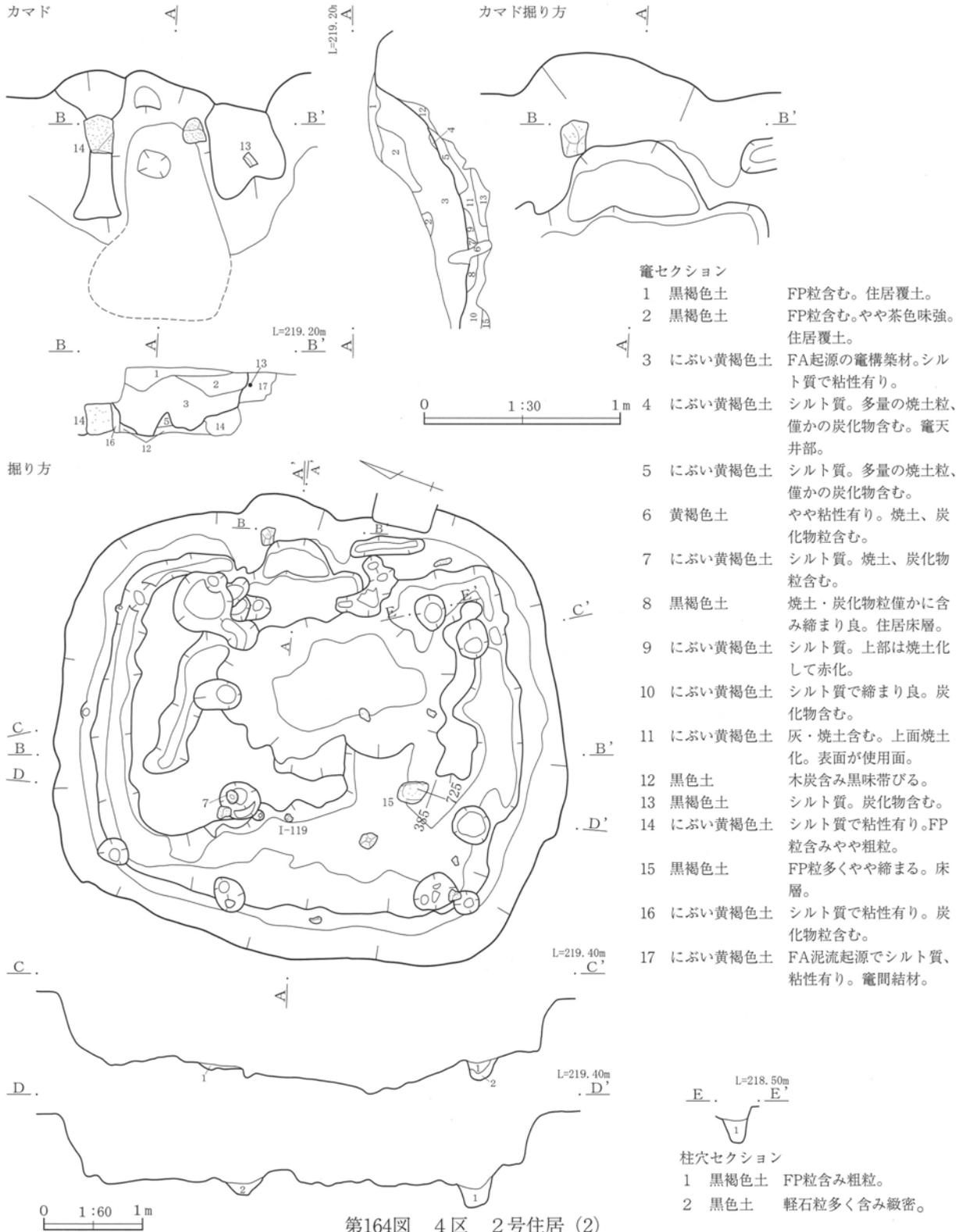
4区2号住居

位置 385-720 **方位** N-74°-E **規模と形状** 長辺5.24m・短辺4.56mのやや横に長い長方形。長軸は南北方向。**面積** 20.5㎡ **壁高** 56cm **重複** なし。**床面** 掘り方に地山FP、FAを含む土を埋め、床面を構築。床上面はやや締まる。**壁溝** ほぼ全周に深さ7~15cm程度の溝が巡る。**柱穴** 掘り方で柱穴の可能性のあるピットが5基見つかった。位置はかなり南にずれており、北側と南側で柱穴間の距離にかなり開きがある。**貯蔵穴** なし。**竈** 住居東壁のほぼ中央に位置する。住居内に袖が張り出し、袖の根本部分の両脇に石が据えられている。このうち左側の石は、二ツ岳軽石を角柱状に整形したものを利用している(14)。燃烧部には支脚の抜き取り痕と思われる小穴あり。地山のFA泥流を構築材として使用している。**遺物** 比較的多くの遺物が床面から覆土上位にかけて分布。床面上から須恵器坏(6)、土師器坏(1・2)が、掘り方のピット内から完形の須恵器坏(7)が出土している。この他に、須恵器碗・蓋、土師器甕がある。また、炉内滓・椀形鍛冶滓・含鉄鉄滓・鉄塊系遺物・鉄製品などの鉄関連遺物が124点・3,300.6g出土した。住居南西部の床面上に扁平な大型の礫が据え付けられている。**所見** 鉄生産関連遺物のほとんどは覆土からの

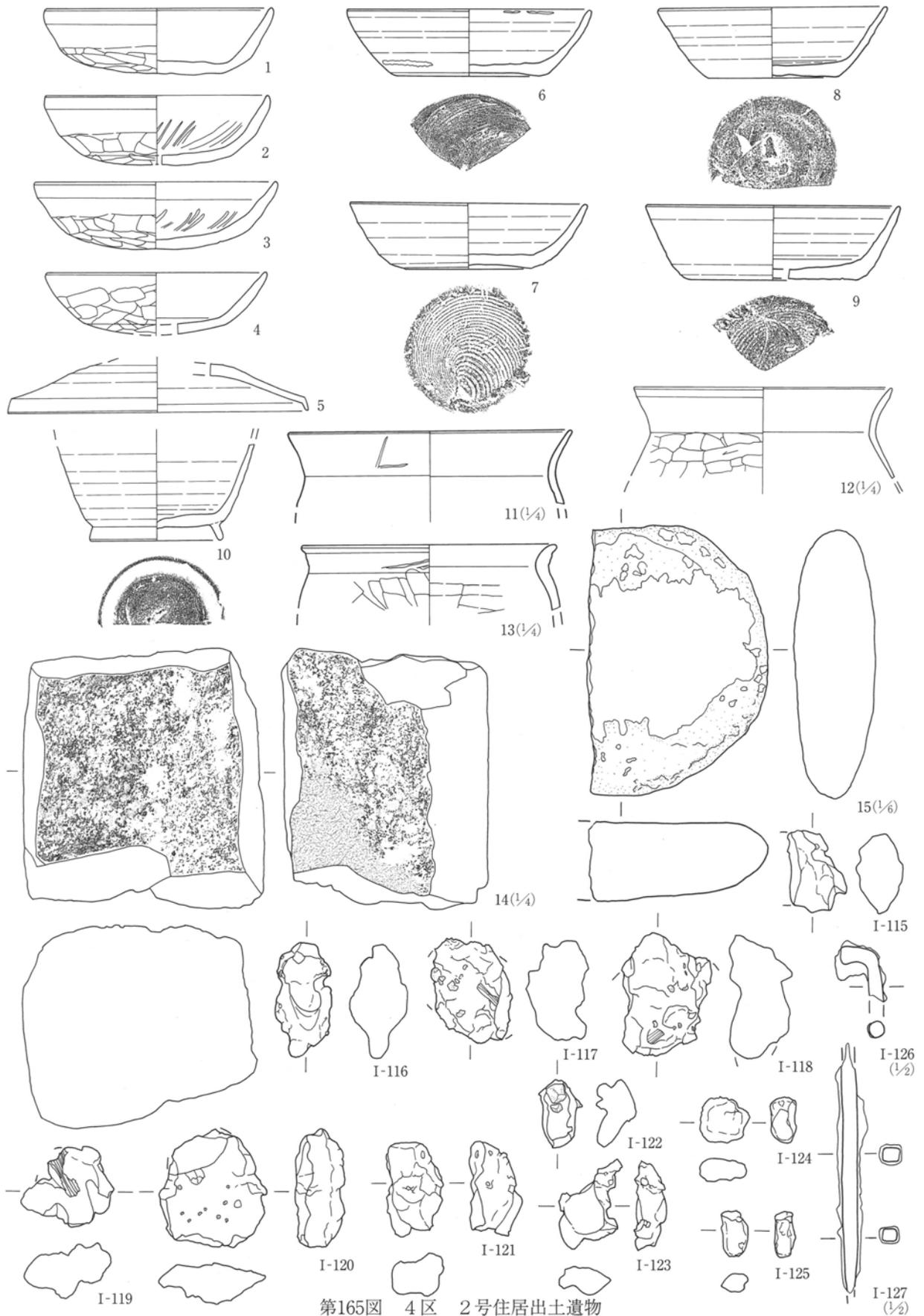


第163図 4区 2号住居 (1)

出土であるが、鉄床石と思われる扁平な大型の礫が据えられており、4区1号住居と同様に本遺構自体が鍛冶工房であった可能性も考えられる。本調査から粒状滓・鍛造剥片といった微細遺物や鍛冶炉が確認できないため、詳細は不明である。炉内滓や椀形鍛冶滓などの鉄生産関連遺物から、本遺構周辺で製錬から鍛冶工程が行われていた可能性が高いと考えられる。出土遺物から、8世紀後半に比定される。



第4章 検出された遺構と遺物

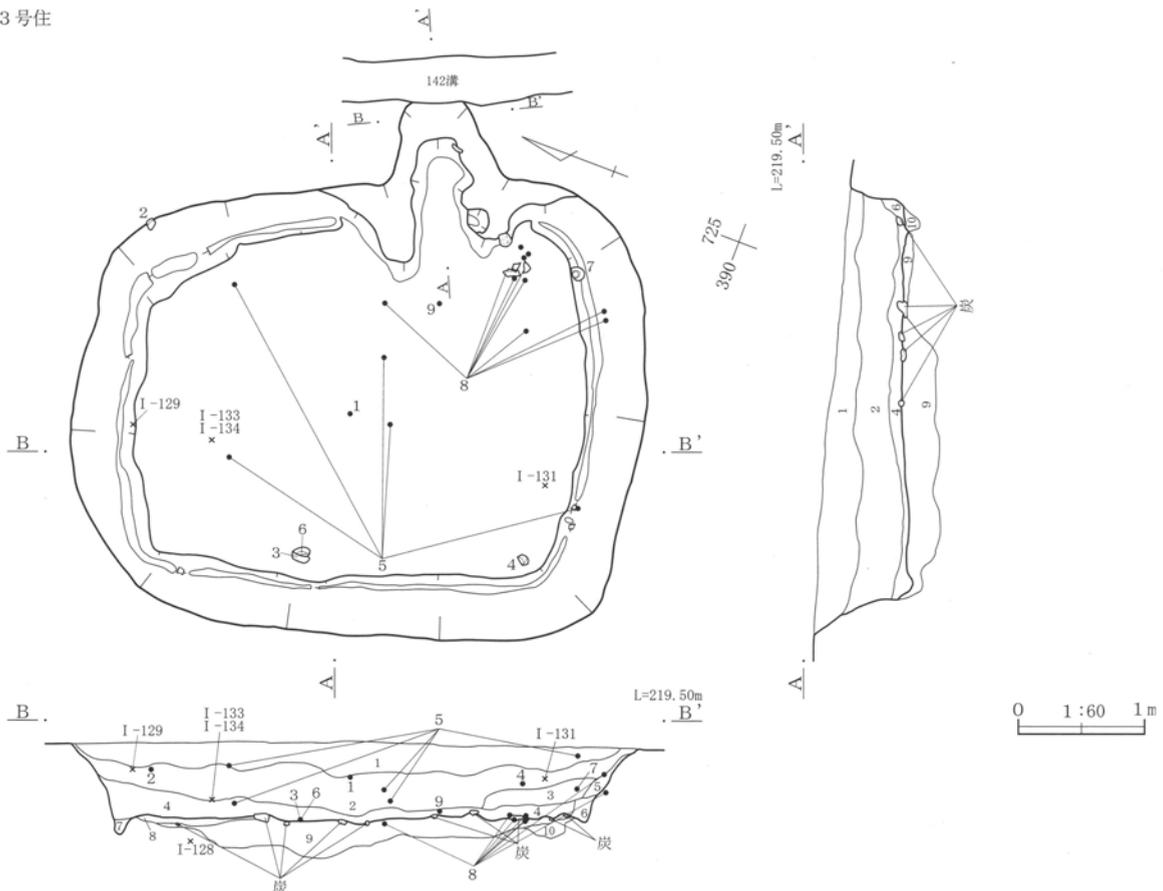


第165図 4区 2号住居出土遺物

4区3号住居

位置 390-725 **方位** N-70°-E **規模と形状** 長辺4.56m・短辺3.58mのやや横に長い長方形。長軸は南北方向。**面積** 14.2㎡ **壁高** 62cm **重複** なし。**床面** 掘り方に黒褐色土を埋め床面を構築。床上面に木炭片多数見られる。**壁溝** ほぼ全周に深さ5~10cm程度の溝が巡る。**柱穴** 確認されなかった。**貯蔵穴** なし。**竈** 東壁の南寄りにあり。住居内に袖が造られ、燃烧部は一部壁外に張り出す。使用面は熱により赤化。向かって右側の袖に、石を抜き取った痕跡あり。**遺物** 多量の炭化物が床面上に分布していた。その炭化物に混入して床面上に遺物が散在。西壁際では須恵器の坏(3)と埴(6)が重なった状態で出土。また、竈付近の床面上より土師器甕(8)が出土している。この他に須恵器蓋、土師器坏などがあるが、いずれも炭化物よりも上位に位置していた。また、炉内滓・椀形鍛冶滓・含鉄鉄滓・鍛冶滓・鉄塊系遺物などの鉄関連遺物が39点・940.5g出土した。ほとんどの鉄生産関連遺物は覆土からの出土であるため、周辺から混入したものと判断した。遺物は製錬系のものが主体である。**所見** 材の形状を残した炭化物が多量に分布することから、焼失住居と考えられる。また、1点ではあるが掘り方埋土からも小型で全面破面の炉内滓(I-128)が出土していることから、本遺構廃絶以前から、周辺で製錬から小割り、鍛冶工程が行われていた可能性が高い。床面付近の遺物から、8世紀後半に比定される。

3号住



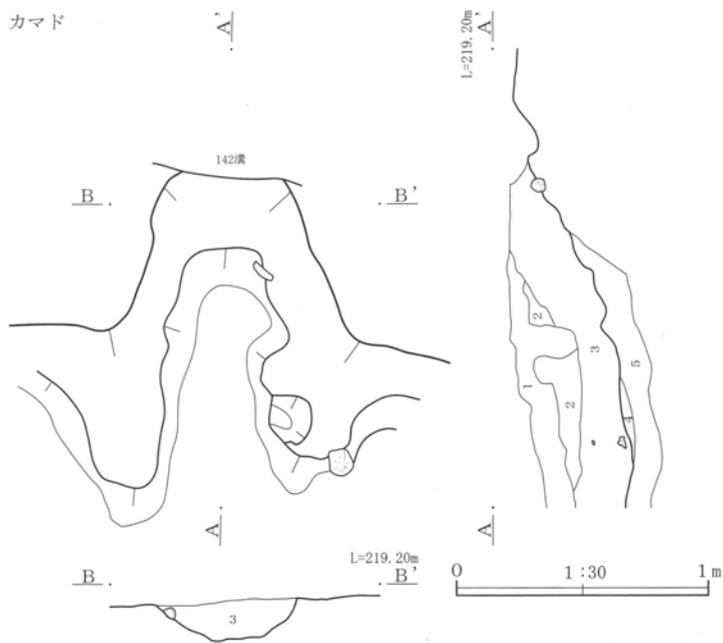
セクション

- | | |
|------------------------|------------------------------------|
| 1 黒褐色土 FP粒多く含む。 | 6 にぶい黄橙色土 FPを主体とする。 |
| 2 黒褐色土 FP粒多く、やや茶色味帯びる。 | 7 にぶい黄橙色土 砂質で多量のFP含む。 |
| 3 黒褐色土 2にFPブロック混入。 | 8 にぶい黄橙色土 少量のFP軽石、多量のFAシルト含み締まり良。 |
| 4 褐色土 少量のFP粒含み、締まりやや良。 | 9 黒褐色土 上面層状に炭化物多く含む。 |
| 5 黒褐色土 少量のFP含む。 | 10 にぶい黄橙色土 FA泥流の砂と粘質土塊混入。FP軽石多く含む。 |

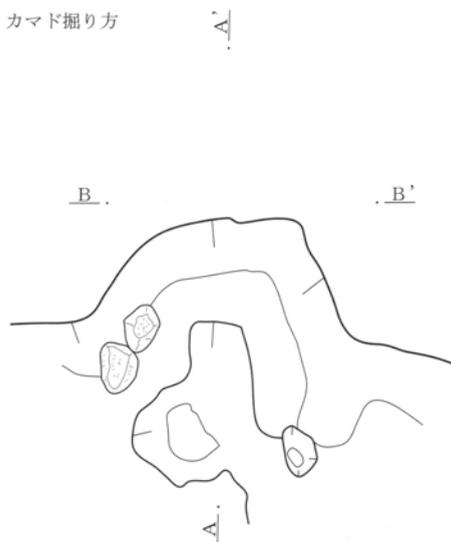
第166図 4区 3号住居 (1)

第4章 検出された遺構と遺物

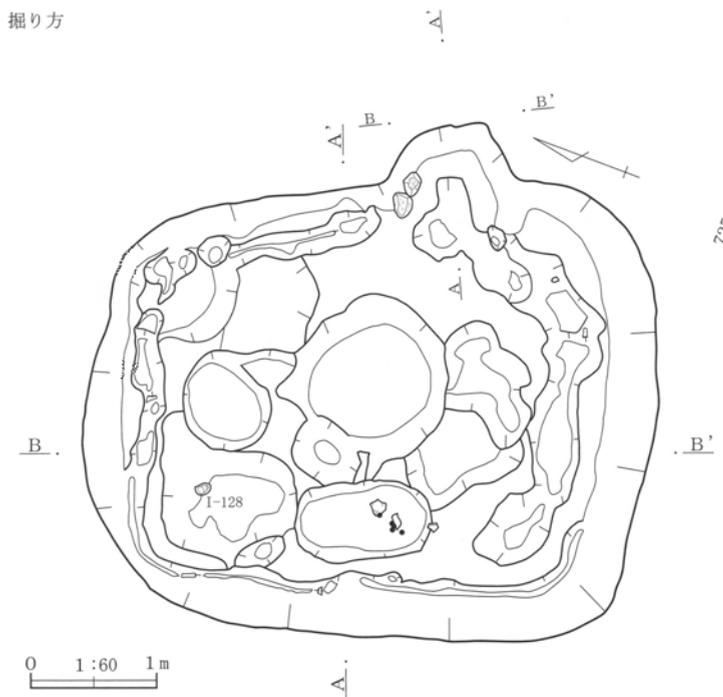
カマド



カマド掘り方

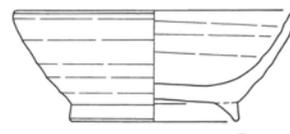
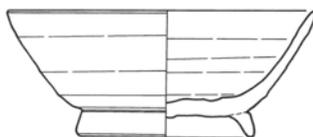
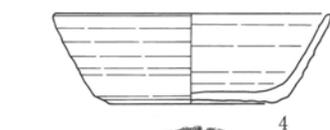
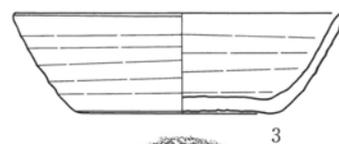
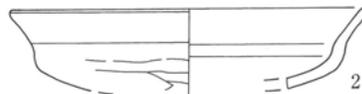


掘り方

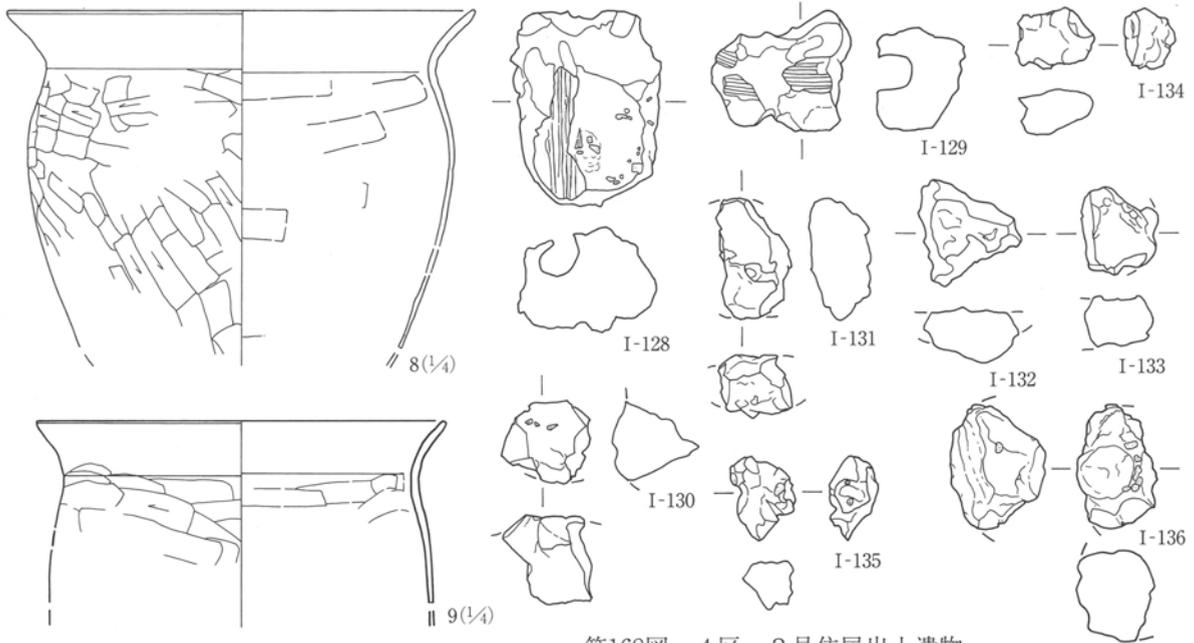


竈セクション

- 1 黒褐色土 粗粒でFP軽石含む。
- 2 黒褐色土 1層より茶色味帯びる。
- 3 灰黄褐色土 FP、焼土含み緻密。下層に炭化物塊あり。
- 4 灰黄褐色土 焼土含み締まり良。床層。
- 5 灰黄褐色土 シルト質。



第167図 4区 3号住居 (2)

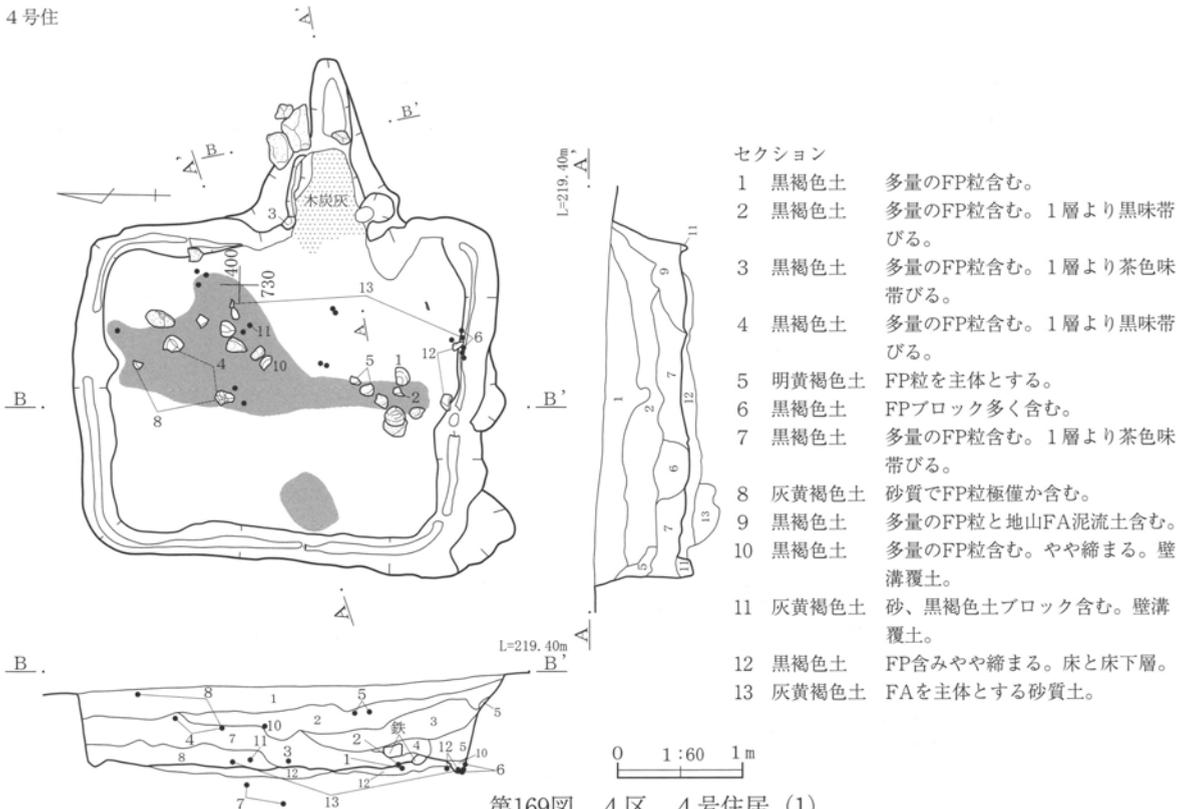


第168図 4区 3号住居出土遺物

4区4号住居

位置 395-730 **方位** N-91°-E **規模と形状** 長辺3.35m・短辺2.80mの横に長い長方形。長軸は南北方向。**面積** 8.4㎡ **壁高** 68cm **重複** なし。**床面** 掘り方にFP混じりの黒褐色土を埋めて構築。表面はやや締まる。**壁溝** ほぼ全周に深さ5~12cmほどの溝が巡る。**柱穴** 床面では確認できなかったが、掘り方で柱穴の可能性のある浅いピットを1基検出。位置は南壁際のほぼ中央。**貯蔵穴** 床面では確認できず。掘り方で、南東隅から貯蔵穴の可能性のある浅い土坑を検出。**竈** 東壁の中央よりやや南寄りに位置

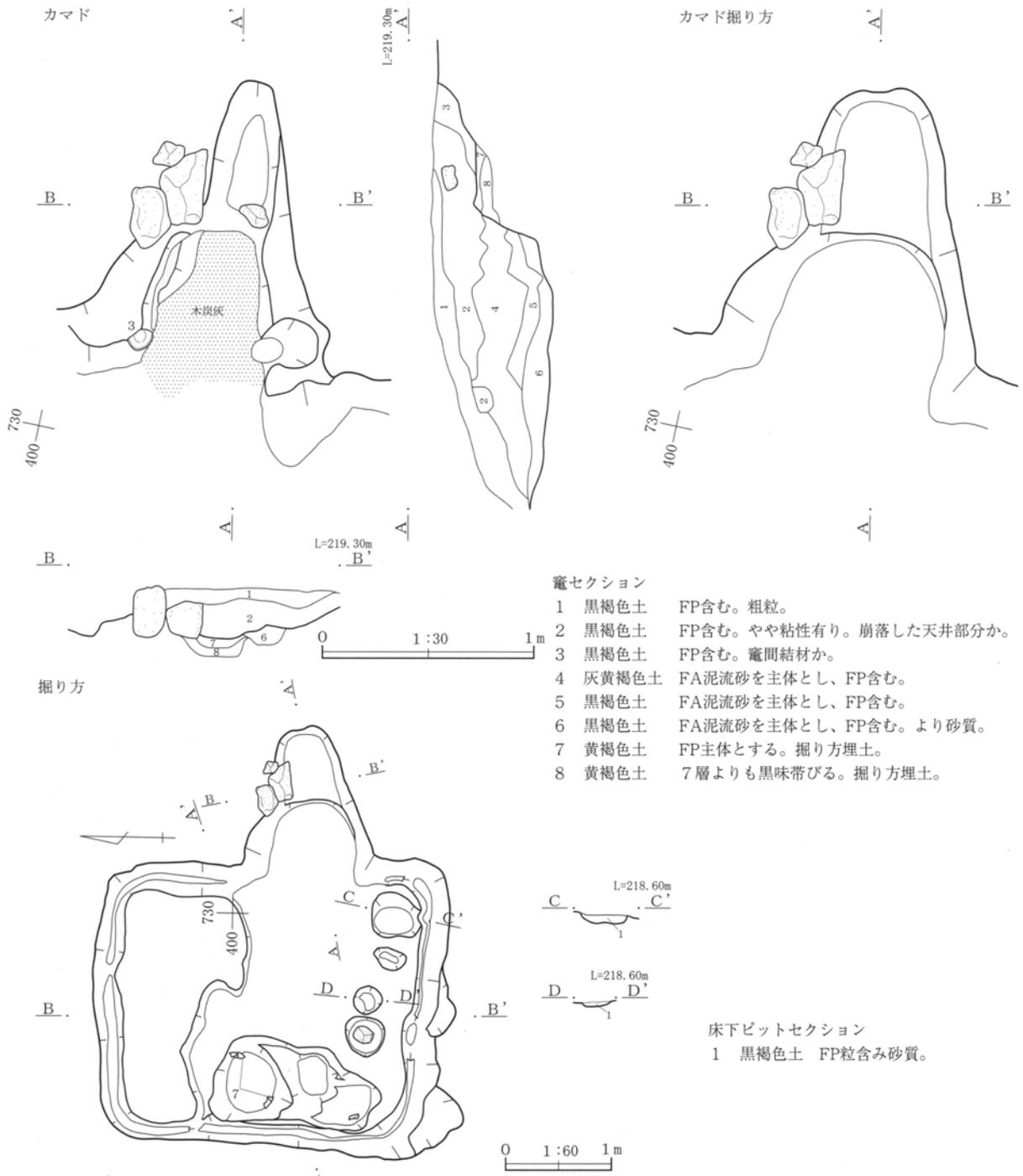
4号住



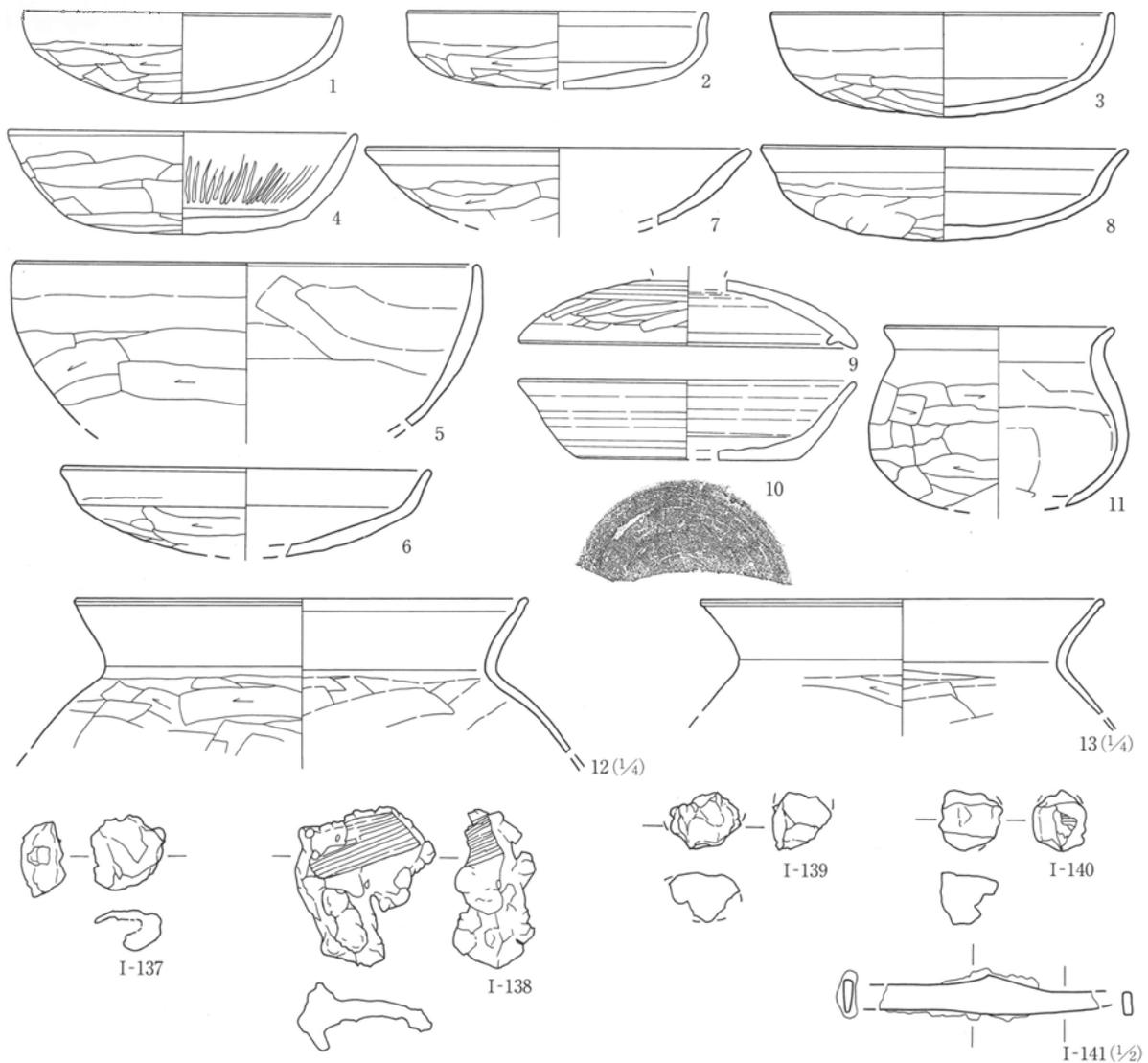
第169図 4区 4号住居 (1)

第4章 検出された遺構と遺物

置する。右側のみ住居内に短い袖が造られているが、燃烧部は壁外に張り出す。焚口付近の右側に、袖部の石を抜き取った痕跡あり。 **遺物** 住居南壁付近の床面上から、土師器坏(1・2)・盤(6)・甕(12・13)が出土。7の土師器盤は、掘り方内から見つかった。この他に覆土中より須恵器坏・蓋、土師器小型甕が出土している。また、炉内滓・鍛冶滓・鉄塊系遺物・鉄製品などの鉄関連遺物が9点・226.9g出土した。鉄生産関連遺物は覆土からの出土であるため、周辺から混入したものと判断した。遺物は製錬系のものが主体である。 **所見** 炉内滓や鍛冶滓などの鉄生産関連遺物から、本遺構周辺で製錬から鍛冶工程が行われていた可能性が高いと考えられる。床面付近の遺物の年代から、8世紀前半に位置付けられる。



第170図 4区 4号住居(2)



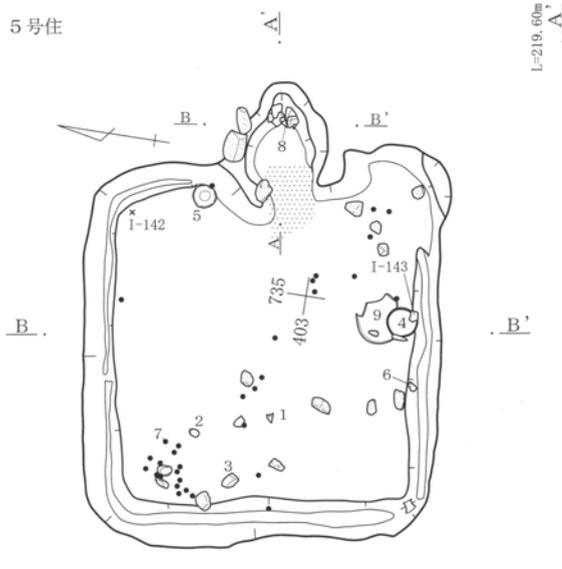
第171図 4区 4号住居出土遺物

4区5号住居

位置 430-735 **方位** N-83°-E **規模と形状** 長辺3.17m・短辺2.83mの方形で、僅かに縦に長い。長軸は東西方向。 **面積** 8.4㎡ **壁高** 47cm **重複** なし。 **床面** 掘り方にFP混じりの灰黄褐色土を埋めて床面を構築。表面はあまり硬化しておらず、凹凸あり。 **壁溝** 竈の右脇を除いて溝が巡る。 **柱穴** 確認できず。 **貯蔵穴** なし。 **竈** 東壁中央にあり。燃烧部は壁外に張り出し、住居内に短い袖が作られる。袖の下には周溝の端部が確認でき、周溝を掘り上げた後に袖を作っていることが分かる。燃烧部左側には構築材と思われる礫があり、奥からは土師器甕(8)の破片がまとまって出土した。 **遺物** 竈の左脇と南壁際の床面上から完形の須恵器蓋が出土している(4・5)。南壁際の蓋の下には、須恵器の大甕の底部破片が埋まっていた(9)。この他に須恵器坏、土師器坏が出土している。また、炉内滓・鉄製品などの鉄関連遺物が44点・1,899.2g出土した。ほとんどの鉄生産関連遺物は覆土からの出土であるため、周辺から混入したものと判断した。遺物は製錬系のもので主体である。 **所見** 細かく割られた炉内滓などの鉄生産関連遺物から、本遺構周辺で製錬から小割り作業が行われていた可能性が高いと考えられる。床面上の遺物から、住居の年代は9世紀初頭と考えられる。

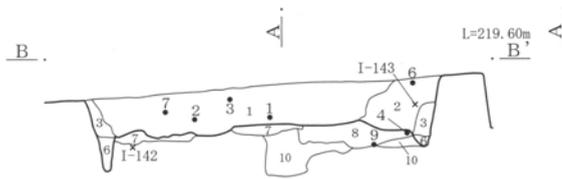
第4章 検出された遺構と遺物

5号住

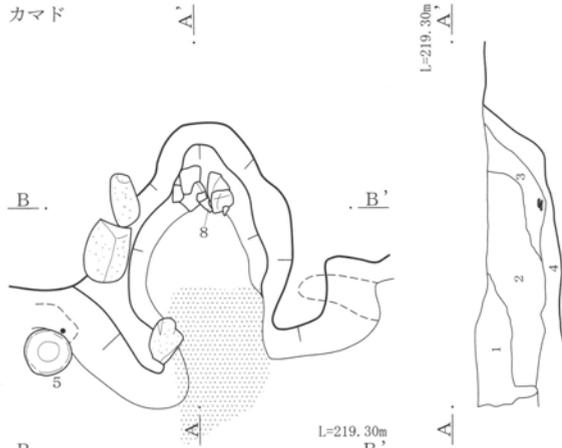


セクション

- 1 黒褐色土 FP粒多く含み粗粒。
- 2 黒褐色土 1層よりやや茶色味帯びる。
- 3 にぶい黄褐色土 汚れたFP軽石主体。
- 4 黒褐色土 FP粒多く含みやや砂質。竈覆土。
- 5 黒褐色土 FP粒少量含みやや砂質。竈覆土。
- 6 灰黄褐色土 FP粒含む。やや軟質。
- 7 灰黄褐色土 FP粒含む。床層。
- 8 灰黄褐色土 FP粒、黒褐色土ブロック含む。やや締まる。
- 9 灰黄褐色土 FP粒、FAシルトブロック含む。
- 10 灰黄褐色土 多量のFP粒含み締まり良。
- 11 黒褐色土 FP粒少なく、やや締まる。竈掘り方埋土。



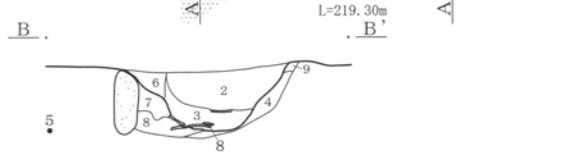
カマド



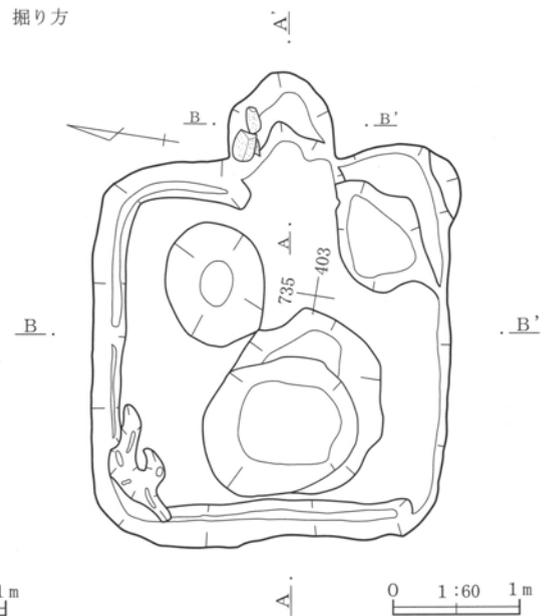
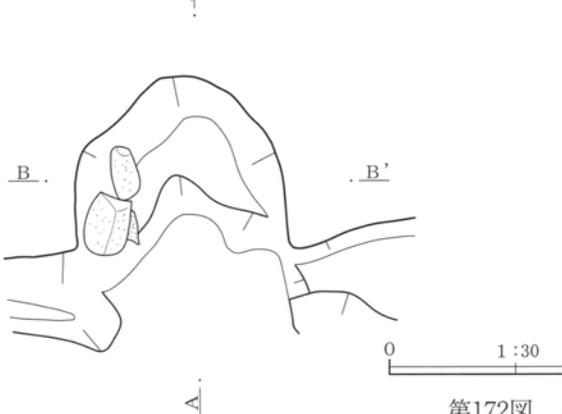
竈セクション

- 1 黒褐色土 FP粒多い。
- 2 黒褐色土 FP粒多い。やや砂質。
- 3 黒褐色土 FP粒少ない。やや砂質。
- 4 黒褐色土 FP粒少なく、やや締まる。
- 5 黒褐色土 FP粒少なく、やや粗粒。
- 6 黒褐色土 FP粒少なく、やや粗粒。やや黒味帯びる。
- 7 黒褐色土 FP粒多い。
- 8 7層より黒味強い。
- 9 黒褐色土 FP粒多い。

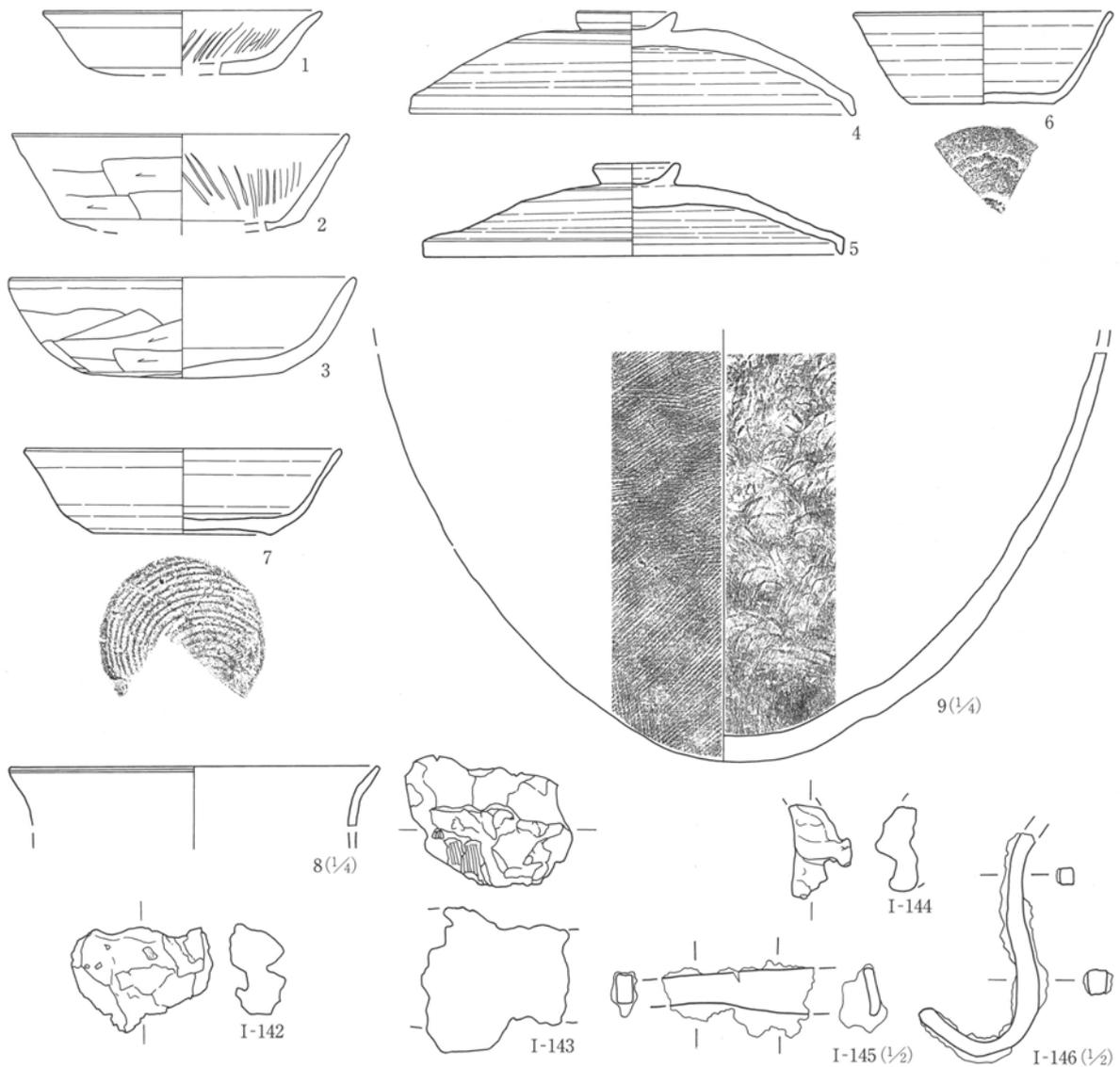
掘り方



カマド掘り方



第172図 4区 5号住居

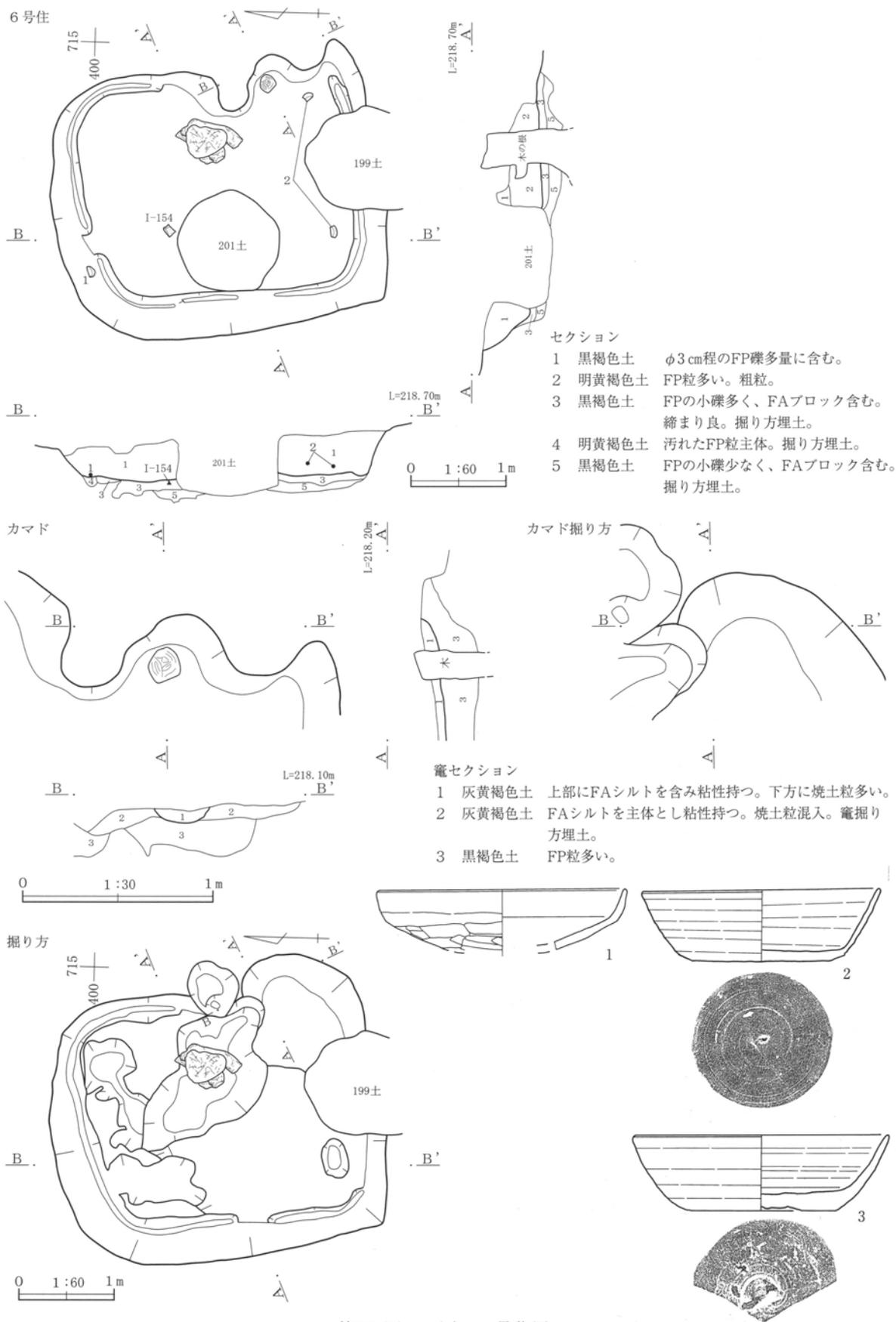


第173図 4区 5号住居出土遺物

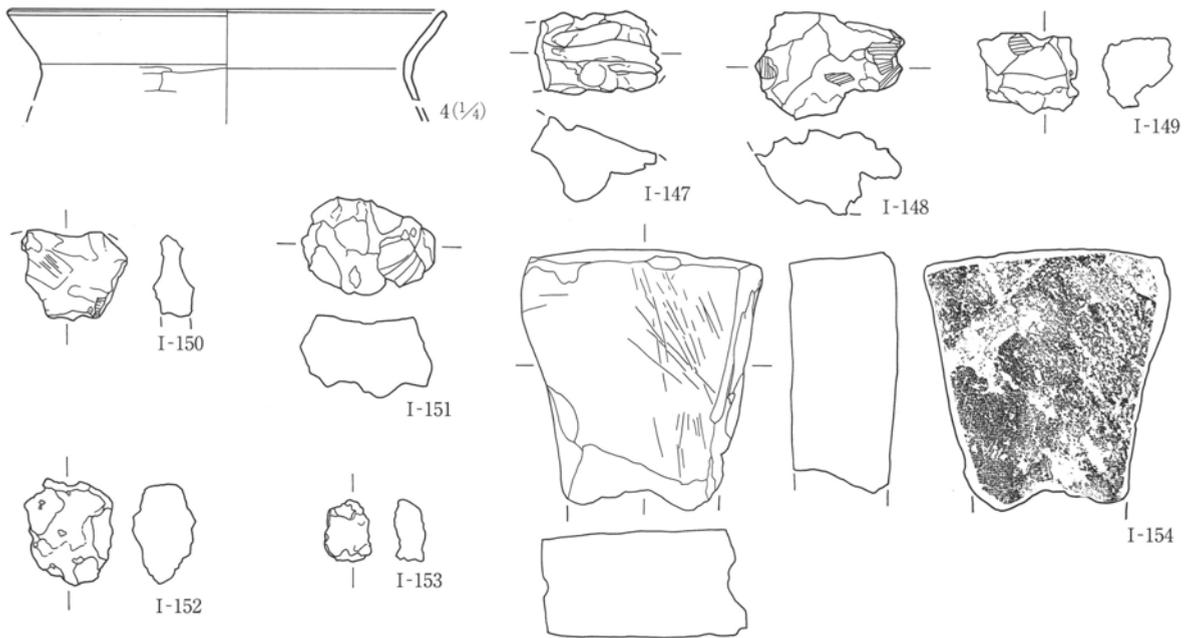
4区6号住居

位置 395-715 **方位** N-81°-E **規模と形状** 長辺3.51m・短辺2.81mで横方向が長い長方形。長軸は南北方向。 **面積** 9.1㎡ **壁高** 48cm **重複** 一部近世土坑に切られる。 **床面** 掘り方にFP軽石、FAブロック含む黒褐色土を埋めて床面を構築している。住居内に立木があったが床面の遺存状態は比較的
 良好で、確認できた範囲では床面は硬く締まっていた。 **壁溝** ほぼ全周に幅15cm、深さ5cmほどの浅い溝が巡っていた。 **柱穴** 確認できなかった。 **貯蔵穴** なし。 **竈** 東壁の南端に位置していた。上部を削平されていたため残存状態は悪く、燃烧部の底面が残っていた程度である。 **遺物** 北西隅の床面上から土師器坏(1)が、床面からやや浮いた状態で須恵器坏(2)が出土している。この他に、覆土中より須恵器坏や土師器甕が出土している。また、炉内滓・含鉄鉄滓などの鉄関連遺物が33点・725.2g出土した。ほとんどの鉄生産関連遺物は覆土からの出土であるため、周辺から混入したものと判断した。遺物は製錬系のものが主体である。 **所見** 細かく割られた炉内滓などの鉄生産関連遺物から、本遺構周辺で製錬から小割り作業が行われていた可能性が高いと考えられる。8世紀後半か。

第4章 検出された遺構と遺物



第174図 4区 6号住居



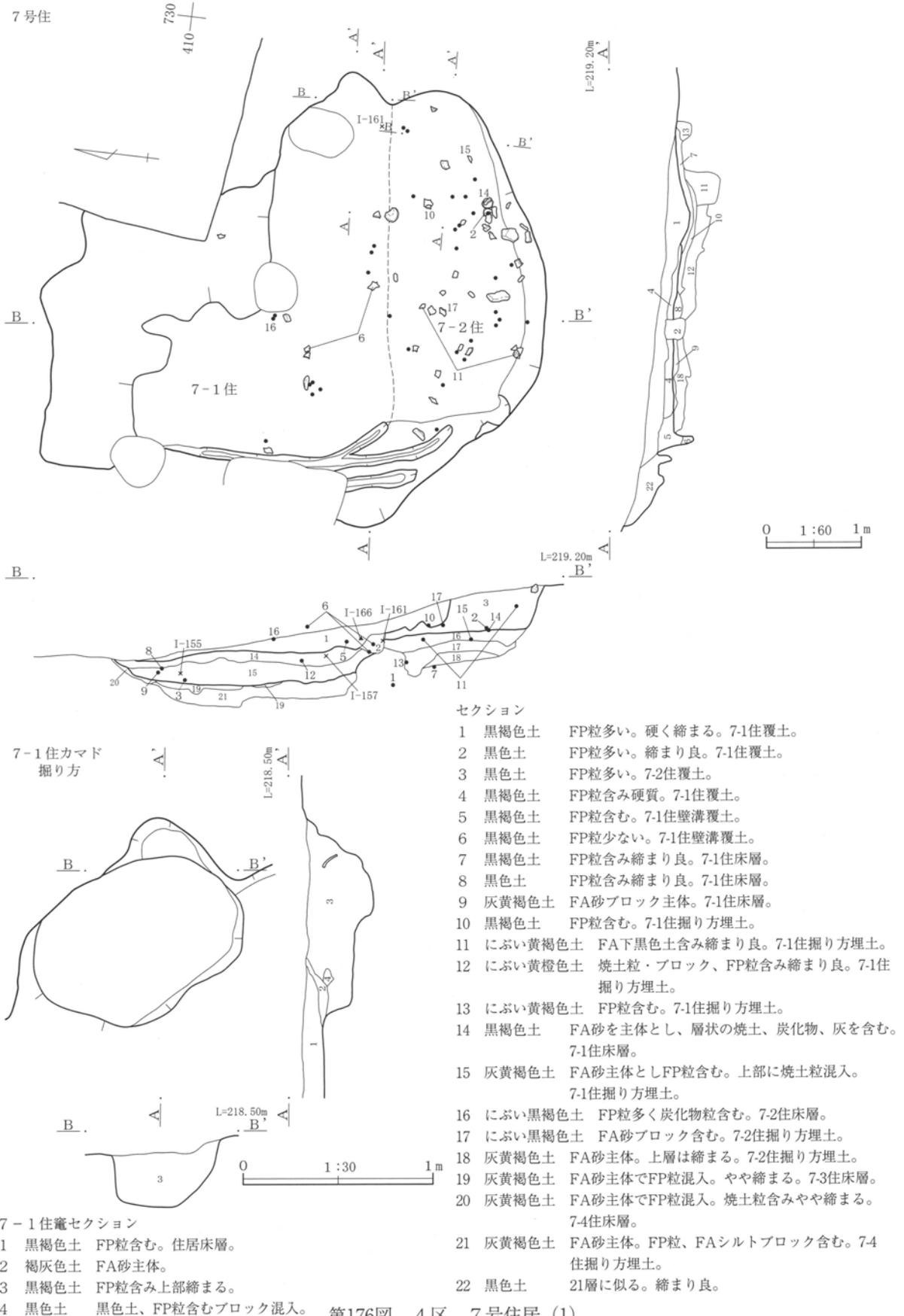
第175図 4区 6号住居出土遺物

4区7号住居

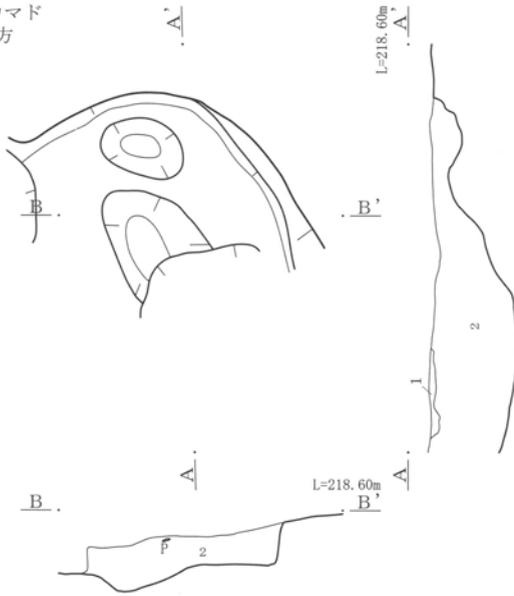
位置 405-730 **方位** N-85°-E **規模と形状** 削平が激しく不明。 **面積** 計測不可 **壁高** 45cm

重複 4軒の住居が重複。新しい方から7-1、2、3、4号住居とする。 **床面** 4軒重複しているため、4枚の床面を確認。いずれも掘り方にFAやFP粒を含む土を埋め、床面を構築。 **壁溝** 西壁で3本の壁溝を確認。このうち一番内側のものが7-1号住居に伴うものと考えられる。 **柱穴** 確認できなかった。 **貯蔵穴** なし。 **竈** 東壁南半に2基並んでいたが、削平され掘り方を残すのみ。2基のうち北側が7-1、南側が7-2号住居に伴うものと判断した。 **遺物** 比較的残りのいい住居南側と掘り方から遺物が出土。遺物の大半は覆土中や掘り方からの出土で、確実に各々の住居に伴うと判断できる遺物は少ない。このうち第178図の11・14・15の須恵器坏は7-2号住居の床面上に位置し、接合もこの住居内でおさまる。また7の土師器坏と13の須恵器坏は、想定される7-2号住居の掘り方内に位置しており、7-2号住居の遺物と判断した。また、炉底塊・炉内滓・含鉄鉄滓・鉄塊系遺物・砥石などの鉄関連遺物が131点・3,860.8g出土した。ほとんどの鉄生産関連遺物は覆土からの出土であるため、周辺から混入したものと判断した。遺物は製錬系のものが主体である。 **所見** 調査段階で複数の住居が重複していることは認識していたが、北西側が大きく削平され、新旧を確認しながらの調査は困難であった。古い方の2軒(7-3、4号住居)は新しい住居に壊され、土層断面での確認にとどまる。遺物は8世紀前半(1~6)と9世紀初頭(7~17)の2時期に分けられるが、出土位置は入り乱れ、それぞれの土器がどの住居に属していたかを判断するのは困難である。手がかりとなるのは7-2号住居の床面上から出土した須恵器坏(11・14・15)で、これらの坏が出土した位置は想定される7-1号住居床面の範囲外であった。土器の年代から見ても一括の遺物と考えて差し支えないことから、これらが7-2号住居に属するものと判断した。従って、7-2号住居の年代は9世紀初頭となり、7-1号住居はそれよりも新しくなる。より古い8世紀前半の土器は、7-3、もしくは7-4号住居に伴うものと考えられるが、これらの住居については断面で床面を確認したのみであり、床面の貼り替えを行った同一住居の可能性も考えられる。また、掘り方覆土からも小型で全面破面の炉底塊や炉内滓が出土していることから、本遺構廃絶以前から、周辺で製錬から小割り作業が行われていた可能性が高い。

第4章 検出された遺構と遺物



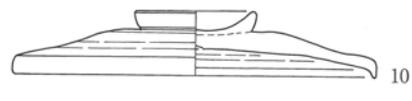
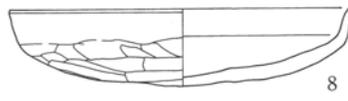
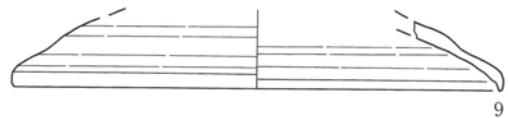
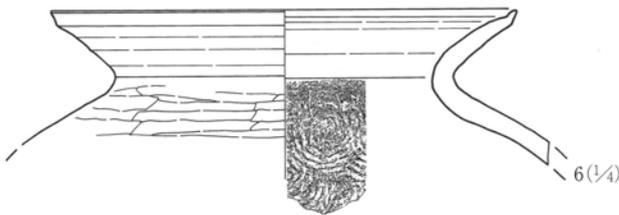
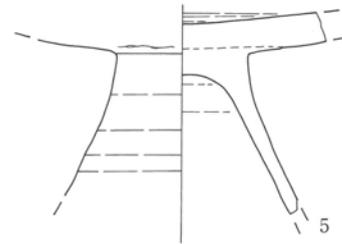
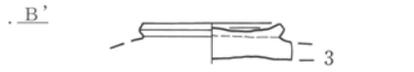
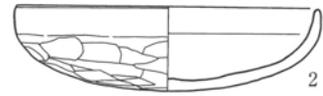
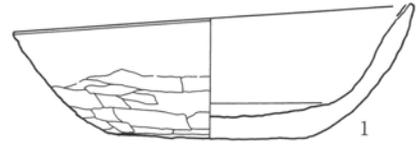
7-2住カマド
掘り方



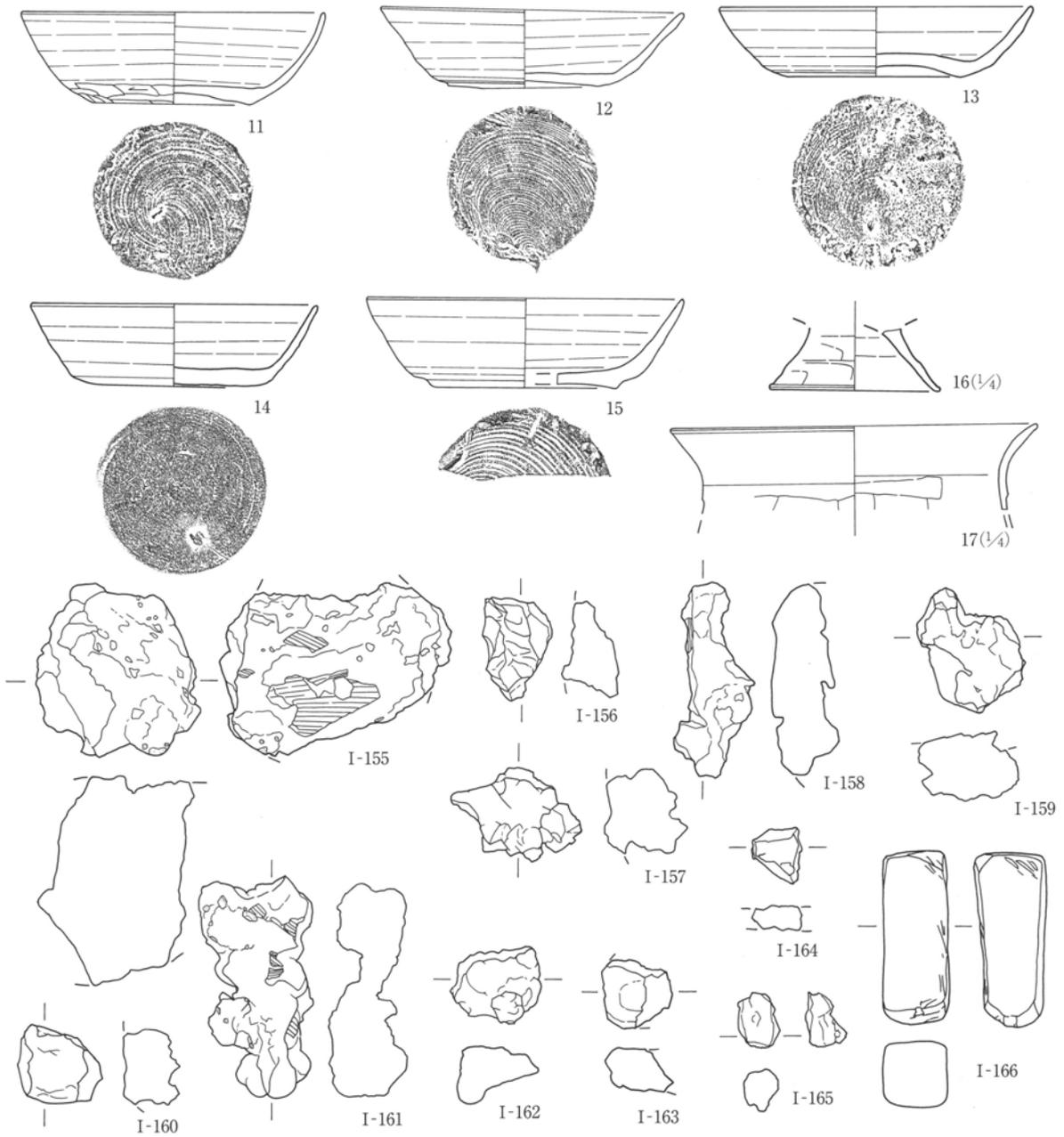
7-2住竈セクション

- 1 灰黄褐色土 少量のFP粒含み締まる。焼土、炭化物粒混入。
- 2 灰黄褐色土 FP粒多く含み粗粒。

掘り方



第177図 4区 7号住居 (2)

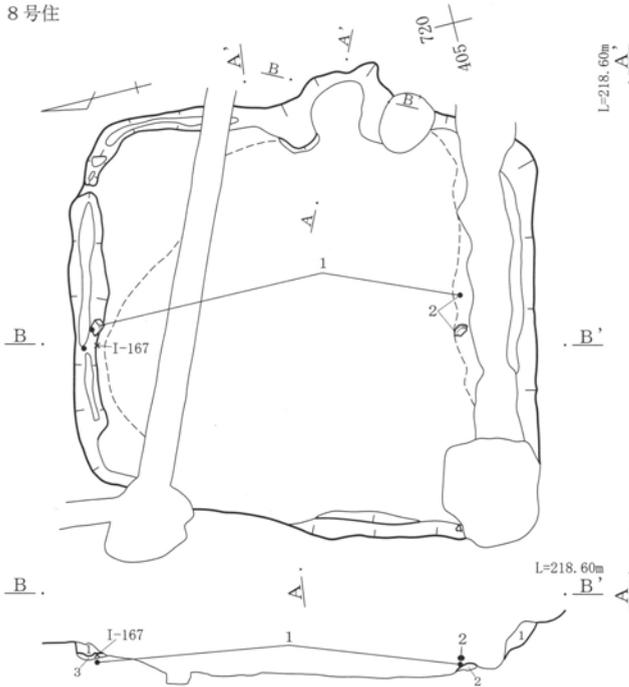


第178図 4区 7号住居出土遺物

4区8号住居

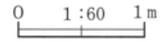
位置 405-720 **方位** N-76°-W **規模と形状** 長辺3.75m・短辺3.37mで、僅かに横方向が長い長方形状。長軸は南北方向を示す。 **面積** 11.7㎡ **壁高** 34cm **重複** なし。 **床面** 住居上部を大きく削平されており、床面は南壁沿いと北東隅で部分的に残存していたのみである。掘り方にFP粒やFAシルトを含む土を埋めて床面を構築している。 **壁溝** 北壁から東壁北半にかけてごく浅い溝を検出した。 **柱穴** 確認できなかった。 **貯蔵穴** なし。 **竈** 東壁のほぼ中央部に位置していた。上部を削平されており、燃烧部の底がわずかに残っているのみであった。 **遺物** 住居の遺存状態が悪く遺物も少ないが、わずかに残った床面上から土師器盤が2点(1・2)、含鉄鉄滓が1点(I-167)出土、覆土中からも含鉄鉄滓が6点、総計75.9gが出土している。 **所見** 8世紀前半か。

8号住

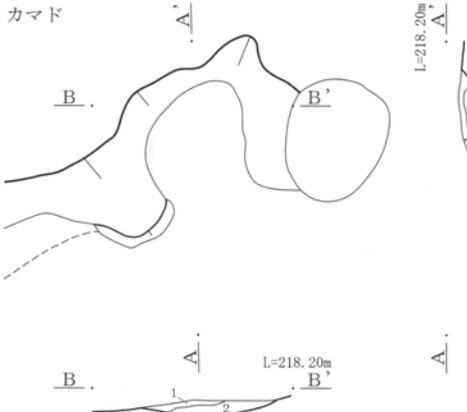


セクション

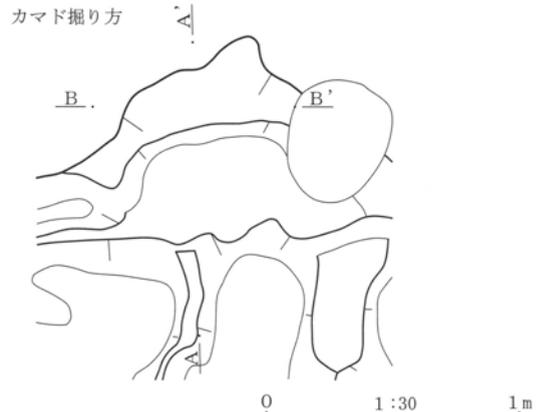
- 1 明黄褐色土 汚れたFP粒含む。
- 2 黒褐色土 焼土、炭化物含む。床層。
- 3 にぶい黄橙色土 FP粒、FAシルト含む。掘り方埋土。
- 4 にぶい黄褐色土 FAシルト含み締まり良。掘り方埋土。
- 5 にぶい黄橙色土 FAシルトと砂質土からなる。掘り方埋土。
- 6 にぶい黄褐色土 FAシルト含み締まり良。掘り方埋土。
- 7 黒褐色土 FP粒多量に含む。掘り方埋土。



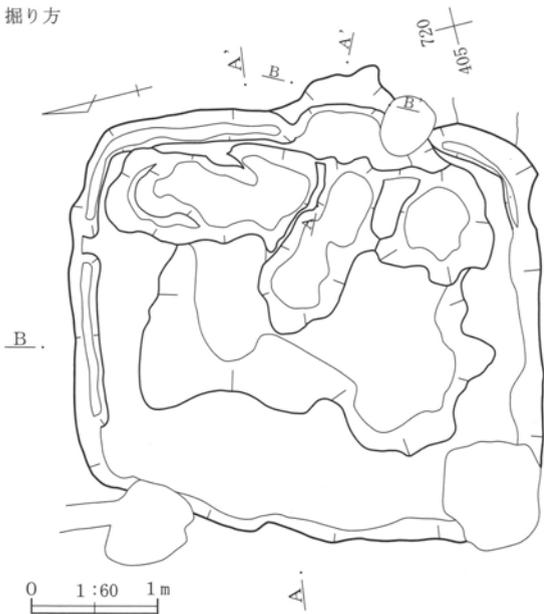
カマド



カマド掘り方

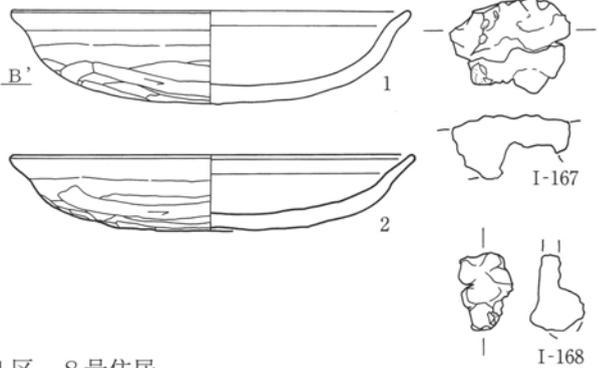


掘り方



竈セクション

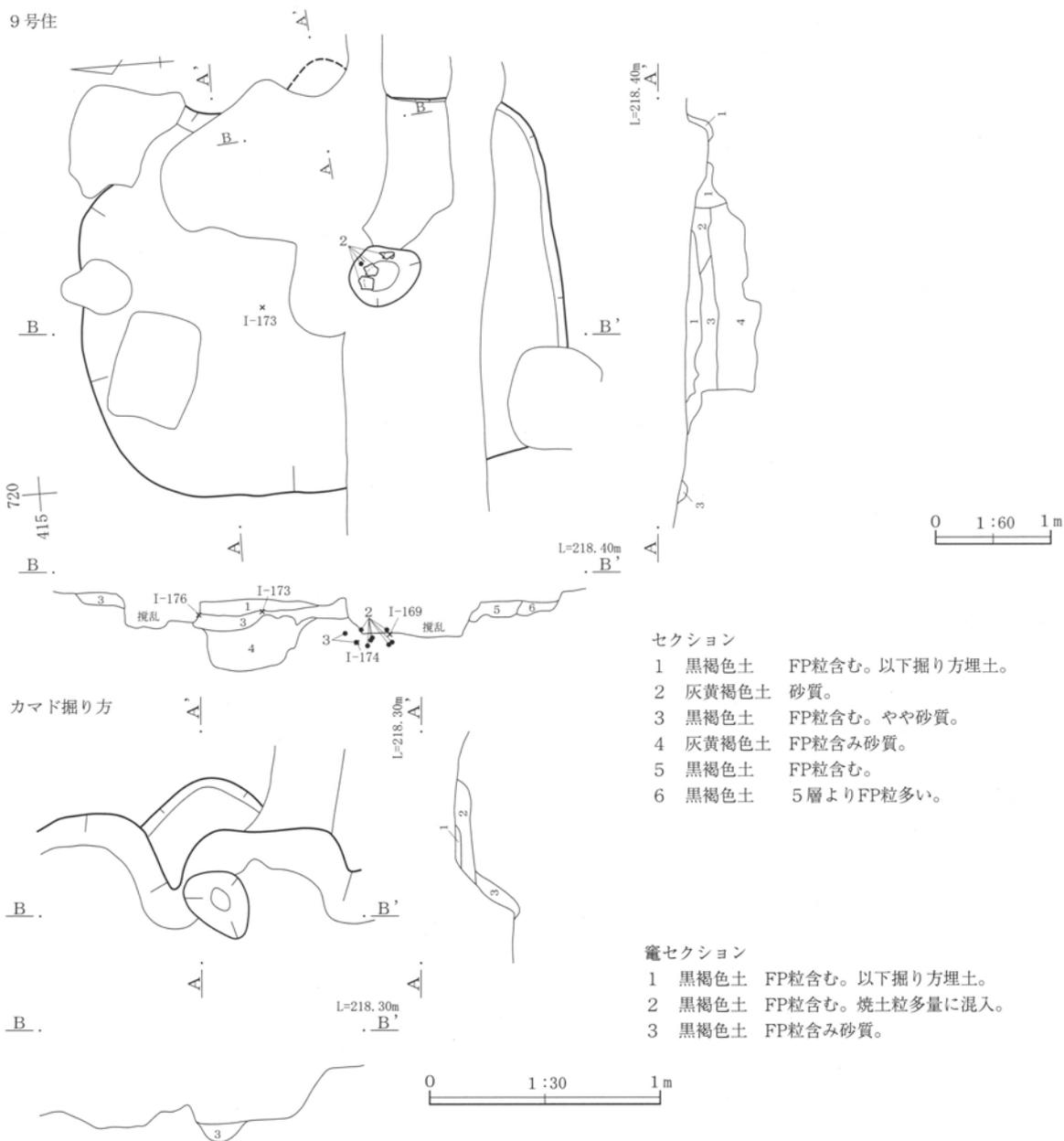
- 1 黒褐色土 軽石僅かに含む。
- 2 黒褐色土 炭化物、焼土粒多量に含む。
- 3 にぶい赤褐色土 砂質土。焼土化。
- 4 にぶい褐色土 砂質で上面焼土化。竈床層。
- 5 灰黄褐色土 砂質。還元か。竈掘り方埋土。
- 6 灰黄褐色土 構築材か。黒色土ブロック多い。竈掘り方埋土。



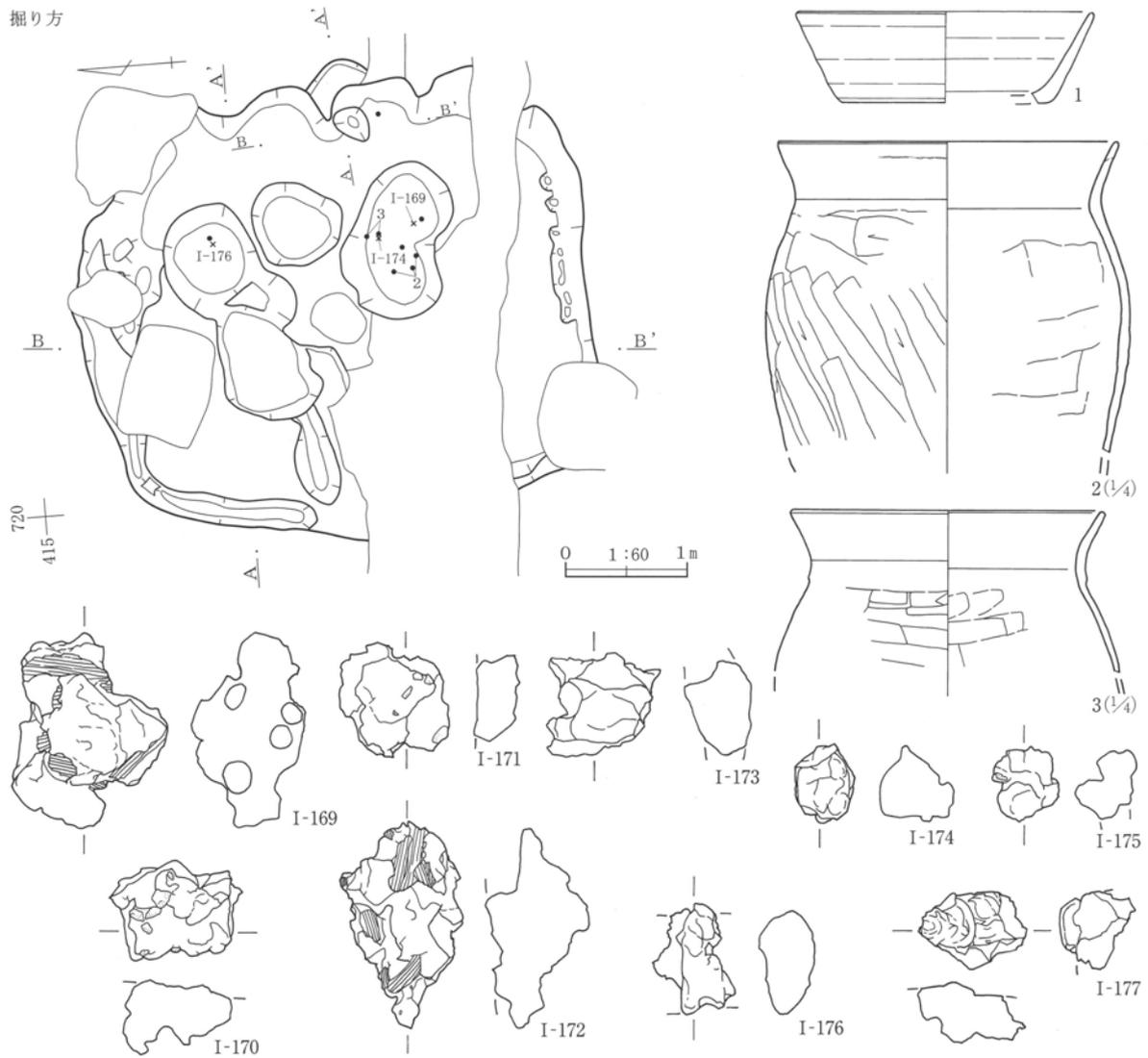
第179図 4区 8号住居

4区9号住居

位置 410-715 **方位** N-86°-E **規模と形状** 削平が激しく、推定で長辺4.20m・短辺3.32m。形状はやや横長の長方形。長軸は南北方向。 **面積** 12.8㎡ **壁高** 12cm **重複** なし。 **床面** 後世の攪乱によって削られ、住居を確認した段階でほとんど残っていなかった。掘り方にFP混じりの砂質土を埋め、床面を構築。 **壁溝** なし。 **柱穴** 住居中央やや南寄りにピットが1基あったが、柱穴とは断定できなかった。 **貯蔵穴** なし。 **竈** 東壁のほぼ中央部にあり。削平され、燃焼部奥の底面がかろうじて残っていたのみ。袖や焚口は攪乱によって壊されていた。 **遺物** 住居の上位が削平されていたため、大半の遺物は掘り方内からの出土である。住居中央付近の床下土坑内から土師器甕が(2・3)、覆土中から須恵器坏が出土。また、炉内滓・鉄塊系遺物・粘土質溶解物などの鉄関連遺物が19点・931.3g出土した。ほとんどの鉄生産関連遺物は覆土からの出土であるため、周辺から混入したものと判断した。粘土質溶解物は製錬炉の炉壁表面で生



第180図 4区 9号住居 (1)



第181図 4区 9号住居 (2)

成された可能性が高い。遺物は製錬系のものが主体である。 **所見** 掘り方埋土からも小型で全面破面の炉底塊や炉内滓が出土していることから、本遺構廃絶以前から、周辺で製錬から小割り作業が行われていた可能性が高い。出土遺物から、8世紀後半の住居と考えられる。

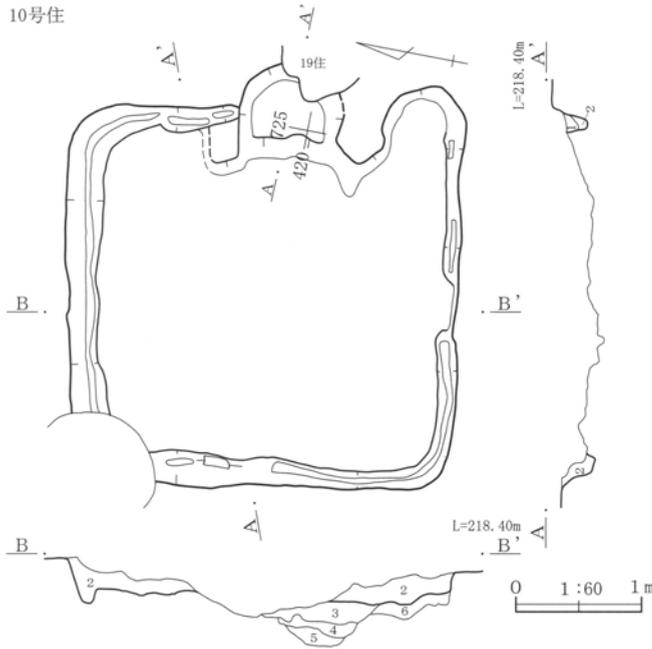
4区10号住居

位置 420-725 **方位** N-80°-E **規模と形状** 長辺3.20m・短辺3.14mで、ほぼ正方形を呈する。

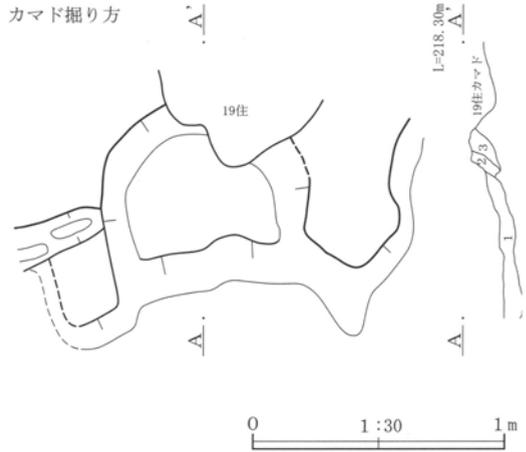
面積 9.3㎡ **壁高** 24cm **重複** 19号住居に切られる。 **床面** 掘り方に地山のFA泥流やFP軽石粒を含む土を埋めて床面を構築。一部は19号住居の掘り方によって壊されていた。 **壁溝** 南東隅を除いて溝が巡る。掘り方面では南東隅からも見つかっており、壁溝を埋めて竈袖を作っていたことが分かる。 **柱穴** 確認できず。 **貯蔵穴** なし。 **竈** 東壁のほぼ中央に位置する。住居内に袖が作られるが、燃烧部は壁外に張り出す。上位を19号住居によって削平され、燃烧部の掘り方が残っていたのみである。 **遺物** 上位を削平されていたため遺物の残りは悪い。全て覆土一括で取り上げられており、出土位置が確認できたものはない。器種は土師器坏(1・3)・盤(2)・甕(5)、須恵器蓋(4)が出土している。このうち3の坏は、焼成前に細い篋のようなもので十字の記号を底部内面に刻んである。 **所見** 出土遺物から8世紀前半と考えられる。

第4章 検出された遺構と遺物

10号住



カマド掘り方

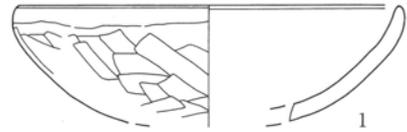


竈セクション

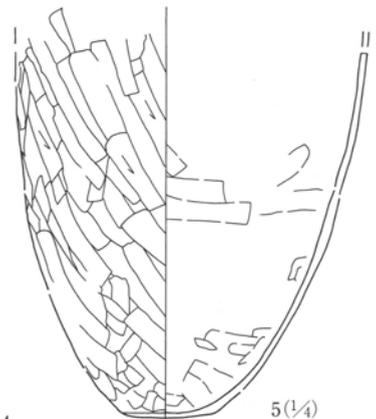
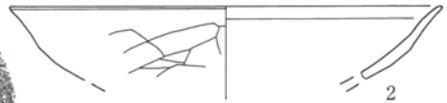
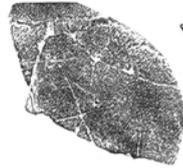
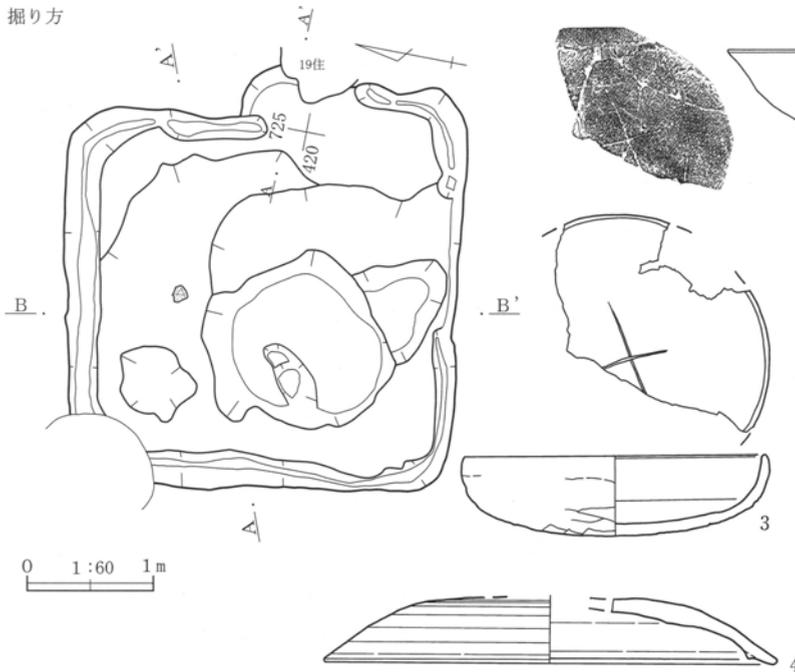
- 1 灰黄褐色土 FA砂を主体とし、FP粒多量に含む。竈掘り方埋土。
- 2 灰黄褐色土 FA砂を主体とし、FP粒少量含む。竈掘り方埋土。
- 3 明黄褐色土 汚れたFP粒主体とする。竈掘り方埋土。

セクション

- 1 灰黄褐色土 汚れたFP粒主体とし黒味帯びる。
- 2 明黄褐色土 FP粒主体とする。
- 3 灰黄褐色土 FA砂主体とし、FP粒含む。
- 4 灰黄褐色土 FA砂とFP粒多量に含む。
- 5 灰黄褐色土 粘性持つFAシルトとFA下の黒色土ブロック多量に含む。
- 6 灰黄褐色土 汚れたFP粒主体とし黒味帯びる。



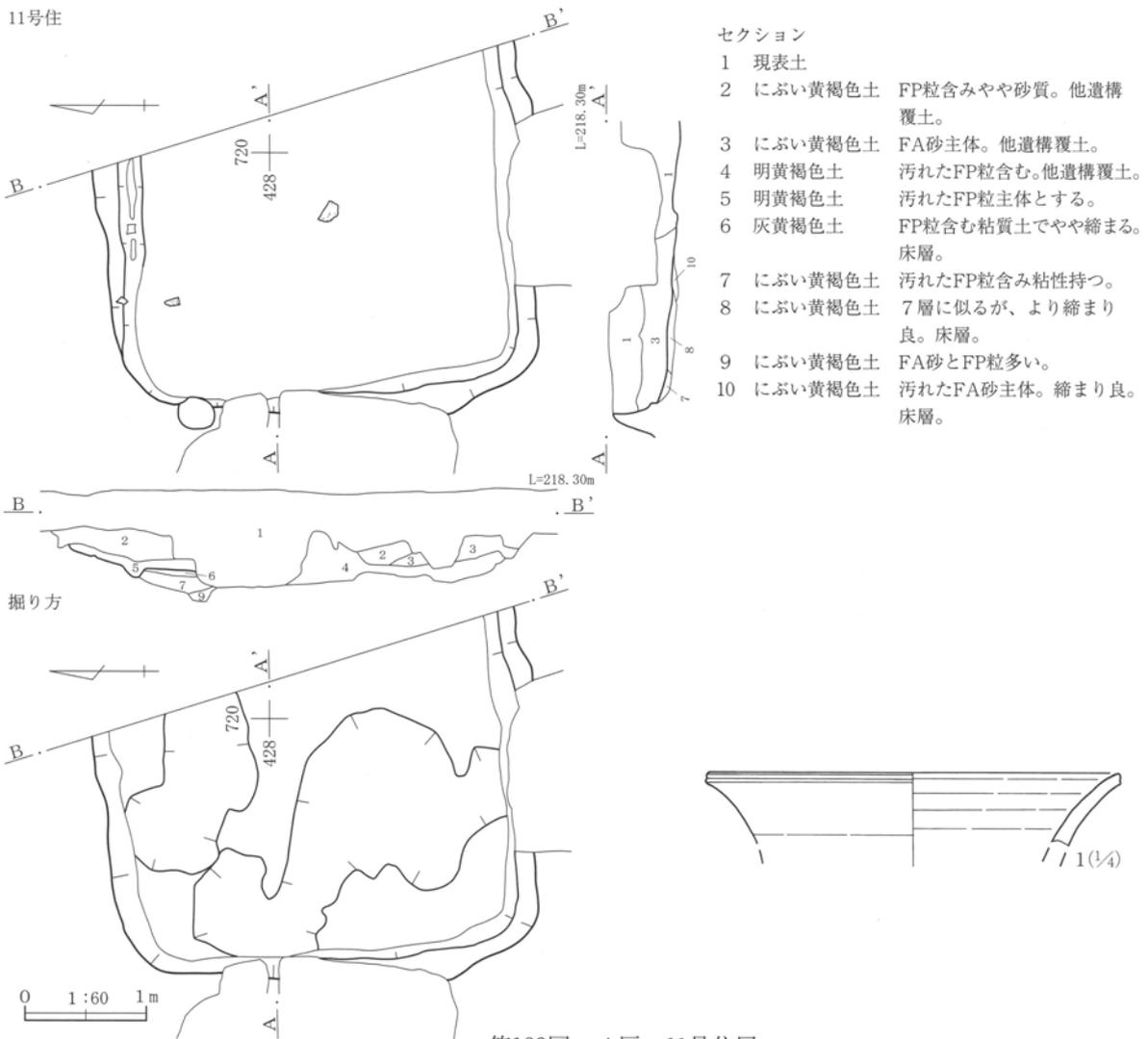
掘り方



第182図 4区 10号住居

4区11号住居

位置 425-720 方位 N-85°-E 規模と形状 住居東側が調査区外に延びるため、規模、形状共に不明。南北方向の長さは現状で3.66m。面積 計測不可 壁高 17cm 重複 なし。床面 掘り方にFAやFP



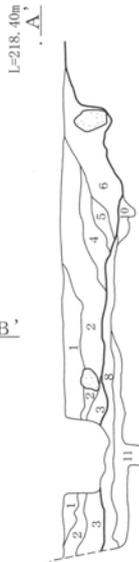
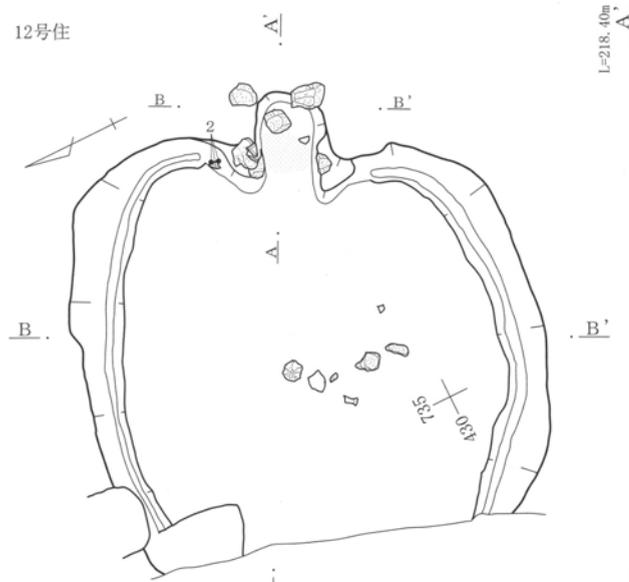
粒を含む土を埋めて床面を構築。東の調査区際では、北側3分の1程度を除いて、より新しい遺構によって壊され、床面は残っていない。 **壁溝** 北壁際で一部確認できた。 **柱穴** 確認できず。 **貯蔵穴** なし。 **竈** 東壁にあると考えられるが、調査区外になるため不明。 **遺物** 覆土中から少数の土器片が出土している。覆土上位から須恵器甕の口縁破片が得られている。 **所見** 住居に伴う特徴的な遺物が確認できず、時期の認定は困難。

4区12号住居

位置 430-730 **方位** N-105°-E **規模と形状** 西壁が調査区外にあるため、正確な規模は不明。南北方向の長さは3.85mで、南壁がやや外側に丸く張り出す。 **面積** 11.4㎡(推) **壁高** 32cm **重複** なし。 **床面** 掘り方に地山FAシルトやFP軽石含む砂質土を埋め、床面を構築。 **壁溝** 確認できなかった西壁を除き、全周に深さ5~10cm程の溝が巡っていた。 **柱穴** 確認できず。 **貯蔵穴** なし。 **竈** 東壁の中央に位置していた。住居内に短い袖が作られ、燃烧部は壁外に張り出す。両袖と燃烧部奥壁に竈材として大型の礫が据え付けられ、燃烧部の奥寄りに支脚と思われる礫が埋め込まれていた。 **遺物** 遺物量は少ない。竈の左袖脇から須恵器坏(2)が、覆土から刀子の可能性のある鉄製品が、掘り方内の小土坑から土師器坏(1)が、掘り方埋土から碗形鍛冶滓が出土した。 **所見** 遺物の年代より、8世紀前半と考えられる。

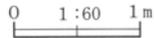
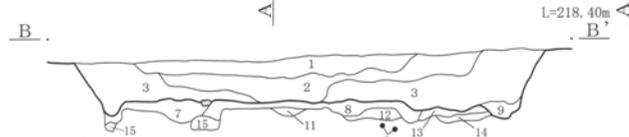
第4章 検出された遺構と遺物

12号住

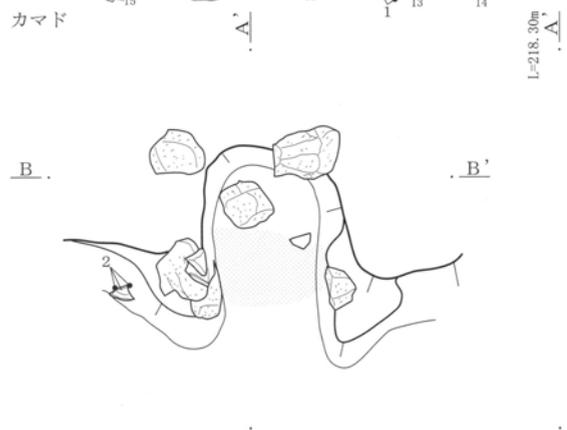


セクション

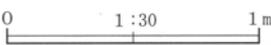
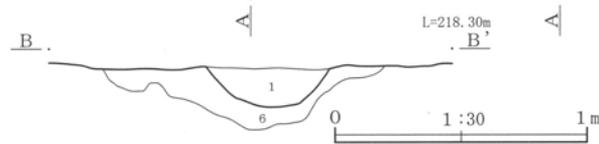
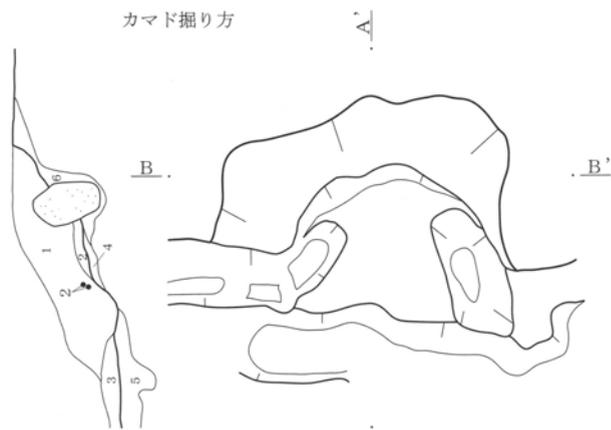
- 1 灰黄褐色土 φ5cm程のFP軽石多量に含む。
- 2 にぶい黄褐色土 FP粒多量に含む。
- 3 にぶい黄橙色土 2層よりFP粒の混入多い。
- 4 黒褐色土 φ5cm程のFP軽石多いが、FP粒は少ない。
- 5 灰黄褐色土 FP含みやや砂質。締まりあり。
- 6 竈覆土
- 7 灰黄褐色土 シルト質～砂質。締まり良。
- 8 灰黄褐色土 FP含みやや砂質。締まりあり。
- 9 にぶい黄橙色土 汚れたFP軽石主体。
- 10 竈掘り方埋土
- 11 灰黄褐色土 FAシルト、砂が混在。FP軽石僅かに含む。
- 12 灰黄褐色土 FP軽石少なく砂質。締まり良。
- 13 黒褐色土 FP粒含み黒味帯び、やや締まる。
- 14 灰黄褐色土 軽石含み粘質。締まり良。
- 15 灰黄褐色土 シルトブロック含み砂質。



カマド



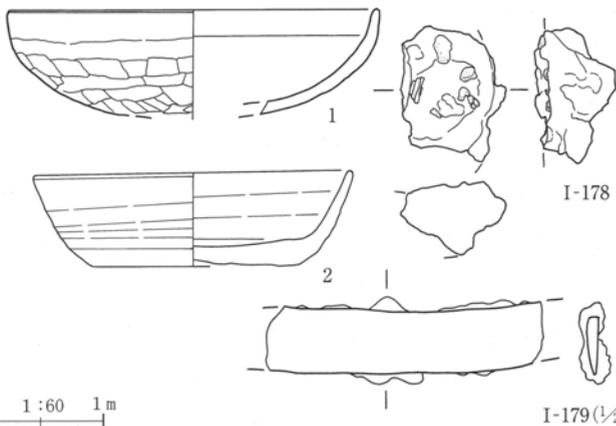
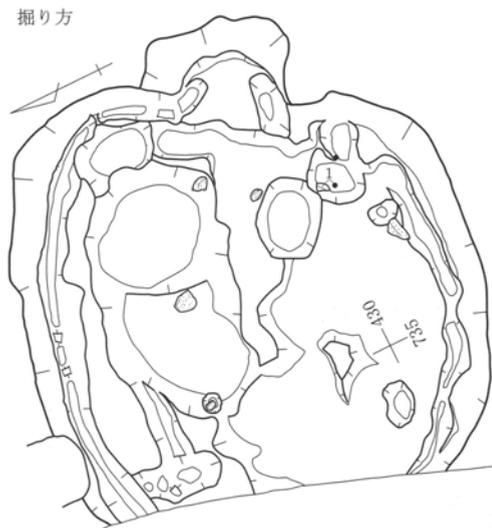
カマド掘り方



竈セクション

- 1 黒褐色土 FP粒少なく、砂質。
- 2 暗褐色土 焼土粒多量に含む。竈天井の焼土化部分。
- 3 暗褐色土 焼土含まない。砂質。
- 4 暗褐色土 上部が浅く焼土化。上面使用面。以下掘り方埋土。
- 5 黒褐色土 黒色土、焼土粒・ブロック含む。上面床面。
- 6 黒褐色土 FP粒少量含む。

掘り方

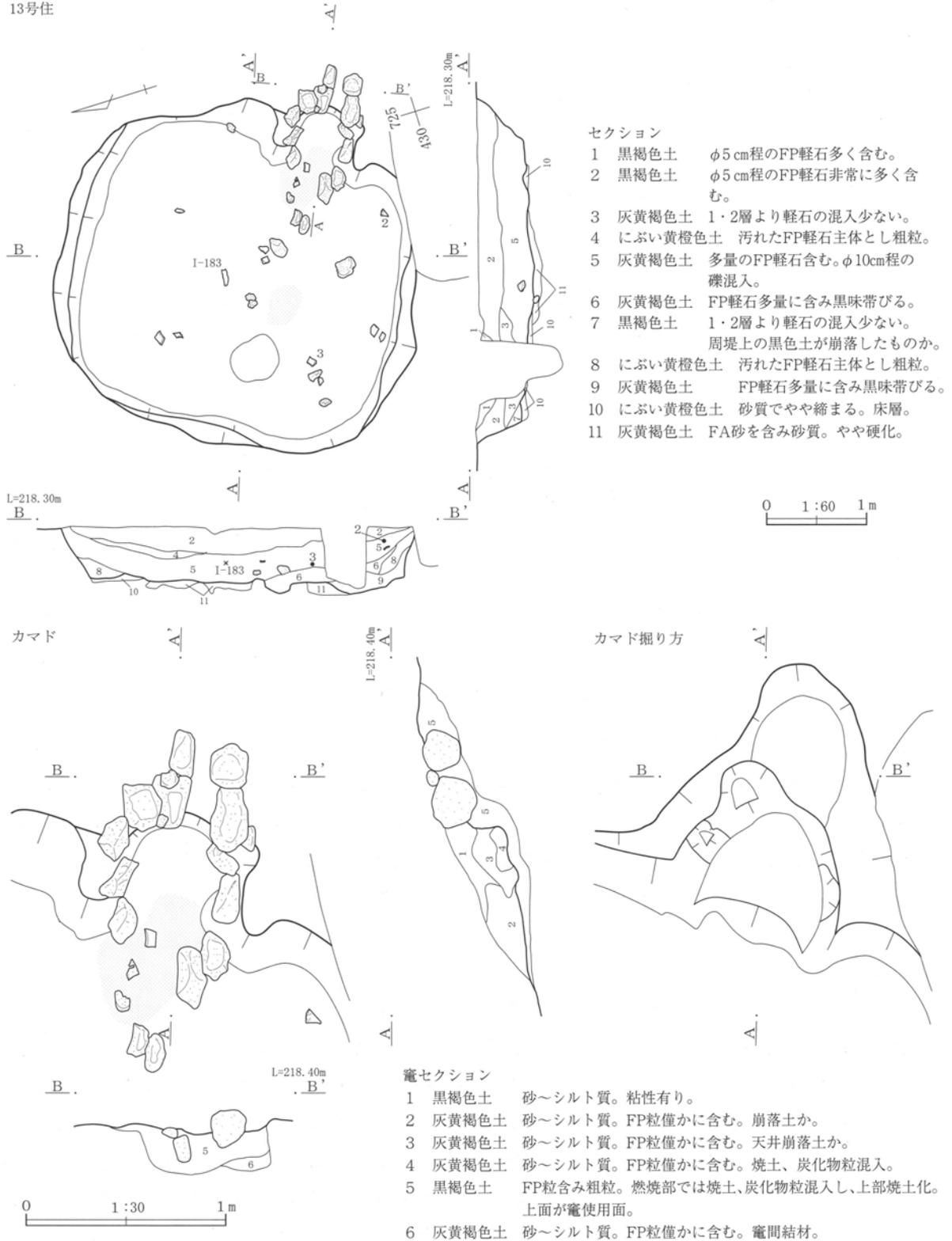


第184図 4区 12号住居

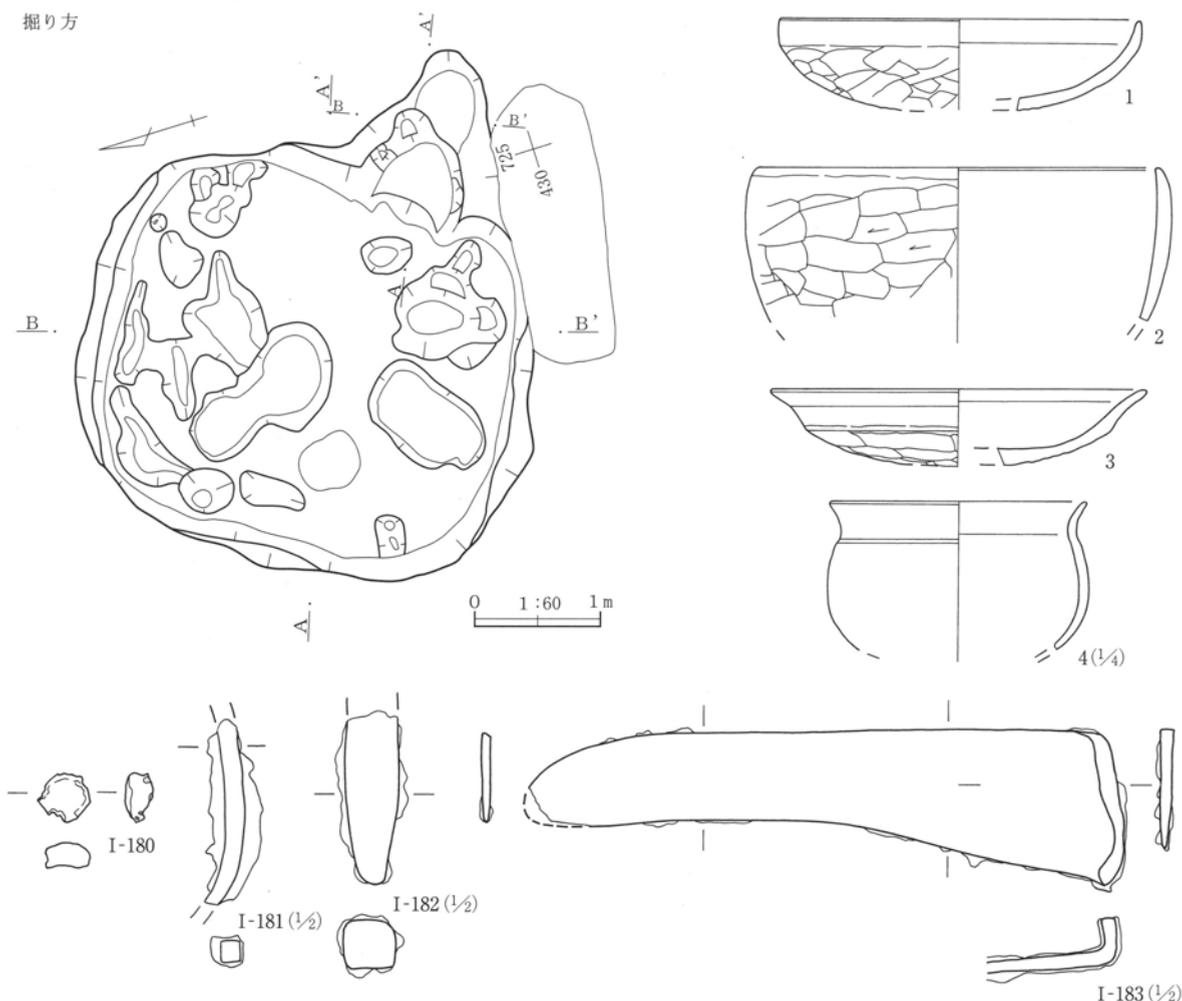
4区13号住居

位置 430-725 方位 N-121°-E 規模と形状 長辺3.69m・短辺3.30mで、やや横長の長方形。長軸は南北方向。面積 10.2㎡ 壁高 47cm 重複 なし。床面 掘り方にFAを含む砂質土を埋めて床

13号住



第185図 4区 13号住居 (1)



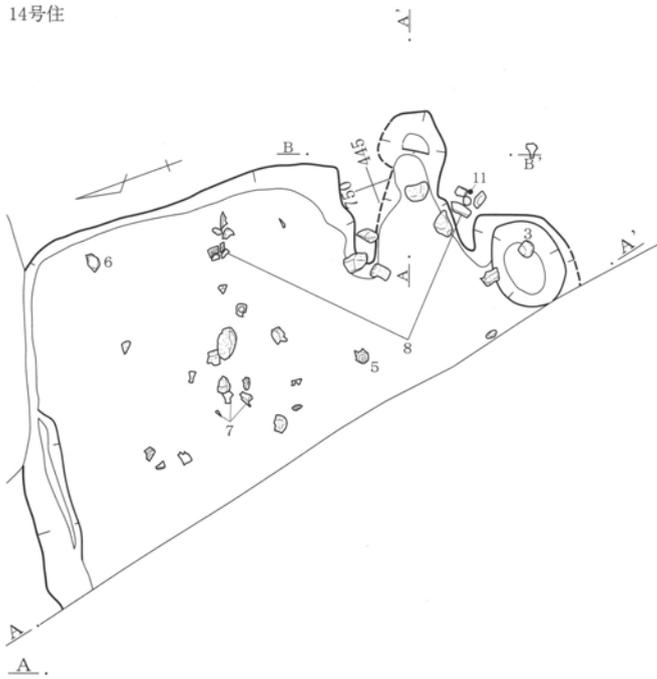
第186図 4区 13号住居 (2)

面を構築。壁溝 なし。柱穴 確認できず。貯蔵穴 なし。竈 東壁の南よりの部分に位置する。住居内にごく短い袖がつくが、燃烧部は壁外に張り出す。燃烧部の両壁に竈材として大型の礫を設置、煙道部分にも一部置かれている。燃烧部の底面は熱により焼土化。右壁の礫表面も熱を受け赤化している。遺物 少数の遺物が住居内に散在する。床面からやや浮いた状態で土師器盤(3)が、覆土上位から土師器坏(2)、鉄塊系遺物・鎌などの可能性のある鉄製品が出土。この他に覆土中から土師器坏・小型甕が得られている。所見 遺物から、8世紀前半と考えられる。

4区14号住居

位置 445-750 方位 N-111°-E 規模と形状 住居西半が調査区外にあるため、規模、形状共に不明。面積 計測不可 壁高 62cm 重複 なし。床面 掘り方にFAやその下位の黑色土ブロックを含む土を埋めて、床面を構築。壁溝 北壁際の一部で浅い溝を検出。柱穴 確認できず。貯蔵穴 住居南東隅にあり。長軸72cm、短軸55cmの楕円形状。竈 東壁の南寄りに位置する。FP粒を含む灰黄褐色の粘質土を用いて袖を作る。袖には竈材として礫が埋め込まれていた。遺物 遺物量はあまり多くない。貯蔵穴内から須恵器坏(3)が、床面上から須恵器埴(5)、土師器甕(7・8)が出土。他に須恵器甕(11)、土師器坏・小型甕・小型台付甕、炉内滓、鉄製品の破片などがある。所見 遺物の年代から、9世紀後半に比定される。

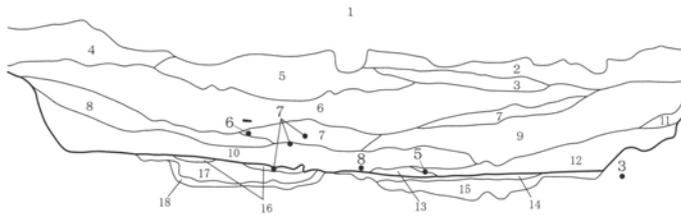
14号住



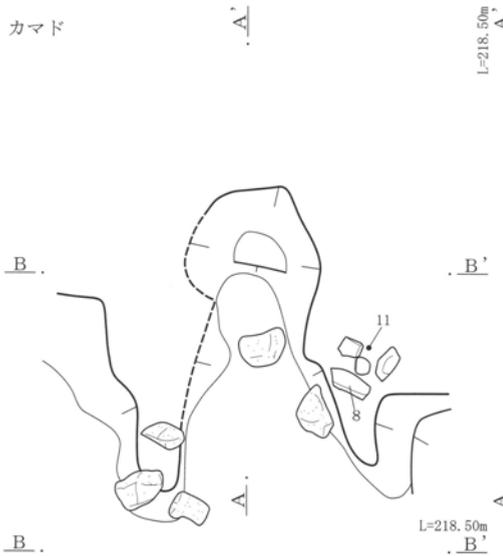
セクション

- 1 表土
- 2 にぶい黄褐色土 FA砂、FP粒含む。
- 3 にぶい黄褐色土 FP粒多く含む。
- 4 黒褐色土 FP粒含み黒味帯びる。
- 5 にぶい黄褐色土 FP粒主体とし、FA砂混入。
- 6 黒褐色土 FP粒主体とし、FA砂混入。
- 7 にぶい黄褐色土 細粒のFP粒主体。FA砂混入。
- 8 黒褐色土 FP粒多量に含み黒味強い。
- 9 にぶい黄褐色土 FP粒少なく黒味帯びる。
- 10 黒褐色土 FP粒多量に含む。
- 11 灰黄褐色土 FAブロック多量に含む。
- 12 黒褐色土 FP粒、FAシルトブロック含みやや締まる。
- 13 黒色土 FP粒含み黒味強い。やや締まる。
- 14 黒褐色土 FP粒、FAブロック含む。締まり良。床層。以下掘り方埋土。
- 15 灰黄褐色土 FA・黒色土ブロック多量に含み締まり良。
- 16 灰黄褐色土 FA砂主体。締まり良。床層。
- 17 灰黄褐色土 FA砂主体とし、FP粒多量に含む。
- 18 灰黄褐色土 FAブロック多量に含む砂質土。締まり良。

L=219.30m



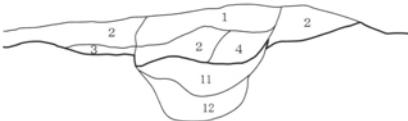
カマド



竈セクション

- 1 黒褐色土 FP粒含み粗粒。
- 2 灰黄褐色土 FP粒含み。粘性持つ。
- 3 黒褐色土 FP粒含み粘性持つ。2層土のブロック混入。
- 4 黒褐色土 粘質土。やや黒味帯びる。
- 5 黒褐色土 FP粒含み粗粒。
- 6 黒褐色土 FP・焼土・炭化物粒含む。
- 7 灰黄褐色土 FP粒含み粘性持つ。
- 8 灰黄褐色土 焼土・炭化物粒含む。
- 9 灰黄褐色土 8層より焼土・炭化物粒の混入多い。
- 10 にぶい赤褐色土 FP粒含み粘性持つ。上位一部焼土化。表面使用面。以下掘り方埋土。
- 11 黒褐色土 砂質。焼土・炭化物粒含む。
- 12 黒褐色土 砂質。炭化物粒含む。
- 13 黒褐色土 FP粒含み粘性持つ。焼土多量に混入。

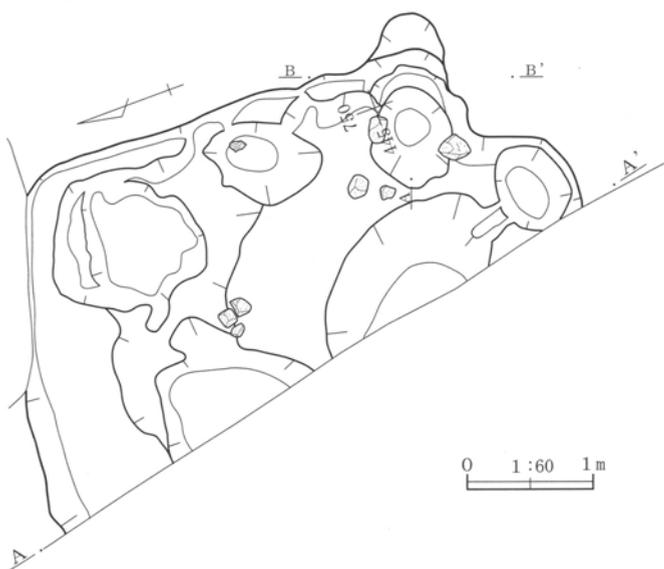
L=218.50m



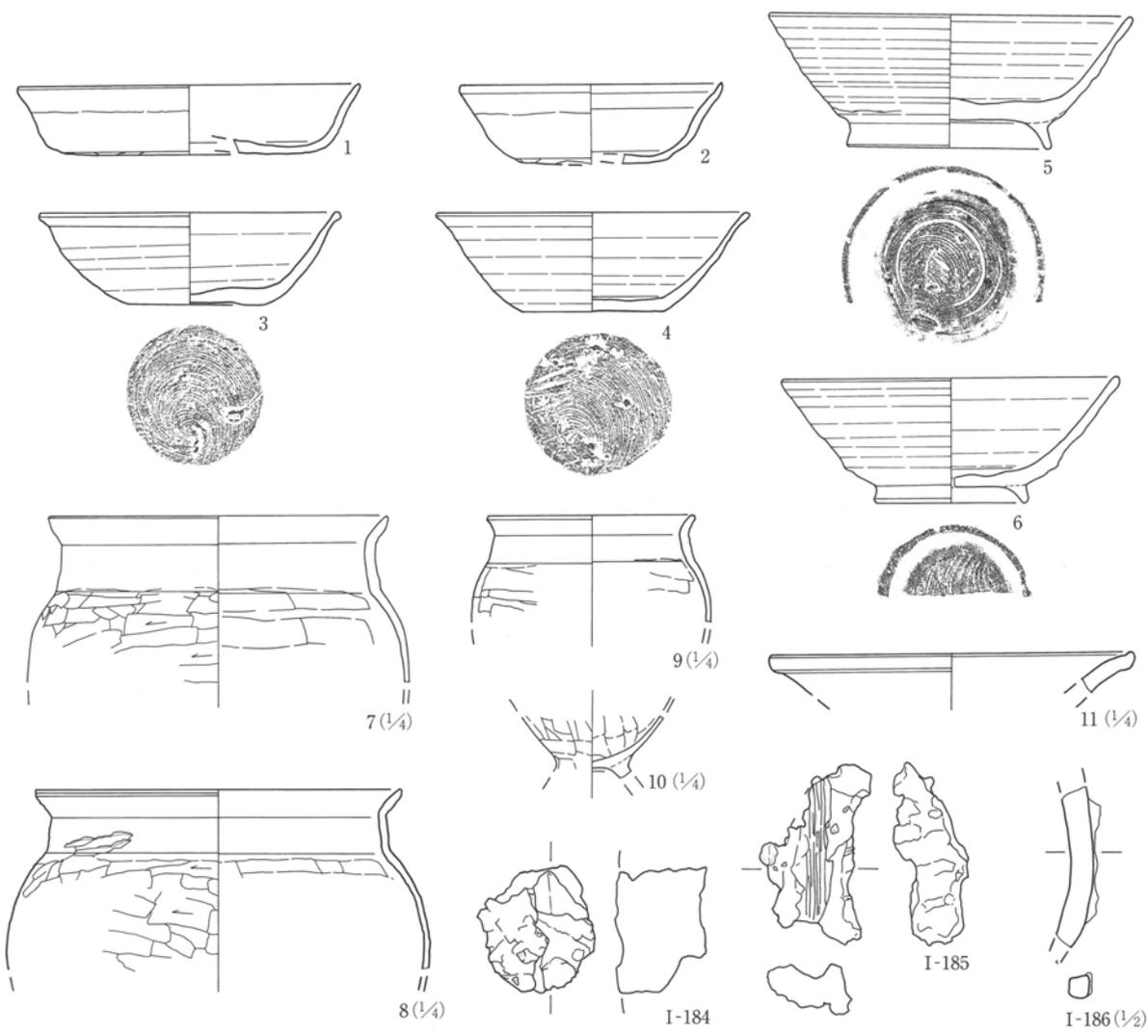
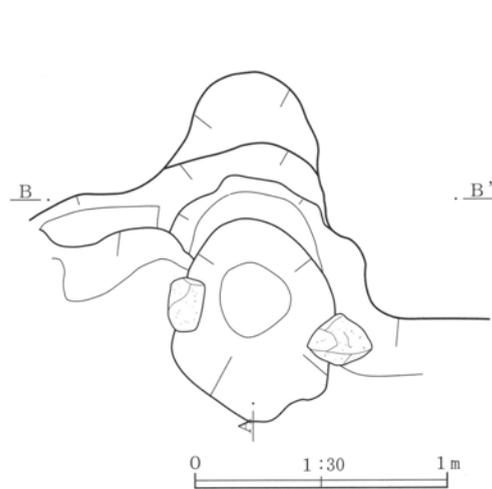
第187図 4区 14号住居 (1)

第4章 検出された遺構と遺物

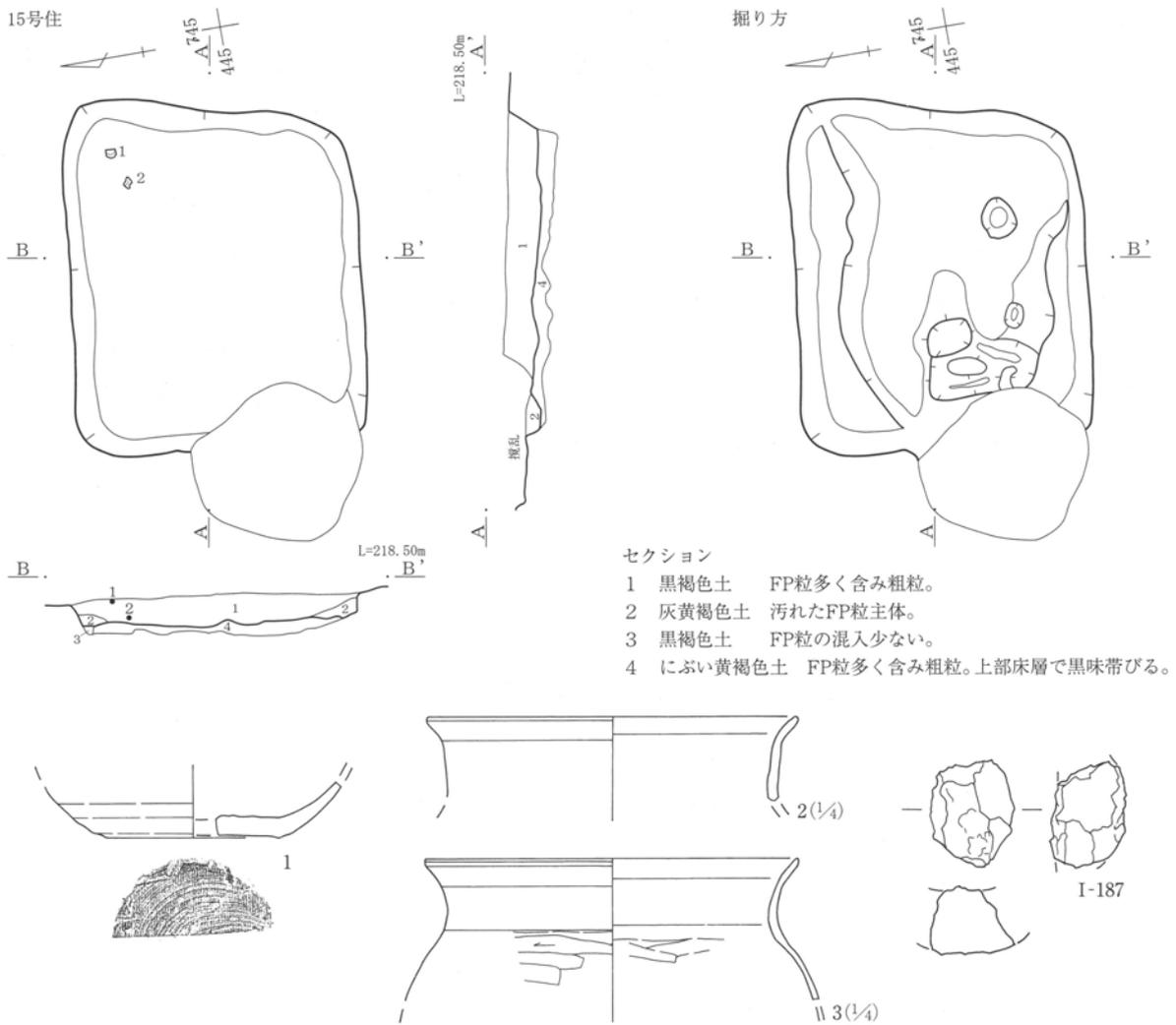
掘り方



カマド掘り方



第188図 4区 14号住居 (2)



第189図 4区 15号住居

4区15号住居

位置 445-745 **方位** N-97°-E **規模と形状** 近年の攪乱によって南西隅が一部破壊されている。現状で長辺2.85m・短辺2.40m。形状は長方形で、長軸は東西方向。 **面積** 6.3㎡ **壁高** 20cm **重複** なし。
床面 掘り方にFP粒多量に含む土を埋めて床面を構築。 **壁溝** 断面で一部確認できたが、面的には検出できなかった。 **柱穴** 確認できず。 **貯蔵穴** なし。 **竈** なし。攪乱によって破壊された可能性はあるが、その周辺に焼土や炭化物の分布はない。本遺跡で主に作られる東壁側に痕跡がないことから、元々なかったものと考えられる。 **遺物** 遺物は少ない。床面からやや浮いた状態で土師器甕(2)が、覆土上位から須恵器坏(1)、碗形鍛冶滓が出土している。 **所見** 確実に住居に伴う遺物が少なくやや決め手に欠けるが、9世紀後半に位置付けられよう。

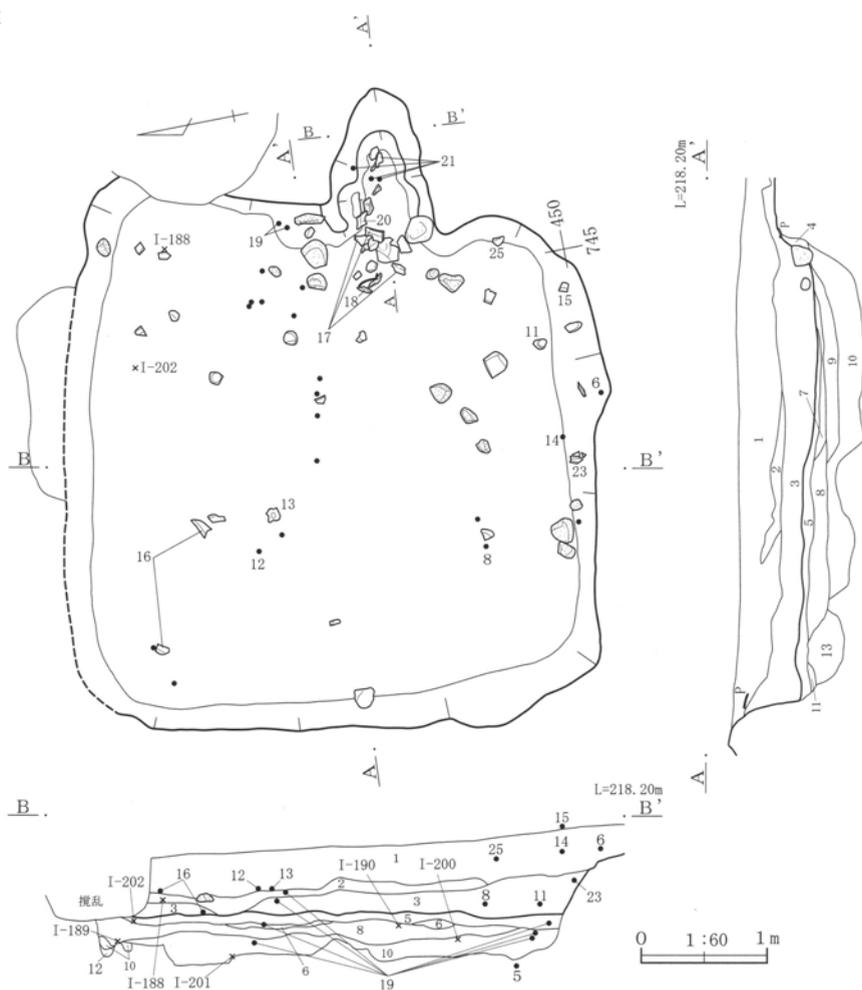
4区16号住居

位置 450-745 **方位** N-101°-E **規模と形状** 北壁が近年の攪乱によって破壊されているが、推定で長辺4.33m・短辺4.30mのほぼ正方形形状と考えられる。 **面積** 16.7㎡ **壁高** 54cm **重複** 17号住居の竈をわずかに切る。 **床面** 掘り方にFP粒やFAシルト含む砂質土を埋め、床面を構築。床層と思われる締まりの良い砂質土層が複数確認され、建て替え、もしくは床の貼り替えなどが行われた可能性がある。 **壁溝**

第4章 検出された遺構と遺物

なし 柱穴 確認できず。 貯蔵穴 なし。 竈 東壁のやや南寄りに位置する。住居内にごく短い袖を作り、燃烧部は壁外に大きく張り出す。燃烧部両側には構築材として礫が埋め込まれていた。焚口付近からは、土師器甕(17)が1个体潰れた形で出土。 遺物 比較的多くの遺物が出土している。住居南東隅の床下土坑内から須恵器坏(5)が、床面付近から複数の土師器甕(16・18・19・20)が出土。他に須恵器碗・皿・蓋、灰釉陶器瓶、土師器坏・小型甕・台付甕などがある。このうち須恵器の坏や碗には、文字が墨書きされているものが複数認められた(8~10・14)。このうち8は「上」、14は「継」と読める。また、炉内滓・含鉄鉄滓・鉄塊系遺物・鎌などの鉄関連遺物が57点・1,639.7g出土した。ほとんどの鉄生産関連遺物は覆土からの出土であるため、周辺から混入したものと判断した。遺物は製錬系のものが主体である。 所見 掘り方埋土からも小型で全面破面の炉内滓が出土していることから、本遺構廃絶以前から、周辺で製錬から小割り作業が行われていた可能性が高い。遺物の年代から、9世紀後半に比定される。

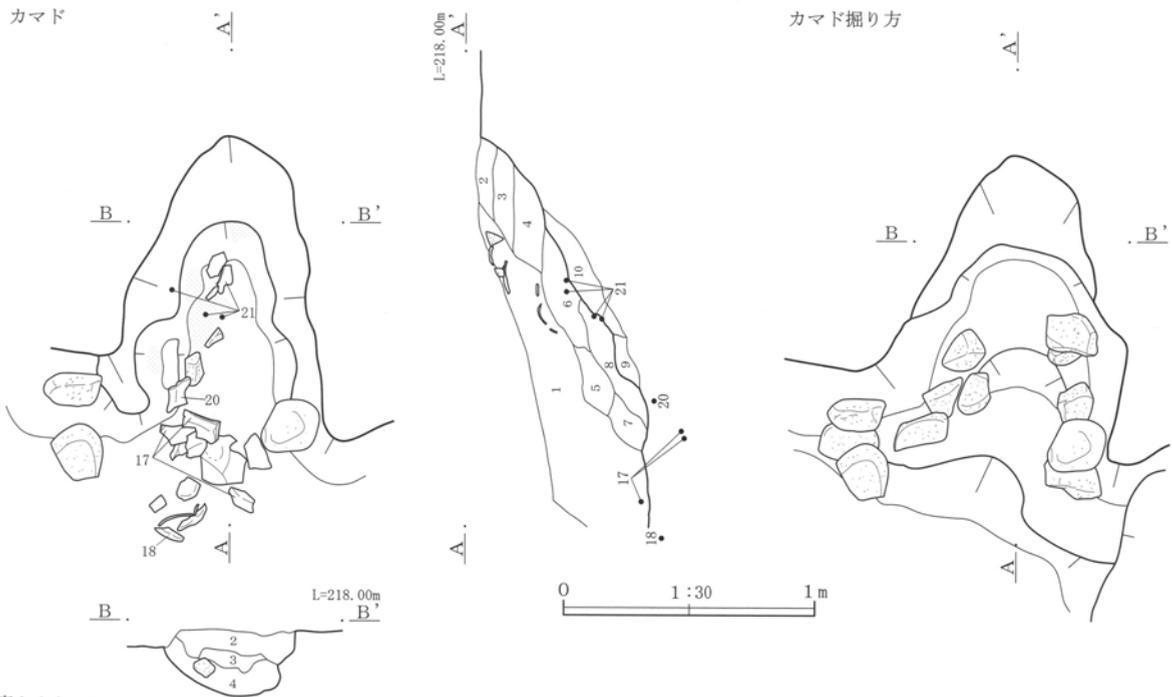
16号住



セクション

- | | |
|------------------------------|-----------------------------|
| 1 黒褐色土 FP粒多く含む。 | 8 灰黄褐色土 FP粒含む。シルト～砂質。 |
| 2 黒褐色土 黒味帯びる。少し締まる。 | 9 灰黄褐色土 FAシルト主体。床層。 |
| 3 黒褐色土 FP粒含む。粗粒。 | 10 灰黄褐色土 FP粒含む、シルト～砂質。小礫混入。 |
| 4 竈袖部分。 | 11 灰黄褐色土 砂質。 |
| 5 にぶい黄橙色土 FP粒含む。砂質でやや締まる。床層。 | 12 灰黄褐色土 砂質。 |
| 6 灰黄橙色土 シルト質。 | 13 褐灰色土 砂多く、FAシルト含む。 |
| 7 褐灰色土 砂多く、FAシルト含む。床層。 | |

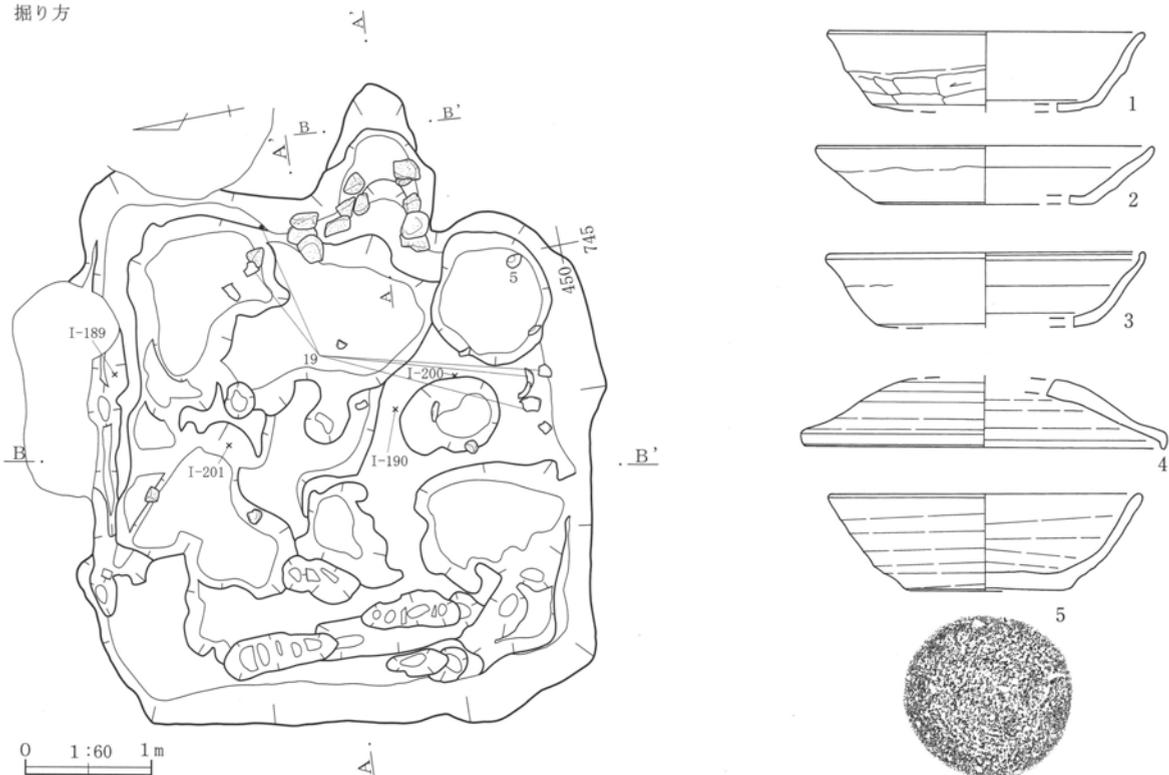
第190図 4区 16号住居(1)



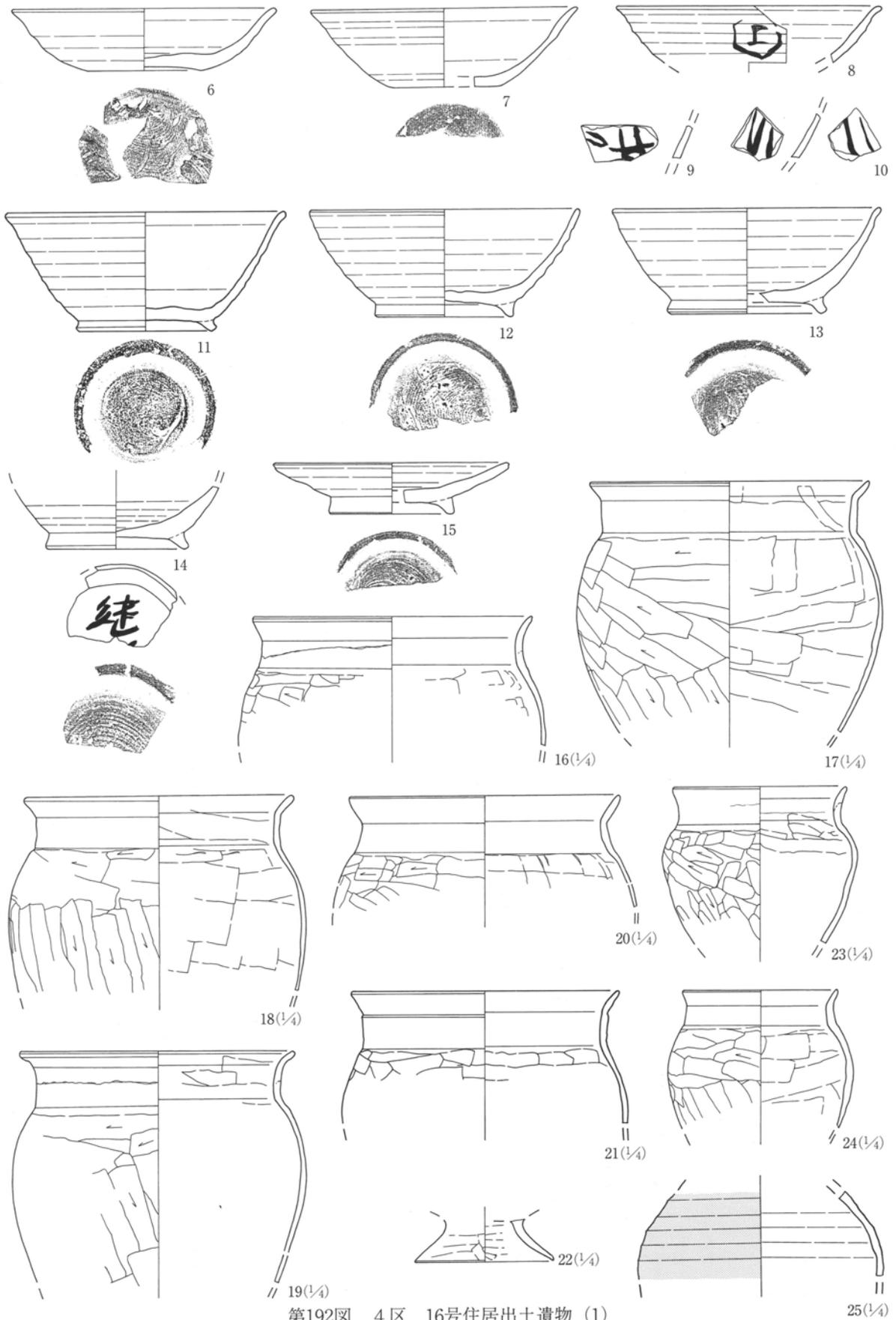
竈セクション

- | | | | |
|---------|--------------------------|----------|-----------------------------|
| 1 灰黄褐色土 | FP粒含み粗質。 | 7 灰黄褐色土 | 粗質。 |
| 2 黒褐色土 | FP粒の混入少なく、粘性持つ。 | 8 灰黄褐色土 | FAシルト主体とし粘性持つ。天井崩落土か。 |
| 3 黒褐色土 | FP粒の混入少なく、粘性持つ。焼土粒僅かに含む。 | 9 灰黄褐色土 | 下面に木炭多く、上位に焼土粒含む。以下掘り方埋土。 |
| 4 黒褐色土 | FP粒の混入少なく、粘性持つ。 | 10 灰黄褐色土 | FAシルト主体とし粘性持つ。上部焼土化。上面が使用面。 |
| 5 灰黄褐色土 | FP粒多く、焼土粒含み粗質。 | | |
| 6 灰黄褐色土 | FAシルト主体とし、粘性持つ。天井崩落土か。 | | |

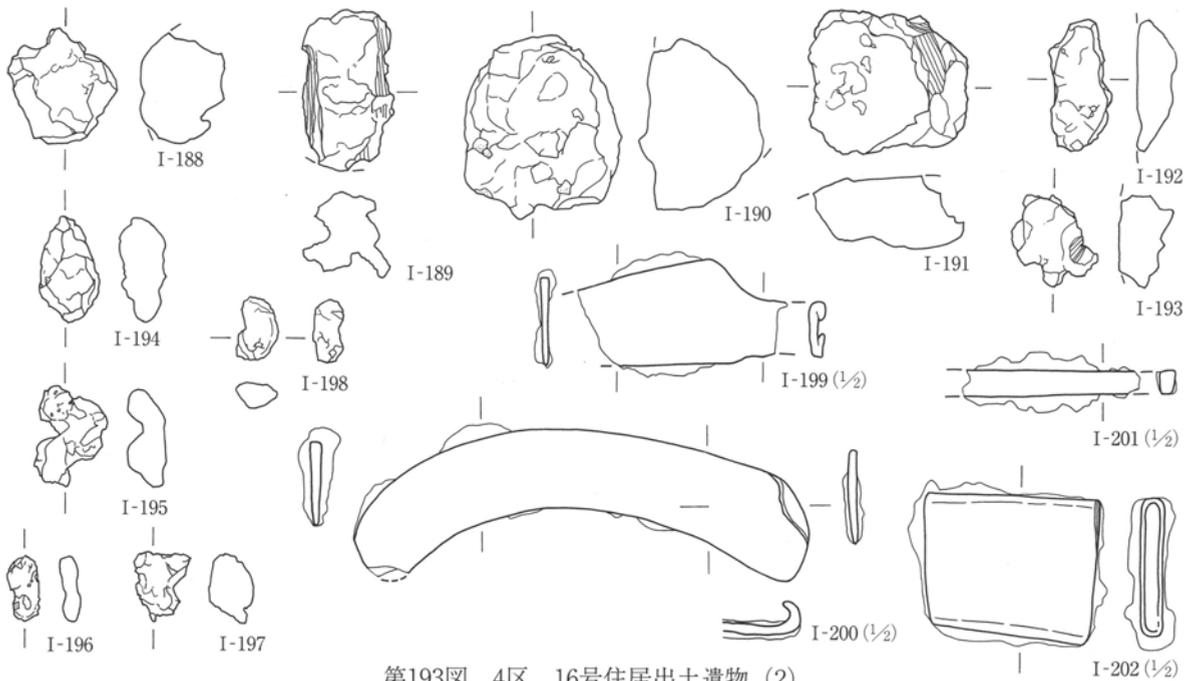
掘り方



第191図 4区 16号住居 (2)



第192図 4区 16号住居出土遺物(1)

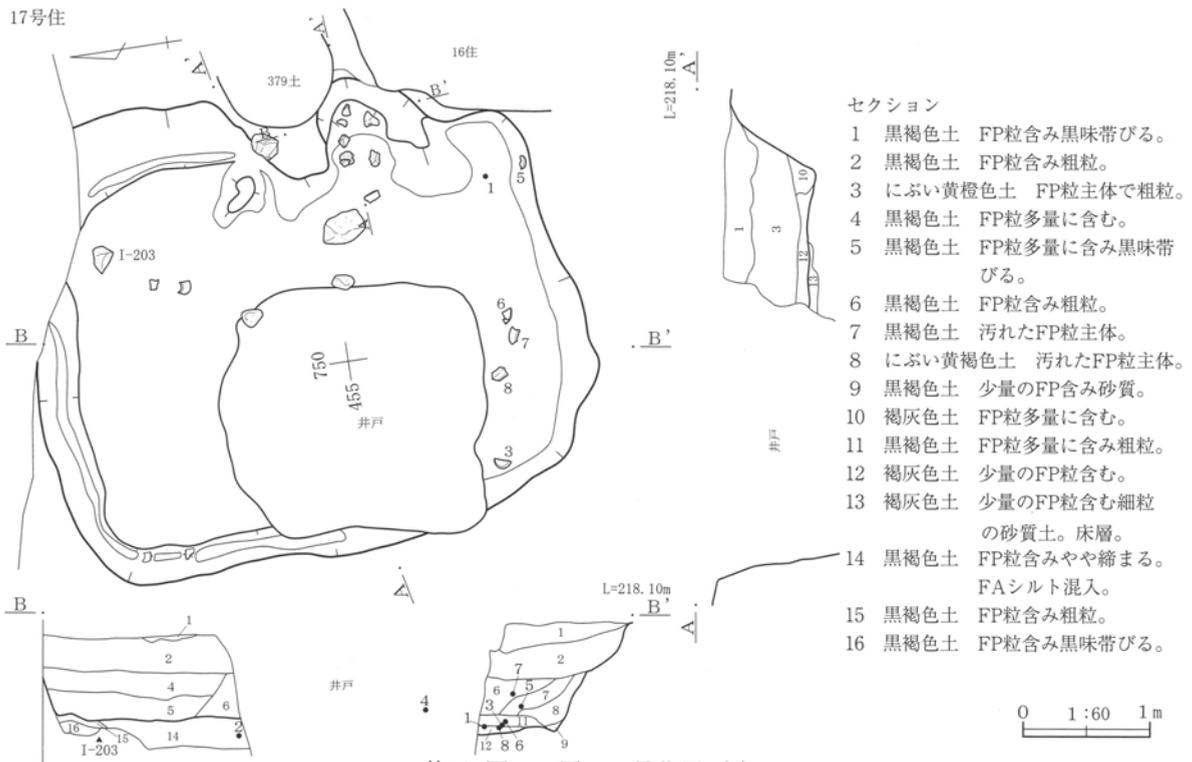


第193図 4区 16号住居出土遺物 (2)

4区17号住居

位置 455-750 **方位** N-92°-E **規模と形状** 長辺4.48m・短辺3.75mの横に長い長方形。長軸は南北方向。住居北東隅がわずかに調査区外にかかる。**面積** 14.0㎡(推) **壁高** 82cm **重複** 竈先端部をわずかに16号住居に切られる。**床面** 掘り方にFP粒やFAシルトを含む土を埋めて床面構築。**壁溝** 北壁から西壁の北半にかけて、深さ5cm程度の溝が作られる。**柱穴** 確認できず。**貯蔵穴** なし。**竈** 東壁の中央よりやや南寄りにあり。住居内に袖が作られる。燃烧部内から、竈材の可能性のあるφ10cm程度の

17号住

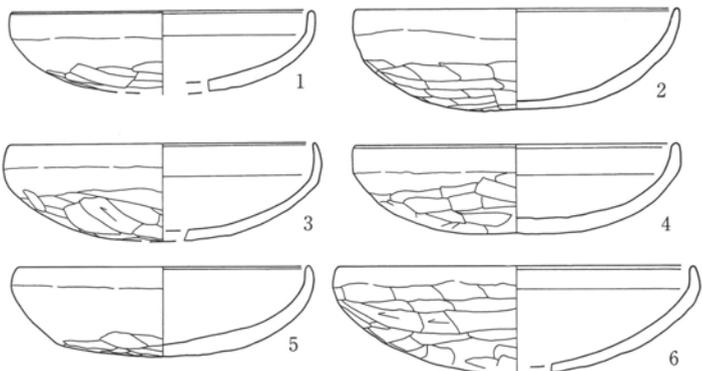
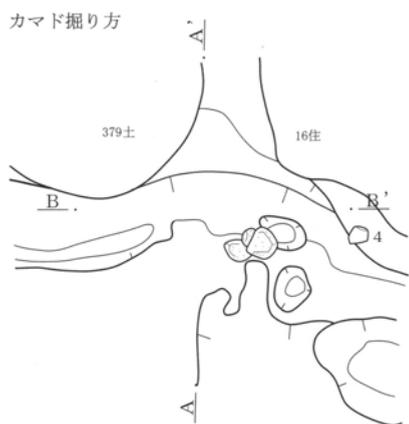
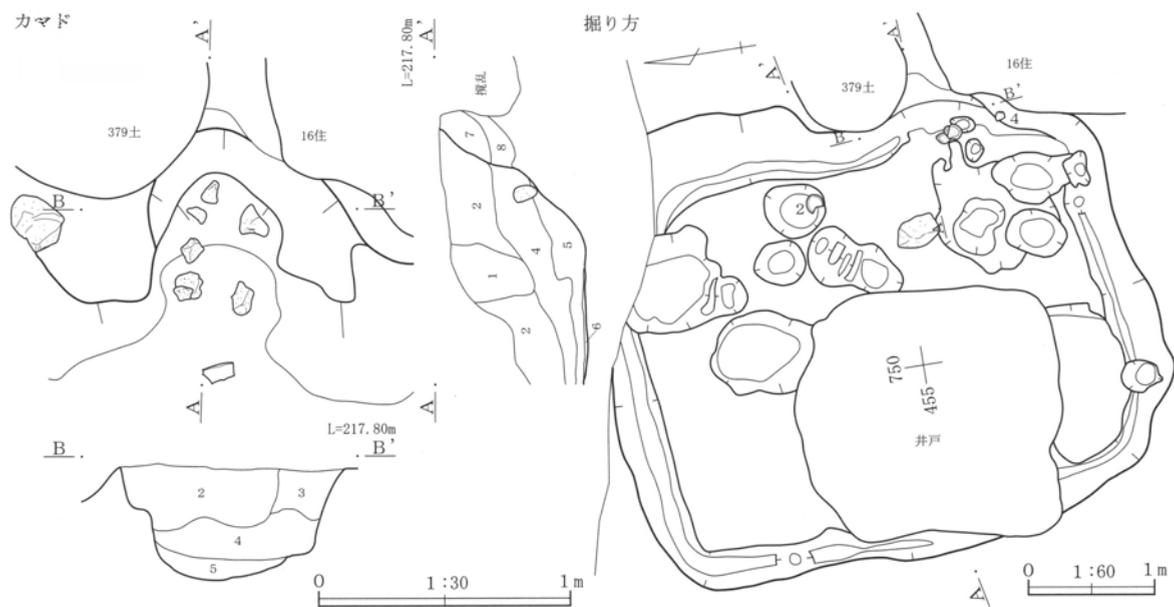


セクション

- 1 黒褐色土 FP粒含み黒味帯びる。
- 2 黒褐色土 FP粒含み粗粒。
- 3 にぶい黄褐色土 FP粒主体で粗粒。
- 4 黒褐色土 FP粒多量に含む。
- 5 黒褐色土 FP粒多量に含み黒味帯びる。
- 6 黒褐色土 FP粒含み粗粒。
- 7 黒褐色土 汚れたFP粒主体。
- 8 にぶい黄褐色土 汚れたFP粒主体。
- 9 黒褐色土 少量のFP含み砂質。
- 10 褐灰色土 FP粒多量に含む。
- 11 黒褐色土 FP粒多量に含み粗粒。
- 12 褐灰色土 少量のFP粒含む。
- 13 褐灰色土 少量のFP粒含む細粒の砂質土。床層。
- 14 黒褐色土 FP粒含みやや締まる。FAシルト混入。
- 15 黒褐色土 FP粒含み粗粒。
- 16 黒褐色土 FP粒含み黒味帯びる。

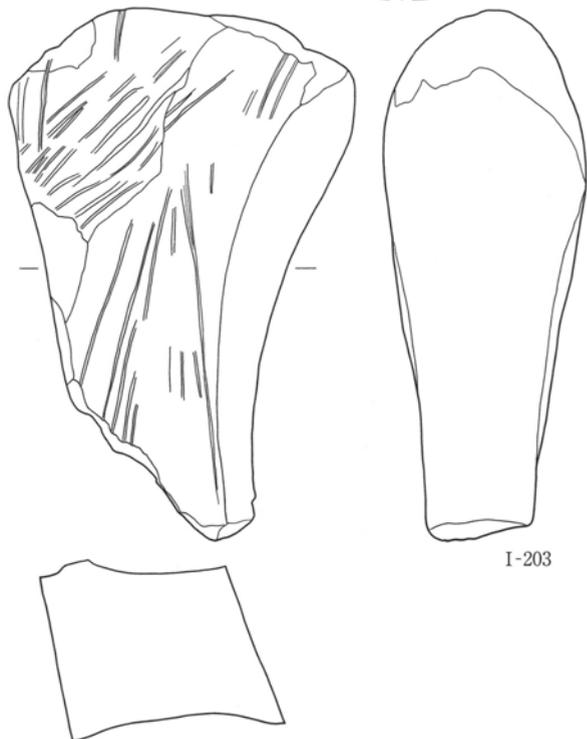
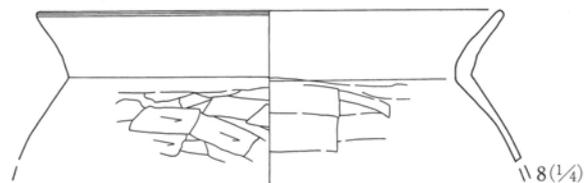
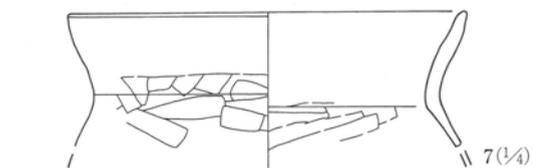
第194図 4区 17号住居 (1)

第4章 検出された遺構と遺物



竈セクション

- 1 黒褐色土 FP粒多く含み粗粒。
- 2 灰黄褐色土 FP粒多く含み粗粒。
- 3 黒褐色土 砂質。
- 4 灰黄褐色土 粘性持つ。FAシルト主体。
- 5 灰黄褐色土 FAシルト主体とし粘性持つ。焼土粒含む。
- 6 黒褐色土 炭化物多量に含む。
- 7 黒褐色土 FP粒多くやや縮まる。
- 8 黒褐色土 FP粒少ない。やや縮まる。



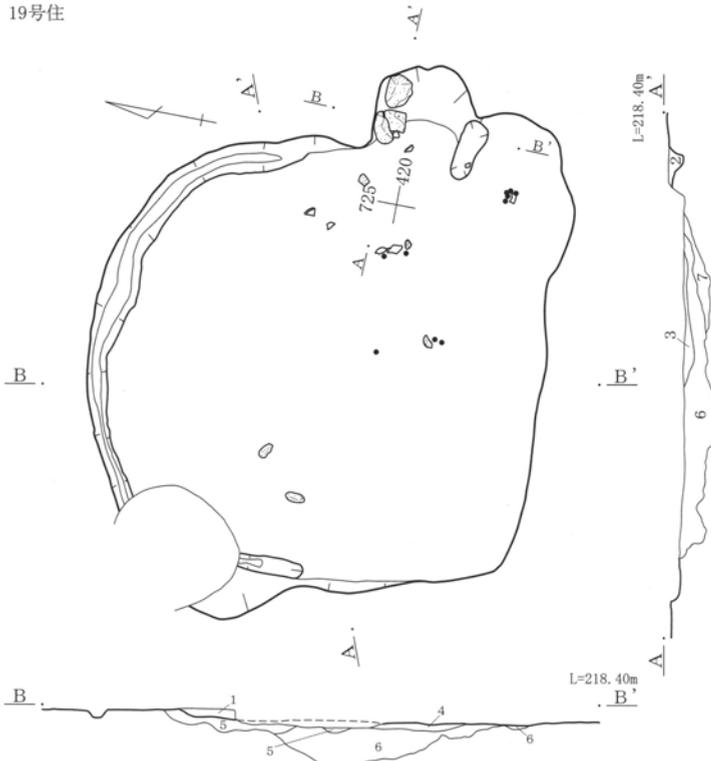
I-203

第195図 4区 17号住居 (2)

礫が複数出土した。 **遺物** 住居中央の近代の井戸が造られていたため遺物量は多くはないが、床面付近から土器や砥石(I-203)などが出土している。1・3・6の土師器坏と8の甕は床面上から、2の坏は床下土坑内から出土した。 **所見** 遺物の年代から、8世紀前半と考えられる。

4区19号住居

位置 420-725 **方位** N-81°-E **規模と形状** 確認段階で上位を削平されており、床面の一部と竈下位、壁溝の一部が残っていたのみである。南側を削平されており、大きさは不明。形状は南北方向に長い長方形状と思われる。 **面積** 計測不可 **壁高** 6cm **重複** 10号住居より新しい。 **床面** 掘り方にFAやそ

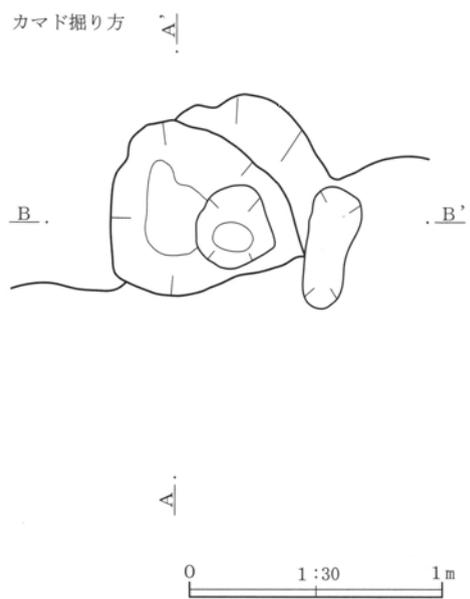
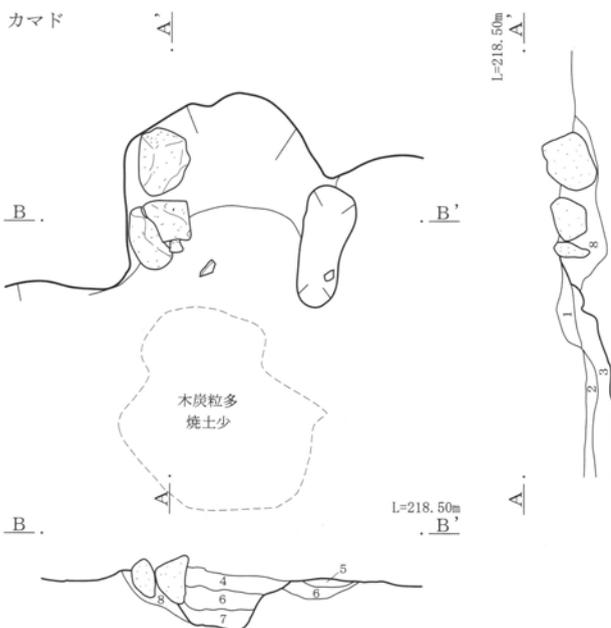
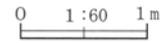


セクション

- 1 黒褐色土 FP下黒色土ブロック多量に含む。
- 2 黒褐色土 FP下黒色土ブロック含む。
- 3 灰黄褐色土 FP粒多量に含みFA砂混じる。締まり良。床層。
- 4 黒褐色土 FP粒少。炭化物含み締まり良。
- 5 黒褐色土 FP粒多く砂質。
- 6 灰黄褐色土 多量のFP粒含みφ5cm程のFP軽石混入。砂質。
- 7 にぶい黄橙色土 FAシルトを主体とし、FA下黒色土ブロック含む。

竈セクション

- 1 黒褐色土 FP粒含む。
- 2 灰黄褐色土 FAシルトを主体としFP粒含む。締まり良。
- 3 灰黄褐色土 FA砂を主体としFP粒含む。
- 4 にぶい黄橙色土 シルト質。
- 5 黒褐色土 黒色土ブロック含む。
- 6 にぶい黄橙色土 FP粒多量に含む。砂混入。
- 7 にぶい黄橙色土 FP粒少。砂質で焼土粒含む。
- 8 灰黄褐色土 FA砂主体で少量のFP粒含む。



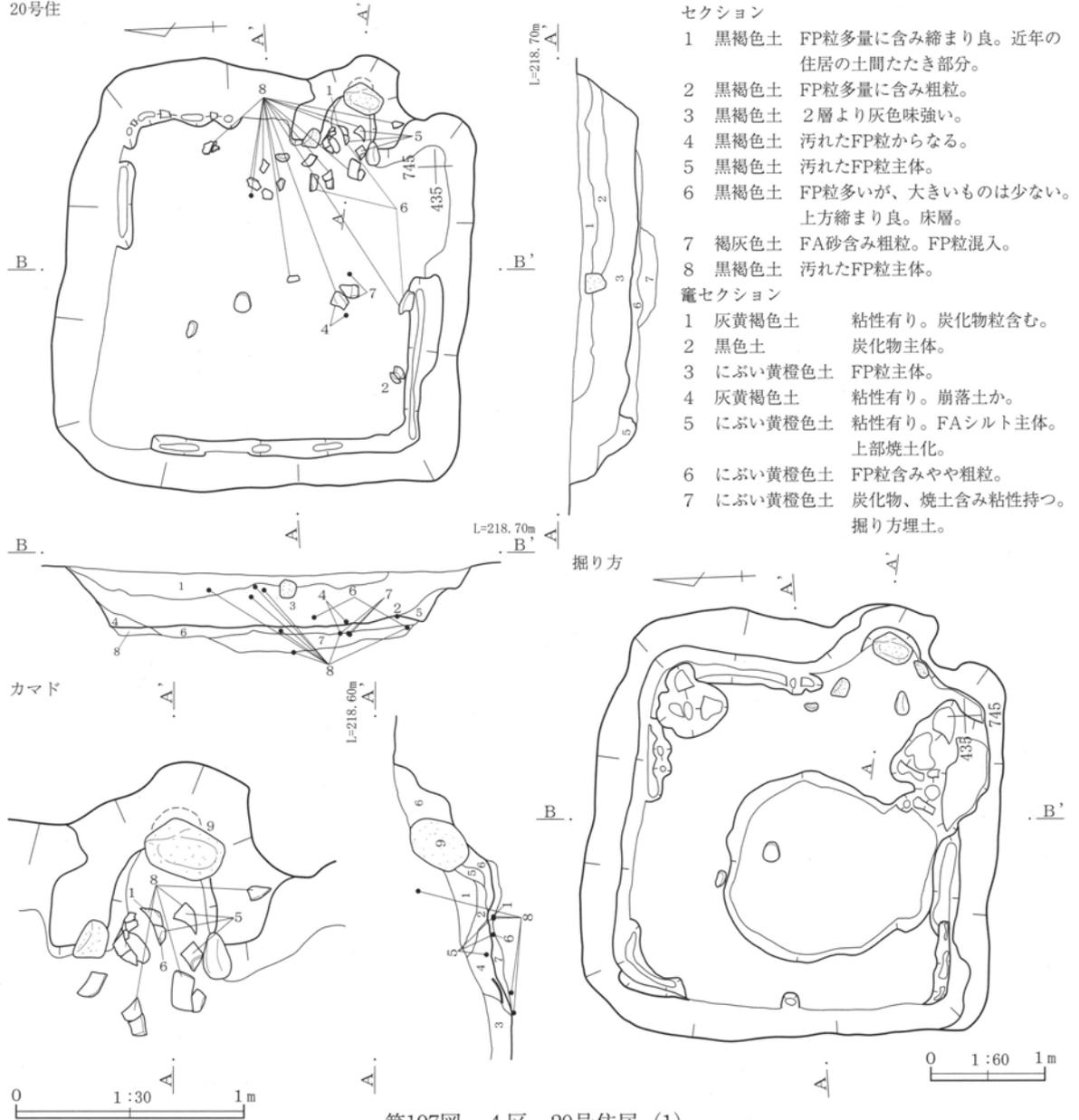
第196図 4区 19号住居

の下の黒色土ブロックを含む土を埋めて床面を構築。**壁溝** 住居北半で確認。南側は削平されていたため確認できなかった。**柱穴** 確認できず。**貯蔵穴** なし。**竈** 東壁にあり。上位を削平され燃焼部下部と掘り方が残るのみ。燃焼部左壁際に竈材として礫を設置。右壁には礫を抜き取った跡と思われる浅い凹みあり。**遺物** 覆土中より少量の土師器、須恵器が出土したが、大半はより古い10号住居の遺物であり、本住居に確実に所属する遺物は把握できなかった。**所見** 8世紀前半の10号住居より新しいが、出土遺物からはそれ以上の時期の特定は不可能。

4区20号住居

位置 435-745 **方位** N-99°-E **規模と形状** 長辺3.79m・短辺3.63mでほぼ長方形。 **面積** 12.1㎡ **壁高** 64cm **重複** なし。 **床面** 掘り方にFP粒やFAシルト含む土を埋め、床面を構築。表面はやや締まる。**壁溝** 北東隅と西壁から南壁の東半にかけて、ごく浅い溝が断続的に作られていた。**柱穴** 確認できず。**貯蔵穴** なし。**竈** 東壁の南寄りにあり。住居内に短い袖が作られ、焚口の両脇には石が据

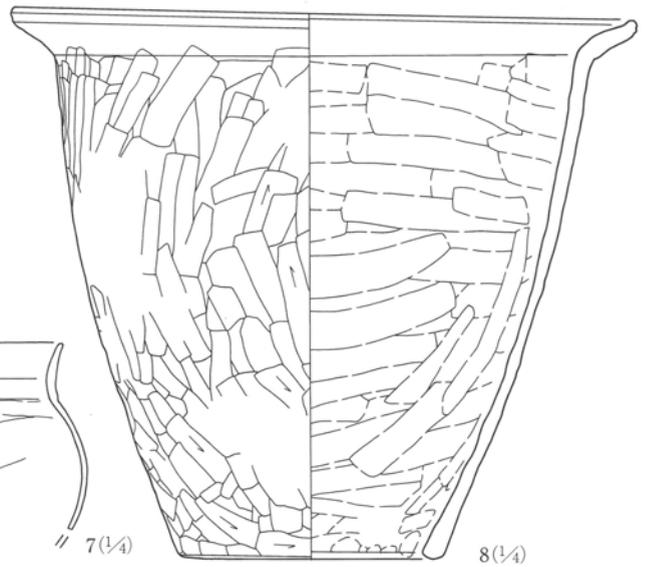
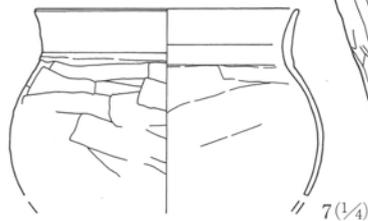
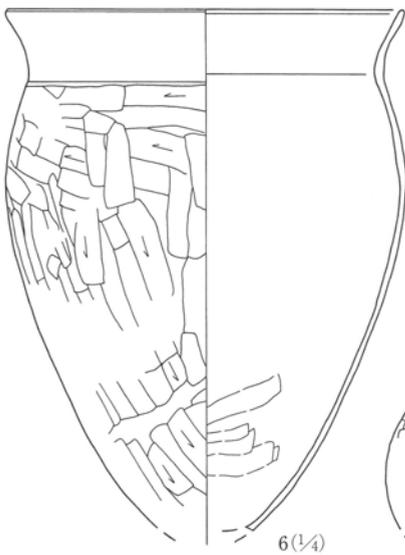
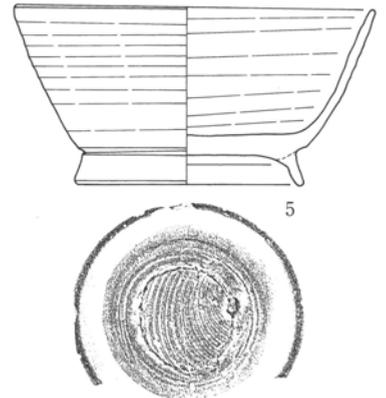
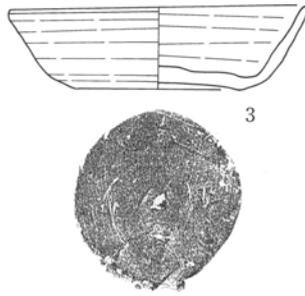
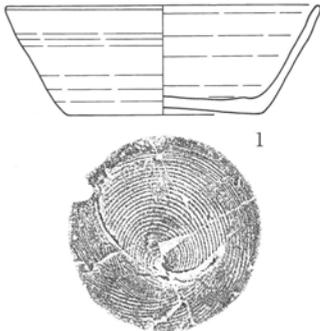
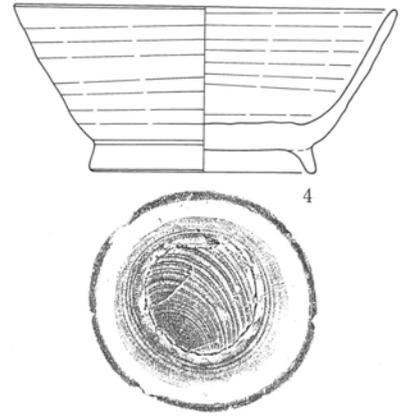
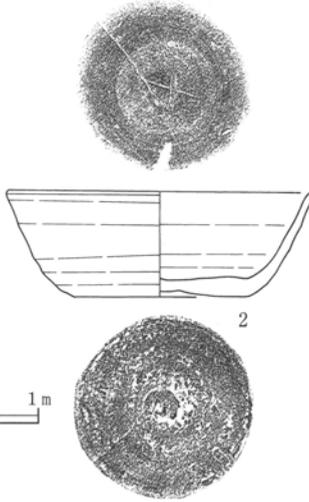
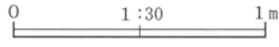
20号住



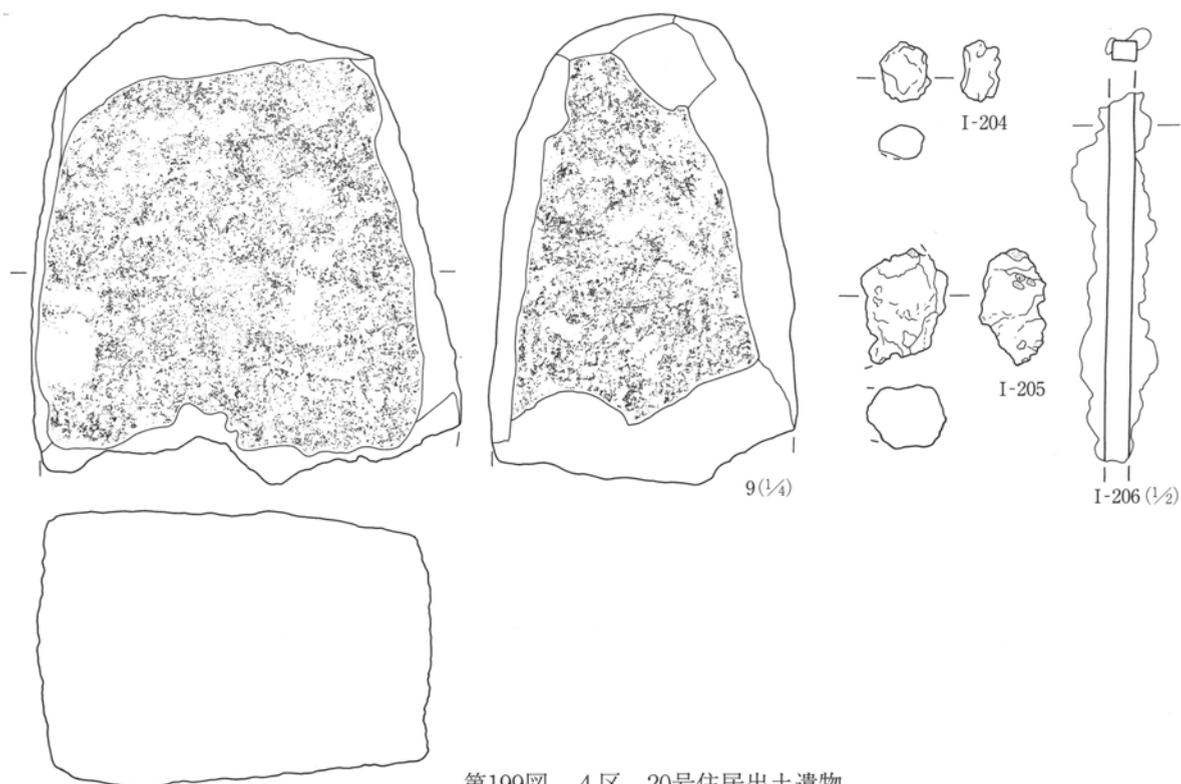
第197図 4区 20号住居 (1)

えられる。燃焼部奥の使用面上から大型の円礫が出土。竈材として利用されたものと思われる。遺物 住居の南東側に集中して分布。床面付近から須恵器坏(1・2)・埴(4・5)、竈内とその周辺の床面上から土師器甕(6・7)と大型の甑(8)、覆土から鉄塊系遺物・棒状鉄製品が出土している。2の坏の内面底部には、焼成前に篋で刻まれた十字の記号が認められる。所見 出土遺物より9世紀前半に位置付けられる。

カマド掘り方



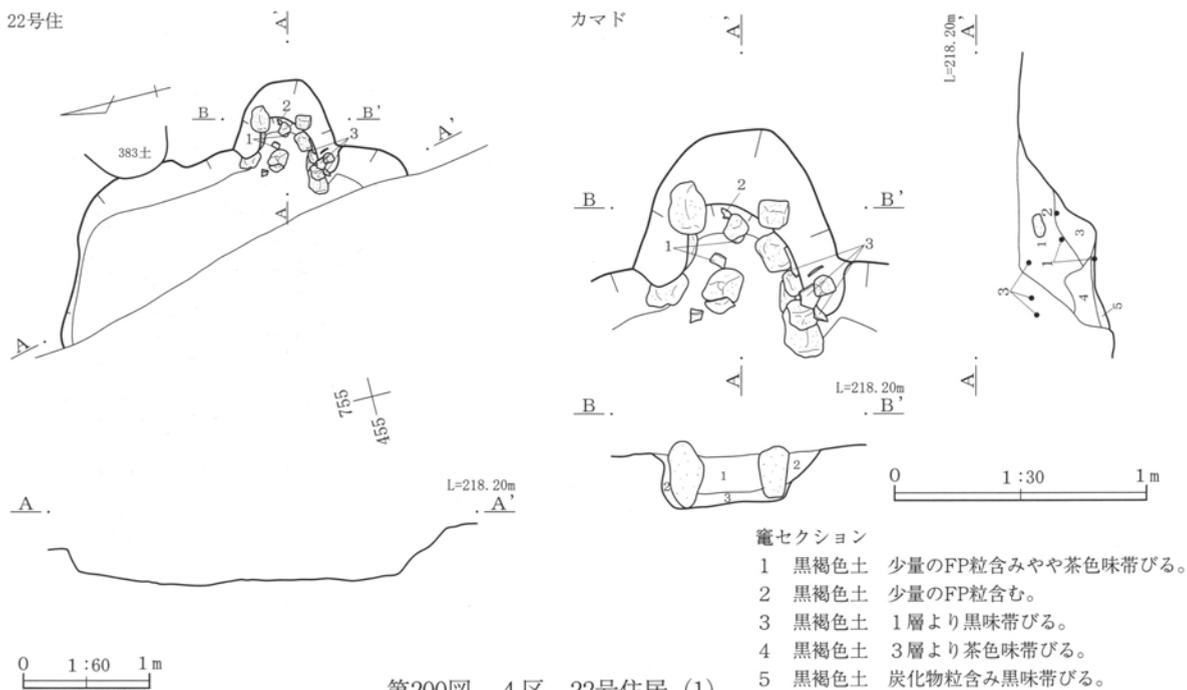
第198図 4区 20号住居(2)



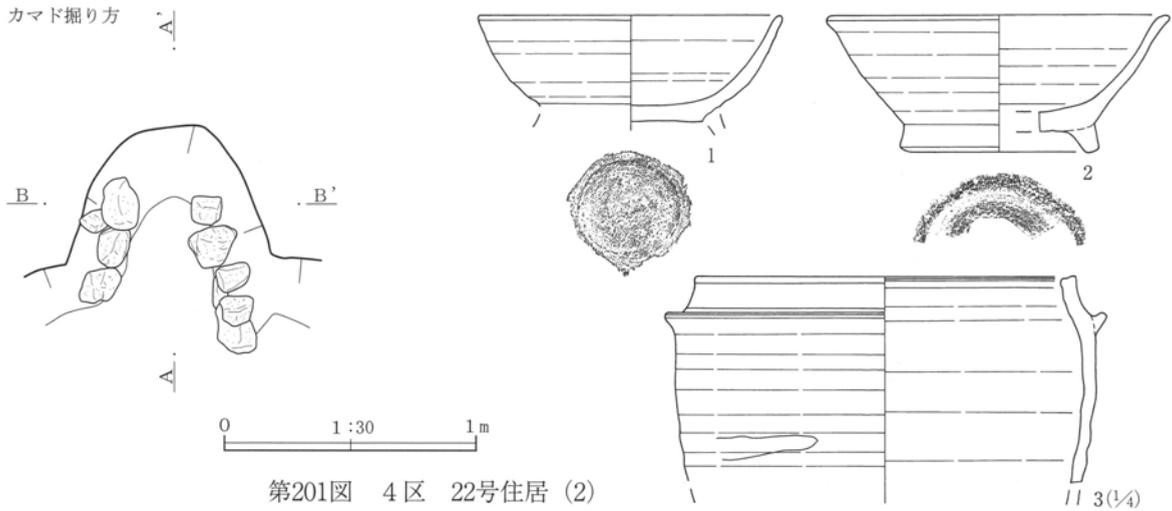
第199図 4区 20号住居出土遺物

4区22号住居

位置 455-750 **方位** N-100°-E **規模と形状** 住居の大半が調査区外にあり、東壁沿いの一部を確認したのみ。規模、形状共に不明。 **面積** 計測不可 **壁高** 29cm **重複** なし。 **床面** 掘り方をほとんど持たず、掘削面が床面にほぼ一致する。 **壁溝** 確認できず。 **柱穴** 確認できず。 **貯蔵穴** なし。 **竈** 東壁の南寄りに位置する。袖はほとんど作られず、燃烧部が壁外に張り出す。燃烧部両脇には、竈材として



第200図 4区 22号住居 (1)

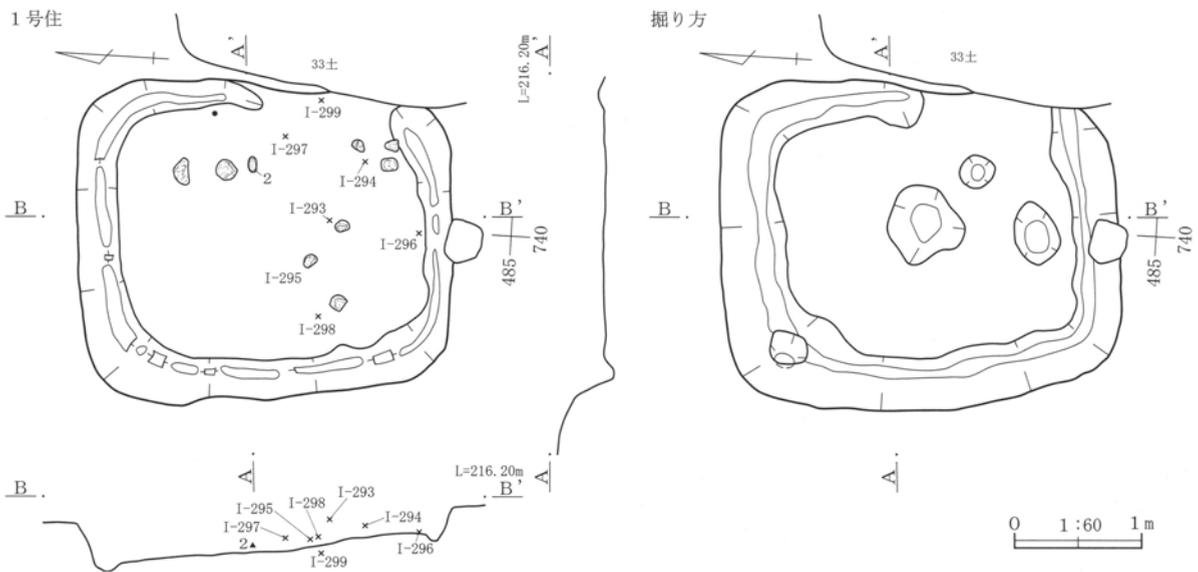


第201図 4区 22号住居 (2)

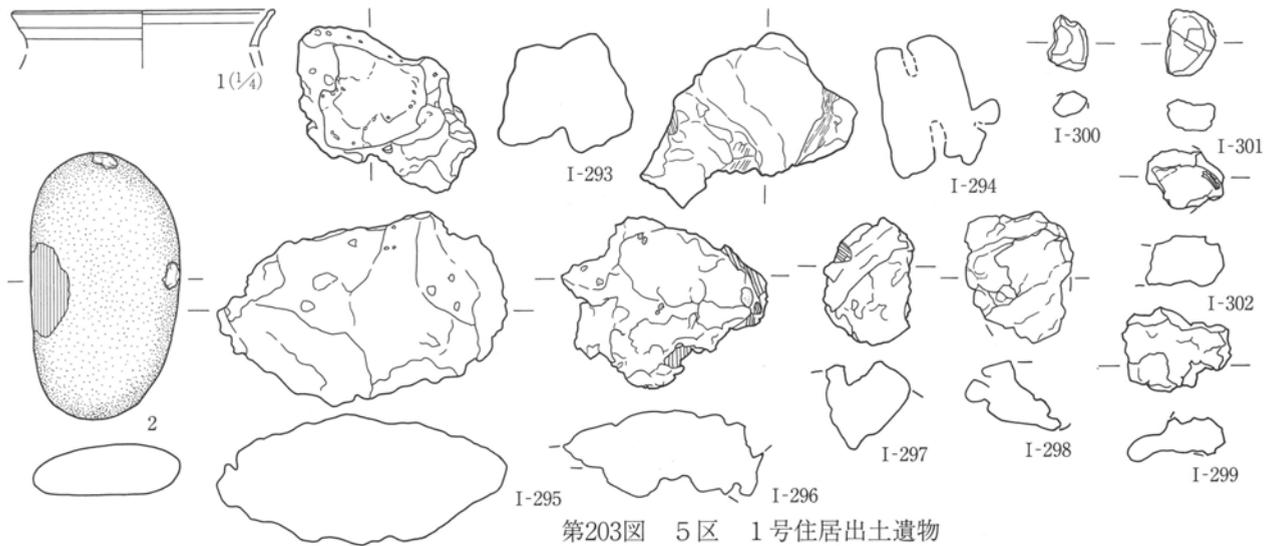
φ10~20cm程度の礫が埋め込まれていた。遺物 竈内の床面付近より須恵器碗(1)が、竈燃焼部の右壁内から羽釜の破片が出土した(3)。所見 出土遺物より10世紀前半に位置付けられる。

5区1号住居

位置 485-740 方位 N-84°-E 規模と形状 長辺2.96m・短辺2.60mの横に長い長方形。東壁の南半を新しい土坑に切られている。長軸は南北方向。面積 7.0㎡ 壁高 35cm 重複 なし。床面 南壁際がやや高い。壁溝 ほぼ全周に、深さ5~8cm程の浅い溝が巡る。柱穴 確認できず。貯蔵穴 なし。竈 東壁の南半分が新しい土坑によって破壊されており、そこにあった可能性も考えられる。ただし、周辺に焼土や炭化物の分布は見られず、確証は得られなかった。遺物 少量の遺物が住居内に散在していたが、大半は礫や鉄滓で、土師器等は覆土中からごく少数が出土したにすぎない。鉄滓は炉内滓・含鉄鉄滓など18点・1,593.1gである。ほとんどの鉄生産関連遺物は覆土からの出土であるため、周辺から混入したものと判断した。遺物は製錬系のものが主体である。やや小型の土師器甕の口縁部破片が出土している。また、床面からやや浮いた状態でこも編み石(2)が出土しているが、1点のみであり、本来住居に伴っていたものかは疑わしい。所見 特徴的な遺物がなく、時期の認定は困難。



第202図 5区 1号住居



第203図 5区 1号住居出土遺物

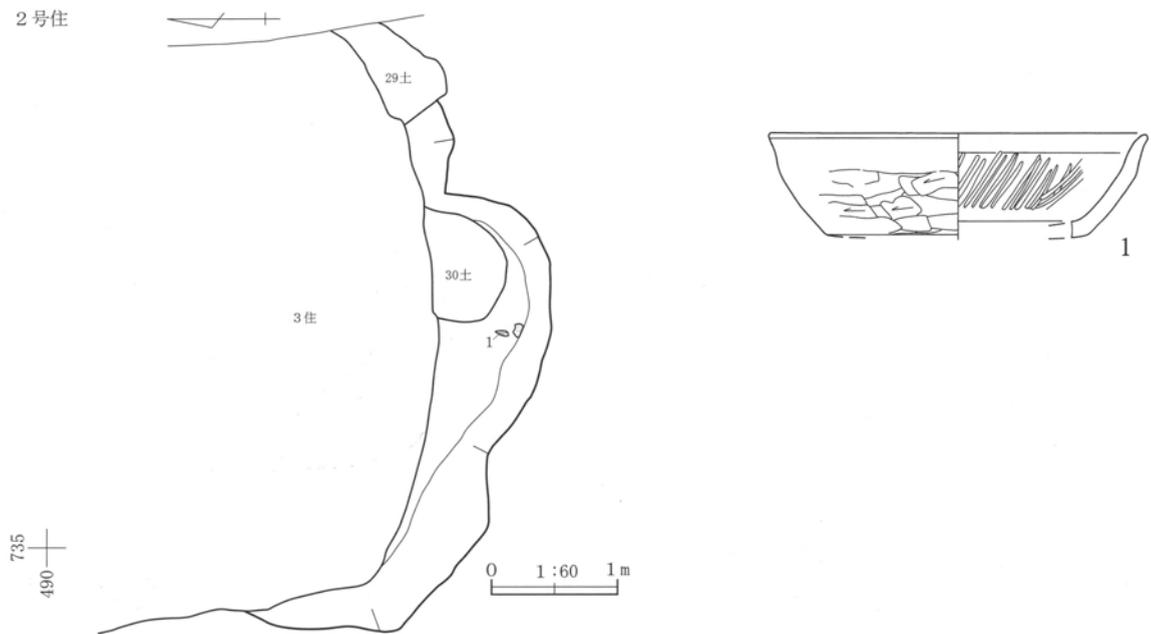
5区2号住居

位置 485-730 **方位** 不明 **規模と形状** 3号住居によって大きく破壊されているため、規模、形状共に不明。**面積** 計測不可 **壁高** 38cm **重複** 3号住居に切られる。**床面** ごく僅か残るのみ。詳細は不明。**壁溝** なし。**柱穴** 確認できず。**貯蔵穴** なし。**竈** 不明。3号住居によって破壊された可能性高い。**遺物** 住居の大半が失われているため、遺物量は少ない。南壁際のやや高い位置から土師器片が出土している(1)。**所見** 3号住居に切られることから、8世紀末より古い段階に位置付けられる。

5区3号住居

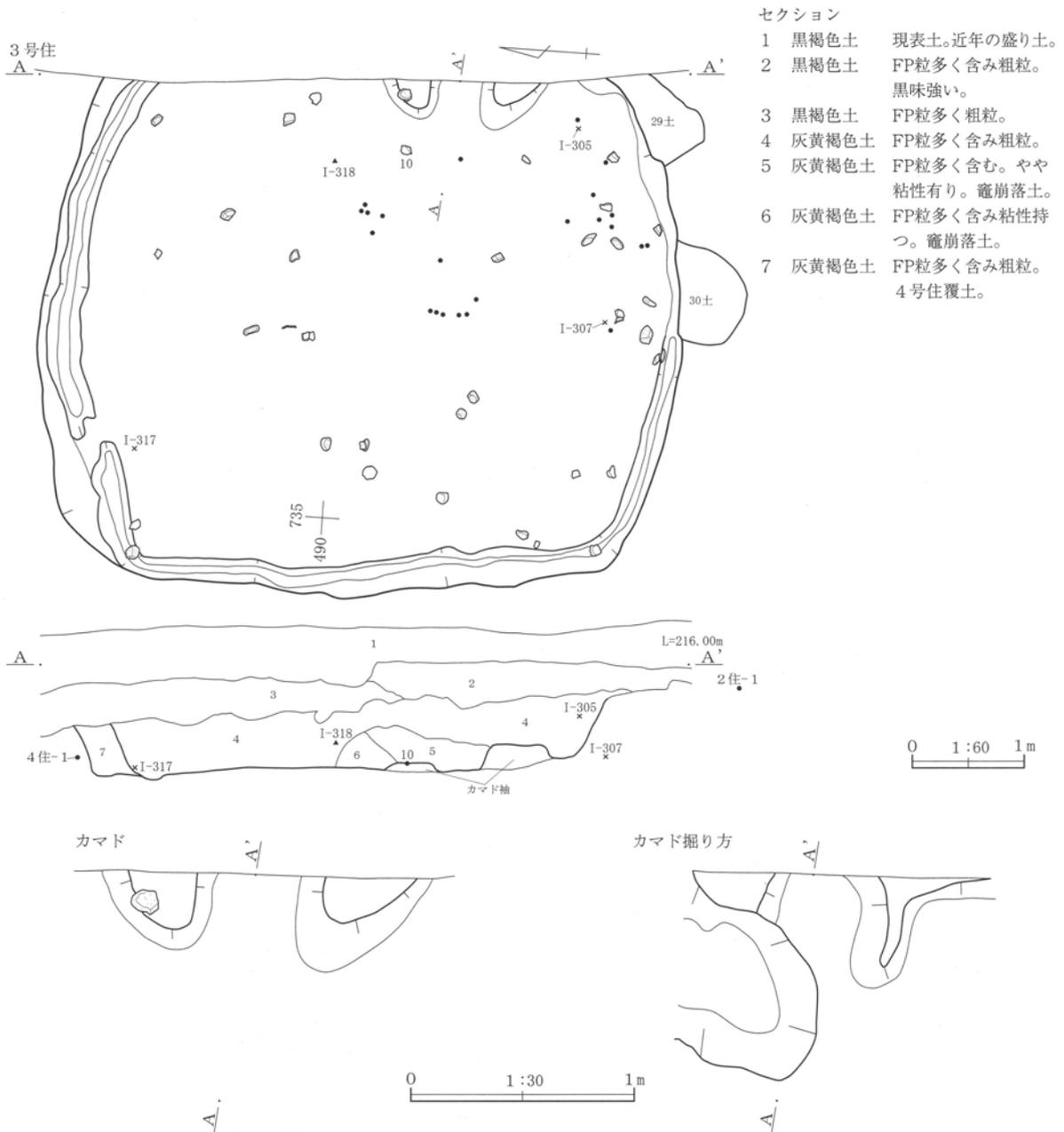
位置 485-730 **方位** N-86°-E **規模と形状** 東壁が調査区外にかかるため、正確な大きさは不明。現状で、長辺5.76m。わずかに横に長い長方形状と思われる。長軸は南北方向。**面積** 計測不可 **壁高** 42cm **重複** 2、4号住居より新しい。**床面** 住居全体に広がる不規則な掘り方を埋めて、床面を構築。**壁溝** 南壁の東半を除き、深さ5cm程度の浅い溝が作られる。**柱穴** 使用面では確認できなかったが、掘り方で、壁際から直径20~30cm程度の小穴を8基検出。壁柱穴の可能性あり。**貯蔵穴** なし。**竈** 東壁

2号住



第204図 5区 2号住居

の中央よりやや南よりの位置にあり。燃烧部の大半が調査区外にあり、袖の先端部分を確認したのみであった。**遺物** 多量の遺物が出土したが、より古い2・4号住居の遺物が多数混入していた。竈の前の床面上から土師器甕(10)が出土。その他の土器は全て覆土からの出土で、須恵器坏(6~9)・蓋(4・5)、土師器盤(1~3)などがある。また、炉内滓・含鉄鉄滓・鉄製品・砥石などの鉄関連遺物が82点・2,202.6g出土した。ほとんどの鉄生産関連遺物は覆土からの出土であるため、周辺から混入したものと判断した。遺物は製錬系のものが主体である。**所見** 遺物は8世紀前半と8世紀末の大きく2時期に分けられた。床面付近から出土した甕の年代を手がかりとして、より新しい8世紀末の一群を本住居に伴うものとし、8世紀前半の一群はより古い4号住居の遺物と判断した。また、細かく割られた炉内滓などの鉄生産関連遺物から、本建構周辺で製錬から小割り作業が行われていた可能性が高いと考えられる。



第205図 5区 3号住居(1)